遊戯王GX～蒼銀の稲妻～

黒鋼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯王ＧＸ～蒼銀の稲妻～

【Ｎコード】
Ｎ２５０９Ｌ

【作者名】
黒鋼

【あらすじ】
一昔前、白鋼　遊夜は両親を失い施設に入った。そこで数人の友達を作ったが、父が働いていた『インダストリアル・イリュージョン社』に保護される。それから数年後、彼はその優秀な成績のため、デュエルアカデミアに推薦生徒として入学する。
そこで、懐かしい者達との再会があるとは知らずに。

～序章～　蒼雷の同調（前書き）

※注意！！※
この小説は『遊戯王デュエルモンスターズＧＸ』と『迷いネコオーバーラン』のクロス小説です。
クロス作品が苦手だという方はご遠慮ください。
また、この物語には主人公を筆頭にオリキャラも出しますのでご了承ください。

～序章～　蒼雷の同調

かの『決闘王（キング・オブ・デュエリスト）“武藤　遊戯”』、“海馬　瀬人”“城之内　克也”を輩出した童実野町。
今、この町では海馬コーポレーションが立ち上げたデュエリスト養成機関『デュエルアカデミア』の実技試験が行なわれている。
その試験会場へと向かう一つの影があった。
―今、新たなる物語が始まる―

―童実野町・海馬ランド―
今ここで、デュエリスト養成機関『デュエルアカデミア』の実技試験が行なわれている。
この海馬ランドの駐車場に、黒い中型バイクから下りる一人の少年がいる。
１８０はありそうな高身長、スラリとした体系。白銀のロングヘアーにアクアマリンのように澄み切った水色の瞳を持ったその容姿はハリウッドスターの如しである。

「う～、まさか渋滞で遅れちまうとはついてねぇ。受け付けはどこだ？」

少年はキョロキョロと辺りを見回し、巨大なドームの前に受験受付係が見つける。
それは今正に片づけをはじめようとしている最中だった。

「すみませ～ん！！」

男は全速力でその受け付けへと走りこみ、受験表を差し出す。

「遅れてすみません!!特別推薦生の“白鋼(しろがね)　遊夜(ゆうや)”です!!」

少年――――白鋼　遊夜はギリギリセーフで、この会場に入っていった。

海馬ランド―デュエルアカデミア実技試験試験会場―
今ここに、実技の最高責任者を圧倒する一人の決闘者(デュエリスト)がいた。

「くらえっ!!」

その名を――――――

「“スカイスクレイパー・シュート”!!」

受験番号１１０番――――“遊城(ゆうき)　十代(じゅうだい)”
茶色い髪と純粋な心が売りの決闘者(デュエリスト)である。

「ガッチャ!!楽しい決闘だったぜ、先生!!」

十代は、勝利のポーズと台詞でかっこよくきめている。
それに対し、彼とデュエルした河童のような髪型をした教師は唖然としていた。

「ナ、何故なーノ。何故私があんなドロップアウトボ～イごときニ……」

この結果が信じられない様子で、未だに腰が抜けている。
そして、この結果が信じられないのは教師だけではなかった。この会場にいる
全ての者達、特に中等部進学組みのオベリスクブルーの生徒は皆
驚愕の表情以外の顔ではいられなかった。

「う、嘘だろ……」
「どう思います、万丈目(まんじょうめ)さん。」

オベリスクブルーの生徒の1人が黒くギザギザした髪型のオベリスクブルー生徒
万丈目に尋ねるが、その万丈目も信じられないといった表情をしていた。

「信じられない、クロノス教諭が受験生に敗れるなど。」

驚愕以外の表情を出せない生徒達だが、中には例外も数人いた。
その一人がこの金色のロングヘアーが特徴のオベリスクブルーの女子生徒だ。

「ちょっと面白いかもあの子」

そう呟く女子生徒の隣には薄茶色に少し赤がかかった色のロングヘアーに
朱色のリボンを左右に結んだ、これまたオベリスクブルーの女子生徒がいる。

「別に、唯単に運が良かっただけじゃないの？
あたし、“明日香(あすか)”と違ってあんま興味ないから。」

こちらの生徒は、先程の金髪の生徒――――明日香と違い
関心も特に無く、興味ないといった感じだ。

「ふぅ、あなたらしいわね“文乃(ふみの)”」

明日香の言葉に生徒――――文乃は『うっさい』と呟いた。
そんな二人を見て、面白がっている者が1人。赤いセミロングを後ろで束ねた
オベリスクブルーの女子生徒だ。

「ふふ～、文乃見てるとホント退屈しないよね～。」
「どういう意味よ“叶絵(かなえ)”っ！！」

文乃に叶絵と呼ばれた生徒は『アハハハ』と笑って誤魔化した。
それを見ていた明日香は『相変わらずね』と苦笑いし、近くにいる
濃い青色のロングヘアーをしたオベリスクブルー生徒に話しかける。

「……“亮(りょう)”あなたはどう思う？」

明日香に言葉に亮と呼ばれた男は一向に口を開かず、ただ十代に視線を向けていた。

「すごいっすっ！！」
「やるじゃないか一番君。」

デュエルの後、十代は自分がいた観客席に戻りそこで出会った
四人の男子達との会話を楽しんでいると、そこに近づく者が一人い

た。

「お～い」

その者の声に、十代を含んだ五人は声のした方へと振り向く。
そこには、白銀のロングヘアーを靡かせる男子――――遊夜の姿があった。
その姿に、十代を含む三人は『誰だ？』と首を傾げたが、残りの2人
茶髪に痩身、メガネを掛けた男子と
片やボサボサ髪に筋肉質な体系の男子は『よっ』と手を振っている。

「お待たせ、“家康（いえやす）”、“大吾郎（だいごろう）”。」

遊夜の言葉に『おせーぞ、遊夜』と言うメガネの男子――――家康と
『うむ、待っていたぞ』と言う筋肉質の男子――――大吾郎。
その状況を見ていた十代達は『知り合いか？』と聞き出す。

「まーな、まぁ俺達の中学の悪友みたいなもんだ。」

家康の言葉に『そっか』と納得する十代。
その一方、遊夜は大吾郎から『彼らとはこの会場で知り合った』と
言う事を聞き
自己紹介の為に十代達の前に出てきた。

「始めまして、“白鋼　遊夜”です。」
「おう、こちらこそ“遊城　十代”だ。」

遊夜と十代は互いに握手を交わす。それを見ていた残りの二人
水色の横長な髪型にメガネを掛けた男子と
黒くスラッとした髪型をした男子がそれぞれ自己紹介を始める。

「ボク、“丸藤翔”です。」
“三沢大地”だ、こちらこそよろしく。」

翔と三沢がそれぞれ遊夜に挨拶する。と同時に、放送アナウンスが掛かる。

『これより、特別推薦生の実技試験を行います。特別推薦生の生徒は至急
決闘場に行ってください。』

「お、遊夜お前の番だぜ。」
「頑張れよ、応援してるぞ。」

家康と大吾郎に言われ『あぁ』と返す剣。そのやり取りを見ていた三沢は
驚いたような表情をしている。

「遊夜、君は推薦生だったのか」

三沢の質問に『そうだよ』とあっさり答える遊夜。

「推薦生って何だ?」
「知らないんすか!?中学から推薦で受ける生徒っすよ!」

翔が力良く説明するが十代の反応は『ふ~ん』とあまり興味はなさそうだった。
そんな十代達を尻目に遊夜は自分のデッキを確認し、決闘場へ向かおうとしたが
急にピタッと止まってしまう。

「？おい、どうした遊夜。」

急に止まってしまった遊夜を見て家康が話しかける。
これに対し遊夜はくるっと家康達の方を向き、口を開いた――――

「決闘場（デュエルじょう）へは、どうやって行けばいいんだ？」

「「「「「……」」」」」

遊夜のまさかの言葉に言葉を失う五人。遅れてきてしまった上に決闘場への行き方が分からないとは思っても見なかったのだろう。

「……遊夜、お前はどこか抜けてる奴とは思ってたが、ここまでとは……」
「遊夜、お前ちゃんと地図見ておけ。」
「お前って意外とドジ何だな。」
「遊夜君って、意外と天然？」
「……ま、まぁともかく急げ。行き方は……」

三沢が道を教えようとしたが、『いや、分かった』と遊夜はそれだけ言い先とは逆の方向へ走り出す。

「へ？」
「お、おい遊夜」
「ま、待てよ遊夜そっちは……」
「そっちには席が続いてるだけっすよ！？」
「ま、まさか……」

そう、遊夜が走って行った方向は確かに決闘場が見えるが
それはここが観客席だからであって、そこから決闘場にいけるはず
が無い。
だが、遊夜はさらに加速し――――――

「とうっ」

「はっ!?」「おぉ」「まじかよっ!?」「うそっ!?」「なっ!
?」

遊夜は、決闘場に向かって思いっきりジャンプして飛び降りた――
――――

少し時間を戻し、所変わってここは試験会場のＶＩＰ席。
ここに、一人のオベリスクブルーの女子生徒らしき少女が
２人のメイドと共に座っている。
らしき――――と言うのも、パッと見的にどう見ても彼女が高校生
には見えないのだ。
身長は小学生並みに低く、クリクリとした青い瞳にウェーブの掛か
った
金髪のロングヘアー。そしてトレードマークの黒くて大きなリボン
をした少女は
『うーむ』と何やら唸っていた。
それを見ていた二人のメイドが少女に話しかける。

「いかがなされました？“千世（ちせ）”お嬢様。」
「どこかお具合でも？」

2人のメイドに千世と呼ばれた少女は、いきなり立ち上がり
『よしっ！！』と言い二人のメイドに視線を向ける。

「“佐藤（さとう）”、“鈴木（すずき）”！！今すぐ先の“クロノス”とか言う
教師を倒した生徒の事を調べなさい！！」

佐藤と鈴木と呼ばれた二人のメイドは、『はっ』と敬礼しＶＩＰ席
を後にする。

「ふふふふ、暇つぶしに見に来てやったけど中々面白いじゃない。」

千世がそう呟いた、その時放送アナウンスが掛かる。

『これより、特別推薦生の実技試験を行います。特別推薦生の生徒
は至急
決闘場（デュエルじょう）に行ってください。』

この放送に、千世は『特別推薦生？』と首を傾げる。

「ふぅん、そんなのいるんだぁ。ま、暇つぶしに見てみよっかな。」

そう言い千世は決闘場に視線を向けた。

一方、決闘場には先程十代に負けた実技の最高責任者“クロノス”がイラついていた。

「（ぐぬぬぬぅ～。この私～があんなドロップアウトボーイに負けるなんーテ、面目丸つぶれなノーネ！こうなったら、次に来ると言う“特別推薦生”をボコボコにシ～テ威厳を取り戻すノーネ！！特別推薦生と言っテ～モどうせ中等部以外からの生徒なン～テ、皆たいした事ないノ～ネ。）」

と、腹黒い事を考えているクロノスだが、不意に奇妙な声が観客席から聞こえだす。

「へ？」「お、おい遊夜」「ま、待てよ遊夜そっちは……」「そっちには席が続いてるだけっすよ！？」「ま、まさか……」

「（？何だか騒がしいノーネ）ン？」

クロノスが声のした方を向くと、観客席にこちらに向かって全速力で走ってくる生徒が見える。

「な、何なノーネっ！？」

驚くクロノスだが、その生徒はさらに加速し――――――

「とうっ」

「はっ!?」「おぉ」「まじかよっ!?」「うそっ!?」「なっ!?」「ナンート!?」
「何だっ!?」「えっ!?」「何よあいつっ!?」「えぇっ!?」
「!!」「な、何よ何よっ!?」

その生徒は、決闘場に向かって思いっきりジャンプして飛び降り―
――――――

「っと。」

着地した。同時に、白銀に輝くロングヘアーが風に美しく揺れる。

「よし、成功。」

ゆっくりと立ち上がる生徒に、あちこちから様々な声が聞こえる。

「す、すっげーあいつ」
「ねえねえ、彼かなりかっこ良くない?」
「うんうん、ハリウッドスターみたい。」

その大半が女子の黄色い声なのはこの際置いといて、いきなり目の前に現れた生徒に
口が開いたまま戻らないクロノス。そのクロノスに気づいた生徒はクロノスに話しかける。

「すみませんが俺、特別推薦生なんですけど先生が俺の相手ですか?」
「……フェッ!?そそそ、そのとーりですーノ!!

実技の最高責任者“クロノス・デ・メディチ”なノーネ！！」

クロノスの言葉に、生徒は大きく深呼吸し口を開いた。

「特別推薦生“白鋼　遊夜”です！！よろしくお願いしますっ！！」

開場中の注目を集めながら、二人の決闘が始まった。

「「決闘っ！！」」

遊夜：ＬＰ／４０００
クロノス：ＬＰ／４０００

「……ふぅ、驚いたわ……」

観客席の2階で、明日香はそう呟いた。まさか特別推薦生が飛び降りてやって来るとは思いもしなかったらしい。そんな明日香の隣では、
叶絵が『へ～』と面白そうに遊夜を見ている。

「彼中々の美男子だね。一瞬あたしもハリウッドスターかと思ちゃったもん、ねぇ文乃？」

叶絵は隣にいる親友に話題を掛けるが、当の文乃はまるで何かに取り憑かれたように
動かず、『じっ』と遊夜に視線を送っていた。

「文乃？」

「……」
「何々？文乃もしかして一目惚れとか？」
叶絵の冷やかしにも全くの無反応。
「……」
「ちょ、ちょっと文乃？マジでどうしたの！？」
いつもの文乃らしくない状況に、さすがの叶絵も声を荒げる。
心配に思った明日香も、文乃に呼びかける。
「どうしたの文乃？気分でも悪いの？」
「……嘘……」
「「えっ？」」
文乃のボソッとした声に叶絵と明日香はキョトンとなる。
「……嘘……まさか……」
「先行は貰います！！俺のターン、ドロー！！」
文乃はその後も『じっ』と遊夜に視線を送り続けていた。
遊夜はデッキからカードを一枚引き手札に加え、手札状況を確認する。
「（よし、手札状況は悪くない。）俺は手札から『蒼雷郷（そうらいきょう）の鴉（カラス）』を守備表示で召喚！」

蒼雷郷(そうらいきょう)の鴉(カラス)　☆４　風　雷族　ＡＴＫ／１１００　ＤＥＦ／１２００

全身が蒼いカラスが現れる。

「さらに、カードを一枚セットしてターンエンド。」
「私のターン、ドロー」

クロノスは手札に加えたカードを見ながら、今後の戦略を考え出す。

「私は、『トロイホース』を攻撃表示で召喚！」

トロイホース　☆４　地　獣族　ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１２００

全身が木製の馬のモンスターが現れる。

「さら～に、手札から魔法(マジック)カード『二重召喚(デュアルサモン)』を発動！！
このターン、私はもう一度通常召喚が可能になるノ～ネ！！」
「！！と言うことは、狙いは上級モンスターの召喚！！
しかも『トロイホース』の効果は……」
「その通りですーノ。『トロイホース』には地属性モンスターを召喚する際、
このモンスター1体で2体分の生け贄にできるノーネ！！
『トロイホース』を生け贄にーーーーーーーー
いでよっ！！『古代の機械巨人(アンティーク・ギア・ゴーレム)』！！」

古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）　☆８　地　機械族　ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ３０００

巨大な古の機械人形がフィールドに出現する。

「すげぇ、これが噂のレアカードか！！」

遊夜は始めて見る機械巨人（ギア・ゴーレム）に目を輝かす。それを見ていた家康は『感心してる場合かよ』と冷ややかにツッコミを入れる。

「無理も無い。遊夜は珍しいカードに目が無いと言うか……」

「よーするに“デュエルバカ”何だよ、アイツは。」

大吾郎の言葉にも、冷ややかにツッコミを入れる家康。

「また、クロノス教諭の気まぐれか。今度の生徒は果たして……」

今まで沈黙をしていた亮が口を開いた。

それに対して明日香は同情の色合いを強くして遊夜を見つめた。

「そう何度も、教諭が負けるとは思えないわ。それよりも……」

明日香はチラッと文乃に視線を向ける。相も変わらず、遊夜に視線を送り続けている。

「……蒼雷郷（そうらいきょう）……やっぱり……」

「ウオーッホホホッ！！いくのですヨ！『古代の機械巨人　』で攻撃！！
“アルティメット・パウンド”！！」

機械巨人の拳が容赦なくカラスを粉砕する。

「さら～にっ！！『古代の機械巨人　』が守備モンスターを攻撃した時、
貫通ダメージを与えるノーネ！！」

超過分のダメージが遊夜を襲う。

遊夜：ＬＰ／４０００⇒２２００

「くぅっ！！だがこの瞬間、『蒼雷郷の鴉』の効果発動！！
このカードがバトルで破壊された時、デッキから☆４以下の
『蒼雷郷』と名の付くモンスター１体を特殊召喚できる！！こいっ
！！『蒼雷郷の番兵』！！」

蒼雷郷の番兵　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１９００

蒼い甲冑に身を包み、槍を装備した兵士が出現する。

「フフン！！そんなザコモンスターに何ができるノーネ！！ターン

エンド！！」

「やっぱりあのモンスター、掟破りすぎるよ～。」

遊夜の劣勢に、翔は自分の事でもないのに顔を青ざめる。

「たしかにこのままでは、彼負けてしまうぞ。」

三沢はやや顔をしかめているが、十代・家康・大吾郎の3人は余裕そうな表情をしている。

「決闘は最後まで分からないぜ？」

「そーそ、それに遊夜にはアレがあるしな。」

「あぁ、アレが……」

「俺のターン！！」

遊夜はデッキの上に指を置き目を閉じた。

「（カード達よ、俺はお前達を信じてる。俺の思いに答えてくれっ）ドロー！！」

ドローしたカードを見て笑みを浮かべる遊夜。

「（来たか、狼（ウォルフ））」

その誰も答えないはずの心の言葉に答える声があった。

「《待っていたぞ、我が主よ。》」

それは蒼白く輝く、一匹の蒼い狼だった。

「（待たしてすまない。さっそくだが、力を貸してくれ！！）」

「《無論。》」

狼の言葉を聞いた遊夜は、ニコッと微笑む。

「（いくぜっ！！）俺はチューナーモンスター『蒼雷郷の銀狼』を召喚！！」

蒼雷郷の銀狼　☆３　風　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１００

「チューナーモンスター！？何です～ノ！？」

聞いたことのないモンスターの登場に決闘者であるクロノスだけではな
開場全体がどよめきに包まれていた。

「何だ、あのカードは？」

「何すかあれ！？」

「何々、何なのあれ！？」

チューナーモンスターの登場に冷や汗を流したクロノスだったが、よくよく見てみればそのモンスターは自分の脅威にはなりえないことに気がついた。

「フフンッ！見たこともないカードなので驚きましたーガ、

そんなザコモンスターに何ができるノーネ！！」
「ならば見せてやるっ！！新たなる決闘の可能性を！！チューナーモンスターの力を！！
いけっ！！☆４『蒼雷郷の番兵』に☆３『蒼雷郷の銀狼』をチューニング！」

銀狼が緑色のリングとなり、番兵もその身を４つの星に変える。
そして一直線に４つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天を斬り裂く刃となる。光と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の勇士、『蒼雷郷の猛将―カツマ』！！」

蒼雷郷の猛将―カツマ　☆７　光　雷族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２２００

光が弾けその中から、蒼い甲冑に身を包み黒い馬に乗った武将が姿を現す。

「「「「「「！？！？！？！？！？」」」」」」
「かっこいい！！」
「すっげぇっ！！」
「シンクロ召喚、初めて聞く召喚方法だな……」
「あれがアイツの切り札って訳さ。」
「うむ、見事だ。」
「……やっぱり……」

その威容を見た亮、万条目、明日香、千世、叶絵は顔を驚愕し
翔と十代は喜色に染め、三沢は初めて聞く召喚方法に目を丸くし
家康と大吾郎は遊夜の切り札の登場に満足そうに笑い
文乃は目を丸くしながら遊夜から視線を外さない。

「何なのです～ノ！？シンクロ召喚って何なノ～ネ！？」

クロノスは何が起こったのか全く分からず、混乱していた。
これに対し遊夜は、冷静に何が起こったのかを語りだす。

「シンクロ召喚は、チューナーモンスター1体とそれ以外のモンスター1体以上を
墓地に送ることで、その合計の☆と等しいシンクロモンスターを
融合デッキから特殊召喚する。それがシンクロ召喚だ！！」

遊夜の力の入った説明に、クロノスは『ぐぬぬぬ』と歯軋りをたてる。
だが、それでもまだクロノスには余裕があった。

「シンクロ召喚には驚きましータ。
しかし、そんなモンスターを特殊召喚したところーデ、攻撃力２５００
ワタクシの『古代の機械巨人』には及びませーンノ！」

クロノスは自信たっぷりに説くが、遊夜の顔は微笑んでいた。

「それはどうかな、バトルだ！！行け『蒼雷郷の猛将―カツマ』で
『古代の機械巨人』に攻撃！！」

カツマは、肩鎌の槍を構え機械巨人に向かっていく。

「冗談でしょ！？カツマの攻撃は古代の機械巨人に届きませんーノ！！」

「チューナーモンスター『蒼雷郷の銀狼』のモンスター効果、このカードを素材にしてシンクロ召喚されたモンスターは、その攻撃力を１０００Ｐアップさせる！！よって、このターンのカツマの攻撃力は３５００！！」

蒼雷郷の猛将―カツマ　ＡＴＫ／２５００⇒３５００

「オ、ディーオ！？」

「くらえっ！！“蒼雷斬光閃”！！」

槍をグルグル回したカツマは、蒼白く光る槍を古代の機械巨人に向けて突き出す。

「「「「「っ！！！！」」」」」

十代・家康・大吾郎を除くクロノスの圧倒的勝利を確信していた開場の人間は全員が息を呑んだ。

「ノォォォォッ！？」

槍に宿った蒼白く光る稲妻が機械巨人を粉々にしていく。

クロノス：ＬＰ／４０００⇒３５００

「マンママミーア!?我が『古代の機械巨人』がまたしてもー!!」
絶叫するクロノス。

「さらに、カツマのモンスター効果発動!!このカードがバトルで
相手モンスターを
破壊した時、破壊したモンスターの☆×２００Ｐのダメージを相手
プレイヤーに与える。」

遊夜の言葉に『なぬぅっ!?』と驚愕するクロノス。
見ると、カツマの頭上に蒼白く光るプラズマが発生している。

「発動せよ!!“蒼雷（そうらい）　流星群（りゅうせいぐん）”!!」

プラズマは八つの雷撃となり、クロノスに襲い掛かる。

クロノス：ＬＰ／３５００⇒１９００

「ぐぬぬぬ、しかーしまだ私のライフは残ってるノーネ!!」
「いいえ、クロノス先生あなたはこのターンで終わりです。」

遊夜の言葉に『なぬっ!?』と頭に?マークを浮かべるクロノス。

「リバースカード、オープン!!『雷帝雲（らいていうん）』!!
雷族モンスターがバトルで相手モンスターを破壊した時、
破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える!!」

遊夜の言葉に『なぬぅっ!?』と驚愕するクロノス。
と同時に、クロノスの上に黒い雲が出来る。

「落雷よ落ちよ！！」

黄色い落雷がクロノスを直撃した。

「ペーペロンチ゛ーニ゛ョー！！！！！」

クロノス：ＬＰ／１９００⇒０

決着がつき、その場には這い蹲ったクロノスと勝者の遊夜が残され、ソリッドヴィジョンで映されていたカツマは消えていった。

「楽しかったぁ～。またやりましょうね、クロノス先生。」

ニコッと屈託の無い笑顔で遊夜は微笑んだ。

「ナ、何故なーノ。この私が二度も受験生に負けるなん～テ……」

クロノスはまさか自分が今日二度も負けるなんて思っても見なかったのだろう

未だ腰が抜けたまま立てないでいた。

そして、この結果に驚いていているのはやっぱりクロノスだけではなかった。

この会場の殆どの者達がこの結果に驚きを隠せなかった。

「信じられない、クロノス教諭が2度も受験生に敗れるなど……」

万丈目もまた、そんな者達の一人だった。

そんな驚愕とは真逆の反応をしている者もやっぱりいた。

「……彼、先の子とは違う魅力があるわね。」

明日香は、微笑を浮かべ、そう言いつつ横目に文乃を見る。

「……遊……君……」

「遊君？」

文乃の言葉に首を傾げる叶絵。

「遊君て、文乃が前話してた孤児院での文乃の彼氏？」

叶絵の言葉に、『なっ』と顔を赤面する文乃。

「え、じゃあもしかして彼が？」

叶絵の言葉に明日香は視線を遊夜へ向ける。

「ちょ、ち、違うのわよ！！あたしはただ……」

「うふふ、文乃ちゃん素直じゃないね～。昔はあんなに泣き虫だったのに～。」

不意に掛けられた声に『なっ！？』と驚きの声を上げる文乃。

声のした方に視線を向けると、そこには黒のロングヘアーを後ろで緩く結んだ、

超巨乳の美人な女性がいた。

その姿に、明日香はやや驚きながら口を開く。

「都築先生（つづきせんせい）、いらしたんですか？」

「うん、少し前から。」

明日香の言葉に都築と呼ばれた先生は、ニコッと微笑み文乃に近づく。文乃は、目を丸くして驚いている。

「……乙女（おとめ）……さん……？」

「久しぶりね、文乃ちゃん。」

驚く文乃に、乙女はニッコリと微笑んだ。

「いいぞー！遊夜くーん！！」

「やったなー遊夜！！」

「まぁ、あいつなら当然だろ。」

「うむ、見事だ。」

「（彼もまた、良いライバルになりそうだな。）」

翔と十代、家康に大吾郎は声援を送り、三沢は心の中で遊夜をライバルと認めたのだった。

「ふ～ん……」

「お嬢様」

「如何なされました？」

ＶＩＰ席にて、先程の決闘を見た千世は興味深そうに遊夜を見ていた。

「……よし、佐藤、鈴木！！」

千世に呼ばれた二人のメイドは『『はっ』』と敬礼する。

「あの、特別推薦生の事も調べなさい！！それとチューナーとシンクロについても！！」

「「はっ」」

佐藤と鈴木は、再びＶＩＰ席を後にする。

「ふふふ、決闘なんて趣味程度のつもりだったけど、意外と面白そうなことになりそうね。」

ＶＩＰ席に残った千世はニヤッと微笑むのであった。

所変わって、観客席のとある席にたたずむ一人の少女がいた。
薄紫色の長髪の左右にネコの耳のような癖毛を持ち、黒い瞳をしたその少女は、先程から決闘場にいる遊夜に視線を向けている。

「……にゃあ。」

たった一言、その一言は様々な思いが込められてるようだった。

―そして、物語は動き出す―

調　《終》』

『～序章～　蒼雷の同

～序章～　蒼雷の同調（後書き）

どうも、黒鋼です。始めさせていただきました『遊戯王ＧＸ～蒼銀の稲妻～』。
『迷いネコオーバーラン』とのクロス小説にしたのですが如何だったでしょうか？
自分が『迷いネコオーバーラン』とのクロスにした理由ですが、遊戯王ＧＸの小説のいくつかに『魔法少女リリカルなのは』のクロスが多かったのを見たのが理由です。
自分は『魔法少女リリカルなのは』のことはあまり知りませんがギャルゲーなのは理解できました。
それを知った矢先に『迷いネコオーバーラン』の事を知りこれとのクロスも悪くないかもと思い、この小説を考えました。
今後も、ゆる～く気まぐれに進めて行きますのでどうぞよろしくお願いしま～す。

今回の最強カード『蒼雷郷の猛将―カツマ』
☆７　光属性　雷族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２２００　シンクロモンスター
雷族チューナー＋雷族を含むチューナー以外のモンスター１体以上
このカードは戦士族モンスターとしても扱う。
このカードが戦闘によってモンスターを破壊し墓地へ送った時、破壊したモンスターのレベル×２００ポイントダメージを相手ライフに与える。

遊夜のフェイバリットカードの一枚。

名前の由来は戦国武将の『柴田　勝家』

～第一章～　再会と出会い（前書き）

※注意！！※
この小説では、原作キャラのデッキが
漫画の『遊戯王ＧＸ』の影響を受けている部分があります。
また、大量のオリジナルカードも出します。
ご了承ください。

～第一章～　再会と出会い

デュエルアカデミア実技試験から数週間後、見事合格した遊夜は他の合格者と同じようにヘリコプターでアカデミアへと向かっていた。
そのヘリの合格者の中には、中学での同級生、家康と大吾郎試験会場で知り合った十代・翔・三沢もいる。

「なあ遊夜、お前の使ってるカードって見たことないけど、どこで手に入れたんだ？」

唐突に、十代はそんな事を聞いてきた。

「え？あぁ。このカードはな、俺の親父がデザインし作ったカードなんだ。」
「え！？それじゃあお前の父ちゃん、カードデザイナーなのかっ！！すげぇーっ！！」
「お前一々うるせえよ。」

十代の声の大きさに、漫画『B・M・G（ブラックマジシャガール）と双子の姫君（プリンセス）』を翔と共に読んでいた家康が文句を言う。

「あぁ家康君！！ブラマジガールの攻撃シーンが見えないじゃん！！貸してよ！！」
「バカ野郎！！これは俺のだぞ！！あーバカやめろ！！ピケルとクランの
“王女の試練”のシーンが見れねぇじゃん！！」

漫画を取り合う翔と家康と言う名のオタク達。

「あはははは、二人は仲いいね♪」
「たしかにそうだな。」
「うむ、仲良いことは美しい。」

2人の状況を見ていた遊夜・十代・大吾郎の三人は仲の良さに微笑んだ。

「あ、あれは仲が良いのか？」

その横で、三沢は三人の言葉にツッコミを入れた。

「ははは、あれ？」

不意に遊夜は、ヘリの窓から一機のヘリを視覚に捉える。
そのヘリは、自分たちが乗っているデュエルアカデミアのヘリと同じ物ではなく
かなり豪勢なデザインのヘリだ。

「すっげー！！何だあのヘリ！！」

十代や他の者達もそのヘリに気づき窓の外に目をやる。

「おー、えらく豪勢だなぁ。」
「うむ、どこぞの豪族か？」
「お金持ちの人でもいるのかなぁ」
「……まさか、噂は本当だったのか。」

三沢の言葉に『噂って？』と聞き出す遊夜。

「噂で聞いたんだが、今年の入学生の中に万丈目財閥の御曹司と梅ノ森財閥の令嬢がいると聞いたんだ。」

三沢の言葉に『へぇ～』と返す面々。
万丈目財閥と言えば、最近力を伸ばしている新参財閥の名であり片や梅ノ森財閥と言えば、今や世界にその名が響いている名家中の超名家なのである。

「それじゃあ、あのヘリはその二つどちらかのヘリなのかな？」

剣の問いに『恐らくそうだろうな』と返す三沢。
そう皆が喋っている間に目的地の上空に到着した。
デュエルエリート養成機関デュエルアカデミア本校。
そのヘリポートにヘリコプターが着陸準備をし始めていた。

ヘリコプターから降り、指定の制服を受け取ってロッカールームで着替えを済ました新入生たちは大教室へと集まっていた。
整列した生徒たちが見上げる壇上には少し太った禿頭の男性が立っていた。

「ようこそ、デュエルエリートの諸君。私が本校　校長の鮫島（さめじま）です。
諸君は狭き門を実力で開いてやってきてくれました。
未来のデュエルキングを夢見て楽しく勉強してください。」

鮫島が言葉を続ける中、遊夜は二つのことについて考えていた。
一つは、大教室の一部に豪勢な椅子を用いり、
そこに座る一人金髪ロングヘアーの少女―千世だ。
この大教室の中では明らかに浮いているのだが、座っている千世はそこに座るのがさも当然のように堂々としている。

「（……あれが、三沢の言ってた梅ノ森財閥の令嬢かな……？）」

遊夜だけでなく、この大教室にいる者のほとんどがそう考えていた。
それともう一つ、遊夜が気になっていることがある。それは、自分の制服だ。
このデュエルアカデミアには格学年ごとに三つのランクに分けられている。
中等部から成績優秀で上がった“オベリスク・ブルー”
入学試験で成績が優秀だった“ラー・イエロー”
成績しだいでは退学の恐れもある“オシリス・レッド”
本来、入学時からオベリスク・ブルーに入れるのは中等部からの成績優秀者のみ
なのだが、遊夜は何とそのオベリスク・ブルーの制服を着ているのだ。
その理由は、遊夜がある人物からの特別推薦者という事と、
実技試験でクロノスを破った事が大きい。
この事から、遊夜はオベリスク・ブルー入りが決まったのだが
その理由を聞かされていない遊夜は、なぜ自分がオベリスク・ブルー入りに
なったのかが分からず、自分の制服を眺めていた。

「（……後で、校長先生に聞いてみよ……）」

ちなみに、成績が優秀だった三沢・家康はラー・イエロー
十代・翔・大吾郎はオシリス・レッドだ。
その後、鮫島校長が新入生に対しての祝辞を述べた後は
そのまま各自解散となったため、その時に理由を聞いたらしい。

その後、十代達と分かれた遊夜はブルー男子寮へと向かっていたのだが。

「（……なぁ、狼（ウルフ）。）」

「《何だ？主よ。》」

「（何か視線感じないか？）」

遊夜の言葉に『むっ？』と返す狼。

確かに良く見れば、ブルー寮を目指す者達の視線が遊夜に向かれているのだ。

それも、女子からは好奇、男子からは疑惑と嫉妬に近い視線が。

「《主よ、恐らくそれは主のその制服だな。》」

「（へ？俺の制服どこか変か？）」

遊夜の言葉に『ふぅ』とため息を漏らす狼。

前述にもあった通り、中等部からの成績優秀者以外でブルーに入れるなど

これまで前例が全く無い。それに加え、遊夜の容姿と服装にも理由はあった。

ハリウッドスターに見間違うほどの美形な遊夜の容姿は、女子の話題となっている。

また、遊夜の服装は前のボタンは締めずにマントのように羽織っている独特の着かたをしている。

この着かたが、遊夜の美形に拍車を掛けさらに注目を浴びているのだが、

遊夜はそれに気づいていない。

「ま、いっか。」

気にするのをやめた遊夜は、寮へ向かう足を速める。とその時

「あうっ！！」

後方から女の子の声が聞こえた遊夜、いやその場にいた者全員が後ろを振り向く。

先程の大教室で豪勢な椅子に座っていた千世が、道端で転けていた。

「おい、あれ」

「梅ノ森のお嬢様の……」

「お嬢様でも転けたりするんだ」

「おいお前、起こしてやれよ。」

「何で俺が……」

周りの者達は小声でヒソヒソと呟くばかりで、誰も助けようとはしない。

……唯、1人を除いては。

「大丈夫？立てるか？」

「え？」

千世が見上げると、そこには手を差し伸べる遊夜の姿があった。

千世は、金色に輝くロングヘアーを揺らしながら

剣の手に掴まりながら立ち上がる。

「怪我は無い？」

遊夜のニコッリスマイルに、千世は顔を赤くする。

「だ、大丈夫よ!!（くっ何なのこいつの笑顔は、何とも言えないフェロモンが……）」

千世は顔を赤くしながら走り出す。

「あ、俺“白鋼遊夜”。君は？」

遊夜は走り去っていく千世にそう言ってみた。と同時に走っていた千世は遊夜の方を振り向き――――――

「“千世”よ!!“梅ノ森千世”!!覚えておきなさい!!」

そう言い千世はブルー女子寮へと走って行き、遊夜は千世に軽く手を振っていた。

その後、ブルー寮で荷物を置き終えた遊夜は、メールで決闘場に行ってみようと
十代からの誘いを確認した遊夜は、途中で会った三沢と家康と共に決闘場にやって来ていた。

「あれ？」
「どした遊夜。」

不意に声を上げた遊夜の視線の先に目をやる家康と三沢。そこにはオベリスク・ブルーの3人の生徒と何やら言い合ってる十代・翔・大吾郎の3人がいた。

「お～い、何してるんだ？」

遊夜の声に、十代達とブルー生徒三人がこちらを振り向く。

「よぉ、遊夜！！三沢に家康も。」
「うむ、遅かったな」
「3人共、来てたの？」

遊夜達の登場に三人はそれぞれ違った反応を示した。その一方、遊夜達の登場にブルー生徒の内二人はは目を丸くし、もう1人の黒髪の生徒―万丈目はジロッと睨んでくる。

「誰かと思ったら！」
「お前、高等部受験者の分際でブルーに入った推薦生！！」
「ほう。」

二人の取り巻きが驚く中、1人だけ冷静な態度をとる万丈目に遊夜はニコッと微笑む。

「始めまして、俺は“白鋼　遊夜”。君は？」

遊夜の言葉に、二人の取り巻きはさらに驚く。

「お前、万丈目さんをしらないのか！？同じ1年でも中等部からの

生え抜き、
超エリートクラスのナンバーワン！」
「未来のデュエルキングと呼び声高い“万丈目準（まんじょうめじゅん）”様だ！」
2人の取り巻きは万丈目のことをこれでもかという程持ち上げる。
「へぇ～、じゃあ君が万丈目財閥の御曹司さん？」
遊夜の言葉に、万丈目は『ふん』と鼻を鳴らし、遊夜と十代を見る。
「入学試験決闘で手抜きしたとはいえ一応、あのクロノス教諭を破るとは
貴様ら少しはできるようだな。」
「実力さ」
「ありがと。」
万丈目の言葉に十代は拳を握り締め、遊夜は
別に褒めた訳ではないのにお礼を言う。
それを見た万丈目は不敵に笑いながら口を開く。
「ふん、ならばその実力、今ここで見せて欲しいものだな。」
万丈目の言葉に、遊夜と十代は互いに見合わせ、やがてニコッと笑う。
「いいぜっ！！決闘（デュエル）だっ！！」
「ちょっと待った十代、俺が先だ！！」
決闘の順番を巡って遊夜も十代も引く気は無い。

「何やってんだよお前らは……」

そんな“デュエルバカ”の2人を見て冷ややかにツッコミをいれる家康。

と、その時――――――

「貴方たち、何してるの」

不意にそんな声が聞こえ、全員声のした方に視線を向ける。

そこには、実技試験で遊夜と十代に興味を持った金髪ロングヘアーのオベリスクブルー女子生徒―明日香がいた。

「わぁ、綺麗な人だなぁ」

「ふむ、三次元にしては中々……」

現れた明日香の容姿に、翔はミーハー根性を丸出しになり家康は二次元オタク根性を丸出しにしている中、万丈目が口を開いく。

「天上院君（てんじょういんくん）。いやぁ、この新入り君達があまりにも世間知らずなんでねぇ学園の厳しさを少々教えてさしあげようと思って」

「……そろそろ寮で歓迎会が始まる時間よ」

明日香の言葉に万丈目は『ちっ！！』と舌打ちをし、取り巻き達に視線を送る。

「お前等、行くぞ！！」

そう言い満場目は取り巻きを連れて、決闘場を後にした。

「貴方たち、万丈目君たちの挑発に乗らないことね」
明日香の言葉に『え？』と声を上げる面々。
「あいつら碌（ろく）でもない連中なんだから」
明日香は嫌悪感を隠さず、はき捨てるように言った。
「そうかな？」
「え？」
不意に遊夜が発した言葉に明日香は遊夜に視線を向けた。
「あの2人はともかく、万丈目って人は何かを背負ってる感じがしたよ。
並みの人じゃあ、あぁはならない。」
遊夜の言葉の意味が理解できない面々は、頭上に？マークを浮かべる。
「気にすんな、こいつは時々良くわからない事を言うからな。」
「うむ、意味深長だな。」
だが、家康と大吾郎の2人は遊夜の天然発言（？）には慣れているのかどこか涼しい顔。
「ところで、あなた名前は？」
明日香の言葉に『俺か？』と逆に聞く遊夜。

「何だ何だ、早くもフラグか遊夜？」
「えーっ！？遊夜君、ずるいっす！！」

その状況を茶化す家康と驚く翔に『フラグ？』と
キョトンとなる遊夜だったが、すぐに明日香に視線を向け口を開く。

「俺は“白鋼　遊夜”。君は？」
“天上院（てんじょういん）　明日香（あすか）”。そう、やっぱりあなたが“遊夜”なのね。」

明日香はそう言い、決闘場の入り口の方を向き口を開く。

「文乃！！いつまで隠れてるの、出てきなさい！！」

明日香の声に、少し驚く面々だったが入り口を良く見ると
2人のオベリスクブルーの女子生徒の姿が見える。
赤いセミロングを後ろで束ねた生徒―叶絵が、
少し赤がかかった茶髪のロングヘアーに朱色のリボンを
左右に結んだ生徒―文乃の腕を引っ張っているようだ。

「文乃、ここまで来て何で行かないかなぁ！？」
「ち、違うわよ！！ただ、ちょっと……そう、用事を思い出したのよっ！！」
「へぇ～、どんな用事を？」

奇妙な言い合いに、男子たちは首を傾げた。否、全員ではない。
一人、遊夜だけが妙に驚いたような表情をしている。

「？どした遊夜。」
「……文乃……？」

家康の問いに遊夜は唯それだけ呟いた。
それを見た明日香は何かを確信したかのような表情をする。

「じゃあやっぱり、あなたが文乃が言ってた孤児院での幼馴染?」
「!!!?」

明日香の言葉に遊夜は目を丸くする。

「おい遊夜、孤児院での幼馴染っつーと」
「お前が前に言っていた女子(おなご)のことか?」
「へ?何だ何だ?」
「え?遊夜君て、孤児だったんすか?」
「では、君の言っていた父親は……」

遊夜以外の男子たちが、それぞれ違った反応を示す中
遊夜は言い合う文乃と叶絵に接近する。

「……あの、」
「おぉっ!!」
「っ!!」

遊夜が声を掛けると、叶絵は興味深そうに遊夜の顔を見つめ、
文乃は顔を赤くし逃げようとするが
手を叶絵にがっちりと掴まれてるために逃げられない。

「離してって!!」
「ここまで来て何恥ずかしがってんの!!」
「恥ずかしがってない!!ただ、今日は気が乗らないだけ!!」

言い合いをする二人に、遊夜は思い切って口を開いた――――――

「あ、あの……文（ふみ）……ちゃん？」

「っ！！」

遊夜の言葉に、文乃の顔が真っ赤に染まった。

「ありゃりゃ、文乃ってば久々に彼氏との再会に真っ赤っか……」

「そ、そんなんじゃ無いわよっ！！」

叶絵の言葉に対して思いっきり否定する文乃だったが、叶絵はニヤニヤと笑っていた。

「はいはい、そこまで。」

そこに、見て兼ねた明日香が止めに入る。

「叶絵、あなたは文乃をからかい過ぎ。文乃、あなた自分から彼に会いたかったんじゃなかったの？」

明日香の言葉に叶絵は『えへへ～』と笑って誤魔化し文乃は『うぅ』と顔の赤面がさらに進行する。

その一方、男子達は遊夜に質問攻めにしていた。

「おい、遊夜っ！！お前は何か？幼馴染と再会し恋に落ちるという二次元現象を起こそうというのか！？ならん！！絶対ならんぞ遊夜

！！」

「遊夜、お前が言っていた孤児院での幼馴染とは彼女なのか？」

「なぁなぁ、何であいつ顔赤いんだ？」

「あんなかわいい子と幼馴染だなんて、遊夜君ずるいっす！！」

「おいおい皆、その辺でやめてやれ。」

唯一止めに入った三沢により、何とか抜け出した遊夜は
明日香と叶絵に押し出された文乃と対面する。

「……文ちゃん、だよね？」

「――――っ！！／／／／／／／／／／」

遊夜の言葉に顔をまた赤くする文乃。

「……な、」

「な？」

文乃の声が小さくて聞こえなかった遊夜はキョトンとなるが
文乃は再び口を開くと同時に、思いっきり足を上げ――――――

「馴れ馴れしく文ちゃん言うなっ！！ニ回死ねぇぇ――――――――――っ！！」

「ぐへぇぇっ！？」

文乃の絶叫（？）と共に繰り出された蹴りにより、遊夜は宙を舞った。

「ちょ、ちょっと文乃!?」
「あはははははっ!!さっすが文乃!!期待を裏切らないねぇ。」
文乃の行動に驚く明日香と、予想通りの行動に笑いこける叶絵。
その状況を見ていた男子一同は、唖然としていた（色んな意味で）。
「う～む、ツンデレなど二次元の中だけの存在だと思っていたぞ。」
「ほぉ、良い蹴りだ。」
「お～い遊夜、大丈夫かぁ～?」
「こ、怖いっす……」
「何と言うか、すごい幼馴染だな……」
一方、蹴り飛ばされた遊夜はまるで何事も無かったかのように
ニコッと微笑み、口を開いた。
「よかった、文ちゃ……文乃さん、元気そうで何よりだよ。」
この遊夜の天然発言に、一同はポカンとなった。まさかここで
そんな言葉を発するとは、殆どの者達が思ってなかったようである。
「……あんた、何一つ変わってないわね。」
「あははは、文乃さんは変わったよね。昔はあんなに泣き虫だったのに。」
遊夜の言葉に、またしても顔を赤くする文乃。
「バ、バカッ!!余計な事言うな!!二回死ね!!」
「（くすっ）……二回死ね……か。」
文乃に怒られたのに、遊夜はどこか嬉しそうだった。

「はいは～い、そこまで。」

と、不意に後ろから声がし、一同は声がした方を振り向く。そこにはアカデミア教師の服を着用し黒のロングヘアーを後ろで緩く結んだ、超巨乳の美人な女性―乙女がいた。

「わぁ、綺麗な人だなぁ」

「おぉ、三次元にしては中々いい……」

現れた乙女の容姿に、翔と家康は再び顔を赤める中、遊夜は目を丸くした。

「乙女……姉さん!?」

「久しぶり～遊(ゆう)～♪」

そう言い乙女はギュゥと遊夜を抱きしめ、遊夜は乙女の豊満な胸に埋もれた。

「うぷっ。姉さん、キツイ。」

「照れない照れな～い♪」

「あ――――――っ!!遊夜君ずるいっす!!」

遊夜の状況に逸早く講義する翔。と同時に歯軋りをする家康。

「ぐぬぬぬぬ、遊夜ぁ～なぜ貴様ばかりがぁ～……」

「ふむ、もしやその人が、遊夜の言っていた姉上か?」

「えっ?遊夜、姉ちゃんいたのか?」

十代の言葉に『いや、そういう訳では……』と自分と彼女達と

の関係を説明する。

遊夜が言うには、文乃とは近所の施設で出会った幼馴染であり
乙女もまた近所に住むお姉さんのようなものだったらしい。遊夜が
１０歳の時
両親が事故で他界した後、文乃のいる施設に入った遊夜はその後一
年を施設で過ごし
その間、文乃や乙女を初めとした者達と共に過ごしたらしい。

「んじゃぁ、お前その後はどうしたんだよ？」

十代の言葉に対し、遊夜はニコッと笑い口を開く。

「あぁ、その後父が勤めていた『インダストリアル・イリュージョン社』の
ペガサス会長に引き取られたんだ。」

「「「「「……はい？」」」」」

遊夜の言葉に十代・翔・三沢・明日香・叶絵の五人は言葉を失った。
その一方で家康と大吾郎、それに文乃と乙女はあまり驚いてなかった。

「ま、驚かねぇ方が無理だよな。」
「うむ、俺達も最初聞いた時は少々驚いたからな。」
「まぁね。」
「大丈夫。遊がどこに行こうと、お姉ちゃんにとっては

かわいい弟みたいな者である事に変わりは無いからねぇ～♪」

その後、五人が正気を取り戻し全員で自己紹介を行い
“芹沢（せりざわ）　文乃（ふみの）”・“鳴子（なるこ）　叶絵（かなえ）”と言う
名前が判明したのは数分後の話である。

「ふぅ、おいしかった。」

あの後、皆と分かれた遊夜は新入生歓迎会でのバイキングを終え
部屋で休息をとっていた時だった。

「ん？」

不意に電子手帳にメール着信の電子音が鳴り響き、遊夜は
生徒手帳を開き受信したメールを再生する。
差出人は万丈目だった。

「《午前０時に決闘場で待っている。互いのベストカードを賭けた
アンティルールで決闘だ。勇気があるなら来るんだな。》」

メールが終わり生徒手帳を仕舞った遊夜は、ドアに手を掛け部屋を
出る。

「（挑まれた決闘に背を向けるのは、性に合わないからな。）」

遊夜は、寮の廊下を歩き出し外へ出た。

「さて、行くか。」
「どこへ行くのかしら?」

不意にそんな声がした遊夜は、声がした方を向く。そこには、明日香・文乃・叶絵の3人がいた。

「文乃さん、明日香さん、それに叶絵さんも、どうしてここに?」
「いや~文乃がどうしても君に会いたいってさぁ……」
「んな訳あるかっ!!」

遊夜の言葉にいきなり漫才(?)を始める二人を無視し明日香が進み出る。

「やっぱり万条目君たちは貴方にも目を付けていたみたいね」
「あ、分かります?」
「大方予想はしてたわ、私たちは貴方を止めに来たのよ。」

明日香は校則について詳しい説明を言い出した。遊夜も、内容は生徒手帳を読んでいたから分かるが、アンティルールにおいては退学も有り得るのだと言う。

「ありがと、心配してくれて。」
「バ、バカッ!!誰が心配なんかするかバカ遊夜!!二回死ね!!」

文乃は顔を赤くし否定するが、遊夜は早くも慣れたのか気にもせず話を続ける。

「でも、挑まれた決闘に背を向けるのは性に合わないんだ、俺は行くよ。」

遊夜はそう言い、決闘場へ向かう。

「どーすんの文乃、明日香。」

「だから言ったでしょ、言うだけ無駄だって。」

そう言う文乃だったが、足は動き遊夜の後を追っていた。

「と言いつつ、あなた足が動いてるわよ。」

明日香の指摘に文乃は慌て、叶絵はくすくす笑った。

「べ、別に心配な訳じゃないわよっ!!ただ、その、散歩がてら付いていくだけよ!!」

そう言い文乃は遊夜の後を追った。残された明日香と叶絵の2人は顔を見合わせ『やれやれ』と言い後を追った。

オベリスクブルー寮生専用の決闘場に到着した遊夜達の前には十代と翔、差出人の万丈目と取り巻き2人がいた。

「よく来たな、白鋼　遊夜。その覚悟は褒めてやるよ……ん?」

「よう!!遅かったな遊夜……てあれ?」

「あれ?明日香さんに文乃さん。それに叶絵さんも。」

遊夜の後ろにいる三人の女子たちの存在に驚く面々。

「やぁ天上院くんに芹沢くん、それに鳴子くんじゃないか。
何、この身の程知らず共に制裁を加えてデュエルアカデミアの厳しさってものを
教えてやるのさ。君たちもどうだい？」

「お断りよ。」
「あんたバカ？二回死ね。」
「悪いけど、文乃の思い人をいじめるのはちょっとねぇ。」
「そう、あたしの思い人……てっ何言ってんのよ叶絵！！」

叶絵の言葉に顔を赤くして否定した。その一方、叶絵の言葉を聞いていた
万丈目の取り巻きの一人、青髪にメガネを掛けた男がワナワナと震えだした。

「？お、おい取巻（とりまき）？」

取巻と呼ばれた生徒の様子がおかしい事に気づいたもう一人の取り巻き
茶髪のギザギザ頭をした生徒が語りかける。

「噂で聞いたことがある……芹沢さんには、幼馴染の彼氏がいるって……」
「あ、君もしかして、前に文乃に告ってフラれた人？」

叶絵の言葉に、取巻は血涙を流した。さらにそこに追い討ちを掛ける様に
叶絵は余計なことを言ってしまう。

「そして彼、“白鋼　遊夜”君こそが文乃が想い続けてきた想い人

なのだぁっ！！」

叶絵の言葉に、文乃は赤面すると同時に憤怒の表情となり
取巻は完全にキレた。

「ぐぬぬぬぬぬ、万丈目さん！！この男は俺にやらせてください！！」

「ダメだ。」

取巻の頼みをバッサリ却下する万丈目。

「案ずるな取巻、奴は真っ先に俺が潰してやる。
慕谷（したいたに）、貴様はガードマンが来ないか見張ってろ。」

万丈目はもう１人の取り巻き“慕谷”に命じた後、遊夜を指差す。

「まぁそういう訳だ、白鋼　遊夜まずは貴様からだ！！」
「えっと……何だか良くわからないけど、決闘は受けるよ。」

そう言い、遊夜と万丈目は決闘場に上がる。

「それじゃあ、行くよ！！万丈目！！」
「万丈目さんだ！！」
「「決闘っ！！」」

遊夜：ＬＰ／４０００
万丈目：ＬＰ／４０００

「ちぇ、俺も決闘したかったなぁ～。」

十代は不服そうにそう呟いた。その一方、翔は明日香と叶絵とこっそり話をしていた。

「あの、やっぱり文乃さんは遊夜君の事……」

「まぁね、でも文乃は“狼少女”だからねぇ。素直じゃないのよ。」

「少しは素直になればいいんだけどね……」

明日香と叶絵の二人は『ふぅ』とため息をついた。

「な・に・か・言・っ・た？」

そしてその会話は文乃に聞こえてたらしく、文乃が憤怒の表情で三人を睨んだのは全くの蛇足である。

「まず、俺のターンだ！」

ドローしたカードを手札に加えた万丈目はそこから、どうするのかを一瞬で決める。

「俺は『ゴーレム・ドラゴン』を守備表示で召喚！！」

ゴーレム・ドラゴン　☆４　地　ドラゴン族　ＡＴＫ２００　ＤＥＦ２０００

全身が岩で出来た、小型のドラゴンが現れた。

「カードを2枚伏せターンエンドだ！」

「俺のターン！！（おっ）」

遊夜はドローしたカードが『蒼雷郷の銀狼』のを確認した。

「（早速来てくれた、狼。）」

「《主よ、此度の決闘はアンティーだそうだな。》」

「（大丈夫、お前たちは誰にも渡さないさ。）」

そう言い遊夜は、自分の手札状況を確認する。

「（『ゴーレム・ドラゴン』の守備力は高い、そして伏せカードが2枚。
攻撃無効化か、もしくは攻撃モンスター破壊系か、どっちにしたって行くまでだ！！）」

遊夜は手札の一枚に手を伸ばす。

「俺は手札から、チューナーモンスター『蒼雷郷の鎌鼬』を召喚！！」

蒼雷郷の鎌鼬　☆３　風　雷族　ＡＴＫ１３００　ＤＥＦ１０００

遊夜の場に蒼白く光る鎌を生やした鼬が現れた。

「チューナーか！！」

「おぉ！！いきなり来るのか！！」
「さらに、『蒼雷郷の鎌鼬』が召喚に成功した時、手札から☆４以下の
『蒼雷郷』と名のつくモンスター１体を特殊召喚できる！！
来い！！『蒼雷郷の剣客』！！」

蒼雷郷の剣客　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に蒼い和服に身を包んだ剣士が現れる。

「行くぞっ！！☆４『蒼雷郷の剣客』に☆３『蒼雷郷の鎌鼬』をチューニング！」」

鎌鼬が緑色のリングとなり、剣客もその身を４つの星に変える。
そして一直線に４つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天を斬り裂く刃となる。光と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の勇士、『蒼雷郷の猛将―カツマ』！！」

蒼雷郷の猛将―カツマ　☆７　光　雷族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２２００

光が弾けその中から、蒼い甲冑に身を包み黒い馬に乗った武将が姿

を現す。
だが、カツマの出現に万丈目は口元に笑みを浮かべていた。
「早速かかったな」
「何？」
「お前と１１０番の入試決闘はすでに分析済みだ。罠発動（トラップはつどう）！！
『エレメント・コントロール』！！さらにもう1枚の罠、『エレメント・オーラ』！！」

「『エレメント・コントロール』？」
「それに、『エレメント・オーラ』って？」
「決闘者にとって基本的な知識よ」
万丈目が何を狙っているのか全くわからない翔と十代に明日香が歩み寄ってきた。

「『エレメント・コントロール』は相手がモンスターを特殊召喚したとき
そのモンスターと同じ属性の自分の場にあるモンスター1体を生け贄にすることで、
特殊召喚されたモンスターのコントロールを得ることが出来る罠カード。」
「だけど『ゴーレム・ドラゴン』は地属性、『カツマ』は光属性だぜ？」
「そのための『エレメント・オーラ』よ。」
未だに万丈目の狙いが分からない十代に文乃が呆れたように言い出す。

「『エレメント・オーラ』は、発動ターンのエンドフェイズまで
自分の場のモンスターの属性を指定した属性に変えることが出来るの。」
「てことは――――」
内容を理解した十代は視線を再び遊夜と万丈目に戻した。

「『エレメント・オーラ』の効果により、俺は場のモンスターの属性を
光属性に変更!!そして『エレメント・コントロール』の効果により
光属性となった『ゴーレム・ドラゴン』を生け贄に
『カツマ』のコントロールを得る!!」

『エレメント・オーラ』により頭上からオーロラが現れ、
『ゴーレム・ドラゴン』の体が光り輝く。
それと同時に、『エレメント・コントロール』により
『ゴーレム・ドラゴン』が粉々に砕け散ると『カツマ』は遊夜の場を消え
万丈目の場に現れた。

「クロノス教諭との決闘での止めがこのモンスターだと知って、この罠を
張っていたのさ。そんなことも知らずにまんまと罠に入り込んでくるとわな。」

『カツマ』を従えた万丈目はしてやったりという顔で笑っていた。

「やった!!さすが万丈目さん!!」

その後ろで取巻はかなりはしゃいでいた。

「あっちゃ、まずったな。」

「何やってんのよ遊夜!!あんたこのままだとアンティーでカード取られちゃうわよ!!」

失敗した遊夜に叱咤を飛ばす文乃。

「あんたのそのカード、お父さんの遺品なんでしょ!!取られていいの!?」

文乃の叱咤に一瞬驚く遊夜だったが、すぐ表情を和らげる。

「ありがと、心配してくれて。大丈夫だから。」

「し、心配なんかしてないわよバカ遊夜!!二回死ね!!」

遊夜の言葉に赤面して否定する文乃。それを見ていた翔は明日香たちに再び接近する。

「本当に狼少女っすね。」

「でしょ。」

翔の言葉にニヒヒと答える叶絵。

その一方、その様子を見ていた取巻は歯軋りをしていた。

「ぐぬぬぬぬぬ、何であんな奴が文乃さんとぉ……」

「おい、うるさいぞ！！」

取巻に万丈目が叱咤を飛ばし、遊夜に視線を戻す。

「ふん、どうだ白鋼。いっそサレンダーでもするか？」

「するもんか！！俺のターンはまだ終わっていない！！」

そう言い遊夜は手札状況を確認する。

「《どうするのだ主よ。》」

「（さすがに洗脳系とは予想外だったけど、まだ手はある。）

俺はカードを２枚伏せ、ターンエンド！！」

「ふん、俺のターン、ドロー！！『ランス・リンドブルム』を召喚！」

ランス・リンドブルム　☆４　風　ドラゴン族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１２００

騎士槍（ランス）を持った、緑色の竜戦士（ドラゴニュート）が現れた。

「いけ『カツマ』！！“蒼雷（そうらい）　斬光閃（ざんこうせん）”！！」

槍をグルグル回したカツマは、蒼白く光る槍を遊夜に向けて突き出した。

遊夜：ＬＰ／４０００⇒１５００

「ぐぁっ！！だがこの瞬間、罠発動！！『ダメージ・コンデンサー』

！！

戦闘ダメージを受けた時、手札一枚をコストに発動！！受けたダメージの数値以下の攻撃力を持つモンスターをデッキから特殊召喚する！！来い！！

『蒼雷郷（そうらいきょう）の一角獣（いっかくじゅう）』！！」

蒼雷郷（そうらいきょう）の一角獣（いっかくじゅう）　☆５　光　雷族　ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１２００

蒼白く光る角を生やした一角獣が現れた。

「ちっ！！（『ランス・リンドブルム』の攻撃力では返り討ちにあうな。）

バトルは中断！！ターンエンドだ！！」

「俺のターン！！」

その引いたカードを見た遊夜はそのカードをそのまま決闘盤（デュエル・ディスク）に差し込んだ。

「魔法カード『強欲な壺』発動！！デッキからカードを2枚ドローする！！」

引いた2枚のカードを見た遊夜は口元に笑みを浮かべた。

「『蒼雷郷の一角獣』を生け贄に、『雷鳥騎士（サンダーバード・ナイト）』を特殊召喚！！」

雷鳥騎士（サンダーバード・ナイト）　☆５　光　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１４００

遊夜の場に、雷鳥の衣装に身を包んだ騎士が現れる。

「このカードは、自分の場の雷族モンスター1体を生け贄に特殊召喚できる。」

だが、万丈目表情は微笑んだままだった。

「だが、たかが攻撃力１５００のモンスターに何が出来る!!」

「それができちゃうんだな～。」

遊夜は間の抜けたような返事をした。

「『雷鳥騎士』は、生け贄にした雷族モンスターの元々の攻撃力分このカードの攻撃力をアップさせる!!」

雷鳥騎士　ＡＴＫ／１５００⇒３５００

「何!?」

驚く万丈目を尻目に、遊夜は万丈目の場にいる『カツマ』に視線を向けていた。

「（許せカツマ。）バトル!!『雷鳥騎士』で『蒼雷郷の猛将―カツマ』を攻撃!!

“サンダー・スラッシュ・ブレード”!!」

『雷鳥騎士』の黄色い剣が『カツマ』を切り裂く。
万丈目：ＬＰ／４０００⇒３０００
「ぐぁっ！！」
「そしてこの瞬間、罠発動！！『雷帝雲（らいていうん）』！！」
「！！そのカードは！！」

クロノスとの決闘で出したカードの出現に、万丈目は目を丸くする。
「雷族モンスターがバトルで相手モンスターを破壊した時、
破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！！
『カツマ』を操った報いを受けろ！！」
遊夜の言葉と同時に、黒い雲より落ちた落雷が万丈目を襲った。
万丈目：ＬＰ／３０００⇒５００
「ぐぅっ！！お、おのれぇっ。」
「ま、万丈目さん……」

万丈目の劣勢に取巻が心配そうに見つめる。仕方ないだろう。
先程まで優勢だった状況がモンスター１体の召喚で逆転してしまったのだから。

「おぉすげぇぜ遊夜！！」
「あの状況から逆転するなんて……」
「すごすぎっす！！」

「こりゃぁ、先の文乃の愛の声援がきいたのかなぁ？」
「だ、誰が愛の声援よ！！」
遊夜の逆転に皆反応は色々あれど、驚いていた。
「ターンエンドの前に、俺は『蒼雷郷の狛犬』を守備表示で召喚！！」
蒼雷郷の狛犬　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／２０００
蒼白く光る狛犬が現れた。
「くそ！調子に乗るな！！俺のターン！！」
ドローしたカードを見た万丈目の顔は喜色に染められていった。
「ふっ、この決闘俺の勝ちだ！！『ランス・リンドブルム』を生け贄に捧げ、
来い！！『創生竜』を召喚！！」
創生竜　☆６　光　ドラゴン族　ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／１８００

全身真紅の巨竜が姿を現した。

「だけど、『雷鳥騎士』の攻撃力には及ばない。」

だが、遊夜の言葉に万丈目はニヤッと不気味に微笑む。

「甘いわ！！手札から装備魔法『巨大化』発動！！俺のＬＰが貴様のＬＰより下の時
装備モンスターの攻撃力を倍にする！！」

創生竜　ＡＴＫ／２２００⇒４４００

「そう来たか！！」

「やれ！！『創生竜』で『雷鳥騎士』を攻撃！！“剛炎弾（ごうえんだん）”！！」

『創生竜』の吐息（ブレス）が『雷鳥騎士』を直撃し、辺りは爆発の煙に包まれる。

遊夜：ＬＰ／１５００⇒６００

「ぐっ」

「俺はカードを一枚伏せ、ターンエンド。（俺が伏せたのは永続罠『竜の逆鱗』。
これで守備モンスターに対して貫通効果を得た。）」

万丈目は自分の圧倒的有利に自身を持った。

「これで俺の圧倒的有利には変わりはない。どう転んでも俺の勝ちは

決まったようだな!!アンティルールによりお前のベストカードを貰うぜ!!」

状況は完全に自分に傾いている万丈目は余裕の表情で遊夜に言った。

「決闘は最後まで分からないぜ!!」

「ふっ、決闘は９９％の知性が勝敗を決する。運を含むそれ以外の要素が
入り込む余地などたったの１％に過ぎない。」

「なら俺はその１％に賭ける!!俺のターン!!」

遊夜は、全身全霊をかけてデッキからカードを引いた。
引いたカードを見た遊夜の口元が笑みに変わった

「俺は手札から『貪欲な壺』発動!!このカードのは墓地にあるモンスターカード5枚をデッキに戻しシャッフルし、デッキからカードを2枚
ドローする!!俺は『蒼雷郷の鎌鼬』・『剣客』・『カツマ』・『一角獣』
そして『雷鳥騎士』をデッキに戻しカードを2枚ドロー!!」

引いた2枚を即座に手札に加えた遊夜は、手札の相棒に手を伸ばす。

「（出番だぜ!!）来い!!『蒼雷郷の銀狼』を召喚!!」

蒼雷郷の銀狼　☆３　風　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１００

「そのカードは!!まさか!!」

遊夜の次の一手がシンクロ召喚だとわかった万丈目はその表情を驚愕に染める。

「そのまさかさ！！☆４『蒼雷郷の狛犬』に☆３『蒼雷郷の銀狼』をチューニング！！」

銀狼が緑色のリングとなり、狛犬もその身を４つの星に変える。
そして一直線に４つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天を斬り裂く刃となる。光と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の勇士、『蒼雷郷の猛将―カツマ』！！」

蒼雷郷の猛将―カツマ　☆７　光　雷族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２２００

光が弾けその中から、蒼い甲冑に身を包み黒い馬に乗った武将が姿を現す。

「さらに『蒼雷郷の銀狼』のモンスター効果、
このカードを素材にしてシンクロ召喚されたモンスターは、
その攻撃力を１０００Ｐアップさせる！！」

蒼雷郷の猛将―カツマ　ＡＴＫ／２５００⇒３５００

「だが、俺の『創生竜』の攻撃力には及ばん！！」

「それはどうかな?手札から魔法カード『成金ゴブリン』発動!!
俺はカードを1枚ドローし、相手はＬＰを１０００Ｐ回復する!!」
万丈目：ＬＰ／５００⇒１５００

「へ?何でわざわざ回復させてんだ?」
「何か意味あるんすかね?」

遊夜の行動の心理が読めない十代と翔は首を傾げ、明日香・文乃・叶絵は
『そういうことか!!』と遊夜の引きの強さに驚いた。

「『巨大化』は自分のＬＰが相手より下の場合、装備モンスターの攻撃力を倍にする。
だけど、自分のＬＰが上なら、その逆となるわ。」

創生竜　ＡＴＫ／４４００⇒１１００

「し、しまった!!」
「これで最後だ!!行け『カツマ』!!『創生竜』を攻げ……」
「まずい、万条目さん!　警備員が来た!!」

遊夜が攻撃を宣言しようとした瞬間、見張りに行っていた取り巻き慕谷が駆け込んで来た。と同時に、慕谷の言葉に一同は（一部を除く）ゾッとした。
これがバレれば、退学は必須だからだ。

「まずい！！万丈目、この勝負、君に預けるよ！！」
「な、情けをかけるというのか！この俺に！！」
「んな事言ってる場合か！！速く逃げないと退学になるぞ！！」

そう言い決闘場から下りた遊夜は、十代達と共に決闘場を出ようとする。

「万丈目さん！ヤバイっすよ！！」
「早く行かないと見つかっちゃいますよ！！」

一方万丈目も、取り巻き2人の言葉に憎々しげに遊夜を睨みながら、決闘場を後にした。

「げっ！！？」

決闘場を後にした遊夜達は何とか校舎から出たのだが、そこで意外な人物と遭遇。

「やっほー遊～♪」

それは、デュエルアカデミア教師“都築　乙女”だった。

「遊、お姉ちゃん見てたわよぉ～。万丈目君との決闘～♪
惜しかったねぇ～、警備員さんが来なかったら遊が勝ってたに～。」
「「「「！！！？？？」」」」

乙女の言葉に遊夜達一同（約二名を除く）は顔が真っ青になった。

「な、なぁ先生、頼むよ今日のこと黙っててくんね？」
「お願いですよせんせえ～。」

唯一真っ青にならなかった十代と叶絵が、猫の様におねだりして来る。

「うん、いいよ♪」

そしてあっさり了承する乙女に、一同（やっぱり約二名を除く）はズッコケた。

「た・だ・し。一つだけ条件がありま～す。」

乙女の言葉に？マークを浮かべる十代・翔・明日香・叶絵の四人と『何かやな予感』と身構える遊夜と文乃。

「この子と、お友達になってほしいの～。」

乙女の言葉に『はい？』とキョトンとなる四人と、『まさか、また？』と呆れる二人。

「文乃、遊夜、またって？」

二人のセリフを聞いた叶絵の言葉に、二人は『実は』と切り出す。

二人曰く、乙女は昔から困っている人や動物を見捨てれない人らしくしょっちゅう人助けをしてるらしい。また、良く捨て猫を拾ってきては

『この子と、お友達になってほしいの～。』と二人に良く頼んだらしい。

「何だ、んじゃあ猫と仲良くなりゃいいんだろ？簡単簡単。」

二人の説明を聞き楽観的になる十代だったが、次の瞬間その期待は裏切られることとなる。

「じゃ～ん！！あんまりかわいいんで、拾って来ちゃった～♪」

そう言い乙女が掴んだモノ、それは迷い猫でも犬でもなく――――――

――――――薄紫色の長髪の左右にネコの耳のような癖毛を持ち、黒い瞳をした女の子だった。

「「「「「「んなっ！？」」」」」」

予想外のモノに、全員あんぐりと大口を開けて固まった。

「名前は“霧谷（きりや）　希（のぞみ）”ちゃん。ほら希ちゃん、ご挨拶ご挨拶～。教えた通りにやってみて～。」

乙女の言葉に希はコクンと頷き、招き猫のようにクイっと手首を折り曲げ口を開いた。

「……にゃあ。」

「そーそ！完璧！！希ちゃん、グッジョブ！！」

希の言葉に、乙女は『ビシッ』と親指を立てた。その様子を一同は呆然と見つめていた。

『～第一章～　再会と出会い　《終》』

～第一章～　再会と出会い（後書き）

どうも、黒鋼です。
本編だと第２話の“フレイム・ウイングマン”の回をお送りいたしました。
さて、万丈目のデッキなんですが、漫画の影響でドラゴンデッキの方が
いいかなぁ～と思い、思い切ってこうしました。
今後も、自分独自の設定などがバンバン出てくるので、よろしくお願いします。

さて、ここで読者の皆様にちょっとしたお願い。
今回出てきた委員長こと“鳴子　叶絵”何ですが、実は情けないことに
彼女のデッキをまだ考えていないのです。そこで、読者の皆様から感想を通じて彼女のデッキアイディアを大募集します！！
オリジナルでもいいので、バシバシ送ってくださいね！！お待ちしてま～す。

今回の最強カード『雷鳥騎士（サンダーバード・ナイト）』
☆５　光　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１４００
このカードは自分フィールド上に存在する
雷族モンスター１体を生け贄に、手札から特殊召喚する事ができる。
この方法で特殊召喚したこのカードの攻撃力は、
生け贄にしたモンスターの元々の攻撃力分アップする。

遊夜のキーカードの一枚。
ぶっちゃけ『ターレット・ウォリアー』の雷族バージョン。

最も、攻撃力はこっちの方が上だけど。

～第二章～　迷い猫、シンクロ（前書き）

※注意！！※
この小説では、
大量のオリジナルカードを出します。
ご了承ください。

～第二章～　迷い猫、シンクロ

万丈目との決闘から一夜明けた今日、超ご機嫌な乙女に連れられ
希はデュエルアカデミアへの編入を果たした。
本来、編入生はオシリス・レッド入りになるのだが希は女子という
事もあり
オベリスク・ブルーへの編入となった。
その後、初めての授業が終わり遊夜は十代・翔・家康・大吾郎と共に
希の座る席へ向かった。そこにはすでに、明日香・文乃・叶絵の三
人と
２人の女子生徒がいた。
総計６人の女子生徒達は、遊夜達男子の接近に気づく。

「おはよ、文乃さん、明日香さん、叶絵さん、それと……」

遊夜は見慣れない二人の女子生徒、茶色いセミロングヘアーの女子と
黒いロングヘアーを後ろで束ねた女子の姿に目を細める。と同時に
二人の生徒が
遊夜の姿を見て、目を輝かす。

「あ、この人が遊夜？」
「まぁ、この方が文乃さんの初恋のお方……」
「違うわよっ！！」

２人の言葉を即座に否定する文乃。一方遊夜は、話について行けず
キョトンと
なっていた。とここで、明日香が二人の女子を止めに入った。

「いい加減にしなさい“ジュンコ”“ももえ”。

文乃がそのての話　苦手なの知ってるでしょ。」

明日香に言われ『えぇ～』と不服そうに言う茶髪の生徒―ジュンコと『でも、明日香様』と言い訳をしようとする黒髪の生徒―ももえ。
一方文乃は、未だに怒っているようだ。心配した遊夜は、文乃に話しかけてみる。

「あの、文乃さん？」
「うっさい、話しかけるな。」

遊夜の言葉をバッサリ切り倒す文乃。
それを見ていた十代達男子は唖然としつつも口を開いた。

「う～む、まさかここまでのツンデレが三次元に存在するとは。」
「家康、ツンデレって何だ？」
「アニキは知らなくていい事っすよ。」
「うむ、理解できん。」

それぞれの反応をした後、二人の女子の名前をそれぞれ聞き“枕田（まくらだ）　ジュンコ”・“浜口（はまぐち）　ももえ”と聞いた。

「さてと、」

そう言い遊夜は、視線を未だに席に座っている希に向ける。

「どうだ、学園は楽しいか？」
「別に普通。」

希の回答に『あらら』と苦笑いする遊夜。とそこに、その遊夜の服を引っ張る

文乃の姿があった。遊夜は『なに？』と聞き出す。

「あの子、希だっけ？あれから何か聞き出せた？」

文乃の言葉に首を横に振る遊夜。

「いや、ただ本人が言いたくないなら無理に聞くなって姉さんに言われたから。」

「そう。」

遊夜の回答にそっけない態度をとる文乃。それを見ていた希が遊夜の服を引っ張った。

「ん？なに？」

「……乙女が言ってた、遊夜を頼れって。」

そう言い『じー』と遊夜を見つめて来る希。

そんな希の視線に遊夜はニコッと微笑む。

「うん、いいよ。俺にできることなら、何でも頼ってくれ。」

遊夜の言葉に少し、ほんの少しだけ希が微笑んだ……ように見えた。

一方その遊夜の態度を気に入らないように見ている文乃。

「……」

「ん～？どしたの文乃、嫉妬かい？」

叶絵の言葉に『ち、違うわよ！！』と否定する文乃。とその声に気づいた遊夜に

『どうかしたのか?』と声を掛けられ、益々赤面していく文乃。
「うっさい!!全部あんたのせいよ!!二回死ねぇっ!!」
文乃の憤怒に遊夜は頭上に?マークを浮かべおどおどするばかりだった。
「なぁ明日香。文乃の奴は何であんなに怒ってるんだ?」
「え……」
十代の言葉に、一滴の汗を流す明日香。
「十代、あなたねぇ……」
「アニキ、鈍すぎっす。」
明日香と翔のツッコミに?マークを浮かべる十代。とそこに
「ちょっと、白鋼　遊夜。」
不意に後ろから声を掛けられた遊夜が振り向くと、そこには二人のメイドと共に
教室の出入り口でドンと構えている女子生徒―梅ノ森　千世だった。
その姿を見た文乃は『げっ』と嫌なそうな表情をし、明日香・ジュンコ・ももえもあまり良さそうな表情はしてない。
だが、叶絵だけは相変わらずのテンションで微笑む。
「ヤッホー、ちーぽん。」
「誰がちーぽんだ!!」
叶絵が速攻で千世をからかう中、2人のメイド―佐藤・鈴木が

遊夜に接近する。

「あなた、“白鋼　遊夜”様ですね？」

「そうですけど？」

遊夜の回答を聞いた二人は、遊夜に対して頭を下げる。

「先日は千世お嬢様に手を差し伸べていただきありがとうございます。」

佐藤・鈴木の言葉に『あぁ』と昨日の事を思い出す遊夜。

「つきましては白鋼様。」

「あ、遊夜でいいです。」

「では遊夜様。」

「この度千世様は、先日のお礼をしたいと申しておいでです。」

二人の言葉に『へ？』とポカンとなる遊夜。

そこに、叶絵のからかいから離脱した千世が胸をはって前に出る。

「そうよ。あたしは借りは返す主義なの。だから白鋼、」

「ですから遊夜でいいです。」

遊夜の言葉に『あっそ』とあっさりと返す千世。

「まぁとりあえず遊夜、昨日の礼よ。昼食の時間になったら呼びに来るわ。

礼として最高の食事（ディナー）を用意してあげる。光栄に思いなさい。」

千世の言葉に『ディナー？』とキョトンとなる遊夜。とそこに、明らかに機嫌の

悪そうな表情をした文乃が、遊夜と千世の間に割り込む。

「やめときなさい遊夜。こいつと一緒に食事なんかしたら、明日には下僕にされるわよ。」

文乃の言葉に『下僕？』とキョトンとなる遊夜。と同時に、文乃の言葉に
怒りをあらわにする千世。

「どういう意味よ“芹沢　文乃”！！」
「あら。あたしは事実を言っただけよ。」

そう言い二人は火花を散らし口々に言い合いを始めた。

「え～と～、２人は仲悪いの？」

文乃と千世の不毛な戦いに汗を流す遊夜は、明日香に尋ねてみる。

「はっきり言って、仲はかなり悪いわ。」
「確かにねぇ～。文乃とちーぽん、まさに犬猿の仲だからねぇ～。」

明日香と叶絵の言葉に『そうなんですか？』と尋ねる遊夜に叶絵が説明する。

叶絵が言うには、文乃と千世の二人は中等部の頃から些細なことで口ゲンカする
間柄らしい。なぜそんなにも仲が悪いのかは、叶絵も詳しい事は分からないらしく
本人達曰く『全てが気に入らない』らしい。

叶絵の説明を聞き終えた遊夜は、とりあえず二人を止めるために接近する。

「2人とも、ケンカはその辺で……」

「「うっさい黙れ！！」」

2人の見事なシンクロに『あらら』と少したじろぐ遊夜。

「ありゃりゃ～、遊夜でも無理だったか～」

「あの二人仲は悪いのに、なぜこういう時だけはシンクロ率が高いのかしら……」

こうなる事を予想していたのか、叶絵は面白そうに笑い
明日香はため息をついた。
その状況を眺めていた希は呟く様に、

「……変な人たち」

とほんの少しだけ、微笑んでるように見えた。

その後、結局千世の誘った昼食（ディナー）には遊夜の他十代や文乃達、さらには乙女まで加わり
派手な昼食となった。その際、千世が妙に遊夜の顔を見ては赤面していたのだが
遊夜は『風邪ですか？』と尋ね、千世と文乃に何故か殴られたのであった。

その後も無事に授業を終え夕食を終えた遊夜は、デッキ調整の為に家康・三沢のいるラー・イエロー寮に来ていた。

「どうよ三沢。俺様のデッキは！！」

「……いや、確かに良くできている……色々な意味で。」

三沢は苦笑いをしながら答える。家康のデッキがどんなのかは、また別の機会に。

遊夜が三沢と家康のやり取りを見ていると、不意に遊夜の電子手帳にメール着信の電子音が鳴り響き、遊夜は生徒手帳を開き受信したメールを再生する。

差出人は十代だった。

「《大変だぜ遊夜！！翔の奴が女子に捕まっちまった！！詳しい事は俺も分からないけど、一緒に来てくれ！！女子寮の湖だ！！》」

メールが終わり生徒手帳を仕舞った遊夜は、すぐに行こうとする。

「おいおい、行くのか？」

家康の言葉に『もちろん』と返す遊夜。その答えを聞いた家康はゆっくりと立ち上がる。

「しゃーねぇ、俺も行ってやるよ。」

「俺も行こう。」

家康と同時に、三沢も同行を希望する。三沢の言葉に遊夜は『すまないな』と礼を言う。

「なに、今のメールを聞く限り何かあったみたいだしな。ほおってはおけないさ。」

三沢の言葉にニコッと笑顔で返した遊夜は、家康・三沢と共にイエロー寮を飛び出して行った。

「見えた！！」

遊夜の運転するモーターボートに乗った家康が指差す。三沢と運転する遊夜もそれを確認する。

「よし、一気に飛ばす！！２人とも掴まってて！！」

そう言い遊夜はスピードを上げ、一気に船着場に到着する。そこには、すでに来ていた十代と大吾郎、明日香に文乃・希・ジュンコ・ももえ・叶絵それに千世までもが佐藤・鈴木と共にいた。その女子の後ろに両手を縛られた翔の姿があった。

遊夜は颯爽とボートから降り、十代たちの下に向かう。

「お待たせ。」

「サンキューな遊夜、それに三沢に家康も。」

十代の言葉に笑顔で返す三人。そして遊夜は、視線を女子たちに向ける。

「で？一体何があったんだ？」

遊夜の言葉に『それがぁ……』と力なく返事をする翔だったが、
それを制するように文乃が口を開ける。

「覗きをしたのよ！！こいつ！！」

文乃の言葉に『覗き？翔が？』とキョトンとなる遊夜と十代。と同時に
翔は悲願するような表情で訴える。

「だからボクはしてないってば！！」

そう言う翔だが文乃や千世、それにジュンコとももえは聞く耳持たない。
とここで家康が翔に接近する。

「なぁ翔。お前も男である以上、女の体に興味があるのは仕方ない、だが！！」

いつになく真剣な表情をする家康。翔に説教するのかと期待をする女子群と
何を言うのかと見守る遊夜と十代・大吾郎。
そして、先程の家康のデッキを見た事で嫌な予感を感じる三沢。
様々な考えが交差する中、家康が口を開く。

「美女は二次元に限るんだぞ！！」

家康の言葉に、周りの空気が凍りつく。そんな事お構いなしに、家康は話を続ける。

「翔っ！！ＪＰＧでもなければＰＮＧでもないっ、そんな女子の裸体を覗く！？
バカなことはやめろ！！三次元にも確かに例外はいる、だがこの中に例外など
明日香さんや希ぐらいだ！！他の女子共などなんの価値が――――」
「百万回死ね――――――――――――――――――――――――っ！！！」

家康の二次元オタクトークにキレた文乃のパンチが家康にクリンヒット。さらに
千世のキック、佐藤・鈴木の何処から出したのか分からない武器による攻撃で
家康は湖に沈んだ。

「何なのアイツ。」
「最低ですわね。」

沈んでいった家康に軽蔑の眼差しを向けるジュンコともえ。とその時――――

「家康死ぬなよぉっ！！」

そう言い服を着たまま湖に飛び込む者がいた。遊夜である。
遊夜が飛び込み、湖に水しぶきが飛ぶ。

「お、おい遊夜!?」
「ちょっと遊夜!!?」

十代や文乃を始め、そこにいた者達全員が驚く。まさか服のまま飛び込むとは
思っても見なかったのだ。それは、先程から水中で状況を見ていたこの男も同様だ。

「ななな、なんート!?飛び込んじゃったのーネ!?」

この男、クロノスである。実は翔が女子寮に来たのも、クロノスが十代をハメる為の
罠に翔が誤って掛かったしまったからなのだ。翔が罠に掛かった後も水中で監視していたクロノスは、遊夜がいきなり飛び込んだことに驚きを隠せなかった。

「（ま、まずいのーネ!!ここにいてはバレてしまうかもしれないのーネ!!）」

そう思ったクロノスは、一旦丘に上がり林の中に隠れた。

しばらくして、遊夜が家康を抱えて湖から上がって来ていた。

「ふぅ、家康大丈夫?」
「おぉ、遊夜、お前は最高のマイフレンドだぜ。」

家康の言葉に『そっか、ありがと』と笑顔で返す遊夜。その遊夜の笑顔に
ジュンコともえは赤面して倒れ、文乃と千世は赤面し、明日香は

『やっぱり面白い子だわ、遊夜』とクスッと笑いながら見つめ希と佐藤・鈴木はじーと見つめ、十代と翔・大吾郎・三沢の四人は感心を示した。

「それより遊夜、あなた服どうするの？」

明日香の言葉に『ん？』とキョトンとなる遊夜。
そう、遊夜は服を着たまま湖に飛び込んだのだ。服は当然びしょ濡れである。
するとここで、大吾郎が自分達が乗っていたボートより紙袋を持ってきた。

「遊夜よ、これは俺達がここに来るつい先程、実家から届いたものだ。
よかったら使ってくれ。」

そう言われ遊夜は紙袋の中を確認し、驚いたような表情をする。

「これって……」

遊夜の言葉に『うむ』と頷く大吾郎。遊夜はそれを持って林の中へと入り、
服を脱ぎ始める。

「ちょっと大吾郎、あんた何を渡したの？」

文乃の言葉に『む？』と返す大吾郎。

「うむ、中学時代の最後の文化祭に着た衣装だ。」

大吾郎の言葉に『おい、それって……』と言う家康。それに対し大吾郎は
『うむ、察しの通りだ。』とあっさり返すのであった。

「お待たせ。」

しばらくして林から出てきた遊夜の姿を見て、女子群は固まった。
遊夜の着た服は、和服に袴、さらにその上から白い山形ダンダラ模様の入った
浅葱色の羽織を着用―そう、それは新選組の衣装だった。
さらに遊夜は、普段は伸ばしきってるロングヘアーを
腰辺りで緩く結び、誠の文字の入った額宛を着用している。その姿はまさに
乙女達が愛する美形剣客集団・新選組そのものである。
その容姿に、あまり表情変化を見せない希でさえ顔を赤くしていた。

「へぇ～似合うじゃん遊夜。」
「ほほ～う、やるねぇ遊夜。」

十代と叶絵の素直な感想に『ありがとう』と微笑む遊夜。

「だけど、その服どうするの？」

明日香の言葉に『あ～』と悩む遊夜だったが、ここで名乗りを上げたのが千世だ。

「あたしに任せなさい！！佐藤・鈴木、この服脱水してきて！！」
「「はい、お嬢様。」」

千世の命令に、二人のメイドは遊夜の服を持っていった。

「ありがと梅ノ森さん。」

遊夜の笑顔と共に送られるお礼の言葉に顔を赤くする千世。

「い、いいわよ別に。それより、今度はあんたが借りを作ったんだからね!!
借りは返しなさいよ!!」

千世の言葉に『うん、近いうちにね』と笑顔で答える遊夜と、それを不機嫌そうな表情でみる文乃の姿があった。

「さてと、」

遊夜は先程から忘れられている翔に接近する。

「なぁ翔。お前は覗きはしてないんだな?」

遊夜の質問にコクリと頷く翔。

「だったら、なぜ女子寮にいたんだ?」

遊夜の言葉に『これっす』と言い、ポケットからくしゃくしゃになった紙を取り出す翔。遊夜達男子は、その紙に目を通す。

「……何だこれ?手紙?」

「いや、こりゃラブレターじゃねぇか?」

家康の言葉に『ラブレター!?』と驚く男子達。

「ラブレターって、何だ?」

……訂正、十代を除いては。

「ア、アニキ、ラブレター知らないんすか?」

「鈍感な遊夜ですら知っているのに……」

十代の言葉に唖然となる一同だったが、遊夜は『う~む』と考え事をしていた。

「この手紙、女の子の字にしては汚すぎるし、嘘の為に翔が書いたにしても
癖字が全く見当たらないなぁ。」

「な、何が言いたいのよ。」

遊夜の言葉に、赤面しながら聞く文乃。

「たぶん、翔がこの手紙によってここに来たのは間違いないと思うよ。
ただ、問題は誰が何のために書いたのかだけど。」

「んなもん簡単じゃん。」

遊夜の疑問に答えたのは、以外にも家康だった。

「どういうことだ?」

「大方、オシリス・レッドをからかうつもりで適当にやったんじゃねぇの?

そう言う奴、ブルーとかに多そうだし。」

家康の言葉に、一同はなんとなく納得する。

「だったら翔を返せよ!!」

「ダメよ!!仮にそうだとしても、覗いたことは事実なんだから!!」

「だから覗いてないってば!!」

十代達が言い合いをする中、明日香が前に出る。

「ねぇ十代、それに遊夜。どちっか私と決闘しない?もし勝ったら今日の事は黙っててあげるわ。」

明日香の提案に笑顔になる十代と遊夜。

「よし!だったら俺が!!」

「ずるいぞ十代!俺がやる!!」

「何だよ!!万丈目の時は遊夜だったからいいじゃん!!」

「それはそれ!!これはこれだ!!」

「二人とも、ボクの退学がかかってるの忘れてない?」

どっちが決闘するかで言い争う遊夜と十代に、涙目になる翔。とそこに、ずっと

沈黙をしていた希が前に出て、遊夜の服を掴む。

「?どうかしたか?」

「……したい……」

「?」

「遊夜と、決闘したい……」

無口な希の希望にキョトンとなる遊夜だったが、すぐに笑顔となる。

「ああ、俺は構わな――」

「ちょっと待ったぁぁ――――――――――っ！！」

希と遊夜の決闘が決定しようとした瞬間、千世の待ったが掛かる。

「遊夜、あんた借りを返すって言ったわよね！？」

千世の言葉にコクリと頷く遊夜。

「だったらあたしと決闘して勝ってみなさい！！勝ったら借りは無しにしてあげるわ！！」

千世の申し出に『は、はぁ』と返す遊夜。だが、ここでさらに文乃が割って入る。

「ちょっと待ちなさいよ！どうしてあんたが遊夜と決闘するの！？あ、あたしがするわよ。」

文乃の申し出に『え？』とキョトンとなる遊夜。が、当然のように千世が口を挟む。

「ちょっと！！何であんたまで遊夜と決闘したがるのよ！！」

「うっさい！！あたしだって遊夜なんかとやるのは嫌よ！！死ぬほど嫌だけど仕方ないのよ！！」

何が仕方ないのか理解できない遊夜と十代・大吾郎は頭上に？マークを浮かべ

ジュンコとももえは『またか（ですわ）』と答え、家康と叶絵はあ
ははは と笑い
三沢は何処からツッコむべきか悩んでいた。とここで動いたのが明
日香だった。

「はい、二人ともそこまで。」

明日香の仲裁に『な、なによ』と不満げに睨んでくる文乃と千世。

「そんなに決闘がしたいなら、ジャンケンで決めなさい。
文句なしの一本勝負で。いいわね？」

最後の『いいわね？』が妙に怖かった2人は渋々納得し腕を構える。

「行くわよ！！」
「来なさい！！」

「「最初はグー！！ジャンケン――――――――ポン！！」」

二人は同時に腕を下ろした。結果は――――――――

文乃：チョキ
千世：同じくチョキ

そして希：グー

「はーいっ！！勝者、希ちゃーん！！」
「にゃあ。」

ジャンケンに勝った希の手を高らかに上げる叶絵。そして、敗北したことに
顔を赤くし悔しそうな表情をする文乃と千世。

「し、しまった……」
「希がいたの忘れてた……」

がっくりとする2人を無視し、希は決闘盤を構える。
「……決闘……」
「それじゃあ、私が十代と――」
「ちょっと待った。」

決闘しようとする明日香達を止める遊夜。

「2人それぞれやるなら、いっその事“タッグフォースルール”でやらないか？」

遊夜の言葉に『タッグフォースルール！？』と返す面々。
“タッグフォースルール”とは、ペア同士で決闘する決闘方法であり
1つの場とLPをペアで共有する事が最大の特徴であり、
ペアとの結束が大事な決闘である。

「へぇ～、面白そうじゃん。俺はいいぜ。」
「……わたしも構わない。」
「でも、あなた達“タッグフォースルール”やった事あるの？」

「一回も無いぜ。」
「わたしも」
「俺は昔一回だけあるけど。」

明日香の疑問にあっさりと返す三人。その回答に『ふぅ』とため息をついた明日香は
言うだけ無駄と判断し、決闘盤を構える。

「分かったわ、こっちに来て。」

女子寮に隣接する湖の上にボートに乗った遊夜と十代、明日香と希、その他面々がいた。
ちなみに遊夜は新選組の衣装を着たままだった。

「なんだか、おもしろーイことになってきましたーネ」

その光景を湖に浸かりながらクロノスも見ている。

「行くわよ！！」
「いつでもいいぜ！！」
「…がんばる」
「俺を楽しませてくれよ！！」
「「「「決闘っ！！」」」」

遊夜＆十代：ＬＰ／４０００
明日香＆希：ＬＰ／４０００

「アニキ～遊夜く～ん、がんばってくれっす～。」

決闘する四人から離れたボートから、翔が応援する。

「それにしても、まさか“タッグフォースルール”でやるとはな。
だが、
十代や希くんのタッグでの能力は未知数だ。家康、遊夜のタッグでの実力は？」

「……昔一回だけやってたな。まぁパートナーが遊夜の奴と気の合う奴だったから
息ぴったしだったな。」

「うむ、ホークアイとは仲が良かったしな。」

家康と大吾郎の言葉に『そうか』と返す三沢。その一方で、ジュンコとももえは
カメラを構えていた。

「うんうん、やっぱ遊夜ってばかっこいい～。」

「素敵な殿方ですわ～。文乃さんが好きになられるのも無理ありませんわ～。」

「ち・が・う・わ・よ！！何であたしがあんな奴を……」

即座に否定する文乃。その隣で千世は『くぬぬぬ～』と未だに悔しそうな
表情をしていた。

「まず、俺のターンだ！ドロー！」

遊夜はデッキからカードを一枚引き手札に加え、次の一手を即決める。

「『蒼雷郷の剣客』を攻撃表示で召喚！！」

蒼雷郷の剣客　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に蒼い和服に身を包んだ剣士が現れる。

「さらにカードを1枚伏せ、エンド！！」

「行くわよ！私のターン！」

遊夜のターンエンドを確認した明日香がカードを引く。

「『エトワール・サイバー』を攻撃表示で召喚！！」

エトワール・サイバー　☆４　地　戦士族　ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１６００

バレリーナのような姿をした女戦士が現れる。

「さらに、リバースカードを1枚伏せ、ターンエンド！！」

「よっしゃ行くぜ！！俺のターン！！」

十代は楽しみにしてたのかのようにカードを引く。

「（そういえば、十代の決闘をちゃんと見るのはこれが初めてだっけ。
どんなデッキだろ。）」

遊夜はそんな事を考えながら、十代に視線を送った。

「行くぜ！！俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　スパークマン』を攻撃表示で召喚！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　スパークマン　☆４　光　戦士族　ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１４００

体に電撃を走らせるヒーローモンスターが現れた。

「行けぇ！！『スパークマン』で『エトワール・サイバー』を攻撃！！
“スパークフラッシュ”！！」

スパークマンの手から放たれた電撃がエトワール・サイバーに襲い掛かる。
だが、明日香は落ち着いてスイッチを押す。

「リバースカードオープン！『ドゥーブルパッセ』！！」

エトワール・サイバーに向かっていた電撃は軌道を変え、明日香に

襲い掛かった。

明日香&希：ＬＰ／４０００⇒２４００

「な、なんだぁ！？」

突然の出来事に驚く十代。

「『ドゥーブルパッセ』は相手の攻撃をプレイヤーへのダイレクト・アタックに切り替える。
そして攻撃対象となったモンスターは相手プレイヤーにダイレクト・アタックができる！！さらに『エトワール・サイバー』の特殊効果、ダイレクト・アタックの時、攻撃力が５００アップ！」

エトワール・サイバー　ＡＴＫ／１２００⇒ＡＴＫ１７００

「行きなさい！！“アラベスク・アタック”！！」

エトワール・サイバーのキックが十代に決まる。

遊夜&十代：ＬＰ／４０００⇒２３００

「ぐっ！！くそっ！！自分の身を削ってまで俺にダメージを与えに

来る
――なんて攻撃的な決闘スタイルなんだ。悪い遊夜。」
「ドンマイ、気にするな。」
遊夜はニコッと微笑む。
「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！！」

「へぇ～明日香さんやるな。」
家康の言葉に『当然よ』とジュンコが誇らしげに胸を張る。
「明日香さんは“オベリスク・ブルーの女王”と異名をとる方よ。オシリス・レッド如きに負けるはず無いわ。」
「だが十代はあのクロノス教諭を敗っている。」
ジュンコの言葉を否定するように三沢が口を開いた。
「ましてやこの決闘はタッグデュエル。パートナーとの結束によってどう動くか分からない。そして何より――」
三沢はチラッと希に視線を送る。
「霧谷くんの実力は未知数。次の彼女のターン、どう動くかが勝負だろう。」
三沢の言葉に、全員視線を希に向けた。

「……私のターン、ドロー。」

希は淡々とデッキからカードを引き、決闘を行なう。

「『スピーディー・キャット』を攻撃表示で召喚。」

スピーディー・キャット　☆３　風　獣族　ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／０

全身が白い猫が現れた。

「『スピーディー・キャット』は、相手にダイレクト・アタックできる。
行って、“スピーディー・クロー”。」

スピーディー・キャットの爪が十代を襲い掛かる。

「へっリバースカードオープン！！『ヒーローバリア』！！」

十代達の前に、青白く薄い膜のような壁が現れる。

「俺の場に『Ｅ・ＨＥＲＯ』がいる時、相手の攻撃を無効にするぜ！！」

「……カードを2枚伏せ、ターンエンド。」

「俺のターン！！」

カードを引いた遊夜の口元に笑みを浮かぶ。

「行くぜ！！チューナーモンスター『蒼雷郷の蝮』を召喚！！」

蒼雷郷の蝮　☆３　光　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／０

蒼白く光る蛇が現れる。

「チューナーか！！」

「来るわ！！」

「……！！」

チューナーの登場に息を呑む三人。

「行くぜ！☆４『蒼雷郷の剣客』に☆３『蒼雷郷の蝮』をチューニング！」

蝮が緑色のリングとなり、剣客もその身を４つの星に変える。

そして一直線に４つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天を斬り裂く刃となる。光と共に轟け！！シンクロ召喚！！

蒼雷の勇士、『蒼雷郷の猛将―カツマ』！！」

蒼雷郷の猛将―カツマ　☆７　光　雷族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２２００

光が弾けその中から、蒼い甲冑に身を包み黒い馬に乗った武将が姿を現す。

「さらに、『蒼雷郷の蝮』の効果発動!!このカードをシンクロ召喚の素材にされた時
デッキからカードを1枚ドローする!!バトル!!
『カツマ』で『エトワール・サイバー』を攻撃!!“蒼雷(そうらい)　斬光閃(ざんこうせん)”!!」

槍をグルグル回したカツマは、蒼白く光る槍をエトワール・サイバーに向けて突き出す。

「…罠発動(トラップはつどう)、『和睦(わぼく)の使者(ししゃ)』。
このターン、私のモンスターは破壊されず戦闘ダメージもない。」
「あっちゃ、やるなぁ。俺は『スパークマン』を守備表示に変更しカードを2枚伏せ、ターンエンド。」
「あたしのターン!!」

明日香はカードを引いた後、希が伏せたカードに視線を向ける。

「（希、あの子が伏せたカードは一体……）」

そう思い明日香は決闘盤のボタンを押し、伏せカードを確認する。

「（『スケープ・ゴート』。いざとなれば壁にもできる“トークン出現カード”。）」

それを確認した明日香は、手札のカードに手を伸ばす。

「あたしは手札から、魔法カード『融合』を発動!!
手札の『ブレード・スケーター』と場の『エトワール・サイバー』
を融合――――
いでよ!!『サイバー・ブレイダー』!!」

サイバー・ブレイダー　☆7　地　戦士族　ＡＴＫ／２１００　Ｄ
ＥＦ／８００

アイス・スケーターのような女戦士が現れた。

「融合か、けど俺の『カツマ』の攻撃力には届かないぜ。」
「そうかしら?」

遊夜の言葉に不敵に笑う明日香。
その反応に遊夜は『サイバー・ブレイダー』を見て目を疑った。

サイバー・ブレイダー　ＡＴＫ／２１００⇒ＡＴＫ４２００

「なにっ!?」
「なんで『サイバー・ブレイダー』の攻撃力が上がってんだ!?」

驚く遊夜と十代に、明日香は冷ややかに答える。

「『サイバー・ブレイダー』の特殊効果、“パ・ド・トロワ”。
相手の場のモンスターが2体のみの場合、このカードの攻撃力は2
倍になるのよ。」

明日香の言葉に『なにっ!?』と驚く遊夜と十代だったが、そんな暇は無かった。

「行くわよ!!『サイバー・ブレイダー』で、『猛将―カツマ』を攻撃!!
“グリッサード・スラッシュ”!!」

エトワール・サイバーはその身を回転させ、カツマにブレードのついた足蹴りを放つ。
その攻撃に、カツマは押し潰されてしまった。

遊夜＆十代：ＬＰ／２３００⇒６００

「くそっ!!だがまだだ!!罠発動(トラップはつどう)!!『召雷札(しょうらいだ)』!!
俺の場の雷族モンスターを戦闘で破壊した相手モンスターを破壊する!!」

電撃を浴びた札がサイバー・ブレイダーを襲い、電撃によってサイバー・ブレイダーは消滅した。

「くっ!!」
「さらに、破壊された雷族モンスターを復活させる!!蘇れ『カツマ』!!」

蒼雷郷(そうらいきょう)の猛将(もうしょう)―カツマ　☆７　光　雷族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２２００

遊夜の場にカツマが蘇った。

「くっ！やるわね。ならこっちは、手札から装備魔法『早すぎた埋葬』を発動！！
８００ＰのＬＰをコストに、墓地のモンスターを復活させこのカードを装備する！！」

明日香＆希：ＬＰ／２４００⇒１６００

「舞い戻れ！！『サイバー・ブレイダー』！！」

サイバー・ブレイダー　☆７　地　戦士族　ＡＴＫ／２１００⇒ＡＴＫ４２００　ＤＥＦ／８００

明日香の場に、再びサイバー・ブレイダーが現れた。

「あっちゃ～、先の状況と同じじゃん。」
「いや同じじゃないぜ。」

十代の言葉に遊夜は明日香の場を見ながら微笑む。

「『早すぎた埋葬』は、復活させたモンスターの装備カードとなるカード。
あのカードを破壊すれば、装備モンスターも破壊される！先程よりは『サイバー・ブレイダー』を破壊しやすくなったぜ。」

遊夜の説明に『なるほど』と納得する十代。
だが、それに対し明日香は『あまいわ』と表情を崩さない。

「手札から速攻魔法『非常食（ひじょうしょく）』を発動！！場の魔法・罠を1枚墓地に送ることで
送ったカード1枚につき、私はＬＰを１０００Ｐ回復する！
墓地に送るのは『早すぎた埋葬』！！」

早すぎた埋葬が非常食の効果により光と粒となり消えていった。

明日香＆希：ＬＰ／１６００⇒２６００

「なるほど、“破壊”じゃなくて“墓地に送る”効果なら
『早すぎた埋葬』の破壊効果を無効にできる。」
「しかも『非常食』の効果でＬＰ回復かよ～。」
「残念だけど、あたしはそんなに甘くは無いわ。ターンエンド！！」

「さすがは明日香様。」
「もう勝ちは決まったようなものね。」

明日香達の優勢にジュンコとももえは微笑む。

「いや、まだ分からないよ。」

されに対し三沢は、まだ勝負を捨ててない遊夜と十代の目の輝きを
見逃さなかった。

「ま、たしかに遊夜の奴むかしっから決闘で諦めた事なかったもんなぁ。」
「うむ、同じ決闘者として尊敬できる。」

三沢に続くように家康と大吾郎も口々に言う。

「う〜む、にしても……」

そう呟き、千世は決闘する遊夜をじっと見る。
お忘れかもしれないが、遊夜の制服はまだ乾いてないため
まだ新選組の衣装のままで決闘している。その姿が何とも絵になるのだ。

「佐藤・鈴木、ちゃんとカメラに取ってるわね？」
「はいお嬢様。」
「抜かりはありません。」

千世が視線を横に向けると、２人のメイドが遊夜の決闘してる姿をカメラに収めていた。

「ちょっと、何でカメラに映してるのよ。」

それを見た文乃が千世を睨みつける。

「決まってるでしょ。この私、梅ノ森　千世が遊夜のかっこいい所をカメラに収め、この記録を永遠にあたしの物にするためよ。」
「「なんですってぇー！！？」」

千世の言葉に、ジュンコともえは声を荒げる。

「ずるいわよ梅ノ森！！」
「そうですわよ！！わたくし達にも遊夜さんの新選組姿の映像をくださいまし！！」

「何であんた達なんかに！！」

ジュンコ・ももえ・千世の３人がいがみ合う中、文乃も不服そうな表情をしていた。
それに気づいた叶絵が、『ニシシ』と笑いながら文乃に接近する。

「文乃も大変だねぇ～。想い人が大勢の女子にモテモテでぇ～。」
「な！？何言ってんのよ叶絵！！」

文乃が大声で怒鳴る中、『アニキ、遊夜君、頼むから勝ってくれっす～。』と
半泣き状態の翔がいたそうな。

「俺のターン！！」

十代は手札を確認し、自分がやるべき事を考える。
「（『サイバー・ブレイダー』は、相手の場のモンスターの数で効果が変化する。
だったら、数はそのままで破壊してやるぜ！！）
俺は手札から、魔法カード『融合』を発動！！」
「（来たか！！）」
「（十代のＨＥＲＯデッキの真骨頂……）」

十代の融合発動に目を配る面々。

「俺は手札の『クレイマン』と場の『スパークマン』を融合！！
来い！！『Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダー・ジャイアント』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダー・ジャイアント　☆６　光　戦士族　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１５００

電撃を帯びた、巨大な体格のＨＥＲＯが現れた。

「それが何。サイバー・ブレイダーの攻撃力４２００には到底及ばないじゃない。」

そう明日香はいぶかしんだ。そう、攻撃力ではどう考えてもサンダー・ジャイアントはサイバー・ブレイダーの足元にも及ばない。だが、十代の口元は笑っていた。

「あぁ、よぉ～く分かってるぜ。『サンダー・ジャイアント』のモンスター効果。１ターンに１度、手札１枚をコストに元々の攻撃力がこのカードの攻撃力よりも低いモンスター１体を破壊する。」

十代の言葉に明日香は『はっ』となった。

「『サイバー・ブレイダー』の元々の攻撃力は２１００。『サンダー・ジャイアント』よりも低い……」

明日香の言葉にニヤッと微笑む十代。

「そういう事さ！！俺は手札を１枚捨て、『サンダー・ジャイアント』の効果発動！！

『サイバー・ブレイダー』を破壊する！！“ヴェイパー・スパーク”！！」

サンダー・ジャイアントの片手から放たれた電撃が、サイバー・ブレイダーを襲い
サイバー・ブレイダーは消滅した。

「くっ！そんな！！」

「行くぜ！！『猛将―カツマ』で『スピーディー・キャット』を攻撃！！
“蒼雷（そうらい）　斬光閃（ざんこうせん）”！！」

槍をグルグル回したカツマは、
蒼白く光る槍をスピーディー・キャットに向けて突き出す。

「『スピーディー・キャット』の効果発動！！攻撃対象となった時、このカードは守備表示になる！！」

スピーディー・キャットは場に伏せる様な防御体制をとるが、
カツマの槍が容赦なく貫き、スピーディー・キャットは消滅した。

「さらに『猛将―カツマ』の効果だ！！
破壊したモンスターの☆の数×２００Ｐのダメージを与える！！
“蒼雷（そうらい）　流星群（りゅうせいぐん）”！！」

カツマの頭上に蒼白く光るプラズマが発生し、
プラズマは三つの雷撃となり明日香に襲い掛かる。

明日香＆希：ＬＰ／２６００⇒２０００

「くっ！！」

「これで最後だ！！『サンダー・ジャイアント』でプレイヤーへダイレクト・アタック！！“ボルティック・サンダー”！！！」

サンダー・ジャイアントの両手から放たれた電撃が、明日香に襲い掛かる。

「まだよ！！リバースカードオープン！！『スケープ・ゴート』！！私達の場に『羊トークン』を４体、守備表示で特殊召喚する！！」

羊トークン　☆１　地　獣族　ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／０　×４

明日香達の場に４体のカラフルな子羊達が現れた。

「へへ、やるな明日香。だったら羊トークンを攻撃だ！！」

サンダー・ジャイアントの両手から放たれた電撃が、桃色の子羊を焼き尽くした。

「俺はさらに、リバースカードを２枚伏せターンエンドだ！！」

「やった！！ＬＰでは劣ってるけど逆転してるっす！！」

遊夜と十代の優勢にガッツを組む翔。その隣で、ジュンコとももえは信じられないような表情で見ていた。

「そんな……」
「明日香様のフェイバリット・カードが……」
自分達が尊敬する明日香のフェイバリット・カードが、
オシリス・レッドに破られたのだから、動揺するのも無理は無い。
「だが、もし次のターンで希君が何か逆転のカードを出すことに成功したら
どうなるか分からないぞ、この決闘……ん？」
不意に三沢は、自分に『じとー』と視線を向ける翔に気づく。
「な、なんだ？」
「……三沢君、どっちの応援してるんすか？」
翔の言葉に『え？』とキョトンとなる三沢。
「俺は、あくまで決闘者としての分析を明確に言っているだけだ！」
「そんなぁ～、ボクの心配してくれないんすか～？」
三沢の言葉に、再び涙目になる翔であった。

「ドロー。」

希は、不利な状況にも関わらず淡々とカードを引くが、引いたカードを見て
今まで無表情だった希の顔がほんの少し驚きに変わった……ように見えた。

「（…来てくれたんだ……）」
「《ニャァ》」
「「！！？」」

不意に猫の声が聞こえた遊夜と十代は目を丸くする。

「（……おい、狼（ウォルフ））」
「《あぁ間違いないぞ主よ。精霊だ。……隣にもな。》」

狼の言葉に『え？』と驚く遊夜は、視線を隣―十代に向ける。

「（ハネクリボー、やっぱり精霊か？）」
「《クリクリ～》」

ハネクリボーの言葉に頷く十代。と同時に、視線を遊夜に向ける。

「（へへ、やっぱりその狼も精霊だったんだな。）」
「（十代は気づいていたのか、精霊の存在に。）」
「にゃぁ、いく…。」

希の声に現在決闘中と言う事を思い出した遊夜と十代は、視線を正面に戻す。

「あたしは手札から『レスキューキャット』を召喚。」

レスキューキャット　☆４　地　獣族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／１００

希達の場に安全ヘルメットを被った白い猫が現れた。

「《ニャァ》」

「頼むね。『レスキューキャット』の効果発動、このカードを墓地に送ってデッキからレベル3以下の獣族モンスター2体をフィールド上に特殊召喚する。1体目は『ロックキャット』」

ロックキャット　☆3　地　獣族　ＡＴＫ／1200　ＤＥＦ／1000

希達の場に首に黄色い錠の首輪をつけた白い猫が現れた。

「そしてもう1体。」

希は1枚のカードを手に取り、意を決したかのように場に出したのは――

「チューナーモンスター『エクシード・キャット』を召喚！」

エクシード・キャット　☆3　光　獣族　ＡＴＫ／500　ＤＥＦ／1000

希達の場に天使の翼を生やした白い猫が現れた。

「何っ!!?」
「チューナー!?」
「モンスター!?」

希の出したチューナーモンスターに驚きを隠せない面々。
特に遊夜は完全に驚いていた。

「ど、どうしてチューナーモンスターを!?」

だが希は遊夜の問いに答えず淡々と決闘を進めていく。

「☆3『ロックキャット』と☆1『羊トークン』2体に
☆3『エクシード・キャット』をチューニング!」

エクシード・キャットが緑色のリングとなり、ロックキャットと
赤と黄色の羊トークン2体もその身を5つの星に変える。
そして一直線に5つに並んだ星は光に包まれる。

「野性に光交わりしとき、天へと昇る翼となる。光輝け!シンクロ
召喚!!
天界よりの獣王、『セラフィム・ライオネル』!!」

セラフィム・ライオネル　☆8　光　獣族　ＡＴＫ／2800　Ｄ
ＥＦ／2500

光が弾けその中から、天使の翼を持った白銀の獅子が現れた。

「シンクロ召喚まで……」

「すげぇ……」

希が行なったシンクロ召喚に、驚きを隠せない面々。

「……『エクシード・キャット』の効果発動。
このカードをシンクロモンスターのシンクロ素材にした時、
シンクロ召喚したモンスターの☆（レベル）×２００Ｐ自分のＬＰを回復する。
『セラフィム・ライオネル』の☆は８。よって１６００Ｐ回復する。
」

明日香&希：ＬＰ／２０００⇒３６００

「さらに『セラフィム・ライオネル』の効果発動。
自分の場の獣族、及び獣戦士族モンスターを１体をコストに、
相手の場のカード１枚を破壊できる。
残った『羊トークン』を生け贄にする。“セラフィム・バスター”
！」

青い羊トークン消滅すると同時に、セラフィム・ライオネルの額にある
宝珠より放たれた光が、サンダー・ジャイアントを襲い
サンダー・ジャイアントは消滅した。

「ぐっ！そんな！！」

「いやまだだ！！『カツマ』を倒されても、俺等のＬＰはまだ残る

！！

次の俺のターンが勝負だ！！」

だが、遊夜の言葉に対して希は『次は無い』と言い放つ。

「『セラフィム・ライオネル』のもう一つの効果発動。自分の墓地から
獣族・獣戦士族モンスターを1体を除外する事で、次のあたし達のターンの
スタンバイフェイズまで、除外したモンスターの攻撃力と守備力を吸収する。
“ビースト・スピリッツ”」

希が墓地のロックキャットを除外すると同時に、ロックキャットの残像を
セラフィム・ライオネルが噛み砕いた。

セラフィム・ライオネル　ＡＴＫ／２８００⇒ＡＴＫ４０００　ＤＥＦ／２５００⇒ＤＥＦ／３５００

「何！？」
「ぐっ！！？」
「バトル、『セラフィム・ライオネル』で『蒼雷郷の猛将―カツマ』に攻撃。
“ライオネル・ジャッチメント”！」

セラフィム・ライオネルはその白い翼を広げ、光を集めだす。そして光が集まり

翼が輝きだした瞬間、ライオネルの咆哮と共に口から閃光が放たれた。
その閃光は、真っ直ぐカツマへと向けられている。

「これで終わり！」
「いやまだだぜ！！リバースカードオープン！！『ガード・ブロック』！！
俺達への戦闘ダメージを０にし、デッキからカードを１枚ドローする！！」

ライオネルの閃光により、カツマは消滅したが光は見えない壁により十代達にまでは届かなかった。

「さらに、カツマが破壊されたことでもう１枚発動だ！！
罠（トラップ）カード、『ヒーロー・シグナル』！！俺達の場のモンスターが戦闘で破壊された時
デッキから☆４以下の『Ｅ・ＨＥＲＯ』を１体特殊召喚できる！！
来い！！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ボルテック』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ボルテック　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１０００
ＤＥＦ／１５００

黄色い電撃を放つ紫色のＨＥＲＯが現れる。

「……にゃぁ、カードを１枚伏せ、ターンエンド。」

「ふぅ、悪いな遊夜。
本当なら『ガード・ブロック』の効果でドローするべきなのはお前

だったのに。」

十代の謝罪に『気にすんな』と優しく返す遊夜。

「（それにしても、希。君は何者だ？シンクロもチューナーも現在は極限られた者しか持っていないはず。一体何処で……）」

遊夜は先程からその事ばかり考えていたが、答えは見つからない。

「（ま、いいや。今はこの状況を打開しなくちゃ。）俺のターン！」

遊夜はデッキの上に指を置き目を閉じた。

「（カード達よ、俺はお前達を信じてる。俺の思いに答えてくれっ）ドロー！！」

ドローしたカードを見て笑みを浮かべる遊夜。

「（来たか、狼（ウォルフ））」

「《主よ、あの者を倒すために、ＨＥＲＯ達の力を借りましょう。》」

「あぁ。俺は『蒼雷郷（そうらいきょう）の銀狼（ぎんろう）』を召喚！！」

蒼雷郷の銀狼　☆３　風　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１００

「！！そのカード……」

クロノス戦、万丈目戦で必ず遊夜に幸福をもたらした銀狼の出現に息を呑む面々。

「希、シンクロモンスターを使うなら知ってると思うけど、シンクロするには
時々条件が増える事がある。チューナーが制限されてたり、チューナー以外の
モンスターの種族が決まっていたり。俺の『蒼雷郷』やお前のそいつが
そうであるようにな。」

遊夜はいきなりシンクロが何たるかを語りだす。

「俺の『蒼雷郷』は、チューナーは雷族、それに加えて
雷族を含むチューナー以外のモンスターが少なくとも1体は必要だ。
だが、俺の場にはそれが揃ってる。」

「！！」

遊夜の言葉に、希は初めて気づいた。遊夜のモンスターは銀狼1体だが、
十代のボルテックと言う名の雷族のチューナー以外のモンスターがいたということに。

「行くぜ！！☆4『ボルテック』に☆3『蒼雷郷の銀狼』をチューニング！」

銀狼が緑色のリングとなり、ボルテックもその身を4つの星に変える。
そして一直線に4つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天を斬り裂く剣となる。閃光と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の戦士、『蒼雷郷の荒武者―ジンベエ』！！」

蒼雷郷の荒武者―ジンベエ　☆７　光　雷族　ＡＴＫ／２４００
ＤＥＦ／２２００

光が弾けその中から、蒼い甲冑に身を包み刀を二本持つ武者が姿を現す。

「『蒼雷郷の銀狼』の効果により、攻撃力が１０００Ｐアップ！！」

蒼雷郷の荒武者―ジンベエ　ＡＴＫ／２４００⇒ＡＴＫ３４００

ジンベエの攻撃力が上がったが、希は相変わらず無表情だった。

「……でも『セラフィム・ライオネル』の方がまだ上。」

だが希の言葉に『それはどうかな？』と微笑む遊夜。

「『ジンベエ』の特殊効果！！シンクロ召喚に成功した時、相手の場のモンスターを１体破壊できる！！“迅雷の太刀”！！」

ジンベエの刀より放たれた蒼い稲妻が、ライオネルを襲う。

「無駄。罠発動、『ミラージュ・ボディ』。
このカードは発動後装備カードとなり自分の場のモンスター１体に

装備する。」

ミラージュ・ボディより放たれた虹色の光がライオネルを包み込むと同時に蒼い稲妻が弾かれる。

「このカードを装備したモンスターは、カード効果では破壊され無い。
それに戦闘で破壊される場合は、代わりにこのカードを破壊できる。
死角なし。」

希の淡々とした説明に『そんなぁ～』と涙目になる翔。

「まずいなこりゃ。翔、お前荷造りの準備しとけ。」
「ふぇぇ～そんなぁ～。」

家康の言葉にさらに涙目になる翔に対し、十代が声を上げる。

「心配ねえよ翔。俺達は勝てる。な、遊夜。」
「あぁ、無論だ。」

十代と遊夜のセリフに驚く面々。不利は圧倒的なのに、勝つ気でいるのだこの2人は。

「行くぞ、バトルだ!!『ジンベエ』で『セラフィム・ライオネル』を攻撃!!」

ジンベエは二本の刀を構え、ライオネルに突進して行く。

「!?本気!?」
「あぁ、本気だぜ希!!罠発動!!『ヒーロー・ソウルキャリバー』!!
墓地のＨＥＲＯ1体を除外することで、除外したＨＥＲＯの攻撃力をエンドフェイズまで
自分の場の戦士族モンスターに加える!!」
「!?だけど遊夜、あなたのモンスターは雷族のはずよ!!」
明日香の疑問に対し、遊夜はニカッと笑ってみせる。
「残念だが『蒼雷郷』達は皆、雷族ともう一つの種族を持っているのさ!!
そして『ジンベエ』は、戦士族を持っている!!」
そう言い遊夜は、十代に視線を送る。それに気づいた十代はコクリと頷く。
「俺は十代の墓地より、『サンダー・ジャイアント』を除外!!
除外した『サンダー・ジャイアント』の攻撃力、２４００Ｐを『ジンベエ』に与える!!」
蒼雷郷の荒武者―ジンベエ　ＡＴＫ／３４００⇒ＡＴＫ５８００
「!!」
「何ですって!?」
「いけぇ『ジンベエ』!!“蒼雷刃剣・一の太刀”!!」
ジンベエの刀が、ライオネルに襲い掛かる。

「『ミラージュ・ボディ』の効果発動！
このカードを墓地に送ることで戦闘での破壊を回避。」
「だがダメージは無効にならない！！」

ジンベエの刀がライオネルに襲う。
ライオネルは何とか耐えるが、その余波による稲妻が希達を襲う。

明日香&希：ＬＰ／３６００⇒１８００

「くっ！！」
「っ！！でも、ライオネルは破壊されない。次のターンが勝負。」
「いいや、次は無いよ。」

遊夜の言葉に『どういうこと！？』と問いかける明日香。

「『ジンベエ』のもう一つの効果！！こいつは1度のバトルフェイズで
2回攻撃することができる！！」
「「なっ！！？」」
「バトル！！」

遊夜の掛け声と共に、再び刀を構えるジンベエ。

「いけぇ！！“蒼雷刃剣（そうらいじんけん）・二（に）の太刀（たち）”！！」

ジンベエの刀がライオネルに襲う。ライオネルは耐える事ができず
消滅する。
その余波の稲妻が、再び希達を襲った。

「きゃぁぁぁぁぁぁっ！！」
「――――――っ！！」

明日香＆希：ＬＰ／１８００⇒０

「明日香様！！」
「希！！」
「大丈夫ですか！？」

その光景を見た女子達はボートを漕ぎ、明日香と希の乗るボートの横に着けた。
男子達もボートを漕ぎ、遊夜と十代の乗るボートの横に着けた。

「やったぁアニキ！！遊夜くん！！」
「へへ、ガッチャ！！楽しい決闘だったぜ、明日香、希。」
「くす、楽しめたぜ、２人とも。」

そう言い遊夜と十代は、笑顔で答えるのであった。

その後、服が乾き着替えを済ました遊夜は十代達と共に、ボートの上に立っていた。

「約束通り翔は返してもらうぜ。」
「どうぞ、約束は守るわ。」
「ふん、だからあたしがやるって言ったのよ。」

梅ノ森の言葉に『無理に決まってんでしょ』と文乃が言い、またしても
口ゲンカを始める二人。とそこに、遊夜は希の方を向き口を開く。

「なぁ希、お前どこであのカードを手に入れたんだ?」

遊夜の質問に、希は沈黙する。
この質問は遊夜だけでなく全員が知りたがってた事だった。

「……今話したくないならそれでもいい。でも、いつか話せる時が来たら
話してほしい。……チューナーとシンクロは、俺の親父が考案したモノだから。」
「!!」

そう言い遊夜は、ボートの運転席に座りエンジンをかける。

「それじゃ!」

そう言い、遊夜・家康・三沢を乗せたボートは去っていった。

「んじゃ、俺達も帰るか。」

そう言い十代と大吾郎がオールを漕ぎ出す。
その後、女子達も寮へと戻っていった。そしてこの男も――――――

「ぐぬぬぬぬ、今度こそあのドロップボーイズを、ぎゃふんートー――――
でも、今日は疲れたーノ。早く帰るーノ。ブクブクブク」

そう言いクロノスは湖へと潜っていった。

「（それにしてーモ、セニョール遊夜以外にシンクロを使うとーハ、セニョール霧谷、何者なノーネ。）」

とそんな事を考えながら……。

後日、千世が映したこの決闘の映像がオベリスクブルー女子の間で流され
好評を博したらしい。
映像のタイトルは『決闘界の新選組』。この映像を機に、
『白鋼　遊夜ファンクラブ』が立ち上がり、オベリスクブルー女子生徒を中心に
大きく会員数を増やし数あるファンクラブの中で一大勢力になった。
さらに、ファンクラブの会員から遊夜は『遊様』と呼ばれることになるが、
これらは全くの蛇足である。

『～第二章～　迷い猫、シンクロ　《終》』

～第二章～　迷い猫、シンクロ（後書き）

どうも、黒鋼です。
本編だと第３話の“エトワール・サイバー”の回をお送りいたしました。
自分が今回の話でしようと思ったことが３つあります。
１つは遊夜以外の者のシンクロ召喚。
主人公以外がシンクロをし、このオリジナルストーリーを盛り上げるためです。
その際、一番苦労したのは希のデッキです。当初は『ネコデッキ』の予定でしたが、
猫ばかりではアイディアが詰まるので獣族デッキに使用とも思いましたが
それだと隼人と被ってしまいそうなので、悩んだ末に『ライオン』や『トラ』などの
猫科動物などもいれた『ネコデッキ』といたしました。
２つ目は十代も決闘させること。
これまで、一回も十代を決闘させたことが無い事に気づき（オリジナルなので
仕方ないけど）急きょ、タッグデュエルに変更しました。また、タッグフォースの
癖がついていたために、タッグフォースルールといたしました。
もっとも、タッグデュエルっぽいコンボが殆どありませんでしたが。
３つ目は遊夜の仮装です。
元々主人公のデッキを、自分が好きな侍系デッキにしようと考えていましたが、
ある事情でそれがダメになりました。そこで、思いついた『蒼雷郷』を和風に
したのですが、どうしても大好きな新選組の仮装をさせたくて

ほぼ無理やり載せてみましたがいかがだったでしょう。
自分のわがまま、思いつきのまま動いてすいません。

今回の最強カード『蒼雷郷の荒武者―ジンベエ』
☆7　光　雷族　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２２００　シンクロモンスター
雷族チューナー＋雷族を含むチューナー以外のモンスター1体以上
このカードは戦士族モンスターとしても扱う。
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手フィールド上モンスター1体を
破壊する事ができる。
このカードは1度のバトルフェイズで2回攻撃する事ができる。

遊夜のキーカードの一枚。
名前の由来は適当。
破壊効果と2回攻撃能力を持つ、状況によっては逆転の切り札となり得る。

～第三章～　十代ＶＳ万丈目　巨竜の猛攻（前書き）

※注意！！※
この小説では、
オリジナルカードを出します。ご了承ください。

～第三章～　十代ＶＳ万丈目　巨竜の猛攻

遊夜達が入学してから早一ヶ月。
今この学園は、“テスト”という天国と地獄の境目を迎えていた。
本来テストは、殆どの学生達にとって地獄である。
ではなぜ、天国と地獄の境目なのか。その理由は、テストの成績しだいでは
寮変え、すなわちランクが上がる可能性があるのだ。故に、このテストに
賭ける者も、特に“オシリス・レッド”には意外といるのだ。翔など特に
それを願いって蝋燭を灯し頭に鉢巻を巻き、その鉢巻に死者蘇生のカードを突き刺し
壁に貼った“オシリスの天空竜”の絵に向かって祈りを捧げるほどだった。
そんな翔に遊夜は、今日テスト当日のギリギリまでずっと勉強を教えていた。

「それで、ここはこうやって……」
「ふむふむ、なるほどっす。」
「ところで翔、十代はどうしたんだ?」

三沢の言葉に翔はやや呆れたような表情で口を開く。

「まだ寝てるっす。」

翔の言葉に『え!?』と驚く遊夜と三沢。たしかに十代が筆記などが苦手なのは
この一ヶ月の間に周知の事実となったが、いくらテストが苦手とい

ってもテストに遅れ成績がやばかったら最悪退学だ。にもかかわらず未だに寝てるとは、よっぽどテストに自信があるのかはたまた開き直ってるのかのどちらなのだろう。

「たぶん後者っすよ。アニキってば『実技がとれてりゃ何とかなんだろ』って言ってたっす。」

「なるほど、たしかに十代なら実技満点取れそうだもんな。」

翔の言葉に納得する遊夜であった。

その後、結局十代は遅刻して来たのだが本人は全く気にしてない所かテスト用紙を殆ど白紙の状態で寝むってしまったのは全くの蛇足である。

その光景を外からこっそりと見ていたクロノスは予想通りの展開に顔を緩めていた。

「クフフフフフッ、ムーッフフフフ。予想通り遊城十代は筆記テストは自滅なのーネ。得意の実技テストで～は――――――クフフフフッ、楽しみーノヨ。ムッフフフフフ！」

そしてこれからの展開に大笑いを上げるのであった。

その後、校内に試験終了のアナウンスが響いく。

「《これで、筆記テストは終了、なお実技テストはは午後2時から

体育館で行います》」

とアナウンスが終わった途端に、
生徒達がいきなり教室から出て行き走り出して行った。

「十代、起きなよ。」
「アニキ、起きてよ。」
「試験はとっくに終わったぞ！」

未だ眠りこける十代に遊夜と翔・三沢の三人は起こしに掛かる。

「もうアニキ、テスト殆ど白紙だったじゃないっすか！」
「気にすんな、午後の実技テストが本番よ。」

翔の言葉に対しさらっと返した十代は再び眠りにつこうとするが、
ここで初めてすでに教室が自分たちを残して誰もいない事に気づく。

「あれっ、皆は？もう昼飯か？」
「購買部さ。なんせ、昼休みに新しいカードが大量入荷することになってるからな。」

十代の言葉に三沢が首を振りながら返した。その三沢の言葉を聞いた十代と翔はそれぞれ
『どんなカードがあるのか見たくってしょうがねぇ！！』
『午後の実技テストに向けて、デッキを補強しなきゃ！！』
と言いながら購買部へ向かおうとする。その時十代は、
全く慌てていない遊夜と三沢の姿を見て首を傾げる。

「遊夜、三沢。お前らは行かないのか？」

十代の言葉に2人は
『今のデッキを信頼しているから、新しいカードは別にいい』
と揃って返した。
とそこへさらに、再びアナウンスが響いく。

「≪“白鋼　遊夜”くん“白鋼　遊夜”くん。
君にお客様がお見えですよ。至急、校長室に来てください。≫」

アナウンスが終わり、首を傾げる4人。

「今のって、校長の声だよな。」
「遊夜くんにお客さんっすか？」
「みたいだな、ちょっと行って来る。」

そう言い遊夜は教室を後にした。
その後十代と翔もカードを見に購買部へ、三沢はデッキを調整するためにと
それぞれ教室を後にした。

「どうなってんだ？」

購買部へやって来た十代と翔だったが、そこには人っ子1人いなかった。

「ま、まさか……」

そこで2人はとある結論に達して顔を見合わせた。

「「もう全部売り切れちゃったぁぁっ！？」」

そのことを確かめるべく十代と翔はレジにいる人物の所に詰め寄る。

「すいませーん！新しいカードは？」

十代の言葉に振り向いた店員のお姉さんは、パックを１つだけ取り出す。

「それが沢山買っていった生徒さんがいて、もうこの１パックだけなのよ。」

店員の言葉に『えぇー！？』と絶叫する十代と翔だった。だが

「お待ちよ。」

そんな２人に声を掛ける１人の中年の女性がいた。

その姿を確認した十代は目を丸くする。

「あっ、今朝のおばちゃん」

「おばちゃんじゃないわよぉ。トメって呼んで、ト・メ！」

そう言いトメは自分の自己紹介をした。

「トメさんって購買部のおばちゃんだったのか」

顔見知りな十代とトメさんの言葉に翔は驚きながら十代に聞きだす。

「アニキ、知り合い？」

「あぁ、朝ちょっとな。」

朝の光景を思い出し頬をかきつつ十代は答えた。

「それより、こっちにいらっしゃいよ」

トメさんのその言葉に十代と翔は『えっ?』と声を上げた。

「ムフフフフフッ、いいのがあるのよお客さん。」

そう笑いながらトメはポケットからある物を取り出した。

その頃、校舎内を歩く人影が3つあった。万丈目以下取り巻き2人だった。

「誰だ、あいつ!カードを買い占めやがって!!」

「どうすんだよ、午後の試験!」

取巻と慕谷はイラつきながらそう呟くが、万丈目は落ち着きながら口を開く。

「慌てるな。たかが月テストで新たなカードを仕込むこともない。どうせ、オベリスクブルーの新入生に俺を倒せる者など……」

『いない』と言い掛けた万丈目の脳裏に、以前の遊夜との決闘の事が過ぎり

万丈目はギリッと歯軋りを立てる。とそこへ、万丈目に語りかける声があった。

「しかしその相手が遊城十代だったらどうなのーカナ？」
「何！？」

万丈目達3人が、声のした方を向くとそこにいたのは
学ランにボロボロの学生帽、マントといったバンカラな風貌の学生
だった。

「お、お前は！カードを買い占めた！！」

取巻の言葉に、その生徒はマントを開いて見せた。

「そのカードなら今ここーニ、ありますーノ！」

マントには買い占められたカードがずらりと並んでいた。

「お前は誰だ！？」
「カードなど買占めどうするつもりだ！」

その光景を見た取巻と慕谷は学生に向かって叫んだ。

「ニィッヒヒヒヒッ！まーダわからないーノですかー、シニュール
万丈目。
私ーノ、正体ーヲ！！」

マントと学生帽を取り払ってでてきたのは――

「「「クロノス教諭！」」」

その正体は、何とクロノスだった。驚く万丈目達を尻目にクロノス
は言葉を続ける。

「遊城十代のようなドロップアウトボーイは、早い内にエリートである貴方が
叩き潰さなければいけませんーノ！だから私は貴方に申し付けますーノ！
遊城十代と決闘しなさーイ！！」

クロノスの言葉に驚く万丈目達だったが、すぐに冷静になる。

「しかし、実技テストは同じ寮の者同士で行われるのでは？」

万丈目のそのもっともな疑問にクロノスは自身ありげな顔で答えた。

「まっかせっなさーイですーノ！ちゃ～んと考えてあるーノ！
ウフフッ、ムハハーハハハハハッ！！！」

クロノスは笑い声が、廊下中に響いていった。

一方、校長室に向かった剣は校長室にてある人物と再会していた。

「お～ぅ遊夜ボ～イ、お久しぶりデース！」
「ペガサス会長！ご無沙汰してます！」

そう言い遊夜は、銀色のロングヘアーに赤い服を身にまとった紳士ペガサスと握手を交わす。
そう、このペガサスこそ遊夜の親代わりにして、決闘モンスターズの生みの親
そして『インダストリアル・イリュージョン社（以後：Ｉ２）』社

長である
“ペガサス・J（ジェイ）・クロフォード”である。

「さて、私がこの学園に来たのは遊夜ボ～イ、あなたにこれを渡すためデース。」

そう言いペガサスは懐から1枚のカードを取り出し、遊夜に手渡す。
そのカードを見た遊夜は目を丸くする。

「これって……」
「イエース！ユーの父“遊斗（ゆうと）”がデザインした雷龍のカードがついに完成したのデース！」

ペガサスの言葉に目を輝かせる遊夜だったが、校長の鮫島の言葉にある事を思い出す。

「ところで遊夜くん、そろそろ実技の時間だよ？」

鮫島の言葉に『あっ！』と思い出した遊夜は、
貰ったカードをデッキに入れすぐさま会場に向かう。

「ありがとう！ペガサス会長！！」

そう言い遊夜は会場へと走って行った。

「……さて、ペガサス会長。これからどうしますか？」

鮫島の言葉にペガサスはニコッと微笑み口を開く。

「折角ですから、この学園の決闘者達を見てみたいデ～ス。」

ペガサスの言葉に鮫島は微笑みながら頷いた。

そして午後の実技試験の場で、十代の声が会場に響く。

「えぇぇぇぇっ！なんで万丈目が俺と決闘を!?」

それもその筈だ。本来実技テストは同じ寮の者同士で行われるのだ。
なのに十代の前にいるのはブルーの万丈目なのだ。
その状況に驚く十代にクロノスは歩み寄りながら口を開く。

「入学試験であれほどの成績を収めた君とオシリスレッドの生徒では釣り合いがとれないーノデス。」

クロノスは『そこで』と言いながら万丈目を指差す。

「シニョール万丈目こそが君の相手に相応しいと判断いたしましたーノデス。
勿論、勝てばラー・イエローに昇格ってことになりまーッスノ。」

クロノスは『いかがですーノ?』の十代に尋ねる。そのクロノスの言葉に
会場内は騒然となった。

「（やっぱりアニキはスゴイんだ。）」
「（十代が勝てば、僕と同じ寮になる。入学したてにしてもう――）」

翔と三沢はそれぞれそう心の中で思っていた。
そしてクロノスの言葉を観客席で家康と大吾郎と共に聞いていた遊夜は
十代と万丈目の決闘に心を躍らせていた。

「すごい、２人共どんな決闘を見せてくれるんだろう！」
「お前も相変わらずだな。」
「だが興味はあるな。」

遊夜の言葉に同意する大吾郎と呆れる家康。とそこに、十代の声が上がる。

「いいぜ！俺、いろんな奴と決闘をしてみたい。
どんな奴からの挑戦でも受けたいんだ！！」

十代の言葉を聞いたクロノスはニカッと微笑む。
それを確認した十代と万丈目は決闘盤を構える。

「行くぞ、万丈目！」
「万丈目さん、だ！！」
「「決闘っ！！」」

十代ＬＰ／４０００
万丈目ＬＰ／４０００

「俺の先行、ドロー！」

「《クリクリ～》」

十代がデッキからドローしたカードからの声に、十代は相棒である“ハネクリボー”が来てくれたことを確認する。

「《相棒、最初から来てくれるとはありがたいぜ！》」

そう言い十代は『よし！』と手札の１枚に手を伸ばす。

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』を攻撃表示で召喚！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン　☆４　光　戦士族　ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１４００

十代の場に、体に電撃を走らせるヒーローモンスターが現れた。

「ターンエンドだぜ」

そのモンスターを見た万丈目は『ふん』鼻で笑う。

「雑魚ぞろいのダメヒーローデッキめ、お前の脆さを見せてやる。俺のターン、ドロー！」

ドローしたカードを確認した万丈目は口元に笑みを浮かべる。

「（いきなりクロノス教諭から貰ったレアカード！）」

そう言い万丈目はそのレアカードに手を伸ばす。

「俺は魔法カード『トレード・イン』を発動!!
手札から☆8のモンスターを1枚捨てる事で、カードを2枚ドローする!!
俺は『タイラント・ドラゴン』を墓地に送り2枚ドロー!!」
手札を補充した万丈目は攻撃態勢に入る。
「俺は手札から『バイス・ドラゴン』を特殊召喚!!」
バイス・ドラゴン　☆5　闇　ドラゴン族　ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／２４００
万丈目の場に全身が濃い紫色の竜が現れる。
「生け贄なしで上級モンスターを召喚だって!?」
その万丈目の出したドラゴンに十代は驚いていた。
「ふふふ、『バイス・ドラゴン』は相手の場にのみモンスターがいる時
攻撃力を半分にする事で特殊召喚できる。」
バイス・ドラゴン　ＡＴＫ／２０００⇒ＡＴＫ１０００
「さらに手札から、永続魔法『アドバンス・フォース』発動!!
これにより☆7以上のモンスターは☆5以上のモンスター1体を生

け贄に
召喚する事が可能となった！！」

万丈目の言葉に『何！？』と驚愕する十代。
「行くぞ！俺は『バイス・ドラゴン』を生け贄に捧げ――
来い！！『フェルグラントドラゴン』！！」

フェルグラントドラゴン　☆８　光　ドラゴン族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２８００

万丈目の場に全身が金色び輝く竜が現れる。

「行くぞ十代！！『フェルグラントドラゴン』の攻撃！！
“ゴールデン・キング・バスター”！！『スパークマン』を粉砕せよ！！」

フェルグラントの口より放たれた熱線が、スパークマンを焼き尽くす。

十代：ＬＰ／４０００⇒２８００

「ぐぅっ！！」
「ふっ。カードを2枚伏せて、ターンエンド！」

「ブラーボー！シニョール万丈目は投入したカードを確実ーニ存分ーニ使いこなすしてるノーネ！！」

万丈目有利の状況に満足そうに微笑むクロノス。
とそこに、校長の鮫島がやって来た。
「ほぉ、クロノス先生を倒した生徒が相手ですか。」
鮫島の言葉にズッコケるクロノスは、イラついた表情で校長に視線を向け
目を丸くする。なぜならそこに、Ｉ２社長ペガサスがいたのだから。
「な、なななナナナナナナ――――――――――ッ！！？？」
驚くクロノスを尻目にペガサスは十代と万丈目の決闘を眺める。
「彼が話していた十代ボーイですカ？」
ペガサスの言葉に『えぇ、彼は実に面白いですよ』と返す鮫島。
その時ペガサスは、十代の肩に何かが薄っすら見えたような気がし
『はっ』と目を細くする。
「（今の十代ボーイの肩にいたのは……精霊！？）」
「すげぇ、すげぇよ万丈目！」
所変わって観客席では、遊夜が万丈目のプレイングに目を輝かせて
いた。
「始まったか、遊夜の“決闘バカ”が。」

遊夜の状態を見てため息をつく家康。遊夜のこの状況を今まで何度見てきた事か。
だが同時に家康は、ある事に気づく。

「でもおかしいぜ。」

家康の言葉に『何がだ?』と聞く大吾郎。

「うむ、俺様の情報及び記憶が正しければ、万丈目の使った殆どのカードは今日入荷されたレアカードの筈だ。」

家康の言葉に『何!?』と驚く大吾郎だったが、家康は気にせず話を続ける。

「だが目撃者の話じゃあ、買った奴は万丈目より身長が高かった筈だ。
万丈目の奴、どうやってあのカード達を……」

そう言いながら家康は、再び考え出すのであった。

「じゃあ間違いないのね?」

さらに所変わって特別観客席では、千世が佐藤・鈴木の言葉に聞き返していた。

「はい、間違いありませんお嬢様。」
「万丈目様が使われているカードの殆どは、今日(こんにち)入荷されたレアカードに間違いありません。」

2人の言葉に『う～ん』と唸る千世。

「やっぱりあたしの勘は正しかったようね。」

そう言い千世はチラッと視線を十代に送る。

「ふふふ、万丈目の奴がどうやってカードを手に入れたのかは知らないけど
これで面白くなってきたわね。」

そう言い千世は『ニヒヒ』と笑いをこぼしながら決闘に視線を向けた。

「へへ、決闘はまだ始まったばかりだぜ！行くぜ！俺のターン！ドロー！！」

十代は勢い良くカードを引き、即座に次の一手を考え出した。

「俺は手札から『融合』を発動！！
手札の『フェザーマン』と『バーストレディ』を融合！！
現れろ！！『E・HERO フレイム・ウィングマン』！！」

E・HERO フレイム・ウィングマン ☆6 風 戦士族 ATK／2100 DEF／1200

十代の場に、右手に竜の頭を付け白い翼を生やしたＨＥＲＯが現れた。

「さらに手札から装備魔法『フュージョン・ウェポン』を装備！！装備したモンスターの攻撃力と守備力を１５００Ｐアップさせる！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フレイム・ウィングマン　ＡＴＫ／２１００⇒ＡＴＫ３６００　ＤＥＦ／１２００⇒ＤＥＦ／２７００

フレイム・ウィングマンの左腕についた機械物から電流が送り込まれ攻撃力と守備力を上げる。

「行けぇ！！『フレイム・ウィングマン』で『フェルグラントドラゴン』を攻げ――」

「させん！！罠発動（トラップはつどう）！！『威嚇する咆哮』！！」

十代が攻撃を宣言しようとした瞬間、万丈目が放った罠によりフェルグラントの咆哮が十代を襲う。

「ぐあぁぁっ！！」

「『威嚇する咆哮』の効果により、相手はこのターン攻撃宣言は出来ない！！残念だったな十代！！」

「あっちゃぁ～、やるなぁ万丈目。」

「万丈目さんだ！！」

不利な状況にも関わらず、相変わらずへらへらしている十代にイラつきを隠さない万丈目。

「へへ、俺はカードを2枚伏せターンエンド。」

「あぁっ！惜しいっす！！」

十代の攻撃失敗に、翔は自分の事のように悔しがっていた。その隣で三沢は
冷静に状況を分析している。

「うむ、十代は得意の融合で体勢を立て直したが
やはりまだ万丈目の方がやや有利。何より、万丈目のデッキにはまだ何かあるような……」

そう言いながら三沢の視線は万丈目のデッキに向けられる。

「（万丈目、一体何処であのカード達を……）」

そう思わずにはいられない三沢であった。

「（十代、あなたの実力はこんなものじゃ無いはずよ。）」

所変わって観客席では、明日香が十代と万丈目の決闘を見守っていた。

「あいつ、苦戦してるわね。」
「…にゃあ。」
「ん～今回は遊城っちもダメかなぁ～。」

隣にいる文乃と希、それに叶絵も見ている中、万丈目がカードを引く。

「俺のターン！
俺は場の罠『リビングデッドの呼び声』を発動！！これにより俺の墓地より
モンスターを選択し復活させる！！蘇れ！『タイラント・ドラゴン』！！」

タイラント・ドラゴン　☆８　炎　ドラゴン族　ＡＴＫ／２９００
ＤＥＦ／２５００

万丈目の場に恐竜にも似た巨竜が出現する。と同時に、リビングデッドの呼び声と
フェルグラントが消滅する。

「え？何で『フェルグラントドラゴン』が消えていくの！？」

何が起こったのか全く分からない翔は、三沢の方を向く。

「『タイラント・ドラゴン』が墓地から召喚する場合、自分の場のドラゴン族１体を
犠牲にする必要があるんだ。それに加え、『タイラント・ドラゴン』には

このカードを対象とする罠カードの効果を無効にし破壊する効果がある。
これで『タイラント・ドラゴン』は、完全復活したと言ってもいい。」

三沢の言葉に『そんなぁ』と不安な表情になる翔。

「まだ行くぞ十代!!俺は手札から魔法カード『ドラゴニック・リバース』を発動!!
このカードはこのターンの俺の通常召喚を封じる代わりに、俺の場のドラゴン族と
同じ☆を持つドラゴンを1体復活させる!!蘇れ!!『フェルグラントドラゴン』!!」

フェルグラントドラゴン　☆８　光　ドラゴン族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２８００

万丈目の場に、再びフェルグラントドラゴンが現れる。

「さらに墓地からの特殊召喚に成功した『フェルグラント』は
墓地のモンスター1体を選択し、選択したモンスターの☆×２００Ｐアップする!!
俺は☆５の『バイス・ドラゴン』を選択!!」

フェルグラントドラゴン　ＡＴＫ／２８００⇒ＡＴＫ３８００

フェルグラントの咆哮と共に攻撃力が上昇した。

「へへ、やるなぁ万丈目。」

「万丈目さんだ!!俺はさらに魔法カード『スタンピング・クラッシュ』発動!!

俺の場にドラゴン族がいる時、場の魔法・罠カード1枚を破壊する!!」

万丈目が発動したカードから巨大な竜の足が出現し、十代の場のフュージョン・ウェポンを踏み砕く。

「そして破壊したカードのコントローラーに500Pのダメージを与える!!」

「何!?」

十代：LP／2800⇒2300

「ぐあぁっ!!」

「ふふふふ、これで終わりだな十代。

さぁ、たっぷりと味わうんだな持たざる者の悲しさを。」

愉悦にひたりながらそう言い放つ万丈目。

「さぁ行くぞ!!まず『タイラント・ドラゴン』で『フレイム・ウィングマン』を攻撃!!“タイラント・バースト”!!!」

タイラント・ドラゴンの口より放たれた豪火がフレイム・ウィングマンに襲い掛かる。

「させないぜ!!速攻魔法『融合解除』発動!!分離しろ『フレイム・ウィングマン』!!」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン　☆３　風　戦士族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１０００

Ｅ・ＨＥＲＯ　バーストレディ　☆３　炎　戦士族　ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／８００

融合解除によって融合が解かれ、十代の場にフレイム・フィングマンの素材となった２体のＨＥＲＯが守備表示で出現する。これで防衛線が張れた――はずだった。

「ふん、構わんそのまま『フェザーマン』を焼き払え!!」

タイラント・ドラゴンの口より放たれた豪火がフェザーマンを焼き尽くした。

「くそっ!だが俺の場にはまだ『バーストレディ』がいる!次の攻撃もしのげるぜ!!」

だが、そんな十代の希望を万丈目はあっさり打ち砕く。

「ふん、あまいな。『タイラント・ドラゴン』は相手の場にモンスターがいる場合
バトルフェイズ中にもう一度の攻撃が可能なのだ!!」

万丈目の言葉に『えぇっ!?』と驚く十代。見ればタイラント・ドラゴンは
確かに口から微かだが火を噴出している。

「『タイラント・ドラゴン』!『バーストレディ』を粉砕せよ!!
“タイラント・バースト”!!!」

タイラント・ドラゴンの口より再び放たれた豪火がバーストレディを焼き尽くした。

「ぐあぁっ!!けどまだだぜ!!罠カード、『ヒーロー・シグナル』発動!!
俺の場のモンスターが戦闘で破壊された時
デッキから☆4以下の『E・HERO』を1体特殊召喚できる!!
来い!!『E・HERO クレイマン』!!」

E・HERO クレイマン ☆4 地 戦士族 ATK/800 DEF/2000

十代の場に粘土で出来た頑丈なHEROが現れる。

「ちっ!往生際の悪い!!『フェルグラントドラゴン』、『クレイマン』を粉砕せよ!!
“ゴールデン・キング・バスター”!!」

フェルグラントの口より放たれた熱線が、クレイマンを焼き尽くす。

「ふふふ、これでまた丸裸。1体のモンスターもお前の場にはいや

しないぜ、
ターンエンドだ！！」

万丈目の言葉に対して十代はその眸に闘志を燃やしだす。

「俺は俺のデッキを信じる！俺と共に最後まで戦ってくれるモンスターが
このデッキにいる限り、俺は戦い続けるぜ！ドロー！！」

十代は引いたカードを確認し『よし』と頷く。

「これに賭けるぜ！俺は手札から『逆襲の宝札』を発動！！
自分の場にカードがなく相手の場のモンスターが2体以上いる時
デッキからカードを2枚ドローする！！」

ドローしたカードを見て十代はニヤッと微笑む。

「まだまだ行くぜ！！手札から『強欲な壺』発動！！
デッキからカードを2枚ドローする！！」

その時、十代はその引いたカード見て目を丸くした。
なぜならそれは今朝手伝ってくれた十代のために
トメさんが取り置きしてくれたレアカードパックに入っていたカードだったからだ。
そして、そのカードに手札のハネクリボーも反応する。

「《クリクリ～》」
「（相棒……お前がそこまで言うなら、俺はこのカードを信じるぜ！！）
俺は『ハネクリボー』を守備表示で召喚。」

ハネクリボー　☆1　光　天使族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／２００

「《クリクリ～》」

登場したハネクリボーの可愛らしさに観客の女子達から『かわいい～！』と歓声が上がる。

「そして、カードを1枚伏せターンエンド！」

また守備表示だ、アニキもう打つ手なしなのかよぉ…」

十代の行動を見た翔はとうとう頭を抱えだす。

「さてさて、何が出るかな。」

その一方で遊夜は、未だにワクワクしていた。

「俺のターン、ドロー。」

万丈目は引いたカードを見て、ニヤッと微笑む。

「十代、貴様はどうやら運にも見放されたようだな。」

万丈目の言葉に『なに?』と返す十代。

「貴様はその毛玉野郎で戦闘ダメージを0にするつもりなんだろうがこのカードの前には無力だ!!
手札から装備魔法『メテオ・ストライク』を『フェルグラント』に装備!!
装備モンスターは守備モンスターに対し貫通効果を得る!!
いくらその毛玉野郎でも、貫通ダメージは無効にできまい!!」
「だったらやってみな!」

万丈目の言葉に対し、十代は余程の自信があるのか万丈目を挑発する。
「ならば望み通りにしてやる!!『フェルグラントドラゴン』の攻撃!!
“ゴールデン・キング・バスター”!!」
フェルグラントの口より放たれた熱線が、ハネクリボーに迫る瞬間

――――――――

――――十代は微笑んでいた。

――――――――

「来たぜ、相棒!俺は手札2枚をコストに、速攻魔法『進化する翼』を発動!!」

十代は残りの手札2枚を墓地に捨て、トメさんから貰ったカードを発動した。
と同時に、眩い光がハネクリボーを包み込み、ハネクリボーはその翼を

大天使の如く巨大にさせ、龍を模した甲冑を身につけた姿に変わった。
そして迫り来るフェルグラントの熱線をその小さな体で受け止める。

「どっ、どういうことだ!?」

その光景を見た万丈目は信じられないといった表情になった。

「『進化する翼』により、『ハネクリボー』は今、『ハネクリボーLV10』に進化!!」

ハネクリボー　LV10　☆10　光　天使族　ATK/3000
DEF/2000

「こいつの効果は、その身を犠牲に相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する!!」

ハネクリボー　LV10より放たれる蒼白い光がフェルグラントドラゴンと
タイラント・ドラゴンを多い尽くしていき、2頭の竜は断末魔の悲鳴と共に
光の中へと消え去っていった。

「そ、そんなバカな!?」

万丈目は信じられないといった表情で驚くが、これだけでは終わらない。
ハネクリボーが放った光が、そのまま万丈目に迫ってきてるのだ。

「な、何だ！？」
「『ハネクリボー　ＬＶ１０』の効果はそれだけじゃないぜ万丈目！
こいつは破壊したモンスターの元々の攻撃力の合計分のダメージを
相手に与える！！」
十代の言葉に『なっ！？』と驚愕する万丈目。

「と、と言うことは……」
「そうさ万丈目！お前はあのドラゴン２体分のダメージを受けても
らうぜ！！」
十代の言葉と同時に、ハネクリボーが放った光が万丈目を包み込む。

「うあぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

万丈目：ＬＰ／４０００⇒０

万丈目は膝を突き、信じられないといった表情で愕然とした。
ＬＰ無傷の状態から、攻撃力の低いモンスターによって一気に敗北
したのだ。
当然と言えば当然である。

「バ、バカな……この俺が……俺のドラゴンが……あんなザコモン
スターに……」

そして同時に、十代の大金星に開場全体はドッと沸いた。
十代はその開場の歓声に手を上げて応えながら未だ膝を折っている
万丈目に対して
ウインクしつつ人差し指と中指を差し出すポーズを取った。

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ」

その十代を恨めしそうな顔で見ていた万丈目は
決闘場に降りてくる遊夜を見てさらに顔を歪めた。

「やったな、十代！」
「おう！」

そう言い2人は互いに握手をしあう。

「次は遊夜の番だな、がんばれ――――」

『がんばれよ』と言おうとした十代の言葉が、鮫島のアナウンスが遮った。

「《見せてもらいましたよ、“遊城　十代”君。君のデッキへの信頼感
モンスター達との厚い友情、そして何よりも勝負を捨てない決闘魂。
それはここにいる全ての者が認めることでしょう。
よって“遊城　十代”君、君はラー・イエローに昇格です！》」

鮫島のこの言葉に開場はより一層大きな歓声と拍手に包まれた。
が、ここで十代が思いがけない言葉を口にする。

「いや、俺イエローには行かないぜ。」

「「「「「「「「「「えぇぇ――――――――――っ！！！？？？」」」」」」」」」」

」」」」」」」

十代の言葉に会場全体が驚愕する。そりゃそうである、何の徳があって
イエローへの昇格を断りみすぼらしいレッドに残るというか、
皆にはそれが理解できないのだ。
そんな皆に対し、十代はサラッと答える。

「だって俺、レッドが気に入ってるんだ！燃える炎、熱い血潮、熱血の赤だ！
俺は離れる気はサラサラないぜ！！」

十代の理由にやや苦笑する鮫島だったが『わかりました』とあっさり認めたが
さらにアナウンスを続ける。

「《では、十代君。１つお願いをしてもよろしいかな？》」

鮫島のアナウンスに対して『何だ？』と返す十代。

「《実は、ある方の発案で君に“白鋼　遊夜”君の対戦相手をお願いしたい。》」

鮫島の言葉に『え？』と顔を見合わせて驚く遊夜と十代。そんな中鮫島は
放送室のボタンを押し、会場に１つのスクリーンを出現させる。
そのスクリーンには――――――

「私が発案したのデ～ス！」

ペガサスが映っていた。

「ペガサス会長！！」

「へ！？ペガサスってあの！？」

「どういう事だ！？」

決闘モンスターズの生みの親ペガサスの登場に会場内にどよめきが走る。

「ペガサス会長！まだ帰ってなかったんですか！？」

「お～ぅ遊夜ボ～イ、ユーの決闘が見たくてずっと残っていましたー！！」

遊夜とペガサスの会話に会場内のどよめきは更に悪化する。

「遊夜、お前ペガサスさんと知り合いなのか！？」

「どういう事だ白鋼！！」

「さぁさぁ、聞かしてもらおうかぁーっ！！」

十代に万丈目、さらにはいつの間にいたのか叶絵までもが遊夜に詰め寄る中、１人の声が上がる。

「《こらそこー！！遊夜に詰め寄るな！！離れろ離れろーっ！！》」

言わずと知れた千世だった。自分の座る特別席からメガホンで話し掛けている。

「う、梅ノ森さん、何を…」

「《“白鋼　遊夜”！隠したって無駄よ！！梅ノ森家の情報収集力をなめて貰っちゃ困るわ！！あんたとペガサスの関係はお見通しよ！！》」

「あのバカ、何する気よ！！」

梅ノ森の行動にやな予感がした文乃は、急いで千世の下へ走りだす。

「にゃあ。」

それを見た希もこっそり後を追う中、千世は言葉を続けていく。

「《あたしは知っているわよ遊夜！！あんたの親父がＩ２社で働いていた事も――――――》」

千世は一旦言葉を区切り、大きく息を吸いそして――――――

「《あんたの親父がカードデザイナー“白鋼（しろがね）　遊斗（ゆうと）”だって事もね！！！》」

千世の言葉に会場内のざわめきはさらに悪化する。

「おい聞いたか！？」

「白鋼　遊斗って、あの？」

「遊様のお父様が……」

ざわめきが悪化する中、翔は何が何だか分からずオロオロしている。

「え？え？遊斗って誰？」

「有名なカードデザイナーなんだなぁ。」

オロオロする翔の後ろに、いつの間にか1人のレッド生徒がいた。
大きな鼻をしたその生徒はどこかコアラに似ている。

「隼人(はやと)君！！寮に戻ったんじゃないの！？」

翔に隼人と呼ばれた生徒は頬をポリポリかきながら答える。

「うん、でも途中で十代の決闘の事を聞いて引き返してきたんだなぁ。でもまさか」

そう言い隼人は視線を決闘場にいる十代達に向ける。

「レッドがブルーに勝つなんて思わなかったけど、
噂の“白鋼　遊夜”がまさかあの“白鋼　遊斗”の子だったなんてなぁ。」

「その“白鋼　遊斗”って有名なの？」

「ああ、かなり有名だ。」

翔の疑問に答えたのは三沢だった。

「“白鋼　遊斗”はＩ２社でも指折りのカードデザイナーだったが十数年前に事故死したと聞く。」

三沢の言葉に翔は同情するような表情で視線を遊夜に向けた。

一方決闘場では、遊夜に対する質問攻めが続いていた。

「ねぇねぇねぇ！！遊っちのパパが有名カードデザイナーってホント！！？」

「すげぇ！！じゃあお前の父ちゃんが作ったのかお前のカード！！」

叶絵と十代の質問攻めに『ま、まあね』と力なく答える遊夜。とそこに――――

「《げへぇっ！！？？》」

不意に奇妙な声が聞こえ、声のした方を振り向く一同。
そこには、文乃の跳び蹴りを食らい倒れる千世の姿があった。

「いつつつつ、何すんのよ“芹沢　文乃”！！お祖父ちゃんにもぶたれた事ないのに！！」

「うっさい黙れ！！」

どこかで聞いたようなセリフを言う千世の言葉を文乃はバッサリと斬り捨てる。

「あんたねぇ！そうやって人のプライバシーを探るのやめなさいって言ってるでしょ！！あんたには学習能力がないの！？」

「何よ！！ちょっとした好奇心ってもんでしょ！！」

「だったら何でわざわざ公然で発表するのよ！！」

口ゲンカを更にヒートアップさせていく文乃と千世。この状況に会

場は
全員この一ヶ月の間に幾度なく見てきた光景に『またか』とため息をつく。
とそこに、救いの天使（？）は舞い降りた。
「はいは～い、２人共そこまで～。」
「にゃあ。」
２人の間に割って入ったのは乙女と希だった。
２人はそれぞれ、乙女は文乃を抑え希は千世をナデナデして戦意を喪失させた。
「ペガサスさんすいませ～ん。２人は落ち着かせたんでお話の続きをどうぞ～。」
乙女は視線をスクリーンに映るペガサスにそう言いながら視線を向ける。
「オ～、ユーが乙女デスカ。話は遊夜から聞いていま～す！」
そう言い乙女と微笑み合ったペガサスは視線を遊夜達に向ける。
「話が少しズレて仕舞いました。先程も言った通り、十代ボ～イユーに遊夜ボ～イの相手をしてほしいのデ～ス。」
「あぁいいぞ。」
ペガサスの言葉にあっさり承諾する十代。
「ユーはあっさりしてますネ。」
「だってすっげぇ奴と決闘すんのに理由なんかいらねぇじゃん。」

十代はさも当然のように答える。

「うんうん、思った通り決闘を純粋に楽しむボ～イデース。遊夜ボーイもいいですか？」

「もちろん！」

遊夜もまたあっさりと承諾する。

「十代とは前々から戦ってみたいと思ってたからね。」

「へへ、俺もだぜ！！」

そう言い2人は決闘場のそれぞれの場に立ち、決闘盤を構える。

「≪うむ、ではこれよりペガサス会長発案による、“デュエルアカデミア1年生頂上決戦”を行ないます！！≫」

鮫島の言葉と同時に会場から歓声が上がる。

「行くよ十代！！」

「来い遊夜！！」

「「決闘！！！」」

2人の決闘の火蓋は切って落とされた――――――――

巨竜の猛攻　《終》」

～第三章～　十代ＶＳ万丈目　巨竜の猛攻（後書き）

どうも、黒鋼です。
試験とか色々あって少し遅れました（少しどころじゃない）。
本編だと第４話の“５重合体！ＶＷＸＹＺ（ヴィトゥズィ）”の回をお送りいたしました。
以前も申した通り万丈目のデッキは漫画の影響でドラゴンデッキです。
そんな訳で今回のお話をどう改造しようか悩みに悩み続けました。
また、自分の作品でまだ十代が“フレイム・ウイングマン”を出してない事に気づき
急遽出すことにしました。その結果、『逆襲の宝札』というオリジナルドローカードを考案することになりましたけど、やっぱり決めては
“ハネクリボー　ＬＶ１０”でした。
とまぁこんな感じで色々オリジナルな展開もしていくのでどうぞよろしくお願いしま～す。

今回の最強カード『ハネクリボー　ＬＶ１０』
☆１０　光　天使族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／２００　効果モンスター
このカードは通常召喚できない。
このカードは「進化する翼」の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
自分フィールド上に表側表示で存在するこのカードを生け贄に捧げる事で、
相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊し、
破壊したモンスターの元々の攻撃力の合計分のダメージを相手ライフに与える。

この効果は相手バトルフェイズ中のみ発動する事ができる。

言わずと知れた十代のキーカードの1枚。
ミラフォにも似た効果で敵を破壊する、相棒の進化した姿。
正し、召喚条件が厳しい。

～第四章～　遊夜ＶＳ十代　招来する雷龍（前書き）

前回までのあらすじ
実技テストで万丈目に打ち勝った十代は
ペガサスの提案により、遊夜と決闘する事となった。

～第四章～　遊夜ＶＳ十代　招来する雷龍

遊夜と十代は決闘場のそれぞれの場に立ち、決闘盤を構える。

「《うむ、ではこれよりペガサス会長発案による、
“デュエルアカデミア１年生頂上決戦”を行ないます！！》」

鮫島の言葉と同時に会場から歓声が上がる。

「行くよ十代！！」
「来い遊夜！！」

「「決闘！！！」」

遊夜ＬＰ／４０００
十代ＬＰ／４０００

「先行は貰うぜ十代！俺のターン！」

遊夜は手札の状況を見ながら、最初の一手を考える。

「（十代のデッキは融合により
素早く高攻撃力のモンスターを展開するヒーローデッキ！
対応が遅れると命取りになる。なら――――）

俺は『蒼雷郷の剣客』を攻撃表示で召喚！！」

蒼雷郷の剣客　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に蒼い和服に身を包んだ剣士が現れる。

「さらにカードを1枚セットしてターンエンド！！
（こちらはその上を行く戦術で対抗する！！）」

「うわぁ、ついに始まちゃった。どっちが勝つんだろう。」
「正直な所、遊夜も十代も新入生の中ではトップクラスの実力者。どっちが勝っても不思議じゃないんだなぁ。」

翔と隼人がそんな会話をしている中、三沢はじっと2人の決闘を見ていた。

「（あの2人の実力は新入生の中でも群を抜いている。
互いに独特のセンスを持ちそして互いに自分のデッキを何より信じている2人。
似てないようで似ている2人の決闘。
どんな決闘を見せてくれる？1番君に推薦者君。）」

一時も目を離さないといった表情で、三沢は2人の決闘に視線を向け続ける。

「俺のターン、ドロー！」

カードを引いた十代は、速効で最初の一手を決める。

「（へへ、すっげーわくわくするぜ！見てろよ遊夜！お前に俺の決闘を全力でぶつけてやるぜ！！）

俺は手札の『スパークマン』と『クレイマン』を融合！」

いきなりの十代の融合に開場にどよめきが走る。

「いきなり、『融合』かよ！？」

「先に仕掛けたのは十代か！」

家康と大吾郎も十代の行動に声を上げていた。

「来い！！『Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダー・ジャイアント』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダー・ジャイアント　☆６　光　戦士族　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１５００

十代の場に電撃を帯びた、巨大な体格のＨＥＲＯが現れた。

「そして『サンダー・ジャイアント』の効果！手札１枚をコストに元々の攻撃力が『サンダー・ジャイアント』より低いモンスター１体を破壊する！！

“ヴェイパー・スパーク”！！」

サンダー・ジャイアントの片手から放たれた電撃が、剣客を襲い消滅させた。

「くっ！！」

「行くぜ遊夜！！『サンダー・ジャイアント』でプレイヤーにダイレクトアタック！！“ボルティック・サンダー”！！」

サンダー・ジャイアントの両手から放たれた電撃が、遊夜に襲い掛かる。

だが――――――

ピシャァ！！ゴロゴロ――――ッ！！！

「な、何だ！？」

突如遊夜の場に蒼い落雷が落ち、サンダー・ジャイアントの攻撃を阻む。

そして落雷の中から蒼い甲冑に身を包み、槍を装備した兵士が出現する。

蒼雷郷の番兵　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１９００

「な、何だ！？どうなってんだ！！？」

何が起こったのか分からない会場内のギャラリーと十代に遊夜は答

える。

「相手が直接攻撃してきた時、『蒼雷郷の番兵』は手札から特殊召喚できる！」

遊夜の言葉に『何！？』と驚く十代。遊夜はさらに続ける。

「そして雷族モンスターが特殊召喚に成功した事で罠カード『雷の裁き』を発動！相手フィールド上のカード1枚を破壊する！！
落ちよ雷よ！！」

天より落ちる落雷によってサンダー・ジャイアントは黒こげになり消滅した。

決闘を見ていた翔は驚愕の声を上げる。

「そんなぁ！じゃぁアニキのフィールドはがら空きじゃないか！！」
「いや、まだ十代は通常召喚をしていないからまだ何とかなる。」

翔の言葉に答えたのは三沢だった。続けて近くにいた家康も口を挟む。

「それに十代が墓地に送ったカードも、今後どう使われるか……だな。」

家康の言葉に『え？』とキョトンとなる翔と大吾郎。

「くっ！でも『サンダー・ジャイアント』が破壊されてもまだ俺のターンは終わってないぜ！」

そう言い十代は自分の手札状況を確認する。

「（とは言え、墓地に送ったあいつを使うのはまだ無理。だったら――）俺は手札から魔法カード『融合回収（フュージョン・リカバリー）』を発動！自分の墓地に存在する融合カードと融合に使用した融合素材モンスター1体を手札に加える！俺は融合と『クレイマン』を手札に加え、『クレイマン』を守備表示で召喚！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン　☆４　地　戦士族　ＡＴＫ／８００　ＤＥＦ／２０００

十代の場に粘土で出来た頑丈なＨＥＲＯが現れる。

「俺はこのままターンを終了する！」

２人の決闘は最初から全力全開の文字通りの決闘だった。

十代と遊夜の決闘はすぐさま噂となり、前半に実技試験を終わらせて早々に帰って行った他の生徒達の間に一気に広まって行った。

「おい、何だか1年の実技試験がすごいことになってるらしいぜ。」

「あぁ、何でも入試試験でクロノス教諭を倒した新入生2人が決闘してるんだろ？」
「それにそのうちの1人はその直前にブルーの万丈目を倒したってよ。」
「その生徒と決闘してるのは遊様ですって！？」
「何ですって！？それを早く仰いなさいな！これを見逃す手はございませんわよ！！」
「おい、観に行こうぜ！」
「お、おい！置いてくなよ！俺も行くぞ！！」
「急ごうぜ！！」

部屋やロビーで思い思いに寛いでいた生徒達はその噂を聞くと急ぎ会場へと向かって行った。それは『帝王（カイザー）』と仇名される彼も同じだった。

「（“遊城　十代”、そして“白鋼　遊夜”…か。）」

そう心の中で呟いた“丸藤　亮”もまた、会場へと向かったのであった。

「モンスターを破壊されてもまた新しいモンスターを出してくるとは、
流石だな十代！」
「へへ、まだまだ決闘はこれからだぜ！！」

十代と微笑み合った遊夜は、デッキからカードを引くべくデッキに手を伸ばす。

「行くぜ十代！俺のターン、ドロー！！」

引いたカードを見た遊夜の表情は喜びに染る。

「行くぜ！チューナーモンスター『蒼雷郷の蝮』を召喚！！」

蒼雷郷の蝮　☆３　光　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／０

遊夜の場に蒼白く光る蛇が現れる。

「チューナーか！！」

「来るか！！」

遊夜がチューナーを出したことで、開場にどよめきが走る。

「行くぜ十代！☆４『蒼雷郷の番兵』に☆３『蒼雷郷の蝮』をチューニング！」

蝮が緑色のリングとなり、番兵もその身を４つの星に変える。

そして一直線に４つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天を斬り裂く刃となる。光と共に轟け！！シンクロ召喚！！

蒼雷の勇士、『蒼雷郷の猛将―カツマ』！！」

蒼雷郷の猛将―カツマ　☆７　光　雷族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２２００

光が弾けその中から、蒼い甲冑に身を包み黒い馬に乗った武将が姿を現す。

「来たか！『カツマ』！！」

「さらに、『蒼雷郷の蝮』の効果発動！！このカードをシンクロ召喚の素材にされた時デッキからカードを1枚ドローする！！

バトル！！『カツマ』で『クレイマン』を攻撃！！“蒼雷（そうらい）　斬光閃（ざんこうせん）”！！」

槍をグルグル回したカツマは、蒼白く光る槍でクレイマンを貫く。

「くっ！！」

「さらに『カツマ』の効果により、『クレイマン』の☆×２００Ｐのダメージを与える！！

“蒼雷（そうらい）　流星群（りゅうせいぐん）”！！」

カツマの頭上に蒼白く光るプラズマが発生し、プラズマは４つの雷撃となり十代に襲い掛かる。

十代：ＬＰ／４０００⇒３２００

「ぐっ！」

「俺はカードを1枚伏せターンエンド！！」

「ん？何か騒がしいっす。」

遊夜と十代の決闘を見ていた翔は、あたりが騒がしくなってきたと思い
決闘から目を離して会場を見てみると、会場に集まった収容人数を大幅に超える人の多さに驚いた。

「うわっ!?何、この人だかり!?」

これには三沢・隼人・家康・大吾郎も驚く。

「どうやら全員、この決闘を聞きつけてやって来たみたいだな。」
「な、なんと……」
「すごいんだなぁ。」
「まぁしょーがないんじゃね?実際俺達も目が離せないわけだしさ。」

家康の言葉に『うんうん』と頷く3人。

「あら、あなたもこの決闘を気になった口かしら?」

明日香は自分の後ろに立った人物、亮のほうを振り向きながら聞いた。

「まぁ、そんなところだ。」

そういい亮は2人の決闘に目をやる。それを見ていた叶絵は『おやおや~』と言いながら明日香に接近する。その姿を見た明日香は
嫌な予感を感じる。叶絵がこういう笑いをしながら近づく時は

大概ろくでもない事を言う前触れなのだ。

「明日香とカイザーって仲いいよね～、ひょっとして2人はできて……」

叶絵の言葉に『黙りなさい』とシャットアウトする明日香であった。

「うふふ、いい勝負ね♪」

千世のいる特別席で乙女はそう呟く。

「って言うか、あんた達いつまでここにいるのよ!!ここは私の特別席よ!!?」

「うっさいわね!!一々戻るのが面倒なのよ!!いいじゃないここにいるくらい!!」

自分の特別席に乙女達がいるのが気に入らない千世とその千世に真っ向から対立する文乃。

「……にゃあ。」

そして淡々と決闘を見つめる希であった。

「俺のターン!ドロー!

俺は『強欲な壺』発動!その効果でデッキからカードを2枚ドローする!!」

十代は引いたカードを見て『よしっ』と頷く。

「やるなぁ遊夜！だけど俺だって負けねぇぜ！！
俺は『融合』を発動！手札の『フェザーマン』とバーストレディ』
を融合！！
現れろ！！『Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フレイム・ウィングマン』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　☆６　風　戦士族　ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／１２００

十代の場に、右手に竜の頭を付け白い翼を生やしたＨＥＲＯが現れた。

「さらに手札からフィールド魔法『摩天楼（まてんろう）―スカイスクレイパー』発動！！」

十代が発動したフィールド魔法により、決闘場が高いビルの並ぶ夜の摩天楼へと変わる。その中で一際高いビルの天辺にフレイム・ウィングマンはいた。

「さぁヒーローの舞台は整ったぜ！行けぇ！！
『フレイム・ウィングマン』で『カツマ』を攻撃！！」

十代の掛け声と共に、フレイム・ウィングマンはカツマに迫る。

「『スカイスクレイパー』の効果は……！！」
「そうさ！『スカイスクレイパー』は自分より攻撃力が高いモンス

ターに
ヒーローが攻撃する場合、その攻撃力を１０００Ｐアップさせるフィールド魔法！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　ＡＴＫ／２１００⇒ＡＴＫ３１００

「くっ！！」

フレイム・ウィングマンの体が炎に包み込まれる。

「くらえ！！“スカイスクレイパー・シュート”！！」

フレイム・ウィングマンの攻撃がカツマを焼き尽くす。

遊夜：ＬＰ／４０００⇒３４００

「ぐっ！！」

ダメージの余波が遊夜を襲うが、それだけでは終わらなかった。

「さらに『フレイム・ウィングマン』の効果発動！！
破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！！」

フレイム・ウィングマンの竜の口が開き、そこから放たれた炎が遊夜を焼き尽くす。

遊夜：ＬＰ／３４００⇒９００

「ぐわぁっ！！」

「よっしゃ！俺はこれでターンエンドだ！！」

「ふむ、ついに遊夜君もダメージを受けてしまいましたか。」

2人の決闘を見ていた鮫島が呟く。

「十代ボ～イもやりますね。あの2人からは熱い決闘者魂を感じマース。」

その隣にいるペガサスも2人の決闘を絶賛する。

「（ナ、何故ナーノ。何故私があんなドロップアウトボ～イの決闘に見入ってル～ノ！？）」

それは、隅っこでこの決闘を見ているクロノスも同じだった。

「あらあら、遊が当等ダメージ受けちゃったわ。」

「…にゃあ。」

遊夜の不利に乙女と希は心配そうに見つめる。

「あっのバカ！油断してるからそうなるのよ！！」

「えぇーい！負けるなぁー遊夜ーっ！！」

それとは対照的に遊夜に檄を飛ばす文乃と千世。だが、当の遊夜は落ち込む所か

元気いっぱいだった。

「へへへ、やるなぁ十代！！」

「おうよ！俺はいつでも全力だぜ！！！」

「なら俺も、全力でぶつかって行くぜ！！俺のターン！ドロー！！」

カードを引いた遊夜は即座に次の一手を決断する。

「リバースカード、オープン！『リビングデッドの呼び声』！！

墓地からモンスターを復活させる！！蘇れ！『蒼雷郷の蝮』！！」

蒼雷郷の蝮　☆３　光　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／０

遊夜の場に再び蒼白く光る蛇が現れる。

「さらに手札から『蒼雷郷の隠密』を召喚！！」

蒼雷郷の隠密　☆３　風　雷族　ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／０

遊夜の場に蒼白い雷を身にまとった忍者が現れる。

「モンスター２体をそろえたか……！！」

「行くぞ十代！！☆３『蒼雷郷の隠密』に☆３『蒼雷郷の蝮』をチューニング！」

蝮が緑色のリングとなり、隠密もその身を3つの星に変える。
そして一直線に3つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天へ昇る刃となる。雷鳴と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の人斬り、『蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ』！！」

蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ　☆6　風　雷族　ＡＴＫ／２３００
ＤＥＦ／１９００

光が弾けその中から、蒼い和服に身を包み刀を二本持ち
背にいくつもの武器を持った武者が姿を現す。

「さらに、『蒼雷郷の蝮』の効果発動！！
このカードをシンクロ召喚の素材にされた時デッキからカードを1枚ドローする！！」

ドローしたカードを見た遊夜の表情が微笑む。

「（何だ、何を引いた！？）」
「俺はカードを1枚セットし、手札から魔法カード『大嵐』を発動！！
場の全ての魔法・罠カードを破壊する！！」

決闘場に突風が吹き荒れ、全ての魔法・罠カードを破壊する。
それは、ヒーローの舞台スカイスクレイパーも同じだった。

「くっ！『スカイスクレイパー』がっ！！」
「そして当然、俺が伏せたカードも破壊される。」
遊夜の言葉に『なっ！？』と気づく十代。その通りだ、大嵐は場の全ての
魔法・罠カードを破壊するのだ。ならば当然、遊夜が伏せたカードも破壊されるのは
至極当然のことだ。にもかかわらず、遊夜は大嵐を使ったのだ。
「そのカードって……まさか……！！」
十代の言葉にニヤッと微笑む遊夜。
「その通り！俺の伏せたカードは『時雷火（じらいか）』！！
セットされたこのカードが破壊されたとき、相手に５００Ｐのダメージを与える！！」
「何っ！！？」
十代の足元が輝きだし、そこから放たれた赤い電撃が十代を襲う。
「うわぁぁぁっ！！」
十代：ＬＰ／３２００⇒２７００
「まだまだ行くぞ！行け！！『蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ』で
『フレイム・ウィングマン』を攻撃！！“蒼雷（そうらい）　乱曲斬（らんきょくざん）”！！」
ライゾウは背の武器を投げつけ、さらに自分の持つ二刀で
フレイム・ウィングマンを斬り裂く。

十代：ＬＰ／２７００⇒２５００

「さらに！！『ライゾウ』のモンスター効果により、戦闘で相手モンスターを破壊した事で相手に６００Ｐのダメージを与える！！
“蒼雷（そうらい）　波動（はどう）”　！！」

ザンゾウの体から発せられた電撃が十代を襲う。

十代：ＬＰ／２５００⇒１９００

「そして『ライゾウ』は戦闘で相手モンスターを破壊する度に攻撃力を６００Ｐアップする！！」

蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ　ＡＴＫ／２３００⇒ＡＴＫ／２９００

「俺はさらに、カードを2枚伏せターンエンドだ！
どうだ十代！少しずつ追いついてきたぜ！！」

遊夜の言葉に十代は『へへ』と微笑み返す。

「さすがだな遊夜。だけど俺だってまだまだ負けないぜ！！」

十代の言葉に遊夜もまた微笑み返す。

「一進一退の攻防とはよく言うが、２人の決闘はまさにそれだな。」

三沢の言葉に『確かにな』と返す大吾郎。それに対し家康も感心するかのように口を開ける。

「こりゃもう、どっちが勝ってもおかしくないぜ。」
「たしかにそうなんだなぁ。」
「アニキ……遊夜君……」

家康の言葉に隼人と翔も関心を寄せるように答える。

「この勝負、もはやどちらに軍配があがってもおかしくない。」
「たしかに、それほどの熱戦ね。」
「ま、２人共強いからねぇ～。」

亮の言葉に同意する明日香と叶絵。

「行くぜ！俺のターン！！」

そんな周囲の状況も自分の手札が０枚という不利も気にせず十代はワクワクとした笑顔のままカードを引き、微笑む。

「俺がドローしたカードは『Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン』！
札がこのカード１枚だけの時、このカードを特殊召喚できる！
俺は守備表示で特殊召喚！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　☆４　水　戦士族　ＡＴＫ／８００

ＤＥＦ／１２００

十代の場に、某アメリカヒーローのような戦士が現れる。

「さらに『バブルマン』の召喚時、俺の手札と場に他のカードがない場合
デッキからカードを2枚ドローできる！！」

バブルマンの効果でカードを2枚手札に加えた十代はさらに微笑む。

「カードを1枚伏せ、手札から魔法カード『天界よりの宝札』を発動！！
互いの手札が3枚以下の時、互いのプレイヤーは手札が5枚になるようドローする！！」

十代の言葉に遊夜は自分の手札に視線を向ける。

「俺の手札は2枚、3枚ドローか。」
「そして俺の手札は0だから5枚ドローだ！！」

互いに手札を補充する遊夜と十代。

「よし！準備は整った！！」

十代の言葉に『なに！？』と返す遊夜。
「俺は墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　ネクロダークマン』の効果発動！！」

十代の言葉と同時に、十代の後ろに赤い悪魔のようなヒーローが薄っすらと現れる。

「何!?」
「こいつが墓地にある時、1度だけ『E・HERO』を生け贄なしで召喚できる!!
来い!!『E・HERO エッジマン』!!」

E・HERO エッジマン ☆7 地 戦士族 ATK/2600
DEF/1800

十代の場に、金色に輝くヒーローが現れる。

「なるほどな。家康、君が言っていたのはこのことか。」

三沢の言葉に『あぁ』と返す家康。一方、どういう事か全く分からない翔と大吾郎。

「え?え?どういう事っすか?」
「う、うむ、全く分からん。」

翔と大吾郎に『はぁ』と呆れた家康はしょうがないという感じで説明する。

「十代は『サンダー・ジャイアント』の効果を使う時に
『ネクロダークマン』を墓地に送ってたんだよ。
俺はそれをちゃんと見てたってわけ。」

家康の言葉を聞き、大吾郎は先程の家康の言葉を思い出す

（「それに十代が墓地に送ったカードも、今後どう使われるか……だな。」）

「あれはそう言う意味だったのか。」

大吾郎の言葉にコクリと頷く家康。

「まだまだ行くぜ遊夜！俺は手札から魔法カード『闇の量産工場』を発動！！
墓地の通常モンスター2体を手札に加える！！
俺はこの効果で『フェザーマン』と『スパークマン』を回収する！！
そして場より『融合』を発動！！」

十代の融合使用に『やはり！』と呟く遊夜。

「手札の『フェザーマン』と『スパークマン』、場の『バブルマン』を融合！
現れろ！！『Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター　☆８　風　戦士族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２８００

十代の場に白い翼は生やし、右手にレーザー銃を装着したヒーローが現れる。

「あらら、ここで融合。」
「「遊夜！！」」
「にゃあっ」

その十代の見せた光景に、乙女は少し驚いたように
文乃と千世は遊夜のピンチに絶叫を上げ、普段無表情の希も心配そうに見つめる。

「まだまだ行くぜ！魔法カード『受け継がれる力』を発動！！
俺の場のモンスター1体をコストに、俺の場のもう1体のモンスターの攻撃力を
コストにしたモンスターの攻撃力分アップする！！
俺は『エッジマン』をコストに『テンペスター』をパワーアップ！！」

E・HERO　テンペスター　ＡＴＫ／２８００⇒ＡＴＫ／５４００

「攻撃力、５２００……」
「行くぜ遊夜！！『テンペスター』で『ライゾウ』を攻撃！！
“カオス・テンペスト”！！！」

テンペスターのレーザー銃より放たれる青い熱線がライゾウに迫る。

「この攻撃が決まれば、アニキの勝ちだ！！」
「いや、ここで終わるあいつではない！！」
「こらぁー！！負けんな遊夜――――――！！」
「負けたら１００回殺すわよ！！！」

「にゃあぁっ！」

思い思いの言葉と思いが交差する中、遊夜は、笑っていた。

「悪いけど、そう簡単には負けないさ！！
罠発動！！『和睦の使者』！！発動ターン俺のモンスターは
戦闘では破壊されず戦闘ダメージも０となる！！」

見えない壁の様なものが遊夜とライゾウを守る。
「へへ、やっぱそう簡単にはいかないか。俺はカードを１枚伏せる、
このターンのエンドフェイズに、『テンペスター』の攻撃力は元に
戻る。」

Ｅ・ＨＥＲＯ　テンペスター　ＡＴＫ／５４００⇒ＡＴＫ／２８００

「ターンエンドだ！」

「うむ、これでまだチャンスがあるな。」

大吾郎の言葉に『だね』と返す翔。

「アニキの場には攻撃力２８００の『テンペスター』、遊夜君の場
には
攻撃力２９００の『ライゾウ』。アニキが少し不利かな？」
「いや翔、まだ分からないぞ。」

翔の考えを否定する隼人に『確かにな』と同意する三沢。

「場の状況的には遊夜が有利のうえに遊夜には十代の『天界よりの宝札』により
補充した手札がある。あの手札に逆転のカードがないとは思えない。」
「それに、長い付き合いだから分かるんだよなぁ。」
そう言い家康は視線を遊夜へ向ける。
「あいつ、決闘で諦めた事が一度もないんだよなぁ～。」

「行くぜ俺のターン！ドロー！！」
引いたカードを見た遊夜は、『あっ』と目を丸くする。
「《ようやく引いてくれたな、主よ。》」
「（狼（ウォルフ）、よくこのタイミングで来てくれた。）」
そう言いニコッと微笑む遊夜。その姿に十代も微笑む。
「それがお前の精霊なんだな。」
「！！十代、やっぱり見えてるんだね？」
十代の言葉に遊夜はさほど驚かず答える。
「あぁ、俺にもいるからな。なっ相棒！」
そう言い十代は自分の肩に乗るハネクリボーに視線を向ける。

「《クリクリ～》」
「へへ、なら早速行くぜ十代！俺は場の永続罠『ミニチュアライズ』を発動！！
選択したモンスター1体のレベルを1つ下げ、攻撃力を1000Pダウンさせる！！
俺は『ライゾウ』を選択！」

蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ　☆6⇒☆5　ＡＴＫ／２９００⇒ＡＴＫ／１９００

ライゾウの体が見る見る小さくなっていった。

「なにっ！？」

遊夜の行動に疑問を抱える十代。なぜ『テンペスター』ではなく自分のモンスターを選ぶのか、その疑問はこの会場内にいる全員が思った。
だが、当の遊夜は気にも止めず決闘を続ける。

「さらに俺は、チューナーモンスター『蒼雷郷の銀狼』を召喚！！」

蒼雷郷の銀狼　☆３　風　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１００

遊夜の場に白銀に輝き、蒼いオーラをまとった狼が現れる。

「！！へっそう言うことか！！」

この時十代は遊夜の狙いが読めた。ワザワザ自分のモンスターの攻

撃力を下げたのは
攻撃力ではなくレベルを下げるため、シンクロ召喚のためなのだと。

「十代！お前は最高の決闘者だ！だから俺は、俺の最高のカードで迎え撃つ！！」
「あぁっ！！来い！！」
「行くぜ！！☆5となった『ライゾウ』に☆3の『蒼雷郷の銀狼』をチューニング！」

銀狼が緑色のリングとなり、ライゾウもその身を5つの星に変える。
そして一直線に5つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天へと昇る翼となる。落雷と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の守護龍、『蒼雷郷龍（そうらいきょうりゅう）―スカイサンダー・ドラゴン』！！」

蒼雷郷龍（そうらいきょうりゅう）―スカイサンダー・ドラゴン　☆８　光　雷族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２５００

光が弾けその中から、所々を蒼い甲冑で堅め蒼い翼を生やした蒼白く輝く東洋の龍が姿を現す。
その威風堂々とした姿に、会場の殆どの者が息を呑む。

「すげぇ……」
「十代！これが俺の親父がデザインした最後のカードにして俺のエース！！
『蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン』だ！！」

スカイサンダー・ドラゴンに感激する十代に遊夜は誇らしげに語る。

「あれが“白鋼　遊斗”さん、彼の父が残した最後のカード……」

そう言い鮫島は視線をペガサスへと向ける。

「イエース！あれこそあのデッキのエース！遊夜ボーイはその召喚に成功しましタ！
私は猛烈に感激してマース！！」

ペガサスはまるで自分の事のように喜ぶ。その端でクロノスもまた他の者達同様にスカイサンダー・ドラゴンの威風堂々とした姿に息を呑む。

「あ、あれが彼のエース……す、すごいノーネ……」

ただただ目を丸くしそれだけ呟いた。

「あれが、遊夜のお父さんが最後にデザインしたカード……」

特別観客席で見ていた文乃はそう呟く。

「ふむ、私のエース程ではないけど中々……」
「わぁ、凄いねぇ～かっこいいね～。」
「にゃあ。」

他の３人、千世・乙女・希も言葉こそ違えどスカイサンダー・ドラ

ゴンを称えている。

「へへ、やるなぁ遊夜。」

十代は遊夜のエース召喚にもあくまで楽しんでいる。

「だけど、攻撃力は互角！相打ちするぜ？」

「それはどうかな？」

遊夜の言葉に『なにっ！？』と返す十代。

「見せてやるぜ！『スカイサンダー・ドラゴン』の効果発動！！
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の場のモンスターを全て破壊できる！！喰れ！！“蒼覇落雷撃（そうはらくらいげき）”！！」

スカイサンダー・ドラゴンの身体から放たれた蒼い稲妻が天へと昇り天より注がれる蒼い落雷となりテンペスターを破壊する。

「なにっ！？」

「さらに！『蒼雷郷の銀狼』の効果により
『スカイサンダー・ドラゴン』の攻撃力が１０００Ｐアップする！！！」

蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン　ＡＴＫ／２８００⇒ＡＴＫ／３８００

「攻撃力３８００！？」

「バトルだ！！『スカイサンダー・ドラゴン』でダイレクトアタック！！轟け！！“天鳴蒼雷破（てんめいそうらいは）”！！」

スカイサンダー・ドラゴンの口から放たれた蒼い稲妻が十代に迫る！！

「アニキ！！」
「これが決まれば遊夜の勝ちだ！！」
「いよっしゃぁー！！行けぇ遊夜――――――！！」
「あっ」
「にゃあっ」

だが、十代の口元は笑っていた。

「罠発動！『攻撃の無力化』！！相手モンスターの攻撃を無効にしバトルフェイズを終了させる！！」

十代の場に出現した次元の穴に蒼い稲妻が吸い込まれていく。

「あっちゃ、これは決まったと思ったんだがな。
俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「……ふうぅ、ついに決着が付いたのかと思った……」

そう言い翔は深く息をする。それは、他の皆も同じだった。

「俺も、言葉が全くでなかったんだぁ」
「恥ずかしながら、俺もだよ。」
「にしても、遊夜の親父さんが作ったカードがこれ程とはなぁ。」
「うむ、武者震いがする……」

「これでまた、決着は付かずね。」

そう呟く明日香に『あぁ』と返す亮。

「にしてもいいなぁ遊っちは。あんな凄いカード持ってるのって。」

叶絵はのほほ～んと答えるが、その言葉に対し亮は『だが』と言い放つ。

「恐らくあの『スカイサンダー・ドラゴン』には、まだ何か能力があるそんな気がするな。」

「行くぜ俺のターン！ドロー！！」

引いたカードを見た十代は『よし』と頷く。そして視線を遊夜へ向ける。

「さすがだぜ遊夜！最高の決闘だぜ！！」

「あぁ、俺もそう思う！」

そう言い互いに笑いあう遊夜と十代。

「だから俺も、俺の最高のカードを使うぜ！！」

十代の言葉に『あぁ来い！』と返す遊夜。

「行くぜ！俺は手札から『ミラクル・フュージョン』発動！！
俺の場か墓地から融合モンスターによって決められたモンスターをゲームから除外し、『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のつく融合モンスターを融合召喚する！！
俺は墓地の『フレイム・ウィングマン』と『スパークマン』を融合！！
現れろ！！『Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン
☆８　光　戦士族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２１００

十代の場に白いボディをし、黄緑色に輝くヒーローが現れる。

「すごい……」
「へへ、どうだ遊夜！これが俺の出せる最強のヒーロー！
『シャイニング・フレア・ウィングマン』だ！！」

シャイニング・フレア・ウィングマンに見惚れる遊夜に十代は誇らしげに語る。

「だけど、攻撃力なら『スカイサンダー・ドラゴン』の方が上だ！」
「それはどうかな？『シャイニング・フレア・ウィングマン』は墓地に眠る『Ｅ・ＨＥＲＯ』１体につき攻撃力が３００Ｐアップする！！
俺の墓地にいるヒーローは全部で８体！よって２４００Ｐアップ！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン　ＡＴＫ／２５００⇒ＡＴＫ／４９００

「攻撃力４９００……すごすぎだぜ十代！！」

その圧倒的な攻撃力に遊夜は怯む所か益々楽しんでいる。

「よし！行くぜ遊夜！！『シャイニング・フレア・ウィングマン』で『スカイサンダー・ドラゴン』を攻撃！！」

十代の声と共に、シャイニング・フレア・ウィングマンは上昇しスカイサンダー・ドラゴンに向かい合う。

「光輝け！！“シャイニング・シュート”ーッ！！！」

シャイニング・フレア・ウィングマンが輝きだし両手から放たれる黄緑色の閃光がスカイサンダー・ドラゴンに迫る。

「そうはさせない！リバースカードオープン！『スパーク・バリア』！！

自分の場に雷族モンスターが存在する時、相手モンスターの攻撃を無効にする！！」

ヒーローの閃光を黄色い稲妻が阻む。

「更にその後、デッキからカードを1枚ドローする！！」

遊夜は見えない壁によりダメージを回避しながらカードを引く。

「（！！このカード……）」

そのカードを見た遊夜が目を丸くする中、十代は決闘を進める。

「俺はカードを1枚伏せてターンエンド！！」
「俺のターン！！」

遊夜は引いたカードと自分の手札の状況を確認する。

「そろそろ決着をつけようぜ十代！！」
「おう！来い遊夜！！」

十代の言葉に『あぁっ！！』と返した遊夜は手札のカードに手を伸ばす。

「俺は装備魔法『サンダー・プロテクター』を『スカイサンダー・ドラゴン』に装備！
装備した雷族モンスターの攻撃力を５００Ｐアップ！！」

蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン　ＡＴＫ／３８００⇒ＡＴＫ／４３００

スカイサンダー・ドラゴンの周囲に黄色い稲妻が巻きつきそのままスカイサンダー・ドラゴンのオーラとなる。

「バトル！『スカイサンダー・ドラゴン』で『シャイニング・フレア・ウィングマン』を攻撃！！」

遊夜の言葉と共に天へ飛び立つスカイサンダー・ドラゴン。
だが、この攻撃宣言に殆どの者が動揺する。

「何でだ！？『シャイニング・フレア・ウィングマン』の方が攻撃力は上なんだぞ！？

それに『シャイニング・フレア・ウィングマン』には戦闘でモンスターを破壊した時
破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える効果があるんだぜ！？」

十代の言葉に対して『承知の上だ！』と返す遊夜。

「手札より速攻魔法『突進』を発動！モンスター１体の攻撃力を７００Ｐアップさせる！！」

蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン　ＡＴＫ／４３００⇒ＡＴＫ／５０００

「攻撃力ガ、５０００になったノーネ！！」

その攻撃力に思わず声を上げるクロノス。それは、校長・鮫島も同様だった。

「素晴らしい、素晴らしいですぞぉ２人共ぉ――――――っ！！！」

鮫島に釣られ、他の皆も声を荒げていく。

「ゴーゥ！！ユーヤボーイ！！」
「行けぇ遊夜！！」
「負けるなアニキ――――――っ！！」
「２人共がんばれ――――っ！！」
「フレフレ――――――っ！！」
「負けんじゃないわよぉ！！」

「負けたら１００万回殺すわよ――――っ！！」
「にゃあぁぁっ！」

「へへ、そう来たか！だけど俺だって！！場から速攻魔法『異次元からの埋葬』！！
除外されているモンスターを3体まで墓地に戻す！！
俺は『ミラクル・フュージョン』の効果で除外した『フレイム・ウィングマン』と
『スパークマン』を墓地に戻す！！そして墓地のヒーローが増えた事で
『シャイニング・フレア・ウィングマン』の攻撃力が更にアップ！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン　ＡＴＫ／４９００⇒ＡＴＫ／５５００

「攻撃力５５００……すごい、すごいぜ十代！！」
「あぁ、お前もすごいぜ遊夜！だけど勝つのは俺だ！！」

シャイニング・フレア・ウィングマンがスカイサンダー・ドラゴンを迎え撃つために
光り輝きながら天へと上昇する。

「俺の勝ちだ遊夜！！」

だが十代の言葉に対して『どうかな？』と返す遊夜。

「俺は墓地の『時雷火』の効果発動！！」
「なにっ！？墓地から発動だって！？」

遊夜の行動に驚きを隠せない十代。

「このカードをゲームから除外することで、エンドフェイズまで
雷族モンスターの攻撃力を５００Ｐアップさせる！！」

蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン　ＡＴＫ／５０００⇒ＡＴＫ
／５５００

「『シャイニング・フレア・ウィングマン』と並んだ！？」

「行くぞ十代！！」

遊夜の雷龍が全身を蒼白く輝かせ、十代のヒーローが白く輝き
今ここに対峙する。

その光景に、会場の面々は先程の絶叫も忘れ言葉が出なくなる。

「轟け！！　“天鳴（てんめい）蒼雷破（そうらいは）”　ぁぁっ！！！」

「迎え撃て！！　“シャイニング・シュート”　ォォォーッ！！！」

スカイサンダー・ドラゴンの口から放たれた蒼い稲妻と
シャイニング・フレア・ウィングマンの両手から放たれる黄緑色の
閃光が
空中でぶつかり合い相殺、その衝撃波で爆発が起き一帯が煙に包ま
れる。

「くっ！」

「ぐぅっ！」

２人が爆風に耐える中、徐々に煙が晴れていく。
「（くそ、『シャイニング・フレア・ウィングマン』が……
だけど、遊夜の『スカイサンダー・ドラゴン』も……）」

十代は心の中でそう考えていた。
そして徐々に煙が晴れ、決闘場が確認可能になった時、十代は衝撃を受ける。
そこには、シャイニング・フレア・ウィングマンと相殺したはずのスカイサンダー・ドラゴンが健在だったのだ。

「なにっ!!?」
「迂闊だったな十代。」

驚く十代に遊夜は口を開いていく。

「『サンダー・プロテクター』は装備モンスターが戦闘で破壊される時
このカードを身代わりにする事ができる。」

蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン　ＡＴＫ／５５００⇒ＡＴＫ／５０００

「くっそんな効果があったのか!」
「あぁ、そして十代、このターンがラストだ!」

遊夜の言葉に『どういう事だ!?』と返す十代。
確かにそうなのだ、遊夜の場にいるのは『スカイサンダー・ドラゴン』１体のみ。
これ以上攻撃できるモンスターもいなければ伏せカードもない。

この状況でどう最後にするというのだ。

「行くぜ！『スカイサンダー・ドラゴン』の効果発動！！
このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、墓地の雷族モンスター１体を
ゲームから除外することで、このカードはもう１度だけ攻撃する事ができる！！
俺は『蒼雷郷の剣客』を除外する！！」

遊夜が除外した剣客が、スカイサンダー・ドラゴンに吸収され蒼いオーラへと変わる。

「……！！」
「これで最後だ！『スカイサンダー・ドラゴン』で十代にダイレクト・アタック！！
“天鳴（てんめい）　蒼雷破（そうらいは）”　！！！」

スカイサンダー・ドラゴンの口から放たれた蒼い稲妻が十代を襲った。

「うわぁぁぁぁぁ！！！！」

十代：ＬＰ／１９００⇒０

十代はその攻撃をまともに喰らい、仰向けになって倒れた。

その光景にシンと静まり返った開場は一気に怒涛の歓声に包まれた。

「すごかったぞー！十代！！」

「遊様ステキー！！！」
「よくやったぞぉ！！」

そんな言葉と共に開場の全ての人が総立ちになり決闘場の２人に拍手喝采となる。
その中には、翔・隼人・三沢・家康・大吾郎・明日香・亮・叶絵・文乃・千世・希
そして乙女も惜しみない拍手を送っていた。

「くっそぉ負けたかぁ！！」

そう言う十代だったが、その表情に悔しさはあまりない。十代は起き上がると
遊夜の所へ駆け寄る。

「すげぇな遊夜！お前のカードやっぱすげぇよ！！」
「あぁ、ありがと。でも十代だってすごいよ。」

互いに相手を讃称しあう遊夜と十代は、やがて互いの手を握り合い同時に口を開く。

「「ガッチャ！楽しい決闘だったぜ！！」」

そう言い合った時、校長よりアナウンスが入る。

「《見せてもらいましたよ、白鋼　遊夜君に遊城　十代君。

君達のデッキへの信頼感、モンスターたちとの厚い友情、勝負を捨てない決闘魂、
そして何よりもお互いを認め合い決闘を楽しむその心。それはここにいる全ての者が
認めることでしょう。ここで2人にペガサス会長からのお言葉があります。≫」

鮫島はそう言い、マイクをペガサスへ渡す。

「≪遊夜ボーイ！十代ボーイ！ユー達の決闘は私が見て来た決闘の中でも
特に印象の残る物でしタ！できればこれ程の決闘をしたユー達2人には
何かプレゼントをしたい所デース！ですが……≫」

そう言いペガサスは視線を遊夜に向ける。

「≪遊夜ボーイ、ユーには今日渡に来た『スカイサンダー・ドラゴン』しか
ありまセーン。何もあげる事ができなくて申し訳ありまセーン。≫」

しかし、ペガサスの言葉に遊夜は首を横に振る。

「何言ってるんですかペガサス会長。あなたは両親を失った俺を育ててくれた、
親父が残したカードを作り上げて俺に渡してくれた。
俺にはそれだけで十分なプレゼントですよ。」

遊夜の言葉にペガサスは感動する。

「《ユーは本当にいい子ですネ。では十代ボーイ、ユーに尋ねマース。
ユーのデッキに『Ｅ・ＨＥＲＯ　ボルテック』は入ってますカ？》」
ペガサスの言葉に『へっ？』とキョトンとなった十代は
慌ててデッキからボルテックを取り出す。
「あぁ、あるぜ！」
それを見たペガサスはコクリと頷き口を開く。
「《そのカードは最近出た新しいヒーローデース。十代ボーイ、ユーには
これを差し上げまショーウ。》」
そう言い取り出したのは、銀色に輝くカードパックだった。
「《この中には、最近Ｉ２社が考案した新たなるヒーローが入っていマース。
これをユーに差し上げマース。》」
ペガサスの言葉に『マジで！？』と驚きながらも喜ぶ十代。
「《私はそろそろ帰らねばなりまセーン。後で取りに来てくだサーイ。》」
そう言いペガサスは会場を去って行った。
その後、ペガサスが帰るというので遊夜達はヘリポートまでやって

来ていた。

「十代ボーイ、これを。」

そう言いペガサスは先程言っていたパックを十代に渡す。

「おぉぉっ!!ありがとう会長さん!!」

十代は興奮しながらそのパックを受け取る。ペガサスは視線を遊夜に向け
耳元で小声で囁く。

「“霧谷　希”に関して、私も調べてみマース。」

「!!」

ペガサスの言葉に目を丸くする遊夜。
それと同時に、なぜペガサスが学園を訪れたのかを理解する。
希は住所も家族も不明なのだ。それだけなら警察に調べてもらう所だが
希は、遊斗が考案したシンクロモンスターまで持っているとなると
警察よりも世界にネットワークを持つＩ２社のペガサスの方がいいと
鮫島校長考えたのだろう。
それを察した遊夜はコクリと頷く。それを見たペガサスは乙女に近づく。

「ユーが都築　乙女ですカ、話は常々遊夜から聞いていマース。」

「あらあら、遊ってば私のこと何て言ってたんですか?」

「えぇ、自由翻弄でつかみ所がない性格だけど
天使のように優しい姉だと言ってました。」

ペガサスの言葉を聞いた乙女は『まぁ♪』と喜び、他の者からも冷やかしが上がる中1人やや不服そうに見つめる文乃。
その姿に気づいたペガサスが今度は文乃に接近する。

「もしやユーは、芹沢　文乃ですカ？」
「え？そ、そうですけど……何か？」

その言葉を聞き、ペガサスはニコッと微笑む。

「そうですか、ユーの事も遊夜から聞いてますよ。
ちょっと泣き虫でとても優しい自慢の幼馴染だと。」

ペガサスの言葉に『なっ！？』と顔を赤くする文乃。
その横で他のギャラリー達はヒソヒソと小声で話し合う。

「なぁ、文乃って泣き虫なのか？」
「全然見えないっす。」
「確かに、そうは見えないんだなぁ。」
「どーせあれだろ、昔の話だって。」
「うむ、人間時がたてば性格は変わるものだからなぁ。」
「残念だけど、文乃が泣き虫とは思えないわ。」
「私も」
「ですわね。」
「きっと昔はそうだったんだよ。」
「芹沢文乃が泣き虫で優しい？絶っっっ対ありえないわ！」

皆の口々の言葉に表情が怒りへと変わっていく。

「あんた達～……２００回死ねぇぇぇぇぇぇっ！！！」

殴り掛かろうとする文乃だったが、遊夜と乙女と希に止められる。

「まぁまぁ文乃ちゃん落ち着いて。」
「にゃあ。」
「大丈夫だよ。文乃さんが優しいのは俺が保障するから。」
「あんたなんかに保障されたかないわよ！２回死ね！！」

騒々しくも微笑ましい姿に、ペガサスはくすっと微笑む。

「ふふふ、良い友人達を持ちましたね遊夜ボーイ。」

そう言いペガサスはヘリに乗り込む。

「その愉快な友人達と共に決闘者として成長しなサーイ！！
また会いましょう、我が息子ユーヤ！！」

そう言いペガサスはヘリでＩ２社へと帰って行く。
その姿を、遊夜達は姿が見えなくなるまで見送った。

その後、十代は貰ったカードを良く見ずにデッキに入れ
遊夜ともう１度決闘をしようとした。むろん遊夜は二つ返事でＯＫを出したが
『もう遅いから』と乙女に止められ、十代はレッドの翔・隼人・大吾郎の３人に
遊夜は乙女とブルー女子達に引きずられて帰って行ったのは全くの蛇足である。

『～第四章～　遊夜ＶＳ十代　招来する雷龍　《終》』

～第四章～　遊夜ＶＳ十代　招来する雷龍（後書き）

どうも、黒鋼です。
今回は前回の続き、テスト後編オリジナルのお話です。
遊夜と十代の２人を決闘させるのは前々から計画していましたが、
悩んだのはどんな決闘にするかではなくどちらを勝たすかでした。
引き分けもいいかなと思いましたが展開思いつかず、悩んだ末に
遊夜が新しいカードを手に入れて勝つという展開にしましたが
如何だったでしょうか？
ちなみに、その仮定で十代の手札補充でも悩みました。
アニメ版『天よりの宝札』を使おうとも考えましたが、
あまりにも強いから弱体化させ『天界よりの宝札』にしましたが
これはどうだったでしょうか？

さて、ここで読者の皆様に再びちょっとしたお願い。
主人公の姉（？）“都築　乙女”何ですが、実は彼女のデッキも
アイディアが出てこないのです。そこで、読者の皆様から
再び感想を通じて彼女のデッキアイディアを大募集します！！
オリジナルでもいいので、バシバシ送ってくださいね！！お待ちして
てま～す。

今回の最強カード『蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン』
☆８　光　雷族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２５００　シンクロ
モンスター
雷族チューナー＋雷族を含むチューナー以外のモンスター１体以上
このカードはドラゴン族モンスターとしても扱う。
このカードがシンクロ召喚に成功した時、

相手の場のモンスターを全て破壊する事ができる。
このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、墓地の雷族モンスター1体を
ゲームから除外することで、このカードはもう1度だけ攻撃する事ができる。

遊夜のデッキのエース。
彼の父遊斗が最後にデザインしたカード。
外見的にはスターダストを東洋風にしたみたいな感じ。
ちなみに、その名前を決定するのに1時間掛かりました。

～第五章～　廃寮、闇の決闘・前編　十代ＶＳタイタン（前書き）

※注意！！※
このお話は、遊戯王デュエルモンスターズＧＸの「第５話　闇のデーモンデッキ」と「第６話　ハネクリボーの奇蹟」の回ですが、
作者独自の設定があります。ご了承ください。

～第五章～　廃寮、闇の決闘・前編　十代ＶＳタイタン

テストが終わったある日の放課後、
遊夜は十代達に廃寮に行かないかと誘われていた。

「廃寮？」

十代達が言うには、その廃寮は昔この学園の特待生達の寮だったらしいのだが
その寮では闇のゲームに関係する研究をしていたらしく、同時に何人もの生徒が
行方不明になっているらしい。

「俺もその噂は聞いた事あるけど、あそこって立ち入り禁止じゃなかったっけ？」

注意する遊夜だったが『いいじゃん、行こうぜ！』と十代は聞く耳持たない。
隣にいる翔や隼人、それに大吾郎も『無理無理』と首を振っている。

「面白そうじゃん。俺も行くぜ。」
「あたしも行くＺＥ（ゼ）！」

さらに話を聞きつけた家康と叶絵も現れ、行く事に同意する。
その状況に遊夜は軽くため息を付く。

「ま、旅は道連れ世は情け。いいよ、俺も行く。」

遊夜の言葉に『よっしゃ！』とガッツポーズをとる十代であった。

同時刻、ここはデェエルアカデミアの孤島の灯台。
ここに、黄色いおかっぱ頭がトレードマークの教師―クロノスがいた。

「ンー、そろそろなノーネ？」

そう呟いた直後、後ろから足音が聞こえたクロノスが振り向くと
そこには、黒いコートと奇妙な銀の仮面を着用した大柄な男がいた。

「オゥ。貴方が自称、“闇の決闘者（やみデュエリスト）”の“タイタン”なノーネ？」

クロノスの言葉にタイタンと呼ばれた男はコクリと頷く。

「早速依頼の件だが、この学園の廃寮でＨＥＲＯ使いの決闘者を倒せばよいのだな？」
「そうなノーネ、実行は今日の夜中。
その決闘者がその廃寮に肝試しに行くはずなノーね。」

クロノスの言葉に『そこを狙えばいいのだな？』と返すタイタン。
実はクロノスは昨晩レッド寮で十代達が
廃寮の探検に行く事を盗み聞きしていたのだ。そこで、その噂を利用し
十代をアカデミアから消そうとしているのである。

「ではもう１つ、ギャラの話だ。私のギャラは一律、依頼人に
どんな事情があろうと関係ない。必ず依頼人の給料３ヶ月分だ。」

給料3ヶ月分という言葉に表情を歪ますクロノスだったが、
『背に腹はかえられない』とタイタンの要求を承諾した。

「では私は、その廃寮とやらの中を見てくる。」

そう言いタイタンはその場を後にした。
それを確認したクロノスはニヤニヤと笑い出す。

「ウフフッ、ムハハーハッ！
これであの生意気なドロップアウトボーイを始末できるノーネ！噂話を利用して
ドロップアウトボーイが消えるのなーラ、誰にとっても問題ないーノネ！
ホッホホホホ、ニュハーハハ！！」

デュエルアカデミアの夕焼けの空に、クロノスの笑い声が木霊したのだった。

一方、廃寮にやって来たタイタンは廃寮内を探索しながら何やらブツブツ呟いていた。

「ふふふ、闇の決闘者を名乗るだけでここまでの利益が手に入るとはな。
これも全て、こいつのおかげだな。ふっはははははっ！」

そう呟いたタイタンの手には、金色に輝く逆三角形のペンダントがあった。
そう、彼は闇の決闘者などではない。
千年アイテムと偽ったペンダントを使い、相手を幻術に貶める犯罪

者なのだ。

「ふふふ、さてどうターゲットを迎え撃つかを考えねば……ん？」

そう考えていたタイタンは、ふと机の上に置いてある一冊の本を見つける。

「何だ、これは？」

タイタンがそう言うのも無理は無かった。その本は、何重にも鎖で縛られていたのだ。

まるで、この本を開いてはいけないかのように。だがタイタンは、まるで何かに吸い寄せられるようにその本を手に取り、鎖を砕き本を開ける。

「これは……」

そこには、1枚のカードがあった。とその時――――――

「《フハハハハハハッ！！感謝するぞ人間！！》」

突然、不気味な声と共に黒いオーラの様なモノがカードから吹き出した。

「な、何だこれはっ！！？」

その出来事に驚くタイタンに、黒いオーラが纏わりつく。

「《人間、貴様のお陰で我が封印は解かれた！これはその礼だ！貴様を我が傀儡にしてやろぉっ！！》」
「ひっ！た、助けてくれぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！」
恐怖の絶叫と共に、タイタンは漆黒の闇へ飲み込まれていった。

その日の夜中、人気のない夜道を進む影が６つ。
遊夜・十代・翔・隼人・家康・大吾郎の６人だった。

「ねぇ、叶絵さんは？」

翔の言葉に遊夜は『あぁ』と返す。

「それが、寮から出るのに少し苦労しているから先に行っといて、だって。」

遊夜の言葉に『そうっすか』と返す翔。と今度は、遊夜の口が開く。

「そういえば、こうして隼人と行動するのは始めてだね。」

遊夜の言葉に『え？』とキョトンとなる隼人。

「そういえば、隼人君が来たがるなんて以外だよね。」
「そういやそうだな。いつもは授業もサボるくせによ。」

遊夜の言葉に続くように翔と十代も言い放つ。その言葉に隼人は反論の言葉を上げる。

「別に俺、寝不精でも勉強が嫌いな訳でもないよぉ。ただぁ――」

「ただ？」
「…嫌なんだなぁ。決闘で勝つことだけの授業が。」
隼人の言葉にキョトンとなる面々。
「勝つ方法以外に決闘で勉強することってあるの？」
不思議そうな表情で聞く翔に言葉を詰まらす隼人だが
ここで遊夜が救いの言葉を言い放つ。
「あると思うよ。そりゃぁ、勝つことは大事だし、決して譲れないものだけど
それだけに拘ってる間は本当の意味での勝利を掴めないと思う。」
遊夜の言葉にキョトンとなる翔と、何となく微笑む隼人。
と、そんな話をしている内に廃寮へとやってきた時、遊夜は廃寮の入り口に
1輪の赤い薔薇が置いてあるのを見つける。
「なんか怖そ～、アニキやっぱり帰ろうよ～。」
「何言ってんだよ。ここまで来て止められるかよ。」
脅える翔を軽く叱咤する十代。
とその時、枝がパキリと折れる音がする。
「「「ひぃっ！！」」」
「むっ！」
「「誰だ！」」
「……」

その音に、翔・隼人・家康はビクッと震え、大吾郎は咄嗟に身構え遊夜と十代は懐中電灯を向ける。そこには――――

「やっほー、遅れてごめーん！」

ニコニコと笑いながら手を振る叶絵がいた。

「なんだ、叶絵か。脅かすなよ。」

十代の言葉に『ごめん、ごめん』と軽く謝る叶絵。

「いやー、寮から出る時に明日香達に見つかちゃってね～。誤魔化すのにちょっと時間掛かちゃってね♪」

「それでここまで来たという訳ね？」

「……へ？」

不意に聞こえた声に、一同は驚く。

声のした方に視線を向けると、そこには1輪の薔薇を持った明日香と文乃・千世・希、さらには千世のお付メイドの佐藤&鈴木がいた。

「あ、あれ～明日香に文乃にちーぽん、それに希ちゃ～ん、何でここに？」

引きつった笑顔で言う叶絵に、明日香達はそれぞれ答えて行く。

「あなたの事が気になって追ってきたのよ。」

「叶絵がニヤニヤして出て行くのは、大抵ロクでもない事のパターンが多いからね。」

「この私を除け者にしようなんていい度胸ね！つーか、ちーぽん言うな！！」
「……にゃあ。」
数名の言葉は意味不明だが、全員叶絵を追って来たのは間違いなかった。
「それで、あなた達は何をしているの。」
「俺達はちょいと夜の探検にね。」
明日香の質問にサラリと返す十代だが、明日香は更に打ち返した。
「あなた達知らないの？ここで何人もの生徒が行方不明になってるって。」
「そんな迷信、信じないね。」
明日香の言葉にあくまで歯向かう十代に『待った』と声を上げる遊夜。
遊夜は明日香の前に立つと、明日香が手に握っている1輪の薔薇に視線を向ける。
「……あの薔薇は、明日香さんが？」
そう言いながら遊夜は、廃寮の入り口にある薔薇を指差す。
「……えぇ。」
明日香の言葉を聞いた遊夜は、少し考えた後に再び口を開く。
「もしかして、ここで消えた生徒の中に知り合いでも？」

遊夜の言葉にそこにいた全員が『えっ!?』と目を丸くする中、
明日香は廃止寮の前に薔薇を置きながら答える。

「ここで消えた生徒の中には、私の兄もいるの。」

明日香の言葉に驚く面々。そんな中、『ふむ』と考え込む千世。

「……佐藤・鈴木!」
「「はっ」」

千世の指示に佐藤と鈴木は数枚の紙を取り出し千世に手渡す。

「梅ノ森さん、それは?」

遊夜の言葉に『ふふん』と鼻を鳴らす千世。
「明日香の兄“天上院(てんじょういん)吹雪(ふぶき)”の資料よ!
どうやら学園内では、こいつを含めて行方不明者は全員
“アメリカ・デュエルアカデミア”へ留学してることになってるわね!」

千世の言葉に更に驚く面々。
だが、明日香はこの事を知っていたのか特に驚かなかった。
とここで、遊夜は立ち入り禁止の柵を越え廃寮へと足を踏み入れる。
それを見た文乃は、声を荒げる。

「ちょ、ちょっと遊夜!あんた何勝手に入ってんのよ!!」
「…ペガサス会長が言ってたんだ。」

文乃の声にゆっくりと返す遊夜。

「闇のゲームは存在するって。」

「「「

「どうしたんだ翔？」

不意に翔が何かを見つけたらしく地面にひざまずく。拾ったのは１枚のカードだった。

「何だろこれ？見たこと無いカードだけど、えーと……『ダーク・ミスト』？」

翔がそう呟いた時、遊夜と十代と希のデッキからそれぞれの精霊が現れた。

「狼（ウォルフ）！？」

「《主よ！今すぐあのカードを捨てさせろ！！》」

「ハネクリボー？」

「《クリー！クリクリー！！》」

「にゃあ、キャット？」

「《フシュ――ッ！！》」

それぞれの精霊が翔の拾ったカードに対して敵意を表した、とその時――

「うわあぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！？？？」

突如、翔のカードからどす黒い霧が現れ遊夜達を包み込んでいく。

「ぎゃあぁぁぁぁぁぁっ！？」

「な、何なんだなぁ――――っ！？」

「も、もしや、これが闇のゲームかっ！？」

「ちょ、ちょっと！何が起こってるの！！？」

「うおぉぉっどうなってんの!?」
「ギャー!さ、佐藤!鈴木ー!!?」
「「お嬢様ぁぁぁっ!!」」

皆の絶叫が響く中、黒い霧が徐々に晴れて行き周りが確認できるようになった時
遊夜達の目に真っ先に飛び込んで来たモノ。
それは、廃寮全てを取り囲む巨大な魔法陣だった。

「な、何よこれ!?佐藤・鈴木!!」
「はっ!お嬢様!!」
「残念ながら、データがありません。分析不能!」

佐藤と鈴木の言葉に『何ですって!?』と驚く千世。

「…一体、何が起こって……」

「どうやら“闇の陣”が発動してしまったようだな主よ。」

「……へ?」

不意に聞こえてきた声に、遊夜は後ろを振り返る。
そこには実体化した遊夜の精霊、ウォルフがいたのだ。

「ウォ、狼(ウォルフ)!?」

その存在に驚く遊夜。そりゃそうである、
精霊が実体化して目の前にいるのだからこれで驚かない方がおかし

い。

「主よ、驚きたい気持ちは察するが落ち着け。あと、後ろの友人達もな。」

ウォルフに言われて『はっ！』となる遊夜。恐る恐る後ろを振り向くと――――

案の定、パニクってた。

「ななあななななななっ！！？」

「ちょ、ちょっと遊夜！何なのよその狼は！？喋ったわよね！喋ったわよねぇっ！！？」

「落ち着いてくださいお嬢様。」

「さ、深呼吸を。ひっひっふー」

「何なんすか一体！それ何なんすか！？」

「おいおいそれって……」

「うむ、もしやそれが以前言っていた精霊か？」

「まさか、精霊が本当にいるなんて……」

「精霊！？すごいじゃん遊っち！！」

「そうでもないぜ？」

最後にそう呟いた十代は自分の肩に視線をやる。

そこには、実体化したハネクリボーがいた。

「相棒、お前もだな。」

「クリクリ～。」

十代の言葉にニッコリと微笑むハネクリボー。

「ア、アニキのハネクリボーまで……」
その状況に唖然となる翔及び一同。
「でも、どうして実体化を……」
「主よ、それは“闇の陣”が発動してしまったからだ。」
ウォルフの言葉にキョトンとなる一同。
「闇の陣って、この魔法陣みたいなこれか？」
「いかにも。この陣には闇の力が作用されている。
この力でわしやハネクリボー、それにあの者も実体化したのだ。」
「あの者？」
そう呟いた剣は、ウォルフの視線の先に目をやる。
そこにはレスキューキャットの精霊が実体化していた。
「こいつって、希が持ってた精霊か？」
「クリクリ～。」
「む？」
十代達がレスキューキャットに視線を向けている間に、大吾郎はある事に気づく。
「そういえば、霧谷はどこだ？」
大吾郎の言葉に、一同は騒然となった。言われてみれば望みの姿が無い。
いや、希ともう1人足りなくなってる。

「てか、明日香もいないＺＥ！？」

叶絵の言葉に一同はさらに騒然とする。

とここで、レスキューキャットが口に加えているモノに遊夜が気づく。

「これは……」

それは、レスキューキャット自身のカードとエトワール・サイバーのカードだった。

それを加えるレスキューキャットの表情は、悲しそうだった。

「ウォルフ、これは一体……」

「恐らく、あの『ダーク・ミスト』が発生した時に、何者かにさらわれたのだろう。」

「ちょ、ちょっと待ちなさいよ！」

ウォルフの言葉に声を荒げる文乃。

「何で希と明日香がさらわれるのよ！」

「理由はわしも分からん。だが、あの霧の中で確かに何者かがいた気配があった。

それを考えるとさらわれたと考えたほうがいいだろう。そして…」

一旦言葉を区切ったウォルフは視線を廃寮へ向ける。

「恐らく、その者達はこの中だろう。」

ウォルフの言葉に『よっしゃ！』と返した十代は、

ハネクリボーと共に廃寮内へと入る。

「この中に明日香と希が俺達を待ってるんなら、行くしかないぜ！」
「よく言ったぜ十代っち！あたしも行くよ！」

十代の言葉に勢い良く賛同する叶絵。これに遊夜も『俺も行くさ』と返す。

「皆はどうする？危ないから、俺達だけで行くのも手だが……」
「何言ってんのよバカ！」

遊夜の言葉に真っ向から否定するのは、文乃だ。

「明日香が居なくなったってのに、あっさり帰れるわけ無いでしょ！別に、あんたの事なんか心配して無いけど、あんたが居なくなったら悲しむ人だって居るんだから、仕方なくなんだからね！！」

文乃の言葉に苦笑する遊夜。狼少女である彼女がこう言うということは
実は遊夜の事を何より心配しているという事である。

「と、ともかく！私も行くわよ！明日香が心配だから！！」

文乃の言葉に、他の面々も声を上げる。

「あたしも行くわよ！絶対に！！」
「お嬢様が行くならば私達も。」
「お嬢様をお守りするのが我らのお役目。」
「ア、アニキは行くならボクだって！」
「お、俺もなんだなぁ！」

「よし！ここは皆に任せた！俺様は寮に帰ってＤＶＤの続きを……」
「お前も来い菊池。女子が行くというのに男児が引けるか。」
若干１名行くのを嫌がったが、結局の所皆行く気だ。
それを改めて確認した遊夜と十代の２人と共に、面々は廃寮へと入っていった。

「埃は被ってるけどオシリス・レッドの寮とは大違いだな。」
廃寮に入って内部を見回していた十代はそう呟く。
ここは元々、特待生達の寮だったのだから
造りはレッド寮とは比べ物にならない出来だ。当然と言えば当然である。

「ウォルフ、こっちで間違い無いのか？」
遊夜の言葉に『あぁ』と返すウォルフ。

「間違いない、この先から邪悪な気が漂って来る。」
「クリクリー！」
「フシュー！」

ウォルフの言葉にハネクリボーも目付きを変え、レスキューキャットも毛を逆立てる。
どうやらこの先に居るのは間違いなさそうだ。とその時、床に落ちている
一冊の本を見つけた精霊達が立ち止まる。

「どうした、ウォルフ？」
「これは“封印の書”！邪悪な精霊のカードを封印する“闇のアイテム”だ！！
どうやら、誰かが封印を解いたようだな。」
「封印を解くと、どうなるのよ？」
文乃の質問に、一旦言葉を区切り再び口を開くウォルフ。
「封印を解いた者の末路は２つに１つ。精霊を屈服させるか、精霊の傀儡にされるかだ。」
「それって…！」
翔の言葉にコクリと頷くウォルフ。
「恐らく、封印を解いた者が今回の騒動のきっかけを作ったのだろうな。」
「……急ごう！」
遊夜の言葉に、全員が頷く。…否、全員ではなかった。
約１名、十代だけが頷かず何かを拾っていた。
「何してるんだ十代？」
「ん？あぁ、ちょっとな。それより速く行こうぜ！！」
十代の言葉に『だな』と返す遊夜。
「主よ、この先だ。」
ウォルフの視線の先には、坑道のような道があった。
皆がその道を走って行くと、そこには広い空間があり、そこに棺の中に拘束されている明日香がいた。

「明日香！！」

明日香を確認した十代が大声で明日香の名前を呼ぶと、明日香は微かに目を開ける。

「……十…代……？」

「明日香！」

「明日香、無事なのね！」

明日香の無事を確認し、表情に喜びが出る面々。

「明日香さん、今助けます！」

遊夜が真っ先に助けに行こうとする。だが。

「ふふふふ、残念だが彼女は後々我が主の生け贄になってもらうのだよ。」

不意に、不気味な声が空間に響く。

と同時に、棺の近くの闇から1人の大柄な男が現れる。

「何者だ！」

「我が名はタイタン。闇のゲームを操る、闇の決闘者。」

タイタンの言葉に目を丸くする面々。そんな中、ウォルフが前に出る。

「貴様が封印を解いたのか。」

ウォルフの姿を見たタイタンは一瞬目を丸くしたが、すぐに表情を戻す。

「なるほど、精霊か。精霊を見るのは我が主に続いて2回目だな。」

「精…霊……？」

ぼやけた意識の中でそう呟く明日香。ウォルフは言葉を続ける。

「ふん、精霊を主と呼ぶということは傀儡にされたか、この男。」

「どっちにしろ、奴を倒さないと明日香は取り戻せ……ん？」

この時遊夜はある事に気づく。確かに明日香はいるのだが、もう1人がいない事に。

「おい貴様！希は何処だ！」

「希？……あぁ、そこのネコの飼い主か。」

タイタンは視線をレスキューキャットに向けた後、再び遊夜に視線を戻す。

「彼女なら、我が主の復活の生け贄になっているだろう。」

タイタンの言葉に『なにっ！？』と驚愕する面々。

「どういう事だ！？」

「邪悪な精霊は、この世界に完全復活するために生け贄を求めるのだ。」

「それが希と明日香だって言うの！？」

文乃の言葉にコクリと頷くウォルフ。

「んなことさせるかよ！！」

そう叫んだ十代が、決闘盤を構えて前に出る。

「十代！」

「アニキ！！」

「ようはこいつをぶっ倒して明日香と希を救えば良いんだろ！？」

十代の言葉に『その通りだ』と返すウォルフ。

「だが気をつけろ！この決闘は闇の決闘だ！！」

「へへ、そんなの怖くないぜ！行くぜ相棒！！」

十代の呼び掛けにハネクリボーはコクリと頷き十代のデッキへ戻った。

「ふふふふ（奴が遊城　十代か。丁度いい、主の生け贄を増やすと同時に
依頼も果たせるわ）。行くぞ小僧！！」

タイタンも決闘盤を発動させ、準備は整った。

「「決闘っ！！」」

十代：ＬＰ／４０００
タイタン：ＬＰ／４０００

２人の決闘が始まった途端、周りに重苦しい空気が漂う。

「何だ、この嫌な空気は…」

「先手を取らせてもらおう、ドロー。
私は『インフェルノクインデーモン』を攻撃表示で召喚。」

インフェルノクインデーモン　☆４　炎　悪魔族　ＡＴＫ／９００
ＤＥＦ／１５００

タイタンの場に紫のマントを羽織ったデーモンが現れる。

「デーモンデッキか。」

それを見た十代はタイタンの使うデッキを見抜く。

「このカードがフィールド上に存在する時、互いのスタンバイフェイズ毎に
デーモンと名のついたモンスター１体の攻撃力を１０００ポイントアップさせる。」
「てことは、次の俺のターンには
『インフェルノクインデーモン』の攻撃力は１９００になるのか。」

十代は一筋の汗を流す。

「気張れ十代！デーモンデッキはその強力なモンスターを維持するために
スタンバイフェイズ毎にＬＰを捧げねばならないんだなぁ！」
「だけど、あのカードがあれば……」

隼人と遊夜の言葉に『え？』と首を傾げる十代。

「ふふふ、外野の2人は分かっているようだな。
私は手札からフィールド魔法『万魔殿（パンディモニウム）ー悪魔の巣窟（あくまのそうくつ）ー』を発動！！」

タイタンが発動したカードが辺りに光を撒き散らし、
その場が不気味な伏魔殿へと変わる。

「なんだ！？」

「さしずめ、地獄の1丁目と言っておこうか。
このカードがある限り『デーモン』を維持するためのコストは発生せず、
『デーモン』と名のついたモンスターが戦闘以外で破壊された時、
そのカードの☆以下の『デーモン』という名のついたモンスターをデッキから手札に加える事ができるのだ。
さらに私は、カードを1枚伏せターンエンド！」

「やはり入ってたか。」
「これで、『デーモン』の維持コストがなくなったわね。」

タイタンの予想道理の行動に汗を流す遊夜と文乃。

「俺のターン、ドロー！」
「この瞬間！『インフェルノクインデーモン』の効果により攻撃力アップ！」

インフェルノクインデーモン　ＡＴＫ／９００⇒１９００

手札に加えたカードを見ながら十代は考えをめぐらす。

「（俺の手札に融合はない。だけど、融合を手札に持ってくる手段はある！）
俺は、『Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン』を守備表示で召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン　☆３　風　戦士族　ＡＴＫ／１００
０　ＤＥＦ／１０００

十代の場に白い翼を生やした緑色のＨＥＲＯが現れた。

「カードを２枚伏せ、ターンエンド！
これで、『インフェルノクインデーモン』の攻撃力は元に戻る。」

インフェルノクインデーモン　ＡＴＫ／１９００⇒９００

「ふん、それがどうした。私のターン、ドロー。
これで『インフェルノクインデーモン』は再び攻撃力が上がる。」

インフェルノクインデーモン　ＡＴＫ／９００⇒１９００

「さらに！『ジェノサイドキングデーモン』を召喚！」

ジェノサイドキングデーモン　☆４　闇　悪魔族　ＡＴＫ／２００
０　ＤＥＦ／１５００

タイタンの場に、王の風格が漂うデーモンが現れる。

「このカードはは自分の場に『デーモン』と名のついたモンスターがいなければ召喚できない。だが、私の場には『インフェルノクインデーモン』がいる。」

タイタンの言葉に『くっ』と歯軋りをする十代。

「バトルだ！『ジェノサイドキングデーモン』で『フェザーマン』を攻撃！
“炸裂（さくれつ）！五臓六腑（ごぞうろっぷ）”！！」

自分の胸を開き腸を虫に変えたジェノサイドキングデーモンの攻撃がフェザーマンに迫る。

「させるか！罠発動！！『ヒーローバリア』！！　相手の攻撃を1度だけ無効にする！！」

「よっしゃ！さすがアニキ！」

十代の罠に喜ぶ翔だったが、周りの皆は渋い顔をしている。

「丸藤よ、喜ぶにはまだ早いぞ。」

大吾郎の言葉に『へ？』とキョトンとなる翔。

「ふふふふ、『ジェノサイドキングデーモン』の効果発動。
カード効果の対象となった時、サイコロを1回振るう。」

タイタンの言葉と共に1から6の数字がそれぞれ書かれた6つ珠が

出現した。

「サイコロの目が2か5を示した場合、その効果を無効にしカードを破壊する。
この決闘ではサイコロの代わりにこのルーレットを使用する。
さぁ地獄のルーレットよ、奴の運命を乗せ回り始めぇよ！」

タイタンの言葉と共にルーレットが回り始める。

「2か5が出れば、『ヒーローバリア』は破壊される。」
「確率は3分の1、確率でいえば十代の方が有利……」

回り始めたルーレットを外野の面々はどの数字が出るかを見守る。
そしてルーレットが示した数字は――――

――――2だった。

「出た目は2、よって『ヒーローバリア』を無効、破壊する！」

ヒーローバリアの青白い輝きがが消えて行き、
ジェノサイドキングデーモンの攻撃がフェザーマンを破壊する。

「くっ！ならもう1枚の罠！『ヒーロー・シグナル』発動！！
俺の場のモンスターが戦闘で破壊された時、
デッキから☆4以下の『E・HERO』を1体特殊召喚できる！！」

そう言い十代は1枚のカードを手に持つ。

「（会長さん、使わせてもらうぜ！）俺に力を貸してくれ！
『Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン』を守備表示で召喚！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン　☆４　地　戦士族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／２０００

十代の場に木と岩で出来たＨＥＲＯが現れる。

「ほぅ、珍しいヒーローだな。我が『インフェルノクインデーモン』の攻撃力でもそのモンスターの守備力には及ばない。私はこれでターンエンドだ！」

インフェルノクインデーモン　ＡＴＫ／１９００⇒９００

「ねぇ、あのカードって……」

翔の言葉に『あぁ』と頷く遊夜。

「あれはペガサス会長に貰った、新たなヒーロー！」
「一体、どんな効果があるんだなぁ。」

皆が見守る中、十代のターンとなる。

「俺のターン、ドロー！」

十代がカードを引くと同時に、フォレストマンが輝きだす。

「『フォレストマン』の効果発動！自分のスタンバイフェイズに俺のデッキか墓地から『融合』を１枚手札に加える！
そして手札に加えた『融合』発動！
場の『フォレストマン』と手札の『クレイマン』を融合！
来い！大地のヒーロー！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア』！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア　☆６　地　戦士族　ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／２６００

十代の場に黒い鎧に覆われた大地のヒーローが現れる。その姿に翔は息を呑む。

「あれがアニキの新しいヒーロー。」

その姿に翔は息を呑む。

「『ガイア』の効果発動！召喚時、相手モンスターの攻撃力を半分にし、
その攻撃力を『ガイア』に与える！」

ガイアの両腕が大地をえぐり、その波動がジェノサイドキングデーモンに迫る。

「ふふふ、ならば再び回れ、運命のルーレットよ。」

タイタンの言葉と共に、再びルーレットが回り始める。

「はわわ、やばいよ！このままじゃ先と同じに……」

「何言ってんのよ！そう何度も当たるわけ無いでしょ！！」

翔を叱咤する文乃だが、心の中ではドキドキしてた。

「確率は3分の1、今度こそ…！」

外野の面々はどの数字が出るかを見守る。

そしてルーレットが示した数字は――――

――――3だった。

「よしっ！出た目は3だぜっ！！残念だったなタイタン！！」

だが、十代の言葉に対し不敵に笑うタイタン。

「それはどうかな？リバースカード、オープン。永続罠“デーモンとの裏取引”。

1ターンに1度、『デーモン』の効果で振ったサイコロをもう1度やり直せる。

さぁ再び回れ、運命のルーレットよ。」

タイタンの言葉と共に、再びルーレットが回り始める。

「そんなぁ、やり直し！？」

「んなのズルイわよ！」

外野の面々の叱咤が飛び中、ルーレットが示した数字は――――――5だった。

「出た目は5、再び運命のルーレットは私に味方した。
小僧、貴様のモンスターは破壊だ！」

タイタンの言葉と共に、ガイアは闇に包まれ消えていった。

「これで貴様の場のモンスターは全て消えた、どうする小僧。」

ニヤニヤと微笑むタイタン。

「くっ（幸運の女神が向こうに微笑むってんなら、その出番をなくしてやるぜ！）
俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

その消極的な十代の手にタイタンは愉悦の表情で言い放つ。

「結局お前はこの2ターン、私に与えたダメージは0。
そろそろ決着を付けようではないか。私のターン、ドロー！」

引いたカードを見たタイタンの表情が、さらに微笑む。

「まずは、『インフェルノクインデーモン』の効果により
自身の攻撃力をアップ。」

インフェルノクインデーモン　ＡＴＫ／９００⇒１９００

「さらに手札から、『ヘルポーンデーモン』を召喚。」

ヘルポーンデーモン　☆２　地　悪魔族　ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／２００

タイタンの場に、デーモンの兵士が現れる。

「まずい！この攻撃が全て通れば十代の負けなんだなぁっ！」

十代の劣勢に声を荒げる隼人。

「ふふふふ、安心したまえ。君も我が主の生け贄にしてやろう。バトル！『ジェノサイドキングデーモン』でプレイヤーへダイレクトアタック！

“炸裂！五臓六腑”！！」

己の胸を開き腸を虫に変えたジェノサイドキングデーモンの攻撃が十代に迫る中、

当の本人は微笑んでいた。

「今だ！リバースカード、オープン！“聖なるバリアー ミラーフォース ー”！！

これで相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊させる！！」

それを見た面々が歓声を上げる。

「いよっしゃぁっ！対称を取らないカードなら効果を発動できねぇっ！！」

「行けー！アニキー！！」

ミラーフォースの光が、タイタンのデーモンを包み込み消滅させて行く。

「ぬっ、くぅ！しぶとい奴め。しかし私の勝利は揺るがない。私は手札から
『デスルークデーモン』の効果発動！場の『ジェノサイドキングデーモン』が
破壊された時、このカードを手札から墓地に送ることで
『ジェノサイドキングデーモン』を復活させることができる！！」

ジェノサイドキングデーモン　☆４　闇　悪魔族　ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１５００

タイタンの場に、ジェノサイドキングデーモンが蘇る。

「さらに！フィールド魔法『万魔殿』の効果発動！戦闘以外で『デーモン』が
破壊された時、破壊された『デーモン』の☆よりも低い『デーモン』を１体、
デッキから手札に加えることが出来る！
私は２体目の『デスルークデーモン』を加える！」

タイタンの行動に『くっ』と歯軋りをする十代。

「まだだ！バトルフェイズ中に特殊召喚した『ジェノサイドキングデーモン』には、
まだ攻撃宣言が残っている！
『ジェノサイドキングデーモン』プレイヤーへダイレクトアタック！！」

ジェノサイドキングデーモンの攻撃が十代を襲い、十代は顔を苦痛に歪める。

十代：ＬＰ／４０００⇒２０００

「ぐっ！」
「ふふふふ、痛いか？だがそれだけでは無いぞ？」

タイタンの言葉に『なに？』と首を傾げる十代。
だが、周りの者は気づいた。十代の体の異変に。

「ア、アニキ。」
「十代、体が……」

皆の声に十代が自分の体を見てみると、体の１部が消えていたのだ。

「こ、これはっ！？」
「ふふふふふ、これが闇のゲーム。貴様のＬＰが減る度に
貴様の体もまた闇に消えて行くのさ。私はターンエンドだ。」

「そ、そんな、アニキが消えちゃう……」

十代が消えるかもしれない事態に、翔はまた涙目になる。

「臆すな十代！」

そこに遊夜が珍しく荒声を上げる。

「ペガサス会長から聞いた通りなら、この決闘で勝てば助かるはずだ！勝て十代！」

遊夜の言葉に目を丸くしていた面々だが、十代はニヤッと微笑んでみせる。

「当たり前さ！俺は勝つぜ！明日香を助けるためにも！皆と無事に戻るためにも！」

そう言い、遊夜と十代は互いに微笑み合った。

「行くぜ！俺のターン！！」

引いたカードを見て微笑んだ十代は、速攻でそのカードを発動する。

「俺は魔法カード『融合回収（フュージョン・リカバリー）』発動！
墓地の『融合』と融合に使ったモンスターを1体回収する！
俺は『融合』と『フォレストマン』を手札に加え、『融合』発動！！」

「即、融合だと！？」

驚くタイタンを尻目に、十代は決闘を続ける。

「俺は手札の『フォレストマン』と『オーシャン』を融合！

現れろ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース　☆８　地　戦士族　ＡＴＫ／２５００
ＤＥＦ／２０００

十代の場に、白いボディのヒーローが現れる。

「また新しいヒーロー！？」

ジ・アースの登場に目を丸くする千世。

「さらに手札から『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を攻撃表示で召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン　☆４　風　戦士族　ＡＴＫ／１８００
ＤＥＦ／３００

十代の場に、プロペラのついた翼を持つ蒼いヒーローが現れる。

「うむ、さらに新たなヒーローを出すか。」

新たなヒーローの登場に、そう呟く大吾郎。

「さらに！『エアーマン』の効果発動！！このカードの召喚時、
２つの効果から１つを選び発動する！！
デッキからヒーローを手札に加えるか、こいつ以外のヒーローの数

だけ
場の魔法・罠を破壊するか！俺は魔法・罠を破壊する効果を選択！
フィールド魔法『万魔殿』を破壊する！」

十代の言葉に『なにぃっ！？』と驚愕するタイタン。
と同時に、エアーマンのプロペラが急回転しだし、竜巻を起こす。

「悪魔の巣窟を吹き飛ばせ！“エアーソニック・トルネード”！！」

エアーマンの起こした竜巻により、万魔殿が崩壊していく。

「わ、私の『万魔殿』が！私の聖域がぁぁっ！！」

万魔殿の崩壊に、荒声を上げるタイタン。

「これで、ＬＰコストを無くす効果とモンスターをサーチする効果も無くなった！」
「くっ！だが、我が手札には『万魔殿』で手札に加えた
２体目の『デスルークデーモン』がいる。『ジェノサイドキングデーモン』を倒しても
これがあればすぐ蘇る。そうすれば私が受けるダメージは５００程度に収まる！」

だがタイタンの言葉に『それはどうかな？』と返す十代。

「どうせ蘇生して『エアーマン』の攻撃を防がれるならこうするまでだ！
『ジ・アース』の効果発動！自分の場の『Ｅ・ＨＥＲＯ』を生け贄にする事で、
エンドフェイズまでそのモンスターの攻撃力を吸収する！！

『エアーマン』を生け贄にする！！」

十代の言葉と同時に、エアーマンがジ・アースに吸収されるていく。
同時にジ・アースが腰の２本の剣を抜き放ち、体を真紅に染めていく。

Ｅ・ＨＥＲＯ　ジ・アース　ＡＴＫ／２５００⇒４３００

「これが『ジ・アース』の真の姿！『地球灼熱（ジ・アース　マグマ）』だ！！」
「攻撃力４３００だとっ！？」

その攻撃力に驚くタイタン。

「行くぜバトルだ！『ジ・アース』で『ジェノサイドキングデーモン』を攻撃！！
斬り裂け！！“地球灼熱斬（アース・マグナ・スラッシュ）”！！！」

ジ・アースの２本のレーザー剣が、ジェノサイドキングデーモンを斬り裂く。

タイタン：ＬＰ／４０００⇒１７００

「ぐおぉっ！」
「やった！アニキの大逆転だ！！」

タイタンのライフが大きく削られ、その体も消えて行く。

「ぬぅ！だが私は『デスルークデーモン』を墓地に送り、
再び蘇れ！『ジェノサイドキングデーモン』！！」

ジェノサイドキングデーモン　☆４　闇　悪魔族　ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１５００

タイタンの場に、ジェノサイドキングデーモンが再び蘇る。

「俺はこれでターンエンドだ！！」
「調子に乗なよ小僧！私のターン！！」

タイタンがカードを引いた時、タイタンは苦痛の表情をする。

「私は、『ジェノサイドキングデーモン』の維持コスト、ＬＰを８００支払う。」

タイタン：ＬＰ／１７００⇒９００

「へへ、『万魔殿』が無い今デーモンデッキの弱点が出て来ちまったな！」

十代の言葉に『ふん』と鼻を鳴らすタイタン。

「いい気になるなよ小僧！私は手札から『強欲な壺』を発動！
デッキからカードを2枚ドロー！
さらに私は『ジェノサイドキングデーモン』を生け贄に！
現れよ！『迅雷の魔王－スカル・デーモン』！！」

迅雷（じんらい）の魔王（まおう）－スカル・デーモン　☆６　闇　悪魔族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／１２００

タイタンの場に、電撃を帯びた骨のデーモンが現れる。

「そいつがお前のエースか。だけど、攻撃力は『ジ・アース』と互角だぜ？」

だが十代の言葉に対してタイタンは冷静に『どうかな？』と返す。

「手札から装備魔法『デーモンの斧』を発動！『スカル・デーモン』に装備！
装備モンスターの攻撃力を１０００Ｐアップ！」

迅雷の魔王－スカル・デーモン　ＡＴＫ／２５００⇒３５００

「くっ！そう来たか！」

「やれぇいっ！『迅雷の魔王－スカル・デーモン』で『ジ・アース』を攻撃！“怒髪天昇撃（どはつてんしょうげき）”！！」

スカル・デーモンの放つ電撃がジ・アースを焼き尽くす。

十代：ＬＰ／２０００⇒１０００

「ぐあぁぁっ！」

「さらに私は、カードを１枚伏せる。そして速攻魔法『非常食』を発動！
私は伏せカードを墓地に送り、ＬＰを１０００Ｐ回復する！」

タイタン：ＬＰ／９００⇒１９００

「私はこれで、ターンエンドだ！」

この時、タイタンには１つの思惑があった。

「（これでＬＰは私が上！この間に再び『万魔殿』か
『ジェネラルデーモン』を手札に加えてみせる！）小僧、１つ教えておこう
『スカル・デーモン』にもまた、カード効果の対象となった時サイコロを１回振り
１・３・６の何れかが出た場合、カード効果を無効にし破壊する効果がある。」

「くっ！やっぱそうか！」

タイタンの言葉に悔しそうな表情をする十代。

「しかも、確立は今までのデーモンより上の２分の１。かなりやばいぜ。」

「そんな、アニキ……」

心配そうに見つめる翔だが、その翔に対し『大丈夫だ』と言い切る遊夜。

「十代の目はまだ諦めていない。十代を信じろ！」

遊夜の言葉の凄みに翔がコクリと頷く中、十代がカードを引く。

「いくぜ！俺のターン！！」

引いたカードを見た十代は『よし！』と頷き、引いたカードを即座に使う。

「俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン』を特殊召喚！
こいつは自分の手札がこいつだけの時、手札から特殊召喚できる！
！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　バブルマン　☆４　水　戦士族　ＡＴＫ／８００
ＤＥＦ／１２００

十代の場に、某アメリカヒーローのような戦士が現れる。
だが、その姿を見たタイタンは鼻で笑った。

「ふん、そんなザコに何が出来る！？」
「こういうことが出来るぜ！
『バブルマン』の召喚時、俺の手札と場に他のカードがない場合
デッキからカードを２枚ドローできる！！」

バブルマンの効果でカードを２枚手札に加えた十代は微笑む。

「手札から魔法カード『天界よりの宝札』を発動！！互いの手札が
３枚以下の時、
互いのプレイヤーは手札が５枚になるようドローする！！
俺の手札は１枚！よって４枚ドロー！！」
「私の手札は０。私は５枚ドローする！」

互いにカードを引き合った時、タイタンの表情に微笑が表れる。
「（『ジェネラルデーモン』！これで次のターン私は『万魔殿』を
発動できる！！）」

一方、十代の表情にも微笑が表れていた。

「《クリクリ～》」

「（相棒！来てくれたのか！）」

相棒が来てくれた事に喜ぶ十代は、同時に手札状況を確認する。

「（よし、行ける！）俺は『ハネクリボー』を攻撃表示で召喚！」

ハネクリボー　☆１　光　天使族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／２００

「クリクリ～」

「そのカードは……精霊！？」

ハネクリボーの出現に驚くタイタン。

「そうさ！こいつは俺の相棒！こいつがお前を倒すぜ！！」

十代の言葉に『なにっ！？』と驚愕するタイタン。

「いかに精霊とは言え、たかが攻撃力３００のモンスターに何が出来る！？」

「俺の相棒の可能性は無限大だぜ！

手札から速攻魔法『バーサーカークラッシュ』発動！！

俺の墓地のモンスターを除外する事で、『ハネクリボー』の攻撃力と守備力を

除外したモンスターと同じにする！俺は『ジ・アース』を除外する！」

ジ・アースの魂がハネクリボーに吸収されていく。

ハネクリボー　ＡＴＫ／３００⇒ＡＴＫ２５００　ＤＥＦ／２００⇒ＤＥＦ／２０００

「ハネクリボーの数値が上がった！」

☆１のモンスターが☆７のモンスター並みになった事に驚く面々。

だが、それでもタイタンの表情は余裕だった。

「だが、我が『スカル・デーモン』の攻撃力は３５００。まだまだ及ばないな。」

「まだだ！手札より魔法カード『受け継がれる力』を発動！！

俺の場のモンスター１体をコストに、俺の場のもう１体のモンスターの攻撃力を

コストにしたモンスターの攻撃力分アップする！！

俺は『バブルマン』をコストに『ハネクリボー』をパワーアップ！！」

ハネクリボー　ＡＴＫ／２５００⇒ＡＴＫ３３００

「だがまだ足りないな？」

タイタンの嫌味な言葉に対し、十代は『へへ』と笑っていた。

「何がおかしい！」

「勝つときは誰だって嬉しいもんだぜ！バトルだ！

『ハネクリボー』で『スカル・デーモン』を攻撃！」

十代の言葉と共に、ハネクリボーがスカル・デーモンに突っ込んで行く。

「アニキ！何で！？」
「十代！？」
「ふはははは！自ら自滅の道を選んだか！」

十代の行動に衝撃を受ける面々と、我が勝利を確信するタイタン。だが、十代の表情は微笑んでいた。

「手札から速攻魔法『ウィーク・アンガー』発動！！
☆2以下のモンスターの攻撃力を１０００Ｐアップさせる！！
『ハネクリボー』の☆は1！よって『ハネクリボー』の攻撃力は！！」

ハネクリボー　ＡＴＫ／３３００⇒ＡＴＫ４３００

「バカな！☆１のモンスターが攻撃力４３００だとぉっ！！？」
予想外の出来事に驚くタイタン。

「いけぇ！相棒！！」
「クリクリー！！！」
光り輝くハネクリボーの体当たりが、スカル・デーモンを粉砕した。

タイタン：ＬＰ／１９００⇒１１００

「バ、バカな！我がデーモンが、こんなザコモンスターに！！？」

タイタンは信じられないといった表情で驚くが、これだけでは終わ

らない。
ハネクリボーの体当たりが、そのままタイタンに迫ってきてるのだ。

「な、何だ!?」
「『ウィーク・アンガー』には更なる効果がある!
このカードの効果で攻撃力を上げたモンスターが、相手モンスターを
戦闘で破壊した時!破壊に成功したモンスターの攻撃力分のダメージを
相手に与える!!」

十代の言葉に『なにっ!?』と驚愕するタイタン。

「『ハネクリボー』の現攻撃力、４３００のダメージを食らえ!!」

十代の言葉と同時に、ハネクリボーの体当たりがタイタンを直撃する。

「うおあぁぁぁぁぁぁぁっ!!!」

タイタン：ＬＰ／１１００⇒０

タイタンはそのまま尻餅をつき、動けなくなる。

「や、やたぁっ!アニキぃぃっ!!」
「やったな十代!!」

十代の勝利に歓声が上がる中、場を包み込んでいた闇がタイタンにまとわりつく。

「な、なんだ!?」

その光景に驚く面々。

「あれが、闇の決闘に負けた者の末路だ。」

「ウォルフ。」

不意に声を上げたウォルフに『どういう事よ』た返す文乃。

「闇の決闘に負けたものは“罰ゲーム”を受けるのだ。それも様々な種類のな。
精神崩壊、リアルな痛み、挙句の果てには“闇の世界”に引き込まれる。」

「それがあれか。」

大吾郎の言葉に頷くウォルフ。面々の視線の先には、
闇に引きずり込まれるタイタンの姿があった。

「うわぁぁぁぁっ！た、助けてくれぇ！主さまあぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

タイタンは、静かに闇の中へと消えて行った。

「……タイタン……」

闇に飲み込まれて行ったタイタンに、哀れみの視線を送る遊夜。とここで、
十代が何かを思い出したように走り出す。

「おい明日香！しっかりしろよ！！」

十代が走り寄った場所、それは明日香が拘束されている棺だった。
それに気づいた他の面々も明日香の下へ駆け寄る。

「明日香！」
「明日香さん！」
「しっかりしてください！明日香さん！！」
「……ん……みん……な……」

拘束を外された明日香は徐々に意識を戻していく。

「…皆……！！」
「明日香！！」
「明日香さん！！」

明日香の無事に、全員が喜び合った。

その後、明日香は遊夜達の説明で何とか現状況を理解していた。

「理解できた、明日香さん？」
「えぇ、実際うっすらと意識はあったから大体はね。それにしても……」

そう言い明日香は、精霊達に視線を向ける。

「まさか精霊がいるなんてね。」
「無理に信じろとは言わんよ。」
「……この状況では、信じざる終えないわね。」

明日香の言葉に『それもそうだな』と苦笑するウォルフ。とそこに、

十代が明日香の前に出て、ポケットから2つのモノを取り出す。
1つは、明日香のエトワール・サイバー。
もう1つは、『ＦＵＢＵＫＩ　１０ＪＯＩＮ』とサインが書かれた1枚の写真だった。

「エトワール・サイバー！それにこれは――――――兄さん！」

明日香は驚きながらその2つを手に取る。

「へへ、先寮の廊下の途中で拾ったんだ。
ごめんな、コレしか手がかりが見つからなくってさ。
兄さんの話を聞いて少しでも役に立てねぇかなぁって思ってさ。」

そういいつつ頭を掻く十代。それに対し明日香は驚いた目で十代を見る。

「あなた……」
「なるほど。あの時、十代がしゃがんでたのは　その写真を取っていたのか。」

遊夜は、ここに来る途中の十代の行動を思い出していた。

「……ところで皆の衆よ。そろそろ行くべきなのではないか？」

唐突なウォルフの言葉にキョトンとなる面々。

「遊城　十代が倒したのは、あくまで操られていた男。
その黒幕を倒さぬ限り霧谷　希は戻らんぞ。」

ウォルフの言葉に一同は『はっ』となり、いち早く遊夜は

地下に続く階段を見つける。

「よし！行こう！！」

そう言い真っ先に走り出す遊夜。他の面々も続こうとするが、明日香は今まで拘束されてたせいか、まともに動けなかった。

「明日香、大丈夫？」

「大丈夫よ叶絵。ちょっと足が……」

「おいおい無理すんなよ。」

見かねた十代が、いきなり明日香を背中に背負う。その突然の出来事に、顔を赤くして驚く明日香。

「え！？ちょ、ちょっと十代！？」

「気にすんなよ明日香。俺が運んでやっから。」

そう言い歩いていく十代。その背中で明日香は『…お節介…』と呟くのであった。

「〔……〕」

「ん？どうかしたのか？」

不意に隼人は、ウォルフが自分に視線を送っていることに気づく。

「〔…お主、デッキはあるのか？〕」

「へ？」

ウォルフの唐突な質問にポカンとなる隼人。

「…いや、デッキは俺の部屋に置いてきたんだなぁ。」

隼人の返事に『そうか』と呟いたウォルフは、地下への階段を下り始める。

それを見て、慌てて追う隼人。

「（…この者、微かだが精霊の匂いがする。

もしやこの者のデッキには精霊がいるのやもしれんな…）」

そう思いながらも、ウォルフは階段を下りて行った。

一方、ここはこの廃寮の地下深く、十代とタイタンが決闘した場よりも

深いところにある空間。ここに、1人の鎖で拘束された少女――希と

1つの黒い影があった。

「ふむ、タイタンは敗れたか。まぁよい、あの程度の傀儡いつでも作れる。」

そう呟いた影は両手を広げ、上に視線をやる。

「もうすぐだ、もうすぐで私は完全に蘇る！この女とあの精霊の見える決闘者共を生け贄になぁっ！

ククククク、フフフハハハハハハハハハハハハッ！！！」

その影の笑い声が、空間全てに響いていった。

『～第五章～　廃寮、闇の決闘・前編　十代Ｖ
Ｓタイタン　《終》』

～第五章～　廃寮、闇の決闘・前編　十代ＶＳタイタン（後書き）

どうも、黒鋼です。
今回のお話は「第５話　闇のデーモンデッキ」と「第６話　ハネクリボーの奇蹟」を
改良してお送りいたしましたが、如何だったでしょうか？
何分まだまだ腕が未熟者ゆえ、若干展開が速すぎるかなと思う所が多数ありましたが、
今回の話で悩んだのが、タイタンに遊夜と十代どっちを闘わせるかでした。
普通に行けばオリキャラ主人公の遊夜なんですが、
自分はカップルリングが大好きです！なので『十代×明日香』のイベントを
何とかしたいという思いがありました。
そこで、悩んで悩んだ末に邪悪な精霊を黒幕にするという
独自の設定を思いつきましたが、ここでさらに悩んだのは
どういう展開にしていくかです。
悩んだ結果、精霊達が実体化して教えてくれるということになりましたが
今回精霊を持つはずの隼人の『デス・コアラ』はどうしようと悩み、
結局デッキを忘れてきたということにしました。
さらに今回、漫画ＧＸで出た『ウィーク・アンガー』を出しましたが
当初はこのままの効果で出すかどうか迷いましたが、結局そのままにしました。
悩んで悩みまくった今回の話ですが、今後も悩み続けて行こうと思っていますので
皆さん、よろしくお願いしま――――す！！

今回の最強カード『ハネクリボー』
☆１　光　天使族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／２００　効果モンスター
フィールド上に存在するこのカードが破壊され墓地へ送られた時に発動する。
発動後、このターンこのカードのコントローラーが受ける戦闘ダメージは全て０になる。

ご存知、十代の頼もしい相棒。
破壊されても主を守る頼もしい存在。
『進化する翼』などの様々な可能性を秘めている。

～第六章～　廃寮、闇の決闘・後編　遊夜ＶＳ闇の精霊（前書き）

前回までのあらすじ
廃寮へ探検にやって来た遊夜達は、
現世に蘇ろうとする邪悪な精霊の陰謀に巻き込まれ、
希と明日香が誘われてしまう。
十代は、精霊の傀儡となった闇の決闘者タイタンとの闇の決闘に勝利し
明日香を取り戻す事に成功するが、希はまだ精霊に捕まったままだ。
遊夜達は希を救出すべく、さらに奥へと進んで行った。

～第六章～　廃寮、闇の決闘・後編　遊夜ＶＳ闇の精霊

「（…ここ、どこ……？）」

深い暗闇の中、失っていた意識を徐々に取り戻していた希は自分の現在の状況を把握しようと必死に頭を動かしていた。

「（…体……動かない……？）」

希は体を動かそうともしたが、何かで縛られているのか動けなかった。
暗闇の中で必死に目を凝らす希の目に映ったモノ。
それは、自分の体を縛り上げる鎖だった。
それを見た希は、自分の状況を必死に頭で考えた。

「（…たしか……翔がカードを拾って…キャットが出て来て……闇が出て来て……それで意識がなくなって……）」

希は、その後がどうやっても思い出せなかった。

「フハハハハハ、お目覚めかなレディ。」

不意にそんな声が聞こえ、希は目を凝らす。
目が暗闇に慣れて来た希の目に映ったモノ、
それは中世の紳士が着る様な洋服を身にまとった、青いゾンビのような者だった。
その姿に目を丸くする希だったが、同時にどこかで見たような気がした。

「……誰？」

希は『キッ』と睨みながら問い掛ける。
その問いに対し、その者は『フフフ』と微笑み返す。

「これは申し遅れた、私はただのしがない決闘モンスターズの精霊ですよ。」

精霊という言葉に目を丸くする希。
同時に、今回の騒動の元凶がこいつなのだと言う事を察知する。

「……私をどうする気？」

希の質問に、精霊は紳士的に答える。

「ご安心ください、悪いようにはいたしませんよレディ。ただあなたには、
私が現世に復活する為の生け贄となってもらいます。」

「！！」

生け贄と言う言葉に希は『ゾッ』となった。悪いようにはされない所か
命が無いという事だからだ。精霊はそんな希の反応にニコッと微笑む。

「フフフ、怖いかね？だが安心したまえ、生け贄はきみ1人ではない。」

精霊の言葉に『にゃ？』と目を丸くする希。

「今、私の放った刺客を退けた決闘者達がこちらに向かっている。きみを助けるためにね。」

精霊の言葉に益々驚く希。そして同時に『まさか』というやな予感を感じる。

「その者達の中にはきみと同じく精霊を見る力を持った者が2人いるようだ。
1人は我が刺客を倒し、おまけの生け贄を救出したヒーロー使い。
もう1人は未知なる力を秘めた白銀の髪をした男だ。」

その言葉に希は遊夜と十代の顔を思い浮かべる中、精霊は『ククククク』と笑い出した。

「素晴らしいぞ。精霊を見る力を持つ者が3人も我が生け贄となれば、
私の復活劇は最高のものとなるだろう！フフフフフハハハハハハハハッ！！」

精霊の言葉に希は戦慄した。自分だけでなく遊夜や十代までもが生け贄にされると言うのだ。
そんな事させないと感じた希は、必死に鎖から逃れようとするが動けば動くほど鎖は体を縛り上げていく。その痛みに、希の表情が崩れる。

「無駄だよレディ。その鎖は『闇(やみ)の呪縛(じゅばく)』。
もがけばもがく程、君の体を締め付けていく。逃れる術はない。」

精霊の言葉に希は力なくガクリとうな垂れる。

「（…文乃……千世…叶絵……十代……乙女……遊、夜…）にゃぁ……。」

心の中で自分に接してくれたくれた者達の名を呼びながら、
希の脳裏に1つの覚悟が芽生えていった。

一方、希が捕らえられている場所に続く階段を下りて行く遊夜達がいた。

「ウォルフ、この階段どこまで続いてるんだ？」
「わからん。だがこの先に、何か邪悪な気配を感じる！」

ウォルフの言葉に全員の体に力が入る。

「この先にいるんだな、邪悪な精霊が！」
「（うぅ、ここまで来ちゃったけど怖いなぁ。
でもアニキ達をおいていけないし…）」
「うぅ、寒気がするんだなぁ。」
「む？おい菊池、なぜ震えている、怖いのか？」
「バカ言え！美女を助けるというこの上ないシチュエーション！
これはまさにフラグだ！フラグの予感がする！！」
「こんな時に何言ってんのよバカ！二回死ね！！」
「いや～、暗い時にこのモチベーションは必要だよ文乃。」
「何にしても！この梅ノ森　千世がいる限り、希は必ず救出するわ！
急ぐわよ！佐藤、鈴木！！」
「「はっ！！」」

十代・翔・隼人・大吾郎・家康・文乃・叶絵・千世・佐藤&鈴木がそれぞれ意気込む中、1人十代の背に背負われている明日香は

どこか気まずかった。

「…十代。」

「ん？何だ明日香。」

不意に呼ばれた十代は、自分の背に背負う明日香の方を振り向く。

「その、そろそろ降ろしてもらえる？もう大丈夫だから。」

明日香は若干赤面しながらそう呟く。だが十代は全く意に返さず答える。

「遠慮すんなって！どうしても降りたいなら下に着いてからな！」

そう言い階段を降りて行く十代の背中で、明日香が『やっぱりお節介』と呟く中
階段の奥に出口が見え始める。

「あそこだ！」

先頭を走る遊夜の言葉に足を速める面々。
出口を抜けた所には、先程と同じくらいの広さの空間がありその奥に、鎖で縛られた希の姿があった。

「希！！」

「ニャァ！」

希を確認した遊夜と精霊のレスキューキャットが、
大声で希の名前を呼ぶと希はこちらを向いた。

「…遊夜、キャット……」
「希！！」
「希！無事なのね！！」

希の無事を確認し、表情に喜びが出る面々。

「待ってろ希！今助けるから！！」

そう言い遊夜が真っ先に助けに行こうとするが、奇妙な事に希は首を横に振る。

「希？」
「…行って……」

希のボソリと呟いた言葉に首を傾げる面々。

「…私の事は…いいから……行って……」
「何言ってんだよ希！」

希の言葉に、明日香を降ろしながら怒鳴り声を上げる十代。

「何でんな事言うんだよっ！！」
「……生け贄は…私だけでいい……皆は行って……！」

この希の言葉に、遊夜達は即座に察する。希は自分１人を犠牲に、自分達をここから出そうとしている事に。だがそんな事を許す面々ではない。

「何言ってんのよ希！あんたこの私に仲間を見捨てて逃げろって言うの！？」

「……仲間…？」

千世の言葉にキョトンとなる希。そこに、千世に続き口を開いてく面々。

「そうだぜ希！俺達は決闘で響き合った仲間だろっ！！」

「そうっすよ！」

「こんな所で諦めちゃダメなんだなぁっ！」

「案ずるな霧谷よ！俺達はお前を見捨てん！」

「お前程の女子、二次元以外で見たのは始めてなんだよ！色々コスプレさせてぇんだ！だから死ぬな――――！！」

「希！あんたが生け贄になったら、あたし達が見殺しにした見たいじゃない！

だから絶対助けるからね！！」

「そうそう！希ちゃんは私のＭｙフレンド！死なせはしないよ！」

「希！あなたが犠牲になる事なんて、誰も望んでないのよ！！」

「千世様のご要望なのです！」

「犠牲にならないでくださいませ希様！」

皆の言葉に希は目を丸くする中、『希…』と語り掛ける遊夜がいた。

「お前が生け贄になったら、主を失ったレスキューキャットはどうなる？」

遊夜の横で『ニャーン』と泣き声を上げるレスキューキャット。

「お前は決闘を通じて、俺達の仲間になった。おれはそう思ってる！」

「仲間……？」

希の言葉に『そうだ』と返す遊夜。

「お前は俺達の仲間だ！だから生け贄になんて絶対にさせない！！」

遊夜の力強い言葉に、希の目から涙が流れていく。

「にゃあ…」

希はそう呟き、それを見た遊夜が前に出る。

「お前が犠牲になる必要なんて無い。今助けるから。」

そう言い希に接近する遊夜。とその時――――――

「フハハハハハハッ！！滑稽！実に滑稽だよ人間諸君！！」

突然、不気味な笑い声が空間に響く。

「！！誰だ！！？」

「！！主よ、来るぞ！！」

「クリクリー！！」

「フシュ――――ッ！！」

精霊達の声とほぼ同時に、空間のほぼ中央から黒いオーラが現れ、

その中から先程のゾンビのような精霊が現れた。

「貴様が精霊だな！」

「いかにも。我が名は“死霊伯爵（しりょうはくしゃく）”闇の精霊だ。以後、お見知りおきを。」

そう言い精霊―死霊伯爵はニッコリと微笑む。

「死霊伯爵！怨念の剣を持つ“魔界（まかい）の死霊五等爵（しりょうごとうしゃく）”の1人だ！」

「アイツが封印されていた精霊か！」

死霊伯爵の登場に面々が驚く中、遊夜は死霊伯爵と対峙する。

「希を返して貰う！」

勇ましく吼える遊夜だが、死霊伯爵は『チッチッチッ』と人差し指を揺らす。

「残念ながらそれは出来ない相談だ。
彼女は私の復活の為の生け贄となってもらうからねぇ」

「そんな事させてたまるか！！」

死霊伯爵の言葉をバッサリ切り倒す遊夜。
そんな遊夜の態度に死霊伯爵『ふむ』と頷き、再び口を開く。

「ならば取り戻して見たまえ、決闘で！」

死霊伯爵の言葉と同時に、伯爵の斜め右の所から黒いオーラと共に大きなカードが現れる。それを見た遊夜は決闘盤を構える。

「決闘なら受けて立つ！そして希を救い出す！！ウォルフ！！」
「おうっ！」

遊夜の呼び掛けにウォルフはデッキへと戻って行く。
それを確認した死霊伯爵はニヤッと微笑み口を開く。

「フフフフフ、さぁ闇の決闘の始まりだ！！」
「俺は負けない！絶対に負けられない！！」

遊夜は手札を5枚引き、伯爵も黒いオーラのカードから手札を出現させる。

「「決闘っ！！」」

遊夜：ＬＰ／４０００
死霊伯爵：ＬＰ／４０００

2人の決闘が始まった途端、周りに重苦しい空気が漂う。

「これが闇の決闘……」
「先行は私だ、ドロー。」

伯爵の言葉と共に、黒いオーラのカードからカードを引く。

「私は『死霊男爵（しりょうだんしゃく）』を守備表示で召喚。」

死霊男爵（しりょうだんしゃく）　☆３　闇　悪魔族　ＡＴＫ／１１００　ＤＥＦ／０

伯爵の場に黒い紳士服をきた緑色のゾンビが現れた。
「さらに1枚カードを伏せ、ターンエンド。」

「守備力０！？それじゃ壁にもならないよ！」

伯爵の出したモンスターに逆の意味で驚く翔。その隣で『ふむ』と考える家康。

「確かに攻撃力も守備力も低い。って事は何か特殊能力があると考えと方がいいな。」

家康の言葉に『確かにそうね』と返す明日香。
その隣で文乃は心の中でひたすら祈っていた。

「（神様、お願いします、希を……遊夜を助けてあげてください……）」

文乃が願う中、遊夜のターンとなる。

「俺のターン、ドロー！」

遊夜は引いたカードを手札に加え、即座に次の一手をうつ。

「俺は『蒼雷郷（そうらいきょう）の剣客（けんかく）』を攻撃表示で召喚！！」

蒼雷郷の剣客　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に蒼い和服に身を包んだ剣士が現れる。

「（守備力０のモンスターを守備表示、恐らく誘ってるな。だがここは、あえてその誘いに乗る！）バトルだ！『蒼雷郷の剣客』で『死霊男爵』を攻撃！！」

遊夜の命令と共に剣客が男爵に迫る。

「この時！『蒼雷郷の剣客』の効果発動！！このカードが相手モンスターと戦闘を行なう時のみ、攻撃力を２００Ｐアップさせる！」

蒼雷郷の剣客　ＡＴＫ／１８００⇒ＡＴＫ／２０００

「斬り裂け！“蒼雷　抜刀斬”！！」

剣客の瞬殺の居合い斬りが、死霊男爵を斬り捨てる。

「よっしゃっ！遊夜君が先制だっ！！」

遊夜の優勢に喜びを上げる翔。だが、それに対し伯爵は余裕の表情で微笑む。

「フフフフ、掛かったな。『死霊男爵』の効果発動！

このカードがバトルで破壊された時、デッキから守備力２０００以下の
悪魔族モンスター１体を特殊召喚できる！」
「守備力２０００以下の悪魔族……はっ！！」

この時、遊夜は『守備力２０００以下の悪魔族』というキーワードで瞬時に出てくるモンスターを察知する。

「フフフ、私の出番は意外と早かった様だ。行くぞ！
私は『死霊男爵』の効果により、私自身『死霊伯爵（しりょうはくしゃく）』を攻撃表示で特殊召喚！！」

死霊伯爵（しりょうはくしゃく）　☆５　闇　悪魔族　ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／７００

伯爵の場に伯爵本人が現れた。その姿に、遊夜は自然と身構える。

「やはり来たか！」
「フハハハハッ！やはり現世に復活するのは実に爽快な気分だっ！！」

そこまで言った伯爵は『だが』と続けて話す。

「やはり完全に復活するには生け贄が必要のようだ。君もその１人だよ少年。」

そう言い剣を遊夜に向ける伯爵だが、遊夜は動じない。

「そんな事させるかっ！俺がお前を再び封印してみせる！

カードを2枚伏せ、ターンエンド！！」

「いきなり、精霊自身が召喚されちまったか。」

十代の言葉に周りの空気が重くなる中、

『大丈夫だろ』と1人余裕の表情をする家康。

「精霊っつても、所詮たいした効果も持たねえノーマルモンスターだ。

しかも攻撃力もそんなに高くねぇ。大したことねぇさ。」

家康の言葉に『なるほど』と納得する面々。

だが、それに対し余裕の表情で微笑む伯爵の姿があった。

「では行くぞ、私のターン。」

伯爵は引いたカードを手札に加え、場を見渡す。

「君の剣客の攻撃力は、戦闘を行なう時は実質２０００。私と互角だ。

だが、私にはそれをサポートする優秀な部下がいる。」

そう言い伯爵は高らかに右腕を上に上げる。

「私は『死霊子爵（しりょうししゃく）』を攻撃表示で召喚！」

死霊子爵（しりょうししゃく）　☆４　闇　悪魔族　ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／１００

伯爵の場に黒い紳士服に黒いマントを羽織った黄緑色のゾンビが現れた。

「伯爵自身が自滅して、子爵でダイレクト狙いか！？」

だが遊夜の言葉に、伯爵は『チッチッチッ』と人差し指を揺らす。

「あいにく、私は自分を自滅させようなどという愚考はしない主義だ。
私は“ユニオンモンスター”である『死霊子爵』の効果発動！」

伯爵の『ユニオンモンスター』という言葉に、遊夜は伯爵の狙いを察知する。

「ユニオンモンスターって！？」

そう呟く翔に、明日香が口を開く。

「特定のモンスターに装備カードとして装備することが出来るモンスター。
それがユニオンモンスターよ。」

明日香の言葉に『それじゃあ』と呟く翔に、大吾郎が『うむ』と返す。

「恐らくあのモンスターを自分自身に装備させ、攻撃力を上げるの

だろう。」

大吾郎の言葉に『その通り』と返す伯爵。

「『死霊子爵』は自分の場の悪魔族モンスターに装備できるのだ。
我が力となれ、『死霊子爵』っ！！」

伯爵の言葉と同時に、死霊子爵は黒いオーラを纏い姿を黒いマントに変えた。
そのまま、伯爵に着用される。

「『死霊子爵』を装備した悪魔族のモンスターは、
攻撃力と守備力を４００Ｐアップさせる。」

死霊伯爵　ＡＴＫ／２０００⇒ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／７００⇒ＤＥＦ／１１００

死霊伯爵の能力値が上がったことに『くっ』と身構える遊夜。

「逝くぞっ！私自身で『蒼雷郷の剣客』を攻撃！！
“怨念の剣ーナイト・レイド”！！！」

伯爵の持つ剣が剣客に迫る。

「させるかっ！リバースカード、オープン！『次元幽閉』！！
攻撃モンスターをゲームから除外する！！」

遊夜が発動したカードを見て、『うまいっ！』と声を上げる隼人。

「これで攻撃を凌いだ上に、伯爵を除外できるんだなぁっ！」
「遊夜っ！！」
「よっしゃぁっ！行けえぇっ遊夜あぁぁーっ！！！」
遊夜が発動したカードに期待が高まる面々。だが、伯爵はニヤッと微笑んだ。
「甘いわぁっ！カウンター罠発動！『魔宮の賄賂』！！
相手に1枚のドローを許す代わりに、相手の魔法・罠の発動を無効にし破壊する！！」
伯爵の言葉と同時に、次元幽閉が消滅した。
「くっ！俺はカードを1枚ドロー！『蒼雷郷の剣客』の効果発動！！」
蒼雷郷の剣客　ＡＴＫ／１８００⇒ＡＴＫ／２０００
「だが私の攻撃力の方が上だ！ナイト・レイドよ、稲妻の剣士を斬り裂けぇえっ！！」
伯爵の怨念の剣が、剣客を貫いた。
遊夜：ＬＰ／４０００⇒３６００
「ぐあぁぁっ！！？」
遊夜は、闇の決闘の強力な波動に吹き飛ばされる。
「「「「「「「「「「遊夜（くん、様）っ！」」」」」」」」」」

「うぅ……これが、闇の決闘……」

後頭部に手をやり、苦痛の表情を浮かべる遊夜とそれを心配する面々。

それを見ていた伯爵は、『ククククク』と笑い出す。

「ククククク、いい、実にいい……」

「何…？」

不意に笑い出した伯爵を睨む遊夜。

「その苦痛に満ちた表情！実に素晴らしい！！やはり何年たとうとも、

他者が苦痛に苦しむのは最高だっ！！この上ない快楽だよっ！！」

そう言い伯爵は再び『フフハハハハハハハッ』と笑い出す。

その姿にギリッと歯軋りを立てる遊夜。

「…外道め…！」

「フハハハハッ、ありがとう。最高の賛辞だよ。そして君にはまた苦痛を味わってもらう。」

伯爵の言葉に『なにっ！？』と身構える遊夜。

「『死霊子爵』を装備したモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、

相手プレイヤーは４００Ｐのダメージを受ける。」

「なにっ！？」

伯爵の言葉と共に、マントとなった子爵から黒いオーラが出現し

遊夜に襲い掛かる。

遊夜：ＬＰ／３６００⇒３２００

「ぐっ！くそ……っ！！？」

この時、遊夜は自分の体の異変に気づく。
十代の時と同様に体が少しずつ消えていたのだ。
そのことに対し、伯爵は微笑みながら答える。

「君の体は少しずつ、私の生け贄となっているのだよ。
私はカードを２枚伏せターンエンドだ！」

そう言いターンエンドを宣言する伯爵には、ある思惑があった。

「（フフフ、状況はこちらが有利。しかし万が一に備えて伏せたカードの内１枚は
攻撃モンスターを破壊する『炸裂装甲（リアクティブアーマー）』。私の場は完璧だ！）」

伯爵が自分の罠に自信を持つ中、遊夜は自分のデッキに手を伸ばす。

「生け贄になんかになってたまるかっ！俺のターン！」

引いたカードを見た遊夜は、『よし』と頷きそのカードを即座に使う。

「俺はチューナーモンスター『蒼雷郷（そうらいきょう）の野猪（のじし）』を召喚！」

蒼雷郷（そうらいきょう）の野猪（のじし）　☆２　光　雷族　ＡＴＫ／６００　ＤＥＦ／６００

遊夜の場に、蒼白く光るイノシシが現れる。

「来た！チューナーモンスター！！」

遊夜の切り札とも言うべきチューナーモンスターの出現に周りの面々の士気が上がる。

「さらに罠発動！『蒼白き墓石』！

俺の墓地から『蒼雷郷』と名の付くモンスター1体を攻撃表示で特殊召喚する！

蘇れ！『蒼雷郷の剣客』！！」

蒼雷郷の剣客　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に、再び蒼い和服に身を包んだ剣客が現れる。

「ほう、珍しいモンスター達だな……」

「驚くのはここからだ！行くぞ、☆４『蒼雷郷の剣客』に☆２『蒼雷郷の野猪』をチューニング！！」

猪が緑色のリングとなり、剣客もその身を４つの星に変える。

そして一直線に４つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天へ昇る刃となる。雷鳴と共に轟け！！シンクロ召喚！！

蒼雷の人斬り、『蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ』！！」

蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ　☆６　風　雷族　ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１９００

光が弾けその中から、蒼い和服に身を包み刀を二本持ち背にいくつもの武器を持った武者が姿を現す。

「シンクロ召喚。ますます珍しいではないか。」

「まだだ！手札から速攻魔法『サイクロン』を発動！！

これは場の魔法・罠カード１枚を破壊する魔法カード！

これで装備カードとなっている『死霊子爵』を破壊する！！」

遊夜の場から発動した台風が、マントとなっていた死霊子爵を吹き飛ばす。

「ぬおぉっ！」

「これでお前の攻撃力と守備力は元に戻る！」

死霊伯爵　ＡＴＫ／２４００⇒ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１１００⇒ＤＥＦ／７００

マントの消滅と共に、死霊伯爵の能力が低下する。

「これで、攻撃力はこっちが上だ！バトル！

『蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ』で『死霊伯爵』を攻撃！！」

ライゾウは背の武器を投げつけ、さらに自分の持つ二刀で
死霊伯爵に斬り掛かる。

「フ、あまいなっ！罠発動！『炸裂装甲（リアクティブアーマー）』！！攻撃モンスターを破
壊する！！
これで君が出した折角のモンスターも終わりだぁ……っ！！？」

ここで伯爵は、ある事に気づく。
発動した罠カードに蒼白い電撃がまとわり付き、罠が発動しない事
に気づく。

「なぜだっ！？なぜ発動しないっ！！？」

驚く伯爵に『残念だったな』と微笑む遊夜。

「悪いが、『蒼雷郷の野猪』をシンクロ素材としたモンスターが攻
撃する場合、
相手はダメージステップ終了時まで罠カードを発動する事はできな
い！！
よって、『炸裂装甲』の発動は無効だ！！」

遊夜の言葉と共に、炸裂装甲がセット状態へと戻り
ライゾウの攻撃を妨げるものが無くなった。

「行けぇっ！！“蒼雷（そうらい）　乱曲斬（らんきょくざん）”！！」

無数の武器と二本の刀が、死霊伯爵を斬り裂く。

死霊伯爵：ＬＰ／４０００⇒３７００

「ぐあぁぁぁぁっ！！！」

死霊伯爵は、場から元いた決闘者の場所へと戻った。

「さらに！『ライゾウ』が戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手に６００Ｐのダメージを与える！！“蒼雷（そうらい）波動（はどう）”！！」

ザンゾウの体から発せられた電撃が伯爵を襲う。

死霊伯爵：ＬＰ／３７００⇒３１００

「ぐおぉぉおっ！！！」

「そして！『ライゾウ』は戦闘で相手モンスターを破壊する度に攻撃力を６００Ｐアップする！！」

蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ　ＡＴＫ／２３００⇒ＡＴＫ／２９００

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！！」

「いよっしゃあぁっ！これで遊夜が圧倒的に有利だぜ！！」

遊夜の優勢に、声を上げる家康。

「よっしゃぁっ！！佐藤・鈴木！応援始めいっ！！」

「「はっ！！」」

千世の命令と共に、いつ何処で着替えたのか分からないが

チアリーダーに着替えた佐藤と鈴木が応援を始める。

「「フレフレ遊夜様っ！！」」

「一体いつ着替えたんすか？」

「翔、そこは多分ツッコんじゃダメなんだなぁ。」

翔と隼人が一筋の汗を流す中、『ふぅ』と胸を撫で下ろす文乃の姿があった。

「ん～、どうしたの文乃。彼氏が無事でホッとした？」

「そ、そんなんじゃないわよっ！！」

「あなた達ねぇ……」

ギャーギャー騒がしい面々に呆れる明日香だが、ここで大吾郎が何かを見ていることに気づく。

「どうかした？」

明日香の言葉に『うむ』と返す大吾郎。

「自分の気のせいかもしれんが、あの精霊の様子がおかしい。」

大吾郎の言葉に明日香は視線を伯爵に向ける。それを見た十代も視線を向ける。

「何だ？なんか苦しんでるみたいだな。」

十代の言葉と同時に、膝を付いていた伯爵はフラフラと立ち上がり

――――――

「ウオオオォォォォォォォォォォォォーッ！！！」

伯爵の雄叫びが、その空間に響く。

「な、なんだっ！？」

「にゃぁっ！？」

遊夜は耳を塞ぎ希も何とか耐える中、伯爵が吼える。

「おのれえぃっ、たかが人間があぁぁっ！！魔界の伯爵たる我に攻撃するとは！

その愚行後悔させてくれるわぁぁっ！我のターン！！」

伯爵の豹変に、遊夜は目を丸くする。

「なんだ！？何がどうなっているんだっ！？」

「あ奴め、本性現したか。」

気が付くと、遊夜の隣にいつの間にかウォルフが実体化していた。

「どういう事だ？」

遊夜の言葉に、ウォルフはゆっくりと口を開く。

「『死霊伯爵』のテキストにも書かれていた筈だ、

『紳士を装ってはいるが、本性は邪悪そのもの。』とな。

あれこそ奴の本性よ。」

ウォルフの言葉に、視線を伯爵に戻す遊夜。
そこには、先程までの紳士的なしぐさも言葉も無い伯爵がいた。

「リバースカード、オープン！『リビングデッドの呼び声』！！
我の墓地に眠るモンスターを復活させる！！私は私自身を復活させる！！」

死霊伯爵　☆５　闇　悪魔族　ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／７００

伯爵の場に、再び伯爵自身が現れる。

「まだだ！私は私自身を生け贄に――――」
「自らを生け贄だとっ！？」

伯爵の行動に目を丸くする遊夜に、伯爵はニヤッと笑う。

「このカードは場にいる我を生け贄に特殊召喚できるのだっ！
さあ、現れたまえ『死霊侯爵』！！」

死霊侯爵　☆７　闇　悪魔族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１５００

伯爵の場に、西洋風の黒い一張羅に真紅のマントを着用し、
２本のサーベルを持った赤いゾンビが現れた。

「なるほど、こいつの召喚のために自身を生け贄にしたのか。」
「まだまだ行くぞ！我は手札から『マジック・プランター』を発動

！！

場に表側表示で存在する永続罠カード1枚を墓地に送る事で、
我はカードを2枚ドロー出来る！！
我は『リビングデッドの呼び声』を墓地に送り、カードを2枚ドロー！！」

引いたしたカードを見た伯爵は、ニヤッと微笑む。

「そして我は手札から魔法カード『死者転生（ししゃてんせい）』を発動！！
手札1枚をコストに、自分の墓地からモンスター1体を手札に加える！
我は『死霊子爵』を手札に加え、召喚！！」

死霊子爵　☆４　闇　悪魔族　ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／１００

伯爵の場に再び死霊子爵が現れれ、その姿を見た瞬間
遊夜は伯爵の狙いを察知する。

「っ！！そう来たかっ！！」
「フフハハハハハッ！我は『死霊子爵』を『死霊侯爵』に装備させる！！
攻撃力・守備力共に、４００Ｐアップだ！！」

死霊侯爵　ＡＴＫ／２８００⇒ＡＴＫ／３２００　ＤＥＦ／１５００⇒ＤＥＦ／１９００

死霊子爵が死霊侯爵の赤いマントに取り付き、黒いマントに変わると同時に

侯爵の能力値が上がった。

「逝くぞ小僧！『死霊侯爵』で『蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ』を攻撃！
“ツイン・ナイト・レイド”！！」

死霊侯爵の二刀乱舞が、ライゾウを細切れにする。

遊夜：ＬＰ／３２００⇒２９００

「ぐっ！！」

そのダメージの衝撃波にふらつく遊夜。だが、それだけでは終わらない。

「さらに！『死霊子爵』の効果により貴様は４００Ｐのダメージを受ける！！」

伯爵の言葉と同時に、マントから放たれた黒い闇が遊夜を襲う。

遊夜：ＬＰ／２９００⇒２５００

「ぐあぁっ！！」

そのダメージに、遊夜はガックリと膝をつく。

「遊夜！」

それを見た文乃が、真っ先に声を上げる。

「マズいぜ、ＬＰが残っても決闘が続行できなければ遊夜の負けだぜ！」

家康の言葉に『そんな』と涙目になる翔。だが、それに対し十代は声を荒げる。

「がんばれ遊夜！お前が生け贄になるなんて俺は絶対に認めないぞっ！！勝て遊夜！！！」

十代が声を荒げる中、『無駄な事を』と呟く伯爵。

「どの道このターンで、我の勝ちは決した！」

伯爵の言葉に『どういう事だ』と返す遊夜。

「『死霊侯爵』が戦闘で相手モンスターを破壊した時、続けてもう１度だけ攻撃が出来るのだっ！！」

伯爵の言葉に『なにっ！！？』と目を丸くする面々。
遊夜の場には、壁となるモンスターは無い。
攻撃力３２００の死霊侯爵の直接攻撃を食らったら、その時点で終わりである。

「これで終わりだあぁっ！！『死霊侯爵』よ！
その者を我が生け贄にするがいい！！“ツイン・ナイト・レイド”
おぉぉっ！！」

伯爵の命令と共に、死霊侯爵の二刀乱舞が遊夜に迫る。

「この攻撃が決まれば、遊夜君の負けだ！！」
「いや、ここで終わるあいつではない！！」
「遊夜――――――っ！！」
「ダメエェェ――――――ッ！！！」
「負けんな遊夜あぁぁぁぁぁぁぁっ！！！」

思い思いの言葉が交差する中、遊夜は決闘盤のスイッチを押す。

「まだだ！速攻魔法『雷鳥の雛鳥（らいちょうのヒナどり）』発動！！
自分の場に『雷鳥の雛鳥（らいちょうのヒナどり）トークン』を2体守備表示で特殊召喚する！！！」

雷鳥の雛鳥（らいちょうのヒナどり）トークン　☆１　風　雷族　ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／０
雷鳥の雛鳥（らいちょうのヒナどり）トークン　☆１　風　雷族　ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／０

遊夜の場に、卵から生まれた黄色い雛鳥が2羽現れた。

「ふん、小ざかしい！『死霊侯爵』よ！
そのザコモンスターを薙ぎ払え！！“ツイン・ナイト・レイド”！！」

死霊侯爵の二刀乱舞が、幼い雛鳥の内　1体を葬る。

「さらに！戦闘ダメージは無くとも、装備されている『死霊子爵』の効果により
４００Ｐのダメージを受けて貰おうっ！！」

伯爵の言葉と共にマントから放たれる黒い闇が、再び遊夜を襲う。

遊夜：ＬＰ／２５００⇒２１００

「ぐあぁっ！！」

そのダメージに、遊夜はふらついて再び膝をついてしまう。

「〔我はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ。〕」

そう言い伯爵は、ニヤッと微笑みながら遊夜に語りかける。

「どうだ小僧、貴様に最早勝機は無い！これ以上我は無駄な時間を過ごす気は無い
さっさと降参（サレンダー）するがいい！」

伯爵の言葉に、遊夜は『サレンダー？』と呟く。
だが、それに対し真っ向から否定の声を上げる者がいた。十代である。

「ふざけんなっ！！遊夜が降参（サレンダー）なんかするもんかっ！！」

十代の言葉に『なに？』と返す伯爵。

「決闘者ってのは、デッキという可能性がある限り最後まで諦めないんだっ！！
遊夜は俺が出会った奴の中でも、最高の決闘者だっ！！

その遊夜がサレンダーなんかするもんかっ！！勝て遊夜！！」

十代の言葉に『十代…』と呟くように返す遊夜。

「…ふっ、無論だよ！」

そう言い遊夜はフラフラと立ち上がる。

「俺は降参（サレンダー）なんてしないっ！そして俺は、負けないっ！！」

そう言う遊夜に対し、『ふん』と鼻で笑う伯爵。

「強がった所で何が出来る？我が『死霊侯爵』の攻撃力は３２００！しかも『死霊子爵』は、装備モンスターが戦闘で破壊される時、身代わりに出来るのだ！！この鉄壁のコンボをどう破るというのだ！？」

「ならば俺は、それをやってみせてやる！！」

そう言い『行くぞ！』とデッキに手をやる遊夜。

「俺のターン！ドロー！！」

引いたカードを見た遊夜は『よし！』と頷く。

「俺は魔法カード『蒼雷（そうらい）の宝札（ほうさつ）』を発動！！
手札から『蒼雷郷』と名の付くモンスター１体をコストに、
デッキからカードを２枚ドローできる！
俺は手札から『蒼雷郷（そうらいきょう）の狛犬（こまいぬ）』を墓地に送り
デッキからカードを２枚ドロー！！」

引いた2枚のカードを見た遊夜は、次に自分が取るべき行動を即座に決める。

「『雷鳥の雛鳥トークン』は、雷族モンスター以外の生け贄召喚のための
生け贄にはできない。だが、俺のデッキなら問題は無い！
おれは『雷鳥の雛鳥トークン』を生け贄に捧げる――――――
来い！天を切り裂く雷！『雷帝(らいてい)ザボルグ』！！」

雷帝(らいてい)ザボルグ　☆5　光　雷族　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に、雷様に似た帝が現れる。

「『帝(みかど)モンスター』かっ！！」

伯爵の言葉に『その通りだ』と返す遊夜。

「『雷帝ザボルグ』の効果発動！生け贄召喚に成功した時、
場のモンスター1体を破壊する！唸れ！“デス・サンダー”！！」

ザボルグの放った稲妻が、死霊侯爵を貫き破壊した。

「くっ！『死霊子爵』の効果はカード効果による破壊には発動できない。
それに気づいていたかっ！！」

伯爵の言葉に対し、『そういう事さ！』と返す遊夜。

「行くぞ、バトル！『雷帝ザボルグ』で、プレイヤーへ直接攻撃（ダイレクトアタック）！！
“ローリング・サンダー”！！」

ザボルグの放った電撃が、伯爵に迫る。

「我に触れる事は2度と叶わなぬわっ！
リバースカード、オープン！『ダーク・ミスト』！！」

伯爵が発動したカードを見て、遊夜は『そのカードは！！』と目を丸くする。
ダーク・ミスト、それは廃寮の前で翔が拾い
それが希と明日香が連れ去られる隙を与えたカードなのだ。
当然の反応である。

「『ダーク・ミスト』は攻撃モンスターと同じ☆を持つ闇属性モンスターをデッキから墓地に送ることで、攻撃を無効にする罠カード！
『雷帝ザボルグ』は☆5、我は☆5の『ミストデーモン』を墓地に送り
攻撃を無効にする！」

伯爵の場に、黒い霧が現れザボルグの放った電撃が消えて行く。

「ちっ！俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだっ！！」

「うわっ、おっしいっ！！！」

遊夜の攻撃失敗に、地団駄踏む千世。それに対し『落ち着いてくだ

さい』と
千世を落ち着かせようとする佐藤と鈴木。
その隣で、翔は首を傾げていた。

「でも、先アイツが言ってた『帝モンスター』って？」

翔の言葉に『お前、知らねえのかよ』と驚く家康。

「『帝モンスター』ってのはな、生け贄召喚によって効果を発生させる
『帝（みかど）』の名を持つモンスターたちだよ。」
「今の所、全属性の帝が揃ってるけど　遊夜のデッキにもあったのね。」

明日香の言葉に『えぇ』と返す文乃。

「ザボルグは、昔使ってたあいつのデッキのエースだったもの。」

文乃がそう呟く中、伯爵のターンとなる

「おのれ、我のターン！！」

引いたカードを見ながら、伯爵は考えを巡らす。

「（マズい！このままでは我の負けは確定してしまう！！
ともかく、壁を出さねば。）」

そう判断した伯爵は即座にカードを発動させる。

「自分の場にカードが無い場合、
このカードは墓地から特殊召喚できる！来い！『ミストゴブリン』
！！」

ミストゴブリン　☆１　闇　悪魔族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／２００

伯爵の場に、白い霧で出来た小悪魔が現れた。

「さらに我は、『強欲な壺』発動！デッキからカードを2枚ドローする！！」

伯爵は、２枚のカードを引いた瞬間、その内の１枚を見て目を丸くする。

「（このカードは！……いや、だがこのカードを使うにはキーカードが足りな過ぎる。となると……）」

伯爵は、引いたもう１枚のカードを指差す。

「（ここは賭けに出るしかないな！）
我は手札から魔法カード『悪魔（あくま）との血印（けついん）』を発動！！
自分の墓地から闇属性・悪魔族モンスターを１体除外し、
除外したモンスターの攻撃力１０００Ｐにつきデッキからカードをドローする！！
正し、このカードを使った場合、我は次のターンのドローフェイズにドロー出来ない！！」

そう言い伯爵は、墓地のモンスターを選択する。

「我は『ミストデーモン』を除外する！『ミストデーモン』の攻撃力は２４００！
よって我は2枚のカードをドローする！！」

伯爵は全身全霊をかけてカードを引いた瞬間――――――

――――伯爵は微笑んでいた。

「フフフ、フハハハハハハハハッ！！
小僧！どうやら勝利の女神は我に微笑んだようだなっ！！」

伯爵の言葉に『なにっ！？』と疑問を持つ。

「（奴の場には、攻撃力・守備力共に低いモンスターが1体のみ。
一体奴は何を引いたんだ！？）」

遊夜が疑問に思う中、『逝くぞ』と決闘を続行する伯爵。

「我は『ミストゴブリン』を生け贄に、
現れよ！『死霊操り(しりょうあやつ)し　パペットマスター』召喚！！」

死霊操りし（しりょうあやつ）　パペットマスター　☆６　闇　悪魔族　ＡＴＫ／０
ＤＥＦ／０

伯爵の場に、道化師のような格好のゾンビが現れる。

「攻撃力・守備力共に０っ！？そんなの攻撃どころか壁にもならないよ。」

そのモンスターの能力値が低いことに、小バカにしたような態度をとる翔に
『いや』と否定の言葉を漏らす大吾郎。

「攻守０のモンスターを出すという事は、それなりの効果か何かがあるはずだ。」

大吾郎の言葉にコクリと頷く、翔以外の面々。

「『死霊操りし　パペットマスター』の効果発動！
このカードが生け贄召喚に成功した時、ＬＰ２０００をコストに我の墓地から悪魔族モンスター２体を特殊召喚する事ができる！
正し、この効果によって特殊召喚されたモンスターはこのターン攻撃できない！」

死霊伯爵：ＬＰ／３１００⇒１１００

「ＬＰ２０００のハイコストを払ってまで召喚するモンスターって

一体……」

遊夜の言葉に『見せてやろう』と返す伯爵。

「我は我自身のモンスター『死霊伯爵』と『死霊子爵』の2体を特殊召喚する！！」

死霊伯爵　☆５　闇　悪魔族　ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／７００

死霊子爵　☆４　闇　悪魔族　ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／１００

パペットマスターの手から放たれた糸によって、
伯爵の場に伯爵自身と死霊子爵が復活する。

「一気に3体のモンスターを揃えたか。けど、一体何を……」

そう呟く遊夜に『教えてやろう』と伯爵が答える。

「我は今から、このデッキのエースを召喚する。」

伯爵の言葉に『なにっ！？』と目を丸くする遊夜。

「だが我がデッキのエースは、
このカードの効果によってでしか特殊召喚する事は出来ない。」

そう言い手札の1枚を指差す伯爵。

「そしてこのカードを発動させる為の条件は揃った！

逝くぞ小僧！手札から儀式魔法『死霊公爵・至宝勲章の儀式』を発動！！」

伯爵が発動したカードにより、伯爵の場に魔界の玉座と
魔界の紋章が描かれた旗が現れる。

「これにより、我は場か手札から☆の合計が１０以上になるように
我のモンスターを生け贄に捧げる！
我は我自身と『パペットマスター』を生け贄に捧げ――――」

伯爵の言葉と共に、伯爵自身とパペットマスターは玉座から出てきた黒い炎に包まれ
紋章の中へと吸い込まれる。

「魔界の最高位の公爵よ、今その姿を現せ！！いでよ！『死霊公爵・デスク』！！」

死霊公爵・デスク　☆１０／闇属性／悪魔族／攻１０００／守１０００

黒い炎が、濃い真紅の炎へと変わり、その中から黒い鎧に真紅のマントを着用し
剣と盾を装備した紺色のゾンビが現れる。

「そいつがお前のデッキのエースか。」

遊夜の言葉に『その通り』と返す伯爵。

「これこそ“魔界の死霊五等爵”最高位を誇る『死霊公爵・デスク』
！！
その力を思い知るがいい！！」

「でも、攻撃力たったの１０００。アレで何をすきなんだろう。」

伯爵が出したモンスターに疑問が残る翔。それに対し『でも』と口
を開く隼人。

「あのモンスターは先の儀式魔法のによる儀式召喚によってでしか
召喚できないモンスター。なら、それ相応の特殊能力がある筈なん
だなぁ。」

隼人の言葉に頷く面々。

「多分それは、すぐ分かることだと思うぜ。」

十代の言葉に、翔は視線を遊夜と伯爵の決闘に戻す。

「逝くぞ！『死霊公爵・デスク』の効果発動！！
我が墓地の悪魔族モンスター１体を指定し
このカードに装備する事ができる！！我は『死霊侯爵』を選択し、
装備！！」

伯爵の言葉と同時に、デスクの鎧の胸部分が開き
墓地の死霊侯爵を吸収していく。

「『死霊公爵・デスク』は、装備したモンスターの能力値と特殊効果を吸収する！」

死霊公爵・デスク　ＡＴＫ／１０００⇒ＡＴＫ／３８００　ＤＥＦ／１０００⇒ＤＥＦ／２５００

「これにより、『デスク』はその圧倒的な攻撃力と守備力そして『死霊侯爵』の２回攻撃能力を得た！！」

伯爵の言葉に『くっ』と苦悶の表情を浮かべる遊夜。

「だがまだだっ！我はさらに『パペットマスター』の効果で蘇らせた『死霊子爵』を『デスク』に装備！！」

伯爵の言葉と同時に、子爵はデスクの真紅のマントに取り付き、そのマントを漆黒の黒へと変えた。

死霊公爵・デスク　ＡＴＫ／３８００⇒ＡＴＫ／４２００　ＤＥＦ／２５００⇒ＤＥＦ／２９００

「攻撃力が４０００を超えたっ！！？」

その圧倒的な攻撃力に目を丸くする面々。

「小僧、貴様との決闘は有意義だったぞ。だが、これで終わりだっ！！

逝け！『死霊公爵・デスク』で『雷帝ザボルグ』を攻撃！！

“デス・ナイト・ブレイド”おぉぉぉっ！！！」

魔界の剣を抜き放ったデスクが、ザボルグに斬り掛かる。

「マズいっ！！」
「「遊夜あぁぁっ！！！」」
皆の悲痛の叫びが響く中、遊夜は身構えの体制をとる。
「身構えた所で何が出来る！！これで最後だあぁっ！！」
伯爵の言葉と同時に、デスクの剣がザボルグに命中、
その衝撃波で土煙が立つ。
「ぐあぁぁっ！！」
その衝撃波に、遊夜は何とか耐え切る。
「フハハハハハッ！これで貴様は終わりだ小僧……っ！？」
伯爵はこれで終わったと思っていた。遊夜のＬＰを見るまでは。
遊夜：ＬＰ／２１００⇒３００
「バカなっ！？なぜだ、なぜＬＰが残っている！？」
伯爵が驚くのも無理は無かった。
伯爵の考えでは、デスクがザボルグとの戦闘で発生する戦闘ダメージと
装備している子爵の効果ダメージによって、遊夜のＬＰは０になるはずだったのである。
だが、現実には遊夜のＬＰは０になっていないのだ。
動揺する伯爵に対し、遊夜は『場をよく見ろ』と言う。
「なに……なっ！？」

動揺する伯爵が見たもの、それは先頭で破壊された筈のザボルグが健在なのだ。
いやそれだけではない。場をよく見ると、薄っすらとだが犬のようなモンスターがザボルグを守っているのだ。
その状況に驚く伯爵に対し口を開く遊夜。

「俺は墓地の『蒼雷郷(そうらいきょう)の狛犬(こまいぬ)』の効果を発動させた！
こいつを除外する事で、このターン雷族モンスターは戦闘では破壊されないっ！！
よって、『死霊侯爵』の連撃効果も『死霊子爵』の効果ダメージも発生しないっ！！」

遊夜の言葉に『なんだとっ！？』と目を丸くする伯爵。

「そうか！『死霊侯爵』が2回攻撃するには1度相手モンスターを戦闘で破壊しなきゃならない！」

十代の言葉に続き口を開く明日香。

「そして『死霊子爵』の効果ダメージも、戦闘で破壊した時のみ発生する！
破壊さえされなければ、ＬＰはまだ残るわ！！」
「おぉ？？っ！さすが遊夜っち！！」

「おのれぇ、諦めの悪い！我はターンエンドだっ！！」

怒りを顕にする伯爵だが、彼にはまだ勝機があった。

「（ふん、だが今の奴に何が出来る！
我が『死霊公爵・デスク』の攻撃力は圧倒的だっ！！
それに……）」

そう言い伯爵は、先程から伏せてあるカードに目をやる。

「（最初は邪魔され、先程は保険の為に発動しなかった
『炸裂装甲』がある！死角はないっ！！）」

伯爵がそう考える中、遊夜はデッキに手を伸ばす。

「（……感じる。お前を感じるぞ！）俺のターン！！」

遊夜は全身全霊をかけてカードを引いた瞬間――――――

――――遊夜は微笑んでいた。

「来た！！」

そう言い引いたカードを速攻で使用する遊夜。

「力を貸してくれっ！来い、チューナーモンスター『蒼雷郷（そうらいきょう）の銀狼（ぎんろう）』

蒼雷郷の銀狼　☆３　風　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１００

「ようやく呼んでくれたな、主よ！」
「おうっ！頼むぜ狼！！」

遊夜の言葉に『フッ』と微笑むウォルフ。

「その精霊はチューナーモンスターだったのか……という事はまさか……！！」

伯爵の言葉に『そのまさかさっ！』と返す遊夜。

「行くぜ！☆５『雷帝ザボルグ』に☆３の『蒼雷郷の銀狼』をチューニング！」

銀狼が緑色のリングとなり、ライゾウもその身を５つの星に変える。
そして一直線に５つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天へと昇る翼となる。落雷と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の守護龍、『蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン』！！」

蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン　☆８　光　雷族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２５００

光が弾けその中から、所々を蒼い甲冑で堅め蒼い翼を生やした蒼白く輝く東洋の龍が姿を現す。

「な、なんだ、この龍はっ!?」

その威風堂々とした姿に、伯爵は目を丸くする。

「出たぜ!遊夜の切り札!!」

スカイサンダー・ドラゴンの出現に、家康が声を荒げる。

「攻撃力では、『デスク』に劣ってるけど……」

「『スカイサンダー・ドラゴン』の特殊効果があれば問題ない!」

十代の言葉に面々は頷く。

「『蒼雷郷の銀狼』の効果により!攻撃力を１０００Ｐアップ!」

蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン　ＡＴＫ／２８００⇒ＡＴＫ／３８００

「だが、その攻撃力では我が『死霊公爵・デスク』の方が上だ!!」

だが伯爵の言葉に対し『どうかな』と笑って見せる遊夜。

「『スカイサンダー・ドラゴン』の効果発動!!

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

相手の場のモンスターを全て破壊できる!!唸れ!!“蒼覇落雷(そうはらくらい)撃(げき)”!!」

スカイサンダー・ドラゴンの身体から放たれた蒼い稲妻が天へと昇り天より注がれる蒼い落雷となりデスクを破壊する。

「何いいいっ!!?バカなっ!!?」

「これで、お前の場のモンスターは全滅したっ!!

行けっ!!『蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン』でプレイヤーに直接攻撃(ダイレクトアタック)!!轟け!!“天鳴(てんめい)蒼雷破(そうらは)”!!」

スカイサンダー・ドラゴンの口から放たれた蒼い稲妻が伯爵に迫る。

「ふん、バカめっ!このカードがあるのを忘れたかっ!!

罠発動!『炸裂装甲(リアクティブアーマー)』!!攻撃モンスターを破壊する!!」

炸裂装甲より放たれる赤い電撃が、スカイサンダー・ドラゴンに迫る。

「マズいっ!!」

「そのカードがあったかっ!!」

「「遊夜っ!!」」

「にゃあぁぁぁっ!!」

だが、遊夜はその上を行く。

「罠発動!『シンクロ・アウト』!!シンクロモンスターを融合デッキに戻す!!」

スカイサンダー・ドラゴンが消え、赤い電撃は宙をきる。

「そして！戻したシンクロモンスターの素材に使ったモンスターを墓地から特殊召喚できる！！蘇れ！『雷帝ザボルグ』！！『蒼雷郷の銀狼』！！」

蒼雷郷の銀狼　☆３　風　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００

雷帝ザボルグ　☆５　光　雷族　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に、ザボルグとウォルフが帰還する。

「そしてバトルフェイズ中に特殊召喚したモンスターには、まだ攻撃宣言が残ってる！！」

「なにっ！？ということは……」

伯爵の言葉に『そういう事さ！！』と力強く返す遊夜。

「行けえぇっウォルフ！“蒼雷（そうらい）咆哮牙（ほうこうが）”！！」

「ワオオオオオォォォォォォォォォォォォォォォォォォンッ！！」

ウォルフの牙が、咆哮と共に伯爵を噛み砕く。

死霊伯爵：ＬＰ／１１００⇒０

「ぐわあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！？バ、バカなっ！？こ、この我がっ、人間風情にぃっ！！？」

その言葉と共に、伯爵は自分自身のカードと共に闇となり消えて行く。

「貴様の敗因は、我が主を生け贄にしようとした事と、
我ら『蒼雷郷』の民を敵にした事だ！」

その言葉に、伯爵は目を丸くする。

「『蒼雷郷』の……民……、貴様ら……まさか……」

そこまで言い、伯爵は闇となって消えて行った。
同時に、希を縛り上げていた鎖も消えて行き、1枚のカード
永続罠『闇の呪縛』となり、消滅していった。

「希！」

呪縛が解け、膝をガクンと落とした希を遊夜は即座に抱きかかえる。
それを見た他の面々も側に駆け寄る。

「希！」
「霧谷！」
「希！しっかりしなさい！！」

皆の呼びかけに希は『みんな』と呟く。
そこへ、精霊のレスキューキャットが近寄る。

「ニャー」
「キャット……」

レスキューキャットの接近に、希はその頭をナデナデしようとするがキャットの姿が急にボヤけ、手で触れる事が出来なくなる。
いやキャットだけではない。ウォルフやハネクリボーもそうだった。

「なっ!?相棒!!」
「これは、一体。」

皆が動揺する中『うろたえるな主よ』と呼びかけるウォルフ。

「闇の精霊が消滅したことで、“闇の陣”も消滅する。故に我らも実体化する事が出来なくなった。只それだけの事よ。」

ウォルフの言葉に『そうなのか…』とやや残念そうに呟く遊夜。

「案ずるな主よ。別に消える訳ではない、今まで通りに戻るだけだ。」

ウォルフの言葉に、ハネクリボーとレスキューキャットの2人（?）も頷き、
精霊達はカードの中へと戻って行った。

「……さてと、」

精霊達がカードに戻ったのを見送った遊夜は、希を背負って立ち上がる。

「にゃっ!?ゆ、遊夜?」

遊夜の突然の行動に驚きを隠せない希。と、約2名。

「ちょ、ちょっと遊夜！あんた何やってんのよ！！」
「そうよっ！この私を差し置いてっ！！」

ご存知、文乃と千世である。その2人に対し『やきもちか？』と呟いた家康が
その後フルボッコにされたのは全くの蛇足とし、遊夜は口を開く。

「希、俺達は仲間だ。」
「にゃ？」

遊夜の言葉にキョトンとなる希。

「仲間ってのは、痛みや喜びを分かち合うモノなんだと思う。家族もそうだ。」

そう言い遊夜は『だから』と言葉を続ける。

「お前が立てない程弱ってるなら、それを背負う事で助け、
その痛みや苦しみを少しでも和らげ、分かち合うの1つの友情だと
俺は思うんだ。」

遊夜の言葉に目を丸くする希。
「だからさ、今後も何かあったら俺等を頼ってくれ。」
そこまで言い、遊夜は一旦言葉をきり、再び口を開いた――――――

「俺達は仲間だ。お前が何と言おうと。」

「！！」

遊夜の言葉に、希は涙が溢れるのを堪えようとはしなかった。
なぜなら、泣いても許してくれる仲間がいるから。
弱音を吐いても助けてくれる仲間がいるから。
だからもう、１人で泣く必要はないのだから。

「にゃあ……」

そう呟き、希は遊夜の服にしがみ付き泣き続けた。
その姿を、遊夜達は黙って見守り続けた。

――――――希が泣き止み、太陽が昇りそうになるその時まで。

『～第六章～　廃寮、闇の決闘・後編　遊夜ＶＳ闇の精霊　《終》』

～第六章～　廃寮、闇の決闘・後編　遊夜ＶＳ闇の精霊（後書き）

どうも、黒鋼です。
今回のお話は、希イベントという事でやってみましたが、如何だったでしょうか？
今回の話で悩んだのは、黒幕を何の精霊にするかです。
邪悪な精霊なら闇系や悪魔系がいいよな～と考え、当初はタッグフォース２でタイタンと組んだ『サイコ・ショッカー』にしようかと思いましたが、
それではイマイチ面白くないので、色々考えました。
そんなある日、何となく昔の遊戯王の動画をネットで見ていた時、バクラが骨塚と決闘する話を見て、そこで出てきた『死霊伯爵』を見て

「これって、他の五等爵はないのかなぁ」

と思い、気が付いた時には設定が出来ていました。
ちなみに、『死霊公爵・デスク』はアニメオリジナルでバクラが『死霊伯爵』と『首無し騎士』を融合させた『死霊公爵』を使ってたので、こいつにだけ五等爵の後に名前を付けました。
名前の由来は、公爵の意味を持つ『デューク（ｄｕｋｅ）』と死を意味する『デス（ｄｅａｔｈ）』を掛け合わせたモノです。

今後も、様々なオリジナルカードを考えると同時にオリジナルカードを募集しますので、よろしくお願いしま～す。

今回の最強カード『蒼雷郷の銀狼』
☆３　風　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１００　チューナー
モンスター
このカードをシンクロ素材とした
雷族シンクロモンスターの攻撃力は５００Ｐアップする。
また、このカードをシンクロ素材とした
『蒼雷郷』と名の付くシンクロモンスターの攻撃力は１０００Ｐアップする。
このカードをシンクロ素材とする場合、
雷族モンスターのシンクロ召喚にしか使用できない。

ご存知、遊夜の大切な相棒。
意外と制約があったりするが、遊夜にとって
常に自分を助けてくれる相棒として頼りにしている。
モデルは『テイルズオブヴェスペリア』の“ラピード”

～第七章～　翔のロイドデッキ！封印されたカード！！

「どういう事か説明してください。」

廃寮での闇の決闘から翌日。遊夜は、校長室を訪れていた。
その理由は、今朝方の出来事だ。
今日の早朝、十代・翔・大吾郎の３人は廃寮に入った事を咎められ退学をかけた制裁決闘をする事になったのである。
だがこの事を聞いた遊夜には、どうしても納得できない事があった。
それは、あの廃寮には自分を含めた他の面々も来ていたにも拘らずなぜ自分達には一切のお咎めが無く、
３人だけが制裁決闘をするのかが納得できないのである。
そこで遊夜は、校長に直接聞き出すことにしたのだ。

「うむ、君の言いたいことは分かった。
だが、あの廃寮に入ったという証拠があるのが、あの３人だけなのだよ。
それに彼らが決闘する事は査問委員会で決まったことなんだ。残念だが……」

校長鮫島の言葉に『そんな…』とどうにもならない現実に顔をしかめたのだった。

「僕なんかじゃダメだぁぁぁぁぁっ！絶対負けて退学だぁぁぁぁぁっ！！」

オシリス・レッド寮の部屋に、翔の叫び声が木霊する。

ここは、オシリス・レッド寮の十代・翔・隼人の3人が住まう部屋。
ここに、十代・翔・隼人の3人に加え　遊夜と家康と大吾郎がやって来ていた。

「ゴメン、校長先生に掛け合ってみたけど査問委員会で決まちゃったみたいで……」

遊夜の言葉に『そんなぁ』と涙目になる翔。そんな翔の肩を『ポン』と叩く十代。

「心配すんな。勝ちゃいいんだろ勝ちゃ。」

そう言い『ニカッ』と微笑む十代だが、翔は全然元気だ出ない。

「無理だよおぉぉっ！
僕なんかじゃタッグ決闘なんて無理だよおおぉぉぉぉぉっ！！！」

絶叫する翔を十代がなだめる中、遊夜は『タッグ決闘？』と首を傾げる。
それを見た大吾郎が『実はな』と説明しだす。

大吾郎によると、クロノスの提案で翔が十代か大吾郎を選び
選んだ方とタッグを組み、残った1人は普通のシングル決闘をするらしい。
なぜ翔が選ぶのかは、実は十代も大吾郎も実技だけならブルーに匹敵する実力者なのだ。そんな2人では、普通の決闘では制裁にならないので
一番弱い翔をどちらかと組ませた方が良いというクロノスの案らしい。

「なるほど……」
「なるほどじゃ無いっすよっ！！」
遊夜の言葉にさらに声を荒げる翔。その翔の反応に遊夜はしばらく考え口を開く。
「そう言えば、まだ翔がどんなデッキを使うのか知らないよな。」
遊夜の言葉に十代が便乗した。
「じゃあ翔、決闘しようぜ！
俺か大吾郎、どっちかとタッグ組まなきゃならないんなら
お前のデッキの特性知っとかなきゃならないからな！！
まずは腕試しに決闘と行こうぜっ！！」
そう言い十代はデッキを持って立ち上がり、デッキを掲げる。
その十代の姿に、翔は『はあぁぁぁっ』と大きなため息をついた。
で結局、翔は十代と決闘すべくレッド寮の裏手にある浜辺に来ていた。
それを、残りの面々は浜辺を見下ろせる高台でそれを見守っていた。
「翔、遠慮は要らないぜ！腕試しなんて思わずに楽しい決闘をやろうぜ！」
意気込む十代とは対照的に翔は『はあぁぁぁっ』と大きなため息をついた。

「あぁ、なんであんなに楽しそうなんだろう……退学ほぼ決定だっていうのに……」
「なんか言ったか？」
翔のその呟きに十代は怪訝そうな顔をするが、
翔は『な、何でもない！』と首を横に振る。
それに対し十代は『そっか』と返し、決闘盤を構える。

「よぉし、決闘っ！」
「決闘・・・トホホ」

十代ＬＰ／４０００
翔ＬＰ／４０００

「始まったな。」

遊夜がそう呟いた瞬間、後方から『おーい』という声が聞こえてきた。
その声に振り返ってみると、そこには声の主である叶絵の始めとし文乃・明日香・希の女子メンバーが揃っていた。

「遊(ゆう)っち！十代っちと翔と大吾郎が制裁決闘やる羽目になったってホント！？」

叶絵の言葉に『あ、うん』と返した遊夜が現状況を説明する中、
十代達は決闘を続けていた。

「先行は貰うぜ翔！俺のターン！！」

十代は勢い良くカードを引き、即座に自分の一手を決める。

「俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン』を攻撃表示で召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン　☆３　風　戦士族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１０００

十代の場に白い翼を生やした緑色のＨＥＲＯが現れた。

「カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「僕のターン、ドロー。」

翔は棒読み気味にカードを引くが、引いたカードを見た瞬間　顔を綻ばせた。

「（やった！『パトロイド』の攻撃力ならアニキの『フェザーマン』に勝てるぞ！！）」

そう考えた翔は、パトロイドを攻撃に成すすべなく破壊されるフェザーマンと
尻餅をつく十代の姿を思い描き、パトロイドを決闘盤に発動させる。
残りの手札とその引いたカードの効果を確認しないまま――――

「僕は『パトロイド』を攻撃表示で召喚！」

パトロイド　☆４　地　機械族　ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１２００

翔の場に、アニメで出てくるようなパトカーのモンスターが現れる。

「よし、戦闘だ！いけ『パトロイド』！“シグナル・アタック”っ！！」

パトロイドのサイレンが鳴り響き、パトロイドがフェザーマンに迫る。

「リバースカード、オープン！！『攻撃（こうげき）の無力化（むりょくか）』！！相手の攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる！！」

攻撃の無力化による次元の歪みが、パトロイドの突撃攻撃を食い止めた。

「って、何か会話してる内に決闘進んでるぜっ！！」

十代と翔の決闘に気づいた家康の声に他の面々も視線を決闘に移す。

「どうやら翔の攻撃を、十代が止めたみたいなんだなぁ。」

「しかも翔、あいつモンスター効果読まなかったみたいね。」

「う～む、こりゃあ翔っち不利か？」

「まだ分からんぞ。」

「…にゃぁ」

メンバーの殆どが決闘に視線を向ける中、遊夜と明日香はまだ話をしていた。

「妙だと思わないか？」

遊夜の言葉に『確かにそうね』と返す明日香。

「なぜ私達が廃寮に入った証拠がなく、十代達だけ証拠があったのかしら。」

そう言い顎に手を当てる明日香。
そう、遊夜は先程からそのことが気になっていたのだ。
自分を始め、ブルーの女子や家康には何の証拠もないのに
十代達に対してだけ証拠が見つかってるなんておかしい。

「誰かの陰謀かしら……」
「だとしたら、一体誰の？」

そう言い再び悩む遊夜と明日香だが、答えは出る事は無かった。

そんな遊夜達のいる場所から少しは慣れた林の中から、
黄色いおかっぱ頭がトレードマークの１人の男―クロノスが遊夜達を監視していた。

「ムハハーハ、どうやらドロップアウトボーイズが特訓を始めてるようなノーネ。
ま、無駄なあがきなノーネ！」

そう言い『ニヤニヤ』と微笑むクロノス。
実は、クロノスにはある企みがあった。
十代と大吾郎は、オシリス・レッドのカリスマ的存在。
２人が来てからというもの、２人によって自信のついたレッドの生徒達が
ブルーの生徒相手にも善勝したり、抵抗する事が多くなってきているのだ。
これは、クロノスからして見れば許し難きことなのだ。
クロノスにとって、ブルーはエリートとして何をしても許されレッドはその下で這いずり回るのが普通だったのだが、
それが今壊れようとしている事実は、彼を大いに焦らせた。
そこでクロノスは、廃寮に入った罪を利用して決闘でコテンパンにして
このデュエルアカデミアから追い出す事を思いつく。
だが、十代も大吾郎もブルー生徒に匹敵する実力者。生半可な事ではない。
そこで、翔とのタッグ決闘にすることを思いついたのだ。

「（グフフ～フ、ドロップアウト丸藤な～らほぼ確実にアニキと慕う遊城　十代をパートナーに選ぶはずなノーネ！
そうなれば後は、遊城　十代ほど強くは無い幸谷　大吾郎１人を倒せばいいノーネ！）」

そう呟きクロノスは、声を殺しながら笑い続けた。

「あーあ、せっかく一発かっこいいところを見せられると思ったのになぁ」

攻撃失敗に、すんごく落ち込む翔に十代は『なぁ』と呼びかける。

「翔、ひょっとしてお前モンスターの攻撃力しか見てないんじゃないか？」

「そんなことないよ！」

十代の言葉に反論する翔に、十代は言葉を続ける。

「『パトロイド』は相手のフィールドを確認する特殊能力がある。その効果を使っていれば、俺が『攻撃の無力化』を貼っていることを確認できたはずだぜ。」

十代の言葉に、翔は自分の不甲斐なさを十代の八つ当たりへと変えてしまう。

「やめてよ！アニキだからってお説教はなしだよ！！」

そんな翔の叫びに十代は驚いた。

「どうしたんだよ、翔。いつものお前らしくないな」

十代の言葉に、翔は自分が八つ当たりをしたことに気がつくとすまなさそうな顔をして十代に言い放つ。

「ごめんアニキ。

僕変だよな、せっかくアニキがアドバイスしてくれているのに。」

「いや、ちょっとお説教くさかったかもな。決闘者に上下なしだ、アドバイスなしでバンバン本気だしちゃうぜ！」

翔の言葉に首を振ってそう応えた十代は、
新たにカードをドローするべくデッキに手を伸ばす。

「俺のターン、ドロー！『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を攻撃表示で召喚！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン　☆４　風　戦士族　ＡＴＫ／１８００
ＤＥＦ／３００

十代の場に、プロペラのついた翼を持つ蒼いヒーローが現れる。

「『エアーマン』の召喚時、効果発動！
２つの効果から１つを選び発動する！！デッキからヒーローを手札に加えるか、
こいつ以外のヒーローの数だけ場の魔法・罠を破壊するか！
俺はデッキから『エッジマン』を手札に加える！」

十代はエッジマンのカードを翔に見せ、手札に加えた。

「いくぞ翔！『エアーマン』で『パトロイド』を攻撃！！
“エアーソニック・ストーム”！！」

エアーマンが翼のプロペラより放つ竜巻が、パトロイドを粉砕する。

翔：ＬＰ／４０００⇒３４００

「ううぅっ、あっ！」

その攻撃に、翔はうめき声を上げパトロイドを破壊されたショックで立ちすくんでしまった。

「まだまだ行くぜぇ！『フェザーマン』で直接攻撃（ダイレクト・アタック）！！“フェザー・ブレイク”！！」

そこにさらに、十代の命でフェザーマンの攻撃が翔に襲い掛かる。

翔：ＬＰ／３４００⇒２４００

「うわぁぁぁぁっ！うがぁぁぁぁぁぁっ！！」

その攻撃に、翔はオーバーリアクションとも取れる叫び声と共に後ろに吹っ飛ばされた。

「俺は場に1枚カードを伏せて、ターンエンド！」

十代は本気になったのか、真剣な目つきで粛々と自分のターンの終了を宣言した。

それに対し翔は、ヘナヘナと立ち上がる。

「トホホ、いきなし本気を出すなんて酷いよアニキ。」

その翔の姿に、もはや決闘者としての姿勢は見出せなかった。

そんな翔の姿に、面々は心配そうに翔を見た。

「うむ、早くも戦意喪失か…」

「…にゃぁ」

「へたれな奴だなぁ、おい。」
「家康、あんた人の事言えないでしょ？」
「あはははは、言えてるね…」
「翔っ！！」

メンバーがそれぞれ様々な事を言う中、不意に隼人の声が響く。

「きばれぇぇぇ！
そんなんで落ち込んでたら1年留年の俺よりかっこわるいぞぉ！！
きばれぇ！きばれぇぇっ翔！！」

普段物静かな隼人の大声に驚く面々。だが、その隼人の思いは翔に届いた。

「隼人君……いつも大声なんてあげないあの人が、
あんな一所懸命に僕のことを応援してくれているんだ――――――」

その思いを受け取った翔の目に、熱い闘志が燃え上がる。

「その期待に応えなきゃ！！僕のターン！！」

その思いに答えるべく、翔はカードを引く。

翔の立ち上がる姿を見た叶絵は、『クスッ』と笑いながら隼人を見た。

「隼人の声援でやる気を取り戻したみたいだＮＥ（ネ）！」

叶絵の言葉に『えっ』驚きの声を上げると照れながら隼人はポツポツと語り始めた。

「俺、自分がダメだから、ダメになっちゃう人間の気持ちがわかるような気がするんだなぁ。」

「そんな事無いよ。」

隼人の言葉に、不意に後ろから声が聞こえる。
先程から会話をしていた遊夜と明日香だった。

「自分の弱さを知って、それを受け入れることは何よりも難しいことだ。
それができて、なお人を気にかけれる。
隼人、お前はダメな人なんかじゃないよ。」

「遊夜…」

遊夜の言葉に隼人頬を赤めて照れる。そこに、他の面々も会話に加わる。

「ちょっと2人共、何の話してたの?」

「にゃぁ、気になる。」

そう言い2人に問い掛ける面々に、遊夜と明日香は自分達の会話の内容を説明する。

そんな中、先ほどまでとは違う力強い声で新たにカードを引いた翔は、
今度はちゃんと手札の確認を怠らず戦略を練っていた。

「（手札のモンスターじゃアニキに勝てない。なら！）手札から『強欲な壺』発動！！
その効果で、デッキからカードを2枚ドローする！！」

翔は再び力強くカードを引く。
そして引いたカードを見た瞬間、その表情から闘志溢れる表情は消え代わりに驚きへと変わる。
翔が引いたカード、それは――――

「（『パワー・ボンド』！！）」

翔が引いたカード名はパワー・ボンド。それは、機械族モンスターにのみに使え
このカードを使って融合召喚した機械族モンスターの攻撃力を2倍にする効果を持つこの状況を打開できる切り札的カードだ。
だが、翔はそのカードを使おうとはしなかった。

「（どうしたんだ翔の奴。よっぽどすげぇカードでも引いたのか？）」

戸惑う翔に対し、十代は首を傾げる。

「（このカードを使えれば、今の状況を大きく覆すことが出来る……でもこのカードは、お兄さんからまだ使ってはいけないと封印されているカード……！！）」

翔は、あの日の事を思い出した。

あれはまだ翔が幼かった頃だ、自分をいつもいじめてくるゴリ助に

決闘なら負けないと勝負を仕掛けた日の事だ。
負けた方は『裸で校庭を逆立ちして1週』という課題つきで。
ゴリ助の場には『鉄の騎士―ギア・フリード』と伏せカードが1枚。
翔の場には『ジャイロイド』と『スチームロイド』の2体。
LPは翔の方がやや低く、不利な状況だ。
そんな状況で引き当てたのが、兄から貰った『パワー・ボンド』だった。
そのカードを見た翔は勝利を妄信し相手を蔑み、
相手の張った罠『六芒星の呪縛』を見通す事が出来なかった。
兄の丸藤　亮の介入で事なきを得たが、もしも『パワー・ボンド』を使っていれば
使用したターンのエンドフェイズに特殊召喚したモンスターの
元々の攻撃力分ダメージを受ける効果で敗北していただろう。
それ以降、兄の亮にこのカードの使用を禁じられた。
翔にはなぜこのカードを封印されたのかが未だわからない。
しかし、あの優秀で自分が逆立ちしたって敵わないあの兄が言うのだ。
何か理由がある。
そう思って翔はその理由も考えずに兄の言葉をただただ自分に言い聞かせてきた。

それは、今回も……

「（僕にはこのカードを使う資格がない……
まだこのカードは封印されたままなんだ……！）」

翔は、『パワーボンド』ではなく先程から手札にあったカードに手を伸ばす。

「手札から魔法カード『融合』を発動！
手札の『ジャイロイド』と『スチームロイド』の2体を融合！！」

アニメで出てくるような飛行系のモンスターと機関車のモンスターが翔の場で融合されていく。

「見ててよアニキ、今度は僕のフェイバリットカードでお返しだ！
来いっ！『スチームジャイロイド』！！」

スチームジャイロイド　☆6　地　機械族　ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／１６００

翔の場に、巨大なプロペラを持つ機関車のモンスターが現れた。

「さらに手札から魔法カード『死者への手向け』を発動！
手札1枚をコストに、モンスター1体を破壊する！！
僕が破壊するのは『エアーマン』！！」

翔の場に、不気味なミイラが現れたかと思うとそのミイラは自身の包帯を
エアーマンに絡み付かせ、そのまま押し潰してしまった。

「行くよっ！『スチームジャイロイド』で『フェザーマン』を攻撃！！
いけぇ！“ハリケーン・スモーク”！！」

翔の命と共に、スチームジャイロイドは煙突から大量の煙を出し
プロペラで竜巻を起こしながらフェザーマンに突進、フェザーマン

を粉砕した。

十代ＬＰ／４０００⇒２８００

「ぐあぁぁぁっ！」

その攻撃に、十代は方膝をついた。

「どうだ、アニキ！少しは参ったか！！」

十代にダメージを与えた事で、やや天狗になった翔の言葉に対し十代は微かにだが笑っていた。

「ふっふふふふ……あっはははははは！やっぱ決闘はこうでなくっちゃ！

翔、ちょこっと面白くなってきたぜっ！！」

参る所かエンジンに火がついたかのような十代に、

『うっ』と逆にタジタジになってしまう翔。

「よっしゃー！こっからが本番だぜっ！！

俺は場から罠カード、『ヒーロー・シグナル』を発動！！

俺の場のモンスターが戦闘で破壊された事で、

デッキから新たにヒーローを呼ぶぜっ！！

来いっ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン　☆４　光　戦士族　ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１４００

十代の場に、体に電撃を走らせるヒーローが現れた。

「…確かに変ね。」

遊夜と明日香の言葉を聞いた文乃の言葉に、『確かに』と他の面々も頷く。

「確かに、俺達だけが罰を受けるとはどういう事だ。」
「つーかよ、お前らが廃寮に入ったつう証拠って何なんだ?」

家康の言葉に、『そういえば』と返す遊夜。
実際の所、そんな証拠あるはずが無い。
あの夜、“闇の陣”が発生していた廃寮に入れた者は精霊の加護を受けた遊夜達だけなのだ。
そんな状況で、どうやって十代達だけの証拠が手に入ると言うのだろうか。
そこがどうしても遊夜達が分からないことだった。

「…にゃぁ、千世が今検索してる……」
「あ、それで先からいなかったんだ、梅ノ森さん。」

希の言葉に成る程と納得する遊夜。
そう、先程から妙に静かなのは千世がいないからだ。
どうやら、3人の退学の件を何とかする為に色々と調べてるらしい。

「にしても……」

不意に叶絵は、決闘している十代と翔に視線を向ける。
「退学になるかもしれないってのに、翔はともかく十代っちは余裕だねぇ～。」

「行くぜ俺のターン！！」
十代は引いたカードを見た瞬間、『よし』と頷く。
「手札から魔法カード『融合』を発動！
場の『スパークマン』、そして手札の『エッジマン』！！
お前達のパワーが新たなパワーを呼び出すぜっ！！」
重大の言葉と共に、スパークマンとエッジマンの2体が融合されていく。
「来いっ！『E・HERO プラズマヴァイスマン』」

E・HERO プラズマヴァイスマン ☆8 光 戦士族 ATK／2600 DEF／2300

十代の場に、電撃を帯びた強大なヒーローが現れた。

「こ、攻撃力…2600……」
「『プラズマヴァイスマン』の効果発動！手札1枚をコストに、相手の場の攻撃表示モンスター1体を破壊する！“サンダー・ブラスト”！！」

十代の命と共に、プラズマヴァイスマンの体から放たれた電撃が上空へと昇り、
そのまま落雷となってスチームジャイロイドを直撃。そのまま爆発した。

「あぁぁぁっ！僕のフェイバリットカードがっ！！」

自分のフェイバリットカード消滅に涙目になる翔。
そして同時に、翔は自分の敗北を察知する。

「バトルだっ！『プラズマヴァイスマン』で、プレイヤーへ直接攻撃（ダイレクト・アタック）！！
唸れ！“アームボルト・プラズマ”ああぁぁぁっ！！」

十代の言葉と共に、
プラズマヴァイスマンの強靭な両腕から放たれた電撃が翔の体を貫く。

翔：ＬＰ／２４００⇒０

「う、うわあああぁぁぁぁぁぁっ！！」

その攻撃に、翔は後ろへ派手にぶっ飛んでいった。

「おっ、終わったみたいだぞ。」

家康の言葉に、他のメンバーも視線を十代達に向ける。

「おー、やっぱ勝ったのは十代っちか。」
「まぁ、当然の結果ね。」
「…にゃぁ」
「だけどこれで、わかった事があるね。」

その遊夜の言葉に『どういう事なんだなぁ』と返す隼人。

「翔のデッキは“ビークロイド”の機械族デッキ。
それも融合を主体としてる所を見ると、十代と組むのが1番かもね。」
「うむ、確かにな。」

遊夜の言葉に同意する大吾郎だが、その隣にいる家康の表情は良くなかった。

「でもよ、やっぱ翔じゃあ十代や大吾郎のパートナーやるには荷が重過ぎるんじゃね?」

家康の意見は的確だった。いかにデッキ内容的には良くとも、やはり実力に差があるとタッグ決闘の際には不利である。
その現実は、変えようの無い事実だった。

「家康、あんたねぇ…」

この家康の言葉に、真っ先に対抗しようとするのが文乃だった。

「んだよ、事実だろ?」
「それでも言っていい時と悪い時ってもんがあるでしょうがっ!」
「まぁまぁ文乃さん、落ち着いて。」

家康に対して講義する文乃を、遊夜は何とか抑えるのであった。

「…おまえ、これって……」

あれから十代は、決闘の最中に翔がドローの時に見せた表情が気になり
翔の手札のカードの1枚を見て、キョトンとしていた。

「どうして『パワー・ボンド』を使わなかったんだ？
もし使っていれば攻撃力は2倍、『スチームジャイロイド』は攻撃力４４００の
強力モンスターになっていたじゃないかっ！」

そう言い翔に問い掛ける十代だったが、
翔はそのカードを引っ手繰るようにして取り戻す。

「やっちゃだめなんだ！お兄さんから封印されているカードなんだっ！！
やっぱり僕じゃ、アニキや大吾郎君とタッグを組むなんて無理なんだよおぉっ！！」

その言葉を残して、翔は十代に背を向けるとどこかへと走り去ってしまった。

「お、おい、翔っ！？」

その翔の行動に、十代は唖然とするだけだった。

その後、その場に残された十代は翔の言っていた言葉の意味が解からず
佇んでいると、先程まで決闘を観戦していたメンバーが下りて来た。

「いつもは楽しそうに決闘している貴方が、今日はどうしたの？
なんだか冴えない顔よ。」

明日香の言葉に、十代は振り向き口を開く。

「だってさ決闘て楽しいもんのはずだろ。
だけどあいつの決闘、なんだか辛そうなんだよな。」

十代の言葉に『辛そう？』と首を傾げる面々。

「それに『パワー・ボンド』なんてキラーカード持ってるのに、
お兄さんに封印されているとか言って使おうとしないしさ。」
「『パワー・ボンド』？あの機械族専用の融合魔法で、
機械族デッキを持つ者の中では知らぬ者はいないという激レアカードの？」

遊夜の言葉に『あぁ』と返す十代。

「てかアイツ、そんなカードどうやって手に入れたんだ？」
「しかも、そんなカードを持っていながら使わないとは……」

家康と大吾郎の言葉に、他の面々も『う～ん』と考え出す。
否、全員ではなかった。
約1名、明日香だけは何かを思い出したような表情をしていた。

「どうした明日香？」

それに気づいた十代が明日香に語り掛ける。

「…翔君にはね、本当のお兄さんがいるの。しかもこの学園にね。」

明日香の言葉に驚く面々。と同時に、『そういえば…』と遊夜が顎に手を当てる。

「何よ、あんたもなんか知ってんの？」

「にゃあ。」

遊夜の表情に即座に反応する文乃と希。

「あ、うん。実はブルー寮に入った時、３年生でも滅多に行かない部屋があるって聞いたんだ。そこに住んでいる生徒の名前が、確か“丸藤”って…」

「…」

「おい、じゃあ……」

遊夜の言葉に、十代は視線を明日香に向ける。

「…えぇ、彼がその…」

「先の子のお兄さん、“丸藤（まるふじ）　亮（りょう）”よ。」

「「「

明日香と叶絵が真っ先に声を上げた。

「「珠緒先輩(たまおせんぱい)っ！」」

明日香に珠緒と呼ばれた女子生徒は、ゆっくりと遊夜達に接近する。

「明日香さん、叶絵さん、知り合いですか？」

遊夜の言葉に『えぇ』と返した明日香に続き、叶絵が口を開く。

「3年生の“藤野(ふじの)　珠緒(たまお)”先輩。
女子下級生の憧れ、まさにこの学園の高嶺の花。」
「よろしくね。君達の事は、叶絵からよく聞いてるよ。
特に、十代くんと遊夜くんは有名人だしね。」

そう言い笑顔を向けてくる珠緒。

「あ、どうも。それで、翔のお兄さんって？」

遊夜の言葉に、珠緒は視線を学園の方に向けながら答える。

「3年のオベリスクブルーに在籍している人で、異名は『帝王(カイザー)』。
学園トップの称号を冠する決闘者よ。」
「帝王(カイザー)……」

そう言い息を呑む遊夜達。
とその時、不意に強い風と共に大きな機械音が響く。

「な、なにっ！？」
「にゃあっ！」

メンバーは音のする方、上を向く。
そこには、1機のヘリコプターが自分達の頭上に制止していた。

「こ、このヘリって……ひょっとして……」
「ひょっとしなくとも、こんなの持ってこれるのアイツだけよっ！」

文乃の言葉と共に、ヘリの扉が開きそこから金髪のロングヘアーを揺らす
ロリッ子少女こと千世が現れた。

「誰がロリッ子だこらあっ！？」
「いや、誰もそんな事言ってないよ……」

千世の言葉にささやかにツッコミを入れる遊夜。

「んな事よりっ！色々調べてみたわよっ！
あんた達が廃寮に入ったていう証拠って奴！」

その梅ノ森の言葉に、メンバーは目を見開いた。

千世は、ヘリを下ろして出てくると佐藤と鈴木に説明させた。

「実はあの夜、十代様、翔様、大吾郎様方が廃寮へ行くのを見たと証言する者がいたようなのです。」
「それを聞いたクロノス教諭が、ほぼ独断で決定させたらしいのです。」
「なに？」

佐藤と鈴木の言葉に首を捻る遊夜。

「それって変だぞ。十代達は確かに廃寮へ行ったが、その時は俺や隼人に家康もいたはずだ。どうして十代達だけが問われるんだ。」

遊夜の疑問は最もだった。

あの夜、遊夜と家康はこっそりブルーとイエローの寮から抜け出しそこからレッド寮で十代達と合流したのだ。

つまり、十代達がレッド寮を出る時にはすでに遊夜達がいたのだ。

それでは、目撃者がいたのならなぜ遊夜と家康と隼人は問われなかったのか。

そんな疑問が残るのだ。

「おかしい点はもう1つあるわよ。」

「え？」

考え込む遊夜に、千世がさらに重要な事を教える。

「証言者がいたって話しだけど、そんな奴いないわ。」

「「「

「「はっ！」」

千世の言葉に、佐藤と鈴木が何処からとも無く大量の機械を取り出した。

「この梅ノ森財閥の情報力を持ってすれば、あらゆる情報が手に入ります。」

「ですが、十代様達の件を報告したと言う人物の情報など何処にも無いのです。」

「それって……」

佐藤と鈴木の言葉に、遊夜は意味を察知する。

「そうよ。この私の情報網を持ってしても見つからないなんて事、まずありえないわ。

つまりこれは、十代達を報告した奴なんて端からいなかったて事よ！」

千世が出した結論に、驚くメンバー。

「だとすると、なぜ俺達が罰を受ける事になったのだ？」

大吾郎の言葉に、『そこはまだ分からないわ』と返す千世。

「まぁ、何にしてもあんた達の退学なんて、この私の力で……ん？」

ここで千世は気づいた、退学を賭けた決闘に出る者が1人いないことに。

「ねぇ、あのチビメガネはどこ？あんた達とよく一緒にいるでしょ。」

「それって、翔の事か？」

千世の言葉に首を傾げる十代。

「…にゃあ、翔は走ってた。」

「はぁ？」

「いや、実はね……」

状況が把握できない千世に、遊夜はこれまでの事を語る。

「…なるほどね、その帝王（カイザー）ってのが気になるけど
そっちはあんた達に任せるわ。」

そう言い千世は、佐藤と鈴木に機械を片付けさせる。

「私はもう少し調べてみるわ！
言っとくけど、これは貸しにするからいつか返しなさいよっ！」

そう言い千世は、２人のメイドと共に去って行った。

「……で、俺達はどうしようか。」

そう言い全員を見る遊夜。そこで真っ先に手を上げたのは、大吾郎だった。

「ここは2手に分かれないか？
一方は翔を探しに、もう一方は翔の兄上の事を調べに。」

大吾郎の意見に全員が頷き、それぞれ

遊夜・十代・明日香・珠緒がカイザーを調べに、
家康・大吾郎・文乃・希・叶絵が翔　捜索隊となった。

さて、そんな遊夜達のいる場所から少しは慣れた林の中で
クロノスは大いに焦っていた。

「（ま、マズいノーネ！このままでは梅ノ森財閥の力で
私の嘘の密告がバレてしまうノーネ！！）」

そう、確かにクロノスはあらかじめ十代達が廃寮に行くのを知っていた。
あの夜、遊夜達が廃寮を去った後やって来たクロノスは
誰もいないことからタイタンが失敗したことを悟った。
ならばと十代達を廃寮に入った罪を理由に追い出そうとしたのだが、
ここでクロノスは重大なミスがあった。
それは、十代が同室の隼人や遊夜達を誘っていた事だ。
レッド寮で十代達の声を聞いたクロノスは、
てっきり彼等のみが行くものだと思っていたのだ。
その思い込みが、結果的にミスに繋がったのだ。

「（マズい、非常にマズいノーネッ！！）かくなるうえはっ！！」

そう言いクロノスは、遊夜達に見つからないように
デュエルアカデミアの方へとコソコソと帰って行った。

『～第七章～　翔のロイドデッキ！封印されたカード！！　《終》』

～第七章～　翔のロイドデッキ！封印されたカード！！（後書き）

どうも、黒鋼です。
今回は『第7話　翔の乗り物　（ビークロイド）　デッキ』をお送りいたしました。
原作では十代が出したのは『サンダー・ジャイアント』でしたが、アニメでは不遇、作者が好みという理由で『プラズマヴァイスマン』にしました。

さてさて、ここで読者の皆様に再びちょっとしたお願い。
今回の話に出てきた“藤野　珠緒”先輩。実は彼女のデッキもアイディアが出てこないのです。そこで、読者の皆様から再び感想を通じて彼女のデッキアイディアを大募集します！！
オリジナルでもいいので、バシバシ送ってくださいね！！お待ちしてま～す。

今回の最強カード『Ｅ・ＨＥＲＯ　プラズマヴァイスマン』
☆８　光　戦士族　ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２３００　融合モンスター
「Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン」＋「Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン」
このモンスターは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が越えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。
手札を１枚捨てる事で相手フィールド上の攻撃表示モンスター１体を破壊する。

今回の決闘のフィニッシュを飾ったモンスター。

アニメでは初登場で効果が判明する前に破壊されてしまうという不運のヒーローだった。
個人的には外見も効果も好きです。

～第八章～　トライアングル決闘！ＶＳ　帝王　亮！！（前書き）

前回までのあらすじ
廃寮に入った事を咎められ、
制裁決闘を受ける事となった十代・翔・大吾郎の３人。
だが、翔は兄より封印されているカードが使えず
そのことで思い悩んでしまう。
そこに、千世が驚くべき情報を持ってきた。

～第八章～　トライアングル決闘！ＶＳ　帝王　亮！！

「くぬぬぬぬうぅぅ～っ！何なのよもうっ！！」

デュエルアカデミア学園の正門前に、千世の声が木霊する。
その理由は、先の校長室での出来事だ。
千世は梅ノ森財閥の情報網で手に入れた情報で校長を動かし、
十代達の退学の件を撤回させようとしたのだ。
だが、いくら校長でも査問委員会で決まった事を
今更なしにする事は出来ないらしく、
鮫島校長は首を立てに振ろうとはしなかった。
ならばと千世は、偽の告発をしたクロノスを懲らしめようとしたのだが
少し前にクロノスは制裁決闘の相手を呼ぶ為に、しばらく学園を休むと
校長に届けを出してすでにこの学園にはいないらしい。
２つの自分の考えを尽く却下され、千世の怒りはヒートアップしていた。

「落ち着いてください千世様。」
「怒っては折角のかわいらしい千世様のお顔が台無しですよ。」

千世御付の２人のメイド、佐藤と鈴木が何とかなだめようとするが
千世の怒りは一向に収まらない。

「くぬぬうっ！こうなったら我が梅ノ森財閥の底力見せてやるわっ！！
佐藤・鈴木！クロノスの動向を探るのは後よっ！！
それよりも、どうやったら校長が首を立てに振るのか調べなさいっ

！！」
「「はっ！！」」

千世の言葉と共に、佐藤と鈴木は千世を抱きかかえ走り去っていった。

一方、灯台の麓で沈み行く夕日を見ていた1人男がいた。
彼の名は“丸藤（まるふじ）亮（りょう）”。
学園最強の『帝王（カイザー）』の異名を持つ男であり、翔の兄である。

「……来たか……」

そう言い亮は自分に近づいてくる足音に気づき、後ろを振り向く。
そこには、よくこの灯台で話をする明日香と珠緒の2人と
それに加え遊夜と十代の2人もいた。
それを見た亮はほんの少し目を丸くしたが、すぐに表情を元に戻す。

「珍しい客人だな。“遊城　十代”、そして“白鋼　遊夜”。」
「始めまして、カイザー亮。」
「よろしく！」

亮に対して、遊夜は礼儀正しく十代は気軽に挨拶をする。

「それで、何故ここに？」
「実はね…」

亮の疑問に対し、明日香と珠緒がそれぞれ説明する。

「……そうか。」

それを聞いた亮は、視線を再び沈み行く夕日に向ける。

「（翔、お前はまだ理解していないのだな……俺があのカードの使用を封印した、その理由を…。）」

「カイザー亮。」

視線を夕日に向け、物思いにふける亮に遊夜が口を開く。

「あなたが何故、翔にカードの使用を禁じたのかは知らないし、あなたが話したくないなら話さなくてもいい。」

その言葉に目を細める亮だが、遊夜はさらに『けど』と言葉を続ける。

「俺はあなたの真意を知りたい！
そして決闘者が相手の真意をしる最も良い方法、すなわち決闘（これ）だっ！！」

そう言い決闘盤を掲げる遊夜。

「カイザー亮！俺と決闘してくださいっ！！」

遊夜の申し出に対し、亮は少し目をつぶった後やや微笑みながら言い返す。

「いいだろ…」

「ちょっと待ったあぁぁーっ！！」

亮の言葉をさえぎる様に、十代の声が木霊する。

「ズルいぜ遊夜っ！俺だってカイザーと決闘してみてえよっ！！」
「ゴメン十代、無理。」
「即答かよっ！？」

あっけなく即答された十代はズッコケる。

「悪いな十代。カイザーと決闘したいのは俺だって同じだ。これは譲れないっ！」
「ズルいすぎだぜ遊夜！俺がやる！！」
「いや、俺だっ！！」
「俺だっ！！」

遊夜も十代も互いに譲ろうとはせず、とうとう口ゲンカまで始めてしまった。
その状況に、明日香は『はぁ』とため息をつき、珠緒は『あらら』と汗を流し
亮は『ふむ』と何やら考え、口を開く。

「2人共俺と決闘したいのだな？」
「「当然！！」」

2人の見事にシンクロした言葉に、亮は少し微笑み言い返す。

「ならば、2人共相手しよう。“三角形決闘（トライアングルデュエル）”で！」
「トライアングル……」
「決闘……」

亮の言葉に目を丸くする面々。

三角形決闘、それは決闘者3人で行なう特殊な決闘法であり自分以外は皆敵であり味方にもなりうる変則決闘である。
亮の提案に目を丸くしていた面々だったが、遊夜と十代はすぐに笑顔に戻る。

「「その案、乗ったっ！！」」

2人の再び見事にシンクロした言葉に、亮は少し微笑み言い返す。

「ならば、早速ここで……」
「いや、ちょっと待ってカイザー。」

決闘盤を構えようとする亮に、遊夜は待ったをかける。

「失礼、この決闘は時間と場所を考えているからそこでしたい。」

遊夜の真剣な眼差しを見た亮は、決闘盤を下ろす。

「いいだろう。」

亮の言葉に、遊夜は『ニコッ』と微笑む。

「詳しい場所と時間は、後ほどメールします。では。」

そう言い十代と共に去ろうとする遊夜。

「お、おい、遊夜！？」

不意に腕を引っ張る遊夜に十代が驚く中、遊夜は十代の耳元でささやく。

「この決闘は、翔に見せないと意味が無い。」
「！！」
遊夜の言葉に、十代は遊夜の考えを察する。
カイザーであり翔の兄である亮との決闘、これを翔に見せる事で何かを感じて欲しいのだ。
「その為にも、早く翔を探しに行こう。」
遊夜の言葉に、『コクリ』と頷いた十代は遊夜と並んで走り出していった。
「……面白い2人だな、“遊城　十代”“白鋼　遊夜”。」
走り去って行った遊夜と十代の背を見ながら、そんな事を呟く亮。
「……そうね、あの2人って決闘バカに見えて意外な所もあるから。」
「ふふ、頼もしい後輩達ね。」
そう言い3人は、遊夜達の行った方へ視線を向け続けた。
「「何だってえぇっ！？」」
レッド寮へと戻って来た遊夜と十代の耳に届いた事は、衝撃の出来事だった。

大吾郎達が言うには、翔はひょっとしたら寮に戻ってるのではと考え1度十代達の部屋に戻ってみたらしい。だが、そこに翔の姿は無く代わりに1通の手紙があった。
その手紙には

『――一筆啓上。翔は島を出ます。
止めてくれるなアニキ、さよならだけが人生だ！――』

と書いてあったらしい。

「でも、翔の奴どうやって島から出るんだ？」

十代がそんな疑問を掲げる。
そうなのだ、このデュエル・アカデミア学園は太平洋に浮かぶ島にあるのだ。
ここから出るには、月に1度の定期船に乗るしかないのだ。

「ここから出る方法が他にあるとすれば、筏を組むぐらいしか……」

「ちょ、ちょっと！！」

遊夜の言葉に驚きの声を上げる文乃。

「ここは太平洋のど真中よっ！？ここから筏で出たとしたら……」

文乃の言葉に、面々が現状況の危機を察する。
そう、太平洋を筏で渡るなど自殺行為に等しい。
もしも翔がそんな事を考えているなら、早く見つけなければならない。

「くっそ！早く翔を探そうぜ！！」
「しかし、一体どうやって。この島は意外と広いぞ。」
大吾郎の冷静な言葉に、十代は『くっ』と歯軋りを立てる。
「何か手は……」
何か手を考えようとする遊夜だが、何も思いつかない。
「くそ！一体どうすればっ！！」
「《慌てるな、主よ。》」
「！！」
悩む遊夜にささやく様な声が聞こえる。声のした方を遊夜がむくと
そこには声の主であるウォルフとハネクリボー、
それにレスキュー・キャットがいた。
「狼（ウォルフ）！」
「相棒！」
「にゃあ、キャット……」
それぞれの精霊の存在に声を揃える遊夜・十代・希の3人。
「《主よ、翔とか言う若造のカード達の反応がする。そこに居るやも知れん。》」
「《クリクリ～》」
「《ニャー》」
精霊達の言葉に、遊夜達精霊が見える面々は
即座に精霊達の導く方へ行こうとするが

精霊が見れない上に声も聞こえない他の面々は、
何がそうなっているのか分からず　おろおろするばかりであった。

「ちょ、ちょっとあんた達！？」
「え～と、遊っち達　何やってんの…？」
「お前等、誰と話してんだ？」
「むぅ…？」

他の面々がおろおろする中、隼人だけは慌てずおずおずと遊夜達に尋ねる。

「…ひょっとして、そこに居るのか？精霊が。」

隼人の言葉に、遊夜・十代・希の3人は目を丸くした。

「隼人、お前ハネクリボー達が見えるのか！？」
「あ、いやそう言う訳じゃないんだなぁ……」

そう言い隼人は一旦言葉を区切り、再び口を開く。

「姿は見えないけど、声は聞こえたような気がしたんだなぁ。」

そう言い隼人は視線を遊夜の左隣、ウォルフのいる方へ向ける。

「遊夜の狼が、翔の居場所が分かるって……」
「！！」

その言葉に遊夜は視線を自分の相方に向ける。
その視線に対し、ウォルフは『うむ』と唸る。

「≪こやつには精霊を見る素質があるようだな。もう少し我らと交流して行けば、
いずれ見えるようになるだろう。≫」

その言葉は隼人にも聞こえたらしく、『そっか』と嬉しそうに微笑んだ。
が、その外野では精霊の姿も声も聞こえない面々がいい加減イライラしていた。

「あんた達～、あたし達にも分かりやすく説明しなさいよっ！！」

文乃の言葉に、『あ、ゴメン』と返した遊夜はウォルフの言った事を説明する。
その言葉に目を丸くした面々と共に、遊夜達は精霊達が示す方へと走って行った。

「…これでいいんだ……。」

灯台から離れた海岸に、丸太で作った筏を海へ押し出す翔の姿があった。

「僕が居なくなれば、アニキと大吾郎くんがタッグを組めるはず……
そうすれば2人の無敵コンビで退学は免れるよね……僕さえ居なくなれば……」

そう呟き海へと出ようとする翔。とその時――――

「いたっ！！」
「おい翔っ！！」

不意に後ろから声が聞こえ、その声に振り向く翔。
そこには、声の主である十代と遊夜。それにレッドの仲間である隼人に大吾郎、
イエローでオタク仲間である家康。それにブルー女子の文乃に叶絵、
希の姿があった。

「っ！！」

その姿に翔は、一気に筏を海に向けて押し出して乗ろうとする。

「おい翔っ！？」

それをみた十代は走るスピードそのままに、翔の筏に跳び乗った…
…が。

「おぉっとっと！？」
「うわぁぁぁぁぁっ！？」

着地のショックで丸太を縛っていた縄が解けたのか、
筏は分解され十代と翔はそのまま海に落ちた。

「た、助けてぇぇっ！僕泳げないぃぃっ！！！」

そう叫んだ翔は、溺れたくない一心で近くにあったものにしがみついた。
が、しがみついたのは十代にだった。

「こら、しがみつくな！沈むぅっ！！」

しがみつかまれた十代は浮くことが出来ずに翔もろとも海に沈んでいく。

「十代っ！！翔っ！！」
「むっ！いかん！！」

それを見ていた遊夜と大吾郎が真っ先に助ける為に飛び込もうとするが、
その2人の手を、家康が掴んで止める。

「家康っ！？」
「むっ！？菊池　止めるなっ！！」

家康に『止めてくれるな』と視線を向ける2人だが、
家康は冷静に『大丈夫なんだよ』と言い聞かせ、十代達に対し声を上げる。

「おーい、お前等。そこ浅瀬のはずだぞ。」
「「へ？」」

家康の言葉にキョトンとなる面々。
溺れていた2人は冷静になってみると、確かに足が立った。

「なんだそりゃ。」

そう言い拍子抜けになる十代だったが、
その隙にどこかへ行こうとする翔を見逃さなかった。

「翔っ！！」

翔の腕をがっしりと掴み逃がさせない十代に、翔は暗い表情で告げる。

「…このまま行かせてくれよアニキ。
僕のことはいいから大吾郎くんとタッグを組んで、退学を免れてくれよぉ…」

「バカ野郎っ!!」

弱気な翔の発言に十代の檄が飛ぶ。

「つべこべ言うんじゃねぇ!
俺と大吾郎はお前がタッグパートナーになることに何にも不満はないんだっ!!」

「うむ、その通りだぞ丸藤。」

大吾郎も優しく言い放つが、翔は俯いたままの顔を上げれなかった。

「でも今の僕じゃ勝てっこないよぉ……。」

そんな翔の姿に十代は握った拳を震わせていると、遊夜が声を上げる。

「翔、だったらせめて出て行く前に見せたいものがあるんだ。」

「え…?」

遊夜の思いもよらない言葉に、目を丸くする翔。

「ちょ、ちょっと遊夜っ!?」

「まぁ待ちなって芹沢。」

遊夜の言葉の意味を理解できない文乃が遊夜と翔の間に割って入ろうとするが、
遊夜の考えを読んだ家康が止めに入る。

「（ナイス家康。）」
「（おうっ！）」

家康と目で会話した遊夜は、視線を翔に戻し話し続ける。

「これはな、お前に見せるから意味があるんだ。
ここを出て行くなら、それを見てからにしてくれ。」

そう言い遊夜は、視線を十代に向ける。
その視線に、十代は『はっ』と思いつく。

「（そういう事か！）」

十代の笑顔に、『コクリ』と頷く遊夜。

「な？翔。」

遊夜の笑顔に呑まれた翔は、その申し出を了解し陸に上がってきたのであった。

その夜、遊夜達は灯台が良く見える丘の上に来ていた。

「こんな所で誰と決闘するのよ？」

待てども待てども一向に決闘の相手が来ない事に、文乃がイライラしだす。

「なぁ遊夜。ちゃんとメールしたのか？」

十代までもがそんな事を言い始める。

「ちゃんとしたから、そろそろ来るはずだよ……」

そう言い遊夜は、視線を亮が来るであろう方へと向ける。
とその時、微かだがその方向から人の影が見えた。

「おっ来たか！！」

その人影に目を輝かす十代。
やがて月の光でその人影の姿が徐々に見え始める。人影は３つだった。
１人は金髪のロングヘアーのブルー女子生徒―明日香。
１人は紫色のロングヘアーのブルー女子生徒―珠緒。
そして最後の１人は、濃い青髪のブルー生徒―帝王（カイザー）亮だった。
その姿に、遊夜と十代を除く面々は目を丸くする。

「明日香！！それに珠緒先輩も……」
「どうして２人が？」
「にゃあ…」
「お兄さん！？」
「お兄！？じゃ、あれが？」
「あれがカイザー亮、丸藤の兄上か……」
「カイザー亮、久々に見たんだなぁ。」

それぞれが様々な反応を示す中、亮は遊夜と十代に接近する。

「待たせたな、“遊城　十代”“白鋼　遊夜”。」
「遊夜でいいよ、カイザー。」
「俺も十代でいいさ。」

遊夜と十代の言葉に、『そうか』と返す亮。

「お前達との約束の決闘、受けて立とう。」

そう言い亮は決闘盤を構える。

「もちろん！全力で行かせてもらう！！」
「行くぜカイザー！楽しい決闘をしようぜっ！！」

そう言い遊夜と十代も、それぞれ決闘盤を構える。

今、『雷人（ライジン）』と『英雄（ヒーロー）』が不敗の『帝王（カイザー）』に挑む！

「「「決闘っ！！」」」

遊夜：ＬＰ／４０００
十代：ＬＰ／４０００
亮：ＬＰ／４０００

３人が対峙する中、周りの面々はその状況に唖然となっていた。

「な、何で遊夜達がカイザーと決闘してんのよ……」

「う～む。明日香、珠緒先輩、何かご存知で？」

叶絵の言葉に顔を見合わせた明日香と珠緒は、やや苦笑いしながら答える。

「色々あって……としか言いようが無いわね。」

「そうねぇ、あえて言うなら多分　翔くんの為じゃないかな？」

そう言い珠緒は視線を翔へと向ける。

その視線に、翔は『え？』と首をかしげた。

「俺の先行、ドロー！」

十代は引いたカードを含めた手札を一瞥し、即座に手札の１枚に手を伸ばす。

「俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を攻撃表示で召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン　☆４　風　戦士族　ＡＴＫ／１８００
ＤＥＦ／３００

十代の場に、プロペラのついた翼を持つ蒼いヒーローが現れる。

「『エアーマン』の効果発動！このカードの召喚時、デッキから『ＨＥＲＯ』１体を
手札に加える！！俺は『ザ・ヒート』を手札に加える！！」

十代はザ・ヒートをデッキから手札へと加える。

「さらに1枚カードを伏せ、ターンエンド！」

十代のエンド宣言を見た遊夜は、自分のデッキに手を伸ばす。

「次は俺だ！ドロー！」

引いたカードを確認した遊夜は、即座に自分が取る行動を選択する。

「俺は『蒼雷郷(そうらいきょう)の狛犬(こまいぬ)』を守備表示で召喚！！」

蒼雷郷(そうらいきょう)の狛犬(こまいぬ)　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／２０００

遊夜の場に、蒼白く光る狛犬が現れた。

「さらにカードを1枚伏せ、ターンエンド！！」

遊夜のエンド宣言を聞いた亮は、ゆっくりと自分のデッキに手を伸ばす。

「俺のターン、ドロー。」

亮は手札に加えたカードと手札を確認し、自分が取るべき戦術を冷静に判断する。

「『サイバー・ラーバァ』を守備表示で召喚。」

サイバー・ラーバァ　☆１　光　機械族　ＡＴＫ／４００　ＤＥＦ／６００

亮の場に、白銀に輝くボディの機械の蛇が現れる。

「さらにカードを１枚伏せる。ターンエンドだ。」

「あれ？もうターンエンド？」

以外な展開に首を傾げる翔。その隣にいる隼人が口を開く。

「トライアングル決闘って、最初のターンは全員攻撃できないんだなぁ。
初ターンは大体こんな感じなんだなぁ。」

その隼人の言葉に、翔は視線を決闘に戻す。

「俺のターン！」

十代は勢いよくカードを引き、引いたカードを見て『よしっ』と頷く。

「行くぜ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ザ・ヒート』を攻撃表示で召喚！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ザ・ヒート　☆４　炎　炎族　ＡＴＫ／１６００
ＤＥＦ／１２００

十代の場に、炎のように赤いボディをしたヒーローが現れる。
「『ザ・ヒート』は、場の『Ｅ・ＨＥＲＯ』１体につき攻撃力を２００Ｐアップさせるっ！！
俺の場には『エアーマン』と『ザ・ヒート』自身の計２体！！
よって攻撃力４００Ｐアップ！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ザ・ヒート　ＡＴＫ／１６００⇒２０００

「バトルだっ！！『エアーマン』で『サイバー・ラーバァ』を攻撃！！
“エアーソニック・ストーム”！！」

エアーマンが翼のプロペラより放つ竜巻が、ラーバァを粉砕する。
だが、亮の表情は一切変わらない。

「『サイバー・ラーバァ』が攻撃対象になった事により、
このターン俺が受ける戦闘ダメージは０となる。」
「なにっ！？」
「そして戦闘で破壊された事により、
デッキから『サイバー・ラーバァ』１体を特殊召喚できる。」

サイバー・ラーバァ　☆１　光　機械族　ＡＴＫ／４００　ＤＥＦ

／６００

亮の場に、２体目のサイバー・ラーバァが現れる。

「戦闘ダメージを受けなくても、戦闘破壊は出来るはずだっ！！行けぇっ！『ザ・ヒート』で２体目の『サイバー・ラーバァ』を攻撃！！」

ザ・ヒートの灼熱の鉄拳が、ラーバァを粉砕する。

「『サイバー・ラーバァ』効果発動。来い『サイバー・ラーバァ』！」

サイバー・ラーバァ　☆１　光　機械族　ＡＴＫ／４００　ＤＥＦ／６００

亮の場に、３体目のサイバー・ラーバァが現れる。

「ちっ。やるなぁカイザー！俺はターンエンドだっ！！」

「俺のターン！ドロー！！」

十代のエンド宣言と同時に、遊夜は勢いよくカードを引く。

「俺はチューナーモンスター『蒼雷郷（そうらいきょう）の蝮（マムシ）』を召喚！！」

蒼雷郷（そうらいきょう）の蝮（マムシ）　☆３　光　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／０

遊夜の場に、蒼白く光る蛇が現れる。

「噂のチューナーか……」

チューナーモンスターの出現に目を細める亮。

「行くぞっ！☆4（レベル）『蒼雷郷の狛犬』に☆3『蒼雷郷の蝮』をチューニング！」

蝮が緑色のリングとなり、狛犬もその身を4つの星に変える。

そして一直線に4つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天を斬り裂く剣となる。閃光と共に轟け！！シンクロ召喚！！

蒼雷の戦士、『蒼雷郷（そうらいきょう）の荒武者（あらむしゃ）―ジンベエ』！！」

光が弾けその中から、蒼い甲冑に身を包み刀を二本持つ武者が姿を現す。

蒼雷郷（そうらいきょう）の荒武者（あらむしゃ）―ジンベエ　☆7　光　雷　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２２００

「来たぜっ！遊夜のシンクロ召喚！！」

「うむっ！」

遊夜のシンクロ召喚に、周りの面々は声を上げる。

「『蒼雷郷の蝮』の効果により、デッキからカードを1枚ドローする！

さらに『ジンベエ』がシンクロ召喚に成功した時、

相手の場のモンスターを1体破壊できる！！“迅雷（じんらい）の太刀（たち）”！！」

ジンベエの刀より放たれた蒼い稲妻が、ラーバァを粉砕する。

「デッキにはもう『サイバー・ラーバァ』は存在しない。

そして攻撃対象にもなってないから、戦闘ダメージを0には出来ない。」

遊夜はそう言い放つが、次の瞬間その考えは裏切られる事となる。

「罠発動、『メカニック・コール』。

場の機械族モンスターが戦闘またはカード効果で破壊された時、

デッキから破壊されたモンスターと同じ属性の

☆4以下の機械族モンスター1体を特殊召喚する。

俺が呼ぶのは『サイバー・ヴァリー』！」

サイバー・ヴァリー　☆1　光　機械族　ＡＴＫ／0　ＤＥＦ／0

亮の場に、ラーバァよりも体が長い機械の蛇が現れた。

「攻撃力、守備力共に0……しかも攻撃表示で？」

遊夜は、攻守共に0のモンスターを攻撃表示で召喚したことに疑問

を浮かべるも
今は攻撃するしかないと判断する。

「（今は攻撃するしかないっ！）『蒼雷郷の荒武者―ジンベエ』で『サイバー・ヴァリー』を攻撃！！“蒼雷刃剣（そうらいじんけん）・一（いち）の太刀（たち）”！！」

遊夜の命と共に、ジンベエの太刀がヴァリーに迫る。
だが、その太刀がヴァリーに届くことは無かった。

「なっ！？」

なぜなら、肝心のヴァリーが忽然と消えたのだから。

「『サイバー・ヴァリー』には3つの効果がある。俺はその1つを発動させた。
このカードが攻撃対象となった時、このカードをゲームから除外しカードを1枚ドローする。その後バトルフェイズを終了させる。」

亮がデッキからカードを引くと同時に、
攻撃をしていたジンベエが攻撃を中断した。

「くっ、そう来たか。俺はターンエンドだ！」

「おぉーとっ！十代っちも遊っちも中々カイザーに攻撃を通せないっ！！」

亮と遊夜と十代の決闘を見ていた面々の内、ムードメーカーである叶絵が

解説者のように言い放つ。

「あの2人が2人掛かりで攻撃してダメージが未だに0だなんて……」

「にゃあ、あの人強い。」

亮の実力に、普段本音を言うことが少ない文乃や普段無口な希ですら声を出さずにはいられなかった。

「だが、あいつの場は完全にガラ空きだぜ？遊夜達の有利だぜ。」

そう言い放つ家康だが、その隣にいる大吾郎の表情は硬かった。

「いや、決闘はどうなるか分からんぞ。」

そう言い大吾郎は、視線を決闘へと向ける。

「俺のターン。」

亮は静かにカードを引き、自分の次の一手を即断する。

「このカードは、相手の場にモンスターが存在し俺の場にモンスターがいない場合、手札から特殊召喚できる。来い！『サイバー・ドラゴン』！」

サイバー・ドラゴン　☆５　光　機械族　ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／１６００

亮の場に、白銀の装甲を誇る機械の龍が現れる。

「特殊召喚モンスターかっ！」

「すっげぇっ！！」

感心する2人に対し、亮は相変わらずの無表情で決闘を続ける。

「さらに手札から装備魔法『サイバー・ローアー』を発動！
『サイバー・ドラゴン』に装備！」

サイバー・ドラゴンに、二丁の銃器が取り付けられる。

「このカードは光属性の機械族モンスターにのみ装備できる。
装備モンスターの攻撃力を、３００Ｐアップさせる。」

サイバー・ドラゴン　ＡＴＫ／２１００⇒ＡＴＫ／２４００

「さらに、装備したモンスターが『サイバー・ドラゴン』
または『サイバー・ドラゴン』を融合素材とした融合モンスターの
場合、
デッキからカードを1枚ドローする。」

そう言い亮は、自分のデッキからカードを1枚引く。

「さらに俺は、まだこのターン通常召喚を行なっていない。
俺は『サイバー・レオン』を召喚！」

サイバー・レオン　☆４　光　機械族　ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１２００

亮の場に、白銀の装甲を誇る機械の獅子が現れる。

「『サイバー・レオン』の効果発動。
手札の機械族モンスター１体を墓地に送り、
このモンスターの攻撃力は３００Ｐアップする。
俺は『サイバー・ユニコーン』を墓地に送る。」

サイバー・レオン　ＡＴＫ／１６００⇒ＡＴＫ／１９００

「さらに墓地に送った『サイバー・ユニコーン』の効果発動。
このカードが墓地に存在する限り、
俺の場の光属性・機械族モンスターの攻撃力は３００Ｐアップする。」

サイバー・ドラゴン　ＡＴＫ／２４００⇒ＡＴＫ／２７００

サイバー・レオン　ＡＴＫ／１９００⇒ＡＴＫ／２２００

「すっげぇっ！！一気に攻撃力アップかよっ！！」
「『サイバー・ローアー』によるパワーアップと手札補充、
それに加え『サイバー・レオン』と『ユニコーン』とのコンボ、全く隙がない。」

亮のコンボに、驚きと感心を示す遊夜と十代。

「行くぞ。『サイバー・ドラゴン』で『蒼雷郷の荒武者―ジンベエ』

を攻撃！
“エヴォリューション・バースト”っ！！」

サイバー・ドラゴンの口とサイバー・ローアーから放たれた
青白いレーザーがジンベエに迫る。

「墓地の『蒼雷郷の狛犬』の効果発動！！このカードを除外する事で、
このターン俺の場の雷族モンスターは戦闘では破壊されないっ！！」

ジンベエの前に、薄っすらと光る狛犬がサイバー・ドラゴンの攻撃を防ぐが、
その余波までは防げなかった。

遊夜：ＬＰ／４０００⇒３７００

「ぐっ！！」

遊夜のモンスターを破壊できないと判断した亮は、視線を十代へと向ける。

「続けて、『サイバー・レオン』で『エアーマン』を攻撃！」

亮の命と共に、サイバー・レオンの牙がエアーマンを粉砕する。

十代：ＬＰ／４０００⇒３６００

「ぐわぁっ！！」

ダメージの余波に、十代は何とか耐える。

「そして場のヒーローの数の減少により、『ザ・ヒート』の攻撃力が下がる。」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ザ・ヒート　ＡＴＫ／２０００⇒１８００

「へ、へへ、さすがはカイザーだな……けど俺だって負けないぜっ！！

リバースカード、オープン！『ヒーロー・シグナル』！！

俺の場のモンスターが戦闘で破壊された時

デッキから☆４以下の『Ｅ・ＨＥＲＯ』を１体特殊召喚できる！！

来い！！『Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン　☆４　地　戦士族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／２０００

十代の場に木と岩で出来たＨＥＲＯが現れる。

「俺はカードを２枚伏せる。

そして手札から魔法カード『時空転送装置（じくうてんそうそうち）』を発動。」

亮の場に、奇妙な形の機械が現れ時空の歪を作り出す。

「自分の場に機械族モンスターが存在する時、デッキからカードを１枚選択し除外。

自分の２回目のスタンバイフェイズに手札に加える。」

亮はデッキから選んだカードを、時空の歪へと投げ込む。

と同時に、時空の歪と機械は消滅した。

「ターンエンドだ。」

「ついに、2人共ダメージを受けてしまったわね。」

決闘を見ていた明日香がそう呟く。

「やっぱり、いくら2人でもお兄さんに勝てるはずないよぉ……」

決闘を見ていた翔は、そんな弱気に呟く。
その隣で、興味深そうに決闘を見ていた珠緒が口を開く。

「でも翔くん、その2人は全く諦めてるようには見えないよ?」

珠緒の言葉に、翔は視線を遊夜と十代に向ける。
そこには、尚も笑顔で決闘を続ける2人の姿があった。

「なんで……なんでなの…?相手はカイザーとまで言われたお兄さんなんだよ?
勝てる筈ないのに、なんであんなに楽しそうなの?アニキ、遊夜くん……」

「俺のターン!ドロー!!」

翔が疑問を浮かべる中、十代はカードを引く。

「自分のスタンバイフェイズに、『フォレストマン』の効果発動！デッキから『融合』を手札に加える！！」

十代は、デッキから融合を選び亮に見せた後　手札に加えた。

「さらに俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』を攻撃表示で召喚！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン　☆４　光　戦士族　ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１４００

十代の場に、体に電撃を走らせるヒーローが現れた。

「雷のヒーローか……」

「そして手札から『融合』を発動！

手札の『フェザーマン』と『クレイマン』を融合！！

現れろ渦巻くヒーロー！！『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ（グレイト）　ＴＯＲＮＡＤＯ（トルネード）』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ（グレイト）　ＴＯＲＮＡＤＯ（トルネード）　☆８　風　戦士族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２２００

十代の場に、マントを羽織り風を身に纏ったヒーローが現れた。

「雷に続き、風のヒーローか…」

「『Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』の効果発動！
このカードの召喚時、相手の場の全てのモンスター攻守を半分にする！！
唸れ！“タウン・バースト”！！」

トルネードの放った暴風が、亮の機械族モンスター達の力を失わせて行く。

サイバー・ドラゴン　ＡＴＫ／２７００⇒ＡＴＫ／１３５０　ＤＥＦ／１６００⇒ＤＥＦ／８００

サイバー・レオン　ＡＴＫ／２２００⇒ＡＴＫ／１１００　ＤＥＦ／１２００⇒　ＤＥＦ／６００

「！！」
「すごいぜ十代！！」

トルネードの効果に、遊夜は目を輝かし亮は無表情ながらも驚いてるようだった。

「行くぜっ！『Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』で『サイバー・ドラゴン』を攻撃！！
渦巻けっ！！“スーパーセル”！！」

トルネードの放った竜巻が、サイバー・ドラゴンに迫る。

「罠発動（トラップはつどう）！『聖なるバリアー ミラーフォース ー』！！
相手の攻撃表示モンスターを全て破壊する！！」
「んなぁっ！？」

亮の発動した罠に、目を丸くする十代。

「おいおいマズすぎだろっ！？」

亮が発動したカードに、周りの面々も驚いていた。
「にゃあ、『聖なるバリアー ミラーフォース ー』。相手の攻撃宣言時に発動。
相手の場の攻撃表示モンスターを全て破壊する。」
「そう、相手全てのね……」

希の言葉に続く明日香。
そう、相手全ての攻撃表示モンスターを破壊するのだ。
亮にとっての相手とは十代と遊夜。すなわち……

「『ミラーフォース』の効果により、お前達の場の攻撃表示モンスターを破壊する！！」
「「！！」」

亮の言葉と共に、見えない壁が現れトルネードの攻撃を反射。
トルネード、ザ・ヒート、スパークマン、そしてジンベエにその反射が舞い落ちり粉砕する。

「くっそ！『フォレストマン』１体になっちまった！」

十代は悔しそうに視線を手札に移す。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！わりぃ遊夜。」

申し訳なさそうに視線を遊夜に向ける十代。
だが、当の遊夜は特に気にしていなかった。

「ドンマイ、気にするなよ。」

そう言い遊夜は、視線を亮へと向ける。

「（さすが、『帝王（カイザー）』の名を持つ決闘者。燃えてきた！）
俺のターン！ドロー！」

亮に更なる期待をしながら、遊夜はカードを引く。

「俺は手札から『蒼雷郷の剣客（そうらいきょうのけんかく）』を召喚！！」

蒼雷郷の剣客（そうらいきょうのけんかく）　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に蒼い和服に身を包んだ剣士が現れる。

「さらにリバースカード、オープン！『ダブル・タイプ・レスキュー』！！
自分の墓地から、モンスター1体を復活させる事が出来る！！
だけどその為には、自分の場に2種類の種族が存在し相手の場のモンスターの数が
自分の場のモンスターの数より多くなければならない！！」

そこまで言い、遊夜は自分の場の『蒼雷郷の剣客』に視線を向ける。

「だが、『蒼雷郷』のモンスターは皆　雷族に加え他の種族としても扱える！
そして『蒼雷郷の剣客』は雷族であり戦士族としても扱える！！」
「！！」

遊夜の言葉に、驚愕する亮。

「よって『ダブル・タイプ・レスキュー』の効果発動！
蘇れ！『ジンベエ』！！」

蒼雷郷の荒武者―ジンベエ　☆７　光　雷　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２２００

遊夜の場に、蒼い甲冑に身を包み刀を二本持つ武者が再び姿を現す。

「バトル！『蒼雷郷の荒武者―ジンベエ』で
『サイバー・ドラゴン』を攻撃！！“蒼雷刃剣・一の太刀”！！」

遊夜の命と共に、ジンベエの太刀がサイバー・ドラゴンに迫る。

「罠発動！『和睦の使者』！
このターン、俺の場のモンスターは戦闘では破壊されずダメージも０となる！」

亮の場に、見えない壁らしきものが現れジンベエの攻撃をさえぎる。

「あっちゃ、また防がれたか。カードを2枚伏せ、ターンエンド！
（俺が今伏せた2枚は『次元幽閉』と『召雷札』。
万が一に備えて2枚伏せておいた、とりあえず大丈夫だ！）」

遊夜は自分の有利に自信を持った。

「俺のターン、ドロー。」

亮は引いたカードを見て、やや目を細める。

「魔法カード『天界よりの宝札』発動！互いの手札が3枚以下の時、
互いのプレイヤーは手札が5枚になるようドローする！
俺の手札は0よって5枚ドロー！」
「俺は3枚だから2枚！」
「俺もだ！」

亮、十代、遊夜達はそれぞれカードを引く。

「さらに、魔法カード『天使の施し』を発動。
デッキからカードを3枚引き、その後手札から2枚捨てる。」

亮は、デッキから3枚のカードを引き、7枚の手札から2枚捨てた。

「俺は『サイバー・レオン』を生け贄に『サイバー・グリフォン』
を召喚！」

サイバー・グリフォン　☆6　光　機械族　ＡＴＫ／2300　Ｄ
ＥＦ／1200

亮の場に、白銀の装甲を誇る機械の鳥獣が現れる。

「『サイバー・グリフォン』の効果発動！
このカードが光属性の機械族モンスターを生け贄に召喚に成功した時、
フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する！」

「なっ！？」

「げっ！？」

サイバー・グリフォンの羽ばたきと共に放たれる閃光が、遊夜と十代の魔法・罠カードを粉砕する。

「くそっ！『ドレイン・シールド』が……」

「くっ！計算ミスだっ！」

悔しがる十代と遊夜。だが、亮のターンはまだ続く。

「さらに手札から、魔法カード『融合』を発動！
場の手札の『サイバー・ドラゴン』を融合！」
２体のサイバー・ドラゴンは絡み合い、青いプラズマを放ちながら新たな姿を現す。

「来い！『サイバー・ツイン・ドラゴン』！！」

サイバー・ツイン・ドラゴン　☆８　光　機械族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２１００

亮の場に、白銀の装甲を誇る双頭の機械の龍が現れる。

「攻撃力、２８００……」
「すっげぇ……」

サイバー・ツイン・ドラゴンの姿に、遊夜と十代は感動に近い表情をする。

「さらに墓地に眠る『サイバー・ユニコーン』の効果により攻撃力が３００Ｐアップ！」

サイバー・ツイン・ドラゴン　ＡＴＫ／２８００⇒ＡＴＫ／３１００
サイバー・グリフォン　ＡＴＫ／２３００⇒ＡＴＫ／２６００

「バトル！『サイバー・ツイン・ドラゴン』の攻撃！
“エヴォリューション・ツイン・バースト”！！」

亮の命と共に、サイバー・ツイン・ドラゴンの双頭の口から放たれたレーザーが
蒼雷郷の剣客にせまる。

「『蒼雷郷の剣客』が戦闘を行う時、攻撃力が２００Ｐアップ！」

蒼雷郷の剣客　ＡＴＫ／１８００⇒ＡＴＫ／２０００

蒼雷郷の剣客は、日本刀を構え応戦するがレーザーの前に散った。
と同時に、もう一方のレーザーがジンベエを粉砕した。

遊夜：ＬＰ／３７００⇒１９００

「ぐあっ！？な、なんで2体同時にっ！？」

「『サイバー・ツイン・ドラゴン』は、1度のバトルフェイズで2回攻撃が出来る。」

遊夜の驚きに対し、亮は淡々と答える。

「続けて、『サイバー・グリフォン』で『フォレストマン』を攻撃！」

サイバー・グリフォンの体当たりにより、フォレストマンが粉砕される。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」

「……何なのよ、この強さ……」

「にゃあ……」

亮の圧倒的強さに、文乃と希は唖然としていた。

今まで、どんな状況にも戦ってきた遊夜と十代が押されているのだ。

それは、他の面々も同じだった。

「つーかこれ、もはや反則レベルだろ……」

「いやー、強すぎだZE（ぜ）！」

周りの面々が唖然とする中、ただ1人こうなる事を予想していた翔は視線を下に向けていた。

「（これがお兄さんの決闘。……勝つためにどこまでも計算されつくした、
誰も寄せ付けない。アニキや遊夜くんでさえも！）」
そう思う翔だったが、当の十代と遊夜は全くそんな事思っていなかった。

「へへ、楽しいぜカイザー！俺、今すっげーワクワクしてるぜっ！！」
「俺もだよカイザー！こんなに心踊る楽しい決闘をできるなんて！！」
そう言い楽しむ十代と遊夜に対し、亮の表情が微かだが動く。

「ああ、俺もだ」
それは、遊夜達が始めて見る亮の微笑みだった。

「（お兄さんが、笑った……！？）」
その表情に翔が驚く中、十代が自分のデッキに手を伸ばす。

「まだまだ楽しもうぜっ！俺のターン、ドロー！！」
十代は引いたカードを見て、『ニヤッ』と微笑む。

「魔法カード『融合回収（フュージョン・リカバリー）』！
墓地の『融合』と融合に使ったモンスターを1体回収する！

俺は『融合』と『フェザーマン』を手札に加える！」

十代は墓地に眠る融合とフェザーマンを亮に見せ、手札に加える。

「そして『融合』発動！手札の『フェザーマン』と『バーストレディ』を融合！

現れろ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン　☆６　風　戦士族　ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／１２００

十代の場に、右手に竜の頭を付け白い翼を生やしたＨＥＲＯが現れた。

「まだまだ行くぜっ！手札から『ミラクル・フュージョン』発動！！

俺の場か墓地から融合モンスターによって決められたモンスターを除外し、

『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のつく融合モンスターを融合召喚する！！

俺は場の『フレイム・ウィングマン』と墓地の『スパークマン』を融合！！

現れろ！！『Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン』！！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン

☆８　光　戦士族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２１００

十代の場に白いボディをし、黄緑色に輝くヒーローが現れる。

「『シャイニング・フレア・ウィングマン』……十代のエース的モンスター…」

「来た！十代のエース！！」

フレア・ウィングマンの登場に、亮も遊夜も目を細くする。

「『シャイニング・フレア・ウィングマン』は、
墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯ』の数だけ攻撃力がアップする！
俺の墓地にヒーローは7体！よって２１００Ｐアップ！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン　ＡＴＫ／２５００⇒ＡＴＫ／４６００

「攻撃力４６００……」

「行くぜカイザー！『シャイニング・フレア・ウィングマン』で『サイバー・ツイン・ドラゴン』を攻撃！！“シャイニング・シュート”ーッ！！」

シャイニング・フレア・ウィングマンが輝きだし
両手から放たれる黄緑色の閃光がサイバー・ツイン・ドラゴンに迫る。

「リバースカード、オープン！『攻撃の無力化』！！
相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させるっ！！」

サイバー・ツイン・ドラゴンの前に現れた次元の歪が、
シャイニング・フレア・ウィングマンの攻撃を吸収していった。

「ちぇっ、またかわされたか。俺はカードを1枚伏せ、
『E・HERO　レディ・オブ・ファイア』を守備表示で召喚！」

E・HERO　レディ・オブ・ファイア　☆4　炎　炎族　ATK
／1300　DEF／1000

十代の場に、炎のように赤い女性タイプのヒーローが現れる。
「俺のエンドフェイズ、『レディ・オブ・ファイア』の効果発動！
俺の場のヒーロー1体につき、200Pのダメージを与える！
俺の場には『レディ・オブ・ファイア』と『フレア・ウィングマン』
の2体！
400Pのダメージだ！」

十代の言葉と共に、レディ・オブ・ファイアが放った4つの火の玉
が亮を直撃する。

亮：LP／4000⇒3600

「へへ、カイザー。ようやくあんたにダメージを与えれたぜ。ター
ンエンド！」

「何で……何でそこまで楽しめるの…アニキ…遊夜くん……」

決闘を見ていた翔は、分からなかった。
どんなにあがいても、勝てるはずのないカイザーと呼ばれる男に

なぜあそこまで頑張り、楽しめるのかが。

「そりゃあの2人が決闘バカだからだろ。」

疑問に思う翔に、答えを出したのは家康だった。

「遊夜の奴はな、俺らと会った時からあんなんだよ。相手が誰だろーが、ともかく決闘を楽しむ奴、超がつく決闘バカだ。」

「そして十代も、そんな奴なのよね。」

家康の言葉に続き、明日香がそう呟く。

そんな2人の言葉に、翔は視線を決闘に戻してみる。

そこには、ただ笑ってこの決闘を楽しんでる者達しかいなかった。

十代も遊夜も、そして亮も。

「（笑ってる……あのお兄さんが笑ってる……？）」

「俺のターン！ドロー！」

カードを引いた遊夜は、そのカードを見て即座に自分の一手を決断する。

「俺はチューナーモンスター『蒼雷郷（そうらいきょう）の啄木鳥（キツツキ）』を召喚！！」

蒼雷郷（そうらいきょう）の啄木鳥（キツツキ）　☆３　風　雷族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に、蒼白く光るキツツキが現れる。

「『蒼雷郷の啄木鳥』の効果発動！
召喚時、墓地の『蒼雷郷』と名の付く☆４以下のモンスター１体を守備表示で特殊召喚できる！来い！『蒼雷郷の剣客』！！」

蒼雷郷の剣客　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に蒼い和服に身を包んだ剣士が再び現れる。

「さらに手札から装備魔法『シンクロ・ヒーロー』を『蒼雷郷の剣客』に装備！
装備モンスターの攻撃力を５００Ｐ上げ、レベルを１つ上げる！」

蒼雷郷の剣客　☆４⇒５　ＡＴＫ／１８００⇒ＡＴＫ／２３００

「攻撃力とレベルを上げるカードか……。」
「そう、そして準備は整った！行くぜっ！
☆５となった『蒼雷郷の剣客』に☆３の『蒼雷郷の啄木鳥』をチューニング！！」

キツツキが緑色のリングとなり、剣客もその身を５つの星に変える。
そして一直線に５つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天へと昇る翼となる。落雷と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の守護龍、『蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン』！！」

蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン　☆８　光　雷族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２５００

光が弾けその中から、所々を蒼い甲冑で堅め蒼い翼を生やした蒼白く輝く東洋の龍が姿を現す。

「『スカイサンダー・ドラゴン』……」
「来たぜ！遊夜のエースモンスター！！」

スカイサンダー・ドラゴンの出現に、息を呑む面々。

「『スカイサンダー・ドラゴン』の効果発動！
召喚時、相手の場のモンスターを全て破壊できる！“蒼覇落雷撃”！！」

スカイサンダー・ドラゴン身体から放たれた蒼い稲妻が天へと昇り天より注がれる蒼い落雷となりサイバー・ツイン・ドラゴンとサイバー・グリフォンを直撃し爆発を起こす。

「やったぜ遊夜！」
「『サイバー・ツイン・ドラゴン』、『サイバー・グリフォン』、粉砕……っ！？」

亮のモンスターを破壊した事を疑わなかった遊夜だったが、

よく見ると、爆煙のなかに強大な影が見える。

「…まさか……」

そして、遊夜のそのまさかは的中した。

煙が晴れた時、そこにはサイバー・ツイン・ドラゴンが健在だったのだ。

「なっ！！？」

「どういう事だ！？（カイザーの場に伏せカードはない、無効にされたとは考えにくい！）」

様々な思いが交差する中、亮は自分の墓地から白銀の装甲を誇る巨人が

描かれた1枚のカードを手に取る。

「墓地に眠る『サイバー・ゴーレム』の効果。このカードを除外する事で

このターン俺の場の機械族モンスター1体は破壊されない。

よって、『サイバー・グリフォン』は消滅したが

『サイバー・ツイン・ドラゴン』は健在！」

「んなカードいつの間にっ！？」

「…っ！！『天使の施し』、あの時しか無い。」

遊夜は、亮が天使の施しで手札入れ替えをした事を思い出す。

「……ふふ。」

「？なにがおかしい遊夜。」

不意に笑い出す遊夜に、亮は尋ねる。

「こんな楽しい決闘、十代の時以来だ！これが笑わずに居られるもんか！
次のターン、あなたがどんな展開をするのか、楽しみでしょうがないよ！！」
「へへ、俺もだぜ。俺もあんたとの決闘すっげーわくわくするぜカイザー！！」

そんな2人の率直な言葉に、亮は笑顔で返した。

「そうだろう。君達は君達の持てる力を存分に出し切っている。
そんな君達に対して俺も全力を出すことが出来た。君達の決闘に敬意を表する。」

「（お兄さんが、2人の決闘を認めている！？）はっ！」

亮の言葉と笑顔を見た翔は、ようやく長年分からなかった事に気が付く。

「（そうか！お兄さんの決闘は相手のことを考え、
全ての可能性に対応した戦術をとる決闘。だけど、僕はあの時――
相手を馬鹿にして、カードを過信して、アレは相手を全く無視した決闘……
だからお兄さんは、あのカードを封印したんだ。）」

翔は、自分が今まで相手の事を見ない1人善がりな決闘をしていた事に、
今ようやく気づいたのだ。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」
「行くぞ、俺のターン！ドロー！」

遊夜のエンド宣言と共に、亮はデッキからカードを引く。

「この瞬間、『時空転送装置』の効果発動！除外していたカードを手札に加える！
さらに魔法カード『強欲な壺』発動！カードを2枚ドローする！！」

カードを2枚引いた亮は、手札状況を見て頷く。

「さらに手札から魔法カード『貪欲な壺』を発動！自分の墓地に存在する
モンスター5体デッキに戻しシャッフルし、デッキからカードを2枚ドローする！
俺は『サイバー・ラーバァ』3体と『レオン』・『グリフォン』をデッキに戻し
カードを2枚ドロー！！」

引いたカードを手札に加えた亮は、その手札状況に頷く。

「手札から速攻魔法『融合解除』発動！
『サイバー・ツイン・ドラゴン』の融合を解除！」

サイバー・ドラゴン　☆5　光　機械族　ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／１６００

サイバー・ドラゴン　☆５　光　機械族　ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／１６００

亮の場に、２体のサイバー・ドラゴンが現れる。

「そして手札から『パワー・ボンド』発動！！
場と手札、計３体の『サイバー・ドラゴン』を融合！！」

３体のサイバー・ドラゴンは絡み合い、青いプラズマを放ちながら新たな姿を現す。

「いでよっ！『サイバー・エンド・ドラゴン』！！」

サイバー・エンド・ドラゴン　☆１０　光　機械族　ＡＴＫ／４０００　ＤＥＦ／２８００

亮の場に、白銀の装甲で覆われ翼を生やし三つ首をもった巨大な機械龍が現れた。

「『パワー・ボンド』の効果により、攻撃力は２倍となる！」

サイバー・エンド・ドラゴン　ＡＴＫ／４０００⇒ＡＴＫ／８０００

「さらに！墓地の『サイバー・ユニコーン』の効果により、さらに３００Ｐアップ！」

サイバー・エンド・ドラゴン　ＡＴＫ／８０００⇒ＡＴＫ／８３００

「攻撃力……８３００……」
「すげぇ…すごすぎだぜカイザー！！」
その圧倒的攻撃力を前にしても、遊夜も十代も全く恐れず
益々楽しんでいるようだった。

「んなのありかよ……」
「これが、カイザーの本気……」
「亮ったら……」
その圧倒的攻撃力に、観戦する面々も唖然となる。

「『サイバー・エンド・ドラゴン』で
『シャイニング・フレア・ウィングマン』を攻撃！
“エターナル・エヴォリューション・バースト”おぉぉぉっ！！」
サイバー・エンド・ドラゴンの３つの口からそれぞれ放たれるレーザーが
フレア・ウィングマンに迫る。

「させるかっ！罠発動！『ヒーローバリア』！！
相手の攻撃を１度だけ無効にする！！」
フレア・ウィングマンの前に、薄い壁のようなものが現れる。
だが、亮の戦略はその上を行った。

「速攻魔法！『液体金属装甲（えきたいきんぞくそうこう）』発動！
機械族モンスターが攻撃する時、相手はダメージ計算終了まで
魔法・罠カードを発動できない！！よって『ヒーローバリア』は無
効！」

液体金属がサイバー・エンド・ドラゴンにコーティングされると同
時に
バリアが消滅し、サイバー・エンド・ドラゴンの攻撃が
フレア・ウィングマンを粉砕する。

十代：ＬＰ／３６００⇒０

「うわあぁぁっ！！」

その衝撃波に、十代は吹き飛ばされてしまう。

「十代！」

「アニキ！」
「十代！」

十代の負けに、周りの面々も騒然となる中
亮は最後の手札に手を伸ばす。

「手札から『サイバー・ワイバーン』を墓地に送り効果発動！
『サイバー・ドラゴン』または『サイバー・ドラゴン』を
融合素材としたモンスターが戦闘で相手モンスターを破壊した時、
続けてもう１度だけ攻撃することが出来る！」

「っ！！」

その言葉に、遊夜は無言ながらに驚く。

「（俺の場には、『スカイサンダー・ドラゴン』が1体。攻撃力では到底敵わない。

伏せカードは相手の攻撃モンスターを破壊する『炸裂装甲（リアクティブアーマー）』。

だが、カイザーの『液体金属装甲』の効果で

攻撃時の魔法・罠の発動を封じられる……）……ふっ」

遊夜は静かに悟った、今回は自分の負けだと。

「『サイバー・エンド・ドラゴン』で『スカイサンダー・ドラゴン』を攻撃！

“エターナル・エヴォリューション・バースト”おぉぉぉっ！！」

サイバー・エンド・ドラゴンの放つレーザーが、

スカイサンダー・ドラゴンを粉砕する。

その光景が、遊夜にはとてもゆっくりと見えた。

遊夜：ＬＰ／１９００⇒０

「……負けちゃったか。」

遊夜は残念そうに、それでいてどこか楽しそうに言い

亮に歩み寄ると右手を差し出した。

「カイザー亮、いい決闘でした。帝王（カイザー）の決闘に酔いしらしてもらいました。」

亮は、そう言う遊夜の右手を握りながら言う。

「あぁ、俺も楽しかった。君とはまたいつかしたいものだ。」

そう言い亮は、十代に視線を向ける。

「十代、君ともな。」

「おう！俺もだぜカイザー！！」

そう言い十代は親指を『ぐっ』と立てた。

とそこへ、先程まで観戦をしていた面々が寄ってくる。

「ちょっと遊夜！あんた何負けてんのよっ！」

「まぁ、カイザー強かったしね。」

「にゃあ、遊夜　大丈夫？」

「負けちまったな。」

「だが、いい決闘だったぞ2人共。」

「すっごく感動したんだなぁっ！」

「へへ、サンキュー。」

「アニキ！」

皆が様々な事を語り合う中、翔は十代の隣に立ち亮に向き合う。

「お兄さん！僕、アニキとタッグを組むよ！！」

その顔は、先程までと違った漢の顔だった。

「そうか。」

翔の言葉に、亮はほんの少し微笑み立ち去って行った。

それを見た明日香と珠緒は後を追う。

「どうだった、彼等と決闘してみて。」
「とてもいい決闘だった。翔はいい友とアニキを持ったな。」
「ふふ、良かったね。」

3人は、そんな会話をしながらそれぞれの寮へ帰って行った。

そんな亮の背を見ながら、遊夜は口を開く。

「いいお兄さんだね。」
「うん。」

遊夜の言葉に、翔は照れくさそうに微笑む。
それを見ていた十代が声を上げる。

「よっしゃ！そんじゃ明日から早速デッキ調整しようぜ翔！」
「うん！今度こそ、『パワー・ボンド』の封印をといてみせるよ！」
「うむ、その粋だ丸藤。」
「俺も手伝うよ。俺にはそれ位しか出来ないからね。」

十代に続き、皆が口々にそう言い始めていく。

今、翔がその名の如く成長する時が動き出した。

一方、オベリスクブルー女子寮の特別室でそこの住人である千世は

メイド達が集めた資料に目を通していた。

「んふふふふ～、いい感じね。」

そう言い資料を机の上においた千世は、ふと窓の外の月に視線を向ける。

「待ってなさい！あいつらを退学になんて、このあたしが絶対させないんだからっ！！にょーほほほほほほほっ！！」

千世の笑い声が、夜空に響いていった。

この時、千世は知らなかった。

今回の自分の考え出した案が、中学時代よりの因縁の相手と決闘するきっかけを作る事になる事に。そしてこれが、ある者の陰謀と言うことに。

『～第八章～　トライアングル決闘！ＶＳ　帝王（カイザー）　亮！！

《終》』

～第八章～　トライアングル決闘！ＶＳ　帝王　亮！！（後書き）

どうも、黒鋼です。
今回は『第８話　最強！サイバーエンドドラゴン』をお送りいたしました。
今回の話で一番悩んだのは、亮と誰を決闘させるかでした。
主人公の遊夜か原作主人公の十代か。
決闘する相手が１人しか居ないので、廃寮の時のような方法はとれないと考え
トライアングル決闘にしました。
そこでさらに悩んだのが、決闘の展開です。
原作のようにはいかないので、オリジナルのサイバーを多数出しました。
サイバーの殆どが幻獣系が多いので、西洋の幻獣等をモチーフしましたが、
如何だったでしょうか？
ともあれ、次回はちょっとしたオリジナル展開です。
どうぞ、よろしくお願いしま～す。

今回の最強カード『サイバー・エンド・ドラゴン』
☆１０　光　機械族　ＡＴＫ／４０００　ＤＥＦ／２８００
「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」＋「サイバー・ドラゴン」
このカードの融合召喚は上記のカードでしか行えない。
このカードが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ライフに戦闘ダメージを与える。

ご存知、亮の切り札。
なのだが、攻撃力では上だが実質は『サイバー・ツイン・ドラゴン』に劣る
不遇のモンスター。

～第九章～　因縁の対決！？文乃ＶＳ千世（前書き）

前回までのあらすじ
廃寮に入った事を咎められ、
制裁決闘を受ける事となった十代・翔・大吾郎の３人。
自信の無かった翔だが、兄である亮と十代・遊夜の決闘を通して
勇気を取り戻した。
そんな中、千世はある計画を実行しようとしていた。

～第九章～　因縁の対決！？文乃ＶＳ千世

遊夜と十代が亮と決闘を始めていた頃、オベリスク・ブルー女子寮の一室。
ここは、千世が使う特別部屋として使われている部屋である。
ここで千世は、かなりご機嫌斜めであった。

「くぬぬぅ？？？？っ！クロノスの行方はまだ掴めないのっ！！？」

そう喚きながら考え込む千世。
アレから千世は、偽の告発をしたクロノスの行方を求めて捜索させたのだが、
どういう事かクロノスの行方は未だに分からぬままだった。
その為、偽の告発の証拠をつかんで退学の件を無くそうとする千世の案は
実現出来ない状況なのだ。
その為、物事が自分の思い通りにいかないと機嫌が悪くなる千世の怒りは
まさにヒートアップ中なのだ。

「くぬぬぅ？？？？っ！一体どこに行ったのよ、あの金色おかっぱ頭っ！！」
「落ち着いてくださいお嬢様。」
「きっともうすぐですよ。」

怒れる千世えを、佐藤と鈴木が何とかなだめようとする。
と、その時――――

ピリリリリリ…ピリリリリリ……ピリリリリリ……

不意に電話が鳴り響く。

「っ！！」

その音に千世はクロノスの事での報告かと思い、即座に電話に手を伸ばす。

「もしもしっ！？あんたら一体どれだけ待たせて……」

「≪まぁ、そんなに私を待っていてくださったんですか千世様。≫」

「……へ？」

予想外の返事に、キョトンとなる千世。

同時に、千世はその声に聞き覚えがあった。

「……あんた……ひょっとして、夏帆（かほ）？」

「≪はい♪お久しぶりですね、千世様。≫」

千世に夏帆と呼ばれた電話の相手は嬉しそうに返す。

「……んで？一体何の用？」

「≪えぇ、千世様が何やらお困りと聞きましたので私にも出来ることがあればと思いまして。よろしければ、事情をお話していただけませんか？≫」

夏帆の言葉に、切羽詰ってた千世は自分が今ぶち当たっている壁について語る。

「≪……まぁ、そんな事になっていたのですね。≫」

千世の説明を聞き終えた夏帆の心配するような声が聞こえてくる。

「まぁね。あの金色おかっぱ頭、見つけたら証拠を見せ付けてこの学園クビにしてやるっ！！」

「《あら、ですがもっと手っ取り早い方法がありますわ。》」

「へ？」

夏帆の思いもよらぬ言葉に、千世はポカンとなる。

「どういう事？」

「《ふふ、それは……》」

夏帆の言葉に興味津々の千世に、夏帆は自分の考えを述べていった……

翌日、遊夜は十代達の部屋で制裁決闘に向けてのデッキ調整を手伝っていた。

「十代と翔のデッキは、どっちも『融合』を切り札にしてるし、やっぱりここは融合に関するカードを組んで見るのもどうかな？」

「お、それ面白そうだなっ！」

遊夜の案に目を輝かす十代。

「アニキ、能天気すぎっすよ。この決闘で負けたら僕達退学なんすよ？」

能天気な十代に意見する翔だが、以前のような弱気は感じられない。

「うむ、とはいえ決闘は価値も大事だが何より大事なのは楽しむ事だ。
無論、俺は勝つが。」
「おう！楽しんで勝てばいい！簡単だっ！」

大吾郎の言葉に意気込む十代。
その十代につられて皆が笑顔になっていると、
不意にレッド寮の階段を上がって来る音が聞こえだす。

「誰か来たのかな？」

そんな遊夜の疑問は、すぐに解決した。
徐々に足音がこちらに近づき、
十代達の部屋のドアが『バタンッ！』と勢いよく開いたからだ。
そこには、息ゼイゼイの隼人がいた。

「隼人、どうしたんだ？そんなに慌てて。」

隼人が明らかに動揺している事に気づいた遊夜が問い掛ける。

「十代！翔！大吾郎！お前らの制裁決闘、無しになるかもしれないぞっ！！」
「え！？」
「なにぃっ！？」
「ホントっすかっ！！？」
「どういう事だ！？」

隼人の言葉に、面々が思い思いの表情を見せる。

「俺もよく分かんないんだけど、何か梅ノ森が何かしでかすみたいなんだなぁ。」
「梅ノ森さんが？」

隼人の言葉に首を傾げる遊夜。
なぜなら、このデュエル・アカデミアでは梅ノ森や万丈目のような金や権力など効かない筈なのである。
この学園のオーナーは世界にその名を轟かす
『海馬コーポレーション』の社長にして、
『決闘王（キング・オブ・デュエリスト）“武藤　遊戯”』のライバルと言われた
伝説の決闘者、“海馬　瀬戸”なのである。
プライドが高い彼は、他の財閥や会社が自分の所有する所に干渉する事を
嫌う筈である。なので、梅ノ森財閥の令嬢である千世が
学園内で権力を使ってわがままをする位なら何の問題も無いのだが、
それが学園の査問委員会の決定事項にまで来るとなると話は変わってくる。

「梅ノ森さんの権力や財力でも、
査問委員会の決定事項を無しには出来ない筈だけど……」
「うん、でも梅ノ森は何かを仕出かすつもりで
芹沢と口論になってるんだなぁ。」
「うむ、それは脳裏に想像つくな。」
「2人って、ケンカするほど仲がいいのか？」
「多分違うっすよ、アニキ。」
「ともかく、行ってみようよ。」

遊夜の言葉に、面々はデッキをケースに入れ駆け出して行った。

「だから何が問題なのよっ！！」
「あんたのやり方は強引すぎるのよっ！！」

決闘場に、文乃と千世の怒鳴り声が響く。
その周りにはいつも通りの面々　明日香、叶絵、家康
さらには千世のメイド　佐藤、鈴木の２人もいた。

「おーいっ！！」

そこに、隼人からの知らせを受けた遊夜達も加わる。

「一体、何があったんだ家康。」
「おぅ遊夜。いやそれがさ……」

やって来た遊夜達に、家康は先程までの事を説明する。

家康が言うには、千世は十代達の制裁決闘を無くす手っ取り早い手段として、
このデュエル・アカデミアをオーナーの海馬から買収しようとしてるらしい。
千世率いる梅ノ森財閥がデュエル・アカデミアの所有者になれば、制裁決闘の件も鶴の一声で無しに出来るのだ。
だが、デュエル・アカデミアの所有者はあの“海馬　瀬戸”である。
無論タダで所有権を譲る筈も無く、１つの条件を出してきたらしい。
その条件とは

『梅ノ森財閥の１人娘が、デュエル・アカデミアの実力者を決闘で

倒す』

というものだった。

千世は早速、その条件の下　決闘しようとしたのだが、

あまりに強引なやり方に、文乃が真っ向から反発しているらしい。

「あんたもうちょっとやり方を選べれないのっ！！？」

「これが1番手っ取り早いんだからいいじゃないっ！！」

遊夜達が来ている事にも気づかず、2人は未だに口ゲンカを続けていた。

「……どうしよう、止めた方がいいかな？」

「止めれるのか？」

家康にそう返されるが、遊夜は『やってみる』と言い2人に接近する。

「2人共、ちょっといい…」

「「うっさい黙れ！」」

「すみません。」

「はやっ！」

「弱っ！」

瞬殺された遊夜にツッコミを入れる十代と翔。

「ゴメン、2人共怖すぎて……」

「遊夜…」

「ん？」

2人を止めれなかった事にヘコむ遊夜に、希は背伸びをして遊夜の頭を撫でる。

「なっ！？／／／／／／／／／／」
「遊夜は頑張った、いい子…」
「の、希…／／／／／／／／／／」

希の行動に、顔を赤める遊夜。
実は希は、あの闇の決闘の一件の遊夜の『仲間』という発言以来、皆に対して、特に遊夜に積極的になっているのだ。
彼女なりのコミュニケーションのとりかたなのだろうが、その方法が若干恥ずかしかったりもする。

「おーおー、御二人さん見せ付けてくれるＺＥ（ゼ）！」
「遊夜、お前とうとう3次元の女に……」

周りの皆からも冷やかしが上がる。

「「あぁ――――っ！！！！」」

とそんな時、不意に先程まで口ゲンカしていた文乃と千世が同時に大声を上げた。

そして遊夜の頭を未だに撫でる希に駆け寄り、遊夜から引き離す。

「あ、まだなでなで…」
「なでなで、じゃ無いわよっ！！希、あんた何やってるのよっ！！」
「そうよっ！遊夜の頭を撫でていいのは世界でただ1人、このあたしだけなのよっ！！」
「あんたはまたそんな事を……！！」

希を挟んで再び睨みあう文乃と千世。

「なんだか、先よりややこしくなって来たわね…」
「まぁまぁいいじゃん明日香。あの2人らしいし。」

現状に呆れる明日香と、この状況を楽しみまくってる叶絵。
誰もこの2人を止めれないと思っていたが、ただ1人止めれる者がいた。

「やほやほー、皆なにしてるのー。」

不意にのんびりした声がし、声のした方を一同が振り向くとそこには、黒のロングヘアーと巨乳を揺らせた乙女がいた。

「「「「乙女先生！」」」」
「げっ！都築乙女（つづきおとめ）！」

乙女の登場に、それぞれの反応を示すメンバーだったが当の乙女は若干不服そうな表情をした。

「んもぉ～遊夜。先生なんて他人行儀な言い方しないで。昔みたいに、“乙女姉（おとめねぇ）”って呼んでくれなきゃや～よ～♪」

そう言い遊夜に抱きついてくる乙女に、遊夜は顔を真っ赤に染め上げてしまう。

「ちょ、ちょっと乙女姉さん！！？」
「あぁっ！！遊夜君ずるいっす！！」
「お、落ち着くんだな翔。」

「ちょっと乙女先生！きょ、教師と生徒がそんな事しては、風紀の問題になると思うんですけどっ！！？」
「えぇ～、でも私達　姉弟（きょうだい）だし～、問題なし！ノープログレム♪」
「そういう問題なのかしら……」
乙女の言葉に頭を抱える明日香。
「ね、姉さん、分かったから、いい加減離して……く、苦しい…」
「あらら、ゴメンねぇ～。」
そう言い乙女は、ようやく遊夜を解放するのであった。
「……う～ん、大体の事は分かったわ。」
あれから乙女は、悠夜達から千世の事や十代達の事を聞き内容的は納得していた。
「つまり、千世ちゃんは千世ちゃんなりの方法で皆を助けようとしてるのね？」
「そうよっ！この梅ノ森千世様が、こいつらの為にやってるのよっ！何の問題も無いじゃないっ！！」
「えー、でも俺クロノス先生が連れてくる奴と決闘してぇよ。」
千世がロクに無い胸を張る中、ＫＹな十代が不服そうに言い放つ。
「アンタねぇ！このあたしに借りを作るのがどれほどの名誉かわかってないの！？
てか誰がロクに無い胸じゃぁいっ！！！」

「お嬢様、誰もそんな事言ってません。」
「落ち着いてください。」

怒り狂いそうになる千世を、御付のメイド佐藤と鈴木が宥める。

「ほら、十代だってこう言ってんだから、さっさと諦めなさい！」

そこに文乃が追い討ちを掛けるように言い放つ。

「くぬぬぬぬぅ～っ！！ちょっと、翔、大吾郎！あんた達はどうなのよっ！！？」

千世は、十代と共に制裁決闘を受ける翔と大吾郎に視線を向ける。

「えっ！？えぇと…僕は……お兄さんと約束してるし……
で、でも、やっぱり負けるのは怖いし……」
「うむ、勝負から逃げるのは日本男児として……
いやしかし、友人が折角用意してくれてることを無碍にするのは……」
「あぁもうっ！どっちなのよっ！！？」
「あんた達男でしょ！即決断しなさいよっ！！」

中々答えを出さない翔と大吾郎に、イライラを募らせる文乃と千世。
そんな状況を見かねて、再び遊夜が前に出る。

「２人共　落ち着いて。俺に１つ案があるんだ。」
「案？」
「何よ、聞こうじゃないの。」

遊夜の言葉に、視線を遊夜に移す文乃と千世。

「確か、梅ノ森財閥がデュエル・アカデミアを買い取るには、
梅ノ森さんが決闘で誰かを倒さないといけないんだろ？
文乃さんはその力ずくなやり方が気に入らない。だったら解決方法
は1つ。」
「それって……」
「まさか……」

遊夜の言葉から、大体の予想がついたメンバー達。

「つまり～、文乃ちゃんと千世ちゃんが
決闘して決着を付けちゃえばいいんだね♪」
「そういう事。」

乙女の言葉に微笑みながら返す遊夜。

「あたしは構わないわっ！どうせ勝つのはあたしなんだから！」
「ふんっ！いいわ、ほえ面かかせてあげる！」

そう言い合い、文乃と千世はにらみ合い火花を飛び散らすのであっ
た。

こうして、決闘することになった文乃と千世は
決闘場に立ち、決闘盤を構える。

「2人共、どんな決闘を見せてくれるんだろう。」
「2人共頑張れぇー！面白い決闘、見せてくれよぉーっ！！」

決闘バカの遊夜と十代の声が響く中、

文乃と千世は決闘盤を構えながら目に炎を燃やしていた。

「（まったく、何で私がこんな事を!?でも、梅ノ森にだけは負けたくないわっ!
ましてや遊夜の前で……べ、別に、遊夜の視線なんてどうでもいいけど、
ホント仕方ないけど、梅ノ森の好きになんてさせないんだからねっ!）」

「（ふふふ～、まさか芹沢文乃にこのデッキを使うことに成るとは、でも丁度いいわ。このあたしの圧倒的な力の前にひれ伏しなさいっ!）
行くわよっ!芹沢文乃!!」

「ふん、こっちはいつでもいいわよっ!!」

「「決闘っ!!」」

文乃：ＬＰ／４０００
千世：ＬＰ／４０００

「先行は貰うわっ!私のターン!」

先行を貰った文乃は、デッキから引いたカードと手札を見て即座に最初の一手を決断する。

「私は『荒野の女戦士』を守備表示で召喚!」

荒野の女戦士　☆４　地　戦士族　ＡＴＫ／１１００　ＤＥＦ／１

200

文乃の場に、黒い帽子と黒いマントを身に着けた金髪の女戦士が現れた。

「さらにカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「ほう、芹沢のデッキは俺と同じ戦士族デッキか。」

文乃の出したモンスターを見て即座にそう推理する大吾郎。

「そういえば、梅ノ森さんてどんなデッキを使うのかな？」

「あ～、それはちょっと分かんないね。」

遊夜の疑問に答えたのは、叶絵だった。

「どういう事っすか？」

「ちーぽん、お金に物言わせて色々とデッキを変えてくるからねぇ。」

「そんな方法を使うのかぁ」

叶絵の言葉に隼人が不服そうな表情をする中、千世がデッキの上に手を置く。

「あたしのターン！」

デッキから引いたカードを見た千世は、自分の最初の一手を即座に

決める。

「ふふふ、見せて上げるわ芹沢文乃。ペガサスが作った伝説のシリーズを！！
あたしは手札からフィールド魔法『ジャスティス・ワールド』を発動！！」

千世が発動したカードにより、場が光り輝く古の都へと早変わりした。

「なに、これ？」
「ふふふ、光り輝く古の都よ。見せて上げるわ、この都を守る光の使者達を！
あたしは『ライトロード・パラディン　ジェイン』を攻撃表示で召喚！！」

ライトロード・パラディン　ジェイン　☆４　光　戦士族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１２００

千世の場に、白銀に輝く鎧を身にまとい剣と楯を装備した戦士が現れた。

「なによ、それ。」
「ふっふっふ～、これぞペガサスが古代遺跡とキリスト教をベースに生み出した
伝説の『ライトロード』シリーズよっ！！その力を見せて上げるわっ！！
行けぇっ！『ライトロード・パラディン　ジェイン』で

芹沢のモンスターを攻撃よっ！！」

千世の言葉と共に、ジェインが荒野の女戦士に迫る。

「この時、『ライトロード・パラディン　ジェイン』の効果発動っ！！

このカードが相手モンスターに攻撃する時、
ダメージステップの間攻撃力が３００Ｐアップするわっ！！」

ライトロード・パラディン　ジェイン　ＡＴＫ／１８００⇒２１００

「行けぇっ！！“シャイニング・ブレイク”！！」

ジェインの光り輝く剣が荒野の女戦士を斬り裂き、女戦士は消滅する。

「なら私は、『荒野の女戦士』の効果発動！
このカードが戦闘で破壊された時、デッキから攻撃力１５００以下の戦士族・地属性モンスター１体を特殊召喚できる！
さらに罠発動！『同族の絆』！！

私の場のモンスターが戦闘で破壊された時、
デッキから☆４以下の破壊されたモンスターと同じ属性・同じ種族のモンスターを
１体特殊召喚するっ！！私はこの２つのカード効果で、
２体のモンスターを特殊召喚するわっ！来なさいっ！
『アマゾネスの聖戦士』！！『アマゾネスの吹き矢兵』！！」

アマゾネスの聖戦士　☆４　地　戦士族　ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／３００

アマゾネスの吹き矢兵　☆３　地　戦士族　ＡＴＫ／８００　ＤＥＦ／１５００

文乃の場に、剣を持った小麦色の肌をした異国の女戦士と同じく小麦色の肌をし吹き矢を持った女戦士が現れた。

「そして『アマゾネスの聖戦士』の効果発動！
自分の場の『アマゾネス』と名の付くモンスター１体につき攻撃力を１００Ｐアップする！私の場には『アマゾネスの吹き矢兵』と
『アマゾネスの聖戦士』自身の系２体！よって２００Ｐアップ！」

アマゾネスの聖戦士　ＡＴＫ／１７００⇒１９００

「ふん、その程度どうって事無いわっ！
あたしはカードを１枚伏せるわっ！
そして『ライトロード・パラディン　ジェイン』の効果発動っ！！
自分のターンのエンドフェイズに自分のデッキの上からカードを２枚墓地に送るわっ！」

千世はデッキの上からカードを２枚めくり、それらを墓地に送ったと同時に、
千世の墓地が輝きだす。

「なに！？」
「ふふふ、あたしが墓地に送ったカードの１枚は
装備魔法『ライトロード・レイピア』。
このカードがデッキから墓地に送られた時、

自分の場の『ライトロード』１体に装備出来るわっ！！
あたしは『ライトロード・パラディン　ジェイン』に装備するわっ！！」

墓地よりの光がジェインの剣に光の粒を浴びせると同時に、
ジェインの剣は、刺突片手剣（レイピア）へと変わった。

「このカードを装備したモンスターの攻撃力は７００Ｐアップするわっ！！」

ライトロード・パラディン　ジェイン　ＡＴＫ／１８００⇒２５００

「さらにフィールド魔法『ジャスティス・ワールド』の効果発動！！
デッキからカードが墓地に送られた時、
このカードに“シャインカウンター”を１つ置かれるわっ！」

古の光の都の上空に、丸く輝く光が浮かび上がると同時に
その光から降る光の粒がジェインに注がれる。

「そして“シャインカウンター”１つにつき、
『ライトロード』の攻撃力を１００Ｐアップするわっ！」

ライトロード・パラディン　ジェイン　ＡＴＫ／２５００⇒２６００

「攻撃力、２６００……」
「にょーほほほほほほほほっ！これがあたしの実力よっ！ターンエンド！！」

「何なんだありゃ！？」
「あんなカード見たこと無いわ！」

千世が出したカード達に驚くメンバー。

「『ライトロード』。そういえば以前、ペガサス会長が言ってたな。古代遺跡とキリスト教を見ていたら久々にインスピレーションが沸いて来て、衝動的に作った後、どこかの決闘大会の優勝商品になったって……」
「という事は、その大会で優勝したのが梅ノ森なのか……」
「いえ、それは違います。」

大吾郎の言葉を否定するように、千世のメイド佐藤と鈴木が現れる。

「どういう事ですか？」
「千世様は、『ライトロード』を一目見て気に入られまして。」
「それに加え『ライトロード』を持っていた方がお金に困ってらしたので、お金と引き換えに『ライトロード』を買われたのです。」
「って結局金で買ったのかよっ！！」

佐藤と鈴木の言葉にツッコミを入れる家康。
その様子を見ていた千世が『こらー、余計な事言うなぁーっ！！』と喚いている。

「文乃さんは、『アマゾネス』デッキみたいだな。」
「にゃあ、アマゾネス。」
「ん～、『アマゾネス』デッキはクセがあるけど、文乃ちゃんなら扱えそうだね～♪」

文乃のデッキに視線を向ける遊夜達。

「様々なコンボが売りの『アマゾネス』デッキと、
伝説のシリーズ『ライトロード』デッキ、
すっげぇーっ！！俺すっごくわくわくするぜっ！！」

十代が目を輝かしながら決闘を見る中、文乃がデッキの上に手を置く。

「私のターン、ドロー！！」

文乃は引いたカードを確認し、『よしっ！』と心の中で呟く。

「自分のスタンバイフェイズ、『アマゾネスの吹き矢兵』の効果発動！
相手モンスター1体の攻撃力を、このターンのエンドフェイズまで５００Ｐダウンさせるわっ！」

吹き矢兵の放つ吹き矢が、ジェインに命中する。

ライトロード・パラディン　ジェイン　ＡＴＫ／２６００⇒２１００

「ふん！この位どうってことないわっ！」
「さらに私は、『アマゾネスの吹き矢兵』を生け贄に――――
来なさいっ！『アマゾネス女王（クィーン）』！！」

アマゾネス女王（クィーン）　☆６　地　戦士族　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１８００

文乃の場に、大型の剣を携え威厳に満ちた雰囲気の漂う女戦士が現れる中、
千世は尚も余裕の表情だった。

「（ふふふ、そんなカードが来たって無駄よ！
なぜなら、あたしが伏せてるカードは『次元幽閉』！！
あんたが攻撃して来た瞬間、その女王を除外してやるわっ！）」

そんな余裕のある千世だったが、
その余裕のある微笑が文乃に警戒心を抱かせていた。

「（梅ノ森のモンスターは、私の『アマゾネスの吹き矢兵』の効果で攻撃力２１００。
ここで攻撃力２４００の『アマゾネス女王』で攻撃すれば倒せるけど、
あの余裕の表情……何かあるわねっ！）」

そう考えた文乃は、今一度自分の手札を確認する。

「（…っ！！これだわっ！）私は手札から、
装備魔法『アマゾネスの秘剣（ひけん）』を発動！『アマゾネス女王』に装備！！」

文乃がカードを発動すると同時に、
天より振ってきた宝玉の輝く剣を女王は手にする。

「このカードを装備したモンスターの攻撃力は３００Ｐアップ！」

アマゾネス女王　ＡＴＫ／２４００⇒２７００

「そして装備モンスターが攻撃する時、相手はダメージステップ終了まで
魔法・罠を発動する事は出来ないわよっ！！」

「なっ！！？」

文乃の言葉に驚愕する千世。

「（それじゃあ『女王』の攻撃時『次元幽閉』を発動出来ないじゃないのっ！！）」

「行くわよっ！『アマゾネス女王』で
『ライトロード・パラディン　ジェイン』を攻撃！“女王の宝刀（じょうおうほうとう）”
！！」

文乃の言葉と共に、女王の秘剣がジェインを斬り裂く。

千世：ＬＰ／４０００⇒３４００

「ひぎゅうぅぅぅぅっ！！？」

想定外の余波に吹き飛ばされる千世。

「続けて、『アマゾネスの聖戦士』で直接攻撃（ダイレクト・アタック）！“聖剣の舞（せいけんのまい）”っ！
！」

アマゾネスの聖戦士の美しく鋭い舞と共に放たれる剣が千世に迫る。

「（くぬぬぅ～っ！女王を除外したかったけど仕方ないわっ！）罠発動！『次元幽閉』！！
攻撃して来たモンスター1体を除外するわっ！！」

カードの発動と共に次元の裂け目が現れ
聖戦士はその次元へと吸収されていった。

「やっぱりその手のカードが伏せてあったわね。
私はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」
「くぬぬぅ～っ！！よくもやったわねぇっ！！あたしのターン！！」

怒りに燃える千世は、怒りに任せてカードを引く。

「あたしは魔法カード『ソーラー・エクスチェンジ』発動！！
手札から『ライトロード』1体をコストに、デッキからカードを2枚ドローし
その後デッキの上からカードを2枚墓地に送る！
あたしは手札から『ライトロード・プリースト　ジェニス』をコストに
デッキからカード2枚をドロー！！そしてデッキからカードを2枚墓地に送るわっ！！」

カードを引いた千世は、デッキからカードを墓地に送る。
その時、千世は微かだが微笑んだ。

「ふふふ、この瞬間！
墓地に送られた『ライトロード・ビースト　ウォルフ』の効果発動！
このカードがデッキから墓地に送られた時、墓地から特殊召喚できるわっ！！
来なさいビースト！！」

ライトロード・ビースト　ウォルフ　☆４　光　獣戦士族　ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／３００

千世の場に、白銀に輝く鎧を身にまとい斧を持った狼の獣戦士が現れる。

「そしてフィールド魔法『ジャスティス・ワールド』に“シャインカウンター”が乗り、攻撃力がさらにアップよっ！」

ライトロード・ビースト　ウォルフ　ＡＴＫ／２１００⇒２３００

「☆４で攻撃力が実質２３００のモンスター……でも、それじゃあ私の『アマゾネス女王』の敵じゃないわよっ！」

攻撃力が自分のモンスターに及ばない事に強気になる文乃。

だが、千世の表情には余裕があった。

「にょーほほほほほほほほほっ！このあたしがこの程度で終わる訳無いでしょっ！！

あたしは『ライトロード・ビースト　ウォルフ』を生け贄に――――現れなさいっ！『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』を召喚！！」

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　☆６　光　ドラゴン族　ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１６００

千世の場に、全身が白銀に輝き黄金のタテガミを靡かせた竜が現れた。

「フィールド魔法『ジャスティス・ワールド』の効果により、攻撃力アップよっ！」

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　ＡＴＫ／２０００⇒２２００

「あれ、でも攻撃力は『ライトロード・ビースト　ウォルフ』より低いよ？」

千世が新たに出したモンスターに疑問を掲げる翔。

「攻撃力の高いモンスターを生け贄にしてまで召喚したって事は、あのドラゴンにはもっとすげー能力があるんじゃねぇか！？」

「あぁ、きっとそうだよ十代。そう思うと俺、」

「「すっげーわくわくするっ！！」」

そう言い目を輝かす遊夜（決闘バカコンビ）と十代。

「ふふふ～ん、『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』のモンスター効果！

墓地に眠る『ライトロード』と名のついたモンスター１種類につき、攻撃力と守備力が３００Ｐアップするわっ！！」

「種類？」

あまり聞き慣れない言葉に疑問を掲げる文乃。

「まぁ簡単に言えば、同名モンスターは1体のみカウントするってことかしら？
あたしの墓地には『ジェイン』『ジェニス』『ウォルフ』の3種類、よって９００Ｐのパワーアップ！！」

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　ＡＴＫ／２２００⇒３１００　ＤＥＦ／１６００⇒２５００

「くっ！」
「にょーほほほほほほほほほっ！さぁくらいなさい芹沢文乃！！
『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』で『アマゾネス女王』を攻撃！
“シャイニング・ホーンズ・バースト”！！」

グラゴニスの蒼白く輝く角から放たれる光線が、
アマゾネス女王を飲み込んでいった。

文乃：ＬＰ／４０００⇒３６００

「くうっ！！」
「にょーほほほほほほほほほっ！
これでアマゾネスが誇る女王も灰に消え……んなっ！？」

この攻撃で、千世はアマゾネス女王を倒したつもりだった。
だが、実際にはそうはならずアマゾネス女王は健在なのだ。

「何で！？どういう事！？」

「アンタ少しは攻撃するモンスターの効果ぐらい読みなさいよ。」
動揺する千世に対し、淡々と返す文乃。
「『アマゾネス女王』が私の場にいる限り、
『アマゾネス』は戦闘では破壊されないのよ！」
文乃の言葉に『くぬぬぅ～っ！』と悔しそうに歯軋りをする千世。
「あたしのターンのエンドフェイズ、
『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』の効果により
デッキの上からカードを3枚墓地に送るわ。」
千世はデッキの上からカードを3枚めくり墓地へと送った。
「そしてあたしが墓地に送った3枚の中に
『ライトロード・スピリット　シャイア』があったわ。
よって『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』の
攻撃力・守備力は３００Ｐアップっ！」
ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　ＡＴＫ／３１００⇒３４００　ＤＥＦ／２５００⇒２８００
「さらにデッキからカードが墓地に送られた事で『ジャスティス・ワールド』に
“シャインカウンター”が１つ置かれ、攻撃力が１００Ｐアップっ！！」
ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　ＡＴＫ／３４００⇒３５００

「（ふふふ、これで『グラゴニス』の攻撃力が上がっただけでなく、墓地に『ライトロード』が４種類になったわっ！これで後は、あのカードを引ければ…ふふふ…）ターンエンド！」

「うわぁ、またパワーアップしたっ！」

「『ライトロード』……『墓地肥やし』により様々な能力を発揮する、伝説のシリーズ。まさかこの目で拝める日が来るとはな。」

「って三沢くん!?」

観客席にいつの間にやら、三沢が来ていた。

「いやすまんすまん、何だか盛り上ってるみたいだったからな。」

「でも三沢、知ってたのか『ライトロード』の事。」

「ん？まぁな。ネットで調べている時に見かけた事があるんだ。まさかこんな所でお目に掛かれるとは思わなかったがな。」

そう言い視線を決闘へと再び向ける三沢。

「それに、俺の記憶が正しければ『ライトロード』デッキには、その強さと凶悪さから禁止カードとなった『混沌帝龍（カオス・エンペラー・ドラゴン）』に匹敵する究極のカードが眠っている筈だ。」

「「「『混沌帝龍（カオス・エンペラー・ドラゴン）』!!?」」」

三沢の言葉に、メンバーは驚愕の表情を浮かべた。

『混沌帝龍（カオス・エンペラー・ドラゴン）』、正式名称『混沌帝龍（カオス・エンペラー・ドラゴン）－終焉の使者（レクイエム）－』は光と闇属性のモンスターを主力とした混沌デッキのエースとして猛威を振るったドラゴンであり

そのあまりの強さと召喚のし易さ、そしてあまりにも凶悪な効果ゆえに
デュエルモンスターズ公式試合では禁止カードとされてしまったカードである。
そのカードに匹敵するカードが、
ライトロードデッキに存在する事に皆は驚かずには居られなかった。
……例によって例の如く約2名を除いて。

「すっげぇーっ!!そんなカードがあるのかよっ!!」
「見たいっ!すっごく見てみたいっ!!」

ご存知、遊夜と十代(決闘バカコンビ)である。

「私のターン!!」

カードを引いた文乃は、遊夜達の会話から少なからず動揺していた。

「(『混沌帝龍(カオス・エンペラー・ドラゴン)』に匹敵するカード!?そんなの出されたら勝ち目は薄いわ!
梅ノ森がそのカードを出す前に決着を付ける!!)」

だが、そんな文乃の決心をあざ笑うかのように、千世には余裕があった。

「(ふふふ、もう無駄よ芹沢文乃。すでに召喚条件は揃えたわ!
後は引き当てれば良いだけ!!)」

千世が余裕をかます中、文乃は手札に手を伸ばす。

「私は手札から永続魔法『アマゾネスの闘志（とうし）』を発動っ！！
自分よりも高い攻撃力を持つモンスターを『アマゾネス』が攻撃する場合、
ダメージ計算時の間攻撃力は１０００Ｐアップさせるっ！
バトルよっ！『アマゾネス女王』で
『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』を攻撃！
『アマゾネスの闘志』の効果により、攻撃力１０００Ｐアップ！！」

アマゾネス女王　ＡＴＫ／２７００⇒３７００

「おぉっ！まるで俺の『スカイスクレイパー』みたいだなっ！！」
「これなら行けるＺＥ（ゼ）！！」

文乃の攻撃に興奮する面々。
だがその横で、佐藤と鈴木の２人は『無駄ですね』と呟く。

「それは何故ですか？」

佐藤と鈴木の言葉に、首を傾げる遊夜。
そんな遊夜に対し、佐藤と鈴木は説明を始める。

「千世様は何も、レアカードばかりを買い取ってデッキを作った訳ではありません。」
「千世様は、どんなデッキを作ろうとも必ず
“光属性”を主体としたデッキを組むのです。」
「光属性？」

佐藤と鈴木の言葉に『それは何故？』と尋ねる遊夜に対し、
佐藤と鈴木は一瞬口篭ったが、再び口を開く。

「千世様のご両親様は、お仕事故に千世様と滅多にお会いする事がありません。」
「ですがそんな千世様に、御当主様はお土産にある2枚のカードを買っていらしたのです。」

そう言い佐藤と鈴木の2人は、視線を決闘へと向ける。

「いけぇっ『アマゾネス女王』！！“女王の宝刀”！！」

女王の宝刀が迫る中、千世は余裕の表情だった。
なぜなら、彼女の手札には両親より貰った
心の支えともいえるカードがあるからだ。

「ふふふ、掛かったわね芹沢文乃！」
「なっ！？どういうことよっ！」

文乃が驚く中、千世は手札の1枚に手を伸ばす。
普段中々会う事の無い両親が、初めて渡してくれたカードの1枚に、
自分がデュエルモンスターズをするキッカケを作ってくれたカードに。

「手札から『オネスト』の効果発動っ！！」
「っ！！？」

千世が手札から1枚のカードを墓地に送った途端、
グラゴニスの翼に重ねるように、薄い天使の翼が現れる。

「『オネスト』の特殊効果、それは光属性モンスターが戦闘を行うダメージステップ時にこのカードを墓地に送る事でその攻撃力を戦闘する相手モンスターの攻撃力分アップさせるわっ！」

「なっ！！？」

予想外の反撃に文乃が驚愕する中、グラゴニスの体が輝いて行く。

「戦闘する『アマゾネス女王』の攻撃力は３７００！！つまりその攻撃力が『グラゴニス』に加算されるっ！！」

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　ＡＴＫ／３５００⇒７２００

「攻撃力、７２００……！！？」

「にょーほほほほほほほほっ！返り討ちよ芹沢文乃！」

千世の言葉と共に、グラゴニスの体が光り輝きその光全てがグラゴニスの角に集約し、巨大な光の球体を作り上げた。

「迎撃よ『グラゴニス』！！“ビックライト・ホーンズ・バースト”！！！」

光の球体より放たれる光が、アマゾネス女王を包み込んで行く。

「くっ！！」

文乃は思わず目をつぶってしまう。

自分の場には伏せカードも１枚も無い。何も出来ない、文乃はそう

思った。
そんな文乃の脳裏に、幼い頃の思い出が蘇っていた――――――

「ねぇ遊くん。決闘で絶体絶命になった時、遊くんならどうする？」
孤児院の片隅で、カードをいじる幼き頃の遊夜に文乃が尋ねる。

「そんな時はね、カードを信じるよ。
デッキを信じれば、カードはきっと答えてくれる。
手札にも、デッキにも、墓地にだって希望はあるんだよ。」

希望……

「はっ！」

物思いに耽っていた文乃は我に返り、自分の手札に目を向ける。

「（手札にも……デッキにも……）そうだわっ！！」
「ん？」

不意に声を上げた文乃に首を傾げる千世だったが、
文乃はそんな事気にせず手札の１枚に手を伸ばす。

「手札から速攻魔法『神秘の中華なべ』を発動！！
自分の場のモンスターを生け贄に、生け贄に捧げたモンスターの
攻撃力か守備力を選択し、その数値だけ自分のＬＰを回復する！！

私は『アマゾネス女王』を生け贄に捧げ、攻撃力を選択！！」
「んなっ！！？」
文乃の予想外の対処法に驚く千世。
「『アマゾネス女王』の攻撃力は現在３７００！！
よって３７００Ｐ、ＬＰを回復するわっ！！」
文乃：ＬＰ／３６００⇒７３００
「リ、リリース・エスケープっ！！？」
千世は、そう驚かずには居られなかった。
千世は今までこのカードを使い、あらゆる攻撃モンスターを迎撃して来た。
それが今、初めて失敗したのだ。
その事に激しく動揺する千世を無視し、文乃は決闘を続ける。
「私はカードを１枚伏せ、ターンエンド！」
ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　ＡＴＫ／７２００⇒３５００
「ねぇ、リリース・エスケープって？」
千世の言葉が気になった翔が、明日香に尋ねる。
「モンスターを生け贄にする事で、
攻撃や破壊からモンスターを逃がす術の事よ。」

「しかも文乃、ＬＰの回復まで出来てバッチグーだＺＥ（ゼ）っ！！」

文乃の善戦に、客席のメンバーが盛り上がる。

「佐藤さん、鈴木さん、あのカードが先言ってたカードの１枚ですか？」

遊夜の質問に、佐藤と鈴木は『コクリ』と頷く。

「だがこの状況、芹沢くんの不利に変わりはない。」

その隣で、三沢は現状を冷静に分析していた。

「梅ノ森くんの場には攻撃力３５００を誇る『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』。
対する芹沢くんの場には伏せカードが２枚あるのみ。さて、どうなるか。」

「なに、文乃さんはそう簡単には終わらないさ。」

そう言い視線を決闘に戻す遊夜。

「あたしのターン！ドロー！！」

カードを引いた千世は、自分の次の一手を考える。

「（くぬぬ～まさか『オネスト』の迎撃コンボがかわされるなんて。だけど、そのお陰で芹沢の場は伏せカード２枚。１枚は先の攻撃で発動しなかった、
て事はブラフの可能性あり。問題はもう１枚のカードね。）」

千世の視線は、文乃が伏せたカードに向けられる。

「（あのカードがもし、『ミラーフォース』みたいな迎撃用罠なら不味いわ。
だ・け・ど、甘いわよ芹沢文乃！）あたしは手札から
『ライトロード・マジシャン　ライラ』を攻撃表示で召喚！」

ライトロード・マジシャン　ライラ　☆４　光　魔法使い族　ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／２００

千世の場に、白衣の服に身を包み杖を持った黒髪の女魔法使いが現れた。

「（ふふふ、こいつは攻撃表示から守備表示に変える事で場の魔法・罠カード１枚を破壊出来るのよっ！こいつであのカードを……）」
「この瞬間罠カード発動！」
「…へ？」

カードを破壊する気だった千世は、文乃の予想外の罠発動にポカンとなる。
だがそれは、一瞬の事に過ぎなかった。

「罠カード『激流葬』っ！！モンスター召喚に成功した時、フィールド上モンスターを全て破壊するわっ！！」
「……な、何ですってぇっ！！？」

文乃の発動したカードに驚く千世だったが時既に遅し、
激流葬の放つ青い波動がグラゴニスとライラを呑み込んで行った。

「んな……んな……」
「ふふん、残念だったわね梅ノ森。」

有利な状況が一転、不利な状況となってしまった千世の表情に動揺が走る。

「（ま、まずいわ！無防備なままターンエンドは出来ないわっ！）
カードを1枚セットしターンエンド！！」
「私のターン！」

引いたカードを確認した文乃は、即座に次の一手を決める。

「私は『アマゾネスの格闘戦士』を攻撃表示で召喚！」

アマゾネスの格闘戦士　☆４　地　戦士族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１３００

文乃の場に、原始的な服装の女格闘家が現れた。

「行くわよ梅ノ森っ！！『アマゾネスの格闘戦士』で直接攻撃！！
“アマゾネス蹴殺の舞い”っ！！！」

文乃の言葉と共に、格闘戦士の蹴りが千世に迫る。

「んなモン通すかぁっ！罠発動『ドレインシールド』！！

相手モンスターの攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分あたしのＬＰを回復するわっ！
『アマゾネスの格闘戦士』の攻撃力１５００Ｐ、あたしのＬＰに加算させるわっ！！」

千世：ＬＰ／３４００⇒４９００

「うまいっ！これで梅ノ森くんのＬＰも芹沢くん程で無いが、ＬＰを回復した！これで彼女にも、逆転のチャンスがある！」

千世と文乃の決闘にそう感想を入れる三沢。

「どう思う、十代。」
「へへ、やっぱ決闘はこれ位熱くなくっちゃな！」
「だな！」

十代と遊夜がそんな会話をする中、文乃の攻めは続く。

「場から永続罠『アマゾネスの意地』を発動！！
墓地に眠る『アマゾネス』１体を特殊召喚するわっ！
来なさいっ！！『アマゾネス女王』っ！！」

アマゾネス女王　☆６　地　戦士族　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／１８００

文乃の場に、アマゾネス女王が蘇る。

「バトルフェイズ中に特殊召喚したモンスターには、まだ攻撃宣言が残ってるわっ！」
「んなぁっ！！」
またもや予想外の出来事に驚く千世。
「行くわよっ！！『アマゾネス女王』で直接攻撃！！“女王の宝刀”っ！！！」
文乃の言葉と共に、女王の秘剣が千世を斬り裂く。
千世：ＬＰ／４９００⇒２５００
「ひぎゅうぅぅぅっ！！？」
何も守ってくれる物の無い千世に、ダメージの余波が直接伝わり派手に転倒してしまった。
「カードを1枚伏るっ！（私が今伏せたカードは『炸裂装甲（リアクティブアーマー）』！どんな攻撃力を持つモンスターでも、このカードで破壊できる！このまま押し切るわっ！）ターンエンド！」
「これで完全に、ＬＰも場のカード的にも芹沢くんが有利になった。」
「千世にいたっては、手札はたった1枚。圧倒的に不利ね。」
2人の決闘を冷静に分析する三沢と明日香。

「よーしがんばれ文乃！君の勝ちに２０００円賭けてるんだＺＥ（ゼ）！」
「梅ノ森ーっ勝ってくれえぇっ！！お前の勝ちに２０００円も賭けてんだよぉっ！！」

賭けてるが故に必死に応援すす家康と叶絵。

「この決闘、どうなっちゃうんだろ？」
「う～ん、何とも言えないんだなぁ…」
「うむ、この勝負、もはやどう転んでもおかしくない。」
「文乃ちゃんも千世ちゃんもがんばれ～っ！」

大吾郎と乙女、翔、隼人がそれぞれ反応を示す中、
その横で遊夜と十代、それに希はなにやらブツブツと呟いていた。

「狼（ウォルフ）、間違いないか？」
「〔あぁ、間違いない。あの者の墓地に精霊の気配がする。〕」
「相棒、お前も感じるか？」
「〔クリクリ～っ！〕」
「にゃぁ、キャットも感じる？」
「〔ニャーン〕」

それぞれの精霊が答える中、千世がデッキの上に手を置く。

「（冗談じゃないわっ！こんな所で芹沢文乃なんかに負けてたまるもんですかっ！
絶対、ずえーたいに負けないっ！！）あたしの、タ――――――――ンっ！！」

千世は渾身の力を込めてカードを引き、そのカードを見た千世の表

情は
明るいとは言いがたいが、希望に満ちていた。

「手札から『強欲な壺』発動！デッキからカードを2枚ドローッ！！」

千世は全身全霊をかけてカードを引いた瞬間――――――

――――千世は微笑んでいた。

「……ふ、ふふふふ、にょーほほほほほほほほほっ！
やっぱり勝利の女神は最後の最後にはこのあたしに微笑むのよっ！」
「！？」

千世の高笑いに驚く文乃。

「見せてやるわ芹沢文乃！このデッキのエースを！」
「ま、まさか！」

千世の言葉に文乃は『はっ』と先程の言葉を思い出す。

『ライトロードデッキには、混沌帝龍（カオス・エンペラー・ドラゴン）に匹敵する
究極のカードが眠っている筈だ。』

「まさか、あんた……」
「ふっふっふっ、自分の墓地に『ライトロード』と名の付くモンスターが
４種類以上存在する時のみ、このカードは特殊召喚出来るわっ！！」
千世の言葉と共に、決闘場の上空より神々しく輝く光が現れる。
「さぁ現れなさいっ！光をまといし裁きを司る神龍！！
『裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）』っ！！！」

裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）　☆８　光　ドラゴン族　ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２６００

神々しく輝く光の中から、白銀の毛に覆われた神々しい神龍が千世の場に舞い降りた。
「何よ…これ…」
「にょーほほほほほほほほほっ！これこそこのデッキのエース！
光をまといし裁きを司る神龍『裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）』よっ！！」
その神々しさに唖然となる文乃に、高笑いしながら答える千世。
「あれが、『混沌帝龍（カオス・エンペラー・ドラゴン）』に匹敵する究極のカード、
『裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）』っ！」
「まさかこの目で拝める日が来るとはね。」

裁きの龍の姿に驚きを隠せない明日香と三沢。

「すっごい綺麗っす！」

「で、でっかいんだなぁ……」

「わぁ、綺麗だねぇ～♪」

「おぉ～中々のど迫力だZE（ゼ）！！」

「いよっしゃぁーっ！！いいぞ梅ノ森っ！！そのまま一気に畳み掛けろぉっ！！

俺の掛け金の為にいぃいぃっ！！」

「うむ、ここでこれ程のカードを出すとはな。」

「にゃあ、大きい…」

他のメンバーもまた、驚いたり感心したりせずには居られなかった。

「すっげぇっ！！かっこいいぜっ！！」

「すごい、これがペガサス会長が作り上げた神龍！！」

もちろん、この遊夜と十代も。

決闘バカコンビ

「にょーほほほほほほほほほっ！行くわよ芹沢文乃！

『裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）』の効果を発動する為に、あたしはLPを1000P払う！」

千世：LP／2500⇒1500

千世がLPを払うと同時に、裁きの龍は天空へと向かって吼える。

「な、なにっ！？」

「ふふふ、『裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）』のモンスター効果！
１０００ＰのＬＰをコストに、このカード以外のフィールド上のカードを
全てを破壊するっ！！」
「なっ！！？」

そのあまりにも反則レベルな効果に驚きを隠せない文乃。
その間にも、裁きの龍の咆哮により天より神々しい光が現れて来る。

「全ての者に裁きの力を！“シャイニング・ジャッチメント”っ！！」

天より降り注ぐ光が、フィールド全てを包み込んでいく中
光の都の上に輝く３つの“シャインカウンター”の内２つが輝きだす。

「なにっ！？」
「ふふふ、『ジャスティス・ワールド』の効果発動！このカードが破壊される時、
“シャインカウンター”２つを犠牲に光の都は滅びないわっ！！」

光の輝きが消えた時、そこには“シャインカウンター”が１つだけ輝く光の都と
裁きを下す白銀の神龍のみが残っていた。

「まだまだ行くわよっ！魔法カード『死者蘇生』を発動！
あたしは墓地から『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』を特殊召喚！！」

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　☆６　光　ドラゴン族　ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１６００

千世の場に、グラゴニスが再びその姿を現す。

「『ジャスティス・ワールド』の効果で１００Ｐアップ！
さらに自身の効果で墓地に眠る『ライトロード』１種類につき３００Ｐアップ！
墓地には『ライトロード』が５種類！よって１５００Ｐパワーアップっ！！」

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　ＡＴＫ／２０００⇒３６００　ＤＥＦ／１６００⇒３１００

「こ、こんな事って……」
「ふふふ、アンタの場にはアンタを守るカードは１枚も無いわ！
行けえぇっ！！『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』で直接攻撃！
“シャイニング・ホーンズ・バースト”！！」

グラゴニスの蒼白く輝く角から放たれる光線が、文乃を容赦なく貫く。

文乃：ＬＰ／７３００⇒３７００

「きゃあぁっ！！」

その衝撃波は凄まじく、文乃は膝をついてしまった。

「続けて、『裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）』で直接攻撃！！

唸れ！！“ジャッチメント・ホーリー・バースト”おぉぉぉぉっ！！！」

裁きの龍の口より放たれる白銀の光線が、文乃を容赦なく貫く。

文乃：ＬＰ／３７００⇒７００

「きゃあぁっ！！」

その凄まじい衝撃波に、文乃はかなり飛ばされてしまう。

「カードを1枚伏せるわ。

そして『裁きの龍（ジャッジメント・ドラグーン）』の効果で４枚、

『グラゴニス』の効果で3枚のカードをデッキの上から墓地に送る。

計7枚の内、新たに3種類の『ライトロード』が増えパワーアップ！」

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　ＡＴＫ／３６００⇒４５００　ＤＥＦ／３１００⇒４０００

「そして2体のモンスター効果でデッキからカードを墓地に送った事で、

『ジャスティス・ワールド』に“シャインカウンター”が2つ乗り、

さらに２００Ｐアップ！」

ライトロード・ドラゴン　グラゴニス　ＡＴＫ／４５００⇒４７００

「ターンエンド。どう、あたしの実力分かった？
これでこの学園のオーナーは梅ノ森財閥になるのよっ！
にょーほほほほほほほほほっ！」
「……バッカじゃないの？」
「へ？」

ＬＰを大きく削られて戦意が落ちていると思われた文乃の言葉に、
高笑いしていた千世の表情を驚きに変える。

「何があたしの実力よ、金の力でいいカードをそろえただけじゃない。
何が学園のオーナーよ、結局あんたは金の力でしか
自分を認めてもらえないだけじゃない。」
「な、何ですってえぇっ！！」

文乃の思わぬ言葉に、怒りの炎を燃え上がらせる千世。

「何だ何だ？」

文乃と千世の言い合いに、観客席にいたメンバー達の殆どが首を傾げる。
そんな中、叶絵は『あらら』と面白そうに見ている。

「文乃ってば、やちゃったかぁ。」
「どういう事だ？」

叶絵の言葉を聞き、遊夜が尋ねて来る。

「文乃ってば、
お金とか権力とかで物事を解決しようとするのを嫌ってるからねぇ。
それでちーぽんと度々衝突するのさ。」
「お金と権力……」
叶絵の言葉に、遊夜の脳裏に幼い頃の出来事が蘇った――――――

「文ちゃん、どうしたの？またいじめられたの！？」
孤児院の片隅で、泣いていた幼い文乃に遊夜が語りかける。
「うぅ……遊ちゃん…だって…だってぇ……
あいつらが……金の無いお前は疫病神だって……
死んだほうがいいって……」
「そんな訳あるもんかっ！！」
涙を流す文乃に、遊夜は怒鳴るように言い放つ。
「金の無い奴が死ぬなんて法律あってたまるかっ！！
今度そんな事言われたら2倍で言い返せっ！！蹴られたら2回蹴り返せ！
死ねって言われたら『二回死ね』だっ！！」
「でも……」
遊夜の励ましても尚、自信が持てない文乃。
そんな文乃の手を、遊夜は優しく握る。
「文ちゃん、自分で出来ないなら俺を呼べ。

俺が絶対、守るから！」
「遊くん…」
遊夜の言葉に、文乃はようやく涙を止めほんの少しだが微笑んでくれた。

「（……強く、なったんだな、文ちゃん）」
「おやおや～、遊っち何黄昏てるんだい？何やらいい事を思い出したように。」
物思いに耽っていた遊夜を叶絵がからかう中、文乃はデッキに手を伸ばす。

「アンタなんかに、絶対負けないわっ！」
「ふん、吼えるだけなら犬や猫にだって出来るわ！
（ふふん、アンタに勝ち目なんて万が一つにもありえないのよ。
攻撃力の低いモンスターが主力の『アマゾネス』デッキじゃあ
あたしの場のモンスターの攻撃力を超えることはまず不可能。
だとするなら狙うは魔法・罠によるカード効果破壊。
だけどあたしが伏せたカードはカウンター罠『魔宮の賄賂』っ！！
このカードがあれば、どんな魔法・罠カードも無意味！
この決闘、あたしの勝ちよ！そして……）」

千世は不意に視線を客席に座っている遊夜に向ける。

「（十代達の制裁決闘を無くせば、遊夜もあたしを見てくれる！
他の皆だって！もう寂しくなんかないっ！！）」

千世にはそんな思いがあった。
今まで、どの学園の者達も自分を“梅ノ森財閥の人間”として見て来た。
どの者達も、自分を1人の人としては見てくれなかった。
だが、この者達は違う。自分が梅ノ森財閥の人間かどうか等気にしていない。
遊夜などは、自分に手すら差し伸べてくれた。
そんな皆をこの学園から去らせたくない。
だから手を尽くした、初めて出来た友達を失いたくないから。
だが、彼女は気づかない。
その強引な方法ではダメと言う事を。
それを知るからこそ、文乃は彼女に挑んだ。金や権力だけではダメだから。

「私のターン!!」

文乃は、引いたカードを確認した瞬間確信する。

「（勝った!!）」

「ふふん、どんなカードだろうとあたしの『ライトロード』に勝てるカード何てアンタのデッキにあるのかしら?」

嫌味に言い放つ千世だったが、文乃の目には信じて疑わない強い意志が見えた。

「アンタ、その強力なモンスターが仇になって負けた事ある?」
「はぁ?そんなモンこのあたしにある訳ないでしょ!」

「だったら見せてあげるわっ！私はモンスターを召喚！来なさい！『アマゾネスの剣士』！！」

アマゾネスの剣士　☆４　地　戦士族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１６００

文乃の場に、大刀を持った女戦士が現れた。

「ふん、そんなモンスターに何が出来るのよ。」

「アンタ、まさか『アマゾネスの剣士』の効果を知らないの？」

文乃の言葉に首を傾げる千世。

「『アマゾネスの剣士』のモンスター効果って……確かそのカードが受ける戦闘ダメージを相手に……っ！！？」

アマゾネスの剣士の効果を思い出した千世の顔が、一気に真っ青になる。

「バトル！『アマゾネスの剣士』で『ライトロード・ドラゴン　グラゴニス』に攻撃！！」

文乃の命と共に、アマゾネスの剣士が刀を構えてグラゴニスに突っ込む。

「えぇっ！？何で、攻撃力が低すぎて返り討ちになるよっ！！」

文乃の攻撃の真意が分からない翔が首を傾げる中、遊夜が説明する。

「いや、『アマゾネスの剣士』には圧倒的攻撃力を覆す
脅威の能力があるんだ！！」

「そう、相手が強ければ強いほど力を発揮する能力がね♪」

遊夜と乙女の言葉に『え？』と首を益々傾げる翔。

「唸れ“首刈りの剣（アマゾネス・スラッシュ）”っ！！」

アマゾネスの剣士の大刀が振られるのに対し、
攻撃対象であるグラゴニスも光線を放ち迎撃する。
その光線の前に、アマゾネスの剣士は消滅するが大刀だけは千世に向かって行く。

「『アマゾネスの剣士』の特殊効果！
このカードが戦闘によって受けるダメージは相手プレイヤーが受ける！！」

剣士の大刀が、千世を貫く。

千世：ＬＰ／１５００⇒０

「う……うそ……」

あまりにも意外すぎる敗北に、千世は唖然となった。

「私の勝ちよ梅ノ森。約束通り、この学園を買い取る件は無しよ！」

「そ…そんな……あんたはそれでいいの!?」
文乃の言葉に千世は吼えるように言い返す。
「あたしがここのオーナーになってしまえば、
十代達の制裁決闘も無しに出来るのよ!?
制裁決闘やってこいつらが退学になってもいいのっ!!?」
「それで3人が退学になるって決まった訳じゃないよ。」
不意に千世に声を掛ける為に決闘場に下りて来た遊夜に、
千世は『どういう事よ』と尋ねる。
「逆に聞くけど、梅ノ森さんは何故3人が退学になると思うんだ?」
「それは……」
遊夜にそう尋ねられた千世は、答える事が出来なかった。
ただ千世は、皆が退学になるかも知れないという事だけで
それを何とかしたいという思いだけで動いていた。
そこを夏帆の甘言に乗せられて今回の様な騒動を起こしたのだ。
彼らが負けると決まった訳でもないのに。
千世はその事にようやく気づいた。
「梅ノ森さん、君が十代達の為に動いてくれた事はすっごくよく分
かるよ。
でもさ、俺達は仲間だろ?仲間なら仲間の勝利を信じる事も絆なん
だと思うよ。」
「……だ、だけどあたしはっ!」
「この学園を買い取る以外にも、
梅ノ森さんには仲間の為に出来る事があるだろ?」
「っ!!」

そう言い千世の頭を撫でてくる遊夜に、千世はもう何も言えなかった。

「ふふ、さすがね遊夜。」
「ちーぽんをなだめる何てやるね遊っち！」
「にゃあ、遊夜　優しい。」
「うがぁぁ～っ！！おれの２０００円がぁ～っ！！！」

遊夜と千世のやり取りに集まってくるメンバー。
その横で、文乃は勝ったのにどこか不機嫌そうだった。

「（何よバカ遊夜。梅ノ森の頭撫でてデレデレしちゃって……）」

どうやら、嫉妬のようだ。

「誰が嫉妬よっ！」
「にゃ？文乃、誰に言ってるの？」

文乃の１人ツッコミ（？）に首を傾げる希。
そこへ、遊夜が文乃に接近する。

「な、なによ。」
「ん、ちょっと思い出してね。」

遊夜の言葉の意味がまるで分からない文乃が
頭上に？マークを浮かべる中、遊夜は口を開く。

「叶絵さんから聞いたよ。金や権力で物事を解決するのが嫌いなんだって？」

「だったらなによ！」
「……金の無い奴が死ぬなんて法律あってたまるか。」
「っ！！」

不意に放った遊夜の言葉に、文乃は目を見開く。

「今度そんな事言われたら2倍で言い返せ、蹴られたら2回蹴り返せ、
死ねって言われたら『二回死ね』だ。」

そこまで言い、遊夜は文乃に向き直るといきなり文乃の頭を撫でた。

「なっ！！？／／／

「ゆ……ゆ……」

そんな中、文乃は体をプルプル震わせながら口を開いた――――――

「遊くんのバカあぁぁぁぁぁっ！二回死ねえぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇっ！！！！！」

「ふぎゃあぁっ！！！？」

文乃の蹴りを、珍しく避けれなかった遊夜はクリンヒットした蹴り勢いで
後ろの観客席付近にまで吹っ飛ばされた。
が、その表情に痛みなどは無かった。

「よかった、本当に強くなって。」

……やはりどこか天然な遊夜なのであった。

「まぁ、そうですの。」

文乃と千世の決闘のあった日の夜、和風の別荘で
黒いロングヘアーと白いリボンを揺らす少女　夏帆が諜報員から聞

いたのは
自分が発案した千世への案が無しになった事だった。

「ふふふ、デュエル・アカデミア。あそこには面白い方々が居ますのね。」

そう言い視線を落とした先には、遊夜を始めとしたアカデミアで千世と拘わりのある者達のリストだった。
夏帆はその内の3枚に手を伸ばす。その内の2枚は遊夜と十代だった。

「白鋼遊夜、それに遊城十代、この方々は面白いですわ。そして……」

そしてもう1枚、希のリストに目をやる。

「霧谷希……ふふふ、見つけましたわ。」

そう言い微笑む夏帆の表情は、
どこか不気味でその微笑は夜の闇に飲まれていった。

「……え～と……」
「…なんすか、これ…？」
「すごいんだなぁ～。」
「うむ、面妖な。」

翌日、十代達が部屋を出るとレッド寮の前に何千枚ものカードの束とそのカードの束の前に千世がいた。

その騒ぎを聞きつけ、遊夜達も集まっていた。

「梅ノ森さん、これは一体……」
「ふふん、あたしもアレから考えたのよ。学園を買い取らずに尚且つアンタ達を決闘に勝たせる確率を上げる方法を！」
「それが、このカードの束？」
「そうよ！全国から集めたレア・ノーマル問わず集めたカード達よ！これで思う存分デッキを改良しなさい！にょーほほほほほほほほっ！」
「あんたねぇ…」

千世の言葉に呆れる文乃だったが、それとは逆に十代は目を輝かせていた。

「すっげぇーっ！見ろよ遊夜、翔、隼人、大吾郎！こんなにカードが！！お、これ使えそうだな！！」
「ア、アニキ……ん？」

不意に翔の目に、1枚のカードが止まる。
それを拾い上げた翔は、十代にそのカードを見せる。

「アニキ！これ！！」
「ん？」

そのカードを見た十代は、『これいいな！』と喜ぶ。

「早速デッキに組もうぜ！ありがとうな梅ノ森！！」

「にょーほほほほほほほほほっ！！もっと褒めなさーいっ！！！」
「あんたねぇ、これじゃ何にも変わんないじゃないのぉっ！！」

高笑いする千世に、天に響く大声で怒鳴る文乃なのであった。

『～第九章～　因縁の対決!?文乃ＶＳ千世　《終》』

～第九章～　因縁の対決！？文乃ＶＳ千世（後書き）

どうも、黒鋼です。
いや～かなり遅れてすみません。今後もこんなペースになるかもしれませんが、
なにとぞ、気長に長い目で見ていてください。
それと今回使った『アマゾネスの剣士』の攻撃名なんですが、
“首刈りの剣”と“アマゾネス・スラッシュ”の２つがあり、
どっちにするか迷ったので、“首刈りの剣（アマゾネス・スラッシュ）”にしました。
また、今回の決闘で『死者蘇生』を使いましたが
これは偶々このカードが制限に返り咲いた事が理由です。
また、それは漫画ＧＸにも現れてますし、たまには使ってもいいかなぁ～
と思ったからです。
今後もそんな事もあるでしょうが、よろしくお願いしま～す。

今回の最強カード『アマゾネスの剣士（けんし）』
☆４　地属性　戦士族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１６００
このカードが戦闘を行う事によって受ける
コントローラーの戦闘ダメージは相手が受ける。

こちらが受ける戦闘ダメージを反射させるモンスター。
攻撃力１５００、☆４、地属性、戦士族とかなり使い勝手がよく
アマゾネスデッキだけでなく、戦士族デッキを始めとした
様々なデッキに投入可能。

～第十章～　隼人退学！？脅威のちゃぶ台返し！

文乃と千世の因縁の決闘から数日。
十代は、木陰で昼寝を謳歌していた。

「ふぅ～、いい風。ここ、俺だけのお気に入りの場所。」
「アニキーっ！！」

十代がそんな事を言っていると、不意に翔の声が聞こえ
十代は寝ていた体を起き上がらす。

「よぉ翔。どうしてここがわかったんだ？」
「どうしてって、アニキよくここでサボッてるじゃない。」

十代の質問に『さらっ』と答える翔。

「なんだ、バレバレかよ。」
「皆知ってるよ。って、そんなこと言いにきたんじゃなかったんだ！
大変何だよアニキ！！」

翔のタダならぬ気迫に、十代は何事かと首を傾げる。

「なんだ、何があったんだ？」

尋ねる十代は、翔が放った言葉に驚愕する事になる。

「隼人君が退学させられちゃうかもしれないんだっ！！」
「えぇっ！！隼人が退学っ！！？」

十代の驚きの声が、空に木霊したのだった。

オシリス・レッド寮の前には、話を聞きつけた多くのレッド生徒が集まっていた。
そんな赤ばかりの中に、たった1人違う色　蒼のブルー生徒がいた。
遊夜である。

「遊夜！大吾郎！」

遊夜と大吾郎の姿を確認した十代と翔が接近する。

「2人共、こっちこっち！」

遊夜が手招く所に向かい、遊夜達が覗いていた部屋を十代が覗いて見ると
そこには、2人の男がいた。
1人は、メガネを掛け痩せっぽちな男で、名は“大徳寺（だいとくじ）”。
希同様『にゃ』が口癖の錬金術担当・レッド寮寮長の教師である。
大徳寺は十代達は見慣れていたが、
もう1人の大柄でがっちりとした体格の男には見覚えが無かった。

「誰だ、あのおっさん。」
「隼人の父君らしい。」

十代の疑問に答えたのは大吾郎だった。

「隼人君を、実家に連れ戻しに来たんだよ。」
「何で？」

「しっ　これからそれを言うみたい。」

遊夜に言われ、口を閉じ耳を傾ける十代達。

「隼人の奴は、オシリス・レッドにいるだけでも嘆かわしいのに、
さらに落第して留年しとるっちゅう。
これ以上ないほど情けない男でごわすっ！！」
「それはまぁ、なんといいますか……ハッハハハハ」

隼人の父、“前田（まえだ）　熊蔵（くまぞう）”の放つ威圧感に
大徳寺は圧倒され言葉がうまく出なかった。

「ならばここは、潔くデュエリストに見切りをつけ、
家業の造り酒屋の跡を継ぐのもまた男の道！違いますか先生っ！！」
「あー、はい確か薩摩焼酎でしたにゃ。」
「いかにも。」

すると熊蔵は何処からとも無く、自作の薩摩焼酎を大徳寺の前に
『ドンッ！』と力強く置いた。

「よかったら、どうぞ。」
「あややや！こういうのは困りますにゃ…」

両手を横に振る大徳寺に、熊蔵はさらに言い放つ。

「と、言うわけで！本日今日限りで隼人を故郷に連れて帰るでごわすっ！！」

「おいおい、なんつー無茶苦茶なおっさんだよ…」
熊蔵の言葉に十代が唖然とする中、翔が接近する。
「どうしようアニキ。」
「決まってんだろ、隼人に直接聞くんだよ。」
「確かに、親の威厳だけで退学なんてあんまりだ。」
「うむ、急ごう。」

言うや否や、４人は部屋に向かうために階段を駆け上がり十代達の部屋のドアを開ける。
そこには、荷造りをしている隼人の姿があった。
「隼人、お前本当に学校を辞めるのか？」
荷造りする隼人に驚いた十代が尋ねるが、
隼人は『あぁ』と返すだけだった。
「ああって」
「そういう訳だから皆、短い間だったけど元気でなぁ。」
「お前！」

隼人の言葉が納得いかない十代が、隼人に詰め寄る。
「そう簡単に決闘者の夢、諦めちまってもいいのかよっ！おい、隼人っ！！！」
憤りで隼人に迫る十代だったが、次の瞬間その憤りは冷え切ってしまう。
隼人が、泣いていたのだ。

「隼人……」
「お前、何で泣いてんだよ。」
「俺……俺…正直今まで真剣に決闘者になりたいって思ってなかったんだなぁ。」
涙を見られた４人に、隼人は涙を拭きながら答える。
「まぁ、なれたらいっかぁみたいな感じでね。でも今は違うんだなぁっ！
十代や遊夜、それに他の皆の決闘を見て
俺初めて本気でがんばってみようって思ったところだったんだなぁっ！
それに……」
「それに？」
一旦言葉を区切った隼人は、十代と遊夜を交互に見た後、再び言い放つ。
「俺には、精霊の声が聞こえたから。」
「「！！」」
隼人の言葉に、遊夜と十代は以前ウォルフが言っていた事を思い出す。
隼人には精霊の姿を見ることは出来ないが、声を聞く位なら出来る。
それを知った隼人の嬉しそうな表情を、２人は覚えていた。
「それ、父さんに言ったのか？」
遊夜の言葉に、先程まで強い眼差しをしていた隼人の表情が一変、

涙目の弱気な表情に変わった。

「言えるわけないよぉ！うちの父ちゃん、とっても怖いんだぁ……」
「隼人、父君が怖くて自分の意思も言えぬとは、それでも日本男児か！」
「――――ったく！来い隼人！！」
「ふえ？」

隼人の言葉に我慢出来なくなった十代は、
隼人の首根っこを掴んで走り出して行った。

「――そういう事ですので、
隼人を退学させるのは思い止まってもらえませんか？」

十代が行った場所は　大徳寺、熊蔵、そして鮫島校長のいる校長室だった。
父である熊蔵に弱気な隼人に代わり、十代達が説得に掛かったのだ。

「十代の言うとおり、隼人は自分の道を今ようやく見つけたんです。
隼人の気持ちを分かってあげてください。」

遊夜も十代と共に頭を下げる。
そんな遊夜達に、熊蔵は目を細め口を開く。

「おまんら、一体何者でごわす？」

熊蔵の言葉に隼人は『ビクリ』と震える中、十代と遊夜は真っ先に口を開いた。

「俺は隼人と同室の者で、遊城十代といいます。」
「隼人の友人、白鋼遊夜と申します。」
「同室の、丸藤翔です。」
「友人の幸谷大吾郎と申します。」

4人がそれぞれの自己紹介を終えると、校長が口を開く。

「君達の気持ちはわかりますが、これは前田さんの家族の問題です。部外者の我々が口を挟むのは――――」
「待った。」

校長の言葉を、意外な人物が止めた。
それは、隼人を連れ戻しにきた張本人である熊蔵だった。

「よか。ただし条件がある」
「条件？」

熊蔵の意外な申し出に首を傾げる遊夜だったが、大方の予想はついていた。

「おいと決闘ばしろ、隼人。」
「えっ！？」

熊蔵の申し出に目を丸くする隼人。

「もし、おまんがおいに勝ったらこの話はなかったことにしちょう。だがもし、おいが勝ったら今すぐおいと故郷に帰るっど！」

この条件に皆の視線は隼人に向けられた。

「どうだ、受けるか？」

熊蔵の申し出に驚いていた隼人だったが、
皆と一緒にこのアカデミアにいたい気持ちは強く、隼人は力強く答えた。

「受けるっ！！」

「では、決闘は明朝８時。そういうことでよろしいか、校長はん。」

熊蔵の言葉に、鮫島校長は『うむ』と頷く。

「正にデュエルア・カデミアに相応しい。よき解決法だと思います。」

校長の決定により、
隼人の進退は明日の決闘の結果次第という事になったのだった。

「んにしても、あんなにあっさりＯＫするなんて思ってなかったな。」

「意外と話の分かる人だったんだね、隼人の父さん。」

校長に許可を貰った事に、十代と遊夜は上機嫌だったが
その後ろで翔が２人に釘をさす。

「別にまだＯＫしたわけじゃないんだよアニキ、遊夜君。
決闘に勝ったらっていう条件付だよ。」

「はっ、そんなの勝つに決まってるじゃねぇか。相手は素人の親父

だぜ。」

翔の言葉にアッサリ返す十代だったが、その後ろにいた大徳寺が不意に『コホン』と口を開きだす。

「参考までに1つ教えておいてあげますにゃ。」

「大徳寺先生？」

大徳寺の言葉に足を止めた5人が振り返ると、大徳寺は再び口を開く。

「隼人君のお父様は薩摩示現流の使い手として世界中に名を轟かせた伝説の決闘者。」

「「えっ！？」」

大徳寺の思わぬ言葉に驚く十代と翔。

その横にいる隼人の表情は、校長室を出た時から硬かった。

「そう言えば、そんな噂を聞いた事がある。」

「うむ、薩摩示現流と言えば鹿児島県に今も尚伝わる一撃必殺の剣術。

その強さは、幕末の攘夷志士達をも震えさせた新選組さえも恐れさせたと言う。」

大徳寺の言葉に、遊夜と大吾郎の2人もそれぞれの反応を示す。

「けどさ、勝てないって訳じゃないだろ？」

不意に十代がそう言い放つ。

「どんな強い奴が相手でも、決闘はやってみないと分からないぜ！俺や遊夜だって、クロノス先生に勝てたんだからさっ！！」
「言えてるね。隼人、寮に戻ったら君のデッキ見せて貰っていいか？」
「え、あ、あぁ。」
隼人の許可を貰った遊夜は、高らかに声を上げる。
「よしっ！戻ったら隼人のデッキ構築だぁっ！！」
そんな遊夜を見て、隼人は先程まで硬かった表情を緩めるのだった。

その日の夜、レッド寮では大徳寺と熊蔵が熊蔵が持ってきた自家製の薩摩焼酎で晩酌をやっていた。
「いやぁぁ、はっはは。それでは先生も大変ですなぁ～」
「やぁぁ、いえいえ。そんなことは～」
そんな会話をする2人の横で、皿に入った焼酎を飲む虎縞のデブ猫が一匹。
名はファラオ。大徳寺の愛猫である。
「失礼してちょっと厠に。」
そう言い熊蔵は立ち上がり、部屋を出る。
その厠の帰りに、熊蔵は明かりのついた部屋から聞こえる声に気づきその声のする部屋のドアの隙間から部屋の中を見てみた。

「なんだよ、隼人のカードコアラばっかりだなぁ。」

声の主は、部屋の主である十代、翔、隼人に加え大吾郎と隼人の為にレッド寮に泊まりに来た遊夜だった。

「コアラデッキなんだな。」

「コアラデッキって、こんなんで勝てるのかよ…」

そんな会話が流れる中、遊夜は隼人のデッキから1枚のカードを抜き取る。

「ファンデッキで勝つのは難しいが、コアラデッキなら『デス・コアラ』がいるから結構行けると思うぞ。ただ…」

「ただ？」

不意に言葉を区切った遊夜に首を傾げる翔。

「ただ、問題は決定力不足だな。『ビッグ・コアラ』だけじゃ火力不足だ。

さて、どうしたものか……」

そう言い遊夜が考え込む中、不意に翔は『そうだ』と何かを思い出したようで、

1枚のカードを差し出す。

「よかったら、これあげるよ。

こないだ買ったパックに入ってたんだけど、僕使わないし。」

それは、白いエプロンを装着した桃色のカンガルーだった。

「俺に、くれるのか？」
「ほら、コアラにカンガルーが加わればオーストラリアデッキになるじゃない。」
翔の言葉に感激しながら、隼人はデス・カンガルーのカードを受け取る。
それを見ていた遊夜達は、不意に立ち上がり自分達のカードを漁り始める。
「よっし、それじゃちょっと待ってろ！」
「こっちも、確かアレが使えた筈…」
「うむ、俺も似たようなカードを……」
それぞれの思うカードを探して、夜は明けていくのだった。

明朝８時、道場の様な場所で隼人と熊蔵は対峙していた。
その近くには、遊夜、十代、翔、大吾郎に加え
審判を勤める大徳寺が居た。
「ではこの決闘、僭越ながら私、大徳寺が立会人を務めさせてもらうにゃぁ。」
両者の真ん中に立った大徳寺がそう宣言する。
「では前田熊蔵さん、もしこの決闘に負けたら
隼人君がこの学校に残ることを許していただけますかにゃ？」
「よか。男に二言はないでごわす！」

熊蔵の言葉に大徳寺は『うん』と頷き、今度は隼人の方を向く。

「隼人君、もしこの決闘に負けたら潔く退学してご実家の造り酒屋を継ぐこと。いいかにゃ？」

「俺はかまわないんだな。」

隼人の言葉を聞き、合意の意を確認した大徳寺は決闘開始の合図を出すべく手を振り上げた。

「うーん、よろしい。では、悔いのないよう思う存分闘うにゃ！」

「決闘！！」

「いざ尋常に、決闘！！」

隼人：ＬＰ／４０００

熊蔵：ＬＰ／４０００

「俺の先行！ドロー！！」

先行を貰った隼人は、デッキから引いたカードを確認する。

「（『デス・コアラ』！！）」

それは、自分のお気に入りにしてこのデッキの中核を担うカードデス・コアラだった。

「（よし、昨日遊夜が言ってた通り、このカードで先制を取るんだなぁっ！）

俺はモンスターを1体、裏側守備表示で召喚！」

隼人の場に、カードが1枚横向きでセットされる。

「（念の為、こいつも伏せとこう）カードを1枚伏せ、ターンエンドなんだなぁ！」

「おいのターン！ドロー！！」

隼人のエンド宣言を確認した熊蔵は、勢いよくカードを引く。

「さて、薩摩示現流の極意を応用したというデッキ。見せてもらうぜ。」

熊蔵のターンになり、目を光らせる遊夜達。

「うむ、二の太刀要らずの示現流。いかなるデッキなのか…」

「おぉ、すっげーわくわくしてきたぁーっ！」

十代達が見守る中、熊蔵は隼人のセットしたモンスターに視線を向ける。

「ふん、大方そのカードは隼人　おまんのお気に入りの『デス・コアラ』。

それでおいのライフを一気に削ろうって腹じゃろう？」

熊蔵の言葉に『うっ』と表情を曇らせる隼人。

「じゃが、おいの薩摩示現流の前ではそんな小細工は通用せん！

行くど隼人！『酔いどれタイガー』召喚！！」

酔いどれタイガー　☆４　地　獣戦士族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／６００

熊蔵の場に、一升瓶を持った酔っ払った虎のオッサンが現れた。

「む、むぅ？」
「あれが一撃必殺っすか…？」

薩摩示現流の一撃必殺のモンスターがどのようなモノかと見守っていたのだが、
出てきたのが酔っ払った虎のオッサンだった事に唖然となるメンバー。

「だが、熊蔵さんは隼人のモンスターが『デス・コアラ』と予想してあのモンスターを出した。と言うことは、何らかの効果がある筈だ。」

ただ１人、遊夜だけは冷静に分析していた。

「さらにおいは手札から装備魔法『酒乱の徳利』を発動！！
『酔いどれタイガー』に装備する！！」

場に現れた大き目の徳利に、タイガーは釘付けになり
手に持っていた一升瓶を捨てて徳利を手に持つ。

同時に徳利をラッパ飲みしだした。

酔いどれタイガー　ＡＴＫ／１８００⇒２２００

「『酔いどれタイガー』の攻撃力が上がったぁ！？」

「『酒乱の徳利』は、『酔いどれ』モンスターの装備カードとなり装備モンスターの攻撃力を４００Ｐアップさせ、おいのスタンバイフェイズ毎に徳利の中の酒を飲み続け攻撃力を２００Ｐずつアップさせていくのだっ！！」

「そんなぁっ！！」

隼人が悲痛の声を上げる中、熊蔵は攻撃を仕掛ける。

「行けぇ『酔いどれタイガー』！！“泥酔パンチ”！！」

酔いどれタイガーは、奇妙な歩行でセットモンスターに接近しそのまま拳を叩き付けるのだった。

その際、タイガーの酒臭が漂った。

「さ、酒臭〜っ！」

隼人：ＬＰ／４０００⇒３６００

「あ、あれ？何で俺のＬＰが……それにどうして、『デス・コアラ』の効果が発動しないんだぁっ！！？」

「あまいぞ隼人！『酔いどれタイガー』には、攻撃したモンスターがリバース効果モンスターだった時、そのリバース効果を無効にする特殊効果を持つ！さらに『酒乱の徳利』を装備したモンスターは

守備モンスターに対する貫通効果を得るのだっ！！」

思わぬ攻撃に『ぐっ』と弱気になりそうだった隼人だったが、
ここで、伏せカードの存在を思い出す。

「だけど、『デス・コアラ』が戦闘で破壊された事に変わりは無いんだなぁっ！」

「なに？」

「罠発動（トラップはつどう）！『群（むれ）の絆（キズナ）』！！

俺の場の獣族・獣戦士族モンスターが戦闘で破壊された時、
デッキから☆４以下の獣族・獣戦士族モンスター１体を特殊召喚出来るんだなぁっ！
俺はこの効果で『マザー・カンガルー』を特殊召喚！！」

マザー・カンガルー　☆４　地　獣族　ＡＴＫ／８００　ＤＥＦ／１６００

隼人の場に、白いエプロンを装着した桃色のカンガルーが現れた。

「あのカードはっ！」

「翔がやったカードだ！！」

隼人が出したカードに声を上げるメンバー。
そう、そのカードは昨晩　翔がオーストラリアデッキにする為に隼人に渡したカードだった。

「（『マザー・カンガルー』……隼人のデッキには無かったカード……）
隼人、おまんアレ程好きだったコアラデッキを捨てたのか？」
「それは違うんだなぁっ！」
熊蔵に対し声を上げる隼人。
「これは皆が俺にくれた新たなる力！皆のお陰で俺のコアラデッキはオーストラリアデッキに進化したんだなぁっ！！」
昨日までとはまるで別人のようになった隼人の言葉に、熊蔵は目を細める。
「（隼人、お前がここまで言うようになるとはな…フッ）ならば見せてみろ！
進化した、成長したおまんの力を！おいはカードを１枚伏せ、ターンエンド！！」
「俺のターン！ドロー！！」
熊蔵のエンド宣言と共に、隼人はカードを引く。
「俺のターンのスタンバイフェイズ、
自分の場に『マザー・カンガルー』以外のモンスターが存在しない時、
『キッズ・カンガルートークン』１体を特殊召喚できるんだなぁっ！」
キッズ・カンガルートークン　☆１　地　獣族　ＡＴＫ／１００　ＤＥＦ／１００

マザー・カンガルーのエプロンのポケットから、
小さな子供のカンガルーが出て来た。

「そして、『マザー・カンガルー』と
『キッズ・カンガルートークン』の2体を生け贄に捧げ――――
『ビッグ・コアラ』を攻撃表示で召喚するんだなぁっ！」

ビッグ・コアラ　☆7　地　獣族　ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／２０００

「なんと！」

隼人の場に、巨大な水色のコアラが現れ
その存在にさすがの熊蔵も驚く。

「行くぞ父ちゃん！『ビッグ・コアラ』で『酔いどれタイガー』を攻撃！
必殺、“ユーカリ・ボム”！！」

隼人の言葉と共に、ビッグ・コアラは酔いどれタイガーを掴み取るとその腕力で床へと叩き付けた。

熊蔵：ＬＰ／４０００⇒３５００

「ぬぅっ！」

隼人の反撃にの衝撃波に、やや押される熊蔵。

「どうだ父ちゃん！これが皆のお陰で成長した、俺の新たな力だ！」

「む、少しは言うようになったな。だが、まだまだこれからよ！

罠発動！『酒宴祭』！！場のモンスターが破壊された時、

デッキから☆４以下の『酔いどれ』モンスターを特殊召喚する！

来い！『酔いどれエンジェル』！！」

酔いどれエンジェル　☆４　地　天使族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／４００

熊蔵の場に、一升瓶を持ち白いタキシードを着た酔っ払いの天使が現れた。

「また酔っ払いかぁ……」

新たに出て来た酔っ払いモンスターに、そう呟く隼人。

「≪なぁ～にぃ、まだまだ酔っ払っちゃいねぇよぉ～兄ちゃん！≫」

「えっ！？」

不意にそんな声が聞こえ、隼人は『まさか』と視線を遊夜と十代に向けた。

「おい十代、今…」

「あぁ、俺も聞こえたぜ。精霊の声。」

2人は互いに頷き合い、視線を隼人に向けた。

「（やっぱり俺には、精霊の声が聞こえるんだ！）俺はターンエンドなんだなぁ！」

自分が精霊の声が聞こえる事を改めて理解した隼人は、ここに残りたいという思いを、よりいっそう強くした。

「おいのターン！」

引いたカードを見た熊蔵は、そのカードをそのまま決闘盤（デュエル・ディスク）にセットする。

「おいは魔法カード『天使の施し』を発動！

デッキからカードを3枚ドローし、その後　手札を2枚捨てる！」

熊蔵は引いたカードと手札を確認すると、顔に微笑を見せた。

そしてカードを2枚選択し、墓地へと送った。

「隼人、おまいに薩摩示現流の奥義を見せてやろう！」

「っ！！」

その言葉に、隼人はもちろん周りにいたメンバーも戦慄した。

「おいはカードを1枚伏せる、さらに手札から装備魔法『早すぎた埋葬』！

８００のＬＰをコストに、墓地からモンスターを復活させこのカードを装備させる！

おいは『天使の施し』で墓地に送った『神酒（しんしゅ）の巫女（みこ）』を特殊召喚！！」

熊蔵：ＬＰ／３５００⇒２７００

神酒(しんしゅ)の巫女(みこ)　☆４　地　魔法使い族　ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／４００

熊蔵の場に、御神の徳利を持った巫女が現れた。

「このカードが召喚、特殊召喚に成功した時、
デッキから儀式モンスターまたは儀式魔法１枚を選択し
手札に加える事が出来るでごわす！
おいは儀式魔法『酔剣伝承(すいけんでんしょう)の儀式(ぎしき)』を手札に加える！」

そう言い熊蔵は、デッキから手札に加えたカードを隼人に見せる。

「あれ？でも普通に召喚でもよかったんじゃぁ…
何でわざわざ墓地から特殊召喚したんだろう？」

不意にそんな疑問を浮かべる翔。

「このターンに、儀式モンスター以外の上級モンスターでも呼ぶんじゃないか？」
「或いは、それ以外の狙いがあるのか……」

十代と遊夜がそんな会話をすると、それを聞いた熊蔵が視線を向けて来る。

「うむ、おまんらよい読みだな。そう、おいのデッキの切り札を出すには
このターン、通常召喚する事が出来んのでごわす！」
「それってまさか！」
熊蔵の言葉に、隼人は『はっ』と思い出す。
熊蔵の使う、一撃必殺の究極のカードの事を。

「そのまさかだ！行くど隼人！
おいは手札から儀式魔法『酔剣伝承の儀式』を発動！！
場か手札から、☆が８以上になるようにモンスターを生け贄に捧げる！
おいは場の『酔いどれエンジェル』と『神酒の巫女』の２体を生け贄に捧げ――――」

「《うおぉ～い、俺もう退場かよぉ？？？？？》」

熊蔵の言葉に悲痛の叫びを吼えながら、
酔いどれエンジェルは巫女と共に消していった。

「見せてやるぞ！おいのデッキの最強モンスター！！
儀式召喚！！『酔いどれ剣豪　チェスト』！！」
酔いどれ剣豪　チェスト　☆８　地　戦士族　ＡＴＫ／２６００
ＤＥＦ／２２００

熊蔵の場に、巨大な大刀を持った白髪の老剣豪が現れた。

今までの酔いどれモンスターと違い、顔が若干赤いだけであまり酔ってはいない。

「『酔いどれ剣豪　チェスト』の効果発動！
このカードが儀式召喚に成功した時、
デッキからおいの切り札を手札に加える事ができる！」

そう言い熊蔵は、デッキより切り札のカードを手札に加える。

「さらに、『酔いどれ剣豪　チェスト』は墓地に眠る
『酔いどれ』モンスター1体につき、攻撃力が２００Ｐアップする！」

酔いどれ剣豪　チェスト　ＡＴＫ／２６００⇒３０００

「そして手札から永続魔法発動！『ちゃぁぶ台返し』！！！」

熊蔵がカードを発動させた瞬間、地鳴りと共に場が巨大なちゃぶ台へと変わった。

「でぇぇぇぁぁぁぁぁぁぁぁ！うおぉりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

雄たけびと共に熊蔵は決闘場となったちゃぶ台に手をかけると
気合とともにおもいきりひっくり返してしまった。

「うわぁぁぁぁっ！！？」

それにより、ちゃぶ台の上にあったモンスターと伏せカードは舞い上がり、

床に叩きつけられると共に、破壊された。

「はっはははははは、見たか！永続魔法『ちゃぶ台返し』は己の場に『酔いどれ』モンスターが存在する時、このカードを除く己のフィールド上の全てのカードを破壊し、その枚数分だけ相手フィールドのカードを破壊する、正に一撃必殺のカードでごわすっ！！！」

熊蔵は大声で笑いながらそう言い放った。

「一撃必殺ってそういう意味だったんだね。」

「と言うより、薩摩示現流が全く関係ない気がするのだが……」

ちゃぶ台返しの効果に、それぞれの反応を示す翔と大吾郎。

「確かに、こりゃあ反則すれすれのリセットカードだな。」

「まぁ、確かに一撃必殺ではあるけれど……」

さすがの遊夜と十代（決闘バカコンビ）も、この効果には唖然としていた。

そんな中、隼人は批判の目を熊蔵に向けながら口を開いた。

「父ちゃんは都合が悪くなると、いつもそうなんだなぁ！」

「はっははは！家長の思い通りにならないことなど何もないのだっ！！」

隼人の批判も全く気にせず豪快に笑う熊蔵。

その場には、破壊された筈の酔いどれ剣豪が、自身の徳利で酒を飲んでいた。

「えっ、何で破壊されてないの？ちゃぶ台返しで破壊されたんじゃなかったの！？」

「ふっふふ、甘いぞ隼人。『酔いどれ剣豪　チェスト』の最後の効果、

それは『ちゃぶ台返し』の効果では破壊されない効果なのだぁっ！！」

「なっ！！？」

熊蔵の言葉に驚く隼人。だがそれだけでは無かった。

「さらに、おいが伏せていたカードは魔法カード『お銚子一本』！

セットされたこのカードが破壊された時、隼人　お前に５００Ｐのダメージを与える！」

熊蔵の言葉と共に、割れたお銚子から放たれる酒臭が隼人を襲う。

隼人：ＬＰ／３６００⇒３１００

「くうぅぅっ！酒臭いぃぃぃっ！！」

酒臭さに苦しむ隼人に、更なる追い討ちが来る。

「覚悟しろ隼人！『酔いどれ剣豪　チェスト』で直接攻撃（ダイレクト・アタック）！

“奥義（おうぎ）！酒天斬殺剣（しゅてんざんさつけん）”っ！！！」

熊蔵の言葉と共に、剣豪は持っていた徳利の酒を口に含んだ後

己の大刀に吹き掛け、示現流独自の上段構えからの一撃必殺の剣技を

隼人にお見舞いした。

「うわぁぁぁぁぁぁぁっ！！」

隼人：ＬＰ／３１００⇒１００

その衝撃波と酒臭さに吹っ飛ばされる隼人だったが、ふらふらと立ち上がる。

「ま、まだなんだなぁっ！」

そして熊蔵は見た、隼人の瞳の奥にまだ諦めていない決闘者としての魂が燃えているのを。

「（ふん、少しはいい目をするようになったではないか）ターンエンドでごわすっ！」

「やばいよ、このままじゃ隼人くん……」

隼人の劣勢に焦る翔。

だが、他の３人は今の隼人同様、諦めてはいなかった。

「まだ諦めるには早いぜ翔。まだ俺達が渡したカード達がある！」

「うむ、決闘者はＬＰとデッキが０になるまで諦めてはいかんっ！」

「それに隼人の目は、まだ諦めちゃいない！」

３人がそう言う中、今まで沈黙していた大徳寺も口を開く。

「残りＬＰは１００、ここからが隼人君の正念場なのですにゃ。」

「にゃぉーん」

大徳寺の言葉に、その膝の上にいるファラオも鳴くのであった。

「俺のターン、ドロー！！」

引いたカードを見た瞬間、隼人は『はっ』と目を見開く。

「（このカードは――――）」

それは、全身緑色のボクサーの姿をしたカンガルー、デス・カンガルーのカードだった。

「（俺、この学校辞めたくないんだな！）」

視線を手札に戻すと、遊夜から貰ったカードと融合もあった。

「手札から魔法カード『黙する死者』発動！
この効果で自分の墓地から通常モンスター1体を特殊召喚できるんだぁ！
俺は『ビッグ・コアラ』にすっぞぉっ！！」

ビッグ・コアラ　☆7　地　獣族　ＡＴＫ／２７００　ＤＥＦ／２０００

隼人の場に、ビッグ・コアラが再び現れた。

「（俺、十代や翔、大吾郎、遊夜達と離れたくない！
このカード達に賭けるんだなぁっ！！）見せてやるぞ父ちゃん！
俺なんかの為に力を貸してくれた皆の力を！！」
「なに！？」

目を細める熊蔵を尻目に、隼人は手札の1枚に手を伸ばす。
「俺は手札から魔法カード『融合』発動！
場の『ビッグ・コアラ』と手札の『デス・カンガルー』を融合――
――
来い！『マスター・オブ・ＯＺ（オージー）』！！」

マスター・オブ・ＯＺ（オージー）　☆９　地　獣族　ＡＴＫ／４２００　ＤＥＦ／３７００

隼人の場に、全身緑色でボクサー姿の巨大なコアラが現れた。
「さらに手札からモンスターを召喚！来い！『コアラッコ』！！」

コアラッコ　☆２　地　獣族　ＡＴＫ／１００　ＤＥＦ／１６００

隼人の場に、ラッコの姿をしたコアラが現れた。
「（あのカード達は――――）」

そのモンスター達を見た熊蔵は、昨晩の出来事を思い出した。

昨晩、厠より帰る熊蔵の耳に聞こえてくる声に導かれ
熊蔵が立ち寄ったのは、十代達の部屋だった。
そのドアの隙間から覗いて見ると、十代、遊夜、大吾郎が立ち上がった所だった。

「よっし、それじゃちょっと待ってろ！」
「こっちも、確かアレが使えた筈…」
「うむ、俺も似たようなカードを……」

やがて3人は、それぞれのお目当てのカードを持って戻った。

「これもカンガルーだ。よければ使ってくれ。」

そう言い大吾郎が差し出したのは、デス・カンガルーのカードだった。

「効果もそこそこ使える方だと思うのだが……」
「おぉっ！そのカードがあれば、これが使えるじゃん！」

大吾郎のカードを見てそう言った十代が出したのは
融合モンスター、マスター・オブ・ＯＺのカードだった。

「攻撃力４２００！こいつを出すには『ビック・コアラ』と
大吾郎の『デス・カンガルー』が必要なんだ！
うまく使えりゃ絶対に勝てるぜ！」

そう言い十代は、隼人にカードを渡す。

「そんなすごいカード、俺にくれるのか？」

強力なカードを渡す十代に驚く隼人に、
十代は『ニコッ』と微笑みながら答える。

「俺な、お前に勝ってほしいんだよ。せっかく友達になれたのにさ。故郷に帰っちゃうんじゃ寂しいもんな。」

そんな十代に続き、遊夜もカードを差し出した。

「そういう事だぜ。さ、俺からはこれだ。丁度コアラのカードだしね。」

そう言い差し出したカードは、コアラッコのカードだった。

「攻撃力は低いけど、効果は強力だ。
十代の『マスター・オブ・OZ』と組み合わせれば
1ターンキルの究極コンボが出来るぜ！」

「遊夜……皆……っ！！」

4人の好意に、隼人は嬉し涙を流さずには居られなかった。

その光景を思い出した熊蔵は、息子は良き友を持ったなと微笑み
隼人に向かって言い放つ。

「ならば見せてみろ！お前の新たなる力を！お前を思う友の力をっ！！」

「おうっ！俺は『コアラッコ』のモンスター効果を発動！」

隼人の言葉と共に、コアラッコから薄蒼色の

酔いどれ剣豪　チェストからは赤い色のオーラが現れる。

「自分フィールド上にこのカード以外の獣族モンスターが存在する時、
相手モンスター1体の攻撃力を、エンドフェイズまで0に出来るんだなぁっ！！」

「なにぃっ！！？では、おいの『酔いどれ剣豪』は……」

酔いどれ剣豪　チェストＡＴＫ／３０００⇒０

老剣豪の体から、赤いオーラと共に力が抜けていく。

「行くぞぉっ！『マスター・オブ・ＯＺ』で『酔いどれ剣豪　チェスト』に攻撃！
“エアーズ・ロッキー”いいいいいいいっ！！」

マスター・オブ・ＯＺの拳が、二の太刀要らずの大刀を粉砕し
そのまま老剣豪を粉砕した。

熊蔵：ＬＰ／２７００⇒０

「ぐわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！？？」

直接攻撃も同じの威力に、熊蔵は膝をついた。

「お、お、俺の――」

それを見た隼人は、『ガッツ』と握り拳を作り声を上げた。

「俺の勝ちだあぁぁぁっ！！」

隼人叫びと共に、遊夜達も隼人に寄って来る。

「やったな、隼人！」
「すごいっすよ、隼人君！」
「うむ、見事なコンボだった。あれこそまさに一撃必殺の示現流だ！」
「これで隼人と分かれずに済んだな。」
「うん、うん！」

5人でじゃれ合う中、膝をついていた熊蔵が立ち上がり隼人達に接近する。

「隼人、おまんのいう力、見せてもらったど。まさか留年しとったおまんが
ここまでやるとは、父ちゃん思っとらんなんだぞ。」

そう言う熊蔵に対し、隼人は首を横に振る。

「この力は、俺だけじゃない。何度も言いてる通り、十代や翔
大吾郎に遊夜、皆の力なんだなぁっ！！」

その言葉に熊蔵は悟った。
目の前の息子は、たった1日足らずで友のお陰で1周りも2周りも大きくなった事を。

「ならばもう、父ちゃんから言うことはない！
この学園で、大切な友達達と学びなさいっ！！」
「うんっ！俺、がんばるよっ！！」

隼人は目の前の熊蔵と、遊夜達から貰ったカードの入ったデッキに心から誓うのだった。

『～第十章～　隼人退学!?脅威のちゃぶ台返し！　《終》』

～第十章～　隼人退学！？脅威のちゃぶ台返し！（後書き）

どうも、黒鋼です。今回はやけに早く出来ちゃいました。
今回は『一撃必殺！ちゃぶ台返し』の話を送りました。
自分としては、出番の少ないキャラの決闘もなるべく書きたいので
隼人が主役のこの話を書きました。
ただ隼人の決闘を重視した為、文乃や千世、希などの『迷い猫』キャラを
今回あまり出せませんでした。迷い猫好きの方々、すんません。
今後もどんな感じで行くのか全くの未定ですが、
末永～くよろしくお願いしま～す。

今回の最強カード『酔いどれ剣豪　チェスト』
☆８　地属性　戦士族　ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２２００　儀式モンスター
『酔剣伝承の儀式』により降臨。
このカードは『ちゃぶ台返し』の効果によって破壊されない。
このカードが儀式召喚に成功した時、以下の効果を得る。
●このカードの儀式召喚時、
デッキから『ちゃぶ台返し』を１枚手札に加える事が出来る。
●このカードの攻撃力は自分の墓地に存在する『酔いどれ』と名の付いた
モンスター１体につき２００Ｐアップする。

儀式召喚する事で、攻撃力アップの効果を得る上に
酔いどれデッキのキーカード『ちゃぶ台返し』をサーチし、
さらにこのカードの効果では破壊されない効果を持っている

酔いどれデッキの切り札です。
モデルは『戦国ＢＡＳＡＲＡ』の島津義弘。
なので今回出した『酒乱の徳利』も、義弘の持つ徳利をモデルにしました。
ちなみに、儀式モンスターにした訳は
隼人の切り札が融合モンスターなので、
それと対を成すように儀式モンスターにしました。

～第十一章～　制裁タッグ決闘！ＶＳ迷宮兄弟！！（前書き）

今回のタッグ決闘は、
作者の都合でタッグフォースルールにいたしますので、あしからず。
また、作者の都合（及び趣味）により漫画版ＧＸのカードや
未だカード化されてない５Ｄ'ｓのカード、
さらにはオリジナルカードが大量に出ますので、あしからず。

～第十一章～　制裁タッグ決闘！ＶＳ迷宮兄弟！！

隼人の退学を賭けた決闘から数週間後、デュエル・アカデミアの廊下に
久しくデュエル・アカデミアに戻ってきた男が居た。
千世率いる梅ノ森財閥の追跡を逃れる為に
今まで制裁決闘の相手を探すという名目で雲隠れしていたクロノスである。
校舎の廊下で談笑しているオシリス・レッドの生徒達を睨みつけながら
クロノスは廊下を歩いて行く。

「（まったく、なんでこのデュエルエリートのためのデュエル・アカデミアーで、
ドロップアウトボーイズを受け入れないといけないーノネ！
特にあの遊城十代！）あのような輩は排除あるのみ、デスーノっ！！」

心で思っていたことがいつの間にか声になっているクロノス。
そんなクロノスを見たレッド生徒がそそくさと去っていく事にも気づかず、
クロノスはこれからの事を考え思わず不気味に微笑む。

「クシシシシッ！しかし、遂にこの時が来たのーネ！
待っていなさいっ！ドロップアウトボーイめっ！！」
「クロノス教諭っ！」

不意に背後からクロノスを呼び止める声が聞こえ、クロノスは後ろを振り向く。

そこには、万丈目がいた。

「お～ぅ、シニョール万丈目。一体何事なノ～ネ？」
「十代達とのタッグ決闘、俺にやらせてくださいっ！」
「君に？」

万丈目の申し出に眉をひそめるクロノス。
「今度こそ、この手で奴らを叩き潰して見せますっ！！」
力強く宣言する万丈目だが、クロノスは涼しい顔で言い放つ。

「その必要はありませんーノ！」
「えっ！？」
「すでにタッグ決闘に相応しい、強力な決闘者を既に呼んであるんですーのネ！
それより～モ、君は自分の心配をした方がいいデスーネ。
このままだと、ラー・イエローに落ちることだってあり得ますーノ。」
「ぐっ！」

クロノスの言葉に、万丈目が悔しそうに歯軋りを立てる中
クロノスはそのまま制裁決闘の準備の為にその場を去ろうとする。

「んげぇっ！！」

だが、丁度そこに前から千世がやって来るのを見てしまい
顔を真っ青にするクロノス。

「むっ！」

一方の千世も、クロノスの存在を確認し不機嫌そうな視線を向ける。

「（ま、まままままま、まずいノーネ！！シニョール梅ノ森と～ハ、この決闘で決着がつくまで会いたくなかったノーニっ！！）」

心の中で悲痛の叫びを響かすクロノス。
だが、ここで意外な事が起きた。
千世はクロノスを憎憎しげに睨みつけただけで、そのまま去って行ったのだ。
そのあまりにも意外な出来事に、クロノスはしばらくの間ポカンとしていたという事は全くの蛇足である。

所変わってこちらは、オシリス・レッド寮の十代達の部屋。
十代と翔は、デッキの最終チェックをしていた。

「いよいよ今日だなぁ。」

そんな2人に声を掛けるのは、皆のおかげで父に勝った隼人である。

「おうっ！頑張ろうぜ、翔！」
「うん、きっと。」

いつでも決闘を楽しもうとする十代とやや緊張気味の翔。
デッキのチェックをする中、翔は1枚のカードを手に取る。
それは、兄である亮より渡されながらも使用を禁じられたパワー・ボンドだった。

「（僕、今度こそやるよ。決闘者として、お兄さんの弟として。そして――）」

翔は楽しそうにデッキを組む十代に視線を向け、
次に決闘場で待ってくれてるであろう遊夜の居ると思われる
決闘場の方へと視線を向ける。

「（僕に立ち向かう勇気と、諦めない不屈の心を教えてくれた
アニキと遊夜くんの為にも恥ずかしくない決闘をして見せるっ！！）
」

改めてそう決心した翔は、パワー・ボンドをデッキに入れ
デッキをデッキケースに入れると立ち上がった。

「アニキ！絶対勝とうねっ！」
「おうっ！そろそろ行こうぜっ！！」
「がんばれよ……あれ？」

2人を見送ろうとした隼人だったが、不意にある事に気づく。

「どうした隼人？」
「いやぁ、大吾郎はどうしたんだなぁ？もう行ったのか。」

そう、隼人が気づいたのは今回の制裁決闘でもう1人シングル決闘
で受ける
古風な生徒　大吾郎がいない事だった。

「あぁ、大吾郎なら『決闘を前に身も心も海で清めてくる』って言
ってたぜ。」
「何で海で？」
「さぁ？」

時々、大吾郎という人物の事が分からなくなるメンバーであった。

一方、レッド寮近くの海岸でフンドシ一丁で海に浸かる大吾郎の姿があった。

「……うむ、清めの儀式、精神統一、完了！！」

清めを終え、服に着替えようとする大吾郎。

「……む？」

そんな中、ふと大吾郎の鼻に香ばしい匂いが漂ってくる。
その匂いに導かれるように、大吾郎は匂いのする方へと歩いて行く。
しばらく歩くと、そこには誰がやったのか分からないが
焚き火で魚を焼いていた。

「うむ、いい匂いだ……しかし誰がこんなモノを……」

そう言いながら、焼かれている魚に目をやる大吾郎。
焼いている魚は、どれもこの辺りでは中々釣れない魚ばかりだった。
月に一度のエビフライ以外は全部メザシ定食のレッド寮の食事を
人生の修行と割り切っていた大吾郎だったが、
これ程の魚達を見ては、さすがにヨダレが出てくる。

「う、むぅ…、美味そうだな……」
「ん？お前　何しとるんじゃ？」

不意に背後から声が聞こえ、後ろを振り向く大吾郎。
そこには1人の男が居た。年齢は恐らく大吾郎より上で、

黒いボサボサしたワイルドな髪に、海パン一丁、手には銛を持ち
その銛には魚が一匹刺さっていた。

「てかお前、何でフンドシ一丁なんじゃ？」
「いや、そう言うお主こそ、何故海パン一丁なのだ？」

フンドシ一丁の大吾郎と海パン一丁の男、
どっちもどっちの格好で互いに首を傾げていたが、
その沈黙は『グギュルウゥゥゥゥ』という、２人の腹の音によって
破られた。

「うおぉ、そういや結構泳いだから、ハラ減ったの。」
「むぅ、そういえばまだ朝食をとってなかったな……」

そう言い互いに顔を合わせる２人。

「……一匹、貰っていいか？」
「ん？？？、まぁ少し位ならええぞ。」

そう言い男は焼いていた魚の一匹を大吾郎に手渡す。
余程ハラが減ってたのか、大吾郎は手渡された魚に豪快にかぶり付
く。

「おほぉー、いい食いっぷりじゃのぉーっ！」

そんな大吾郎を見ながら、男も魚に食らい付く。

「ん～うまいぜよ！」
「うむ、素材の味が生かされてるな。」

そう言い合い魚を食べて行く2人。

「ところでお前、このデュエル・アカデミアの生徒なのか？」

不意にそんな事を聞かれ、大吾郎は『コクリ』と頷く。

「んじゃぁ、何でフンドシ一丁なんだ？」

「うむ、決闘の前に身も心も海で清めていたのだ。」

「おっ、いいのぉ！海には清めに効く天然の塩分があるんじゃ！海で清めるってのはいいぜよ！所で、その決闘はいつやるんじゃ？」

「む？」

男の言葉に、大吾郎は何やら考え込みそしていきなり何かを思い出しと用に目を丸くする。

「おいっ！今何時か分かるか！？」

「ん？９時、１０分前ってとこじゃな。」

「なにっ！？」

それを聞いた大吾郎は、慌てて服を着用しだす。

「もうすぐ時間だ！すまんがこれにて！後　魚美味かったぞ！！」

そう言い大吾郎は、アカデミアへ向かって走り去って行った。

「何なんじゃアイツ？……ま、いいか。」

そう言い男は、銛を手に再び海へと潜って行った。

制裁決闘が行われる決闘場に、一際目立つ席があった。
言うまでも無く千世の特等席である。

「まだ始まらないの？」
「千世様、まだお時間になっておりません。」
「それにまだ、十代様達がご到着なされてません。」
「おっそいわねぇ～」

メイド達の言葉にイライラする千世。
だが、千世がイライラしているのは決闘が始まらない事以外にもあった。
それは、決闘場の真ん中でご機嫌そうな表情のクロノスだ。
この制裁決闘で十代を含めたレッド生徒を追い出せる事にかなりご機嫌らしい。
それが千世は気に入らなかった。
千世は、クロノスが偽りの報告をした事を知っているが故にその真実を話す事が出来ないのが歯痒いのだ。

「（まぁいいわ、この決闘で十代達が勝ちアンタの野望が砕けた時、その時こそあたしの恐ろしさを見せて上げるわ！にょーほほほほほほほほほっ！！）」

心の中で、クロノスへの仕打ちを思案する千世であった。

所変わってこちらは、千世の特別席からやや離れた所に座る遊夜、家康、文乃、希、叶絵、明日香の姿があった。

「いよいよか、どんな決闘者が出てくるか楽しみだな。」

「あんたねぇ、この決闘は十代達の退学が掛かってるのよ、分かってるの！？」

呑気な遊夜を叱咤する文乃だったが、相変わらず遊夜は余裕の表情だった。

「大丈夫さ、俺らだってアレだけ翔をワンツーマンで鍛えたんだ。絶対勝てる！」

「まっ私達もやれる事はやったんだし、遊城っち達を信じようＺＥ（ゼ）！」

遊夜に続いて、叶絵も十代達が勝つ事を信じて疑わない。

「ならいいけど……」

「でも、油断は禁物。」

文乃に同意するように希が答える。

「確かに、対戦相手が分からない以上、油断は出来ないわ。」

希の言葉に同意するように明日香も答える。

「それに、大吾郎くんはシングル決闘だけど十代と翔くんはタッグ決闘。

タッグ決闘において、１人１人の決闘者の力はもちろんパートナーとのコンビネーションが重要。」

「あの２人は信頼こそあるが、決闘者としての実力には差が有り過ぎてる。」

明日香の言葉を続けるような声に、一同が後ろを振り向くと

そこには三沢がいた。

「よぉ三沢、来てたのか。」

「あぁ、こんなにすごそうな決闘、見ないと損だと思ってね。」

そう言い皆の隣の席に座る三沢。

「ただ、翔のパートナーはあの遊城十代だ。
彼の実力はハッキリ言って未知数。どんな奇跡を起こすか分からない。」

「あはは、それは言えてる。」

三沢の言葉に笑顔で答える遊夜を、三沢は苦笑しながら見つめる。

「（ま、実力が未知数なのは遊夜、君もなんだけどな。）」

さらに所変わって、遊夜達が座っている所から離れた所にいた万丈目。
退学が懸かった決闘だというのに笑顔を翔と大吾郎向けながら
決闘場に入って来る十代が目に映ると、
誰も座っていない前の席を思い切り蹴飛ばした。

「遊城十代、貴様はこの俺の手で握りつぶしてやりたかったのに！」

万丈目の脳裏に、実技試験で学生皆の前で十代に敗れた時の事が蘇っていた。

またまた所変わって、遊夜達が座っている所から離れた所に隼人がいた。

「十代、翔、大吾郎、絶対勝って寮に帰ろうな。」

そんな思いで、隼人は決闘場に入って来る十代達に視線を向けていた。

「む、隼人が居るぞ。」

決闘場内に入ってきた十代達の目に、手を振る隼人の姿が映る。

「おっ。あっちには遊夜達が居るぜ！おーい！」

十代と大吾郎が隼人や遊夜達に手を振る中、
翔は観客席の中でも特に離れた所に居るある人物に視線を向ける。
彼の兄、亮である。

「（見ていてお兄さん！今日こそ、決闘者としての第1歩を進んで見せるっ！！）」

様々な思いが交差する中、十代達が入ってきた事を確認したクロノスが
マイクを手に声を上げる。

「ではコレより、タッグ決闘を始めるーノですネ！」

クロノスの声と共に、校長の鮫島が声を上げる。

「それで対戦相手は？教員かオベリスクブルーの生徒かね？

まさか君がまた相手をするのかね？」
「あ、何なら私がしましょうかぁ～？」

鮫島に続き、空気を読まない乙女が声を上げるがクロノスは首を横に振る。

「ノンノンノーン。コレは彼らが立ち入り禁止区域に入った校則違反の罰則ーヲ
審議するためーノ、決闘デスーノ。
手はそれ相応ーノ決闘者でなければ意味ありませんーノ！そこで！！」

クロノスは言葉を一旦区切り、手を高らかに上げる。

「不心得者を叩きのめすべーク、伝説ーノ決闘者達を呼んでありますーノ！！」

クロノスがそう言った瞬間、
突如２つの影が空中バク転しながら決闘場へと飛び出て来た。

「我ら流浪の番人！」
「迷宮兄弟！」

カンフー映画に出てくるような服装に、
それぞれの額に『迷』と『宮』の文字を入れた
スキンヘッドの２人の決闘者は迷宮兄弟と名乗った。

「彼らはあの、デュエルキング武藤遊戯とその友である城之内克也と対戦した事がある伝説の決闘者なのですーノネ！」

そう、この2人はかの決闘者（デュエリスト）の王国（キングダム）で
遊戯と城之内と激戦を繰り広げた、あの迷宮兄弟である。

「聞いたことがあるわ。その無敵のコンビネーションで
デュエルキングを苦しめたと言う兄弟決闘者！」
「そんな相手なんて、十代達が勝てる可能性は更に下がった。」

迷宮兄弟の登場に、苦悶の表情を浮かべる明日香と三沢。

「にゃあ、伝説の決闘者、すごい。」
「て言うかこんなの完全に勝ち目が無いじゃないの！！」
「う～ん、これは十代っち達不利かぁ～？」
「こりゃやべえぞ。」

迷宮兄弟の正体に、希達も驚きの声を上げる。

「伝説の決闘者！いいなぁ、俺も決闘したかったなぁっ！！！」

例によって例の如く、遊夜は違った意味で声を上げていた。

所変わって、特等席に座っていた千世も驚きを隠せなかった。

「伝説の決闘者！？きいぃぃぃぃ、あの金髪オカッパ！
どう考えても十代達を退学させる気満々じゃない！！」

クロノスが用意した迷宮兄弟に怒りを隠せない千世。

「千世様、落ち着いてください。」

「そうです、まだ負けると決まった訳ではないですよ。」

佐藤と鈴木の2人が何とか千世を宥める。

「くぬぬぅ？？？？？？っ！あのオカッパ教師めぇ？？？っ！！
この決闘が終わったら見てなさいよおぉっ！！」

怒りに満ちた目で、ニヤニヤ笑うクロノスを睨みつけるのであった。

一方、決闘場に来ている者達が迷宮兄弟に驚いている中
万丈目はその表情を愉悦に歪めていた。

「ふっふふふふ、これはいい。皆の前で無様に負けるがいい、遊城十代。」

十代と翔、そして大吾郎を前にして迷宮兄弟は言い放つ。

「お主等に怨みはないが、」
「故あって対戦する。」
「我らを倒さねば、」
「道は開けぬ。」
「「いざ、勝負っ！！」」

この迷宮兄弟の言葉に対し、全く動かない十代達にクロノスはご機嫌だった。

「（ビビッてる～ノ、あいつ、ビビッてる～ノ～）」
「これはまたずいぶん思い切ったことを」

不意に鮫島のそんな声が聞こえ、クロノスが視線をズラすとそこには迷宮兄弟を食い入るように見つめる鮫島と遊夜の姿があった。

「本物だ、本物だぁ」
「すっげぇ！なぁ十代、翔！今からでもいいから俺と代わってくれ！」
「校長！？それにセニョール遊夜まで何いってるノーネ！？」
そう言い2人にツッコミを入れるクロノス。

「と言うかいつの間に！？家康、アンタの隣に居たんじゃなかったの！？」
遊夜がいつの間にか移動している事に、文乃は驚いていた。
「アイツ、時々　人間離れした能力　発揮してたからなぁ……」
そんな文乃に、家康は遠い日を見るような目付きで答えた。

「うむ、おもしろい。この決闘楽しみですな。」
「確かに、十代もやる気十分ですね。」
そう言いクロノスによって観客席に戻された鮫島と遊夜は、視線を迷宮兄弟に感動する十代に向ける。

「あの武藤遊戯、城之内克也と闘った伝説の決闘者か！
くぅぅ～、ワクワクするぜぇっ！！」

十代は両の拳を握り締めてそう言い放つ。
それをみたクロノスは『懲りない奴だ』と心の中で思いながら腰を上げ、
決闘場の真ん中に立つ。

「では両者位置についテ……」
「あの、クロノス教諭。」

いよいよ決闘が始まると思われた時、クロノスに声を掛ける者が居た。
大吾郎である。

「何なノーネ。」
「十代達の相手は分かったが、俺の相手は？」

大吾郎は、そんな疑問をぶつける。
そう、迷宮兄弟は十代と翔のタッグ決闘の為に呼んだ決闘者。
大吾郎のシングル決闘の為の決闘者は、姿がないのだ。

「ふむ、確かにその通りだね。クロノス教諭、その辺りはどうなんだね？」

大吾郎に続くように尋ねて来る鮫島に、
クロノスは『ニカッ』と微笑みがなら答える。

「心配御無用っ！ちゃんと呼んであるノーネ！
しかっし、彼の決闘はタッグ決闘の後なノーネ！！それまで待つノーネ！！」
「うむ、承諾した。」

そう言い大吾郎は、遊夜の座る観客席の方へと行く。

「では、改めまし～テ。両者位置についテッ！！」

クロノスの言葉と共に、それぞれの位置につく決闘者達。
その際、不満そうな翔に十代は声を掛ける。

「翔！絶対勝って寮でパーティー上げようぜ！」
「アニキ……うん！！」

十代の励ましに翔は強く頷く。
ここで、クロノスは決闘について説明をする。

「両者の共通ＬＰは８０００、ルールはタッグフォースルールで行うノーネ！！
では――――――！」

「「「「決闘っ！！」」」」

十代＆翔：ＬＰ／８０００
迷宮兄弟：ＬＰ／８０００

ここに、制裁タッグ決闘が始まった。先行は翔からだ。

「僕のターン！ドロー！！」

カードを引いた翔は、手札を見ながら思考を凝らす。

「（落ち着け、そして思い出すんだ。マンツーマンコーチで教えてくれた
遊夜くん達の助言を！）」

翔の脳裏に、遊夜達との特訓の日々が蘇る。

「翔、お前最初のターンでまず何を出そうとする？」

特訓の際、遊夜がそんな事を聞いてきたので翔は答える。

「もちろん、攻撃力の高いモンスターを出すさ。そして攻撃を……」
「それで前に『パトロイド』の攻撃を止められなかったけ？」
「うっ」

痛い所を突かれ、表情が崩れてしまう翔に遊夜は優しく教える。

「いい？攻撃しないと勝てないけど、まずは守りを固めて
相手の出方を見るのも大事だぞ。」

「（そうだ、まずは守備で様子見だ！）」

遊夜の助言を思い出した翔は、手札に視線を向け1枚のカードを手に取る。

「僕は『ジャイロイド』を守備表示で召喚！」

ジャイロイド　☆３　風　機械族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１０００

翔の場に、目がついた飛行機型のモンスターが現れた。

「（『ジャイロイド』は１ターンに１度、戦闘では破壊されないモンスター！
まずはこれで守りを固める！）さらに、伏せ（リバース）カードを１枚セットしターンエンド！」

翔のエンド宣言と共に次にカードを引くのは額に『迷』の文字を持った迷宮兄弟の兄だ。

「私のターン、ドロー！
私は『機動砦（きどうとりで）のギア・ゴーレム』を守備表示で召喚！」

機動砦（きどうとりで）のギア・ゴーレム　☆４　地　機械族　ＡＴＫ／８００　ＤＥＦ／２２００

迷宮兄弟の場に、巨大な楯を備えた機械型のゴーレムが現れた。

「さらにカードを１枚伏せ、ターンエンド。」
「（相手の方も、守備で様子見かな？）」

迷宮兄弟の戦略が読めない翔がそう考える中、今度は十代がカードを引く。

「俺のターン！ドロー！！」

引いたカードと手札状況を確認した十代は、即座に最初の一手を思いつく。

「俺は魔法（マジック）カード『融合』発動！！
手札の『ザ・ヒート』と『レディ・オブ・ファイア』を融合――――
現れろ！『Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フレイム・ブラスト』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　フレイム・ブラスト　☆８　炎　炎族　ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１６００

十代達の場に、炎の如く燃え滾るヒーローが現れた。

「いくぜっ！『フレイム・ブラスト』で『機動砦のギア・ゴーレム』を攻撃！
喰れ！“バーニングファイア”っ！！」

フレイム・ブラストの胸部より放たれた炎が、ギア・ゴーレムに迫るが
迷宮兄弟の兄は、全く顔色を変えなかった。

「甘いわぁっ！手札から『牙城（がじょう）のガーディアン』を墓地に送り効果発動！

自分の場のモンスターの守備力をエンドフェイズまで１５００Ｐアップさせる！」

迷宮兄弟の兄が墓地に送った巨大な城を支える戦士の力がオーラとなり、
ギア・ゴーレムの力となる。

機動砦のギア・ゴーレム　ＤＥＦ／２２００⇒ＤＥＦ／３７００

「げぇっ！？マジかよっ！！」
「フフフ、バトルは続行させれる！」

フレイム・ブラストの炎はギア・ゴーレムの楯に阻まれ、
その炎は十代と翔へと反射される。

「ぐわぁっ！」
「うわぁっ！」

十代＆翔：ＬＰ／８０００⇒６６００

この攻防を見ていたクロノスは機嫌よく笑っていた。

「さすがドロップアウトボーイズ、考えなしデスーネ。
単純な攻撃などあの２人には通用しないーノネ！」
「そんな言い方はよくないよクロノス教諭。」
「まだ決闘は始まったばかりだ。」

そんなクロノスにツッコミを入れるように、鮫島と遊夜が声を上げる。
その声に不服そうな表情をするクロノス。
「（ぐぬぬぬぅ～、何故この2人はあんなドロップアウトボーイズの肩を持つノーネ！？）」
クロノスがそんな事を心の中で嘆く中、決闘は続けられる。

「あっはははは、失敗失敗。俺はカードを1枚伏せてターンエンド！」
十代のエンド宣言と共に、今度は迷宮兄弟・弟のターンだ。
「私のターン、ドロー！私は『カイザー・シーホース』を攻撃表示で召喚！！」

カイザー・シーホース　☆4　光　海竜族　ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１６５０

迷宮兄弟の場に、深海の底にいるような海魚のような戦士が現れた。
「（あの男、自分の攻撃失敗にも全く動じんとはな。だが、これならどうだ！！）
さらに手札から魔法カード『生け贄人形（いけにえドール）』！
このカードは自分の場のモンスター1体を生け贄に、手札から☆7（レベル）のモンスター1体を特殊召喚出来る！」

そう言い弟は兄に視線を向ける。

「兄者、力を借りるぞ。」

「あぁ、存分に使え。」

そう言い合い頷いた迷宮兄弟の内、弟は兄の出したギア・ゴーレムを指差す。

「私は『機動砦のギア・ゴーレム』を生け贄に――――いでよ！『水魔神（すいましん）ースーガ』！！」

水魔神（すいましん）ースーガ　☆７　水　水族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２４００

迷宮兄弟の場に、水と書かれた青い鬼の様なモンスターが現れた。

「だがこの効果で特殊召喚したモンスターはこのターン、攻撃は出来ない。

私はカードを１枚伏せ、ターンエンド。」

エンド宣言と共に、迷宮兄弟は十代と翔に言い放つ。

「お前たちに――――――」

「――――――タッグ決闘の真髄を」

「「見せてくれようっ！！」」

その気迫に、翔は圧倒されてしまっている。

「そんな……いきなりこんなモンスターを召喚して来るなんて……」

「心配すんなよ翔！」

圧倒される翔に、十代はいつも通りの表情で語りかける。

「圧倒されそうになっんなら、遊夜との特訓を思い出せ！そしてデッキを信じろ！

そーすりゃあ道は開けるぜ！」

「アニキ……」

こんな時でも自分に声を掛けて励ましてくれる十代に、翔は力強く頷く。

「うん！（そうだよ、僕の為に特訓に付き合ってくれた遊夜くん、こんな僕を信じてくれてるアニキや皆、そして……）」

翔はふと、観客席に居る兄である亮に視線を送る。

「（お兄さんに僕の今の力を見せるんだっ！！）」

「いきなりマズイ展開になったな。」

決闘を見ていた三沢がそんな事を呟く。

「ん？どういう事だい、三沢っち。」

「三沢っちて……あの迷宮兄弟のデッキはタッグ決闘用に作られて

いるデッキだ。
しかも相手はあの伝説の決闘王を追い詰めた程のタッグ決闘のエキスパートだ。」
「それに対し、十代はともかく翔君はタッグ決闘は初心者。
しかもデッキは全く違うタイプのデッキ。
即席のタッグじゃ、勝てる見込みは無いわ。」

三沢に続き、明日香も同じような事を言う中、ただ1人否定する者がいた。

「にゃあ、私はそうは思わない。」
「希？」

不意に発した希の言葉に首を傾げる文乃。

「翔はずっと、十代と遊夜と練習してきた。だからきっと大丈夫。
私は仲間を信じてる。」
「希……」
「うんうん、良い事言うね希ちゃん！」

希の言葉に文乃と叶絵が感心する中、翔がデッキに手を伸ばす。

「僕のターン！ドロー！！」

翔はカードを手札に加えた後、
決闘盤のボタンを押して十代の伏せカードを確認する。

「（アニキが伏せたのは、『禁じられた聖杯』。
攻撃力を上げる速攻魔法か。）」

それを確認した翔は、手札のカードに手を伸ばす。

「僕は魔法カード『融合』を発動！
手札の『スチームロイド』と場の『ジャイロイド』を融合して――
――
『スチームジャイロイド』を攻撃表示で融合召喚！！」

スチームジャイロイド　☆６　地　機械族　ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／１６００

翔の場に、巨大なプロペラを持つ機関車のモンスターが現れた。

「融合で上級モンスターを召喚したか。だが、攻撃力２２００では我らの『水魔神－スーガ』には及ばんぞっ！」
「それはどうかな？バトル！
『スチームジャイロイド』で『水魔神－スーガ』を攻撃！」
「何！？」
「攻撃力２２００のモンスターで攻撃力２５００の『水魔神－スーガ』を攻撃するだとっ！？」

翔の攻撃に、迷宮兄弟だけでなく周りのギャラリー全てが驚く中翔は十代に視線を向ける。

「アニキ、使わせてもらうよ！」
「おうっ！どんと使え！！」

十代に返事に『おうっ！』と頷いた翔は決闘盤のスイッチに指を伸

ばす。

「ここで、アニキの場の伏せカードをオープン！
『禁じられた聖杯』っ！！
モンスター1体の攻撃力を４００Ｐアップさせ、そのモンスターの効果を無効にする！
これで『スチームジャイロイド』の攻撃力を４００Ｐアップ！」

スチームジャイロイド　ＡＴＫ／２２００⇒ＡＴＫ／２６００

「いけぇっ！“ハリケーン・スモーク”っ！！」

煙突から大量の煙を出しプロペラで竜巻を起こしながら、スチームジャイロイドはスーガに突進して行く。
だが、翔の考えより相手の防衛術は上だった。

「あまいわぁっ！『水魔神－スーガ』のモンスター効果発動！
リフレクション！“水魔昇壁”っ！！」

迷宮兄弟・弟の声と共に、スーガの口より放たれた大量の水がスチームジャイロイドを襲う。

「『水魔神－スーガ』は攻撃モンスターの攻撃力を1度だけ0に出来るのだっ！」
「そ、そんな……」

迷宮兄弟の言葉に、自分の失敗に膝を付きそうになる翔。
だが、そんな翔に声を発する十代。

「翔！諦めんな！！遊夜との特訓を思いだせっ！！」

「アニキ……」

十代の言葉に、翔はこれまでの遊夜との特訓を振り返りだす。

「あぁ、また負けた……」

特訓の際に遊夜と決闘して負けてしまった翔に、遊夜は近づき翔の手札を確認する。

「翔、今の勝負、このカードを出してれば何とかなってたぞ。」

「えっ！？あぁ…」

遊夜の言葉に益々落ち込む翔だったが、そんな翔に遊夜は優しく教える。

「いいか翔。ピンチの時こそ慌てるな。ゆっくりでいいから落ち着いて、
手札や場の確認をしろ。きっと打開策がある筈だ。」

「手札に、打開策……」

遊夜の言葉を思い出し、翔は手札を確認する。
その中に、翔はたった1つだけの打開策に気づく。

「（そうか！）」

「何をしても無駄だ！貴様の『スチームジャイロイド』の攻撃力は

0になり
『スーガ』によって破壊されるのは決定的だ！！」

スーガの水が、スチームジャイロイドを苦しめる中
翔は意を決して、手札のカードを発動する。

「そうはさせないっ！手札から速攻魔法『融合解除』を発動！
『スチームジャイロイド』を分離――――
蘇れ！『ジャイロイド』！『スチームロイド』！！」

ジャイロイド　☆３　風　機械族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１０００

スチームロイド　☆４　地　機械族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１８００

翔の場に、ジャイロイドと目の付いたおもちゃの機関車が現れた。

「（でもここからどうする！？『スチームロイド』の効果で攻撃力がアップしても
『水魔神－スーガ』は倒せない！僕のモンスターじゃぁ……）ん？」

不意に翔は、自分の場のモンスターをよく見て、大事な事に気づく。
この決闘が、タッグ決闘と言う事に。

「（そうか！）バトル続行！僕は『フレイム・ブラスト』で
『水魔神－スーガ』を攻撃！『水魔神－スーガ』はもう効果は使え

ない筈だ！」

そう言い放つ翔に対し、迷宮兄弟は『ふん』と相変わらず余裕だった。

「それがどうした！攻撃力では『水魔神－スーガ』の方が上だ！」

「それはどうかな！」

そう言う翔の視線の先には、
体中を赤く燃え滾らせるフレイム・ブラストの姿があった。

Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ブラスト　ＡＴＫ／２３００⇒ＡＴＫ／３３００

「何っ！？」

「攻撃力が上がっただとっ！？」

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ブラスト』は、水属性モンスターと戦闘する時、
その攻撃力を１０００Ｐアップさせる！」

翔の言葉と共に、フレイム・ブラストは自身の限界温度に達し、
胸元より灼熱の業火を打ち放つ。

「いけっ！“バーニングファイア”っ！！」

フレイム・ブラストより放たれた業火が、水の魔神を蒸発させた。

「「ぐわあぁぁっ！！」」

迷宮兄弟：ＬＰ／８０００⇒７２００

ＬＰが削られた衝撃波に苦しむ迷宮兄弟に、更なる追い討ちが迫る。

「さらに！『融合解除』で特殊召喚された僕のビークロイドにはまだ攻撃宣言が残っている！
『スチームロイド』！『カイザー・シーホース』を攻撃だっ！！」

翔の命と共に、スチームロイドがカイザー・シーホースに突進しだす。

「この時！『スチームロイド』のモンスター効果発動！
このカードが相手モンスターを攻撃する時、攻撃力が５００Ｐアップする！」

スチームロイド　ＡＴＫ／１８００⇒ＡＴＫ／２３００

攻撃力を上げたスチームロイドの突進に、
カイザー・シーホースは耐え切れず押し潰された。

「「ぬうぅっ！！」」

迷宮兄弟：ＬＰ／７２００⇒６６００

「「（一気に畳み掛ける！）いけぇっ！『ジャイロイド』で直接攻撃（ダイレクトアタック）！」」

翔の命と共に、ジャイロイドがプロペラを回転させ上空より迷宮兄弟を狙う。
だが、そう何度も攻撃を許す程　迷宮兄弟は甘くなかった。
「させぬわっ！伏せカードオープン！『リビングデッドの呼び声』！蘇れ！『水魔神ースーガ』！！」

水魔神ースーガ　☆7　水　水族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２４００

迷宮兄弟の場に、再び水の魔神が現れた。
「くっ！バトルは中断！ターンエンド！！」

この攻防に、クロノスは唖然としていた。
「な、何故ナーノ！？あの超ダメダメドロップアウトボーイの丸藤翔が、
伝説の決闘者相手に先制をとるなんーテっ！！？」
そう呟くクロノスを筆頭に、この会場の誰もが翔の反撃に驚いていた。

「うむ、中々いい反撃をしましたねぇ、翔くんは。」
「当然ですよ♪」
鮫島の言葉に対し当然だと言い切る遊夜。

「翔には俺や十代達がワンツーマンでコーチしたんです。
絶対勝ちますよ。」

遊夜の言葉に『ほぉ』と感心する鮫島と
『余計な事を～っ！！』と心の中で喚くクロノス。

「特訓を？」
「そぉっ！心優しい遊っちと十代っちがワンツーマンでコーチしたってわけ！」

所変わった席で、翔の反撃に驚く三沢に叶絵がいつもながらのハイテンションで
翔の反撃の訳を話していた。

「にゃあ、翔がんばってた。」
「あの～、俺も一様手伝ったんですよ？翔との特訓。」
「あんたはデッキ調整する内に
翔と『ブラック・マジシャン・ガール』についての口論になっただけじゃないの。」

家康の言葉に鋭いツッコミを入れる文乃だったが、
そんな事でへこたれる家康ではない。

「へっ、同じ『ブラマジガール』を愛する者同士の親交を深めてリラックスさせてたんだよ！
二次元美少女限定アイテムである縞パンを着用してる
三次元女には分からねぇよぉーだ！」
「二回死ねえぇーっ！！」

文乃の怒鳴りと共に宙へ舞い上がる家康。
その家康を見て『何事か』と首を傾げる大吾郎と隼人なのであった。

「やったな翔！」
「へへへ、うん！これもアニキや遊夜くんの特訓のお陰だよ！」

お互いに微笑み合う十代と翔とは対照的に、
2人を憎々しげに睨み付ける迷宮兄弟がいた。

「おのれぇぃっ！私のターン！！」

怒りに燃えながらカードを引いた迷宮兄弟・兄。

「罠発動！『リビングデッドの呼び声』！」
「またっすか！？」

迷宮兄弟・兄が発動したカードに驚く翔。
そう、本来リビングデッドの呼び声はデッキに1枚しか入れられない制限カード。
だが、これはタッグ決闘という特殊な決闘故に使用可能な戦法だった。
先程発動したリビングデッドの呼び声は弟の、
今発動したのは兄が先程のターンで伏せていたカードだ。
これにより、本来デッキに1枚しか入らない筈のカードを
2枚使用可能となったのだ。

「私は『リビングデッドの呼び声』により、

弟の墓地より『カイザー・シーホース』を攻撃表示で特殊召喚！！」

カイザー・シーホース　☆４　光　海竜族　ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１６５０

迷宮兄弟の場に、再びカイザー・シーホースが現れた。

「『カイザー・シーホース』は、光属性モンスターを召喚する場合、このモンスター1体で2体分の生け贄にする事が出来る！
私は『カイザー・シーホース』を生け贄に捧げ――――――
いでよ！『雷魔神（らいましん）－サンガ』！！」

雷魔神（らいましん）－サンガ　☆７　光　雷族　ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２２００

迷宮兄弟の場に、顔に雷と書かれた雷様の様な魔神が現れた。

「上級モンスターが2体……」

サンガーの登場に驚く翔だったが、迷宮兄弟の反撃はまだ終わらなかった。

「さらに手札から魔法カード『三魔神集結（さんましんしゅうけつ）！』を発動！！
この効果により、相手はデッキからカードを1枚ドローする！
タッグフォースルールにより、カードを引くのはお前だ！」

指名された翔は、カード効果に疑問をおもながらもカードを引く。

「そして、我らの場に『三魔神』の内2種類が揃っている時、
デッキから最後の1体を特殊召喚する！」

迷宮兄弟・兄の言葉と共に、
サンガーとスーガの間に黄色と青の電磁波が発生する。

「稲妻と水に導かれ、姿を現せ！『風魔神（ふうましん）ーヒューガ』！！」

風魔神（ふうましん）ーヒューガ　☆7　風　魔法使い族　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２２００

迷宮兄弟の場に、額に風と書かれた疾風の魔神が現れた。

「すっげぇ――――っ！！いっきに上級モンスター3体かよっ！！」

迷宮兄弟の場に揃った三魔神に興奮する十代だが、
迷宮兄弟の攻めはまだ終わってなかった。

「くっくくく、これで揃った！」
「今見せてやろう、我ら究極のモンスターをっ！！」

迷宮兄弟の言葉と共に、三魔神達が光に包まれて行く。

「我らの場に、
『雷魔神ーサンガ』『水魔神ースーガ』『風魔神ーヒューガ』の3体が揃った時！

この3体を生け贄とし『ゲート・ガーディアン』を特殊召喚するっ！！」

迷宮兄弟の言葉と共に、三魔神達が合体し1体の巨大な魔神へと姿を変えていく。

「現れよ！」
「迷宮の守護神！」
「「『ゲート・ガーディアン』！！」」

ゲート・ガーディアン　☆１１　闇　戦士族　ＡＴＫ／３７５０
ＤＥＦ／３４００

迷宮兄弟の場に、足をスーガ、胴をヒューガ、上身をサンガーとした巨大な魔神が現れた。

「ゲート……」
「……ガーディアン」

その巨大さに呆気にとられる十代と翔だったが、それは一瞬の事だった。

「バトル！（奴らの場には融合モンスターの『フレイム・ブラスト』に
機械族の『ジャイロイド』と『スチームロイド』。
ダメージを優先すると『ジャイロイド』、だがあのモンスターには
1ターンに1度
戦闘では破壊されない効果がある。ダメージとモンスター減少、

この２つを両立させるならば！）」

そう考えた迷宮兄弟・兄は、視線を翔のロイドに向ける。

「『ゲート・ガーディアン』で『スチームロイド』を攻撃！『スチームロイド』は攻撃対象となった時、攻撃力が５００Ｐダウンする！」

スチームロイド　ＡＴＫ／１８００⇒ＡＴＫ／１３００

「しまった！」

「受けるがいいっ！“魔神衝撃波（まじんしょうげきは）”っ！！」

雷・風・水より放たれる黄・緑・青の衝撃波がスチームロイドを粉砕した。

「「うぐぅぅっ！！」」

十代＆翔：ＬＰ／６６００⇒４１５０

「彼らのデッキはタッグ決闘用に組み上げられたデッキ。流石に隙がない。」

迷宮兄弟のタッグのコンボに舌を巻く三沢。

「それに兄弟だけに息もぴったりだわ。翔くん自身が腕を上げたといっても、

このコンビネーションを前に勝てるの？」

三沢に続き明日香も不安そうに呟く。

「おいおい翔、こんな所で負けんなよぉ～！お前は俺と話の合う数少ない男だ！」

「アンタはそれ以外の応援方法を知らないの！？」

「あはははは！でも家康らしいＺＥ（ゼ）！」

「にゃあ、確かに。」

そんな不安な空気の中でも、家康達は漫才に気を抜かないのであった。

「あ～もうっ！何やってんのよっ！！」

ゲート・ガーディアンの出現に、千世はイラついていた。

「超最上級モンスター、『ゲート・ガーディアン』。あの迷宮兄弟の切り札です。」

「かの決闘王も苦戦したモンスター、苦戦は必須かと。」

イラつく千世に冷静に物事を伝える佐藤と鈴木だが、千世は益々イラついて来た。

「くぬぬぅ～っ！！十代達が退学になったショックで遊夜が引きこもったらあのオカッパ、絶対殺す！！」

「「見たか！これぞ我等のタッグ決闘！！」」

迷宮兄弟の言葉に、翔は先程までの勢いを削がれてしまっていた。

「そんな……あの状況からこんなモンスターを呼び出すなんて……」

そんな様子の翔の状態に、クロノスは満足そうに微笑んでいた。

「（いいデスーヨ、これいいデスーヨ。丸藤　翔の反撃には驚きましたーガ
所詮は気の弱いドロップアウトボーイ。そこから切り崩していくのーネ！！）」

クロノスの考え通り、翔はネガティブな方へと考え出していた。

「（やっぱり僕は、アニキの足を引っ張ってるだけなのかな……）」

「翔、そんな落ち込むなよ。決闘はまだこれからだぜ！」

そんな翔に、十代はいつもながらの明るさで励ます。

「アニキ……うん！」

十代の励ましに翔が立ち直る中、
迷宮兄弟・兄は手札に残った最後の1枚に手を伸ばす。

「私はカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「よしっ！俺のターンだ！ドロー！！」

迷宮兄弟・兄のエンド宣言と共にカードを引く十代。

「俺は魔法カード『融合回収（フュージョン・リカバリー）』を発動！
自分の墓地に存在する融合カードと
融合に使用した融合素材モンスター1体を手札に加えれる！
俺は融合と『ザ・ヒート』を手札に加える！」

カードを手札に加えた十代は、自分達の場のカードを見渡す。

「よし！翔、お前のモンスター借りるぜ！」
「え？」

十代の言葉の意味を理解できない翔は首を傾げるが、
十代は気にせず手札のカードに手を伸ばす。

「魔法カード『融合』を発動！
手札の『ザ・ヒート』と翔の『ジャイロイド』を融合――――
現れろ！『E・HERO Great（グレイト） TORNADO（トルネード）』！！」

E・HERO Great（グレイト） TORNADO（トルネード） ☆8 風 戦士族
ATK／2800 DEF／2200

十代の場に、マントを羽織り風を身に纏ったヒーローが現れた。

「あれはお兄さんとの決闘で出したヒーロー！！」
「こいつは『E・HERO』と風属性モンスターを融合させて召喚
されるヒーローだ！」

そう、十代が翔のモンスターを借りたのはこの為だったのだ。
だが、それでも迷宮兄弟の表情は余裕があった。

「ふん、それがどうした。」
「攻撃力２８００程度では、我らの『ゲート・ガーディアン』を倒す事など不可能！」

そう言い放つ迷宮兄弟だったが、彼らは知らない。
このヒーローに隠された究極の力を。

「『Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』のモンスター効果発動！
召喚時、相手フィールド上全てのモンスターの攻撃力・守備力を半分にするっ！！
くらえっ！“タウン・バースト”っ！！」

トルネードの放った暴風が、迷宮兄弟のモンスターの力を失わせて行く。

ゲート・ガーディアン　ＡＴＫ／３７５０⇒ＡＴＫ／１８７５　ＤＥＦ／３４００⇒ＤＥＦ／１７００

「「なにぃっ！！？」」

自分達の切り札が見る見る衰えて行く姿に、迷宮兄弟は我が目を疑った。

「いけぇっ！『Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』で『ゲート・ガーディアン』を攻撃！
渦巻けっ！！“スーパーセル”！！」

トルネードの放った竜巻が、ゲート・ガーディアンに迫る。

「くっ！罠発動！『フローラル・シールド』！！
相手モンスター1体の攻撃を無効にし、デッキからカードを1枚ドローするっ！！」

フィールドに現れた多数の花びらがトルネードの攻撃を打ち消した。

「私は『フローラル・シールド』の効果で、デッキからカードを1枚ドロー！」
「へへ、やっぱそう簡単に攻撃はさせてくれないか！
いいぜぇ、わくわくして来た！カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「いいぞ！『Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』の効果で半減された攻撃力と守備力は
エンドフェイズになっても元には戻らない！」
「ほほぉ、これは面白くなってきましたねぇ。」

十代の戦略に遊夜と鮫島が舌を巻く中、クロノスは顔が真っ青になっていた。

「（マズいノーネ！マズすぎるノーネ！！
あの超最上級モンスターの攻撃力が半減しては、
いつ殺られてもおかしくないノーネ！！）」

「おのれっ！私のターン！ドロー！！」

カードを引いた迷宮兄弟・弟は、十代とヒーローを睨みながら

自身の次の一手を思考する。

「（あの小僧、我らでも知らぬモンスターを操るとは！
これでは我らの『ゲート・ガーディアン』が破壊されるのは時間の問題。
だが、私が今引いたカードはそれを上回るカード！）
手札から魔法カード『聖水（せいすい）の弊害（へいがい）』を発動！
この効果により場のモンスター1体の攻撃力・守備力を元々の数値に戻す！
対象はもちろん、『ゲート・ガーディアン』！！」

迷宮兄弟の弟の言葉と共に、ゲート・ガーディアンの頭上より降り注ぐ聖なる水が
ゲート・ガーディアンを清めて行く。

ゲート・ガーディアン　ＡＴＫ／１８７５⇒ＡＴＫ／３７５０　ＤＥＦ／１７００⇒ＤＥＦ／３４００

「そ、そんな！」

ゲート・ガーディアンの攻守復帰に絶望する翔だったが
そんな暇を与える程、迷宮兄弟は鈍間ではなかった。

「すかさずバトル！『ゲート・ガーディアン』で
『フレイム・ブラスト』を攻撃！“魔神衝撃波”っ！！」

ゲート・ガーディアンの放つ波動が、フレイム・ブラストに迫る。

「くっ！伏せカードオープン！『ガード・ブロック』っ！！」

ゲート・ガーディアンの放つ波動が、フレイム・ブラストを一瞬で飲み込んだが
十代と翔は、見えない壁の様な物により余波を受け付けない。

「『ガード・ブロック』の効果により、戦闘ダメージを1度だけ0にし
デッキからカードを1枚ドローする！！」

「ふん、しぶといな。ならば私はカードを1枚伏せ、
『ディフェンス・ウォール』を守備表示で召喚！」

ディフェンス・ウォール　☆4　地　岩石族　ＡＴＫ／１００　ＤＥＦ／２１００

迷宮兄弟の場に、灰色のブロックで出来た壁のモンスターが現れた。

「この『ディフェンス・ウォール』が表側守備表示で存在する時、
相手モンスターは全てこのモンスターを攻撃対象とする！
私のターンはこれで終了だ！」

「攻撃は『ゲート・ガーディアン』、守備は『ディフェンス・ウォール』
……全く隙がない。」

迷宮兄弟の隙の無いタッグコンボに三沢は不意にそんな言葉をもら

した。

「彼らはタッグ決闘を知り尽くしている。
十代と翔君とじゃあ、決闘の歴も実力も違いすぎるわ。」
「うぅ、あいつら大丈夫なんでしょうね……」

三沢に続き、明日香と文乃も不安げに呟く。
横にいる希に叶絵、家康もさすがに不安のようだ。

「ぼ、僕のターン。」

明日香達が心配する中、翔はゲート・ガーディアンの復活に声は振るえ、及び腰になっていた。

「（どうしよう、僕のモンスターじゃあ倒せない。）
僕は、『タンクロイド』を守備表示で召喚。」

タンクロイド　☆４　地　機械族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１９００

翔の場に、手と目の付いたおもちゃの戦車が現れた。

「そして『Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』を守備表示に変更し、ターンエンド。」
「私のターン、ドロー！」

翔のエンド宣言と共に、迷宮兄弟・兄は引いたカードを確認し

自身の次の一手を思案する。

「（奴らの場の『Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』、どうやらあのモンスターの効果は
召喚した時のみ発動する誘発効果のようだな。
ならばここは、ダメージを優先しあのおもちゃのモンスターを攻撃する！）」

思案のまとまった迷宮兄弟・兄は
自身の手札と弟の伏せたカードを確認し手札の１枚に手を伸ばす。

「私は手札から装備魔法『メテオ・ストライク』を発動！
装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を上回っていれば、相手に貫通ダメージを与える！！」
「そ、そうはさせないっ！」

迷宮兄弟・兄の出したカードに対し、翔が待ったを掛ける。

「伏せカードオープン！『サイクロン』！！
このカードで『メテオ・ストライク』を破壊する！！」

翔の発動した台風（サイクロン）が、メテオ・ストレイクに迫る。
だが、迷宮兄弟の戦略はその上を行っていた。

「カウンター罠発動！『アヌビスの裁き』！！」

迷宮兄弟・兄が、弟の伏せていたカードを発動したのだ。

「手札１枚をコストに、相手の魔法・罠カード破壊効果の
魔法カードを無効にし破壊する！」

迷宮兄弟・兄が最後の手札を捨てた事で、サイクロンは掻き消されてしまった。
だがそれだけではなかった。

「さらに相手モンスター1体を破壊し、
そのモンスターの攻撃力分のダメージを与える!!
破壊するのは、『Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』!!」

これにより、トルネードは爆散し爆風の余波が十代と翔を襲う。

「「くうううううっ!!」」

十代&翔：ＬＰ／４１５０⇒１３５０

「そ、そんな……」

この事実に翔は、戦意が殆ど失いつつあった。

「（もうダメだ、この攻撃でモンスターを攻撃されたら
貫通ダメージを受けて、それでお終い……やっぱり僕なんかじゃアニキのパートナーなんて無理だったんだ……）」
「翔!諦めんな!!」
「っ!!」

全てを諦め様とした翔の耳に、十代の声が響く。

「翔、遊夜達と約束しただろ!最後まで諦めないって!!」

「っ！！」

十代の言葉に、翔の脳裏に再び遊夜達との特訓の事が蘇る。

「翔、最後にこれだけは覚えとけ。」
「なに遊夜君？」

遊夜の言葉を待つ翔に、遊夜は力強くそれでいて優しく言い放つ。

「最後まで諦めるな。」
「え？」

「決闘てのは、最後までデッキを信じた奴が勝つんだ。
だからどんな状況になっても、最後まで諦めるな！」

「（……そうだよ、僕は遊夜君と約束したじゃないか！
それにお兄さんとも約束したんだ！！）」

翔はすぐ様自身の手札を確認する。

「（ある筈だ、何か打開策が！！）」

だが、そんな暇を与える程　迷宮兄弟は甘くない。

「無駄だ！貴様らはこれで終わりだっ！！
バトル！『ゲート・ガーディアン』で

『タンクロイド』を攻撃！！“魔神衝撃波”っ！！」

ゲート・ガーディアンの無情の攻撃がタンクロイドに迫る。

「マズイっ！この攻撃が決まれば十代達が負ける！！」

「十代！」

「十代っち！」

「翔！！」

「いや、まだだっ！！」

殆どの者達が息を呑む中、翔は自身の手札の1枚に手を伸ばす。

「まだだっ！手札から『ライトフライヤーロイド』の効果発動！」

「「なにっ！？」」

ゲート・ガーディアンの放つ波動が、タンクロイドを一瞬で飲み込んだが

十代と翔は、その余波を受け付けなかった。

何故なら、十代達の前に薄っすらとかの有名な兄弟が作った世界初の飛行機のロイドモンスターが守っていたのだ。

「『ライトフライヤーロイド』のモンスター効果により、このカードを手札から墓地に送る事で、戦闘ダメージを1度だけ0にする！

さらに『タンクロイド』が破壊された事で、僕はデッキからカードを1枚ドローする！！」

「ちっ！しぶとい奴らだ！

だがもう次は有るまい！ターンエンド！！」

「ふぅ～、危なかったぜ～マジで。俺かなりビビった。」
その激しい攻防に家康はかなり興奮していた。
「だが状況は十代達が圧倒的に不利だ。」
「確かに、このままだとマズいわ。」
三沢と明日香が指摘する中、希は『大丈夫』と呟く。
「あの2人には、あのモンスターを倒すコンボがある。」
「それホント希っち！？」
希の言葉に周りにいたメンバーが驚く中、希は静かに『コクリ』と頷いた。
「十代、翔、勝って寮に帰ってくる約束だろう！きばれぇ！！」
「翔、まだ決闘は終わっていない！気合だあぁぁっ！！」
所変わった観客席では
隼人と大吾郎が十代と翔にあらんかぎりの声援を送る。
「うらあぁぁっ！十代、翔！負けたら承知しないわよっ！！」
こちら特別席でも、千世が十代達を激昂していた。
その隣で、佐藤と鈴木の2人が
何故かチアリーダーに着替えて応援をしている。

その一方で、この状況に微笑む者もいた。

「くっくくく、伝説の決闘者の前に手も足も出ないか遊城　十代。無様に叩き潰されるがいい……」

その1人である万丈目は、取巻と慕谷の視線にも気づかず自分の手が白くなるほどきつく握り締めていた。

「（あいつと白鋼　遊夜が現れてから全てがおかしくなった！クロノス教諭からの信頼を失い、情けを掛けられ、プライドを踏みにじられて……俺は！！）」

「ヒヒヒヒヒ。いいデスーヨ、コレいいデスーヨ。流石はデュエルキングと闘った伝説の決闘者なのーネ。」

そしてこの男、クロノスもまた迷宮兄弟の優勢に満足げな笑みを浮かべていた。

「生意気なドロップアウトボーイズもコレで終わりって感じなのーネ、アッハハ！」

「決闘は最後まで分からないものだよ、クロノス君。」

そんなクロノスに鮫島が言い放つのに対しクロノスは余裕たっぷりといった感じで口を開いた。

「わかってますーノ、校長先生。しかしこれ以上苦しみを長引かせるよりーモ、

いっそ退学を言い渡してやるのーガ、彼らのためではないーノ？」
「ですが教諭、当の本人は諦めてませんよ。」

クロノスに反論した遊夜の言葉に、クロノスが視線を決闘者達に戻すと
そこには、今だ闘志を失わない十代の姿が
そして、遊夜や兄である亮との約束の為に立ち上がる翔の姿があった。

「オレンジペコー！なんデー、かんデー！わかりませーン！塩海老せーン！！
あの遊城　十代はともかーク、あの気の弱い丸藤　翔まーデ
何で諦めてないーノ！？」

クロノスが目を疑う中、十代と翔の状態が気に入らないのか
迷宮兄弟は口を開いた。

「ふん、その目ここまで来て未だ諦めていないらしい。」
「しぶといことだ。」

迷宮兄弟の言葉に十代は真っ直ぐ迷宮兄弟を見つめ言い放った。

「決闘者はデッキにカードがある限り、最後まで諦めない！
デッキとの信頼が、必ず奇跡を起すぜっ！！」
「「っ！！？」」

この十代の言葉に、迷宮兄弟はかつて武藤遊戯に
同じ事を言われた事を思い出し顔をしかめた。
だが、迷宮兄弟はある1点を突いて来た。

「だがパートナーはどうかな？」
「もはや立ってるのがやっとのようだが？」
迷宮兄弟の言葉に、十代が視線を向けると
そこには、なんと立ってはいるが殆ど闘志を感じない翔の姿があった。
そんな翔に十代は声を掛ける。
「翔、諦めんなよ！俺らはまだやれるぜ！！」
「アニキ……」
十代の言葉に、翔は先程まで重かった自身の体が
少しだけ軽くなった気がした。
「それに翔、お前にはあのモンスターを倒せるカードがある！」
「！！」
その十代の言葉に、翔は『ハッ』と思い出す。
十代と遊夜が指摘してくれたコンボを。
そんな翔の様子を見た十代は、自身のデッキに手を伸ばす。
「俺のターン、ドロー！！
魔法カード『強欲な壺』発動！！
この効果により、デッキからカードを2枚ドローする！！」
手札を増強した十代は、ゲート・ガーディアンを倒すコンボの為に
動き出す。
「俺は『E・HERO　スパークマン』を攻撃表示で召喚！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン　☆４　光　戦士族　ＡＴＫ／１６００
０　ＤＥＦ／１４００

十代の場に、体に電撃を走らせるヒーローモンスターが現れた。

「さらに装備魔法『スパークガン』を発動！
『スパークマン』に装備する！！」

十代の発動したカードにより、
スパークマンの右手にレーザー銃が装備される。

「こいつには３つの弾丸が装填されている、
そして弾丸を発射させる事で、
命中したモンスターの表示形式を変更できる！」

十代の言葉に対し、迷宮兄弟は『それがどうした』といった表情だ。

「そんなもので、」
「我らの『ゲート・ガーディアン』を倒せると思っているのか？」

そう言い放つ迷宮兄弟に対し、十代はあくまで不敵に笑った。

「試してみないと分からないぜ！行くぜ！『スパークガン』発射！」

スパークマンの構えたスパークガンより、
１弾目の青白い稲妻の弾丸が発射された。

「ふん、『ゲート・ガーディアン』の守備力は３４００もあるのだ。守備表示にされたくらいで……」
「勘違いすんなよ。」
「「なに？」」

不意に放った十代の言葉に首を傾げる迷宮兄弟。

「お前らに場にいるモンスターは『ゲート・ガーディアン』だけじゃないだろ？」
「「っ！！しまった！！」」

そう、ゲート・ガーディアンの存在感で誰もが忘れていた。
迷宮兄弟の場に存在する壁モンスター。

「そう、表示形式を変更するのは『ディフェンス・ウォール』だっ！！」

十代の言葉と共に、弾丸はディフェンス・ウォールに命中。
弾丸の静電気により、ディフェンス・ウォールは守備の体勢から攻撃への態勢に変わった。

「『ディフェンス・ウォール』の攻撃力は１００！これなら楽に倒せるぜ！
行けぇっ！！『スパークマン』で『ディフェンス・ウォール』を攻撃！！
“スパーク・フラッシュ”！！」

スパークマンの左手から放たれた青い電撃が、
無謀にも攻撃態勢となったディフェンス・ウォールを貫いた。

「「ぐおぉぉぉっ！！」」

迷宮兄弟：ＬＰ／６６００⇒５１００

「へへ、城を落とすならまず城壁をぶっ壊す！
大吾郎も似たような事言ってたしな！」

「いや十代よ、それは城壁ではなく堀を埋めるのだが……」

十代の言った間違いに、観客席にいる大吾郎がツッコミを入れる。

「十代にとっては、堀を埋めるなんて面倒な事よりも
城壁を大砲でぶっ壊す方が向いてるきもするけどなぁ……」

その横で、十代の性格上を理解したうえでそんな事を考える隼人であった。

「まぁ言葉の意味などの間違いはともかく、
これで城壁を破壊する事は出来た。」

十代の言葉にツッコミつつも、三沢は冷静に状況を把握する。

「よっしゃ！これで十代っちや翔っちにも勝機は訪れたＺＥ（ゼ）！！」
「まだそうだと決まった訳ではないわ。」

意気込む叶絵に対し、明日香も三沢同様冷静な判断をする。

そう、たとえ城壁（ディフェンス・ウォール）を倒しても本丸（ゲート・ガーディアン）を落とせる術を
2人が持っているとは限らないのだ。

「そうでもない。」

だが、相も変わらず希は2人の勝利を信じて疑わない。

「希、どうしてそう言いきれるの？」
「にゃあ、十代は先『ゲート・ガーディアン』を追い詰めた。
十代の融合モンスターは、まだまだ未知数。その分可能性がある。」
「なーる、確かに先かなりいい所まで追い詰めたよなぁ～。」

希の言い分に、家康達は納得する。
確かに先程　十代はトルネードを出した事で
ゲート・ガーディアンを追い詰めていた。故に、まだ勝負は分からないのだ。

「俺はカードを2枚伏せ、ターンエンド！」
「おのれ！私のターン、ドロー！！」

十代のエンド宣言と共に、迷宮兄弟・弟がカードを引いた。

「行けっ！『ゲート・ガーディアン』！！“魔神衝撃波”っ！！」

迷宮兄弟・弟の言葉と共に、ゲート・ガーディアンの放つ衝撃波がスパークマンに迫る。

「リバースカード、オープン！『ヒーローバリア』！！」

十代の言葉と共に青白く薄い膜のような壁が現れ
ゲート・ガーディアンの衝撃波からスパークマンを守り抜いた。

「ちっ！しぶとい奴らだ！」

そう言い迷宮兄弟の弟は、自身の手札に視線を向ける。

「（今、あのヒーロー使いと兄者の手札は0。
次の兄者のターン、確実に奴らの息の根を止めるようなカードを
引いてもらう必要がある。ならばこのカードを伏せる！）
伏せカードを1枚セットし、ターンエンド！！」

迷宮兄弟・弟のエンド宣言により、ついに翔のターンが周って来た。

「……アニキ…」
「ん？」

不意に声を掛けてくる翔に首を傾げる十代に翔は尋ねだす。

「何でアニキはそんなにまで僕を買ってくれるの？
僕はお兄さんや大吾郎君、遊夜くんほど強くないし、臆病だし、何
でなの？」

そう聞いてくる翔に、十代は微笑みながら答える。

「お前、決闘好きだろ？」
「え？」
「お前ははどんなカードも大事にして、楽しそうに決闘してる。
そういう所、俺と同じだって。

それにさ、折角このデュエル・アカデミアに入学したんだ、
もっと決闘したいし楽しみたい。お前とも決闘したいしな。」
「アニキ……」
「その為にはまず！」
そう言い十代は迷宮兄弟のゲート・ガーディアンに視線を向ける。
「アイツをぶっ倒さないとな！俺達にらやれる！やってやろうぜっ
！！」
その十代の言葉に、翔の心にあった迷いも恐怖も消え去った。
「（そうだ、僕はもう逃げないって決めたんだ！
そして僕をここまで信頼してくれるアニキのために！
そのためには――――）」
そう考えた翔はデッキに手を伸ばす。
「（頼む、来てくれ！僕はアニキや皆と一緒にいたいんだ！！）
僕のターン、ドロー！！」
翔は懇親の力でカードを引く、そのカードを見た瞬間――――
――――翔は微笑んでいた。

「アニキ！」
「おう、行け翔！思いっきりやれ！！」
十代の言葉に、翔は迷わず引いたカードを場に出した。
「僕は『ドリルロイド』を攻撃表示で召喚！！」

ドリルロイド　☆４　地　機械族　ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／１６００

翔の場に、ドリルを付けた地中戦車のロイドが現れた。
「さらに『スパークガン』効果発動！！
『ゲート・ガーディアン』を守備表示にする！！」

スパークガンより放たれた電撃が、ゲート・ガーディアンを守備体勢にした。

「これで準備は整った！！
行けぇっ！『ドリルロイド』で『ゲート・ガーディアン』を攻撃！！」
「なにっ！？」
「『ゲート・ガーディアン』の守備力は３４００だぞっ！？血迷ったかっ！！」

十代と翔のＬＰは残り１３５０。
守備力３４００のゲート・ガーディアンに

攻撃力１６００のモンスターで攻撃しては自滅すると誰もが思った。
だが、意外にアニメ……もとい小説などではマイナーなドリルロイドには
隠された能力があった。

「『ドリルロイド』のモンスター効果！
このカードが攻撃した守備モンスターは、ダメージ計算を行わず破壊される！！」
「「なにっ！！？」」

翔の言葉と共に、ドリルロイドは加速しゲート・ガーディアンに突っ込む。

「行けぇっ！！“ショットライド・ドリル”！！」

ドリルロイドは加速と共に飛び上がり
守備体勢のゲート・ガーディアンを貫き、風穴を開けた。
その穴から亀裂が走り、ゲート・ガーディアンは崩れ去った。

「わ、我らのゲート・ガーディアンが！！」
「破壊されるとは！！」

信じられないといった表情の迷宮兄弟に、翔はさらに追撃する。

「これで場はがら空きだ！
行けっ、『スパークマン』でダイレクト・アタック！！
“スパーク・フラッシュ”！！」

翔の言葉と共に、十代のスパークマンが迷宮兄弟へ電撃を放った。

「「ぐおおおぉぉっ！！」」

迷宮兄弟：ＬＰ／５１００⇒３５００

「よっしゃ！やったぜ翔！」
「うん！」

十代と翔は互いに見つめ合いながら微笑んだ。

この大金星とも言える出来事に、会場は熱気に包まれた。

「まさか、彼がゲート・ガーディアンを倒すとはね。」
「やったぜ十代っち！翔っち！！」
「いよっしゃぁっ！でかした翔！！」
「にゃあ！」

三沢が冷静に見つめ、叶絵達が声を上げて喜ぶ中
明日香は不意に声を漏らす。

「彼らは迷宮兄弟のようなタッグ用のデッキじゃないけど
それぞれのデッキの特徴を知り、上手く連携させている。」
「迷宮兄弟とは違ったタッグ方法ね。」

その文乃の言葉に、『えぇ』と返す明日香であった。

一方こちら、千世の特別席でも熱気はおきていた。

「いよっしゃあああぁぁぁっ！！このまま一気に押せ押せえええぇっ！！！」
「「ファイト！ファイト！！」」
相変わらずチア姿で応援する佐藤と鈴木と共に
千世は2人にエールを送った。

「やったぁ！」
「うむ！でかしたぞ翔！」

所変わってこちらでは、隼人と大吾郎がまるで自分の事のように喜び
隼人と大吾郎から距離をとったところに立つ亮は、
この決闘を今まで表情1つ変えずに見ていたその顔に微笑を浮かべ
ていた。

その一方で、この光景を信じられないと思う者もいた。
ご存知、クロノスである。

「信じられないーノ、背中かいーノ、あのドロップアウトボーイズが
伝説の決闘者の最強モンスターを！？」
「おかしなことはないですよ。
彼らもまた、このデュエルアカデミアの生徒なんだから。」

驚くクロノスにそう言い放つ鮫島校長に
遊夜も同意するように頷く。

「これで、『ゲート・ガーディアン』の脅威は去った。だけど……」

遊夜は同時に、何か不安な気配を感じていた。
それは、遊夜達の背後の席に座る彼、大徳寺も同じだった。

「ふぅん、丸藤君もなかなかやりますにゃぁ。
しかし、これでマズイことになったかもしれないにゃ。」
「にゃー」
「ファラオもそう思うかにゃ？」

デブネコことファラオの喉を撫でながら
大徳寺は視線を十代と翔に向けた。

「（今、アニキの手札は0。
やっぱり僕よりアニキの方がいいカードを引く可能性が高い！だったら……）
僕は『スパークガン』の効果で『ドリルロイド』を守備表示に変更し、
カードを1枚伏せ、ターンエンド！」

スパークガンから放たれた電撃で、ドリルロイドの表示が変更され
弾丸が尽きたスパークガンは消滅した。

「少し油断していたようだ。」
「まさか彼らにゲート・ガーディアンが破れれるとは。」
「「だが！！」」

不意に強気な声を上げる迷宮兄弟に『え！？』と目を丸くする翔。

「『ゲート・ガーディアン』を倒した事を後悔するがいい！！

私のターン!!」

カードを引いた迷宮兄弟・兄は、ここで弟の伏せたカードを発動させる。

「リバースカード、オープン!『強欲な壺』!!
デッキからカードを2枚ドローする!!」

手札を更に補充した迷宮兄弟・兄は、3枚となった手札を見て『ニヤリ』と微笑む。

「私は手札より魔法カード『ダークエレメント』発動!!
墓地に『ゲート・ガーディアン』が存在する時、LPを半分払い――」

迷宮兄弟：LP／3500⇒1750

墓地に眠るゲート・ガーディアンから禍々しいオーラが上がり、そのオーラがデッキに眠る1枚のカードを示す。

「デッキか手札から『闇の守護神(やみのしゅごしん)ーダーク・ガーディアン』を特殊召喚する!!」

闇の守護神(やみのしゅごしん)ーダーク・ガーディアン　☆12　闇　戦士族　ATK／3800　DEF／3600

迷宮兄弟の場に、下半身が蜘蛛で出来ている漆黒の闇の戦士が出現した。

「そ、そんな！攻撃力３８００だなんて！！？」

攻撃力３８００の威圧感に、翔は驚きを隠せない。
が、すぐに余裕を取り戻す。

「（いや大丈夫だ、アニキの伏せてくれたこのカードさえあれば！！）」

そう思い翔は視線を伏せカードに向けるが
迷宮兄弟は全くと言っていい程　自信に溢れていた。

「行くぞ！『闇の守護神－ダーク・ガーディアン』で
『スパークマン』を攻撃！“ダーク・ショック・ウェーブ”っ！！」

ダーク・ガーディアンの持つ戦斧を振る事で発生した黒い衝撃波がスパークマンに迫る。

「リバースカード、オープン！『ヒーローバリヤーズ』！！
自分の場に『Ｅ・ＨＥＲＯ』が存在し墓地に『ヒーローバリア』がある時発動！！
墓地の『ヒーローバリア』を除外し、相手モンスター１体の攻撃を無効にし
相手フィールド上の攻撃表示モンスターを全て破壊する！！」

スパークマンの前に青白く薄い膜のような壁が現れ
ダーク・ガーディアンの衝撃波からスパークマンを守り抜くと同時にその黒い衝撃波をダーク・ガーディアンへと跳ね返した。

跳ね返った衝撃波はダーク・ガーディアンに激突し、
その衝撃で爆発が発生し辺りは爆煙に包まれた。

「やった！！」
「よっしゃ！倒したぜ！！」

これで迷宮兄弟の究極モンスターを破壊した
……筈だった。

「なっ！？」
「なにっ！？」

爆風の煙が晴れた時、翔と十代は
いや、ここに居る迷宮兄弟以外の全員が目を丸くした。
何故なら、煙が晴れた時そこには
破壊された筈のダーク・ガーディアンが健在だったのだ。

「この攻撃をかわすとは。」
「中々やる。しかし次はない！」
「『ダーク・ガーディアン』は戦闘では破壊されず、」
「そして墓地に『ゲート・ガーディアン』が存在する限り
カード効果によっても破壊されないのだっ！！
この最強の『ダーク・ガーディアン』がいるかぎり、
今度こそお前たちに勝機はないのだ！！」

その言葉に、翔は先程までの闘志を再び失いかける。

「そんな……僕が『ゲート・ガーディアン』を倒したばっかりに
より強力なモンスターを呼び出してしまった……」
「翔、気にすんなよ。」

闘志を失いかけた翔の耳に、再び十代の言葉が響く。

「どのみち先『ゲート・ガーディアン』を倒さなかったら俺達は負けてたんだ。
だからもう1度、先みたいにコイツ等をぶっ倒そうぜ！！」

「アニキ……」

十代の言葉に、翔は失いかけた闘志を取り戻す。
その様子を見ていた迷宮兄弟は『しぶとい事だ』と呟く。

「この『ダーク・ガーディアン』を前にしてまだ闘志を失わぬか。」

「その気概はよしとしておこう。」

「私は手札から魔法カード『レベル・ライトフェーブ』を発動。
自軍の場のモンスター1体を選択して発動。選択したモンスターより
☆の高いモンスターが相手フィールド上に存在しない場合、
選択したモンスターの☆の数×２００Ｐ、我等のＬＰを回復する。
私が選択するのはもちろん、『ダーク・ガーディアン』！
☆は１２、よって２４００Ｐ回復する。」

選択されたダーク・ガーディアンから眩いオーラが現れ
そのオーラが迷宮兄弟を包み込み、ＬＰを回復していく。

迷宮兄弟：ＬＰ／１７５０⇒４１５０

「私はターンエンドだ。」

迷宮兄弟・兄のエンド宣言と共に、十代は自身のデッキに手を伸ば

す。

「（翔、絶対勝とうぜ！モンスターを倒す事が勝利じゃないんだぜ！！）

俺のターン！ドロー！！」

十代はカードを引くと共に、翔が伏せたカードを確認する。

「（！！へへ、いいカード伏せてくれたぜ！）

リバースカード、オープン！『強欲な壺』！！

俺はデッキからカードを２枚ドロー！

更に俺は手札から魔法カード『天使の施し』発動！

俺はデッキからカードを３枚ドローし、その後　手札から２枚のカードを捨てる！！」

十代はデッキからカードを引き、２枚のカードを選択して墓地に送った。

「翔！またお前のカードを借りるぜ！」

「え？」

「行くぜっ！手札から魔法カード『融合』発動！！

場の『スパークマン』と『ドリルロイド』を融合――――

現れろ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア　☆６　地　戦士族　ＡＴＫ／２２００　ＤＥＦ／２６００

十代の場に黒い鎧に覆われた大地のヒーローが現れた。

しかし、このガイアを前にしても
未だにダーク・ガーディアン擁する迷宮兄弟は
自分達の有利を信じて疑わなかった。

「地とヒーローの融合か……」
「しかし『ダーク・ガーディアン』の攻撃力は３８００。
そして戦闘で破壊されることはない。」
「なのにどうしようというのだ？」

その迷宮兄弟の言葉に対し、十代は『こうするのさ』と言い放つ。

「『ガイア』の効果発動！召喚時、相手モンスター１体の攻撃力を
エンドフェイズまで半分にし、半分にした数値分を『ガイア』に与
える！」

ガイアの両腕が大地をえぐり、その波動による大地の裂け目が
ダーク・ガーディアンを襲った。

闇の守護神－ダーク・ガーディアン　ＡＴＫ／３８００⇒ＡＴＫ／
１９００

Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア　ＡＴＫ／２２００⇒ＡＴＫ／４１００

「「なにっ！！？」」
「行けえっ！『ガイア』！！“コンティネンタルハンマー”！！」

ガイアの両腕が、ダーク・ガーディアンを叩き潰そうとするも
やはり破壊耐性があるゆえか、見えない壁があるかのように
ダーク・ガーディアンは無傷だった。
だが、その際　発生したダメージの余波が迷宮兄弟に襲い掛かった。

「「ぐあああぁぁぁぁぁっ！！」」

迷宮兄弟：ＬＰ／４１５０⇒２２５０

「へへ、やっぱりな。
カード効果で破壊されないだけで、効果そのものは通じる。
そして戦闘では破壊されないけど、ダメージは受ける。」
「貴様！」
「何が言いたい！？」

十代の言葉に苛立つ迷宮兄弟に、十代は言い放つ。

「つまり、お前らの『ダーク・ガーディアン』は不死身だけど無敵じゃない。
そして、『ダーク・ガーディアン』は不死身だけど
お前らは不死身じゃないって事さ♪」
「「ぐぬぬぅっ！！」」

十代の言葉に、迷宮兄弟の怒りは上がりまくった。
だが、すぐに冷静を取り戻す。

「だが貴様のヒーローのモンスター効果も、このターンの間のみ。」
「次の我等のターンで攻撃力の戻った『ダーク・ガーディアン』で
貴様のモンスターを攻撃すればそれで終わりだ。」

「確かにこのターンのエンドフェイズに、『ガイア』のモンスター

効果は終わり
２体のモンスターの攻撃力は元に戻る。」
「そうなれば、攻撃力の差は歴然だわ。」

十代達の状況を冷静に見据える三沢と明日香。

「これはまずいＺＥ（ゼ）。」
「どうすんのよアイツら。」
「可能性があるとすりゃ、十代の残った１枚の手札か……」
「にゃあ。」

他のメンバー達が見守る中、十代は最後の手札に手を伸ばす。

「手札から魔法カード『ミラクル・フュージョン』発動!!
俺の場か墓地から融合モンスターによって決められたモンスターをゲームから除外し、『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のつく融合モンスターを融合召喚する!!
俺は墓地の『スパークマン』、そして『天使の施し』で墓地に送った『フェザーマン』・『バブルマン』の３体を融合――――
来い!『Ｅ・ＨＥＲ　テンペスター』!!守備表示!!」

Ｅ・ＨＥＲ　テンペスター　☆８　風　戦士族　ＡＴＫ／２８００
ＤＥＦ／２８００

十代の場に白い翼は生やし、右手にレーザー銃を装着したヒーローが守備体勢で現れる。

「『テンペスター』の効果発動！このカード以外の
自分フィールド上のカード１枚を墓地に送り、
自分フィールド上のモンスター１体を選択する事で
このカードがフィールド上に存在する限り
選択したモンスターは戦闘では破壊されない！！
俺は『ガイア』を墓地に送り『テンペスター』自身を選択！！」

ガイアがフィールドより消えると同時に、
テンペスターに虹色のオーラが纏われた。

「これで『テンペスター』はお前らの『ダーク・ガーディアン』と
ほぼ同じ力を手に入れたぜ！ターンエンドだっ！！」

闇の守護神－ダーク・ガーディアン　ＡＴＫ／１９００⇒ＡＴＫ／
３８００

十代のエンド宣言と共に、ダーク・ガーディアンに本来の力が戻った。
だが、十代達の場には戦闘では破壊されない鉄壁のヒーローが存在する。
その事が、迷宮兄弟達をイラつかせていた。

「私のターン！ドロー！！」

だが、迷宮兄弟・弟は引いたカードを見た瞬間、目を見開いた。

「（フフフ、いいカードを引いたぞ！）
私は手札から魔法カード『レベル・サンダー』を発動！！
自軍の場の全てのモンスターの☆の合計した数値×１００Ｐのダメージを

相手プレイヤーに与える！！
我等の場には☆１２の『ダーク・ガーディアン』１体！
よって１２００Ｐのダメージを与える！！」

ダーク・ガーディアンから眩い輝きが現れ
その輝きは稲妻となり十代と翔へと襲い掛かった。

「「くあああああぁぁっ！！」」

十代＆翔：ＬＰ／１３５０⇒１５０

「そしてカードを１枚伏せ、ターンエンド！」

この時、迷宮兄弟・弟は自分達の勝利を確信していた。

「（フフフ、私が今伏せたのは『ストライク・ショット』！
攻撃力を上げると同時に、守備モンスターに対する貫通効果を与える罠カード。
これで我等の勝利は決した！！）」

それを伝えるように、迷宮兄弟・弟は兄に視線を送り
その視線の意味を感じ取った兄も、『コクリ』と頷く。
そんな中でも、十代は笑顔を崩さず翔に言い放つ。

「後は任せたぜ翔！お前のあのカードで、絶対勝とうぜ！」
「アニキ……うん！」

十代の言葉に励まされた翔に、もう迷いは無かった。

「（もう怖くはない。それ以上に僕はこの学園で強くなりたいと本当に感じている！
お兄さんのように、アニキのように、
そして僕に特訓してくれた遊夜くんや他の皆のように！
その為にも来て、僕のカード！！）」

翔はゆっくりと自身のデッキの上に手を置いた。

「僕のターン！」

失敗して転んだりもした、慢心して階段から落ちたりもした
だが今、それらの全てを乗り越えて翔は今確実に憧れる決闘者に近づいている。

「ドロー！！」

そしてその成長が呼んだカード、それは――――――

「（ありがとう僕のデッキ！！今こそ僕は、封印を解く！！）
僕は手札から魔法カード『パワー・ボンド』発動！！行くよ、アニキ！」
「おう！思いっきり行け！！」

十代の言葉と共に、翔の切り札パワー・ボンドが輝きだす。

「このカードは機械族専用の融合魔法！
場のアニキの『テンペスター』と僕の手札の『ユーフォロイド』を融合――――
出でよ！『ユーフォロイド・ファイター』！！」

ユーフォロイド・ファイター　☆１０　光属性　機械族　ＡＴＫ／？　ＤＥＦ／？

青白い電撃の中から、巨大な円盤に聳え立つテンペスターが現れた。

「あれはあたしの！！」

そのモンスターの出現に声を荒げたのは、千世だった。
そう、このカードは千世が持って来た何千のカードの中から十代が選び出した十代と翔を結びつけるカードなのだ。

「このカードは『ユーフォロイド』と戦士族モンスターを融合する事で現れる！
そして、このモンスターの攻撃力と守備力は融合素材にした2体のモンスターの攻撃力の合計した数値となる！！」

ユーフォロイド・ファイター　ＡＴＫ／？⇒ＡＴＫ／４０００　ＤＥＦ／？⇒ＤＥＦ／４０００

「それがどうした！」
「多少攻撃力が高くとも！」
「『ダーク・ガーディアン』は攻撃では破壊されず！」
「カード効果でも破壊されないのだぞ！！」

自分達の有利を信じて疑わない迷宮兄弟に対し
翔は勝利を確信した笑みを持って応える。

「わかってるさ！さらに『パワー・ボンド』の効果発動！
この効果で召喚された融合モンスターの攻撃力は２倍になる！！」

ユーフォロイド・ファイター　ＡＴＫ／４０００⇒ＡＴＫ／８０００

「「８０００だとぉぉぉぉっ！！」」

「アニキが先　教えてくれたのさ！モンスターは不死身でも
お前達は不死身じゃないんだ！
行けぇっ！“フォーチュン・テンペスト”！！！」

円盤より放たれた圧倒的破壊力を秘めた蒼白い光線が、
ダーク・ガーディアンを、そして後ろにいる迷宮兄弟達をも呑み込んだ。

「「うぐわぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」」

迷宮兄弟：ＬＰ／２２５０⇒０

光が晴れた時、ダーク・ガーディアンは消え去り
圧倒的な攻撃力でＬＰを０にされた迷宮兄弟は膝をついてうな垂れていた。
それを確認した瞬間、会場は一気に大きな歓声に包まれた。

同時に十代と翔は、お互いに抱き合い勝利を喜んでいた。

「「やったぁぁぁ！！」」

「よかった、これで彼らはこの学園に残れる。」

「強力なライバルになるのに嬉しいの？」

嬉しそうに言う三沢をからかう様に言い放つ明日香だが三沢は逆に微笑み返す。

「そんな君はどうなんだい？」

逆に聞かれてしまい、明日香は照れくさそうに言い放つ。

「私は別に……私のせいで彼らが退学になったら寝覚めが悪いでしょう。」

「ほほぉ～う……」

明日香の言葉に対し、横で会話を聞いていた叶絵が興味深そうに見つめて来た。

「な、何よ？」

「いや～明日香ってば、カイザーだけでなくもしかして十代っちとも……」

「黙りなさい！」

叶絵の言葉に即ツッコミを入れる明日香。

「にゃあ、明日香怒ってる？」

「怒ってるわよどう見ても。叶絵も少しは言葉に気をつけなさいよ。」

「あはははは……」

文乃の言葉に対し全く懲りてないように笑う叶絵の後ろで
家康は『明日香もツンデレなのか』と真剣に悩んでいた。

「いよっしゃあああぁぁぁぁぁぁぁっ！十代達が勝ったわあぁっ！！
このあたしのカードで！！！」

特別席で見ていた千世も喜びの声を上げていた。
特に、自身があげたカードで勝利したのが嬉しくてたまらないようで
その様子を、佐藤と鈴木は微笑ましく見つめていた。

喜ぶ者達がいる一方で、この結果を気に入らない者もいた。
この結果を見た万丈目は、『もうここには用が無い』とばかりに立ち去り
クロノスは尻餅をついて驚いていた。

「しょ、しょんナー！伝説の決闘者が負けるなんテー！！」

呆然とするクロノスの目前では、喜びに花を咲かす
十代と翔の姿があった。

「アニキ……僕……僕……う、うぅ……」
「泣くなよ翔、俺達は勝ったんだぜ？笑えよ、こんな感じで！」

そう言い十代は迷宮兄弟に向かって、お決まりのポーズを取った。

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

そう言い十代は、鮫島校長といまだに腰を抜かしたクロノスに視線を向ける。

「俺達は勝ったぜ！これで文句ねぇだろ！！」

十代の言葉に『うむ』と頷く鮫島。

「いい決闘を見せてもらった。もちろん君たちの退学は取り消そう。」

鮫島の言葉に『いよっしゃーっ！！』と喜びの声を上げる十代。

とここで鮫島は、視線をクロノスへと向ける。

「ではクロノスくん、次は幸谷　大吾郎くんの決闘では？」

鮫島の言葉に、周りのメンバーは今まで忘れていた事を思い出す。

そう、今の決闘が熱すぎてすっかり忘れ去られていたが

この決闘で十代と翔の退学処分は取り消しになったが

大吾郎は次の決闘に勝たなければ、退学取り消しにはならないのだ。

鮫島校長の言葉に、当の本人である大吾郎もデッキの最終チェックをしていた。

「大吾郎、絶対勝てよ。」

大吾郎の近くにいた隼人の言葉に『うむ』と頷く大吾郎。

「必ず勝って、皆とここに残ってみせる！」
「ならこれを受け取ってくれないか？」

意気込む大吾郎の後ろから、不意に掛けられた声に大吾郎と隼人が振り向くと
そこには、先程まで観客席にいた遊夜がいた。

「遊夜？」
「どうしたんだな？」
「なに、大吾郎にこれを渡したくてね。」

そう言い遊夜は、１枚の封筒を大吾郎に渡す。

「それを使うかどうかは、大吾郎に任せるよ。」

その遊夜の言葉に首を傾げながらも、大吾郎は封筒の中身を見る。

「！！こ、これは……」

その中身のモノに、大吾郎は驚きを隠せなかった。

『～第十一章～　制裁タッグ決闘！ＶＳ迷宮兄弟！！　《終》』

～第十一章～　制裁タッグ決闘！ＶＳ迷宮兄弟！！（後書き）

どうも、黒鋼です。
結構長くなりました制裁決闘デュエル、如何でしたでしょうか？
今回のタッグ決闘も、やっぱり前と同じタッグフォース・ルールです。
それと十代が漫画版のヒーローを使うのもあった為、
決闘内容を色々と変えてみました。
また、翔の持つ『ドリルロイド』
自分結構好きなのでこのモンスターを活躍させる為に、
『シールド・クラッシュ』は無しにしました。
ここまで色々変えましたけど、たった１つ変えなかった事があります。
それは、『ユーフォロイド・ファイター』で止めを刺した事と
融合素材の戦士族を『テンペスター』にした事です。
ここは自分の拘りの様なものでしょうか、そこだけは変えたくなかったんです。
ともあれ、次回は大吾郎の決闘です。
大吾郎のデッキは、きっと分かる人には分かりますよね？
そしてその対戦相手は、誰もが知っているあの男です！
このお話をよく読んだ遊戯王ファンなら分かりますよね？
ではまた次回、お会いしましょう～♪

今回の最強カード『ユーフォロイド・ファイター』
☆１０　光属性　機械族　ＡＴＫ／？　ＤＥＦ／？
「ユーフォロイド」＋戦士族モンスター
このモンスターの融合召喚は、上記のカードでしか行えない。

このカードの元々の攻撃力・守備力は、融合素材にしたモンスター2体の元々の攻撃力を合計した数値になる。

十代と翔のモンスターが融合した姿。
この話でカードは、以前千世が出したカードの中から2人が選んでもらった物という設定で出してみました。

～第十二章～　荒海の決闘！！友情のシンクロ召喚！！（前書き）

前回までのあらすじ
退学を賭けた制裁決闘。第一戦の十代と翔のタッグ決闘では
決闘王国で武藤遊戯と城之内克也を追い詰めた迷宮兄弟と対決！
激戦の末に翔と十代のモンスターの合体により勝利し、
次は大吾郎のシングル決闘となった。

～第十二章～　荒海の決闘！！友情のシンクロ召喚！！

十代と翔が迷宮兄弟に勝利し熱気溢れる中、クロノスは1人歯軋りを立てていた。

「（ぐぬぬぬ～ノ！まさかあのドロップアウトボーイズが、伝説の決闘者を打ち破るなんーテ！しかっし！まだ一戦残ってるノーネ！）」

そう考えたクロノスは、再びマイクを手に決闘場に上がる。
と同時に、やって来た大吾郎も決闘場に上がる。
その際、十代達と共に応援する遊夜に視線を向ける。

「（遊夜……我が友よ。お前の貸してくれた力、存分に使わせて貰うぞ！）」

その大吾郎の視線に対し、遊夜が頷いたのを確認した大吾郎は改めて決闘場に立ち、それを確認したクロノスがマイクを手に声を上げる。
「ではコレより、制裁シングル決闘を始めるーノですネ！」

「さて、十代達が勝って今度は大吾郎か。」

クロノスの声がマイクで響く中、三沢がそんな事を呟く。

「そういえば、彼ってどんなデッキを使うの？」

三沢に続くように言う明日香の言葉に『そう言えば』と
文乃・希・叶絵の3人は今頃気づいたような表情になる。
確かにこれまで、大吾郎の決闘を見る事の無かった文乃達が知る筈もない。
なので一同の視線は、大吾郎との付き合いの長い家康に向けられる。

「で、どうなのよ家康。大吾郎のデッキは何なの？」

文乃の言葉に家康は『ふあ？』とアクビをしながら答える。

「んまぁ、アレだ。大吾郎の性格を考えれば自然と分かるぞ？」
「…にゃあ、分かった。」

家康の言葉に対して『コクリ』と頷いた希に、
文乃達は『え！？』と目を丸くする。

「希っち、大吾郎のデッキ分かったの？」

叶絵の言葉に対し、希は静かに頷いた。

所変わって文乃達のいる席から少しは慣れた所の一際目立つ特別席、
そこに座る千世はこれまでに無いくらいニヤ付いていた。

「くくくくく、十代達は勝ったわ！このあたしのカードで！！
それに続き大吾郎が次の決闘で勝てば……ぬふふふふ～♪」
「千世様、随分嬉しそうですね。」
「無理もありませんわ、自分の上げたカードで十代様達が勝利し
クロノス教諭の鼻を折ったのですから。」

喜びに溢れる千世を、優しい目で見つめる佐藤と鈴木であった。

さらに所変わって先程まで大吾郎が隼人と共に居た所に、
大吾郎と入れ替わるように十代と翔、そして遊夜が来ていた。

「大吾郎くん、大丈夫かなぁ……」
「なぁに、大吾郎なら大丈夫だって！アイツだってかなり強いらしいじゃん！！」

大吾郎を心配する翔に『ニカッ』と笑ってみせる十代。
その横で隼人も『確かに』と呟いた。

「それに大吾郎は、ひょっとしたらこの決闘でとんでもない事をするかもしれないんだなぁ。」
「とんでもない事？」
「どういう事だよ隼人？」

隼人の言葉に首を傾げる十代と翔に、隼人は『チラッ』とニコニコ微笑む遊夜に視線を向けた。

またまた所変わって十代達のいる所から少しは慣れた所に壁に寄りかかる亮の姿があった。

「先は良い決闘だったね。」
「……珠緒くん、君か。」

不意に近づいてきた珠緒にそう言い放つ亮。

「弟の翔くんだっけ？いい決闘見せてくれたね。」
「……あぁ、そうだな。」

亮はそう静かに、だがはっきりと言い放つ。
一見ぶっきら棒に見えるが、それは亮の冷静な性格上仕方ない事だと言う事を
珠緒は知っていた。

「フフ、次の決闘も見るの？」
「……幸谷　大吾郎、彼は十代に続くレッド生徒の中でも指折りの決闘者と聞く。
今年のレッド生徒は面白い者が多い。」
「その中に、君の弟くんは入ってるのか？」

そう言い放つ珠緒に対し、亮は誰にも気づかれないくらい静かにほんの少しだけ、微笑んだ。

「それで、次の相手は誰なのかね？」

決闘場より程近い席よりクロノスにそう言い放つ鮫島に、
クロノスは不気味に微笑む。

「先程の迷宮兄弟と同じよ～ニ！伝説ーノ決闘者を呼んでありますーノ！！」

そう言いクロノスは、会場の出入り口の一角へ指を指す。
そしてそこには――――――――

――――――誰もいなかった。

「……あ、アレ？ナ、ナンで誰も居ないノーネ？」

クロノスがキョトンとする中、周りの席からも『ザワザワ』と声が上がる。

とその時――――

「ガッハハハハハハすまんすまん！海で漁しとったら時間の事忘れとってのー！！」

出入り口の奥から、奇妙な土佐弁が聞こえてきたかと思うとそこから、黒いボサボサしたワイルドな髪にどこぞの漁師の様な格好をした色黒の青年が現れた。

その青年の姿に、大吾郎は目を丸くした。

「お前は…！！」
「ん？お前　海であったフンドシ野郎じゃんけ。」
そうこの青年、大吾郎が決闘前に海で清めの儀式をしている時に出会った
あの時の青年である。
「ナンですーノ？2人は知り合いですーノ？？」
クロノスが首を傾げる中、大吾郎はクロノスの方を向く。
「クロノス教諭、もしや俺の対戦相手は……」
「ん？んまぁそうなのーネ。」
そう言いクロノスは、青年に手を向けマイクで言い放つ。
「彼は“梶木（かじき）　漁太（りょうた）”！！
彼もまたデュエルキング武藤遊戯とその友である城之内克也と対戦した事がある伝説の決闘者なのですーノネ！」
そう、大吾郎の対戦相手は決闘者の王国（デュエルスト・キングダム）では遊戯とバトルシティで城之内と激戦を繰り広げた海の決闘者、あの梶木漁太である。
「迷宮兄弟に続き、今度は梶木　漁太か！」
「確かに彼の噂は聞いた事があるわ。数々の決闘大会に出場し上位に食い込む
賞金稼ぎ屋、海の決闘者！！」

三沢と明日香が驚きの声を上げる。

「おー伝説の決闘者達と会えるなんて、私達は幸運だZE(ゼ)！！」

「んな事言ってる場合!?

私としてはアイツがどうなろうと知った事じゃないけど……」

「にゃあ、文乃、嘘。」

「全くだ、芹沢　ツンデレは二次元の特権なんだぞ！

即刻その性格の改善を要求する……」

「2回死ねーっ！！！」

家康の言葉に、文乃のキックが炸裂し家康は天高く舞い上がるのだった。

家康が天へと召されていた頃、特等席に座っていた千世の顔から先程までの嬉しそうな表情が消えていた。

「梶木　漁太、確かアイツって決闘大会にもよく出てたのを見たわね。」

「はい、別名を“海の決闘者”元は漁師の息子だったそうです。」

「自身の船を買う為に決闘者になった賞金稼ぎ屋だそうです。」

佐藤と鈴木の言葉に千世は『むぅ』と考え込んだ。

「……大吾郎のデッキは？」

「はっ、ここにその資料が。」

佐藤の出した資料に目をやる千世は、その内容にたった一言だけ呟いた。

「……なんて言うか、アイツらしいデッキね。」

「すっげーっ！！俺あの人とも決闘したかったなぁーっ！！」

新たな伝説の決闘者の登場に、十代は興奮しまくりだった。

「梶木　漁太か、後で決闘頼んでみようかな？」

「アニキも遊夜くんも能天気すぎっすよ。」

十代（決闘バカコンビ）と遊夜に対しツッコミを入れる翔の隣で、

隼人は遊夜に対し口を開いた。

「……なぁ遊夜。」

「ん？何だ？」

「先　大吾郎に何か渡してたみたいだったけど、何を渡したんだなぁ？」

隼人の言葉に対し、遊夜は『ふふ』と微笑み口を開く。

「それは、大吾郎の決闘を見れば分かるよきっと。」

そう言い遊夜は、視線を決闘場に移した。

「まさか海辺で会ったお前が対戦相手とはな。」

「ガッハハハハハハ、人生何が起こるか分からんもんじゃのう！」

意外で早い再開に笑い合う大吾郎と梶木。

そんな2人をみていたクロノスが業を煮やし、『オホン！』と声を上げる。

「2人共、そろそろ決闘の準備をしてほしいノーネ！」
「む、そうであったな。」
「ま、決闘する以上は手加減はせんぜよ！」
「無論！真剣勝負と行こう！！」

そう言い互いにそれぞれの位置につき決闘盤（デュエル・ディスク）を構える。

「では改めて、コレより制裁シングル決闘を始めるーノですネ！」
「おう！俺は“梶木（かじき）　漁太（りょうた）”！！海の決闘者じゃ！！」
「うむ、“幸谷（こうや）　大吾郎（だいごろう）”、オシリスレッド1年生だ！」
「そうか！なら行くぜよ大吾郎！」
「来い梶木！！」

「「決闘っ！！」」

大吾郎：ＬＰ／４０００
梶木：ＬＰ／４０００

ここに、制裁シングル決闘が始まった。

「先行はもらう！ドロー！！」

大吾郎は引いたカードを確認し、即座にそれを決闘盤にセットする。

「俺は『紫炎の足軽』を守備表示で召喚！！」

紫炎の足軽　☆2　地　戦士族　ＡＴＫ／７００　ＤＥＦ／３００

大吾郎の場に、足軽の甲冑を身に着けた猿が現れた。

「さらに手札から永続魔法『六武衆の結束』を発動！
そしてカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」
「ほぉ、六武衆デッキか。」

大吾郎の出したカードを見て、梶木は即座に大吾郎のデッキスタイルを見抜いた。

「成る程な、確かに大吾郎らしいデッキだ。」

大吾郎の決闘を見ていた三沢の口から、そんな言葉がこぼれる。
いや彼だけでは無い。大吾郎の古風な武士道的な性格は
この学園では結構有名であり、彼の決闘を見ていた会場の観客の大半が
三沢と同じ考えを持っていた。

「な？だから言ったろ。」
「確かに、すんごく大吾郎らしいデッキね……」

家康の言葉に、大いに納得のする文乃であった。

「いくぜよ！俺のターン！！」

自分のターンとなった梶木は、自陣のデッキからカードを引き
手札状況を確認。即座に最初の一手を決める。

「俺は手札からフィールド魔法『伝説の都（でんせつみやこ）　アトランティス』発動
！！」

梶木が１枚のカードをフィールド魔法ゾーンに入れた瞬間、決闘フィールドが
古の時代に繁栄しながらも、海の神ポセイドンの怒りに触れた事で
一夜にして海底のそこに沈んだ、伝説の海底遺跡へと変貌した。

「これは……！？」

「海底に沈んだ伝説の都、アトランティスぜよ！
こいつはカード名は『海』として扱い、
手札と場にいる水属性モンスターの☆（レベル）を１つ下げる！
これにより☆５の『神竜（しんりゅう）アクアバザル』は☆４となり
生け贄無しで召喚できる！！」

神竜（しんりゅう）アクアバザル　☆５⇒☆４　水　海竜族　ＡＴＫ／２１００
ＤＥＦ／１５００

梶木の場に、赤い尾鰭を持った青白い海の竜が現れた

「さらに『伝説の都　アトランティス』の効果により
水属性モンスターの攻撃力・守備力は２００Ｐアップする！！」

神竜アクアバザル　ＡＴＫ／２１００⇒ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１５００⇒ＤＥＦ／１７００

「さらに手札から永続魔法『フィールドバリア』発動！」

梶木の発動した永続魔法より放たれた緑色のオーラが、アトランティス全体に溶け込んでいく。

「これによりフィールド魔法カードを破壊されず、新たなフィールド魔法カードを発動する事もできんぜよっ！」

「くっ！」

「いくぜ大吾郎っ！『神竜アクアバザル』で『紫炎の足軽』を攻撃！！

“アクア・プレッシャー”！！」

神竜アクアバザルの口内より放たれし激流の水圧に紫炎の足軽は耐える事ができず粉砕された。

「ぐっ！だが戦闘で破壊された事で『紫炎の足軽』の効果を発動する！

デッキから☆３以下の『六武衆』を１体出陣させる！

さらに罠発動！『六武の狼煙』！

場のモンスターが戦闘で破壊された時、

デッキから☆４以下の『六武衆』を１体出陣させる！！

俺は２体の『六武衆』を出陣させる！！

出陣せよ！『六武衆ーザンジ』！！『六武衆ーカモン』！！」

六武衆ーザンジ　☆４　光　戦士族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／

１３００
六武衆（ろくぶしゅう）ー カモン　☆３　炎　戦士族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００

大吾郎の場に、金色に輝く甲冑を着込み薙刀を手にした武士と紅い甲冑を着込み、キッセルを加えダイナマイトを手にした武士が現れた。

「ほぉ、一気に2体のモンスターを召喚したか。」
「それだけではない！永続魔法『六武衆の結束』は場に『六武衆』が召喚・特殊召喚に成功する度に、“武士道カウンター”を1つ乗せる事ができる！俺は2体の『六武衆』を出陣させた、よって“武士道カウンター”を2つ乗せる！」

六武衆の結束　武士道カウンター：０⇒武士道カウンター：２

「やるの大吾郎。俺はこれでターンエンドじゃ！！」

「さすがに、あの“武藤　遊戯”や“城之内　克也”と渡り合った伝説の決闘者なだけはある。」

観客席で大吾郎との決闘を見ていた三沢の口から、そんな言葉がこぼれた。

「『伝説の都　アトランティス』、フィールドを海へと変え

水属性モンスター達の召喚を容易にし、さらには能力値すらも上げるあのデッキのキーカードだな。」

「そしてさらに厄介なのは、あの『フィールドバリア』。アレがある限り、『アトランティス』を破壊する事も新たなフィールド魔法を発動する事も出来ない。」

明日香の言う通り、フィールドバリアが存在する限り破壊はもちろん新たなフィールド魔法の発動も出来ない。つまりアトランティスを消し去るには、バウンス系カード等でないと意味を成さないのだ。

「ま、大吾郎も唯じゃやられなかったみてぇだがな。」

そんな暗い状況を一笑するかの様に言い放つ家康。確かに、大吾郎も唯やられただけではない。破壊されたのはリクルーターだったし、リバースカードでさらにモンスターを特殊召喚させ数の上では梶木を上回っている。しかも召喚したのは六武衆だ。

「『六武衆』は数を揃えて効力を発揮するモンスターだったＮＥ（ネ）！！」

「にゃあ、ここから大吾郎の反撃。」

「あのバカにそんな戦略があればね。」

家康の言葉に同意するように言う叶絵と希、それに相変わらず素直じゃない口調で便乗する文乃であった。

「おぉ、すっげーっ！」

一方こちら十代達のいる所では、十代異様に興奮していた。

「ちょっとアニキ落ち着いて。」

「だってよすげーじゃん！いきなり上級モンスターを召喚したと思ったら

大吾郎は一気に2体のモンスターを揃えたんだぜ！！こっからどんな決闘になるのか

俺すっげーワクワクして来た！！」

眼を輝かす十代に、『はぁ』とため息をついた翔は説得を諦めた。

「大吾郎の『六武衆』は結束力で決闘を制するデッキ。

ここからが本番だ。」

遊夜の言葉に、『その通りなんだな』と頷く隼人と共に

遊夜は視線を大吾郎へと向けた。

「俺のターン！ドロー！！」

カードを引いた大吾郎は、引いたカードと手札状況を確認し

即座に自分が取るべき次の一手を決める。

「『六武衆の結束』の効果を発動！このカードを墓地に送る事で、

このカードに乗っていた“武士道カウンター”の数だけ

デッキからカードをドローする！！

乗っていた“武士道カウンター”は2つ、よって2枚ドロー！！」

2枚のカードを手札に加えた大吾郎は『うむっ』と頷き

視線をカモンへと向けた。

「『六武衆ー カモン』のモンスター効果発動！
自分の場に『カモン』以外の『六武衆』が存在する時、
このカードの攻撃を放棄する代わりに
表側表示で存在する魔法または罠カード１枚を破壊する事ができる
！！
永続魔法『フィールドバリア』を破壊する！！“爆炎弾（ばくえんだん）”！！」

大吾郎の言葉と共に、カモンは自身の持つ数本の爆竹を束ねた物を
フィールドバリアへ向かって投げ打つ。
それと同時に爆発が起こり、フィールドバリアは消し炭となった。

「さらに『六武衆ー ヤリザ』を攻撃表示で召喚！！」

六武衆ー ヤリザ　☆３　地　戦士族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／
５００

大吾郎の場に蒼い甲冑に身を包み、紐のついた槍を携えた武士が現
れた。

「バトルだっ！『六武衆ー ヤリザ』で攻撃！！」
「なにっ！？」

大吾郎の攻撃宣言に、梶木はもちろん会場内の全員が驚いた。
梶木の場には攻撃力２３００の神竜アクアバザルがいるのだ。
にも拘らずよりにもよって、大吾郎のフィールドにいるモンスター
の中で

1番攻撃力の低いヤリザで攻撃するなど一体どういうつもりなのか。

「自爆特攻か!?」

「それは違う!『六武衆ーヤリザ』は自分の場に『ヤリザ』以外の『六武衆』が存在する時、相手を直接攻撃する事ができる!!」

大吾郎の言葉に『なに!?』と驚く梶木の眼に、槍を構えるヤリザの姿が写る。

その姿、まさに戦国時代に“槍の又左”と恐れられし加賀の猛将の姿だった。

「行け『ヤリザ』!“蒼天(そうてん)投槍撃(とうそうげき)”!!」

ヤリザの投げ打った槍が、梶木の体を貫く。

「ぐあぁっ!!?」

梶木：ＬＰ／４０００⇒３０００

槍が梶木の体を貫き、ＬＰが削られると槍は紐に引っ張られヤリザの手元へと戻っていった。だが、大吾郎の攻撃はそれだけではなかった。

「続けていくぞ!『六武衆ーザンジ』!!『神竜アクアバザル』を攻撃しろ!!」

「なっ!!?」

大吾郎の更なる攻撃宣言に、梶木は動揺を隠せなかった。
先程の直接攻撃（ダイレクトアタック）と違い、今度はモンスターを攻撃して来たのだ。

「（モンスター効果か……それとも速攻魔法か何かか！？）」

先程の攻撃もあり、相手の狙いを見定めようとする。

「行け『ザンジ』！！“示現（じげん）雷光閃（らいこうせん）”！！」
「っ！！（速攻魔法じゃない！？）迎え撃て！“アクア・プレッシャー”！！」

アクアバザルの放つ水圧に向かって、ザンジが光輝く薙刀を投げ打つ。
薙刀は水を飛び越えアクアバザルに突き刺さるが、
アクアバザルの攻撃は止まらずザンジに迫る。

「何のつもりかは知らんが、これでザンジは返り討ちじゃ！！」

梶木の言葉の通り、アクアバザルの放つ水圧がザンジを襲った。

「ぐうっ！！」

大吾郎：ＬＰ／４０００⇒３５００

大吾郎のＬＰが削られ、梶木は『してやったり』といった表情となった。
だが次の瞬間、その表情は凍りつく事となった。

「……ん？」

梶木はおかしな事に気づいた。確かにＬＰは予想通り減っている。
にも拘らず、アクアバザルの放つ水圧は一行に納まらない。
不思議に思った梶木が眼を凝らしてザンジを見てみる。
そして梶木は気づいた。ザンジに水が一切届いていない事が。
そして何かが邪魔をしている事に。

「な、何じゃ！？」

不審に思った梶木がさらに眼を凝らして見てみると、
水とザンジの間に何かがある、いや何かが居る。
眼を凝らした梶木の眼に映ったもの、それは先程自分を貫いたヤリザだった。

「ど、どういう事じゃ！？」
「『六武衆』の結束は不滅だ！
『六武衆』は破壊される時、他の六武衆を身代わりにする事ができる！！」

大吾郎の言葉に『何じゃと！？』と驚く梶木に対し、
大吾郎は目を瞑りながら語りだす。

「死して仲間を守ろうとする『六武衆』。
その結束は死して尚続き、永遠に不滅だっ！！」

大吾郎の言葉と同時に、ヤリザはザンジを庇って消滅したが
その表情は穏やかそうだった。

「そして『六武衆ーザンジ』の効果発動！

このカードが攻撃を行ったモンスターをダメージステップ終了時に破壊する！！」
「何じゃとっ！！？」

驚いた梶木がアクアバザルを見てみると、
ザンジの薙刀が刺さった所からヒビが入っていき、そのまま崩壊していった。
それと同時に、薙刀は回転しながらザンジの手元へ戻って行った。

「『六武衆』の結束は死して仲間を守る！俺はターンエンドだ！」

「ほぉ、十代君や翔君もそうだったが、
今年のレッドは中々やりますな大徳寺先生。」

大吾郎の決闘を見ていた鮫島校長が、
自分の後ろの席に居る大徳寺に話しかけると
大徳寺は『ニコッ』と微笑み返した。

「はい。十代君も大吾郎君も勉強は苦手でも
決闘の腕前は折り紙つきですにゃ。」
「大吾郎くーん、ファイトーッ！！」

大徳寺に続くように乙女が声援を送る中、
やっぱりと言うかお決まりと言うかこの状況を面白く思わない者が居た。
ご存知、クロノスだ。

「（くぬぬ～っ！ドロップアウトボーイの分際ーデ！

さっさと負けてしまいなさいーノ！！）」

大吾郎が負けて、十代達を落ち込ませるつもりだったクロノスだが、大吾郎は予想以上に踏ん張っている。

『肉を切らせて骨を切る』とは言うが、彼の戦略はまさにそれだ。
自軍のモンスターを犠牲に相手モンスターを破壊する諸刃の剣。
だが、それは決して大吾郎１人の意思ではない。
死しても仲間を守りたい、殿を守りたいと願う六武衆だからこそこの戦略が可能なのだ。
その事を大吾郎は、本能的に知っていた。

「俺のターンじゃ！！」

梶木はドローしたカードを確認しながら、視線を大吾郎へと移す。

「肉を切らせて骨を切るとはよく言うが、今のはまさにそれじゃのう！
やるじゃねぇかっ！」
「うむ、お前も速攻で上級モンスターを呼ぶとは、やるな梶木！」

お互いに微笑み合う梶木と大吾郎。
この２人、浜辺で出会った以前に何処か似ている。
互いに譲れない独特の精神を持っているのだ。
梶木は海の生き様を信奉し、大吾郎は古風な武士道精神を信奉する。
この２人、もっと違う形で出会っていれば親友になれたかもしれない。
だが、今は互いに闘い合う決闘者。手を抜く気は無い。

「（『六武衆』の結束、予想以上に厄介じゃ……じゃが！）」

梶木は即座に、手札のカード1枚に手を伸ばす。

「手札から装備魔法『生命（せいめい）の海（うみ）』を発動！！
フィールドが『海』の時、墓地の水属性モンスターを1体を特殊召喚し
このカードを装備するぜよ！来い、『神竜アクアバザル』！！」

神竜アクアバザル　☆4　水　海竜族　ＡＴＫ／2300　ＤＥＦ／1700

梶木の場に神竜アクアバザルが舞い戻ってきた。
だが梶木の戦略はこれだけではない。

「さらに俺は『神竜アクアバザル』を生け贄に捧げ――
来い！！『海竜一ダイダロス（リバイアドラゴン）』！！」

海竜一ダイダロス（リバイアドラゴン）　☆7⇒☆6　水　海竜族　ＡＴＫ／2600　ＤＥＦ／1500

梶木の場にイギリスの軍艦の名を持った蒼い海竜の王が現れた。
本来なら☆7のこのカードもアトランティスの効力で☆6となり
生け贄1体で召喚される。

「最上級モンスターをこうもあっさり……」

「まだじゃっ！お前には海の恐ろしさを教えてやるぜよ！！」

そう言い梶木は、フィールド魔法ゾーンに手を伸ばす。

「『海竜－ダイダロス』の効果発動！
自分フィールド上の『海』を墓地に送る事で、
このカード以外のフィールド上のカードを全て破壊する！！」
「なにっ！？」

大吾郎が驚く中、梶木が海とされているアトランティスを墓地に送り、
それと同時に強い地鳴りが起こる。
それはアトランティスの崩壊の地鳴りだった。
アトランティスの崩壊と共に、梶木のバックから巨大な津波が巻き起こっている。

「全てのカードを薙ぎ払え！！“破滅の大津波（ショック・ダイダルウェーブ）”っ！！」

全てを破壊する強大なる津波が、大吾郎のカードを飲み込んでいく。
いかに互いを守る六武衆の結束も、全てを飲み込む自然の大災害の前には
その力にも限界があった。

「ぐおぉっ！！」

そして荒波が引いた時、そこに六武衆の姿は無かった。

「これでお前の場はがら空きじゃっ！行け『海竜－ダイダロス』！
プレイヤーに直接攻撃（ダイレクトアタック）じゃ！“リヴァイア・ストリーム”！！」

ダイダロスの口内より放たれる青白い波動の光線が、
容赦なく大吾郎を貫く。

「ぐわあぁっ！！」

大吾郎：ＬＰ／３５００⇒９００

大吾郎のＬＰが大いに削られ、一気に風前の灯へとなってしまった。

「俺はこれでターンエンド！！どうじゃ大吾郎！これが海の力ぜよっ！！」

「マズイな、ＬＰ（ライフ）が一気に減ってしまった。」
「形勢は一気に逆転ね。」

大吾郎の劣勢に三沢と明日香が的確な事を口にする。
梶木がＬＰ／３０００に対し、大吾郎のＬＰは一気に９００と１００以下になってしまった。
この差を覆すのは中々至難の技だ。

「それだけじゃないわ。あの梶木って奴のモンスター。
『ダイダロス』は『海』があれば何度でもフィールド上のカードを破壊できる。」
「つまり次の梶木（奴）のターンで、奴がまた『アトランティス』
もしくはフィールド魔法サーチのカードを引いたら、大吾郎はアウトだぜ。」

文乃と家康の言葉に、場に重い空気が漂う。

「（何とかしなさいよ！大吾郎（アンタ）が退学になったら遊夜の奴がどんなに悲しむか……

べ、別に私は遊夜（アイツ）が泣こうが喚こうが知ったこっちゃ無いけど、

アイツが泣いたらこっちが迷惑だから……それだけなんだからね！）」

文乃は心の中で喚きながら、視線を決闘場に向けるのだった。

文乃達が心配そうにする中、正反対に満足げな笑みで決闘を見るクロノスがいた。

「イヒヒヒ、いいデスーヨ、コレいいデスーヨ。

流石はデュエルキングと闘った伝説の決闘者なのーネ。

これであのドロップアウトボーイはお終いなのーネ♪」

そう言い微笑むクロノスの後ろの席に座る鮫島校長は

『ふむ』と唸りながら決闘に見入っていた。

「これは不利になって来ましたねぇ。」

「う～む、ここからが大吾郎くんの踏ん張り所ですかにゃぁ～？」

「にゃー」

「ファラオもそう思うかにゃ？」

デブネコことファラオの喉を撫でながら

大徳寺は視線を大吾郎へと向けた。

「ふっ、やってくれるな梶木！
（とは言え、まさかここまでＬＰを削られるとは……）」

一方の大吾郎は、予想以上のＬＰの軽減に内心焦っていた。
現在　自分のＬＰは１０００以下。
後一発でもモンスターのダイレクトアタックを受ければ即ゲームオーバーだ。
普通の学生なら、この時点で諦めるだろう。
だが翔が諦めなかったのは、十代や兄である亮
それに遊夜達の存在が会ったからだ。
そしてそれは大吾郎も同じ、自分を友と接してくれた遊夜達の為にも負けることは出来ない。そおして幸いにも、大吾郎は実家の武道で心身共に鍛えられているが故、翔のように諦めようとはしない。
降参する位なら最後まで戦って負ける、彼の持つ武士道、大和魂が彼を諦めさせなかった。

「俺のターン、ドロー！！」
「（ほぉ、この状況で諦めんのか。）」

その大吾郎の覇気に梶木も感心する中、
大吾郎は引いたカードを見た瞬間眼を丸くした。

「（このカードは！）」

そのカードを見た瞬間、大吾郎は視線を観客席にいる遊夜へと向けた。

「（引き当てたんだな、大吾郎。）」

大吾郎の視線に、遊夜は自分の授けたカードを大吾郎が引き当てた事を察する。

その遊夜の表情に、隣にいた隼人は何かを感じ取った。

「（遊夜、アイツ何をしたんだ？）」

疑問を覚えながらも、隼人は視線を大吾郎のいる決闘場へと戻した。

「（この局面で、このカードを引くとはな。）」

そう思いながら、大吾郎は視線をフィールドに向ける。

自分の場には何もなく、相手の場には攻撃力２６００を誇るダイダロスがいる。

状況は自分が圧倒的に不利。

この状況を打開するには引いたこのカードを使うしかない。

大吾郎に迷いは無かった。

「（使わせてもらうぞ、遊夜！）」

「ほぉ、何かキーカードでも引いたか？」

そんな大吾郎の思いを感じ取ったのか、梶木が語りかける。

それに対し大吾郎は『ふっ』と微笑み返した。

「あぁ、友より授かりしカードをな。それを今見せる！」

そう言い大吾郎は、引いたカードを大きく掲げる。

「行くぞ！俺はチューナーモンスター『不滅の武士』を召喚！！」

不滅の武士　☆３　闇　戦士族　ＡＴＫ／１１００　ＤＥＦ／１００

大吾郎の場に、漆黒の甲冑に身を包み長槍を手にした武士が現れた。
それは歴戦の決闘者である梶木でも見たことの無いモンスターだったが、
梶木が、いやここに居る殆どの者が驚いた理由は別にあった。
それは大吾郎がこのモンスターを召喚する際に言った
モンスターのカテゴリーにあった。

「チューナーモンスター！？」
「バカな！？」
「何故彼が！？」
「ほぉ。」
「にゃぁ。」

誰もが驚きの声を上げる中、学生及び教師達は思い出す。
大吾郎はこのカードを『友より授かりしカード』と言った。
この学園でチューナーモンスターを持っている決闘者は２名。
その内、大吾郎が最も友と呼ぶ者と言えば１人しかいない。
自然と生徒達と教師達の視線は、その人物―遊夜へと向けられる。

「遊夜お前、大吾郎に！」
「いつの間に渡したんすか！？」
「先の袋は、アレだったのか！？」

質問してくる十代、翔、隼人に対し遊夜はただ無言で微笑んだ。
それは、十代達の考えが正解だと言う無言の返事だった。

「チューナーモンスターじゃと？」

大吾郎と対峙する梶木が首を傾げる中、大吾郎は静かに『そうだ』と言い放った。

「梶木！これこそ友より授かりしカード！その力を見せてやろう！
『不滅の武士』の効果発動！このカードが召喚に成功した時、
自分の墓地に存在する☆４以下の戦士族モンスターを
モンスター効果を無効にして守備表示で特殊召喚できる！！
俺は墓地から『六武衆ー ヤリザ』を守備表示で召喚！！」

六武衆ー ヤリザ　☆３　地　戦士族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／５００

大吾郎の場に、ヤリザが蘇った。

「行くぞ！☆３の『六武衆ー ヤリザ』に☆３の『不滅の武士』をチューニング！！」
「な、何じゃっ！？」

梶木が驚く目の前で、
不滅の武士が緑色のリングとなり、ヤリザもその身を３つの星に変える。
そして一直線に３つに並んだ星は光に包まれる。

「刃と十手交わりしとき、、江戸の世より現代に現れん。悪を捕縛せよ！
シンクロ召喚！！であえっ！『ゴヨウ・ガーディアン』！！」

ゴヨウ・ガーディアン　☆６　地　戦士族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２０００

光が弾けその中から、歌舞伎に出てくるような化粧し紐のついた十手を持った江戸時代の捕り方が現れた。

「な、何じゃ！？何が起こったんじゃ！？」

突然の出来事に付いていけない梶木。
最初は誰もシンクロ召喚を見たらこうなるものである。
大吾郎はシンクロモンスターの説明を始める。

「これは我が友の父君が生み出したカードだ。
シンクロ召喚は、チューナーモンスター１体とそれ以外のモンスター１体以上を
墓地に送ることで、その合計の☆と等しいシンクロモンスターを融合デッキから特殊召喚するのだ！」
「融合デッキからって、そんなのアリか！？」

シンクロモンスターの事に驚く梶木だったが、それも一瞬の出来事だった。

「ではバトルだっ！『ゴヨウ・ガーディアン』で『海竜－ダイダロス』を攻撃！！
“ゴヨウ・ラリアット”！！」

大吾郎の攻撃宣言と共に、ゴヨウ・ガーディアンは自身の持つ紐付き十手をダイダロス投げつける。
ダイダロスは口から光線は出して応戦するも、
十手は光線すらも切り裂き、十手攻撃でダイダロスは破壊された。

「ぐうぅっ！！」

梶木：ＬＰ／３０００⇒２８００

ダメージの余波が梶木を襲う。
だが大吾郎の、いやゴヨウ・ガーディアンの力はこんな物ではなかった。

「さらに『ゴヨウ・ガーディアン』のモンスター効果発動！“捕縛劇”！！」

大吾郎の言葉と共に、ゴヨウ・ガーディアンの紐付き十手が
破壊した筈のダイダロスを縛り上げ、自分の場に引っ張り出したのである。

「な、何事じゃ！？」
「『ゴヨウ・ガーディアン』のモンスター効果！
このカードが戦闘で破壊したモンスターを捕縛し、
守備表示で俺の場に特殊召喚できる！！」

ゴヨウ・ガーディアンに捕縛されたダイダロスは
地面にたたき付けられ、その上からゴヨウ・ガーディアンは踏みつけるように
決めポーズを取った。
「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

「まさか、彼がシンクロ召喚を行うとはね。」
観客席で三沢はそう呟いた。
優れた観察眼を持つ彼でも大吾郎がシンクロ召喚をする事はさすがに予想外だったらしくかなり驚いている。

「いや～遊っちてばいつの間に用意してたんだろうねぇ～♪」
「あ～、遊夜の奴　今朝　言ってたのはそう言う意味だったのか。」
不意に言った家康の言葉に『どういう意味よ？』と
文乃がぶっきら棒に、それでいて興味がありそうに聞きだす。

家康が言うには、今朝方　遊夜に出会ったのだが妙に機嫌が良かったそうなのだ。
大吾郎達の退学の掛かった制裁決闘の日だと言うのに
その機嫌の良さを妙に思った家康が聞いてみた所
『ペガサス会長が新たなカードを送って来てくれたのさ。
いや～まさかこの日にこんなカードが届くなんて、
こういうのを運命って言うのかなぁ？』
とにこやかに言ったそうだ。

「つまり、ペガサス会長から届けられたカードっていうのがあのカード達って訳ね。」

明日香の言葉に『そゆこと』と返す家康。

「にゃあ、グットタイミング。」

希の言葉に『うんうん』と頷く面々であった。

「まさか大吾郎がシンクロを使うなんて……」

所変わってコチラ、特別席に座る千世も大吾郎のカードに驚いていた。

とそこへ、メイドである佐藤と鈴木が戻って来た。

「千世様、調べた結果　大吾郎様が使われているカードは今朝方Ｉ2社のペガサス会長より届けられたものだそうです。」

「しかもそれは、遊夜様も知らなかったまさに偶然今日届けられた物のようです。」

佐藤・鈴木の報告に『ふ～ん』と何処か機嫌が悪そうに膨れる千世。

そんな千世の態度に対し、佐藤と鈴木は『ヒソヒソ』と話し合いだした。

「千世様、どうなさったのかしら?」

「きっと遊夜様が自分にでは無く大吾郎様にシンクロモンスターを渡した事に嫉妬なさってるんですわ。」

「あらあら、そんなにシンクロモンスターが欲しかったのでしょうか？」
「いいえ、愛しの人が自分以外の誰かにプレゼントをしたら女は嫉妬するもの……」
「あんた等聞こえてんのよおおぉぉぉぉ――――――――――っ！！！！！」
……訂正、全然ヒソヒソでは無かった。
さてさて、さらに所変わってコチラでは大吾郎の善戦に歯軋りを立てるクロノスの姿があった。
「な、何と言う事なノーネ！あんなドロップアウトボーイが、シンクロモンスターを使うだなんーテ！！」
「いや～まさかこんな形で再びシンクロ召喚が見れるとは。」
そんなクロノスとは逆に、大吾郎のシンクロ召喚に関心を示す鮫島。その隣で、乙女はにこやかに微笑んでいた。
「ふふ～ん、大吾郎くんもやるねぇ～。それにしても遊ってばいつの間に渡したのかしら？」
そう首を傾げつつも、決闘に目を向ける。

「俺のターンじゃ！」

梶木は引いたカードを確認し、視線をゴヨウ・ガーディアンへと向ける。

「（シンクロ召喚に、シンクロモンスターか……
なんつーカードを使ってくるんじゃ！それに……）」

梶木は視線を横へと移す。そこには、眼の奥で闘志を燃やす決闘者の目をした大吾郎の姿があった。

「（……似とるの、アイツに……）」

梶木の脳裏に懐かしきことが蘇った。

十数年前、童実野町で海馬コーポレーションが行った決闘大会『バトルシティ』。
そこで決闘し、再選を約束した男の顔が蘇る。
バカでおっちょこちょいで、戦士族を主力とし、
時に危険なギャンブルカードを平気で使い、
そして何より最後まで諦めようとしなかった本物のバカで一本気な男。

「（同じ戦士族って事もあるんじゃろうが、似とるの……城之内。）」

ふと、そんな事を思い出した梶木は『フッ』と微笑んだ後
視線を手札へと戻す。

「（そうじゃ、アイツは俺と戦った時も諦めなかった。
なら俺も諦める訳にはいかんの！）行くぜよ！俺は手札から『強欲な壺』を発動！！
その効果でデッキからカードを2枚ドローする！！」

カードを2枚引いた梶木は、手札よりカードを選択し手を伸ばす。

「『深海王（しんかいおう）デビルシャーク』を攻撃表示で召喚！！」

深海王（しんかいおう）デビルシャーク　☆4　水　魚族　ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／６００

梶木の場に、髑髏の様な顔をした魚が現れた。
その異様な姿はなんとも印象的だが、
大吾郎はそんな所よりも驚くべき点があった。

「攻撃表示だと！？」

そう、何故か梶木は攻撃表示でこのモンスターを出したのだ。
何らかのモンスター効果があるのか、はたまた罠なのか、
そんな考えが大吾郎の脳裏に浮かぶ。

「そしてカードを3枚伏せ、ターンエンドじゃ！」
「……俺のターン。」

不審な感じを抱きつつも、大吾郎はカードを引き手札状況を確認する。
たった今ドローしたカードは六武衆ーヤイチのカード。

これを使えばあの不審な伏せカードを破壊できる。
だが、六武衆は他の六武衆が居ないと効果を発揮できない。
つまり引いたこのカードを使うには、自分の場に六武衆が居ないといけないのだが
今　自分の場に六武衆は存在しない。

「（ならば他の『六武衆』を呼び出すのみっ！）罠発動！『六武衆推参（ろくぶしゅうすいさん）！』！！
自分の墓地より『六武衆』を1体復活させる！！蘇れ『六武衆ーザンジ』！！」

六武衆ーザンジ　☆4　光　戦士族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１３００

大吾郎の場に、薙刀を手にしたザンジが蘇った。

「さらに『六武衆ーヤイチ』を召喚！！」

六武衆ーヤイチ　☆３⇒☆２　水　戦士族　ＡＴＫ／１３００⇒ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／８００⇒ＤＥＦ／１０００

大吾郎の場に、黒い甲冑に身を包み弓矢を携えた武士が現れる。
これでヤイチの効果が発動し、梶木の曲者な伏せカードを破壊する筈だった。
だが、梶木は荒れ狂う海で鍛えられし海の決闘者（ハンター）。
梶木はこれを狙っていたのだ。

「俺は『ヤイチ』の効果を……」
「この瞬間　罠カード発動っ！！」
「なにっ！？」

梶木の言葉に驚く大吾郎。だがそれは、一瞬の事に過ぎなかった。

「罠カード『激流葬』じゃいっ！！モンスター召喚に成功した時、
フィールド上モンスターを全て破壊する！！」
「っ！しまった！！」

梶木の発動したカードに大吾郎が驚愕の表情となる中、
激流葬の放つ青い波動が全てのモンスターを飲み込んでいった。

「残念じゃったの大吾郎。お前のモンスターは全滅じゃ。」
「くっ！だがそれはお前も同じ……！？」

ここで大吾郎はさらに驚く事となる。
激流葬はフィールド上全てのモンスターを破壊するカードだ。
当然　相手だけでなく自分のモンスターも破壊される筈である。
にも拘らず、大吾郎のモンスターは破壊されたが
梶木の場にはモンスターが残っていたのである。
驚く大吾郎に対し、梶木は『ニヤッ』と微笑み返す。

「残念じゃったの大吾郎。『深海王デビルシャーク』は
1ターンに1度だけ、対象を取らないカード効果によっては破壊さ
れんのじゃ！」
「ぐっ！」

大吾郎は慌てて自身の手札を確認する。

幸い手札は梶木に勝る枚数のある大吾郎。即座にカードを決める。

「カードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

「あれ？でも何であのモンスターを攻撃表示で出したんだろう？
別に守備表示でも良かったんじゃぁ……」

観客席で見ていた翔は、不意にそんな疑問を抱く。
それに答えたのは遊夜だった。

「攻撃表示で出したのは、相手に疑心暗鬼を抱かせる為だよ。」

そう、本来なら守備表示で出して守りを固める所を
あえて攻撃表示で出す事により相手に疑心暗鬼を抱かせ
攻撃を封じるのという心理作戦。

「守備を固める為にモンスターを場に出した瞬間、
『激流葬』で返り討ちにする。もっとも、大吾郎は場にモンスターを出して
『ヤイチ』の効果を発動させようとしたみたいだけどね。」

遊夜の説明に『なるほど』と頷く翔。

「大吾郎の手札に『サイクロン』みたいな
魔法・罠破壊カードがありゃ良かったんだけどな。」
「それはどうかな？」

十代に呟きに対し、今度は隼人が声を上げた。

「向うは『激流葬』で大吾郎のモンスターを破壊する気だったしひょっとしたらあの伏せカードの内1枚は、破壊からカードを守るカードだったかもしれないんだなぁ。」

隼人の言葉に対し『そうか？』と首を傾げながら十代は視線を決闘場へと戻した。

「俺のターン！」

大吾郎のエンド宣言と共に、梶木はカードを引く。

「（奴が『サイクロン』みたいな魔法・罠破壊カードを発動しなくて助かったぜよ。手札のコイツは保存しときたいからな。）」

そう言い手札及び伏せカードの1枚に視線を向ける梶木。伏せカードの1枚は、手札1枚をコストに、フィールド上の魔法・罠カードを破壊する効果を持つ魔法・罠カードの発動と効果を無効にし破壊するカウンター罠サイクロン・ジャマーであり、守りそのものは完璧であった。最も、大吾郎がモンスターを出すか否かは賭けだったが。

「（少なくとも手札のこのカードは手札の少ない俺にとって唯一の希望のカード。捨てるのはもったいないからな。）」

そう考えながら梶木は、先程から手札に持っているカードを発動さ

せる。

「魔法カード『壺の中の魔術書』！！
墓地の『強欲な壺』を除外して、互いに2枚のカードをドローするぜよ！！」

これにより2人はそれぞれカードを2枚引いた。

「（来たっ！）俺は手札からフィールド魔法
『伝説の都　アトランティス』2枚目を発動じゃいっ！！」
「っ！！」

梶木がカードをフィールド魔法ゾーンに入れた瞬間、
決闘フィールドが再び伝説の海底遺跡へと変貌した。
これで水属性モンスターは攻撃力アップだけでなく
レベルも軽減する事となった。

「そして『深海王デビルシャーク』を生け贄に！
☆7から☆6へとなったコイツを召喚する！！
現れよ！！『超古深海王シーラカンス』！！！」

超古深海王シーラカンス　☆6　水　魚族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２２００

梶木の場に古より生きる“生きた化石”の異名を誇る魚達の長が現れた。
その大きさは、ダイダロスをも軽く上回っている。

「で、でかい……」
「デカイだけじゃねぇぜよっ！
『アトランティス』の効果により攻撃力・守備力がアップ！」

超古深海王シーラカンス　ＡＴＫ／２８００⇒ＡＴＫ／３０００
ＤＥＦ／２２００⇒ＤＥＦ／２４００

「さらに『シーラカンス』のモンスター効果発動！
手札１枚をコストに、デッキから☆４以下の魚族モンスターを
可能な限りフィールド上に特殊召喚する！！
正し、このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは
攻撃はできず、特殊効果も無効とされる！来いっ！海の魚達（なかまたち）！！」

レインボー・フィッシュ　☆３　水　魚族　ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１０００

オイスターマイスター　☆２　水　魚族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／４００

ヒゲアンコウ　☆３　水　魚族　ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１８００

オーシャンズ・オーパー　☆２　水　魚族　ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１４００

梶木の場に、シーラカンスを慕いし魚達が
アトランティスの力を帯びて守備表示で場に集う。

「（落ち着け。どんなに数をそろえても、もうモンスターの召喚はできん上に
あのモンスター達は攻撃も効果も封じられている。
『シーラカンス』の特殊効果も、このカードには効かん！）」

シーラカンスには、自軍の場の魚族モンスター1体をコストに
シーラカンスに対するカード効果を無効にし破壊する効果がある。
だが、それはあくまでも対象としたカード効果だけ。
自分の伏せてあるカードには意味を成さない事を大吾郎は確信していたが
梶木は更なる戦略を見せる。

「このまま攻撃したい所じゃが、そのカード曲者じゃからのう。
破壊させてもらうぜよ！リバースカードオープン！『フィッシャーチャージ』！！
魚族モンスターを生け贄に、場のカードを1枚破壊し、カードを1枚ドローする！！」
「くっ！」

梶木は大吾郎の2枚の伏せカードに視線を向ける。
フィッシャーチャージの効果で破壊できるのは1枚まで、
どちらに狙いを定めるか慎重になる必要がある。

「（恐らくどちらかが攻撃に対する迎撃用罠。どっちにする！？）」

悩み続けた梶木はやがて右手の指を立て、カードを指差す。

「破壊するのは……左の伏せカード！」
「！！」
「『オイスターマイスター』をコストに、フィッシャーチャージ発

射！！」

オイスターマイスターが光の粒となって消え、
青い魚型の魚雷が大吾郎の伏せカードを貫くと同時に
貫いたカードが表になる。破壊したカードは……
聖なるバリアーミラーフォースーだった。

「よっしゃ！『フィッシャーチャージ』の効果により俺はカードを
１枚ドロー！！
さらに『オイスターマイスター』が戦闘以外でフィールドから墓地
へ送られた時、
『オイスタートークン』を特殊召喚する！！」

オイスタートークン　☆１　水　魚族　ＡＴＫ／０⇒ＡＴＫ／２０
０　ＤＥＦ／０⇒ＤＥＦ／２００

梶木の場に貝の身の様なトークンが現れた。

「これで俺の勝ちじゃ！『超古深海王シーラカンス』でダイレクト・
アタック！！
“ビック・フェッシュ・ダイブ”ッ！！」

梶木の攻撃宣言と共に、シーラカンスはアトランティス内を泳ぎだし
大吾郎へ向かって牙をむきながら突進しだした。

「マズイッ！この攻撃が通ったら大吾郎の負けだっ！！」
「やべぇっ！」
「大吾郎っ！！」

「このままじゃやばいっすよっ！！！」

梶木の攻撃が通る……この時、誰もがそう思った。

……ただ、２人を除いては。

「（いや、まだだっ！！）」

「頑張れーっ！大吾郎ーっ！！」

遊夜と十代は信じた。そして、大吾郎もまた諦めては居なかった。

「罠発動（トラップはつどう）！！」

「っ！！！」

大吾郎の言葉に目を見張る梶木。

リバースカードはもう１枚あったが、梶木の手札にそれを破壊するカードは無い。

それ故にこの攻撃は賭けでもあったが、大吾郎はものの見事に発動した。

だがシーラカンスに対象を取るカード効果は効かない。

では一体なんのカードなのか、対象を取らないモンスター破壊カードか、

それともダメージを０にするカードか。

否、大吾郎が発動したのは――

「発動せよ！『究極（きゅうきょく）・背水（はいすい）の陣（じん）』！！

発動コストとして、自分のＬＰを１００にする！！」

「なんじゃとっ！！？」

大吾郎：ＬＰ／９００⇒１００

大吾郎のＬＰが、あっという間にギリギリラインに達してしまう。
だが、大吾郎の表情には余裕があった。

「『究極・背水の陣』の効果により、俺は墓地から『六武衆』達を可能な限り俺の場に特殊召喚する！！蘇れ、六武衆達よっ！！！」

六武衆ーザンジ　☆４　光　戦士族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１３００

六武衆ーカモン　☆３　炎　戦士族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００

六武衆ーヤリザ　☆３　地　戦士族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／５００

六武衆ーヤイチ　☆２　水　戦士族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１０００

大吾郎の場に、六武衆達が墓地より守備の体勢で出現した。

「ちぃっ！そう来たかっ！だったら巻き戻ぜよっ！」

巻き戻し、それはデュエルモンスターズにおけるルールであり
モンスターの攻撃中に相手の場のモンスターの数が変化した時に発生する。
攻撃対象を変更するか、攻撃を取り止めるかを選ぶ事が出来るのだ。

「（アイツの場の『六武衆』はどれも厄介じゃが……
『アトランティス』を破壊されるのは不味いぜよっ！だったら……）
『シーラカンス』！『六武衆ー カモン』を攻撃！
“ビック・フェッシュ・ダイブ”ッ！！」

梶木の言葉と共に、シーラカンスはカモンに向かって牙をむく。
だが、梶木は忘れていた。六武衆達の結束力の強さを。

「『六武衆ー ヤリザ』の効果発動！『六武衆』が破壊される時
代わりにこのカードを破壊できる！『カモン』を守れ！！」

大吾郎の言葉に反応したヤリザが、カモンを庇い破壊された。

「ちぃっ！やるのぉっ！ターンエンドじゃっ！！」

「……っぷはぁ～、もうダメかと思ったよぉ～……」

息を呑む展開に、ヘナヘナと腰を下ろす翔。

「危なかったんだなぁ。
でも大吾郎のＬＰは僅か１００、ちょっと気を抜けば失ってしまうような

まさに風前の灯なんだなぁ。」

隼人が言う通り、ＬＰ１００Ｐなど吹けば吹き飛んでしまうような状況だ。
大吾郎の場には3体のモンスターが存在するが、
梶木の場にはシーラカンスを含めたモンスター5体が存在し、
しかもシーラカンス以外は攻撃できない、八方塞な状況だ。

「いいや、大吾郎は勝つさ。」

だがそんな状況であっても、遊夜は大吾郎の勝利を信じていた。

「でも、遊夜くんの渡したシンクロモンスターも破壊されちゃったし……」
「ん？何言ってんだ。」

翔の言葉に何やら意味ありげに微笑む遊夜に、十代達は首を傾げる。

「どういう事だよ遊夜？」

十代の言葉に、遊夜は『ふふん』と微笑み言い放つ。

「確かに俺はチューナーモンスターとシンクロモンスターを渡したけど
それが1体ずつとは一言も言ってないぞ？」
「「「っ！！！？？」」」

その言葉に3人は『まさか…』と思いながら視線を決闘場へと戻した。

「…ふぅ、やるな、梶木。」

この時、息する間もない熱い決闘を大吾郎は楽しんでいた。
そして敬意を称して梶木に声を掛ける。
そして梶木も、それを察する。

「お前もな。こんな熱い決闘は城之内の時　以来ぜよっ！」

そう言いお互いに微笑み合う大吾郎と梶木。
2人は認め合っている、お互いの力を。
だからこそ全力でぶつかろうとする、そしてこの決闘も最後の時が近づいていた。

「行くぞ梶木！俺は決して負けん！！」
「来いや大吾郎！！お前との決闘、そろそろ決着じゃいっ！！」
「俺のターン！！」

大吾郎は引いたカードを確認し、即座に次の自分の一手を決める。

「『六武衆ーカモン』のモンスター効果発動！
自分の場に『カモン』以外の『六武衆』が存在する時、
このカードの攻撃を放棄する代わりに
表側表示で存在する魔法または罠カード1枚を破壊する事ができる！！
フィールド魔法『アトランティス』を破壊する！！“爆炎弾（ばくえんだん）”！！」

大吾郎の言葉と共に、カモンは自身の持つ数本の爆竹を束ねた物を遥か上の方へと投げ付け、

それと同時に爆発が起こり、アトランティスは崩壊していった。
そしてそれは、水属性モンスターの弱体化を意味していた。

六武衆ー ヤイチ　☆２⇒☆３　水　戦士族　ＡＴＫ／１５００⇒ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１０００⇒ＤＥＦ／８００

超古深海王シーラカンス　☆６⇒☆７　水
魚族　ＡＴＫ／３０００⇒ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２４００⇒ＤＥＦ／２２００

レインボー・フィッシュ　☆３⇒☆４　水
魚族　ＡＴＫ／２０００⇒ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００⇒ＤＥＦ／８００

ヒゲアンコウ　☆３⇒☆４　水
魚族　ＡＴＫ／１７００⇒ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１８００⇒ＤＥＦ／１６００

オーシャンズ・オーパー　☆２⇒☆３　水
魚族　ＡＴＫ／１７００⇒ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１４００⇒ＤＥＦ／１２００

オイスタートークン　☆１　水　魚族　ＡＴＫ／２００⇒ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／２００⇒ＤＥＦ／０

「ちぃっ！」
「さらに『六武衆ー ヤイチ』のモンスター効果発動！
自分の場に『ヤイチ』以外の『六武衆』が存在する時、
このカードの攻撃を放棄する代わりに
セットされている魔法または罠カード１枚を破壊する事ができる！！

俺はお前の場の伏せカードを破壊する!!“山形（やまなり）水蓮弓（すいれんきゅう）”!!」

大吾郎の言葉と共にヤイチは山形に弓矢を一発放ち、
その矢は梶木の伏せカードを貫通、破壊した。

「さらに魔法カード『天使の施し』を発動!
デッキからカードを3枚引き、2枚を捨てる!!」

そう言いカードを3枚引いた大吾郎は、カードを確認した時
あるカードに目をやる。

「（これはっ!）」
「!?」

その様子を梶木は見逃さなかった。

「（何かキーカードを引いたのか!?）」

その答えはすぐに出た。
大吾郎はカードを2枚捨て、即座に手札の1枚に手を伸ばした。

「行くぞ!俺はチューナーモンスター『陣風（じんぷう）の武士（もののふ）』を召喚!!」

陣風（じんぷう）の武士（もののふ）　☆3　風　戦士族　ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／１１００

大吾郎の場に、薙刀を持った軽装の武士が現れた。
そして同時に、そのモンスターのカテゴリーに梶木は

いや、会場の殆どのものは再び驚く事となった。

「何!?またチューナーモンスターじゃとっ!?」

「そうだ!友より授かりしカードはあのモンスター達だけではない!『陣風の武士』の召喚時、手札から☆４以下の戦士族モンスター１体を特殊召喚できる!!来い!『六武衆ー イロウ』!!」

六武衆ー イロウ　☆４　闇　戦士族　ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１２００

大吾郎の場に、長い長刀を持ち紫色の甲冑に身を包んだ武士が現れた。

「行くぞ!☆４の『六武衆ー イロウ』に☆３の『陣風の武士』をチューニング!!」

陣風の武士が緑色のリングとなり、イロウもその身を４つの星に変える。

そして一直線に３つに並んだ星は光に包まれる。

「二つの刃交わりしとき、、ここに忠義の刃が現れん。我に仕えよ!シンクロ召喚!!出陣せよっ!『不退の荒武者』!!」

不退の荒武者　☆７　地　戦士族　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２１００

光が弾けその中から、背に幾つもの武器を備え付け
両手に刀を持った荒武者が現れた。

「2体目のシンクロモンスターか。まさかまだ居ったとはな。」

そう言いながら、梶木は大吾郎の戦略を考える。
シンクロモンスターとは言え、攻撃力ではこっちの方が上だ。
しかもあのシンクロモンスターは攻撃表示で出されている。
それを考えると、あのモンスターに何らかの効果があるのか、
はたまた伏せカードでもセットするのか、そんな考えが梶木の脳裏
に浮かぶ。

「（さぁ、どう来る大吾郎！）」
「俺は手札から永続魔法『炎の闘志』を発動！！」

大吾郎の発動したカードから溢れ出る赤い炎の如しオーラが荒武者
を覆い、
荒武者の目が赤く燃え滾りだす。

「このカードが場に存在する限り、
俺の場の攻撃表示モンスターの攻撃力は４００Ｐアップする！」

不退の荒武者　ＡＴＫ／２４００⇒ＡＴＫ／２８００

「これで俺はターンエンドだ！」
「っ！！？」

大吾郎のエンド宣言に目を丸くする梶木。

シンクロモンスターを攻撃表示で出して装備魔法で強化し
攻撃するのだと思っていたが、攻撃所か伏せカードも何も出さない。
大吾郎の狙いが全く見えないのだ。

「（一体何を狙っとるんじゃ！？）」

頭が混乱しそうになる梶木。
だがそこは歴戦の決闘者、すぐに冷静になり状況を考える。
攻撃力は互角、大吾郎のＬＰは風前の灯。
にも拘らず攻撃表示でモンスターを出した、
これは明らかに攻撃を誘っているようだ。

「（って事は、あのモンスターに何らかの効果があるって事か……）」

梶木はそう推理した。

「（だが何にしろ、カードを引かんと始まらん！）俺のターン、ドロー！！」

引いたカードを確認する梶木。
と、ここで梶木はある事に気づく。
目の前の大吾郎の場に存在する、不退の荒武者の目が燃え滾り
赤いオーラを纏っている事を。
そしてそれに反応するかのように、シーラカンスの目が赤く燃え滾
っている事に。
まるで、荒武者の燃える闘争心に答えるかのように
闘争心を燃やしているように見えた。
そして同時に、これがあの永続魔法の効力と言う事にも気づいた。

「これは…」
「永続魔法『炎の闘志』の効果により、このカードが場にある限り相手はバトルフェイズを行わなければならず、攻撃表示モンスターしか攻撃できない！」
この効果により梶木は確信した、明らかにコチラの攻撃を誘っている事に。
その狙いが何なのかは分からないが、今自分にできる事は１つだけだった。
「上等じゃ！お前の誘いに乗ってやるぜよ！！
俺は手札から装備魔法『団結の力』を発動！『シーラカンス』に装備！！
装備モンスターの攻撃力・守備力を自軍の場のモンスターの１体に付き、８００Ｐアップする！！」
超古深海王シーラカンス　ＡＴＫ／２８００⇒ＡＴＫ／６８００
ＤＥＦ／２２００⇒ＤＥＦ／６２００
「行くぜよ！『シーラカンス』で『不退の荒武者』を攻撃！！
“ビック・フェッシュ・ダイブ”ッ！！」
梶木の攻撃宣言と共に、シーラカンスは空中を泳ぎだし荒武者へ向かって牙をむきながら突進しだした。
この攻撃が決まれば、大吾郎の敗北となる――――――
会場の誰もが息を呑む中、遊夜は冷静に言い放った――――――

「……大吾郎の勝ちだ。」

――――――ガガガギイイィィィンッ！！！！

と牙と刀がぶつかり合う鈍い音が響く。

本来ならそれで決着の付く筈だった。だが……

「なっ！？」

梶木は、いや遊夜を除く会場全体が目を疑った。

不退の荒武者はシーラカンスの突進に耐え切り、破壊されていないのである。

「これこそ『不退の荒武者』の能力（ちから）だ！

このカードの攻撃力よりも高い攻撃力を持つモンスターから攻撃を受けた場合、

このカードはその戦闘では破壊されず、

戦闘を行った相手モンスターをダメージ計算後に破壊する！！

そしてこの効果は、『対象を取る』効果ではない！

よって、『シーラカンス』の効果は発動しないっ！！！」

「んな、アホな……」

今までに無い効果だった。

そして理解した、大吾郎が何故攻撃を誘ったのかを。

だが同時に、１つの謎が残った。

「じゃ、じゃが、何故ダメージも無いんじゃ！？

破壊されないだけじゃ、戦闘ダメージまでは０にできん筈じゃ！」

そう、確かに不退の荒武者には戦闘による破壊耐性はあるがダメージ無効化効果は無い。
にも拘らず、大吾郎にはダメージが通って無いのだ。
その理由は別にあった。

「墓地の『守護霊の武士』の効果発動！
このカードをゲームから除外し、このターン受ける全てのダメージを0にする！！」
「なにっ！？」

そんなカードをいつの間に。
その時、梶木は『はっ』と思い出す。
大吾郎が使った天使の施しを、そしてあのカードの効果で引いたカードを見た時の大吾郎の表情を。
全ては大吾郎の計算通りだったのだ。

「迎え撃て！“不退の覚悟”！！」

大吾郎の効果発動宣言と共に、荒武者の武器の刃が光りシーラカンスは滅多斬りにされ、消滅した。

「『シーラカンス』……」

自分の今出せる最強カードが破壊された。この事は梶木の心に衝撃を与えた。
だが、仮にも武藤遊戯や城之内克也と対戦した歴戦の決闘者だ。
決闘を最後まで諦めるつもりはない。

「やるな大吾郎！じゃが俺も最後まで諦めんぜよ！！」

「うむ、それでこそ海岸で俺と知り合った、我が新たなる友よ！！」
互いに『ふっ』と微笑み合う2人。

「……あの2人、完全にお互いをリスペクトしているな。」
2人の決闘に、亮は感心を示していた。
亮が決闘において最も重く見てるもの、それは相手を尊敬し理解し認め合う事、
すなわちリスペクト精神である。
そして今、あの2人はお互いを認め合っている。
リスペクトしている事に、亮は『ふふ』と微笑んだ。
その横では、珠緒が微笑んでいる亮の姿に意外そうな表情をしている。

「…どうかしたか？」
「ううん、亮の笑ってる顔、あの時位しか見たこと無かったから。」
珠緒の言うあの時とは、遊夜と十代との三角形決闘（トライアングルデュエル）の時である。
その言葉に亮は『だな』とため息を付くように言い放った。

「『アクア・スライム』を守備表示で召喚！」

アクア・スライム　☆４　水　水族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１５００

梶木の場に、澄み切った水の様に青いスライムが姿を現した。

「ターンエンドじゃ！」

「俺のターン！」

梶木のエンド宣言と共に、大吾郎はデッキに手を伸ばす。
このドローによって、このターンで決着が付くかもしれない。
その為にはどうしても必要なカードがあった。
それを引き当てるしかない。
遊夜や十代のディステニードローのように、
先程の決闘で翔がパワーボンドを引き当てたように。

「（来い！）ドロー！！」

懇親の力でカードを引く大吾郎。
そして引いたカードを見た時――――

――――大吾郎は、自分の勝利を確信した。

「（来た！！）」

大吾郎は引いたカードを手札に加え、視線を梶木へと向ける。

「梶木よ、この決闘はこれで決着だ！」
「なにっ！？」

大吾郎の言葉に梶木は驚きの表情となった。
モンスターの数は互角、こちらのモンスターは全て守備表示だ。
しかも自分の出したアクア・スライムの特殊能力があれば
このターンでの決着は不可能。
そう梶木は考えていた。
だが大吾郎の目には絶対の自信に燃える闘志があるのを、梶木は見逃さなかった。
もしかしたら、本当に……。
そう考えたら、何故か口元が微笑んだ梶木。

「面白い！だったら見せてみろっ！お前の決闘を！！」
「行くぞ！自分の場に『六武衆』が2体以上存在する場合、
このカードは手札から特殊召喚できる！
今こそ天下平定の時！出陣せよっ！『大将軍（だいしょうぐん）　紫炎（シエン）』っ！！！」

大将軍（だいしょうぐん）　紫炎（シエン）　☆7　炎　戦士族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２４００

大吾郎の場に、鮮血の如く赤い甲冑に身を包んだ将軍が現れた。
その姿、まさに天下を統一せんとする乱世の英傑の姿だった。

「さらに場の全てのモンスターを攻撃表示に変更！！」

大吾郎の行った表示変更により、六武衆達が攻撃態勢に入る。
だがこの時、梶木にはまだ余裕があった。

自分と相手も場のモンスターの数は互角。
だが、自分が召喚したアクア・スライムには隠れた特殊能力がある。
これで防ぎきり、次のターンで何とか立て直す。
そう考えていた。

「行くぞ！『不退の荒武者』で『レインボー・フィッシュ』を攻撃！
“斬り捨て御免”っ！！」

荒武者の二刀乱舞の前に、虹色に輝く魚は千切りにされた。

「続けて、『六武衆ーザンジ』で『ヒゲアンコウ』を攻撃！
“示現　雷光閃”！！」

ザンジの薙刀が、青い鮫鰊を斬り裂く。

「まだだっ！『六武衆ーカモン』で『オーシャンズ・オーパー』を攻撃！
“千本爆竹”っ！！」

カモンの放った無数の爆竹が、金魚の戦士を木っ端微塵にした。

「まだまだっ！『六武衆ーヤイチ』で『オイスタートークン』を攻撃！
“流水　乱れ矢”っ！！」

ヤイチの放った無数の矢の内1本が、貝のトークンを貫通する。
ここまで、梶木の予想通りに事が進んだ。
アクア・スライムの効果があれば、このターンを確実に凌げる。
だが次の瞬間、その考えがいかに甘かったのかを痛感する事となる。

「手札から速攻魔法『六武衆の理』を発動！
自分の場の『六武衆』１体をコストに、墓地より『六武衆』を１体
特殊召喚する！
俺は『ヤイチ』を墓地に送り、来いっ！『六武衆ニサシ』っ！！」

六武衆ニサシ　☆４　風　戦士族　ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／
７００

ヤイチが消えると同時に、墓地より２本の刀を備え
緑色の甲冑に身を包んだ武士が現れる。

「何じゃとっ！？そんなもん……まさか！」
「そうだ、こいつも『天使の施し』で墓地に送っておいたのだ！
そしてバトルフェイズ中に特殊召喚したモンスターには攻撃宣言が
残っている！
行け『ニサシ』！『アクア・スライム』を攻撃！！“陣風二刀乱
舞”っ！！！」

ニサシの振るう風の如く迅い二刀乱舞の内、一刀がスライムを斬裂
いた。

「じゃが『アクア・スライム』のモンスター効果発動！
このカードが破壊された時、自分の場に『スライムモンスタートー
クン』を１体
攻撃表示で特殊召喚できる！」

スライムモンスタートークン　☆１　水　水族　ＡＴＫ／５００

ＤＥＦ／５００

梶木の場に、不気味なスライムモンスターが現れた。
そう、梶木の狙いはここにあった。
場のモンスターの数では互角だが、こちらのモンスターが戦闘で全滅しても
スライムモンスタートークンを呼び出せば、何とかＬＰもモンスターも
ギリギリ残ると考えていたのだ。
だがこのままではモンスターが全滅すると、梶木は内心焦っていた。
だが、焦る以上に次に大吾郎が何を出すのか楽しみでしょうがなかった。

「『六武衆ーニサシ』のモンスター効果！
自分の場に『ニサシ』以外の『六武衆』が存在する時、
このカードは２回の攻撃権を得る！よってもう１度攻撃する！」
「っ！！」

この大吾郎の言葉に、梶木は驚くと同時に静かに悟った。

「（そうか……）」
「『六武衆ーニサシ』の追撃！！」

ニサシのもう一刀の刀が、スライムモンスタートークンを斬り裂く。

梶木：ＬＰ／２８００⇒１９００

「……ふっ」

モンスターを破壊されダメージ受けて尚、
己の敗北を悟った梶木の表情は澄み切っている。

「大吾郎！」
「ん？」

そして不意に声を出し、大吾郎に言い放った。

「……また、やろうな。」

「……うむ、無論！」

互いに微笑み合った2人に、それ以上の言葉を不要だった。

「『紫炎』よ！この決闘に……戦に終焉をもたらせ！
プレイヤーへダイレクト・アタック！！“天下炎刀斬（てんかえんとうざん）”っ！！！！
！」

紫炎の振り下ろした炎の刀が、ゆっくりと梶木を斬り裂いていった。

「……次は、負けんぜよ！」

梶木：ＬＰ／１９００⇒０

梶木のＬＰが０となるのが確認した瞬間、会場は一気に大きな歓声に包まれた。

「良かった、これで彼も学園に残れる。」

「そうね。」

喜び合う三沢と明日香の隣で、『ふぅ』と何処か安心した感じで息をする文乃の姿に叶絵は『おやおや～』と意味ありげにニヤ付く。

「…何よ？」

「いや～、何か安心そうにため息してたからさぁ～」

「き、気のせいよ！」

そう言い『プイッ』とそっぽを向く文乃だったが、
付き合いの長い叶絵にはバレバレだった。
大吾郎がこの学園に残った事で、幼馴染の遊夜が安心する事に
文乃が喜んでいる事を。

「お前も素直じゃないなな～文乃。
幼馴染の親友が助かったんだ、素直に喜べよツンデレ。」

「誰がツンデレよ！」

家康の言葉にキレる文乃の隣で、希が『にゃあ』と嬉しそうに微笑んでいた。

所変わってこちら、特別席で決闘を観戦していた千世。

「いよっしゃーっ！！！」

喜びを隠す事無く子供の様にはしゃいでいた。

「誰が子供の様にだこらあぁっ！！」

「千世様、どなたにツッコんでいらっしゃるのですか？」

「それよりも千世様、クロノス教諭に何かする事があったのでは？」

鈴木の言葉に『そうだったわね』とニヤ付きながら

佐藤と鈴木と共に席をあとにした。

喜ぶ者達がいる一方で、やっぱりこの結果を気に入らない者もいた。

クロノスが毎度の事ながら尻餅をついて驚いていた。

「しょ、しょんナー！伝説の決闘者がまたしても負けるなんテー！！」

唖然となったクロノスは、大徳寺の接近にも気づかない。

「いやぁー、うちの生徒も中々やるでしょう。すごかったにゃ～♪」

「にゃお～ん…」

「んぎゃっ！！？」

ファラオに頬を舐められたクロノスが悲鳴を上げた。

「ネコなノ！ネコ嫌いーノ、カプチーノ！！！！」

クロノスが弱点である猫に脅える中、
決闘場では観客席からやって来た十代、翔、隼人、遊夜と共に
喜びに花を咲かす大吾郎の姿があった。

「やったぜ大吾郎っ！！すっげーワクワクする決闘だったぜっ！！」
「これで皆一緒にいられるよーっ！！」
「めでたいんだなぁっ！」
「やったな、大吾郎！」

『ビシッ』と親指を立てる遊夜に、大吾郎は渡されたチューナーとシンクロモンスターを取り出した。

「お前のカードのお陰で勝つ事ができた。ありがとう、友よ。」

そう言いカードを遊夜に返そうとする大吾郎だったが、
遊夜は首を横に振り、カードを大吾郎へと押し戻した。

「これはもう、お前のカードだ大吾郎。」
「遊夜……」
「お前ならこのカード達をうまく使える筈だ。」

そう言い『ニコッ』と微笑む遊夜に、大吾郎は『うむ』と頷いた。
それと同時に、梶木に視線を向けた。

「大吾郎、今日のところは俺の負けじゃ。だが、次やる時は俺が勝つぜよっ！！」
「うむ！望む所だ梶木、俺の新たなる友よ！」

そう言い大吾郎と梶木はお互いに『ガシッ』と堅い握手を交わした。
それを確認した十代は、観客席にいる鮫島校長へと視線を向ける。

「俺達全員勝ったぜっ！これで文句ねぇだろっ！！」

この言葉に鮫島校長は頷きながら3人及び2人に声を掛ける。

「いい決闘を見せてもらった。もちろん君たちの退学は取り消そう。」

その言葉に、遊夜達は『イエーイッ！』と喜びの声を上げた。
そんな面々を見ていた鮫島は何かを思いついたようで、
その事を十代達3人に向けて言った。

「そんなに元気があるなら宿題をあげよう。」

この言葉に十代は『へっ？』と凍りついた。

「今回の退学は取り消しだが、立ち入り禁止区域に入ったペナルティは別だよ。
決闘戦略についてのレポート30枚提出するように！」

その言葉に十代と翔がそのペナルティに呻き声を上げ、
大吾郎が『これも修行か…』と耐える中、鮫島は『ニコッ』と微笑み
大徳寺に視線を向ける。

「それじゃ大徳寺君、監督を頼むよ。」

鮫島校長はそういい残すと背を向けて去っていった。

「うわぁぁっ！いやだあぁぁぁっ！！レポート３０枚なんて拷問だあぁぁぁっ！！」

頭を抱えてしゃがみ込む十代の横で、翔は視線を亮に向けていた。

「（お兄さん、僕やっと前に進めた気がするよ。）」

そしてパワー・ボンドを取り出して、己の心に誓った。

「（待ってて。きっと追いついて、そして追い抜くから！）」

そんな翔の思いを視線で感じ取ったのか、
亮は翔に微笑を贈るとその場から去って行った。

「（……翔、いい目になったな。）」

そう思いながら亮が決闘場を去る中、珠緒は視線を決闘場へと向けていた。

「（……まさかね。）」

何かを思った様だが、やがて何事も無かった様にその場を去って行った。

「くぬぬぬぅぅ～っ！何て事なノーネッ！！あのドロップアウトボーイズ共め！

まぐれで伝説の決闘者達を破るだなんーテッ！！」

所変わってこちら、決闘場付近の廊下にて。
十代達を退学させる計画が崩壊した事にクロノスは地団駄を踏んでいた。

「くぬぅーっ！！折角わざわざ証言者をでっち上げてまで立てた計画がぁ～っ！！」
「ふふーん。やっぱり証言者ってのはアンタのでっち上げだった訳ね。」

不意に後ろからした声に、クロノスが『ビクッ』と震えると同時に後ろを振り向くと、そこには佐藤・鈴木を連れた千世がいた。

「ぎょえーっ！！？セセセセセ、セニョール梅ノ森！？」
「こんな事だと思って、わざと泳がせといて正解だったわ。
自分からボロを出すなんてね。」

千世の微笑みに、クロノスは背筋が凍りついた。
まさか千世が今頃になって自分の元へやって来るとは。
さすがに予想外だったらしいと同時に、クロノスの脳内に非常警報が鳴り響いた。
このまま千世がこの事実を校長に突きつければ、自分はクビを免れないだろう。
それだけはイヤだ！

「なななななな、何とーゾ、この事はご内密ーニッ！！！」
「そぉねぇ、今後私の言う事を聞くなら、考えてあげてもいいわよ？」

その言葉にクロノスは土下座して許しを請い、
そのクロノスの態度に、千世は大いに満足そうに高笑いするのだった。

『～第十二章～　荒海の決闘!!友情のシンクロ召喚!!　《終》』

～第十二章～　荒海の決闘！！友情のシンクロ召喚！！（後書き）

どうも、黒鋼です。
今回は大吾郎の制裁決闘。相手はあの梶木漁太。
海の決闘者として名高く、遊戯・城之内の両方との決闘経験のある数少ない決闘者。インセクター羽蛾やダイナソー竜崎と違い真っ直ぐで道を踏み外さない良い奴である。
また、どこか大吾郎と似てる気がしたので彼にしました。
また今回のは話で漫画ＧＸに出た『壺の中の魔術書』を出してみました。
効果は大幅に改造しましたが『強欲な壺』が使えない今、ＯＣＧ化しても使えませんね。
そして今回の話で、今作品３人目のシンクロ使いの誕生です。
原作の『迷い猫オーバーラン』でも大吾郎は男子キャラで数少ない彼女持ちである所から、他のキャラとは違う事を書きたかった事や自分が和物が好きな事もあり、彼をシンクロ使いにしました。
今後も色んな独自の思考を凝らしていこうと思います。

さて、ここで読者の皆様に自分が今抱えている悩みを聞いてください。
実は自分、最近になって無謀にも新たな小説の投稿を考えているのですが
その小説は『絶対★魔王～ボクの胸キュン、学園サーガ～』というエロゲーを原作としていますが、実は自分このゲームをやった事はおろか
買った事もございません。体験版ならやった事あるけど。
何でも主人公のヘタレぶりなどから
『地雷』と呼ばれた期待外れのゲームだそうです。
なので買いたくは無い……と言うかお金が無いので買えない

でもキャラは魅力的だしＯＰがすっげーよかったので書きたい……
そして気が付けば手軽な感じでオリジナル的な設定を書いていました。
そこで、読者の皆様の中で『絶対★魔王』をやった事のある方がいらっしゃるなら
何卒、攻略キャラなどのネタバレな話を聞かせてください。
また、主人公がどんなキャラがいいかアイディアをください。
尚、まだ完全に投稿するか否かは決まっておりません。
よろしくお願いします。

さてさて、お願いが済んだ所で軽く次回予告。
次回より新たなる編へと突入！三沢がオリジナルデッキ使ったり
夏帆が出てきたり、さらにはオリキャラが出てきたりと
波乱の学園生活の待っている新編、乞うご期待ください！
ではでは～。

今回の最強カード『大将軍　紫炎』＆『不退の荒武者』
☆８　炎属性　戦士族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２４００
自分フィールド上に『六武衆』と名のついたモンスターが
２体以上存在する場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。
このカードがフィールド上に表側表示で存在する限り、
相手プレイヤーは１ターンに１度しか魔法・罠カードの発動ができない。
このカードが破壊される場合、代わりにこのカード以外の
『六武衆』という名のついたモンスターを破壊する事ができる。

☆７　地属性　戦士族　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２１００
戦士族チューナー＋チューナー以外の戦士族モンスター１体以上

このカードの攻撃力よりも高い攻撃力を持つモンスターから攻撃を受けた場合、このカードはその戦闘では破壊されず、戦闘を行った相手モンスターをダメージ計算後に破壊する。

大吾郎の持つ切り札。
天下を治める大将軍、決して退かない荒武者、
自分はどっちも大好きです！！
故に今回の最強カードは2枚とも出しちゃいました。

蒼銀の稲妻、1周年記念パーティ（前書き）

今回の特別編では、セリフの前に名前が付きます。
また、作者の言葉がそのまま文章になります。

蒼銀の稲妻、1周年記念パーティ

『遊戯王GX～蒼銀の稲妻～』1周年記念！
『蒼銀の稲妻、1周年記念パーティ』を開催いたしま～す！
いや～『遊戯王GX～蒼銀の稲妻～』を連載して1周年が経ちました！
早いものですね～。

遊夜
「へぇ、もうそんなに経ったんだな」

文乃
「碌に更新されてなかった割りにね。」

まぁ、そう言うなよ。
こうして一周年を迎えれたんだからよ。

千世
「これも全ては、この梅ノ森千世のお陰よねぇー！！」

文乃
「何でよ！」

少なくとも貴様1人のお陰ではないぞ。
この小説で最も多くの決闘をしているのは主人公である遊夜だし、
お前は1回しかしてないじゃねぇか。

千世
「うっさい！アタシの出番もっと増やしなさいよ！！！」

希
「にゃあ、千世、落ち着く。」

そうだぜ、落ち着け。この小説を書くのは俺だ。
贅沢ばっかり言ってると、お前この小説から追放するぞ？

千世
「何よ！あたしは『迷い猫オーバーラン！』のヒロインよ！！
あたしが居なくなってこの小説がうまくいくと思ってるの！！？」

文乃
「ちょっと！『迷い猫オーバーラン！』のヒロインはアタシでしょ
！！？」

希
「にゃあ、私もヒロイン。」

はいはい落ち着けって。
一様『迷い猫オーバーラン！』の方じゃ全員がヒロインの1人って
事になってんだ。
だったら1人ぐらい居なくても……

遊夜
「それだと居なくなったヒロインのファンからクレームが来ると思
うけど……」

ま、だから今の所はやめとくさ。

文乃

「今の所はって……」

乙女
「あらあらダメよ。皆最後まで一緒にいなきゃ♪」

遊夜
「乙女姉さん。」

おぉっと、遊夜の（義理？）の姉にして最強ボインの乙女の登場だ！

乙女
「うんうん♪お姉ちゃんの登場だよ～♪」

文乃
「はいはい、分かりましたから落ち着いて。」

さて、これで主人公と『迷い猫オーバーラン！』よりのキャラが揃った訳だが……

家康
「っておい！俺らは！！？俺の出番は！！？」

お前及び他のキャラ達は状況によって呼ぶから、今はさようなら～。

家康
「そんな――――――っ！！！！！！！！！！」

うるせえよ、とっとと失せろや！！！罠カード！！『落とし穴』発動！！

家康
「ノオォォォ

千世
「ふん、梅ノ森財閥の情報機関を舐めてもらっちゃ困るわ!!!」

遊夜
「でも大丈夫なのか?唯でさえ2つも小説やってるのに。」

ま、何とかなんだろ。

千世
「あたし、そういった根性有る奴は嫌いじゃないわ!!
確かその小説の原作は、『絶対★魔王』だったかしら?」

その通り。
『絶対★魔王~ボクの胸キュン、学園サーガ~』は……

家康
「『恋姫無双』と同じ絵柄から期待されていたのだが
主人公のヘタレぶりなどから『期待はずれ』『地雷ゲー』と呼ばれている
不遇のエロゲー!!
俺も買って見てショックだったぜ!!!」

遊夜
「って家康いつのまに!!?」

家康
「ふん、舐めるなよ。エロゲーの話を聞いて黙っていられる俺では……」

罠発動!!『硫酸のたまった落とし穴』!!

家康
「ノオォォォォォォォォォォォォ――――――ッ！！！！！！！！！！」

テメェは今お呼びじゃねぇんだよ。失せな。

希
「にゃあ、また落ちた。」

さて、続きと行くぜ。
オタメガネが言った通り『絶対★魔王～ボクの胸キュン、学園サーガ～』は
『恋姫無双』と同じ絵柄から期待されながら、
ゲーム性の問題から『惜しい作品』と言われているゲームだ。
自分は金が無いから自分は買えないが、
ネットで調べて見たら、様は『恋姫無双』と同じ絵柄から
期待されていただけの話で
それらを抜いて考えればまぁまぁと評価する者もいたな。
何よりキャラが魅力的だ。
故に自分は少ない情報からオリジナルの設定を作り出してるのだが
やはり原作を知りたくて後書きのその思いを書いた。

遊夜
「それで、返答は来たのか？」

うむ、いくつか来たんだが自分としては原作の世界観及び
それぞれのキャラに対するネタバレな話が欲しいんだよ。

乙女
「あらら、それじゃぁどうするの？」

希
「にゃあ、諦める？」

否！その程度では諦めない！
オリジナルでもいいから投稿して、
感想などから再び情報を手に入れればいいさ！！

文乃
「随分ポジティブね。」

まぁな、それに最近通販で『絶対★魔王』の漫画を購入し
さらにネットでもネタバレのレビューや動画を見た。
これで少しは物語り構成に役立つだろう。
尚、これに加え『戦極姫』や『ネギま！』、『織田信奈の野望』など
色々制作を考えている。

遊夜
「そんなにやって、大丈夫なのか？」

知らん。やるだけやってみるさ。
まぁ、『戦極姫』に関してはやった事ないけど。

文乃
「何でやった事ないのを書こうとするよ。」

戦国好きなんだよ。
それに最近『戦極姫３』が出るらしいから、
それを見て今後設定を決めようと思ってる。

家康
「『戦極姫』と言やぁ、戦国シュミレーションアダルトゲームだな。
当初はバグなどから『くそゲー』と言われながらも
その後続編などの登場から一気に人気を手に入れた。
それに『織田信奈の野望』は結構人気あるぞ。
戦国ファンの主人公が女性化した戦国にタイムスリップする話だ。
それに『ネギま！』はオタクの間では知らぬ者はいない、
ちょっとエッチなアクション恋愛マンガ……」

罠発動！！『大落とし穴』！！

家康
「どわあぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ――――――――っ！！！！！！！」

まぁそんな訳でどれをやるのかは今後　気まぐれしだいだ。
尚、『絶対魔王』と『戦極姫』に関しては、
読者の皆様から案やネタバレな話をただいま募集中だ。
これで物語り構成にさらに1歩　近づく事だろう。

遊夜
「あのさ、それは良く分かったから、そろそろ本題に入らねぇか？」

希
「にゃあ、入る。」

へいへいちょっと待てや。
まぁ今回の特別編は、他の小説でもやってる奴と同じだ
色んな質問募集して、それに俺とお前らで答えて行くんだよ。

遊夜
「成る程。」

乙女
「楽しそうだね～♪」

尚、質問の内容がここにいる面々以外のキャラに対しても場合
そのキャラをゲストとして迎える。

文乃
「じゃあ、十代や明日香とかも？」

千世
「佐藤や鈴木も？」

希
「にゃあ、大吾郎や他の皆も？」

もちろん。

千世
「なら、早速その質問とやらを出しなさいよ！！
この梅ノ森　千世が答えてあげるわ！！」

ん？
ねぇよ、んなもん。

「「「「「……はい？」」」」」

いやだからな、このイベントって1周年を記念した特別編を
他の小説ではやってるから、こっちでもやろうって事で始めたもの
だからさ
唐突に始まったばかりだから何にも送られてきてない訳よ。

遊夜
「じゃ、じゃぁどうするだ？」

うむ、これを機に今後感想を利用して応募し
2周年記念の際にはそれらの質問に答える事にする。
今回はそれに向けての練習として、
自分と自分の弟・白鋼で考えた質問に答えてもらう。

遊夜
「白鋼っていうと、作者さんのユーザーを使って
『遊戯王～未来からの黒き翼～』を投稿しているっていう、あの？」

うむ、我が弟よ。
1つのパソコンで2人分のユーザー交互にやるの面倒だったから
自分のユーザーで奴も投稿しているのだ。
最近になって兄弟で使うという事でユーザー名を変更し、
兄である俺が『黒鋼（くろがね）』で、弟が『白鋼（しろがね）』、だったら2人合わせてって方向で

新ユーザー名『黒白(くろしろ)ブラザーズ』となった。

乙女
「弟さんとは仲良いんだねぇ～♪」

まぁな、色々と気も合うし。
ま、取り合えず質問始めるから、お前ら答えて行けよー。

では質問1！！

Q【黒鋼さんに質問。
どうして『遊戯王』と『迷い猫オーバーラン！』のクロス小説にしたんですか？】

ありゃりゃ、根本的な質問が来たな。

遊夜
「それだけ珍しいんだな、この小説が。」

まぁだろうな。
自分がこの小説書くきっかけとなったのは、遊戯王の小説探してたら妙に『遊戯王』と『リリカルなのは』のクロス小説が多い事に気づいたんだ。

文乃
「そうなの？」

あぁ。『リリカルなのは』は正式名称『魔法少女リリカルなのは』。

家康
「ｉｖｏｒｙ制作・ＪＡＮＩＳ発売の１８禁恋愛アドベンチャーゲーム作品
『とらいあんぐるハート』シリーズ内の作品だ。」

罠発動!!『狡猾な落とし穴』!!

家康
「何故だあああぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ!!!!!」

まぁそんな訳で、『遊戯王』と『リリカルなのは』のクロス小説が多い事に気づいた俺は、『遊戯王』と何らかのギャルゲー的な物とのクロス小説を考えた。

文乃
「それで白羽の矢が立ったのが、あたし達『迷い猫オーバーラン!』って訳?」

そう言うこった。丁度その頃アニメもやってたしな。
ってな事で、次の質問行ってみよー!!!

Q【文乃さんに質問。
ズバリ、遊夜のどこが好きなんですか?】

文乃
「なっ!!!!!!!!!?????／／／

文乃
「ちょ、何でこんな質問があるのよ！！！！」

千世
「何　顔　真っ赤に染めてんのよ。似合いもしない癖に。」

文乃
「うっさいわね！！！」

遊夜
「文乃さん、風邪？」

文乃
「うっさい！2回死ね！！アンタは黙ってろ！呼吸も禁止！！」

それ主人公が死ぬだろ。
つーかいい加減白状しろ。言わねぇなら俺が発表するぞ。

文乃
「ふざけんなーっ！！！！！！！！！！」

文乃がヒステリック起したので、この質問の答えはいずれ本編にて。
では次！

Q【千世さんに質問。
千世さんのメイド、佐藤と鈴木は決闘しないんですか？】

千世

「ちょっと！
これあたし宛だけど、質問の内容あたしに向けてのものじゃないじゃない！！！」

まーまー、しゃーねぇじゃん。気になるし。

佐藤
「では私達の出番ですね。」

鈴木
「実際の所どうなのですか作者さん。」

うむ。

千世
「こらー！！アンタ達あたしより目立つんじゃな――――――い！！！！！！！！！」

うっさいチビはほっといて。
“佐藤　一美”と“鈴木　裕子”、この2人の決闘は一様考えてはいる。

佐藤
「あら。」

鈴木
「そうなんですか。」

あぁ。ただデッキのアイディアがイマイチ浮かばなくてな。
あ、そうだ。良い機会だからここで読者の皆から募集しよう。

ってな訳で、今から千世のメイド、佐藤一美と鈴木裕子。
かの者達のデッキも現在考えているのですが思いつきません。
そこで感想を通じて彼女のデッキアイディアを大募集します！！
オリジナルでもいいので、バシバシ送ってくださいね！！お待ちしてま～す。

佐藤・鈴木
「「お待ちしております。」」

さて、次行くか。

千世
「こらー！！あたしへの質問は！！？」

うっさい。そんな事言うと、今度は『奈落の落とし穴』が発動するぞ。
さて次の質問は……

Q【遊夜さんに質問。
今気になってる女性は居ますか？】

遊夜
「気になる女性？」

「「「「！！！！！！」」」」

うむ、気になる女が居るなら誰でもいいから言ってみろ。

遊夜
「あぁ、それなら5人程いるぞ。」

ほぅ、それは以外だな。

文乃
「だ、誰なのよ!!」

千世
「言え!白状しろ!!」

希
「にゃあ、聞きたい。」

乙女
「誰なのかな?お姉ちゃんに教えて。」

遊夜
「いや、誰も何も。」

ん?

遊夜
「姉さんだよ、その1人は。」

文乃
「なっ!!?」

千世

「んなぁっ！！？」

希
「！！？」

乙女
「あら、照れちゃうわ遊夜。」

ほぉ、以外だな。

文乃
「や、やっぱりアンタ…ブラコン……」

千世
「胸か、やはり胸なのか！！？」

希
「……にゃあ……」

んで、因みに気になる他の４人ってのは？

遊夜
「ん、佐藤さんと鈴木さん。それにジュンコさんとももえさん。
あっ、珠緒先輩も気になるな。」

ありゃりゃ、意外な人々。

文乃
「べ、べつに私は、アンタがなんでその人が気になるかなんて
全然全く興味はないけど、い、一様　聞いといてあげるわ！！！」

千世
「何でよ!!何であたしじゃなくて佐藤と鈴木なのよ!!!!」

希
「にゃあ、それにジュンコとももえまで。」

遊夜よ、5人の何処が気になるんだ?

遊夜
「え、だって気にななならない?俺　想像しただけでワクワクして来たぜ。」

ん?ワクワク?

乙女
「あら遊夜ったら、お姉ちゃんの事考えるとワクワクするの?」

遊夜
「あぁ、早く乙女姉さんとも決闘したいよ。」

「「「……は?」」」

おい、まさか気になる理由って……

遊夜
「ん?だって気になるだろ、姉さん達のデッキ。
どんな決闘になるのか楽しみで……てあれ、どうかしたのか?」

……我が主人公ながらそーゆー答えか。

文乃
「アンタらしいわね……」

千世
「よーく分かったわ……」

希
「にゃあ……」

遊夜
「ん？如何したんだ3人共……と言うかアレ？
何か3人の後ろから黒オーラが見えるけど、錯覚か？」

遊夜、ご愁傷様。

遊夜
「へ？何が……」

文乃
「遊夜。」

千世
「遊夜。」

希
「にゃあ、遊夜。」

遊夜

「ん？」

「「「「２回死ね――――――――――――っ！！！！！！！！！！！！！！」」」」

遊夜
「げぶろあぁぁぁぁぁぁ――――――――――――っ！！！！！！！！！！？？？？？？？？？」

……ええー主人公の遊夜が星になってしまったので、
これで１周年記念パーティを終了させていただきます。

千世
「ちょっとおおぉぉっ！！あたしへの質問は！！？」

それは２周年に来るであろう質問に期待しろ……それまでこの小説が続くか知らんが。

文乃
「不吉な事言うな！！」

ま、それは兎も角。
てな訳で、こんな感じに２週年を迎える再はやっていきたいんで質問等々よろしくお願いしまーす！

「「「「よろしくお願いしまーす！！！！」」」」

遊夜
「おーい、ここは何処だ?」

家康
「俺らはぶっ飛ばされた。つまりデュエルモンスターズ風に言えばここは墓地か?」

では復活させよう。魔法カード『死者蘇生』!蘇れ遊夜!!

遊夜
「はーい。」

家康
「よっしゃ!俺は『リビングデット』か!それとも『早すぎた埋葬』か!?」

罠発動『ロスト』!お前は除外だ!!

家康
「何故だあああああああああぁぁぁ

ああっ！！！！！！！！」

ーティ　《終》』

『蒼銀の稲妻、１周年記念パ

蒼銀の稲妻、1周年記念パーティ（後書き）

どうも、黒鋼です。
てな訳で、『蒼銀の稲妻、1周年記念パーティ』如何だったでしょうか？
1年経つのは早いものです。
この特別編の為に、今まで物語の更新を止めていましたが、ここからは普通に戻るつもりです。
今後は感想を通して、様々な質問を応募します。
それと佐藤と鈴木のデッキの案もお待ちしております。
どうぞよろしくお願いしま～す！！！

～第十三章～　万丈目ＶＳ三沢！震える大地！！

十代達の制裁決闘から早数日した快晴の体育の授業。
今日の授業は自由行動、つまりそれぞれがしたい体育をしていた。
ある者達は体育館でバスケ、ある者達はバレー、
またある者達は外でサッカーに興じ、
十代と翔はレッド生徒達とチームを組み、イエロー生徒達と野球に興じる中、
武道館にて剣道胴衣姿で汗を流す２人の戦士がいた。

「ふぅ、久々だけに夢中になっちまったな。」

白銀に輝くロングヘアを揺らす遊夜と。

「うむ、そうだな。」

友人である大吾郎の２人である。
他の生徒達がグランドや体育館にいる中で、
２人は武道館の中で剣道の打ち合いをしていたのだ。
遊夜と大吾郎、共に決闘と和風を好む者同士　気が合うようだ。

「さて、良い汗流したし、軽くシャワーを浴びてからまた……ん？」
「どうしたのだ遊夜？」

不意に立ち止まった遊夜に首を傾げる大吾郎に、
遊夜は『あれ』と廊下の先を指差す。
その先に大吾郎が視線を向けると、４人程の人影が見える。

「あれは……十代に翔？」
「それにクロノス教諭に三沢だな。」

２人は見間違える筈のない４つのシルエット。
野球の服を着た十代・翔・三沢、
そして何故か左目の部分に野球ボールがめり込んでいるクロノス教諭だった。
それに何やらクロノスが三沢に何かを告げようとし、
それに聞き耳を立て様とした十代達が追い払われた。

「何だ？」
「さぁ？」

さっぱり事態の掴めず、２人は首を傾げるのだった。

体育の授業の後、万丈目はいつも通り自分の定位置の席に着くと、
いつも通りの言葉をふんぞり返りながら口にした。

「おい！ドリンクとマッサージ！！」

これでいつもならば自分の取り巻き達がその言葉に従うはずだった。
しかし、その言葉を聞いていなかったのか誰も自分の所にやってこなかった。
それどころか『何考えてんだよ』『何様のつもり』といった陰口が聞こえる。
『どうしたんだ？』
そんな疑問を抱いていると、他のオベリスク・ブルーの生徒が
万丈目の横に立つと口を開いた。

「おい、万丈目どこ座ってんだお前？」
「どこって？」

その言葉に万丈目は首を傾げた。
ここの席は1番ノートが取りやすく、なおかつ出入り口に近い。
自分のようなエリートのために用意された席のはずだ。
しかし、目の前に立つオベリスク・ブルー生徒の言葉に
万丈目は憤怒する事となる。

「ここはもう、お前の席じゃないだろ。早くどけ」
「何言ってるんだ！この席にはちゃんと俺の名前が――――――」

そう、何時もならここの席には『万丈目』の名札がちゃんとついているのだ。
……ついこの間までは。

「ないっ！？」

いつもならある自分の名札はなく、『空席』となっているのだ。
『如何いう事だ？』と驚く万丈目を尻目に
オベリスク・ブルー生徒は当然のように肩をすくめた。

「当たり前だ。お前はあそこに変わったんだよ。」

そしてオベリスクブルーの生徒はそう言いつつ万丈目の新たな席を指差した。

「なんだと？席替え！？しかもあんな隅っこにっ！！！？？」

列の最前列。しかも右隅という、今の環境とは１８０度違う席だった。
これに苛立った万丈目は、丁度教室に入って来たクロノスに抗議の声を上げる。

「クロノス教諭、これはどういうことです！僕がどうしてあんな席に！！？」

この抗議をクロノスは当然と言う風な顔で万丈目に言った。

「それはシニョールがオシリス・レッドの生徒に負けたからデ～ス。そしてそれだけではありませーン。
シニョールは明日、ラーイエローの三沢大地と寮の入れ替えをかけた決闘をしなければなりませんーノ！！」

このクロノスの最後通告に万丈目の驚きは天を……いや宇宙をも貫いた。

「そ、それでは、負ければ俺はラーイエローに格下げ！？」

そんな万丈目の言葉をクロノスは流しつつ『パンパン』と手を叩いた。

「サササ、早く席に着くのーネ。」

その光景を見た教室の生徒たちから『クスクス』といった笑い声が洩れ始めた。
そんな状況に我慢できなくなった万丈目は教室を飛び出した。
しかし、聞こえてくる。自分を蔑み笑う声が。
自分がずっとそうしてきたように、高らかな笑い声が万丈目の耳に

響く。
逃げても逃げても振り切れない。
そしてそれは、教室を出てもずっと自分のそばで響き渡っているのだった。

さて、そんな万丈目と明日決闘する事になった三沢はと言うと
十代・翔、さらにはその途中で会った遊夜・大吾郎と共にイエロー寮の自分の部屋へと向かっていた。

「三沢って、野球強いんだってな。」
「そうっすよ、結局アニキ、コテンパンだったすもん。」
「あはははは、ホント三沢って強いよなぁ～。」

遊夜達は十代と三沢の野球対決の話に花を咲かせていた。
対決の結果は三沢の一方的な勝利だったらしく
その話に対し三沢はその秘策を教えてくれた。

「ふっ、秘訣はこれさ。」

そう言い自分の持ってる野球バットを皆に見せた。
そこにはよく分からない数式が書かれていた。

「数式による弾道の予測か。」
「そうだ。俺が投げた球も全て計算で編み出された配球だったって訳なのさ。」
「なる程、ＩＤ野球だな。」

遊夜の言葉に照れるように微笑む三沢。

「そういえば三沢くん、僕らに手伝ってほしいことって？」

不意に尋ねて来た翔に、三沢は自分の部屋へと案内する。

「まぁ、俺の部屋に入ってくれよ。」

三沢の言葉に頷き入って行った遊夜達は、三沢の部屋を見て驚いてしまう。

「「な、なんじゃ、こりゃぁぁ？」」

「これ、全部数式だ！」

「な、何が書いてるのか、さっぱり分からん……」

三沢の部屋の壁と言う壁には多くの数式が書き込まれていたのである。

「俺が思いつくままに書きとめた計算式さ。

「あそこらへんがシュレッディンガーの猫、あそこがアボガドロの分子説、

そしてそっちが風が吹けば桶屋が儲かる確率式だな。」

「何言ってんだか全然分かんねぇ…」

三沢の言う数式の意味がさっぱり理解できず、十代は頭上に？マークを浮かべる。

「それで三沢、俺達にやってほしい事って……」

「よー皆　揃ってるな。」

自分達をここに連れて来た訳を三沢に聞こうとした遊夜だったが

部屋のドアが開く音と共に響いた声がそれを遮った。

「家康、どうしたんだ？」

声の主は家康だった。
しかも手には多くのペンキとハケを持って来ている。

「三沢に部屋のビックバンを頼まれたんだよ。お前等もそうなんだろ？」

「「「「ビッグバン？」」」」

家康の言葉に首を傾げる４人。ビックバン、それは――――――

「そりゃ！そりゃ！」

「そりゃ、そりゃ、そりゃぁぁ！これぞ――――――」

「「ビッグバンだぁぁぁっ！！！」」

ペンキによる汚れ消しだった。

「汚した部屋の壁を上から塗りつぶすだけだと言うのに、３人とも大げさだな。」

大はしゃぎな十代・翔・三沢に苦笑する大吾郎。

「いいんじゃないか？つまらなくやるより楽しくやった方が得さ。」
「つってもはしゃぎ過ぎだろ。」

その隣で同じく苦笑する遊夜とツッコミを入れる家康は
黙々と汚れ消しをやって行くのだった。

三沢の部屋のペンキ塗りを終えた6人は
ラー・イエローの食堂で夕食を共にしていた。

「そう言えば三沢、先クロノス教諭と何か話してたみたいだけど
何の話してたんだ？」

この遊夜の問いに三沢は口の中のものを飲み込むと、
クロノスに持ちかけられた話の内容を話した。

「ああ。寮の入れ替えテストのことさ」
「寮の入れ替え？」

その三沢の言葉に、翔がなぜ部屋をペンキで塗ったのか合点がいった。

「部屋も綺麗にしたってことは！」
「ブルーに昇格か？」

翔に続く様に大吾郎が尋ねると、三沢は『いやまだだ』と首を横に振った。

「明日の寮の入れ替えテストで合格すればの話さ。」

三沢がそう言う中、５人は入試決闘に思いをはせた。

「入試の時だってお前、抜群に強かったもんなぁ。」

「だな、あのコンボ本当に見事だったぜ！」

「俺は見てないから知らないけど、どんな感じだった？」

遊夜の言葉に十代達はその時の事を話し出す。

あの入試試験の時、三沢のＬＰは３２００、場にはブラッド・ヴォルスが攻撃表示。

対する試験官はＬＰ１９００、場にはビッグ・シールド・ガードナーと

起動砦のギア・ゴーレムがそれぞれ守備表示。

攻撃を封じられたかに見えた三沢だったが、罠カード破壊輪により

ブラッド・ヴォルスを破壊しダメージを与える事で勝利してたのだ。

「オベリスクブルーに入るのは当然だぜ！頑張れよ三沢！！」

十代にそう言われ、満更でもない三沢なのであった。

所変わってこちら、その三沢と決闘する羽目になった万丈目はオベリスク・ブルーの寮の部屋のテレビ電話で２人の兄、

“万丈目　長作（ちょうさく）”と“正司（しょうじ）”と会話していた。

「《おい、準！》」

「はい。」

「《わかっているだろうな？》」
「はい、長作兄さん、正司兄さん。」

普段は高飛車な万丈目も、兄達の前では異様に大人しかった。

「《私は選挙戦、正司は銀行の決算が忙しくて連絡する暇がなかったが。》」
「《もちろん成績はトップなんだろうな、準？》」

異様に万丈目の成績を気にする2人の兄。
それは弟の万丈目を心配している目ではない。
実は万丈目3兄弟には大いなる野心があるのだ。

「《私は政界でトップ、正司は財界で。
準、お前はカードゲーム界に君臨する事で
我が万丈目一族がガラムやバニングス、
覇道を下し行く行くは世界を我ら万丈目一族が世界を制覇すると言う計画。
分かっているな。》」
「《お前の肩に万丈目一族の未来が掛かっているのだぞ。》」

一方的に用件を述べ、ブツリと回線を切ったのだった。
そう、万丈目がこの学園に入学したのは
世界的なカードゲーム、デュエルモンスターズのカードゲーム界に君臨し、
万丈目一族が世界の覇者になると言う野望の為だった。
その為には色々と準備や妨害もあるだろうが、
今の万丈目にとっては重大なことが明日に迫っていた。

「（どうしよう、トップの座所か格下げになりそうだなんて

兄さん達には言えない！）」

万丈目は窓に近寄り、外の景色を見ているとある物が目に飛び込んで来た。

「（あれは、三沢大地！）」

それは、はやをペンキで塗ってしまった為　今日寝る部屋がないのでレッド寮の十代達の部屋へと向かう三沢とそれを案内する十代達、そしてその途中でブルー寮へと向かう遊夜の姿だった。

その時　万丈目の脳裏に起死回生の策が思い浮かんだのだった。

翌日、レッド寮の部屋で十代・翔・隼人・大吾郎・三沢の５人が談笑していた時、不意に部屋の扉が勢いよく叩かれた。

「大変だよ！大変だよ！十代ちゃん！！」

その声に十代が慌てて扉を開けると、そこには切羽詰った表情のトメさんがいた。

「どうしたんだよ、トメさん。」

「船の荷卸しで桟橋に行ってたんだけど、捨ててあったんだよ！こんなにいっぱいカードが！！」

「「「「「えええぇぇぇっ！！？」」」」」

このトメさんのこの発言に皆は驚きの声を上げた。

隼人を除く４人現場を確かめるべく桟橋へと走る。
確かにそこにはカードが捨ててあった。
そしてそのカードには見覚えがあった。

「『破壊輪』に『ブラッド・ヴォルス』って事は――――――！！」

それは、入試で三沢の使ったカード達だった。

「ここに捨てられているのは、三沢のカード！？」

この事実に、三沢は悔しそうに歯軋りを立てる。

「うかつだったぜ。
このデッキは昨日廊下に出してあった机に入れてあったんだ。」
「でも、一体誰がこんな事を！？」
「せっかくオベリスクブルー昇格のチャンスだってのによぉ！
これじゃカードを揃えてる時間もないぜ！！？」

そう、デッキがなければテストが受けれない。
デッキのカードは水浸しで、とてもではないが使う事は出来ない。
とりあえず４人は、試験会場へ行きクロノスに事情を話す事にしたのだった。

三沢達は決闘盤を用意して試験会場に時間ギリギリで駆けつけたのだった。

「遅いーノネ、シニョール三沢！」
「とっくに尻尾を巻いて逃げ出したのかと思ったよ。」

試験会場には既にクロノスと対戦相手である万丈目が待ち受けていた。
その姿を見た十代は『はっ！』と１つの答えに行き着いた。

「それじゃぁ、三沢の寮の入れ替えの相手って……そうか！
三沢のカードを捨てたのはお前かっ！！」

十代の言葉に『ナンデストオォォッ！！？』と驚くクロノスだったがその横で万丈目は涼しい表情だった。

「なんの言いがかりだ十代。どうして俺が…」
「本当に言いがかりかしら？」

不意に入って来た声に、十代達が振り向くとそこには声の主である明日香に加え、遊夜、文乃、希、千世、さらには亮までいた。

「明日香、遊夜。」
「お兄さん。」
「芹沢達まで。」

十代達が遊夜達の登場に驚く中、明日香は１歩前に踏み出し今朝自分が見たことをありのままに話しだす。

「私見てしまったの。万丈目君、今朝あなたが海岸でカードを捨てた所を。」

この明日香の言葉を聞いた万丈目は皆に気づかれない位だったが確かに苦い表情になった。

「にゃあ、私も遊夜とジョギングしてて見た。」
「正確には私達よ！」
「ま、まぁ、私は偶々コイツ等とジョギングが重なっただけなんだけどね！」

ゴチャゴチャになった女子面々の言葉を訳すとこうだ。
希・千世・文乃は共に遊夜の朝のジョギングに加わろうとして
遊夜と寮の前で待ち合わせをし、そのジョギングの途中で
万丈目が海岸でカードを捨てた所を目撃したと言う事である。

「まぁ要するに、朝のデートの際に目撃したって訳だろ？」

そう言いいきなり会話に割り込んで来たのは家康だった。

「ちょっ！！でデートって！！」
「にゃあ、デート？」
「んな訳あるか！２回死ね！！ってか何でアンタまでここにいるのよ！！」

文乃の言葉に、家康は文乃の蹴りを避けながら説明しだす。
今日は妙に朝目が覚めてその辺をブラブラしてたら
十代達が走っている姿を見たのでここまでやって来たらしい。

「んで、結局何よ？海に落ちてたカードってのはやっぱ三沢のか？」
「汚いぞ万丈目！やっぱりお前が！！」

十代は万丈目を弾劾するが、万丈目はそれを認めようとはしない。

「だまれ！俺は自分のカードを捨てたんだ。

それともそのカードに名前でも書いてあったのか？」
「万丈目！！」

決闘者としてあるまじき姿勢に、遊夜は万丈目を睨み殺す勢いで睨みつける。
だが万丈目はそんな視線を気にせず、
この決闘を自分に有利な方向へ進まそうと動き出す。

「俺を泥棒呼ばわりした責任は取ってもらうぞ。
いかがでしょう、この決闘で負けた方が退学になるというのは？」
「無茶苦茶だ！キーカードをなくした三沢のデッキは――」
「いや、その決闘受けて立つ！」

万丈目の行動に憤怒する十代を抑えた三沢のその言葉に
一同は目を丸くした。

「デッキならあります。その条件受けましょう！」

その言葉に一同はさらに驚いてしまう。

「三沢！？」
「三沢君！？」
「大丈夫なのか？」

十代・翔・遊夜の言葉に、三沢は静かに頷き懐から1つのデッキを取り出す。

「心配かけて悪かったな、捨てられたデッキは調整に使う寄せ集めのデッキ！
これが俺の本当のデッキだっ！！」

そう言い懐から出したデッキを万丈目に向けて掲げる。
この光景を見た万丈目は一瞬臆するが、見掛け倒しと斬って捨てた。

「ふん、上等だ！そんなこけおどし、この俺のデッキで粉砕してくれる！！」

そう言い万丈目及び三沢は、デッキを決闘盤にセットアップする。

「これがこけおどしのデッキなのかすぐにわかるぜ、万丈目！」
「来い、三沢ぁぁっ！！」

「「決闘っ！！！」」

万丈目：ＬＰ／４０００
三沢：ＬＰ／４０００

「俺の先行！ドロー！！」

万丈目は引いたカードを確認すると、即座に最初の一手を決める。

「俺は『仮面竜（マスクド・ドラゴン）』を守備表示で召喚！」

仮面竜（マスクド・ドラゴン）　☆３　炎　ドラゴン族　ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／１１００

万丈目の場に白い仮面をつけ、赤い腹部をしたドラゴンが現れた。

「カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

「俺のターン、ドロー！」

そんな2人の決闘を見ていた十代は、1つの疑問を抱く。

「そういや、三沢の本来のデッキってどんなのなんだ？」

そう、三沢の本来のデッキは
今まで教師であるクロノスすら知らなかったのである。

「家康、何か知らないか？」

同じイエロー寮の家康に聞いてみる遊夜だったが
返ってきた言葉は。

「いんや、俺も見た事がねぇ。」

であった。

そんな疑問は、三沢が出したカードで解明される事となる。

「俺は☆5（レベル）のモンスター『ビッグ・ピース・ゴーレム』を攻撃表示で召喚！！」

ビッグ・ピース・ゴーレム　☆５　地　岩石族　ＡＴＫ／２１００
ＤＥＦ／０

三沢の場に、巨大な岩石で出来たゴーレムモンスターが現れた。
これにより三沢のデッキは地属性、或いは岩石族デッキである事を理解したが
同時にある疑問が湧いた。

「☆５のモンスターを生け贄無しで召喚だと！？」
「『ビッグ・ピース・ゴーレム』は相手フィールド上にのみモンスターが存在する場合、生け贄無しで召喚する事が出来る！」

その三沢の説明に万丈目は『くっ』と憎々しげに三沢をそしてビッグ・ピース・ゴーレムを睨み付けた。

「俺の『サイバー・ドラゴン』とほぼ同じ効果か。」

決闘を見ていた亮はそう呟く。
自分の持つフェイバリットカードと似た効果を持つカードが現れたのだ、
気になりもする。

「モンスターだけを見ると、三沢のデッキは地属性デッキ……」
「或いは岩石族デッキね。」

遊夜と千世の言葉に全員がそのどちらかである事を察する。

皆がそう思う中、三沢は手札の１枚を決闘盤に差し込む。

「さらに手札から装備魔法『ビッグバン・シュート』を
『ビッグ・ピース・ゴーレム』に装備！攻撃力を４００Ｐアップ！」

ビッグ・ピース・ゴーレム　ＡＴＫ／２１００⇒ＡＴＫ／２５００

三沢が発動させた装備魔法より放たれた赤いオーラが
ビッグ・ピース・ゴーレムに力を与えて行く。

「行くぞ！『ビッグ・ピース・ゴーレム』で
『仮面竜（マスクド・ドラゴン）』を攻撃！“パワープレッシャー”！！」

三沢の言葉と共に、ビッグ・ピース・ゴーレムの巨大な腕が
仮面竜（マスクド・ドラゴン）を文字通り力尽くで押し倒す。だがそれだけではなかった。

「さらに『ビッグバン・シュート』の効果により、
装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃し、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手ＬＰにダメージを与える！！」

三沢の言葉通り、仮面竜（マスクド・ドラゴン）を倒した衝撃が万丈目に襲い掛かる。

「うわぁぁぁぁぁっ！！」

万丈目：ＬＰ／４０００⇒３０００

その衝撃はに万丈目は後ろに吹き飛ばされてしまう。
だが万丈目は幽鬼のように立ち上がり、
『ニヤリ』と微笑んでみせる。

「『仮面竜（マスクド・ドラゴン）』のモンスター効果発動だ！
このカードが戦闘によって破壊された時、
自分のデッキから攻撃力１５００以下のドラゴン族モンスター１体を
自分フィールド上に特殊召喚する事が出来る！！
俺は２体目の『仮面竜（マスクド・ドラゴン）』を召喚！」

仮面竜（マスクド・ドラゴン）　☆３　炎　ドラゴン族　ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／１１００

万丈目の場に、新たな仮面竜（マスクド・ドラゴン）の存在を確認した三沢は
手札のカードに手を伸ばす。

「カードを１枚伏せ、ターンエンドだ！」
「俺のターン、ドロー！！」

万丈目は引いたカードを確認し、手札の１枚に手を伸ばす。

「俺は手札から魔法カード『ネクロ・サクリファイス』を発動！
自分の墓地からモンスターを１体か２体選択し、
選択したモンスターを相手フィールド上に特殊召喚する！
その際の表示形式はお前が決めろ三沢！
俺は墓地より『仮面竜（マスクド・ドラゴン）』を１体を選択！！」

「……守備表示だ。」

仮面竜（マスクド・ドラゴン）　☆３　炎　ドラゴン族　ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／１１００

三沢は何か罠があると考え、安全策を取り守備表示を選択。
その結果、三沢の場に仮面竜が守備表示で特殊召喚された。

「え、何で　態々　相手の場にモンスターを？」

この万丈目の戦略に、翔は首を傾げる。

「普通に考えれば相手の場にモンスターを特殊召喚するようなカードには
それ相応の別の効果があるか、」
「もしくはそれ以外の策があるのか。」

万丈目の戦略をそう分析する遊夜と亮。

そんな言葉に万丈目は当然といった風に答える。

「当たり前だカイザー！オベリスク・ブルーで貴方の跡を継ぐのは俺だ！！
『ネクロ・サクリファイス』にはもう１つの効果がある！

この効果で特殊召喚したモンスターの数だけ
このターンの生け贄を減らす事ができる！！
よって俺は『仮面竜（マスクド・ドラゴン）』１体を生け贄に――――
☆８のモンスター『タイラント・ドラゴン』を攻撃表示で召喚！！」

タイラント・ドラゴン　☆８　炎　ドラゴン族　ＡＴＫ／２９００
ＤＥＦ／２５００

万丈目の場に、恐竜にも似た巨竜が出現した。

「いけえぇぇ！『ビッグ・ピース・ゴーレム』を攻撃！
“タイラント・バースト”！！」

タイラント・ドラゴンの口より放たれた豪火が
ビッグ・ピース・ゴーレムを焼き尽くした。

「ぐぅっ！」

三沢：ＬＰ／４０００⇒３６００

しかしそれだけでは終わらなかった。
万丈目には更なる計略があった。

「さらに『タイラント・ドラゴン』モンスター効果発動！
相手フィールドにモンスターが存在する場合、
このカードはバトルフェイズ中にもう１度だけ攻撃する事が出来る

！」
「っ！」

その言葉に三沢は全てを察する。
三沢の場にはもう1体モンスターが存在している。
誰であろう、万丈目自身が三沢の場に出したモンスターが。仮面竜が。

「『タイラント・ドラゴン』の追撃！“タイラント・バースト”！！」

タイラント・ドラゴンの口より放たれた豪火が仮面竜に襲い掛かる。

「さらにこのタイミングで伏せカード（リバース）、オープン！
永続罠『竜の逆鱗（げきりん）』（えいぞくトラップりゅう）！！
自分の場のドラゴン族モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、貫通ダメージを与える！！」
「くっ！」

竜の逆鱗により貫通効果を得たタイラント・ドラゴンの業火が
容赦なく仮面竜を焼き尽くしていく。

「ぐおぉっ！！」

三沢：ＬＰ／３６００⇒１８００

これにより三沢のＬＰは大いに削られてしまった。

「何の、この位は必要経費だ！」

しかし三沢は臆することなく耐え切る。

だが、万丈目の更なる戦略には続きがあった。

「そう言っていられるのも今の内だ！

バトルで破壊された『仮面竜（マスクド・ドラゴン）』の効果発動！

デッキより俺は『ドル・ドラ』を特殊召喚する！！」

ドル・ドラ　☆３　風　ドラゴン族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１２００

万丈目の場に、２つの首を持ったドラゴンが現れた。

その状況に、翔は目を丸くした。

「え？何でモンスターが召喚されるの？三沢くんの場で破壊されたのに！？」

どうやら三沢の場で破壊されたのに、

万丈目の場にモンスターが特殊召喚された事に驚いているらしい。

「翔、『仮面竜（マスクド・ドラゴン）』は元々万丈目のカードだぜ？

万丈目の場にモンスターが召喚されるのは当然だぜ。」

翔にそう言い放つ十代に続く様に、遊夜は口を開く。

「つまり万丈目の狙いは、『タイラント・ドラゴン』でモンスターを破壊し、
さらに破壊したモンスターの効果を使い更なる追撃をする事だ。」

「にゃぁ、戦略眼はすごい。」

遊夜に賛同する様に希が頷く中、万丈目はさらに攻撃を仕掛けようとする。

「いけえぇ『ドル・ドラ』！三沢に直接攻撃（ダイレクト・アタック）だ！」

万丈目の言葉により、口内に炎を溜め込みだすドル・ドラ。
だが、三沢も黙ってやられてばかりではない。

「リバースカード、オープン！『リビングデットの呼び声（よごえ）』！！
これにより墓地から『ビッグ・ピース・ゴーレム』を特殊召喚！！
いでよ、『ビッグ・ピース・ゴーレム』！！」

ビッグ・ピース・ゴーレム　☆５　地　岩石族　ＡＴＫ／２１００
ＤＥＦ／０

三沢の場に、地の底からビッグ・ピース・ゴーレムが蘇って来た。

「ちっ！バトルは中断だ！ターンエンド！！」

「俺のターン、ドロー！！」

万丈目のエンド宣言と共に、三沢はカードを引き続いての戦略を練る。

「俺は『強欲な壺』を発動！カードを２枚ドローする！！」

三沢は引いた２枚のカードと残りの手札を確認し、続いての一手を決める。

「俺は魔法カード『融合』を発動！！
手札の『ミッド・ピース・ゴーレム』と
場の『ビッグ・ピース・ゴーレム』を融合――――――
いでよ、『マルチ・ピース・ゴーレム』！！！」

マルチ・ピース・ゴーレム　☆７　地　岩石族　ＡＴＫ／２６００
ＤＥＦ／１３００

ビッグ・ピース・ゴーレムと手札のモンスターが融合して行き
そこからブロックで出来た巨大なゴーレムが現れた。

「『マルチ・ピース・ゴーレム』で『ドル・ドラ』を攻撃！
“パワーアームプレッシャー”！！」

マルチ・ピース・ゴーレムの巨大な腕が、
ドル・ドラを簡単にミンチにしてしまい、その衝撃波が万丈目を襲う。

「うぬぅっ！」

万丈目：ＬＰ／３０００⇒１９００

「そして『マルチ・ピース・ゴーレム』の効果発動！
このカードが戦闘を行ったバトルフェイズ終了時に
このカードを融合デッキに戻す事で、
このカードの融合召喚に使用した融合素材モンスター一組を
この一組を自分フィールド上に特殊召喚する事が出来る！！
いでよ、『ビッグ・ピース・ゴーレム』！！『ミッド・ピース・ゴーレム』！！」

ビッグ・ピース・ゴーレム　☆５　地　岩石族　ＡＴＫ／２１００
ＤＥＦ／０

ミッド・ピース・ゴーレム　☆４　地　岩石族　ＡＴＫ／１６００
ＤＥＦ／０

三沢の場に、融合素材となった2体のゴーレムが呼び戻された。
だがそれだけではなかった。

「さらに『ミッド・ピース・ゴーレム』の効果発動！
自分フィールド上に『ビッグ・ピース・ゴーレム』が存在する状態で
このカードが召喚に成功した時、
自分のデッキから『スモール・ピース・ゴーレム』１体を特殊召喚
出来る！！
来い、『スモール・ピース・ゴーレム』！！」

スモール・ピース・ゴーレム　☆３　地　岩石族　ＡＴＫ／１１０
０　ＤＥＦ／０

２体のゴーレムが腕を組み合ったと思ったら、
そこから１体の小さなゴーレムが現れた。

「いくらモンスターをそろえても、あのドラゴンに勝って来ないよぉ～」
「俺はそうは思わないぜ。」
決闘の状況を見ていた翔はそう呟いたが、隣にいた十代はそれを否定した。

「確かに、三沢が何の策も無くモンスターを揃えるとは思えんな。」
それに賛同する様に大吾郎も言い放つ。

「それにまだ、三沢にはこのターン通常召喚が残ってる。」
「それによっては、何とかなるかもしれないわね。」
遊夜と文乃もそれに続く様に言い放ち、翔は決闘に視線を戻す。

三沢は手札のカード１枚に手を伸ばし、決闘盤に向ける。

「俺は『スモール・ピース・ゴーレム』を生け贄に――――――
『ロック・マウンテン・タートル』を守備表示で召喚!!」

ロック・マウンテン・タートル　☆５　地　岩石族　ＡＴＫ／０
ＤＥＦ／２５００

三沢の場に、岩山の甲羅を持つ岩の亀が現れた。

「『ロック・マウンテン・タートル』が場に存在する限り、
相手はこのカード以外のモンスターを攻撃出来ない！
そしてこのモンスターは、自分フィールド上に存在する
『ロック・マウンテン・タートル』以外の岩石族モンスター１体に
付き
守備力を５００Ｐアップさせる!!」

ロック・マウンテン・タートル　ＤＥＦ／２５００⇒ＤＥＦ／３５
００

「そして１ターンに１度、場の岩石族モンスター１体に付き
５００Ｐのダメージを相手に与える!!“ロック・マグニチュード
”!!」

三沢の言葉と共にロック・マウンテン・タートルが震えだし、
それにより発生した地震が、万丈目に襲い掛かる。

「ぐあぁぁっ!!」

万丈目：ＬＰ／１９００⇒４００

「そしてカードを１枚伏せ、ターンエンドだ！」

「くっ！エンドフェイズに『ドル・ドラ』の効果発動！破壊されたこのカードを、攻撃力・守備力共に１０００にして特殊召喚する！！」

ドル・ドラ　☆３　風　ドラゴン族　ＡＴＫ／１５００⇒ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１２００⇒ＤＥＦ／１０００

万丈目の場に、首が１つ無くなったドル・ドラが蘇った。

「これなら、三沢くんが有利かな。」

この状況を見た翔は先程の不安は何処へやら、三沢の有利を信じて疑わない表情だった。

「確かに、後１回『ロック・マウンテン・タートル』の効果を使えば三沢の勝ちは決まる。」

「けど、最後まで何が起こるのか分からないのが決闘だぜ。」

そう言い遊夜と十代は視線を決闘へと向け直す。

「俺のターン、ドロー！！」

万丈目は起死回生を賭けてデッキからカードを引く。
そして引いたカードを見た時、万丈目は『ニヤリ』と微笑んだ。

「三沢、貴様のモンスターや伏せカード、そんな小細工は俺には通用しないぜ！！
俺は手札から魔法カード『巨竜の羽ばたき』を発動！！
自分の場から☆5以上のドラゴン族モンスター1体を手札に戻し、フィールド上に存在する魔法・罠カードを全て破壊する！！」

万丈目の発動したカードにより、
タイラント・ドラゴンは翼を羽ばたかせ上空へと飛び上がる。
その際に発生した暴風により万丈目の竜の逆鱗、そして三沢の伏せカード――――
魔法の筒は宙を舞い破壊され、タイラント・ドラゴンは万丈目の手札へと戻った。

「さらに手札から魔法カード『竜骨の価値』を発動！
自分フィールド上のドラゴン族モンスター1体を破壊し、
デッキからカードを2枚ドローする！！」

これによりドル・ドラは墓地へと眠り、万丈目はカードを2枚引いた。

「だがそのカードを使った場合、万丈目、
お前は次のターンのドローフェイズはスキップされる筈だ。」
「ふふふ、構わんさ。これで俺の手札に全て揃った！」

三沢の言葉にそう答える万丈目。

「行くぞ！手札から『タイラント・ドラゴン』、『アックス・ドラゴニュート』、
『仮面竜（マスクド・ドラゴン）』の３体を墓地に送り、
手札から『モンタージュ・ドラゴン』を攻撃表示で特殊召喚する！！
出でよ『モンタージュ・ドラゴン』！！！
ふはははははは、はーっはははははははははっ！！！！」

モンタージュ・ドラゴン　☆８　地　ドラゴン族　ＡＴＫ／？　ＤＥＦ／０

万丈目の高笑いと共に、
墓地に送られた３体のモンスターから放たれた光が形となり
３つ首の巨大な竜へと姿を変えた。

「はーっはははははは！どぉうする三沢！？
この『モンタージュ・ドラゴン』は最上級モンスターだ！
その攻撃力は墓地に送った３体のモンスターの☆の合計の３００倍だぁっ！！！」

モンタージュ・ドラゴン　ＡＴＫ／？⇒ＡＴＫ／４５００

「そして手札から速攻魔法『ドラゴニック・エンレイジ』！！
このターンドラゴン族モンスターの攻撃力は６００Ｐアップし、
守備モンスターに対して貫通効果を得る！！」

モンタージュ・ドラゴン　ＡＴＫ／４５００⇒ＡＴＫ／５１００

「攻撃力が、５０００を超えたか……」

その攻撃力の高さに唖然となる三沢だが、それは一瞬の事に過ぎなかった。

「いけぇっ！『モンタージュ・ドラゴン』で『ロック・マウンテン・タートル』を攻撃！！“パワー・コラージュ”っ！！！！」

万丈目の言葉と共に、モンタージュ・ドラゴンの３つの首の口内から放たれる
圧倒的なパワーを誇る３色の光線が、
ロック・マウンテン・タートルを飲み込んで行った。

「うおおぉぉっ！！！」

三沢：ＬＰ／１８００⇒２００

その圧倒的なパワーに、三沢のＬＰは大きく削られ
その反動で三沢も地に膝を着けてしまう。

「ふん、少し残ったか。まぁいい、次のターンで確実にお前は終わりだ。」

そう言いエンド宣言をする万丈目。

モンタージュ・ドラゴン　ＡＴＫ／５１００⇒ＡＴＫ／４５００

それと同時にドラゴニック・エンレイジの効力が切れ、
モンタージュ・ドラゴンの攻撃力が下がる。
勝てる、万丈目はそう信じて疑わなかった。
だが三沢は立ち上がると、はっきりとした声で言い放つ。

「次のターンがあるとすればな！」
「何っ！？」
「俺のターン、ドロー！！」

万丈目が三沢の言葉に驚く中、三沢は最後になるであろうドローを行う。
そして引いたカードを確認した時、三沢の口元は微笑んだ。

「行くぞ！俺は場の『ビッグ・ピース・ゴーレム』、『ミッド・ピース・ゴーレム』の２体を生け贄に捧げ――――――出でよ！『地球巨人（ちきゅうきょじん）　ガイア・プレート』！！！」

地球巨人（ちきゅうきょじん）　ガイア・プレート　☆８　地　岩石族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１０００

２体のゴーレムと入れ替わりに、
三沢の場に岩石で出来た巨大なゴーレムが現れた。
だがそれでも、万丈目には余裕があった。

「それが如何した！俺のモンスターの方がまだ攻撃力が上だ！！」

だがこの万丈目の言葉に対し、三沢は不敵に微笑む。

「ふっ、それはどうかな。すでにお前を倒す方程式は完成している！！」

その三沢の言葉に、クロノスは驚きの声を上げる。

「な、ナントォォォッ！！？」

いやクロノスだけでなく、
この驚きはここにいる三沢以外の全員一致のものだった。

「ここまでの戦闘も計算の内だと言うのか！？」
「面白い、見せてもらうぜ三沢！！」

そう言い遊夜と十代が声を上げる中、三沢は静かに、そしてはっきりと宣言する。

「これで終わりだ！バトル！！『地球巨人　ガイア・プレート』で『モンタージュ・ドラゴン』を攻撃！」

三沢の言葉と共にガイア・プレートは
モンタージュ・ドラゴンに向かって拳を振り上げる。
この光景に、万丈目は不敵に笑い出す。

「はははははははっ！自滅の道を選ぶか！！
『モンタージュ・ドラゴン』の攻撃力は４５００、

それに対し『ガイア・プレート』の攻撃力は２８００だ！
如何あがいても貴様の敗北だ！！」

そう言い放つ万丈目だったが、今度は逆に三沢が不敵に微笑む。

「残念だがそうは行かない！
『ガイア・プレート』のモンスター効果発動！！
このカードと戦闘を行う相手モンスターの攻撃力・守備力を半分にする！
“スーパー・プリューム”！！！」

三沢の言葉と共に、ガイア・プレートより放たれたオーラがモンタージュ・ドラゴンを包み込む。

モンタージュ・ドラゴン　ＡＴＫ／４５００⇒ＡＴＫ／２２５０

「なっ！！？」
「いけぇ、『ガイア・プレート』！！“グレート・テンペスト”！！！」

三沢の言葉と共に、ガイア・プレートの拳がモンタージュ・ドラゴンを粉砕。
その衝撃波により、万丈目は決闘場外へと押し出されたのだった。

「うぐわあぁぁぁぁ、ぬわあああぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！」

万丈目：ＬＰ／４００⇒０

決闘に決着が付き、三沢は唖然となる万丈目に接近する。

「万丈目、海に捨てられていたカードは間違いなく俺のものだ。」

「何!?なぜわかる?」

「それはこれについメモをしてしまったからだよ。」

そう言い三沢はブラッド・ヴォルスのカードを出し、万丈目へと見せた。

そこには三沢の部屋の壁と同じように数式が書かれていたのだ。

「これが証拠だ。こんな落書きがあるカード、世界でたった1枚だけだからな。」

「ぐっ……」

その言葉に、万丈目は『ガックリ』と両手両膝を地に着けたのだった。

「シニョール三沢、ユーのオベリスクブルーへの編入を認めるのーネ♪」

勝負がついたところでクロノスは勝者である三沢の下へと歩み寄り言い放った。

だが、これに対し三沢は予想外の言葉を発した。

「いえ、そのお誘いはお断りします。」

「オゥ、何故なのーネ!?」

クロノスが驚く中、三沢は冷静に言い放つ。

「俺はオベリスクブルーに入るなら、
この学園でナンバー1になった時と入学式の時に決めたんです。」
そう言い三沢は視線を遊夜と十代に向けながら宣言する。
「遊夜、十代。オベリスクブルーに入るのはお前達を倒してからだ
！」
その宣言に遊夜と十代は、嬉しそうに微笑みながら決闘盤を構えた。
「よし！それならすぐ決闘をやろうぜ！！」
「俺もだ！三沢とは決闘してみたかったんだ！！」
そう言い今にも決闘をしそうな雰囲気が漂う中、
三沢はゆっくりと首を横に振る。
「残念だが今は駄目だ。」
「なに？」
「何でだよ？」
その言葉に首を傾げる遊夜と十代に、三沢は答えだす。
「ここにあるデッキはまだ完成していない。
このデッキはお前たちの『Ｅ・ＨＥＲＯ』と『蒼雷郷』を研究する
為の
試作デッキに過ぎない。」
「し、試作のデッキだと！俺はそんなものに負けたのか！？」
三沢の言葉に万丈目が唖然となる中、三沢は言葉を続ける。

「たぶん、新しく塗った部屋の壁が数式で埋め尽くされるころにはできるだろう。
お前達のＥ・ＨＥＲＯデッキと蒼雷郷デッキを破る為の新たなるデッキが！！」

この宣言を聞いた遊夜と十代は共に握りこぶしを作り
決闘者魂を燃え上がらした。

「俺達を…俺の蒼雷郷を破るデッキか……面白い！楽しみに待ってるぜ三沢！！」
「おもしれぇ！その時こそお前と勝負だ、三沢！！」
「あぁ、楽しみにしていろよ、遊夜！十代！！」

そう言い３人は、決闘者魂を燃え上がらすのだった。

その横で、万丈目は両手両膝を地に着けた状態で、誰にも気づかれない様に呟く。

「……今に見てろよ……このままじゃ終わらないからな！」

そして、その日を境に万丈目は一時、学園から姿を消すのだった。

『～第十三章～　万丈目ＶＳ三沢！震える大地！！　《終》』

～第十三章～　万丈目ＶＳ三沢！震える大地！！（後書き）

どうも、黒鋼です。
今回はＧＸのエアーマンこと三沢が輝いていた回、
『酸素＋水素＝Ｈ２Ｏドラゴン』のお話でした。
本当にこの頃の三沢は輝いていますねぇ～。
ただ自分としては漫画版の遊戯王ＧＸをネタにしやすいんで、
なるべく三沢がエアーマンにならない様に頑張ろうと思います。
その際、三沢がエアーマン化している原因の１つはデッキにあると思ったので
三沢のデッキもアニメとは違う方向にしようと思いました。
６つもデッキを持っていながら殆ど使う事の無いというのはあまりにも無駄なので
漫画版同様の方向で行こうと思いましたが、
アンデットって似合わない気がしたので思いっきり悩みました。
そして悩んだ末、遊戯王の敵やライバルキャラは『名は体を表す』者が多い事と、
三沢のデッキでは磁石の地属性デッキが一番印象に残っていたので
『三沢　大地』のデッキは大地、すなわち地属性の岩石族デッキにしましたが
如何だったでしょうか？
また、漫画版遊戯王ＧＸで万丈目が使ったドラゴニック・エンレイジ。
このカードも少々改良いたしましたが如何だったでしょうか？
今後もこんな感じに、自分のオリジナル展開をして行こうと思っております～す。

今回の最強カード『地球巨人　ガイア・プレート』

☆８　地属性　岩石族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／１０００
このカードは自分の墓地の岩石族モンスター２体を
ゲームから除外して特殊召喚する事ができる。
このカードと戦闘を行う相手モンスターの攻撃力・守備力を半分に
する。
自分のスタンバイフェイズ時に自分の墓地の岩石族モンスター１体を
ゲームから除外する。除外しない場合、このカードを墓地へ送る。

こちら版での三沢の切り札の１枚。
原作ではジムの切り札だった。
メガロック・ドラゴンと並び、岩石族デッキのエース格。

～第十四章～　冬休みのパーティ

万丈目が三沢との決闘で学園を去り
研究所から逃げ出したＳＡＬ（サル）を助けたりしている内に
デュエルアカデミア学園は待ちに待った冬休みを迎えていた。
実家に帰る者も居れば、そのまま学園に残る者も居る。
そして彼、遊夜は前者に妥当する。
彼の親代わりであるペガサス名誉会長により、
Ｉ２社（インダストリアル・イリュージョンしゃ）、アジア日本社の一室で暮らしており、
今日も雪振る寒い朝の中、寝室より目を覚ます遊夜。
天蓋付きの豪勢ながらもシンプルなベッドから起き上がり、
まずは軽く朝の運動として腕立て伏せ、腹筋を軽くやると
青いシンプルなパジャマを脱ぎ部屋のシャワーを浴びる。
汗をシャワーで流した遊夜は、タンスに入っている私服に着替える。
黒い上着と青いジーンズに着替えた遊夜は部屋を出て、階段を降り出す。
下の階につくと、廊下の窓際に１人の少女の姿を見つける。
薄紫色の長髪の左右にネコの耳のような癖毛を持った少女、
そう、白い寝巻き姿の霧谷　希である。

「おはよう希。」
「にゃあ、おはよう。」

そうお互いに挨拶を交わす２人。
何故　希がここにいるのか？そう疑問に思った者も多いだろう。
実はアレから調べたのだが希が何処の出身なのか、
何故シンクロモンスターを持っているのかも謎のままであった。
なので彼女は冬休みの間　学園に居る事も出来たのだが
あの闇の決闘での事件以来、遊夜に何かと頼る様になった希は

『遊夜と一緒にいたい』

と爆弾発言をしてしまった。
この発言に学園中、特に『白鋼　遊夜ファンクラブ』は騒然となったが
当の遊夜は

『じゃあ、俺と一緒に来いよ。Ｉ２社、アジア日本社に。』

とあっさりと承諾してしまい、
この事で文乃や千世から蹴りと鉄拳を受けたのは全くの蛇足である。
そしてなぜ自分が攻撃されたのか
遊夜がさっぱり理解出来ていなかった事はこれもまた蛇足である。
ともあれそんな訳で、遊夜は希を、さらには希の保護者となった乙女を
Ｉ２社アジア日本社に連れて来たのである。
アジア日本社の最上階である屋上には、
遊夜が普段　使っている中庭付きの豪邸風の部屋があり
その下の階は客室となっており、希と乙女はこの階で寝泊りしているのだ。

「おはようございます、遊夜様、霧谷様。」

２人が挨拶を交わしていると、１人の執事が現れた。
彼は遊夜と希達の世話をする為にペガサスから派遣された執事であり、
毎朝早い遊夜達に合わせこの時間帯にやって来てくれる。

「どうぞ、朝食の準備が出来ております。……都築様はまだ？」

「乙女姉さんは朝弱いから……」

そう遊夜は苦笑いをした。
乙女は朝に弱く、起きたと思ったら寝ぼけていたりという姿を
実家に帰って来てからそんな所を何度見た事か分からないと
遊夜はやや軽いため息を付くのだった。

それからしばらくして、乙女は目を擦りながら部屋から出て来た。
最初は眠そうな表情だったが、朝食の良い匂いを嗅ぐと
パッチリ目が覚めたらしく、3人仲良く食堂で朝食をとった後
遊夜は自分部屋でデッキの整理をしていた。

「う〜ん、これは……いや、こっちかな?」

そうやってデッキの整理をしていると、
『ピンポーン』と部屋のインターホンの音が鳴り響いた。

「≪遊夜様、芹沢様と菊池様、それに幸谷様がお見えです。≫」
「分かった、今行く。」

インターホンからの声に遊夜はデッキをデッキケースに入れると、
部屋を出て階段を降りて行く。
下の階の客室の間には大きな広場があり、そこには希と乙女に加え
文乃、家康、大吾郎達の姿があった。

「よっ!邪魔してるぜぇ。」
「うむ、来たぞ友よ。」
「良く来たな、家康、大吾郎。」

悪友達と挨拶を終えた遊夜は、家康達の後ろに隠れている様にいる文乃に視線を向ける。

「いらっしゃい、文乃さん。」

「別に、来たくて来た訳じゃないから。偶々偶然近くを通り掛ったら家康と大吾郎の姿が見えて付いて来た……それだけなんだからね！」

相変わらず狼少女な言動を取る文乃に対し『うん、そっか』と笑顔で返す遊夜。

実際は遊夜と同棲（？）している希や乙女に嫉妬してついつい様子を見に来てしまうのだが、鈍感・ニブチン・唐変朴がそのまま服を着ている様な男である遊夜がその事に気づく筈も無かった。

「それで今日はどうする？デッキ構築でもするか？」

「お前ホント決闘の事しか頭に無いんだな。」

遊夜の提案に家康のツッコミが入り、他の皆も同意する様に頷く。だがだからと言って皆に何かやりたいと言う案がある訳でもなくアイディアが浮かばず頭を抱えてしまう。

とそこへ、救世主の如く現れたのはあの執事さんだった。

「遊夜様、今よろしいでしょうか？」

「ん、どうした？」

「ペガサス様より連絡が入っております。」

その言葉に遊夜は『分かった』と返すと、

懐から出したリモコンのボタンを押し、広間に巨大なスクリーンを出現させた。
するとそのスクリーンから、ペガサスの姿が映し出された。
この世界では在り来たりとなっている、ＴＶ電話である。

「おはようございます、ペガサス会長。」
「《お～う、マイサン、遊夜（ユーヤ）！　Ｇｏｏｔ（グット）　Ｍｏｒｎｉｎｇ（モーニング）！
おぅ、それに学友の皆さんもいたのですね！！》」

相変わらずなハイテンションなペガサスに、
慣れている遊夜は兎も角、あまり面識のない他の皆は付いて行けなかった。

「どうも～ペガサスさん！」

約１名、乙女だけはこう言った事への適応力が高かった為か、
普通に大画面に映るペガサスと言葉を交わしていた。

「《実はユーヤ、アナタに頼みたい事があるのデ～ス。》」
「頼みですか？」

ペガサスの言葉に首を傾げる遊夜だったが、
これまで世話になったペガサスが自分に頼む事のパターンを
今までの経験で察知した。

「ひょっとして、パーティですか？」
「《イエスッ！私達Ｉ２社主催のパーティが近々行われマース！
ユーには是非そのパーティに参加して欲しいのデース！！》」

ペガサスの言葉に遊夜は全てを察したが、

その後ろにいるメンバー達はイマイチ事の次第が理解できなかった。

「にゃあ、パーティ？」

「おい遊夜、パーティってどういう事だ？」

「あぁ、ほらテレビでも良くあるだろ？
有名な会社や名門の一族が開くパーティ。」

イマイチ理解の出来ないメンバーに、遊夜は説明をして行った。
つまりはよくテレビでやる様なセレブのパーティを開くから
遊夜も参加して欲しいという事らしい。

「でも、何で遊夜なんかまで？場違いなんじゃないの？」

文乃はそう言い遊夜を軽く睨んで来るが、当の遊夜は全く気にしていない。

「ん～でも俺、中学の時から結構　出てるよ？」

「そういや、時々学校休んでたよな。」

「うむ、そして翌日には色々な土産を持って来てくれてたな。」

遊夜の言葉に家康と大吾郎は昔の事を思い出す様に、外の景色に視線を向ける中
ペガサスはさらに言葉を続けようとする。

「《デスがユーヤ、
今回のパーティにはどうしても出席してもらいたいのデース。》」

「どんな理由かは存じませんが、
俺を引き取ってくれた他ならぬペガサス会長の頼みです。
喜んで出席させて頂きます。」

遊夜の間の無い即答に、ペガサスは嬉しそうに微笑むと同時に何かを閃いたのか、視線を文乃達へと向ける。

「《よろしければどうです、ユー達も参加してみませんか？》」

「え！？私達！？」

「にゃ？」

ペガサスの提案に、遊夜はもちろん指名されたメンバーも驚きの声を上げる。

「良いんですか？」

「《もちろん！ユーヤの友人なら大歓迎デ～ス！！》」

「わ～い！行く行く！私絶対行く～！！」

ペガサスの提案に真っ先に賛成したのは、乙女だった。

「で、でも私達パーティに出れる様なドレスとか持ってないわよ！！？」

「《それなら大丈夫デース！ドレスはこちらで用意いたしマース！！》」

文乃の疑問もペガサスの鶴の一声により解決。

「えっと……んじゃあ、皆参加って事で良いか？」

「あたしは良いよーっ！！」

「にゃあ、別に構わない。」

「おもしれぇっ！これを機にアニメ俳優とかと知り合えるかも！！」

「うむ、友の厚意だ。よろこんでお受けしよう。」

遊夜の言葉に、文乃を除く全員が賛同の声を上げる中

遊夜は文乃に近づき答えを確かめようとする。

「文乃さんはどうする？」

「わ、私は、べ、別に好きで参加するんじゃ無いんだからね！
あ、アンタがどうしてもって言うから参加してあげるんだから！！」

ツンデレな言葉を漏らしつつも、結局ここにいる全員の参加が決定したのだった。

それから後は怒涛の如くの勢いだった。
ペガサスからの迎えのヘリが来たかと思ったら、
全員その中に積み込まれそのままパーティ会場へと直行。
控え室でそれぞれ用意された服を着替えさせられていた。

「こんなもんか？」

「うむ、中々良い服だな。」

控え室で着替えを終えた家康と大吾郎は、
Ｉ２社より派遣されたメイドに案内され、パーティ会場に来ていた。
時間は夜、広々としたパーティ会場の中で
家康は普通の黒い礼服を、大吾郎の黒の和服に身を包んでいる。
周りにはテレビなどで見た事のある人々で引き締めており、
こんな状況に慣れていない家康と大吾郎はやや堅くなりつつあった。

「あ、いたいた。家康君、大吾郎くん！」

そんな状態の中、２人の耳に聞き覚えのある声が入って来たので
２人は声のした方を向く。

そしてその目に飛び込んで来たものを見て、
唯でさえ堅かった表情は完全に硬直してしまった。
そこには、美しいドレスに身を包んだ文乃、希、乙女の姿があったのだ。
全員髪を結い、同じデザインの色違いドレスを着ており
それぞれ文乃は赤、希は水色、乙女は白のドレスであった。
特に乙女はその豊満な胸が今にもドレスからはみ出そうであり
一層美しく、そして色っぽく見えてしまう。

「お、乙女先生、む、胸の谷間が……」
「う、うむ、美しい……」

普段は2次元にしか興味の無い家康や
大和魂を大切にし女とは無縁の生活を送ってきた大吾郎も
乙女のナイスバディとドレスとの調和に視線を逸らせないでいる。

「ちょっとアンタ達、いつまでドコ見てんのよ！」

家康達の視線に文乃が声を上げる中、希は『キョロキョロ』と辺りを見渡す。

「にゃあ、遊夜は？」
「遊夜なら、ペガサス会長の所に行ったぞ。」

希の疑問に大吾郎が答えていると、
不意に『ガヤガヤ』と周りが慌しくなっている事に皆が気づく。

「何だ？」
「何？」
「にゃ？」

だんだん人だかりが割れて行き、そこには1人の見知った少女がこちらに向かって　ずんずん歩いてくる姿があった。
ピンクのフリフリのドレスで身を包んでいるが、
あの金髪とロリッ子体型は見間違いようが無かった。

「誰がロリッ子体型じゃあいっ！！！」

「千世様、落ち着いてください。」
「ここはパーティ会場です、あまり大声を出されてはいけませんわ。」

2人のメイド、佐藤と鈴木を連れて歩く千世だった。

「アンタ達、何でここにいるのよ！」
「ゆ、遊夜とペガサス会長につれて来られたのよ。」

思わぬ人物との再会に文乃達は驚いていたが、
考えてみれば何ら不思議な事ではない。
このセレブの集まるパーティに世界に名を轟かす
梅ノ森財閥の総帥の愛孫たる千世が来ていてもおかしくはない。

「ふ～ん…で、その肝心の遊夜はドコよ？」
「ペガサス会長の所に行って、それ以来　戻って来ていないぞ。」

大吾郎の回答に『あっそ』と素っ気無く返す千世。
とここで千世は、いや正確には文乃達女性メンバーはある事に気づく。
自分達の周りに見覚えの無い男達が引き締めている事に。

『何?』と首を傾げそうになった時、いきなり辺りが暗くなった。
電気が落ちたようだ。
そしていきなりスポットライトが照らされ、
照らされた場所には銀髪を靡かせ、マイクを握るペガサスの姿があった。

「《皆さん、本日は良く我がI2社のパーティに参加してくれた事を心よりありがたく思いマース!》」

ペガサスは相も変らぬハイテンションで話を進めていく。

「《この度、皆様にお集まり頂いたのは、ある重大な発表を行う為デース!!》」

このペガサスの言葉に、会場より僅かではあるが　ざわめきが起こる。
I2社名誉会長のペガサスより放たれる重大発表、
一体それが何なのか全員が気になる所だ。

「《今を遡る事　十数年前、
我が社には稀代の2人のカードデザイナーが居ました。
その1人、白鋼遊斗は1つの遺産を残しました。
これからの決闘を大きく変えるであろう希望のモンスター、
その名はシンクロモンスター!》」

その発言に、ざわめきは文乃達にも行き届いた。
シンクロモンスター、遊夜の父、遊斗が残した遺産。
その名を知る者は数少ないが、その名が今　公の場で発言されたのだ。

「《我がＩ２社は、この場を持ってしてシンクロモンスターを
そしてシンクロモンスターを導くチューナーモンスターを
全世界のカードとして発行する事を宣言いたしマース！！！》」

その発言に、会場の皆は圧倒された。
つまり、今まで秘密とされて来たシンクロモンスターが
今後はカードパックなどで全国的に売り出されると言う事だ。

「《無論、これは我が社の独断ではなく、亡きユートの遺志を継ぐ
１人の少年の許可を得て発表させてもらっているものデス。
それでは紹介いたしまショウッ！！！
ユートの、父の意思と遺産を継ぐ最高のマイサン！白鋼遊夜！！！
》」

ペガサスの言葉と同時に、新たなスポットライトが別の場所を照らす。
そこに居た者を見て文乃達は、
いやこの会場に居るうら若き女子達は唖然となった。
そこには、たった今　紹介された少年、我等が遊夜がいた。
蒼を模った礼服に、普段は無造作に伸ばした白銀のロングヘアーを
後ろで青いリボンで結び、何時もの決闘を愛する愛らしい表情ではなく
『キリッ』と真剣な表情だった。
普段とは違う、いや普段以上にかっこ良く見える遊夜に
文乃や希、千世は顔を真っ赤にしてしまう中
遊夜はゆっくりとペガサスよりマイクを受け取り口を開こうとしていた。

「《皆様、本日はお集まりいただき、ありがとうございます。》」

遊夜はゆっくりと、それで居てはっきりとした声で言葉を続けていく。

「《父の残したシンクロモンスターとチューナーモンスターが
世に出る事に自分はとても嬉しく思います。
父はこのカード達がデュエルモンスターズに
更なる未来を与える事を望んでおられました。
父の夢は自分の夢です。これからもデュエルモンスターズに
末永き未来がある事を願います。》」

遊夜の言葉が終わりマイクをペガサスに返したと同時に
会場に拍手が響き渡る。

「……あっ」
「にゃあ。」
「……んぐ」

その間　文乃達3人は拍手する事すら忘れ、遊夜に見惚れていた。

「《では皆さん！今宵のパーティ存分に楽しんでいってくだサーイ！！！》」

ペガサスの言葉と同時に、
会場から静けさは消えパーティ独特の騒がしさが戻ってくる。

「かっこ良かったねぇ～、遊夜。」

この雰囲気に真っ先に声を出したのは乙女だった。

「にゃあ、遊夜かっこ良かった。」

「…ふ、ふふん、まぁあたしの隣に立つぐらいなら良いかもね。」

乙女に続く様に希と千世も遊夜を褒める声を上げる中、
唯1人　文乃はどこか面白く無さそうな表情をしている。

「（何よかっこつけちゃって、バカ遊夜。
あんなの全然かっこ良くないんだから！）」

いつもの狼少女的な発言を心の中でやる陰気な文乃なのであった。

「誰が陰気よ誰が！！」
「あの、ちょっとよろしいですか？」

不意に後ろから声を掛けられ驚く文乃が振り返ると、
今まで自分達の近くに来ていた男子の数名が文乃に接近していた。

「失礼、見た所　梅ノ森嬢のお知り合いのようですが
どこかのご令嬢ですか？」
「え、ちょっと……」
「そいつはあたしの学友よ。」

驚く文乃の背後から発した千世の声に、男子達はやや引いてしまう。
仮にも世界に名のある梅ノ森財閥の令嬢に学友と呼ばれ
しかも千世が睨み付ける様に言って来るものだから
男子達は驚きのあまり引いてしまうが、中には引かない者も居た。

「どうですか、ボクと一緒に踊りませんか？」
「にゃ？」
「どうです麗しいアナタ、是非ボクと……」
「う～ん、お姉ちゃん困っちゃうなぁ～。」

いつの間にか希や乙女にまで迫っている者も居た。
無理も無い。文乃に千世に希に乙女、どれも極上の美女達でありそんな美女達が一箇所に集まっているのに目立たない筈が無い。
周りは美女に引き寄せられた男達で埋め尽くされていく。
その誰もが某社長のご子息だったりするものだから
文乃達は対応に困ってしまう。

「よろしければ、ボクと一曲どうですか？」
「え、えぇと……」
「すまないが、彼女達は俺の学友だ。ナンパは程ほどにしてくれ。」

不意にそんな声がし、文乃達が声のした方を向くと
そこには文乃達を庇うように前に出ようとする遊夜の姿があった。
その真剣な眼差しに、目の前にいた文乃は顔を真っ赤に染めてしまう。
同時に遊夜を見て形勢不利と見たのか、男達は視線を逸らして立ち去って行った。

「大丈夫か？」
「も、もっと早く助けに来なさいよ、バカ遊夜！」

遊夜の眼差しから視線を逸らしながら悪態をつく文乃だが
その顔は未だに赤いままだった。

「うんうん、ありがとうね遊夜♪」
「にゃあ、ありがとう。」

その一方で、乙女と希は素直にお礼を述べ
乙女に居たっては今にも抱きついてきそうだ。

遊夜は抱きつきをかわすと、今度は千世に向かう。

「梅ノ森さんも来てたんだな。」

「ふん、当然よ！これ程　大きなパーティにあたしが来ない訳無いでしょ？」

「ですが普段はめんどくさがって碌に出席しませんが。」

「此度は遊夜様も参加なさると聞いてやって来た次第です。」

いきなりした声に千世が振り向くと、
そこには予想通りの声の主、メイドの佐藤と鈴木がいた。
その姿を確認した千世は怒りと羞恥から顔を真っ赤にしながら
逃げる2人のメイドを追いかけて行った。

「何だったんだ？」

その様子を見ていた遊夜が首を傾げていると、不意に会場に音楽が流れ出した。
そして気が付くと音楽に合わせて男女で踊りだす人々が現れる。
パーティ会場の定番、円舞曲（ワルツ）だった。

「わぁ～すごいねぇすごいねぇ！
お姉ちゃん、こんなのテレビでしか見たこと無いよぉ～♪」

「うむ、これはこれは……」

「俺ら、マジで場違いな所に来てんじゃね？」

「はは、そんなに気にしなくても……あ。」

皆がワルツに驚く中、遊夜は千世が戻って来た事に気づく。

「ったく、佐藤も鈴木も一々……」

「荒れてるね梅ノ森さん。」

「ふん、うっさいわね。」

そう言いながら千世は手を差し出す。
その行動に遊夜は頭上に『?』マークを浮かべる。

「分かってないわね、あたしをエスコートなさい。」

その言葉に、遊夜は全てを察すると千世の差し伸べた手を握るとワルツの中へと混ざって行く。
美男美女とは正にこの事だろうか、
背がやや足りないとはいえ千世はかなりの美人だ。
遊夜は背丈も高く美男子、その踊る姿は実に絵になる。

「（こいつ、結構ダンスうまいわね……／／／

千世とのダンス終了と同時に乙女が発した言葉はそれだった。

「ねぇねぇ、今度はお姉ちゃんとも踊ろおよ！」

そう言い乙女は、遊夜の腕を引っ張り行こうとする。

「ちょ、ちょっと待ってください乙女さん！」

「にゃあ」

が、それに待ったを掛ける者達が居た。

言わずと知れた文乃と希である。

「態々別に踊らなくても……」

「にゃあ、私も踊りたい。」

「えぇ～、でも私が先だったよぉ？？？」

その結果、言い合いを始めてしまう3人。

その外野で自分の事なのに話から外されてしまっている遊夜の姿があった。

「え、え～と……どうすれば……」

「ん？？、モテモテですネー、ユーヤ。」

不意に背後からした声に遊夜が振り向くと、そこには予想通りペガサスが居た。

「モテモテって、何が？」

「……鈍い所も相変わらずですネ。」

遊夜の言葉にやや頭を抱えながら、

ペガサスは言い合いを続ける3人の中に割って入る。

「落ち着いてください、皆サン。」
「ペ、ペガサスさん！」
「にゃあ。」
「あらペガサスさん、またお会いしましたねぇ～♪」

ペガサスの登場にそれぞれの反応をする中、ペガサスは微笑みながら口を開く。

「ユー達がユーヤとダンスしたい気持ちは分かりマース。ですがここはフェアに、くじ引きで決めまショウッ！」

そう言いペガサスは何処からともなく、紙で出来たくじ引きを3本取り出すと文乃達に突き出す。

「さぁ、どうゾ！」
「それじゃ私からねぇ～♪」
「にゃあ。」
「え、ちょっと……」

ペガサスの言葉に乗り気の乙女と希に続き、やや遅れた文乃もくじを引く。
結果は――――――

乙女：2番
希：3番

そして文乃：1番

と引いたくじにそれぞれ書かれていた。

「あーん、お姉ちゃん2番かぁ～。」

「にゃあ、トリ。」

やや残念そうな表情をする2人の隣で、文乃は我が目を疑っていた。

「（わ、私が1番!?じゃ、じゃあ私が乙女さんや希よりも先に遊夜と!!!?）」

そう考えた瞬間、文乃の顔に熱が溜まりだす。

そんな文乃の異変に気づいた（と言っても原因には気づいていない）遊夜は

文乃の様子を見る為に文乃に接近する。

「文乃さん?」

「っ!!?か、顔を近づけるな!2回死ね!!!!」

顔を近づけて来た遊夜に心臓が飛び出る程　驚いた文乃は、

つい何時もの癖で遊夜に蹴りを放ってしまう。

これに対し遊夜は、驚きながらも何とかギリギリで避ける事に成功する。

「っと、危なかった。どうしたんだ文乃さん。」

「うっさい!」

そうぶっきら棒に答えると、文乃は遊夜に向かって手を差し出す。

「ほ、本当はアンタなんかとダンスなんてしたくないけど、
あ、アンタがどうしてもって言うなら、相手になってあげるわ！！」
顔を真っ赤にしてそう言い放つ文乃の言葉に遊夜は首を傾げながらも、
『では』と笑顔で文乃の手を取るとダンスへと向かう。
その間、文乃は遊夜と視線を合わせようとせず
終始　顔を真っ赤にしていたのは全くの蛇足である。

「うんうん、遊夜ダンス上手だね～♪」
文乃とのダンスが終わると、今度は乙女が遊夜に迫って来た。
「じゃ、よろしくね♪」

そう言い乙女は遊夜に向かって手を差し出す。
その乙女の行動に遊夜は苦笑しながらも乙女の手を取るとダンスする者達の中へと混じって行く。

「……にゃあ。」

その様子を見ていた希はため息を付くように口癖をこぼす。

「どうしました？」
「にゃ？」

希の様子を察したのか、ペガサスが希に語りかける。

「……何でもない。」
「……そうですか、あまり無理をしてはいけませーン。
気分が悪かったらいつでも言ってくださーイ。」
そう言い希から離れるペガサスだが、その視線は希を向いたままだった。
「（霧谷　希……シンクロモンスターを持つ謎の少女……
なぜ彼女がシンクロモンスターを……）」
ペガサスは、遊夜に頼まれた日から希の事を調べて来た。
だが、住所はもちろん血縁者も親戚の存在すら結局分からなかった。
彼女が何故シンクロモンスターを持っているのかも謎のままだ。
Ｉ２社や梅ノ森財閥の情報力を持ってしても分からない希の正体。
彼女は一体何者なのか、何処から来たのか、
ペガサスは義理（マイサン）の息子遊夜の頼みもあるが、
自分自身の興味的にも希の事を知りたかった。
「（……もう少し調べてみる事にしましょうか……）」
そうペガサスが考えを巡らしている内に、
希の前にダンスを終えた遊夜が現れていた。
「お待たせ希、それじゃ、踊ろうか。」
「にゃあ♪」
遊夜の言葉に嬉しそうに頷くと、
希は遊夜と共にダンスする者達の中へと混じって行った。

「ふぅ。」

希とのダンスを終え、汗をかいた体を軽く休ませる為に氷水の入ったグラスを一気に飲み干していると、遊夜は視線に1人の男を捉える。
その男は歳は遊夜と同じ位で、腰まである紫色の髪を後ろで緩く結び鷹のように鋭い金色の瞳をしている。

「アレは……」

気づくと遊夜はその男に向かって足を進めていた。

「ん？どこ行くんだ遊夜。」
「どうかしたのか？」

遊夜の移動に気づいた家康と大吾郎が遊夜に視線を送ると同時に2人の目にも男の姿が写り、その表情に驚きが浮かび上がる。
忘れる筈が無い、中学時代の短い間だったが友として過ごしたアイツの事を。
男は遊夜が近くにやって来ると、丸で待っていたかの様に笑顔を向ける。

「久しぶりだな、遊夜。」
「ホーク……元気そうだな。」

男、ホークの言葉に遊夜は笑顔で返した。

「誰？知り合い？」

その様子を家康達と共に見ていた文乃達の言葉に、家康と大吾郎は口を開く。

「あの男はホーク。“ホークアイ・ナイトブレイク”。かつて俺達と同じ中学に居た男だ。」

「アイツ結構有名だろ？」

その家康の言葉に、文乃達は『はっ』と思い出す。
彼なら文乃達もテレビで見た事がある。
ホークアイ・ナイトブレイク、その若さと美形、スタントマン無しで高難度のアクションを易々とこなす事で話題を集めている
若手のハリウッドスターにしてプロデュエリストである。

「アイツ、一時期日本に来てた時期があっただろ？
そん時　入学した学校が俺らが居た学校なんだよ。」

「うむ、遊夜とはデュエルモンスターズで色々と気の合う仲だったらしくてな
それが縁で俺達も仲良くなったんだ。」

家康と大吾郎の説明に文乃達が納得していると、
遊夜は皆を紹介する為か、ホークを連れてこちらにやって来た。

「久しぶりだな、家康、大吾郎。」

「うぃーす。」

「久しいな、ホーク。」

そう言い互いを懐かしんだ後、今度は文乃達の方へと向く。

「始めまして、ホークアイ・ナイトブレイクです。ホークって呼んでください。」
「うんうん、よろしくねぇ～ホーくん♪」

乙女の言葉に『ホーくん？』と唖然となる一同だったが、
当のホークは『はい』と微笑んで承諾するのだった。

「それじゃあ、今度はこっちからの自己紹介だねぇ～♪」

そう言い乙女は豊満な胸を揺らしながらホークに向き合う。

「都築　乙女でーす♪遊夜の姉をやってまーす♪」
「あぁ、遊夜が言っていたお姉さんってアナタだったんですね。」

乙女の自己紹介にホークが納得を覚え、
『よろしくお願いします』と頭を下げると、それを見計らって文乃が前に出る。

「芹沢　文乃。一様コレとは知り合いよ。」

コレと遊夜を指差す文乃に、『芹沢文乃？』と首を傾げるホークは不意に何かを思い出した様に『ポン』と手を叩く。

「あぁ、じゃあ遊夜が言っていた
幼馴染の『文ちゃん』ってアナタだったんですね。」
「なっ！！？／／／／／／／／」

文ちゃん、の言葉に文乃は顔を赤く染める。
まさか世界的に有名なハリウッドスターにまで知られていたとは、
さすがの文乃も驚いてしまっている。

「成る程、話で聞いていた通り、綺麗な人だな。」
「見た目だけな。」

ホークの言葉にツッコミを入れる家康の言葉に、
文乃は『ギロッ』と家康を睨みつけ、その視線に家康は遊夜の後ろに隠れた。

「家康……」
「相変わらずの毒舌だな、家康。」

家康の行動にやや遊夜と共に呆れながらも、ホークは視線を希に向ける。

「えっと君は……」
「……霧谷　希、遊夜の仲間。」

希の淡々とした言葉にホークがややタジタジとなる中、
遊夜はホークに耳打ちをする。

「希は、ちょっと変わった子だらさ、その辺は大目に見て。」
「ん、まぁお前の仲間であり、女性なら大目にも何にでも見るさ。」

そう言いホークは『よろしく』と握手の為に手を差し伸べるが、
何を思ったのか希は、その手の上に『にゃ』と言いながら手を乗せた。
意味が分からず首を傾げるホークの横で、皆は『これって』と察知する。

「……あの、これは一体……」

「にゃあ、お手。」
「お手？」

益々意味が分からず、視線を遊夜に向けるホーク。
だがその答えは別の所からやって来た。

「そいつはアタシの子分よ。だからお手をさせてるの。」

誰であろう、千世だった。

「まさかアンタが遊夜と知り合いだったとはね。」
「おや、これは梅ノ森さん。ご無沙汰しています。」

ホークは梅ノ森と面識があるのか、普通の挨拶を交わしたが
周りの皆は特に気にしなかった。
なぜならどちらもこの手の世界では有名人なのだから
面識があってもおかしくないと判断したからだ。

「そういえばホーク、お前は今如何してるんだ？」

遊夜の質問に、ホークは微笑みながら返す。

「俺は今、ハリウッドスターとプロデュエリストの仕事をしながら
デュエル・アカデミア、アメリカ校に通ってる。」
「アメリカ校か、本校に来れば良かったのに。」
「ま、仕事の都合さ。」

そう言い微笑み合う遊夜とホーク。
とその時、近くにいた男子達がにわかにザワめくのを感じ取った遊夜達は

そのザワめきのする方へと視線を向ける。
そして向けた瞬間、男達がザワめく原因を知る。
そこには、1人の少女がこちらに向かって歩いて来ているのである。
その少女は、歳は遊夜達よりやや年上に見え、
どこか上品で可憐な雰囲気が漂っている。
着ているのはドレスと言うより和服に近く、
和服をドレス風に作ったものと言った方が良いかも知れない。
少女は真っ直ぐに遊夜達の元へと歩いて来る。
その姿に、真っ先に反応したのはホークと千世だった。

「夏帆さん、来ていたんですね。」
「夏帆、来てたの？」
「うふふ、お久しぶりですね、千世様。」

ホークと千世に夏帆と呼ばれた少女は、『ニコッ』と微笑みながらそう返した。
その可憐な姿に、遊夜の隣で夏帆を見ていた家康と大吾郎は固まっていた。

「俺、次元超えても良いかも。」
「う、うむ、麗しい。」

そう、男達がザワめいたのはこの夏帆の美しさからだった。
だが、さすがと言うかやっぱりと言うか、この男だけは別だった。

「ホーク、梅ノ森さん、知り合いか？」

ご存知、遊夜だった。
その遊夜の言葉に、夏帆は自分から前に出て口を開く。

「私、“竹馬園　夏帆”と申します。
梅ノ森家とは明治のご一新以前からのお付き合いですわ。
よろしくお願いします。」

そう言い『ニコッ』と微笑む姿に、遊夜の後ろにいた家康と大吾郎は完全にノックアウトされた。

「白鋼　遊夜です、こちらこそよろしく。」

案の定、遊夜はいつも通りだったが。

「何か、アンタとは全然違う、お嬢様って感じね。」
「何ですってーっ!!」
「あはははは、２人は仲良いねぇ～♪」

乙女の言葉に『違う』と反論する文乃と千世。

「おぅ、皆さん仲が良さそうでなによりデース。」

とそこへ、ペガサスが１人の男と共にやって来た。
その男は、ガタイの良い体にごつい顔に太い眉毛をした、さながらゴ●ゴ１３のような風貌をしている。

「これはペガサス会長。」
「あら会長様、ご無沙汰してます。」

ペガサスの登場に、ホークと夏帆はやや遠慮気味に挨拶を交わす。

「おぅ、ホークボーイ、それにＭｓ．竹馬園、お久しぶりデース。
まさかユーが遊夜とフレンドでしたとは、

言ってくれればすぐに合わせていましタ。」
「はは、でもこうして会えたから、俺は気にしてないよ。」

ペガサスの言葉に微笑む遊夜。
その隣で、ホークはペガサスと一緒にやって来た男の顔を見て目を細める。

「アンタは……確かプロデュエリストの“ゲルゴ”。」
「その通りだ。」

ホークの言葉に対しゲルゴと呼ばれた決闘者はぶっきら棒にそう返すと視線を遊夜に向ける。

「お前が、あの白鋼　遊斗のカードを持つ男か。」
「……だったら、何だ?」

遊夜はゲルゴの嫌な視線に悪寒を感じながらも、そう言い返す。

「彼がアナタに話があるそうデース。」
「話?」
「話と言うより、頼みがある。」

ゲルゴは頼みと言いながらどこか高圧的に遊夜に言い放つ。

「お前の持つ白鋼　遊斗のカードの入ったデッキと決闘をしたい。」
「なに?」

ゲルゴの言葉に遊夜は『そんな事か』と軽くＯＫを出そうとしたがここである事に気づく。
彼の目が、自分ではなく自分のポケットに、デッキに向いている事

に。

「あの白鋼　遊斗のカードとの決闘を望む、
これは決闘者として極普通の意思だ。」

彼の言葉にも自分ではなく、
父の残したカードに向いている事に遊夜は確信を得る。

「構いませんよ、やりましょう。俺のデッキと。」

その言葉にゲルゴは『ニヤ』と微笑むと、決闘盤（デュエル・ディスク）を構える。

「おや、決闘が始まるようですな。」
「あの白鋼遊夜ですか。」
「相手はプロのゲルゴですな。」

それに気づいた周りから声が上がる中、ペガサスが前に出る。

「ではコレより、勇気ある2人の決闘を開始しマース！！！」

「行くぜ！」
「来い！！」

「「決闘（デュエル）！！！」」

遊夜：ＬＰ／４０００
ゲルゴ：ＬＰ／４０００

「あらら～、何だかすごい事になったねぇ～♪」
「あの、乙女先生、そんな事いってる場合ですか？」
周りで遊夜の決闘を見る乙女の言葉に即座にツッコミを入れる文乃の隣で
大吾郎がホークに接近する。
「ホーク、あのプロはどういった決闘者なのだ？」
この大吾郎の問いに対し、ホークは快く答える。
「ランクは高くないが堅実な手を打つ事で有名だ。だが……」
「だが何だよ？」
2人の会話を聞いていた家康の言葉に対し、ホークはやや目を細めて言い放つ。
「あの男、あまりいい噂を聞かないんだ。」
ホークの言葉に、家康と大吾郎は首を傾げるのだった。
「私の先行！ドロー！！」
ゲルゴはカードを手札に加えると、脳内思考に入る。
「（ふふ、ついてる。

ここであの白鋼　遊斗のカードを破れば俺の名も上がる！
相手は小僧だ、余裕で潰せる！！）」

そう、このゲルゴ、遊夜の予想通り興味があるのは
遊夜の父が残したカードであり、遊夜など道端の石ころ程度に過ぎなかった。
ただ己の名を上げる為に、それだけの為に決闘を仕掛けたのである。

「私はモンスターを1体、裏側守備表示で召喚！」

ゲルゴの場にカードが横向きでセットされる。

「さらにカードを2枚伏せ、ターンエンド！」
「俺のターン、ドロー！！」

ゲルゴのエンドフェイズと共に遊夜はカードを引き
手札状況から即座に最初の一手を決める。

「俺はチューナーモンスター『蒼雷郷の鎌鼬』を召喚！！」

蒼雷郷の鎌鼬　☆3　風　雷族　ＡＴＫ１３００　ＤＥＦ１０００

遊夜の場に蒼白く光る鎌を生やした鼬が現れた。

「チューナーか！！」
「おぉ！！いきなり来るのか！！」

「あれがチューナーモンスターか。」

チューナーモンスターの召喚に、周りから声が上がる。

「さらに、『蒼雷郷の鎌鼬』が召喚に成功した時、手札から☆(レベル)４以下の
『蒼雷郷』と名のつくモンスター１体を特殊召喚できる！！
来い！！『蒼雷郷(そうらいきょう)の剣客(けんかく)』！！」

蒼雷郷(そうらいきょう)の剣客(けんかく)　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に蒼い和服に身を包んだ剣士が現れる。

「行くぞっ！！☆４『蒼雷郷の剣客』に☆３『蒼雷郷の鎌鼬』をチューニング！」

鎌鼬が緑色のリングとなり、剣客もその身を４つの星に変える。
そして一直線に４つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天を斬り裂く刃となる。光と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の勇士、『蒼雷郷(そうらいきょう)の猛将(もうしょう)―カツマ』！！」

蒼雷郷の猛将―カツマ　☆7　光　雷族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２２００

光が弾けその中から、蒼い甲冑に身を包み黒い馬に乗った武将が姿を現す。

「ほぅ、それが白鋼　遊斗が残したシンクロモンスター。素晴らしい……」

この時も、ゲルゴの視線は遊夜ではなく召喚されたシンクロモンスターにのみ向いていた。
この事に遊夜は完全に確信を得る。
こいつが戦いたいのは父のカードであり、自分ではない、と。

「（やっぱりこいつの視線は、俺ではなく父さんのカードに向いている！）バトル！！
『蒼雷郷の猛将―カツマ』で守備モンスターを攻撃！！“蒼雷斬光閃”！！」

遊夜の言葉と同時に、カツマの槍が守備モンスターに迫るがゲルゴは『してやったり』といった表情でニヤつく。

「守備モンスター『マシュマロン』の効果発動！！」
「！！」

マシュマロン　☆3　光　天使族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／５００

裏側から表になった白いマシュマロの様なモンスターはカツマの槍を弾き返す。

「『マシュマロン』は戦闘では破壊されない！
そして裏側表示で存在するこのカードを攻撃したモンスターのコントローラーは、
ダメージ計算後に１０００Ｐのダメージを受ける。」

「くっ！」

遊夜：ＬＰ／４０００⇒３０００

「ならばカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

「にゃあ、遊夜の様子がおかしい。」

決闘を見ていた中で、希は不意にそんな事を呟く。

「どういう事よ？」

希の言葉に千世は首を傾げるが、その横で文乃と乙女は同意するように頷いた。

「確かに変ね。」

「そうだねぇ～、何だかあんまり決闘を楽しんでない様に見えるねぇ～。」

「当然ですね。」

そんな乙女達の疑問に答えたのはホークだった。

「あの男、ゲルドの視線は遊夜を捕らえていない。」

「どういう事だ？」

ホークの言葉に大吾郎が首を傾げる中、

ホークは視線をゲルゴに向けながら口を開く。

「奴は遊夜ではなく、遊夜の親父さんが作ったカードを倒す事で自分の名とランクを上げ様としているだけだ。

遊夜もそれに気づいて不機嫌なんだろう。」

「つまり、あの方にとって遊夜様は取るに足らない存在、そう言う事ですか？」

夏帆の言葉にホークは静かに頷く。

「だが、アイツをなめてると痛い目を見るぜ。」

そう言いホークは視線を遊夜に向けた。

「私のターン！」

ゲルゴは手札の状況を見ながら次の一手を考える。

「（ふふ、所詮は小僧だな。この勝負いただいてみせる！！）

私は魔法（マジック）カード『強欲な壺』を発動！

デッキからカードを2枚ドロー！！」

手札を補充したゲルゴは次の一手を決め、手札の1枚に手を伸ばす。

「私は『機動砦のギア・ゴーレム』を守備表示で召喚！」

機動砦のギア・ゴーレム　☆４　地　機械族　ＡＴＫ／８００　ＤＥＦ／２２００

ゲルゴの場に、巨大な楯を備えた機械型のゴーレムが現れた。

「さらにカードを2枚伏せ、ターンエンド！」

「俺のターン！！」

ゲルゴのエンド宣言と共にカードを引いた遊夜は、手札の状況と場の状況を把握する。

「（相手の場にはモンスターが2体、どちらも守備表示。そして伏せカードが４枚……普通なら攻撃をためらうが……）」

ここまで考え、遊夜は1度深呼吸をし、手札を見る。

「（つまらない決闘も、俺が面白くすれば良いだけだ！）俺は『蒼雷郷の隠密』を召喚！！」

蒼雷郷の隠密　☆３　風　雷族　ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／０

遊夜の場に蒼白い雷を身にまとった忍者が現れる。

「バトル！『蒼雷郷の猛将―カツマ』で『ギア・ゴーレム』を攻撃！！」

遊夜の声と共に、カツマの槍がギア・ゴーレムに迫る。

「（ふん、所詮は小僧だな！）罠発動（トラップはつどう）！『魔法の筒（マジック・シリンダー）』！！

相手モンスター1体の攻撃を無効にし、

そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える！！」

ゲルゴの場に巨大な2つの筒が現れ、勝間を阻もうとする。

「させるか！手札から『蒼雷郷（そうらいきょう）の巫女（みこ）』の効果発動！」

「なに！？」

ゲルゴが驚く中、遊夜は手札から墓地に送った

水色の髪をし鏡を持った1人の巫女が現れる。

「自分の場に『蒼雷郷』と名のつくシンクロモンスターが存在する時

このカードを手札から墓地に送る事で相手の魔法・罠を無効にし破壊する！！」

巫女の持つ鏡から放たれた光が、魔法の筒を消し去っていく。

「よって『カツマ』の攻撃は有効！“蒼雷　斬光閃”！！」

槍をグルグル回したカツマは、蒼白く光る槍でギア・ゴーレムを貫く。

「さらに『カツマ』の効果発動！
このカードがバトルで相手モンスターを破壊した時、
破壊したモンスターの☆（レベル）の数×２００Ｐのダメージを相手に与える！！」
「なに！！？」

遊夜の言葉にゲルゴが驚く中、
カツマの頭上に蒼白く光るプラズマが発生する。

「発動せよ！！“蒼雷（そうらい）　流星群（りゅうせいぐん）”！！」

プラズマは４つの雷撃となり、ゲルゴに襲い掛かる。

「ぐおぉっ！！？」

ゲルゴ：ＬＰ／４０００⇒３２００

「アレがシンクロモンスターか……」
「素晴らしい、あれが世に出ればデュエルモンスターズ界がひっくり返るぞ！」

遊夜の優勢に周りから声が上がる様子に、文乃はどこかほっとしていた。

「（アイツ、ようやくいつも通りになったわね。）」
「あらあら～、文乃ちゃん嬉しそうだねぇ～♪

やっぱり遊夜が元気になったから？」

乙女の言葉に『なっ！？』と顔を赤くする文乃の姿に、
それを見ていた夏帆は『クスリ』と微笑んだ。

「文乃様、もしかして遊夜様と相思相愛の仲なのですか？」
「なぁっ！！！！？？／／／／／／／／／／／／／／／／」
「いや違いますよー、こいつの片思いっすよ片思い。」

夏帆にそう言い放った家康の言葉に、
文乃の蹴りが炸裂したのは言うまでも無かった。

「ぐぬぅ……小僧の分際で……」

自分にダメージを与えた遊夜を睨みつけるゲルゴだったが、
当の遊夜は先程までの勢いはどこへやら、何処か寂しそうな表情だった。

「……アンタ、つまらない奴だな。決闘　楽しんでいるのか？」
「楽しむ？そんなものはアマチュアのセリフだ！」

遊夜の言葉に『カチン』と来たのか、ゲルゴは怒りを込めて言い返す。

「プロとアマの違いを思い知らせてやる！
罠発動！『ブロークン・ブロッカー』！！
自分の場に存在する攻撃力より守備力の高い守備表示モンスターが、

戦闘によって破壊された時、そのモンスターと同名のモンスターを
２体までデッキから特殊召喚する！！
私は『機動砦のギア・ゴーレム』を２体特殊召喚！！！」

機動砦のギア・ゴーレム　☆４　地　機械族　ＡＴＫ／８００　Ｄ
ＥＦ／２２００

機動砦のギア・ゴーレム　☆４　地　機械族　ＡＴＫ／８００　Ｄ
ＥＦ／２２００

ゲルゴの場に、ギア・ゴーレムが２体召喚される。

「前より守りを固めてきたか！だが俺のバトルはまだ続いている！！
『蒼雷郷の隠密』は相手プレイヤーに直接攻撃（ダイレクト・アタック）できる！！
行け！『蒼雷郷の隠密』でプレイヤーへダイレクト・アタック！！
“雷遁手裏剣（らいとんしゅりけん）”！！」

遊夜の言葉と共に、隠密は懐から出した雷を帯びた手裏剣を投げ打
つ。

「させるかぁ！伏せ（リバース）カード、オープン！！
永続罠『スピリットバリア』！自分の場ににモンスターが存在する
限り、
私への戦闘ダメージは０となる！！」

ゲルゴの場に見えない壁の様なものが現れ、
隠密の放った手裏剣を弾き返す。

「ちっ！俺はターンエンドだ！！」
「私のターン！」
ゲルゴは引いたカードを確認すると、即座にそのカードを決闘盤にセットする。
「私は『手をつなぐ魔人』を守備表示で召喚！！」
手をつなぐ魔人　☆４　闇　悪魔族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１６００
ゲルゴの場に、巨大な手をした魔人が現れた。
「『手をつなぐ魔人』のモンスター効果！
自分の場の守備表示モンスターの合計の守備力がこのカードの守備力に加算される！！」
手をつなぐ魔人　ＤＥＦ／１６００⇒ＤＥＦ／６５００
「さらにこのカードが存在する限り、相手は他のモンスターを攻撃できない！！
さらに私はカードを１枚伏せ、ターンエンドだ！！」
「何かアイツ、先から守備ばっかね。」
先程から決闘を見ていた千世は、ふとそんなセリフを口にする。

「あの男の面白くない所はそこですね。
奴はが堅実な手打つが故に、その決闘に対しての面白みに欠ける。」
千世の問いに対しそう返すホーク。
つまりゲルゴは、勝つ為を前提に考え、それ故に堅実な戦略を取るのだ。
故に攻撃よりも守備の方が多いのは必然だった。
何故なら、攻撃と守備、どちらが安全策なのかは火を見るより明らかだからだ。

「ですが守備ばかりでは決闘に勝てませんわ。」
そう言い不敵に微笑む夏帆の言葉に対し、ホークは静かに頷いた。
「恐らく、そろそろ何かを仕掛けて来る筈。」
そう言いホークは視線を決闘に戻すのだった。

「俺のターン!!」
遊夜は引いたカードを確認すると、即座に決闘盤に差し込む。
「俺は魔法カード『シンクロキャンセル』を発動!
場のシンクロモンスターを融合デッキに戻し、
シンクロ素材一組を墓地より呼び戻す!!
俺は『カツマ』をデッキに戻し、素材としたモンスターを呼び戻す!!

蘇れ！『鎌鼬』！『剣客』！！」

蒼雷郷の鎌鼬　☆３　風　雷族　ＡＴＫ１３００　ＤＥＦ１０００
蒼雷郷の剣客　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

カツマが光と共に消えると同時に、遊夜の場に鎌鼬と剣客が蘇る。

「そして蘇ったこの２体を再びチューニング！！」
「なに！？」

遊夜の言葉にゲルゴが驚く中、
鎌鼬は再び緑色のリングとなり、剣客もまたその身を４つの星に変える。
そして一直線に４つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天を斬り裂く剣となる。閃光と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の戦士、『蒼雷郷の荒武者（そうらいきょうのあらむしゃ）―ジンベエ』！！」

蒼雷郷の荒武者（そうらいきょうのあらむしゃ）―ジンベエ　☆７　光　雷族　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２２００

光が弾けその中から、蒼い甲冑に身を包み刀を二本持つ武者が姿を

現す。

「新たなシンクロモンスターか！」

「そうだ！そして『ジンベエ』のモンスター効果発動！！

このカードがシンクロ召喚に成功した時、

相手の場のモンスターを1体破壊できる！！“迅雷（じんらい）の太刀（たち）”！！」

ジンベエの刀より放たれた蒼い稲妻が、手をつなぐ魔人へと迫る。

「それが如何した！！永続罠『スクラム・フォース』発動！

自分フィールド上に守備表示モンスターが2体以上存在する時、

自分フィールド上の守備表示モンスターはカード効果によっては破壊されない！！」

発動した罠により、蒼き稲妻は弾き返された。

「くっ！『蒼雷郷の隠密』を守備表示に変更し、ターンエンドだ！」

「私のターン！」

遊夜のエンド宣言と共に、ゲルゴはカードを引く。

「罠発動！『無謀な欲張り』！

自分のドローフェイズを2回スキップする代わりに、

デッキからカードを2枚ドローする！！」

手札を補充したゲルゴは、手札の状況を見て『来た』と頷く。

「私は手札から魔法カード『デビルズ・サンクチュアリ』を発動！

自分の場に『メタルデビル・トークン』を1体特殊召喚する！！」

メタルデビル・トークン　☆１　闇　悪魔族　ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／０

ゲルゴの場に、鉄で出来た悪魔のトークンが現れる。

「そして『メタルデビル・トークン』と
『機動砦のギア・ゴーレム』の２体を生け贄に捧げ――――
『ロック・ストロング・ゴーレム』を攻撃表示で召喚！！！」

ロック・ストロング・ゴーレム　☆８　地　岩石族　ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２６００

ゲルゴの場のメタルデビル・トークンとギア・ゴーレムが消え、
レンガ石で出来た巨大なゴーレムが現れた。

「守備モンスターが減った事で『手をつなぐ魔人』の守備力がダウンする。」

手をつなぐ魔人　ＤＥＦ／６５００⇒ＤＥＦ／４３００

「そして手札から装備魔法『シールド・オブ・ソード』を発動！
『ロック・ストロング・ゴーレム』に装備する！！」

ゲルゴの発動したカードから放たれた黄色いオーラが
ロック・ストロング・ゴーレムを包み込む。

「このカードを装備したモンスターは、攻撃表示なら攻撃力を守備表示なら守備力を１０００Ｐアップさせる！！
ロック・ストロング・ゴーレムは攻撃表示！
よって攻撃力が１０００Ｐアップ！！」

ロック・ストロング・ゴーレム　ＡＴＫ／２６００⇒ＡＴＫ／３６００

「攻撃力、３６００……」
「行けぇ『ロック・ストロング・ゴーレム』！！
“ロック・ストロング・ハンマー”！！！」

ロック・ストロング・ゴーレムの巨大な腕が、ジンベエを押しつぶす。

「ぐわぁっ！」

遊夜：ＬＰ／３０００⇒１８００

「（よし、ここでさらに守りを固める！！）
さらに『ロック・ストロング・ゴーレム』の効果発動！
１ターンに１度、場のモンスターの表示形式を変更できる！
私は『ロック・ストロング・ゴーレム』を攻撃表示から守備表示にする！！」

ゲルゴの言葉と共に、ロック・ストロング・ゴーレムが守備体勢を取る。

「そして『ロック・ストロング・ゴーレム』の表示が変更された事で
装備魔法『シールド・オブ・ソード』の効果が発動する！！」

ロック・ストロング・ゴーレム　ＡＴＫ／３６００⇒ＡＴＫ／２６
００　ＤＥＦ／２６００⇒ＤＥＦ／３６００

「そして守備モンスターが増えた事で
『手をつなぐ魔人』の守備力がアップする！！」

手をつなぐ魔人　ＤＥＦ／４３００⇒ＤＥＦ／７９００

「そして手札から永続魔法『暗黒の扉』を発動！
このカードが存在する限り、
互いのプレイヤーはモンスター１体でしか攻撃できない！！ターン
エンドだ！！」

「成る程な、モンスターによる攻撃と守備を両方考えた戦略って訳
か。」

ゲルゴの決闘を見てそう判断する家康の言葉に
ホークは『そう言う事だ』と返す。
つまりゲルゴの戦略は、マシュマロンや手をつなぐ魔人など
守備に優れたモンスターで相手の動きを止めつつ、
ロック・ストロング・ゴーレムで攻撃し、
攻撃が終わると守備にし守りを固める戦略だった。

「『手をつなぐ魔人』がいる限りあのモンスター以外は攻撃できな
い上に

あの守備力を上回るのは至難の技だな。」
「しかも戦闘ダメージは『スピリットバリア』によって0だから直接攻撃モンスターも無意味。
攻撃できても出来るのは『暗黒の扉』の存在により1体まで。
カード効果で破壊し様にも『スクラム・フォース』がある限りそれも不可能。」

大吾郎とホークの言葉に、『そんな』と千世は諦めそうな表情になる。

「にゃあ、大丈夫。遊夜が勝つ。」

だが、そんな状況でも希は遊夜を信じていた。

「希……」
「遊夜は、私の大事な仲間。私は仲間を信じる。」

希の言葉に皆は静かに頷く。

「当然だ、俺を破った男があの程度の男に負けもらっちゃ困る。」

そう言い決闘に視線を戻すホークの隣で、
夏帆は決闘ではなく希に視線を向けていた。

「小僧、お前に万が一つも勝ち目は無いぞ。」
「何故そう思うんだ?」

ゲルゴの言葉に対しそう返す遊夜に、

ゲルゴはやや苛立ちを覚えながらも口を開く。

「この状況を見て分からんか？こっちは攻撃も防御も完璧だ。」

「完璧なコンボなんて存在しないさ。」

ゲルゴに対しそう言い返した遊夜は、デッキに手を伸ばす。

「ましてや決闘は最後までやってみないと分からない！俺のターン！！」

遊夜はデッキから思いっきりカードを引く。

そして引いたカードを確認すると、即座に次の一手を決める。

「俺は手札から魔法カード『カード・フリッパー』を発動！

手札を1枚墓地に送り、

相手のフィールド上に存在する全てのモンスターの表示形式を変更する！！」

「なにいぃっ！！？」

遊夜の発動したカードに驚く中、発動したカードから放たれた黄色く輝く糸がゲルゴの場のモンスター達に絡みつき、その表示を変えていった。

「そして表示が変更された事で、

『手をつなぐ魔人』と装備魔法『シールド・オブ・ソード』の効果が発動する！！」

手をつなぐ魔人　ＤＥＦ／７９００⇒ＤＥＦ／１６００

ロック・ストロング・ゴーレム　ＡＴＫ／２６００⇒ＡＴＫ／３６

００　ＤＥＦ／３６００⇒ＤＥＦ／２６００

「さらに『蒼雷郷の隠密』を攻撃表示に変更し、場から永続罠『蒼白き墓石』を発動！！
俺の墓地から『蒼雷郷』と名の付くモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する！
蘇れ！『蒼雷郷の荒武者―ジンベエ』！！」

蒼雷郷の荒武者―ジンベエ　☆７　光　雷族　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２２００

遊夜の場に、ジンベエが蘇った。

「さらに手札から魔法カード『再発電』を発動！
自分の墓地から雷族モンスターを１体手札に加える！
俺はチューナーモンスター『蒼雷郷の巫女』を手札に加え召喚！！」

蒼雷郷の巫女　☆１　光　雷族　ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／０　チューナー

遊夜の場に、蒼雷郷の巫女が現れる。

「行くぜ！☆７『蒼雷郷の荒武者―ジンベエ』に☆１『蒼雷郷の巫女』をチューニング！」

巫女が緑色のリングとなり、ジンベエもその身を７つの星に変える。

そして一直線に7つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天へと昇る翼となる。落雷と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の守護龍、『蒼雷郷龍（そうらいきょうりゅう）―スカイサンダー・ドラゴン』！！」

蒼雷郷龍（そうらいきょうりゅう）―スカイサンダー・ドラゴン　☆８　光　雷族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２５００

光が弾けその中から、所々を蒼い甲冑で堅め蒼い翼を生やした蒼白く輝く東洋の龍が姿を現す。

「出た！『スカイサンダー・ドラゴン』！！」
「遊夜のエースモンスター！！！」

スカイサンダー・ドラゴンの登場に会場から声が上がる。

「これが……白鋼　遊斗の最高傑作……」

ゲルゴもまた、その威風堂々した姿に言葉を失う。

「そして『スカイサンダー・ドラゴン』の効果発動！！
このカードがシンクロ召喚に成功した時、

相手の場のモンスターを全て破壊する事ができる！！
アンタの場の『スクラム・フォース』は場に守備モンスターが居ない今
その効力は無効のままだ！！」

遊夜の言葉に『しまった』と唸るゲルゴだが、時既に遅し。

「唸れ！！“蒼覇（そうは）落雷撃（らくらいげき）”！！」

スカイサンダー・ドラゴンの放つ落雷が、ゲルゴのモンスターを全て焼き払った。

「これで『スピリットバリア』の効力も無くなる！」

そう言い放つ遊夜だが、ゲルゴにはまだ余裕が合った。

「だが私の場には『暗黒の扉』がある！
このカードがある限り互いにモンスター1体でしか攻撃は出来ん！！
このターンで私が敗北する事はない！！！」

そう、ゲルゴの場の暗黒の扉により、互いに1体でしか攻撃が出来ない。
仮にスカイサンダー・ドラゴンで攻撃してもゲルゴのＬＰ／３２００から２８００引かれるだけであり、敗北にはならない。

「それはどうかな？バトル！『蒼雷郷の隠密』で攻撃！！」
「なに！？」

遊夜の攻撃宣言にゲルゴは、いやここに居る全員が驚く。

遊夜は攻撃力の高いスカイサンダー・ドラゴンではなく
態々攻撃力の低い隠密で攻撃を仕掛けてきたのである。

「放て！“雷遁手裏剣”！！」

隠密が懐から出した雷を帯びた手裏剣がゲルゴに襲いかかる。

「ぐぬううぅっ！！」

ゲルゴ：ＬＰ／３２００⇒２０００

ダメージでふら付くゲルゴだが、過ぎに体勢を立て直す。

「ふん、この程度の攻撃……」

「この瞬間『蒼雷郷の隠密』の効果発動！」

ゲルゴの言葉を遮るように遊夜は言い放つと、
隠密の放った鎖が暗黒の扉を縛り上げていく。

「『蒼雷郷の隠密』がダイレクト・アタックによって
相手にダメージを与えた時、場のカード１枚の効果をこのターン無効にする！！
よって『暗黒の扉』の効果は無効となる！！！」

「ば、バカな！！？」

ゲルゴが驚く中、暗黒の扉に巻き付いた鎖が蒼い電気を発し
暗黒の扉が黒く焦げてしまう。

「これで俺はもう1体のモンスターで攻撃できる！！」
「こ、こんな、この私が……こんな小僧に！！？」

ゲルゴが自分の敗北の予感に動揺する中、遊夜は静かに言い放つ。

「生憎だけど、俺は決闘者も碌に見ず
カードにばかり視線が行く輩に俺は負けない！」

遊夜の言葉と同時に、スカイサンダー・ドラゴンが雄叫びを上げ
口より蒼い稲妻を輝かす。

「行くぜ！『スカイサンダー・ドラゴン』でプレイヤーへダイレクト・アタック！！
轟け！！“天鳴（てんめい）蒼雷破（そうらいは）”！！」

スカイサンダー・ドラゴンの口から放たれた蒼い稲妻が
ゲルゴを飲み込んでいった。

「ぐわあああぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

ゲルゴ：ＬＰ／２０００⇒０

「ば、バカな……！！？」

決闘の決着に、ゲルゴは信じられないと言わんばかりに膝をつく。

「悪いけど、俺は自分の名を上げるだけの輩に容赦しないんだ。」
そう言い遊夜は友達が待つ所へと戻って行く。
「おう！勝ったな！」
「当然よね。」
戻ってきた遊夜に、皆は快い言葉を掛けてくれる。
「良い決闘でしたヨ、遊夜。」
そこへ先程まで決闘を見て言葉１つ発さなかったペガサスもやって来た。
「ペガサス会長、どうしてアイツを俺にぶつけたんですか？」
遊夜は先程から気になっていた事をペガサスにぶつける。
ペガサス程の人物なら、あのゲルゴの性格を見抜いた筈だ。
にも拘らず、態々　遊夜が嫌う様な人物と決闘させるとはどういうつもりなのか。
その事が遊夜には分からなかった。
「これはユーへの、いわゆる社会勉強デース。」
「社会勉強？」
ペガサスの言葉に首を傾げる遊夜。
そんな遊夜に対し『Ｙｅｓ（イエス）』と返したペガサスは説明しだす。
「世間にはああいった人物と交流することもあるでショ。
ユーにはそういった事に今の内に慣れて欲しかっタ……と言うのは

建前デース。」

ペガサスの言葉に『建前かよ！』と何名からかのツッコミが入るもペガサスは気にせず続ける。

「本当はユーが何処まで『蒼雷郷』達を信じ、使いこなしているかを見てみたかったのデース！」

「いや、そこは普通　逆じゃね？」

ペガサスの言葉に家康のツッコミが入る。

だが、その隣で遊夜は声を抑える様に笑っていた。

「あははは、ペガサス会長らしいな。」

その言葉にペガサスは『ニコッ』と微笑むのだった。

「……あれ？」

とここで不意にホークが『キョロキョロ』と辺りを見渡す。

それに気づいた遊夜がホークの動向が気になったのか、声を掛ける。

「どうかしたのか？」

「いや、夏帆さんの姿が見えなくてな……」

ホークの言葉に、ここにいる全員が気づいた。

先程まで決闘を観戦していた夏帆の姿が消えていたのである。

だが、何処に視線をやっても夏帆の姿はなった。

所変わって、こちら会場の外のバルコニー。
そこに携帯電話を使う夏帆の姿があった。

「えぇ……はい、シンクロモンスターの素晴らしいデータが揃いましたわ。
それと、霧谷　希。彼女の姿も確認しましたわ。」

夏帆の周りには大勢のメイドがいるが、
夏帆はそんな事お構い無しに怪しげな言葉を口にする。

「はい、ではまた。」

そう言い携帯をきる夏帆は、視線を月に向ける。

「ふふふ、本当に面白いお方達ですわ。とっても……」

そう言い微笑む夏帆の表情は、
どこか不気味で常闇のように黒かったが、
メイドの誰1人その事を言ったり、ヒソヒソしたりはしていない。
なぜならそれが普通だからだ。
メイドは主人に従う存在。
主人が視線に入ってないと思えば、それに従い言葉1つ発さない。
住む世界の違うもの同士は、決して分かり合えず、友にもなれない。
それが夏帆にとっての普通なのだから。

「ふふふ、これから楽しくなりそうですわ。」

そんな夏帆の笑顔は、怪しげな妖気を放っていた

『～第十四章～　冬休みのパーティ　《終》』

～第十四章～　冬休みのパーティ（後書き）

どうも、黒鋼です。
今回の話で新たなキャラ、ホークが登場。
さらには夏帆が正式にメインキャラの１人となりました。
今回は原作『迷い猫オーバーラン！』であった
パーティの話を元に制作しました。
また、遊夜の対戦相手には原作でのジェネックスで、
万丈目ホワイトサンダーに敗北した
デュエル界のゴルゴ１３ことゲルゴを出しました。
原作でのエド曰く『ランクは高くないが堅実な手を打つ』との事と
『マシュマロン』を使った事から、防御重視のデッキにしてみました。
今回の話を機にホークや夏帆も物語りに拘わって行きますので
どうぞ、お楽しみに～。

今回の最強カード『蒼雷郷の隠密』
☆３　光属性　雷族　ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／０
このカードは戦士族としても扱う。
自分フィールド上にこのカード以外の雷族モンスターが表側表示で
存在する場合、
このカードは相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。
このカードが直接攻撃によって相手ライフに戦闘ダメージを与えた
時、
フィールド上に表側表示で存在するカードを１枚選択する事で
選択したカードの効果をこのターンのエンドフェイズ時まで無効に
する。

ある意味究極の対ロック対策。
コレを使えば『グウラビティ・バインド』も『レベル制限B地区』も怖く無い。
『蒼雷郷』には珍しく破壊効果ではなく無効効果を持つ。
最も『蒼雷郷』特有のバーン降下の代わりに直接攻撃が可能だが。

～第十五章～　白鋼遊夜ファンクラブの決起！！（前書き）

冬休みが終わったある日のデュエル・アカデミア学園の決闘場に
３人の決闘者の姿があった。

「それじゃ、始めようか。」

１人は、白銀に輝くロングヘアを揺らす遊夜。

「えぇ。」
「よろしくお願いしますわ。」

残りの２人は、遊夜本人が知らぬ間に出来上がった
『白鋼遊夜ファンクラブ』の副会長を務めるジュンコとももえ。
３人は決闘場のそれぞれの場に立ち、決闘盤を構える。

「行くぜ！」
「勝負！」
「ですわ！！」

「「「決闘（デュエル）！！！」」」

遊夜：ＬＰ／４０００
ジュンコ：ＬＰ／４０００
ももえ：ＬＰ／４０００

～第十五章～　白鋼遊夜ファンクラブの決起！！

「ちょっと！何でこんな事態になってるのよ！！！」

決闘場の客席で、千世はいきなりとも言える展開に大声を上げた。
無理もない、あまりにも突拍子もなく遊夜とジュンコとももえが決闘し始めたのだ。
驚きのあまり声を上げてしまうのも納得する。
そしてそれは千世だけではなく、客席にいる他の者達も同じだった。

「私は遊夜のバカがまた下らない理由で決闘を始めたって聞いたけど？」
「にゃあ、私は2人が決闘を申し込んだって聞いた。」

千世に続き文乃と希が声を上げる中、
近くに座る家康と大吾郎がゆっくりと口を開く。

「いや、実はよ」
「今から、数分前になるんだが……」

～数分前～

「う～ん……これは…どうすっかなぁ～」

遊夜は家康、大吾郎、十代、翔、隼人達と共に誰もいない教室でデッキ構築をしていた。

「なぁ十代、『蒼雷郷の鎌鼬』と『蝮』、チューナーならどっちが良いかな？」

「う～ん……俺は『鎌鼬』の方が良いと思うぜ！かっこいいし！！」

「アニキ、かっこいいとかじゃなくて強さで判別しなきゃ……あ、『蒼雷郷の巫女』かわいいっす！チューナーなら絶対それにすべきっす！！」

「翔、お前人の事　言えないんだなぁ……」

翔の言葉に隼人がツッコミを入れる中、家康はデッキ構築をせず『じ～』と遊夜と大吾郎を見比べていた。

「？どうした家康。」

「む？俺の顔に何かついてるのか？」

遊夜と大吾郎の言葉に対し、家康は『いやさ～』と言いながら口を開く。

「お前らのデッキって、チューナーとシンクロが入ってんだよな？」

「それがどうかしたのか？」

当然と言わんばかりに返す遊夜に、家康は睨みつける様な目付きで言い返す。

「いやさ、ズルくね？」

「何がだ？」

家康のズルいと言う言葉に首を傾げる遊夜。

「だってよぉ、シンクロ作った遊夜のオヤジさんだろ？
その息子のお前がチューナーやシンクロ持ってんのは納得するけどよ
大吾郎にだけ渡すってそれは無いんじゃないの？」

その言葉に、遊夜と大吾郎は納得した。
つまり、白鋼　遊斗の息子である遊夜が
シンクロモンスターを持っているのは納得できても
大吾郎にだけそれを渡していると言うのは、納得できないらしい。

「つまり、家康も欲しいと？」

遊夜の言葉に『Ｙｅｓ！！』と高らかに言う家康。

「そうすっ！僕もチューナーモンスターやシンクロモンスターが欲
しいっす！！！」

家康に便乗し、翔もシンクロモンスターを欲しがる。
確かに、チューナーモンスターとシンクロモンスターは
これまでの決闘を打ち破るカードなので欲しがるのも無理は無い。

「ねぇ！アニキも欲しいっすよね！！」

翔は十代にも話題を掛けるが、当の十代は『う～ん』と唸った。

「…まぁ俺もシンクロモンスターには興味あるけどさ、俺は別にい
いや。」
「えっ！何で！！？」

十代の言葉に信じられないといった表情で迫る翔。
チューナーモンスターとシンクロモンスターは
カードデザイナー白鋼　遊斗の遺産であり、
今後のデュエルモンスターズ界を根底から買えるかもしれないと言われているのだ。
そんなカードをいらないとは　どういうつもりなのか。
翔にはそれが理解できなかった。

「確かにシンクロモンスターは魅力的だけどよ、
俺は融合の方が性に合ってるし、今はまだ今のデッキを信じてたいしな。」

その十代の言葉に、翔は反論できなかった。
そして忘れていた、十代はこういう奴なんだって事を。

「まぁでも、取り合えずペガサス会長に言ってはおくよ。」

そう言い遊夜は再びデッキの調整に手を向ける。

「これをこうして……よし、できた。」

そしてデッキが出来上がると、デッキをケースに入れて立ち上がる。

「さて、早速　誰かと決闘……」
「あっ！いたっ！！！！」

遊夜がデッキの調整決闘をしようとしていると、
不意に後ろから声がし、遊夜を含む一同は声のした方を向く。
そこには、教室の出入り口からこちらにやって来る、
ジュンコとももえの姿があった。

「遊様！」
「探しましたわ！！」

2人は遊夜の姿を確認すると一目散に遊夜の前にやって来る。

「どうかしたのか？」
「「これ！」」

首を傾げる遊夜に、ジュンコとももえは何枚かの写真を遊夜に差し出す。

「何だ何だ？」
「何すかそれ？」
「何事だ？」

その写真に興味の惹かれた十代達もやって来て、写真を確認する。
それは、冬休みに遊夜達が行ったパーティでの
遊夜と文乃達のダンスシーンや、遊夜とゲルゴによる決闘シーンの写真だった。

「これって、この前のパーティでの写真じゃん。」
「うむ、確かにそうだな。」
「すっげ！遊夜プロと決闘したのかよ！！いいなぁ～。」
「うわぁ、乙女先生　綺麗っす！」
「すごいんだなぁ。」
「でも、どうしてこれを？」

十代達が写真に感動する中、
遊夜は何故この写真をジュンコとももえが持っているのかが気にな

り、
2人に尋ねてみる。
「これは梅ノ森から貰ったの！」
「それで、この写真についてお話がありますの！」
ジュンコとももえの言葉に、『はなし？』と首を傾げる遊夜。
「名誉会長たる梅ノ森や文乃、乙女先生や希とだけ踊るなんて不公平です！」
「私達（わたくしたち）も遊様と踊りたいですわ！！」
「いやでも、もうパーティは無いしな……」
2人に押されそうになりながらもそう言い放つ遊夜に
『それは分かってます』と言うジュンコ。
「ですから私達（わたくしたち）『白鋼遊夜ファンクラブ』は決めましたの！！」
「決めたって、何を？と言うか、ファンクラブなんてあったのか？」
ももえの言葉に首を傾げまくる遊夜だが、2人は気にせず話を進める。
「私達の中で決闘をして残った私達がファンクラブの代表としてやって来ました！」
「私達（わたくしたち）と決闘して下さいませ！そして私達が買った暁には……」
そこまで言い2人は一旦言葉を区切ると、意を決して口を開く。
「「私とデートしてください！！！！」」

「なにいいいいいっ！！！！？？？」
「えええええええええっ！！！！？？」
「何と！？」
「驚いたんだな！」
ジュンコとももえの言葉に、遊夜よりも他のメンバーが驚いた。
「デートって、何だ？」
約1名を除いては。
「十代、デート知らないのか？」
「知らねぇ。」
遊夜の言葉に対し首を傾げながら答える十代。
「あのな、デートっていうのは恋愛関係にある、
もしくは恋愛関係に進みつつある男女が食事やショッピング、
観光や映画なんかを楽しむ事だ。」
「恋愛関係？」
遊夜の説明に対し、十代は益々　首を捻った。
「おい、まさかとは思うが十代の奴、恋愛関係自体が分かってないって事は……」
「アニキならあり得るっす。」
「おいおいどこぞのエロゲーの主人公以上の鈍感さだな。」
翔の言葉に家康はあきれ果てた。
ニブチンの遊夜ですら恋愛などを理解していると言うのに、

十代はそれすら分かっていない。
今時そんな奴がいるのだろうか、目の前にいるのだから始末が悪い。

「でも、俺とデートしたいって……俺ら別に恋愛関係という訳じゃない気が……」
「「そんな事ありません！」」

遊夜の言葉にジュンコとももえは揃って否定する。

「最近のデートと言うものはいつ発動してもおかしく無いもの！」
「ですから全然問題ありませんわ！！」
「え、あ、そうなのか？」

2人の放つ威圧感と勢いに遊夜はやや圧されてしまう。

「ともかく！私達と決闘して！」
「お願いいたしますわ！」
「ん……まぁあれだ、決闘を拒む理由は無いしな。いいぜ。」

遊夜のその言葉に、ジュンコとももえは『やったー』と微笑んだそうな。

「って事があったんだよ先。」
「あ・の・バ・カ～！！」

家康の説明に、文乃はぶちギレ寸前だった。

その力は、客席のイスをも足で押しつぶしていた。

「と言うか、会長たるこの私に相談無しなんてどういうつもりよーっ！！！！！」

「それなんですが。」

「どうも千世様だけ遊夜様と踊るなんてズルイとの事でジュンコさんとももえさんを含めた全員一致の意見だったそうです。」

佐藤と鈴木の説明に、千世は『キーッ』と唸るのだった。

「そういや俺、あの2人の決闘見たことないぜ！明日香とよく一緒にいるあの2人、強えーんだろうな！」

「アニキらしいっすね。」

「そうね。」

十代の反応に苦笑する翔に頷く明日香は、苦笑いをしていた。はっきり言って、あの2人の実力は微妙な所だ。実力は大体、中の上といった所だろう。恐らく遊夜が相手では確実に敗北するだろう。

「（2人には気に毒だけど、負けて遊夜がデートする事になったら文乃達が心配になるわ。）」

そう思いながら心中で苦笑する明日香なのであった。

そして決闘場では、今正に決闘が行われようとしていた。

「先行は貰うわ！私のターン！」

先行はジュンコだった。

「私は『ハーピィ・レディ・ＳＢ（サイバー・ボンテージ）』を攻撃表示で召喚！」

ハーピィ・レディ・ＳＢ（サイバー・ボンテージ）　☆４　風　鳥獣族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１３００

ジュンコの場に、女性の頭を持つ鳥の姿をした怪物の一族、ハーピィの一角が現れる。

「私はこれでターンエンド。」

ジュンコのエンド宣言と共に次にカードを引くのは、ももえだ。

「私（わたくし）のターン！ドロー！

私は『聖導戦士（セイントソルジャー）イシュラル』を攻撃表示で召喚！」

聖導戦士（セイントソルジャー）イシュラル　☆４　光　戦士族　ＡＴＫ／１７００　ＤＥＦ／１２００

ももえの場に、純白の鎧に身を包んだイケメンの戦士が現れる。

「（いつ見ても、イケメンですわ～？）

さらにカードを1枚伏せ、私はこれでターンエンドですわ。」

ももえのエンド宣言に、遊夜はデッキに手を伸ばす。

「俺のターン！ドロー！！」

遊夜は手札を確認し、即座に自分が取るべき手段を選択する。

「俺は『蒼雷郷の鴉』を守備表示で召喚！」

蒼雷郷の鴉　☆４　風　雷族　ＡＴＫ／１１００　ＤＥＦ／１２００

遊夜の場に、全身が蒼白いカラスが現れる。

「さらにカードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

「あれ？もうターンエンドっすか？」

以外な展開に首を傾げる翔。その隣にいる隼人が口を開く。

「これはこの前のカイザーの時と同じトライアングル決闘なんだなぁ。」

「だから1ターン目は全員攻撃できないって訳だ。」

隼人に続く様に家康が翔に説明する中、十代は目を輝かせていた。

「あの2人はそれぞれ、『ハーピィ・レディ』と『イシュラル』か。」
「すると、一方はハーピィデッキ、もう一方は戦士デッキか？」
十代に続き大吾郎が決闘を見つめる中、明日香はやや苦笑いをしながら口を開く。
「ジュンコは当たってるけど、ももえの場合は……」
そこまで呟く様に言うと、明日香は押し黙った。
何故なら、ももえのデッキは半ファンデッキ化しているからだ。
入れているカードが全て『イケメン』で構築されている、通称イケメンデッキ。
ハッキリ言って、強さは微妙だ。
「（でもそんな事よりも……）」
明日香は自分の隣にいる3人の恋する乙女達に視線を向ける。
「あのバカ絶対殺スあのバカ絶対殺スあのバカ絶対殺スあのバカ絶対殺ス……」
「絶対勝て遊夜！！負けたら許さないんだからねーっ！！！」
「にゃあ……」
殺気立ち呪いの言葉を繰り返す文乃、
同じく殺気立ち叱咤によるコールを送る千世、
無言の無表情で決闘場を睨みつける希。
ハッキリ言って、明日香は生きた心地のしない空気を感じていた。

「（……遊夜、ご愁傷様。）」

明日香は心の中で、遊夜に黙祷を捧げるのだった。

「ん？」

決闘場で決闘している遊夜は、不意に客席から送られる寒気に背筋がゾッとするのを感じていた。

何事かと視線を客席に向けるが、

文乃や千世が不機嫌そうなのは毎度の事なので気づけなかった。

「私のターン、ドロー！」

そんな中でも決闘は続行され、ジュンコはデッキからカードを手札に加える。

「魔法カード『強欲な壺』を発動！デッキからカードを2枚ドロー！！」

ジュンコはカードを2枚手札に加えると、7枚となった手札の1枚に手を伸ばす。

「私は手札から『ハーピィ・クィーン』を墓地に送り効果発動！デッキからフィールド魔法『ハーピィの狩場』を手札に加える！そしてそのまま『ハーピィの狩場』を発動！！」

ジュンコが発動したカードにより、決闘の場が変わる。

そこは、天を舞うハーピィ達が狩のし易い、何もない殺風景な平地で時折　強い風の吹く地帯だった。

「『ハーピィの狩場』の効果により、鳥獣族モンスターの攻撃力・守備力は２００Ｐアップする！！」

ハーピィ・レディ・ＳＢ　ＡＴＫ／１８００⇒ＡＴＫ／２０００
ＤＥＦ／１３００⇒ＤＥＦ／１５００

「さらに私は『ハーピィズペット仔竜（ベビードラゴン）』を攻撃表示で召喚！」

ハーピィズペット仔竜（ベビードラゴン）　☆４　風　ドラゴン族　ＡＴＫ／１２００
ＤＥＦ／６００

ジュンコの場に、可愛らしい赤いドラゴンの子供が現れる。

「このカードは場の『ハーピィ』の数により効果が追加されるわ！私の場には『ハーピィ・レディ・ＳＢ』が1体。これにより『ハーピィズペット仔竜』以外の『ハーピィ』を攻撃はできない！」

ジュンコはさらに手札の1枚へと手を伸ばす。

「さらに手札から魔法（マジック）カード『万華鏡（まんげきょう）ー華麗（かれい）なる分身（ぶんしん）ー』を発動！！」

「そのカードは！」

ジュンコの発動したカードに、遊夜は目を見開いた。

そのカードは、かつて決闘王、武藤遊戯とその友である城之内克也と戦った
決闘者の持つキーカード。
さらには神のカードの召喚にもその効力を発揮したカードでもあった。

「このカードは自分の場に『ハーピィ・レディ』がいる時　発動できる！
デッキから『ハーピィ・レディ三姉妹（さんしまい）』を特殊召喚！！」

ハーピィ・レディ三姉妹（さんしまい）
☆６　風　鳥獣族　ＡＴＫ／１９５０⇒ＡＴＫ／２１５０　ＤＥＦ／２１００⇒ＤＥＦ／２３００

ジュンコの場に、それぞれ髪形の異なるハーピィの三姉妹が現れる。
その姿は正に、ギリシャ神話に出てくる
疾風、速く飛ぶ者、黒い雲の名を持つ三姉妹そのものだった。

「そして『ハーピィの狩場』の効果発動！
『ハーピィ・レディ』か『ハーピィ・レディ三姉妹』が召喚・特殊召喚された時、
フィールド上に存在する魔法・罠カード１枚を破壊する！
私は遊様の伏せカード１枚を破壊！！」

ジュンコの言葉と共に、ハーピィ三姉妹達が巻き起こす竜巻が
遊夜の伏せカードの１枚、炸裂装甲（リアクティブアーマー）を吹き飛ばした。

「さらに場に『ハーピィ』が増えた事で『ハーピィズペット仔竜』は

攻撃力・守備力を倍にする！！」

ハーピィズペット仔竜　ＡＴＫ／１２００⇒ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／６００⇒ＡＴＫ／１２００

「さらに手札から魔法カード『トライアングル・Ｘ（エクスタシー）・スパーク』を発動！
自分の場の『ハーピィ・レディ三姉妹』の攻撃力はこのターンのエンドフェイズまで２７００となる！」

ハーピィ・レディ三姉妹　ＡＴＫ／２１５０⇒ＡＴＫ／２７００

ハーピィ・レディ三姉妹に特殊な電磁波が発生し、その攻撃力を上げて行く。

「（『トライアングル・Ｘ・スパーク』。
確かあのカードを発動したターン、俺の罠（トラップ）は全て無意味となる。）」
「さらに手札から装備魔法『ガルーダの爪（つめ）』を発動！
『ハーピィ・レディ三姉妹』に装備！
装備した鳥獣族モンスターの攻撃力を３００Ｐアップする！」

ハーピィ・レディ三姉妹　ＡＴＫ／２７００⇒ＡＴＫ／３０００

三姉妹のハーピィ達のそれぞれの腕に、青白く輝く鉤爪が装備されそこから放たれるエネルギーが、ハーピィ達に力を与えて行く。

「バトル！『ハーピィ・レディ三姉妹』で『蒼雷郷の鴉』を攻撃！
“トライアングル・Ｘ・スパーク”！！！」

ジュンコの攻撃宣言と共に、三姉妹のハーピィ達は

三角形状のフィーメーションを組み、
それぞれの魔力を合体させたX型のビームを発射。
そのビームの前に、鴉はあっという間に飲み込まれて行った。

「そして装備魔法『ガルーダの爪』の効果発動！
装備モンスターが守備表示モンスターを攻撃した時、
その守備力を攻撃力が超えていれば、
その数値だけ相手にダメージを与える！！」

ジュンコの言葉と共に、X型のビームによる余波が遊夜に襲い掛かる。

「ぐっ！」

遊夜：LP／４０００⇒２２００

「よし！私はさらに『ハーピィ・レディ・SB』で攻撃！」

ジュンコはそこへ更なる追撃を行おうとする。

「させるか！『蒼雷郷の鴉』がバトルで破壊された時、
デッキから☆(レベル)４以下の『蒼雷郷』と名のつくモンスター1体を特殊召喚できる！
俺は2体目の『蒼雷郷の鴉』を特殊召喚！」

蒼雷郷の鴉　☆４　風　雷族　ＡＴＫ／１１００　ＤＥＦ／１２００

遊夜の場に、２体目の鴉が姿を現す。

「ならその『鴉』に攻撃！“サイバー・ライトニング・ウィップ”！！」

ハーピィの電撃の鞭が、鴉を薙ぎ払った。

「ぐっ！『蒼雷郷の鴉』の効果発動！俺は３体目を召喚！」

蒼雷郷の鴉　☆４　風　雷族　ＡＴＫ／１１００　ＤＥＦ／１２００

遊夜の場に、３体目の鴉が姿を現す。

「なら『ハーピィズペット仔竜』で攻撃！“セイント・フレア”！！」

ジュンコの宣言と共に、ベビードラゴンの放った火球が鴉を一瞬で焼き払った。

「まだだ！俺は『蒼雷郷の鴉』の効果により、デッキから『蒼雷郷の馬廻り』を特殊召喚！！」

蒼雷郷の馬廻り　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に、蒼い甲冑に身を包み馬に乗った槍の戦士が現れる。

「私はカードを1枚伏せ、このターンエンドフェイズ、
『トライアングル・X・スパーク』の効果が切れ
『ハーピィ・レディ三姉妹』の攻撃力は下がる。」

ハーピィ・レディ三姉妹　ＡＴＫ／３０００⇒ＡＴＫ／２４５０

「ターンエンド！」

「おっ、遊夜にダメージ与えるなんて結構やるなアイツ。」

決闘を見ていた十代は、遊夜にダメージを与えたジュンコに感心していた。

「あ、アニキ……今そんな事言ってる場合じゃぁ……」

「ん、何が？」

翔の言葉に首を傾げる十代だったが、この時　鈍感な十代以外の皆は感じていた。
観客席に座る3人から発せられる黒いオーラを。

「あのバカ、負けたら１００回殺す……」
「私に黙ってデートしようなんていい度胸ね……」
「……にゃあ……」
「あ、あなた達、少しは落ち着きなさい。」

文乃、千世、希に対し何とかなだめ様とする明日香だったが
3人は聞く耳持たなかった。

「マズイんだなぁ、このままじゃ遊夜は
勝っても負けても3人に殺されるんだなぁ。」
「そうね、何とかしないと。」

隼人と明日香は3人に聞こえない様、
小声で話し合うもののアイディアが全く浮かばなかった。

「あれれ～、皆なにしてるのかな～？」

とそこへ、皆がいるのを見てやって来た乙女が皆に近づいて来た。

「乙女先生。」
「いや、実は……」

やって来た乙女に、家康と大吾郎は佐藤と鈴木から借りた写真を見
せながら
こうなった事を説明しだす。

「そっか～……ところで千世ちゃん。この写真、貰って良い？」

不意に乙女は家康の持っていた写真を手に取りながら千世に尋ねる。
それは、自分と遊夜がダンスをする写真だった。

「ちょっ！何で勝手に！！」

その言葉に千世は跳ね上がる様に視線を乙女に向ける。
いや、この言葉に反応したのは千世だけではなかった。

千世の隣で睨みを利かせていた、文乃と希も同様だった。

「乙女先生！その、いくら梅ノ森のだからって、
貰うのはどうかと思うんですけど！！」
「にゃあ、ずるい。」
「え～、だって私と遊夜の愛の思い出が欲しいんだも～ん。」
「誰がアンタと遊夜の愛の思い出よ！！」

乙女の言葉に3人はいつも通りの騒がしい状態へと戻ってしまう。

「すげー、あの3人を弄んでるぜ。」
「うむ、さすが乙女先生だ。」

乙女の行動力に感心する家康と大吾郎だが、
その隣で翔と隼人は微妙な表情をしていた。

「あれは弄んでいるのかな？」
「と言うより、乙女先生は多分　天然でやってるだけだと思うんだな。」
「まぁ何にしても、乙女先生がいれば最悪の事態は免れそうね。」

その事に安心した明日香は、今一度　決闘場に視線を向ける。

「なぁ明日香、あの場に出ている戦士族モンスターは
どんな効果を持ってるんだ？」

とここで、先程から会話に入ってなかった十代が尋ねて来る。
十代が指差しているのは、
ももえの出したモンスター『聖導戦士（セイントソルジャー）イシュラル』だった。

「あのモンスターには、
戦闘で破壊したモンスターをゲームから除外する効果があるわ。」
「へぇ～、結構強力なカードだな。
でも、攻撃力１７００なら遊夜のモンスターは倒せないぜ。」

そう、十代の言う通り攻撃力１７００のイシュラルでは
攻撃力１８００の馬廻りを倒すことは出来ない。
だが、その攻撃力の差は決して覆す事が出来ない程ではなく
装備カード１枚、もしくは生け贄召喚でその上を行くカードを出す
事など容易い。
そんな事を遊夜が計算してないはずが無い。

「（遊夜、何を考えているの？）」

そう考えながら、明日香は再び視線を決闘場へと向けた。

「私のターン！ドロー！！」

明日香達は視線を向ける中、ももえはカードをドローし手札状況を
確認する。

「（遊様の場のモンスターの攻撃力は私の『イシュラル』より上で
すわ。
でしたら――――）私は『聖導戦士イシュラル』を生け贄に捧げ―
――
『聖導騎士（セイントナイト）イシュザーク』を攻撃表示で召喚ですわ！！」

聖導騎士（セイントナイト）イシュザーク　☆６　光　戦士族　ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１８００

ももえの場からイシュラルが消え、
入れ替わる様に白銀の鎧に身を包み巨大な剣を手にした
聖なる力を備えた高等騎士が現れる。

「あのカードは……確か『イシュラル』と同じ効力を持つ騎士。」
「その通りですわ！『聖導騎士イシュザーク』は戦闘によって破壊したモンスターを
ゲームから除外できますわ！」

そう言いももえは高らかに宣言を開始する。

「バトル！『聖導騎士イシュザーク』で『蒼雷郷の馬廻り』を攻撃ですわ！
“ブレイク・ダウン・ディストーション”！！」

ももえの攻撃宣言と共に、イシュザークは大剣を手に馬廻りに斬り掛る。

「罠発動（トラップはつどう）！『和睦（わぼく）の使者（ししゃ）』！！
このカードの発動ターン、俺の場のモンスターは戦闘によって破壊されず
受ける戦闘ダメージも０となる！！」

遊夜の発動したカードにより、見えない壁の様な物がイシュザークの剣を止める。

「うぅ……遊様のいけず。」
「いや、んな事　言われてもな……」
ももえの言葉にやや戸惑う遊夜。
最も、遊夜にとってこの決闘は、あくまでいつも通りやる決闘に過ぎず
デートの件などに関してはトコトン無頓着なのだ。
「私は、カードを1枚伏せターンエンドですわ。」
「おいおい、ちょっと見ねぇ内にアイツ不利になってね？」
文乃達と乙女の状況ばかり見ていた家康は、
ここで初めて遊夜の不利に気づく。
遊夜の場には下級モンスターが1体のみに対し、
ジュンコの場には下級・上級モンスターが合計3体と伏せカードが2枚、
ももえの場には除外効果を持った上級モンスターが1体と伏せカードが2枚。
しかも、これはトライアングル決闘とは言え、
実質上は、遊夜を相手にジュンコとももえが2人掛で決闘をしている様なものだ。
どう見ても遊夜が圧倒的に不利である。
「あらら、遊夜ちょっと不利かな～？」
「ちょ、遊夜の奴何やってんのよっ！！！」

「あのバカ！ちょっと目を放した隙に！！」
「にゃあ…」

その光景に、乙女と乙女と言い争いをしていた文乃達に動揺が走る。
2人が勝てば、遊夜は2人とデートしなければならない。
遊夜に恋する3人の乙女達にとって、それは困る事だった。

「このままじゃマズイんだなぁ……」
「な～に、大丈夫だって。」

皆が唖然とする中、十代は相変わらずお気楽モードだった。

「俺には分かる。こっからが遊夜の反撃だ！」

そう言い十代は視線を決闘所へと向けた。

「俺のターン！」

遊夜は引いたカードを確認し、自分の取るべき事を考える。

「（2人共やるなぁ。面白くなってきたぜ！）俺は『強欲な壺』を発動！
デッキからカードを2枚ドローする！！」

2枚のカードを補充した遊夜は、手札状況を確認し即座に次の一手を決断する。

「『蒼雷郷の馬廻り』のモンスター効果発動！
１ターンに１度、手札から『蒼雷郷』と名のつくモンスターを１体墓地に送り
相手フィールド上のモンスター１体を破壊する！
俺は『蒼雷郷の剣客』を墓地に送る！“雷絶弾（らいぜつだん）”！！」

馬廻りの槍から放たれた蒼き稲妻の弾丸が、ハーピィの三姉妹を焼き尽くす。

「ハーピィ！！」
「そして『ハーピィ』が減った事で
『ハーピィズペット仔竜』の攻撃力・守備力は元に戻る！！」

ハーピィズペット仔竜　ＡＴＫ／２４００⇒ＡＴＫ／１２００　ＤＥＦ／１２００⇒ＡＴＫ／６００

「さらに俺はチューナーモンスター『蒼雷郷の啄木鳥（キツツキ）』を召喚！」

蒼雷郷の啄木鳥（キツツキ）　☆３　風　雷族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に、青白く輝くキツツキが現れる。

「『啄木鳥』の効果発動！
召喚時、墓地の『蒼雷郷』と名の付く☆４以下（レベル）のモンスター１体を守備表示で特殊召喚できる！来い！『蒼雷郷の剣客』！！」

蒼雷郷の剣客　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に蒼い和服に身を包んだ剣士が現れる。

「行くぞ！☆４の『蒼雷郷の剣客』に☆３の『蒼雷郷の啄木鳥』をチューニング！！」

キツツキが緑色のリングとなり、剣客もその身を４つの星に変える。
そして一直線に４つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天を斬り裂く剣となる。閃光と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の戦士、『蒼雷郷の荒武者―ジンベエ』！！」

蒼雷郷の荒武者―ジンベエ　☆７　光　雷　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２２００

光が弾けその中から、蒼い甲冑に身を包み刀を二本持つ武者が姿を現す。

「シンクロ召喚！」
「来ましたわね！」

シンクロモンスターの登場に、２人が身構える中、
ジンベエの刀に青白い光が集まる。

「『ジンベエ』のシンクロ召喚時、相手の場のモンスターを1体破壊できる！！
“迅雷の太刀（じんらいのたち）”！！」

ジンベエの刀より放たれた蒼い稲妻が、イシュザークを粉砕する。

「バトル！『ジンベエ』でももえに直接攻撃（ダイレクト・アタック）！
“蒼雷刃剣（そうらいじんけん）・一（いち）の太刀（たち）”！！」

遊夜の攻撃宣言と共に、ジンベエは刀を振り上げももえに襲い掛かる。

「きゃあぁっ！」

ももえ：ＬＰ／４０００⇒１６００

「続けて『蒼雷郷の馬廻り』で『ハーピィズペット仔竜』を攻撃！
“迅雷槍（じんらいそう）”！！」

馬廻りは槍を構え、仔竜を貫く。

「くうぅっ！」

ジュンコ：ＬＰ／４０００⇒３４００

「そして『ジンベエ』は2回の攻撃が可能だ！
『ハーピィ・レディ・ＳＢ』を攻撃！“蒼雷刃剣（そうらいじんけん）・二（に）の太刀（たち）”！！」

遊夜の攻撃宣言により、ジンベエは再び刀を振り上げハーピィを斬り裂く。

「きゃあっ！」

ジュンコ：ＬＰ／３４００⇒３０００

「俺はさらにカードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

「ほらな。やっぱ逆転した。」

そう言いながら十代は微笑んでいた。
予想通り、遊夜はあの状態から一気に逆転してきたのだ、
十代は誇らしそうに視線を皆に向ける。

「いよっしっ！このまま押せ押せーっ！！」
「にゃー！」

十代に便乗する様に、千世と希は遊夜にエールを送る中
文乃は相変わらず『むすっ』とした表情で遊夜を睨んでいた。

「ん？文乃、お前は遊夜を応援しないのか？」

「な、何で私が遊夜を……」
「とか言いつつ、視線は常に遊夜に向けてるな。」
「2回死ね――――っ！！！」

毎度の事ながら余計な事を言う家康は、文乃のキックにより宙を舞う。
その姿を見て大笑いする乙女と『うむ、良い蹴りだ』と大吾郎感心する中
翔はふとある事に気づく。

「あれ、でも何で『ジンベエ』でももえさんを2回ダイレクト・アタックしなかったんだろう？
そうすればももえさんを倒せたのに。」

翔の意見は最もだった。
あの時、ももえの場にいたモンスターはジンベエの効果により消滅し場はがら空きだったのだ。
しかも1回目のダイレクト・アタックで伏せカードも発動しなかった事を見るとそのまま追撃すれば勝てたかもしれないのだ。
にも拘らず遊夜はジュンコのモンスターを攻撃した。
その理由が分からないらしい。

「遊夜は多分、あの伏せカードを警戒したんだと思うんだなぁ。」

その問いに答えたのは隼人だった。

「例え『ジンベエ』の攻撃を防げるカードがあっても、
『ジンベエ』は2回攻撃のできるモンスター。
だから様子見の為に伏せカードを温存した可能性はあるんだなぁ。」

「そうか？俺はもっと単純な理由だと思うぜ？」
そんな隼人の指摘に十代は口を挟んできた。
「遊夜はきっと、まだまだ決闘を楽しみたいんだと思うぜ！」
そう言いながら笑顔を向けてくる十代に
隼人と翔は顔を見合わせ『確かに』と微笑んだ。
そんな中、明日香は視線を遊夜ではなく、ジュンコとももえに向けていた。
「（あの子達、こんなに決闘うまかったかしら？）」
明日香はそんな疑問を感じていた。
はっきり言って、このデュエル・アカデミアには女子寮がブルーにしかないから
女子は必然的にブルーに在籍されるわけだが
当然　中にはそんなに実力が無い者でもブルー寮行きになる者も居る。
ジュンコとももえは一様　中等部からやって来ているものの
その実力ははっきり言ってそんなに高くない。
にも拘らず、２人は遊夜と互角の決闘を繰り広げている。
「（あの２人に一体何があったの？）」
そんな疑問が広がる明日香。
そう、明日香は知らなかった。
恋する乙女は、時に奇跡を起す事を！

「私のターン！」

ジュンコはやや戸惑いながらもカードを引く。

「（さすがは遊様ね。でも、私だって！！）

私は手札１枚をコストに、

場から永続罠『ヒステリック・パーティー』を発動！

墓地に存在する『ハーピィ・レディ』を可能な限り特殊召喚する！

舞え、ハーピィ・レディ達！！」

ハーピィ・レディ・ＳＢ　☆４　風　鳥獣族　ＡＴＫ／１８００⇒ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１３００⇒ＤＥＦ／１５００

ハーピィ・レディ１（ワン）　☆４　風　鳥獣族　ＡＴＫ／１３００⇒ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１４００⇒ＤＥＦ／１６００

ハーピィ・クィーン　☆４　風　鳥獣族　ＡＴＫ／１９００⇒ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／１２００⇒ＤＥＦ／１４００

ジュンコがカードを発動すると同時に場に風が吹き、

天より３体のハーピィ達が舞い降りて来た。

「ん？何か数が合わなくないか？」

決闘を見ていた十代はふとある事に気づいた。

十代が知る限りジュンコの墓地に存在するのは
ハーピィ・レディ・SB、ハーピィ・レディ三姉妹、ハーピィズペット仔竜、
そしてハーピィの狩場をサーチする際に手札から捨てたハーピィ・クィーン
の4体のみで、その中でヒステリック・パーティーの効果で呼び出せるのは
SBと三姉妹の2体のみの筈だ。
だがジュンコの場には、見覚えの無いモンスター、ハーピィ・レディ1がいる。

「そりゃアレだろう、先『ヒステリック・パーティー』発動の際に捨てたカードが
あのカードなんだろうよ。それ以外ありえねぇ。」

その十代の疑問に答えたのは家康だった。
さすがは家康、性格に合わずイエローに所属するだけはある。

「……何か俺、今誰かにすっごくバカにされた気がする。」
「気のせいではないのか?」

家康の暗い言葉に首を傾げる大吾郎。

「でも、何で『ハーピィ・クィーン』まで蘇ってるんすか?」

決闘を見ていた翔は、不意にそんな疑問を口にする。
そう、ヒステリック・パーティーはハーピィ・レディのみを特殊召喚するカードだ。
そのルール効果上、ハーピィ・レディとして扱えるSBとハーピィ・レディ1はともかく、

何故ハーピィ・クィーンまで蘇っているのかが理解できていない様だ。

「あのね翔くん、『ハーピィ・クィーン』は場と墓地に存在する時そのカード名を『ハーピィ・レディ』として扱う事ができるんだよ～。
ここ重要だから覚えとこうね～♪」
「あ、はい！」

乙女の説明に、翔は顔を赤く染めながら返事をする。
そりゃ誰だって、乙女の様な美人教師に教えられたら必死で覚えようとするものである。

「十代君もね♪」
「えぇ～、テストなんてめんどくせぇよ～。」

……訂正、約1名を除く。

「成る程、手札コストを特殊召喚への数上昇へと繋げるか、見事だぜ。」

遊夜はジュンコの見事な戦略に関心を抱いていた。

「ふふ、まだまだこれからよ遊様。
さらにこの瞬間、『ハーピィの狩場』の効果が発動！
『ヒステリック・パーティ』による特殊召喚は、何体召喚されても1回とされる！

よって私は、私から見て左側の遊様の伏せカードを破壊する！」

ジュンコの宣言と共に巻き起こる風が、遊夜の伏せカードの1枚に迫る。

「させるか！『ハーピィの狩場』にチェーンして伏せカードを発動！『威嚇する咆哮』！このターン相手は攻撃宣言が出来ない！」

「くっ……」

破壊するはずだったカードがチェーンで発動された事で破壊する意味を失ったばかりでなく、攻撃も封じられた事にジュンコはやや焦りを見せるがすぐに最後の手札を決闘盤へと向ける。

「攻撃は出来ないけど、ダメージを与えるすべはあるわ！私は『ハーピィ・レディ・ＳＢ』と『ハーピィ・レディ1』を生け贄に捧げ――――『神鳥シムルグ』を召喚！」

神鳥シムルグ　☆7　風　鳥獣族　ＡＴＫ／２７００⇒ＡＴＫ／２９００　ＤＥＦ／１０００⇒ＤＥＦ／１２００

2体のハーピィ・レディが消え、場に王冠を被り薄緑色の羽毛に覆われた鳥達の王が現れる。

それは、威風堂々としたイランの神話に登場する巨大な神の鳥。

ユダヤ教においては、陸のベヒーモス、海の海のリバイアサンに対し、

空のシムルグと呼ばれし存在であった。

「そして私のターンのエンドフェイズ時、『シムルグ』の効果発動！
“ゴッドトルネード”！！」

ジュンコの言葉と同時に、シムルグの羽ばたきにより竜巻が巻き起こり
それと同時に、ももえと遊夜の場の伏せカードが、
それぞれ裏側表示の状態で起き上がり、竜巻を防ごうとする。

「ぐっ！」

遊夜：ＬＰ／２２００⇒１７００

だが、完全に防げたももえと違い、遊夜はわずかに竜巻を食らってしまう。

「これは……シムルグの巻き起こす死の風か…！」
「その通り！『シムルグ』は全プレイヤーのエンドフェイズ毎に全てのプレイヤーの１０００Ｐのダメージを与える！
だけどそのダメージは、自分の場にある魔法・罠カード１枚につき５００Ｐ軽減されるわ！」

つまり、魔法・罠カードこそ死の風を防ぐ壁なのだ。
ジュンコの場にはフィールド魔法ハーピィの狩場と永続罠ヒステリック・パーティー。
ももえの場には伏せカードが２枚存在している。
だからダメージを食らわなかったのである。

「ターンエンド！」
「私のターン！」

ジュンコのエンド宣言と共に、今度はももえがカードを引く。

「場から永続罠『リビングデッドの呼び声』を発動！
墓地からモンスターを1体復活させますわ！
蘇りなさい、『聖導騎士イシュザーク』！！」

聖導騎士イシュザーク　☆6　光　戦士族　ＡＴＫ／2300　ＤＥＦ／1800

ももえの場に、再びイシュザークが姿を現す。

「さらに手札から魔法カード『戦士の生還』を発動ですわ！
墓地の戦士族モンスター1体を手札に加えますわ！
私は『聖導戦士イシュラル』を手札に加え、そのまま召喚ですわ！」

聖導戦士イシュラル　☆4　光　戦士族　ＡＴＫ／1700　ＤＥＦ／1200

ももえの場にイシュラルが再び姿を現す。

「そして、この2体の聖戦士を生け贄に捧げ――――
おい出ませ！『聖導神騎士イシュザリウス』！！」

聖導神騎士(セイントパラディン)イシュザリウス　☆１０　光　戦士族　ＡＴＫ／３００
０　ＤＥＦ／２５００

ももえの場から2体の聖戦士が消え、
それと入れ替わる様に聖導騎士の最高位を持ち
純白の鎧に身を包み、金髪を靡かせる高潔なる若き騎士が現れる。

「『イシュザリウス』……『イシュザーク』を超えた高潔なる聖導騎士か。」
「そして場から永続魔法『魂吸収(たましいきゅうしゅう)』を発動ですわ！」

ももえは場のカードをオープンする。
それは、迎撃用の罠ではなく、奇襲用の速攻魔法でもない、
カードが除外される度に自身のＬＰを回復させる永続魔法だった。

「そして『聖導神騎士イシュザリウス』の効果発動ですわ！
手札を墓地に送る度に場のモンスターをゲームから除外しますわ！
私は手札2枚を墓地に送り遊様の2体のモンスターを除外しますわ！
“セイント・ディメンション”！！」

ももえの宣言と共に、イシュザリウスが手に持つ純白の三叉(トライデント)の槍から
白銀の球体のエネルギーの波動が馬廻りとジンベエを飲み込んでいく。

「くっ！」
「そして、モンスター2体が除外された事で『魂吸収』の効果発動ですわ！」

ももえ：ＬＰ／１６００⇒２６００

カードより放たれる輝きが、ももえのＬＰを回復していく。

「これで決めますわ！バトル！
『聖導神騎士イシュザリウス』で遊様へダイレクト・アタック！
“ブレイク・ダウン・トライデント”！！」

ももえの攻撃宣言と共に、イシュザリウスは白銀に輝くトライデントを手に
遊夜に襲い掛かる。

「罠発動！『ガード・ブロック』！
俺への戦闘ダメージを０にし、デッキからカードを１枚ドローする！！」

遊夜の発動したカードにより、イシュザリウスは攻撃をやめ、
遊夜はカードをデッキから引く。

「さすがは遊様ですわ。
ですがこのターンのエンドフェズ時、
ジュンコさんの『神鳥シムルグ』の効果が発動ですわ！」

ももえの言葉と同時に、シムルグは翼を羽ばたかせ、竜巻を発生させる。

「ぐあぁっ！」

遊夜：ＬＰ／１７００⇒７００

フィールド魔法であるハーピィの狩場と
永続罠のヒステリック・パーティに護られるジュンコと
永続魔法である魂吸収と
永続罠のリビングデッドの呼び声に護られているももえと違い
遊夜の場には魔法・罠カードがない故に、竜巻をまともに食らってしまう。

「これでターンエンドですわ！」

「……やっぱり、あの２人いつの間にあんなに強く？」

決闘を見ていた明日香は、当等　先から思っていた疑問を口にする。

「どういう事だ明日香？」
「ジュンコとももえは、私の知る限りそんなに実力は高くない筈なのよ。
少なくとも遊夜　相手にここまで善戦している事　自体が
私には未だに信じられないの。」

明日香の言い分は最もだった。
確かにジュンコとももえの実力は、遊夜と比べると天と地ほどの差がある。
以前の制裁決闘において、落ちこぼれである翔は迷宮兄弟相手に善戦したが

それはパートナーである十代との結束と
前もってやった遊夜との特訓の成果の賜物である。
あの2人は確かに結束してはいるが、明日香はそれ以上の力を感じるのだ。

「それはそうだよ～。」

その明日香の疑問に答えたのは乙女だった。

「恋する乙女は強いんだよ♪」
「「「！！！！？？？」」」

その乙女の言葉に反応したのは明日香ではなく
文乃、希、千世の3人だった。

「あの2人、よっぽど遊夜の事が……」
「遊夜ーっ！絶対負けんじゃないわよーっ！！！」
「べ、別に私はアンタの応援なんかしたくないけど……
ノリで仕方なく応援してあげるわ！」
「にゃー！遊夜ファイト！！」

乙女の言葉を遮るように、3人は遊夜にエールを送る。

「おやおや～、何やら面白い事が起こってるようだZE（ゼ）！」

とそこへ、騒ぎを聞きつけた叶絵がやって来た。

「へー、2人共　遊っち相手に結構がんばってるね～。」
「あぁ、でも遊夜が勝つぜ！」

叶絵に対しそう言い放つ十代は、視線を決闘場へと向ける。

完璧だ。
ジュンコとももえは心の内でそう思っていた。
自分達の場には最上級モンスターが1体ずつ存在し、
その内の神鳥シムルグにはバーン効果がある。
このターン内に遊夜は魔法・罠カードを場に残さないと
１０００Ｐのダメージを食らって敗北する。
仮に1枚しか魔法・罠カードを出さなかった場合、
５００Ｐのダメージを受ける事となるが、それでも次のジュンコのターンで
再びダメージくを与えればどの道敗北。
しかも遊夜の手札は僅か2枚。
状況は圧倒的に自分達が有利だ。

「（このまま行けば……）」
「（勝てますわ！）」

2人はそう信じて疑わない。
そう、遊夜の表情を見るまでは。

「（！！？遊様！？）」
「（笑っておられる！？）」

そう、遊夜は笑っていたのだ。
まるでこの状況を、いや本気でこの状況を楽しんでいるからこそ
遊夜は笑っていた。

「ふふ、２人共強いな、楽しくなってきた！！」

そう言い遊夜はデッキに手を伸ばす。

「俺のターン、ドロー！！！」

強く引いたカードを確認した遊夜は、即座にそのカードを決闘盤に差し込む。

「魔法カード『貪欲な壺』発動！

墓地のモンスター５体をデッキに戻し、カードを２枚ドローする！

俺は墓地から『蒼雷郷の鴉』３体と

『剣客』、『啄木鳥』をデッキに戻しシャッフルする！」

遊夜は墓地のカードをデッキに戻しデッキをシャッフルするとカードを２枚引く。

「手札を１枚墓地に送る事で、このカードは手札から特殊召喚できる！

来い、『蒼雷郷の一角獣』！！」

蒼雷郷の一角獣　☆５　光　雷族　ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１２００

遊夜の場に、蒼い落雷と共に蒼白く光る角を生やした一角獣が現れた。

「そしてチューナーモンスター！！『蒼雷郷の銀狼』を召喚！！」

蒼雷郷の銀狼（ぎんろう）　☆３　風　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１００

遊夜の場に、相棒たる狼（ウォルフ）が現れた。

「≪主よ、アナタはつくづく女性に縁がある方だな。≫」

「？何の事かは分からんが、取り合えず行くぞ！

☆５『蒼雷郷の一角獣』に☆３『蒼雷郷の銀狼』をチューニング！

！」

銀狼が緑色のリングとなり、一角獣もその身を５つの星に変える。

そして一直線に５つに並んだ星は光に包まれる。

「「蒼き稲妻が、天へと昇る翼となる。落雷と共に轟け！！シンクロ召喚！！

蒼雷の守護龍、『蒼雷郷龍（そうらいきょうりゅう）―スカイサンダー・ドラゴン』！！」

蒼雷郷龍（そうらいきょうりゅう）―スカイサンダー・ドラゴン　☆８　光　雷族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２５００

光が弾けその中から、所々を蒼い甲冑で堅め蒼い翼を生やした蒼白く輝く東洋の龍が姿を現す。

「これは！」

「遊様のエースモンスター！」

その龍の登場に、ジュンコとももえは戦慄を覚える。

「そして『スカイサンダー・ドラゴン』の効果発動!!
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の場のモンスターを
全て破壊できる!!喰れ!!“蒼覇(そうは)落雷撃(らくらいげき)”!!」

スカイサンダー・ドラゴンの身体から放たれた蒼い稲妻が天へと昇り
天より注がれる蒼い落雷となり、ジュンコとももえの場に降り注ぐ。
そして落雷が収まった時、2人の場には黒い焦げ跡が残り
自慢のモンスター達は消滅していた。

「な!?」
「こんな事が……」
「さらに!『蒼雷郷の銀狼』の効果により
『スカイサンダー・ドラゴン』の攻撃力が1000Pアップする!!!」

蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン　ＡＴＫ／２８００⇒ＡＴＫ／３８００

「さらに墓地から『蒼雷郷の一角獣』を除外する事で、
装備魔法『ダブル・スピリッツ』を発動!」

遊夜の発動したカードから放たれた青白いオーラが
スカイサンダー・ドラゴンを包み込んでいく。

「このカードは墓地のモンスターを1体除外し、
除外したモンスターと同じ属性と種族を持つモンスターにのみ
装備する事ができる!

そして装備モンスターは、このターン2回の攻撃が可能となる！！」
「なっ！？」
「えぇっ！？」

その言葉にジュンコとももえが絶句する中、
遊夜は攻撃宣言を始める。

「これで終わりだ！『スカイサンダー・ドラゴン』でダイレクト・アタック！
“天鳴（てんめい）　蒼雷双破弾（そうらいそうはだん）　！！」

遊夜の攻撃宣言と共に、スカイサンダー・ドラゴンの口内より放たれた
２つの蒼い球体の稲妻が、ジュンコとももえを襲った。

「「きゃあぁぁぁぁぁっ！！！！」」

ジュンコ：ＬＰ／３０００⇒０
ももえ：ＬＰ／２６００⇒０

「ま、負けた……」
「じゃ、じゃぁ、デート、無効？」

敗北した。
この事実に、ジョンコとももえは唖然となった。

何度も自己練習をした。
何度も互いのデッキの特性を理解しあった。
そして何度も願った、遊夜とのデートを。
だけど、勝てなかった。

「2人共。」

唖然となる2人に、遊夜は優しく微笑みながらゆっくり近づいて来た。

「最高に楽しかったよ、またやろうな。」

そう言い『ニッコリ』と微笑む遊夜の笑顔に、
ジュンコとももえは顔を赤める。

「え、えっと……」
「私達と、またやってくれますの？」

またデートを賭けた決闘をしてくれるのか。

「あぁ、もちろん。」

決闘は好きだからいつでも相手になる。
3人の会話と思いは全く噛み合ってなかった。
だが、決闘したいという想いは噛み合っていた。

「それじゃ。」

そう言い遊夜は決闘場を去って行った。
そしてその去り際の遊夜の笑顔に

2人が顔を真っ赤に染めてノックダウンされていたのは全くの蛇足である。

「おーい、遊夜！！」
「ん？」

決闘場を後にした遊夜が通路を歩いていると、観客席からやって来た十代達がやって来た。

「やぁ、十だ……」
「ゆ――――や――――――っ♪」

十代の名を呼ぼうとした遊夜だったが、それを遮る様にやって来た乙女のハグにより、遊夜は言葉を中断せざる終えなくなる。

「ちょ、乙女先せ……はぐっ！」
「あぁん！遊夜、お姉ちゃんの事は乙女姉(おとめねぇ)って呼んでよ～！！それにしても遊夜、先の決闘かっこよかったよ～！！！」

そう言い乙女は抱きしめる腕の力をさらに強める。

「あぁっ！毎度の事ながらズルイっす！」
「はいはい乙女先生、その辺にしときましょうね～！」

翔が羨ましそうに眺める中、文乃は2人の間に入って2人を分ける。

「あぁん！文乃ちゃんってば野暮だよ～。」
「ぷはぁっ！た、助かった……」

『ブーブー』と不服そうな乙女と、息苦しさから解放された遊夜が安堵する中
千世が『ズンズン』と遊夜に接近する。

「遊夜！」
「ん？」
「『白鋼遊夜ファンクラブ』会長として宣言するわ！
あたしはこれより、アンタとのデートする権利を賭けてアンタに決闘を申し込む！」

その千世の宣言に、そこに居た全員は驚きの表情となる。

「ちょ、ちょっと何でアンタが遊夜と決闘するのよ！！」
「だってあたしも遊夜とデートしたいのよ！」
「にゃあ、だったら私も参加。」

千世の言葉を皮切りに、文乃と希が声を上げる中
乙女は何処からともなくデッキを取り出すと遊夜の方を向く。

「んじゃあ、お姉ちゃんも遊夜とデートの権利を賭けて決闘するー♪」
「「はあぁぁぁぁぁぁっ！！！？？」」

その乙女の発言に声を荒げる文乃と千世。

「ちょっと何でアンタまで！？」
「教師と生徒がそう言う事をするのはどうかと思うんですけど！！

？」

「え？？？？」

遊夜を想う3人の乙女達の言い合いは廊下中に響いていく。

「……止めなくて、いいのか？」

「止めれるんすか、あれ？」

「無理だろ。」

そんな状況を苦笑しながら見守る面々。

「なぁ遊夜！久しぶりに俺と決闘しようぜ！」

「お、いいね、久々にやるか！」

「にゃあ、私も。」

「「こら――――そこの2人！！！！！！」」

十代と希の抜け駆けに叫ぶ文乃達。

その後結局、騒ぎを聞きつけた先生方により、一様自体は収集されたのだが

恋する乙女達のバトルは、これからも続きそうである。

『～第十五章～　白鋼遊夜ファンクラブの決起！！　《終》』

～第十五章～　白鋼遊夜ファンクラブの決起！！（後書き）

どうも、黒鋼です。
今回も前回に引き続きオリジナルなお話です。
今回は原作ではあまり決闘シーンの見られない
ジュンコとももえを決闘させたくて書きました。
こう言ったお話は前々から考えており、
その際　最も苦労したのは2人のデッキ制作です。
ジュンコの場合はタッグフォースのハーピィデッキを
ストラクチャーデッキ－烈風の覇者－風にしたのは良かったのですが
ももえのデッキに関しては大いに悩みました。
タッグフォースにおけるももえのデッキは、
イケメンデッキと黒蛇病デッキとありますが
黒蛇病デッキははっきり言って効率が悪い上にやり辛いのでやめました。
また、ももえの『イケメンですわよ』が印象的だったので
イケメンぽいカードの中から使えそうなのを選び、
それをパワーアップさせるカードを考える事にしました。
その際に白羽の矢が立ったのが『聖導騎士イシュザーク』です。
理由はイケメンっぽいし効果も良いからです。
ってな訳で書かせてもらった今回のお話しですが、如何だったでしょうか。
何やら自分のオリジナルな展開がてんこ盛りのこの作品ですが
何卒、長ーい目で見守っていただけたら幸いです。
ではまた次回に～。

今回の最強カード『聖導神騎士（セイントパラディン）イシュザリウス』

☆１０　光属性　戦士族　ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／２５００
このカードは通常召喚できない。
自分フィールド上に存在する『聖導騎士イシュザーク』を含む
光属性・戦士族モンスター２体を生け贄に捧げた場合のみ特殊召喚
する事ができる。
手札を１枚捨てる事で、フィールド上に表側表示で存在する
モンスター１体を選択してゲームから除外する事ができる。

『聖導騎士イシュザーク』の上級種。
『アームド・ドラゴン』の効果が１体のみ、除外になった様なモン
スターです。
単純ながらも強力な『ブラック・コア』が複数可能なモンスター
す。
自分としては結構強い方だと思ってます。

～第十六章～　青春のスポコンデュエル！？

ある晴れた日の体育の授業、遊夜達は鮎川の言葉によりテニスを行っていた。

「しかしテニスって決闘の何の役にたつんだ？」

へっぴり腰で望む翔とダブルスを組んだ十代は、
ジュンコが打ったボールを打ち返しながら首をひねっていた。

「鮎川先生も本当はバレーボールがやりたかったそうですわ。あっ！」

その十代の疑問に対し、ももえはボールを十代のコートに返しながら答える。
だが話していたからなのか手元が狂い、ボールは大きく上へと上がった。
これを好機と見た十代は飛び上がりスマッシュの動作に入る。

「どっちも同じだよ、どぉりゃぁぁぁっ！！」

ボールを打ち返す十代。
だが、変に気合を入れたのがまずかった。
勢いよく打たれたボールはあらぬ方向へと飛んでいく。
そしてその先には――――

「やべぇ！避けろ明日香！遊夜！！」

その先には、ラケットの格子状に張り巡らされた紐、

ストリングスを変えようとする明日香と遊夜の姿があった。
不意の事だった為、明日香も遊夜も反応が間に合わない。
あわや2人に衝突すると思われた――――その瞬間！

「――――ふっ！」

不意にどこからともなく現れた影が、2人に迫ったボールを打ち返した。

「ほげえぇぇっ！」

そしてそのボールは、クロノスの顔面にクリンヒット！効果は抜群だ！

「大丈夫、怪我しなかったかい？」

そう言いながらボールを打ち返した影、
その正体である1人の男は遊夜と明日香に向かって
『キラン』と歯を輝かせながら微笑んだ。

「ありがとうございます。」
「失礼、助かりました。」

そう言いお礼を言う2人だが、
当の本人は『ぽー』と明日香を眺めているだけだった。
それもその筈。

「（こんな可憐な子がこの学園にいたなんて……）」

そう、実は彼、明日香に一目惚れしたのだ。

「あの、私の顔に何か？」

自分が目の前の人物に惚れられているとは
露とも知らない明日香は小首をかしげながら目の前の人物に問いかけた。
それに対し2人を助けた男は顔を振り、照れ笑いを浮かべる。

「いやぁ、あはは、失敬失敬。
しかし知らなかったよ。
我がデュエルアカデミアに君のような可憐な子がいたなんて。」

そう言い男はは明日香の手を自然にとる。

「君、名前は？」
「えっと、天上院　明日香。」
「明日香君か。いやぁ名前も素敵だ！」
「あ、あの……」

男の勢いにさすがの明日香もはタジタジになり、
この明日香の反応に男は『やってしまった』というような顔になるとようやく明日香から手を離した。

「あっははは、ちょっと気障だったかな。
忘れてください、あーっはははは！青春、青春！！」

男はそれだけ言うと笑って去って行ったのだった。
後に残ったのは男のテンションについて行けず、
ずっと呆気にとられていた遊夜や明日香、そしてその様子を見ていた十代達だった。

「綾小路（あやのこうじ）　ミツル？」

テニスを終えたその日の放課後、
遊夜は家康から今日見かけた爽やか男の事を聞いていた。

「おう。何でも綾小路モーターズの御曹司で、テニス以外にもサッカーやバレー、野球にアーチェリーといった運動部を一通り掛け持ちしてるって話だぜ。
それに決闘の腕も帝王（カイザー）に匹敵する腕前って噂だ。」
「帝王（カイザー）に……」

遊夜は最初見た時から、あの爽やか男こと綾小路　ミツルを決闘したら面白そうな相手と感じていた。

「カイザー亮に匹敵する決闘者……すごそうだな……決闘してみたい！」
「あ～あ、言うと思ったぜ。」

遊夜の言葉に大方の予想をしていた家康はため息をつく。

「早速　決闘　申し込んでみる。何処にいるか知らないか？」
「それなら先　翔が何か知ってる感じだったぞ。」

そう言い家康は先程　翔から聞いたことを遊夜に話す。
何でも、十代の打ち返したボールがクロノスを直撃した事でクロノスの怒りを買い、罰としてテニス部に1日体験入部する羽目

になったらしく
その相手を務めているのがあの綾小路　ミツルらしいのだ。

「そっか！サンキュー家康！」

そう言い遊夜はテニスコートのある外へと走って行った。

「やれやれ、二次元にとは言わねぇから、
少しは決闘意外の事にも興味持てよな……」

そんな遊夜の決闘バカぶりにため息をつく家康なのであった。

「４８、４９……５０！！……終わったぁ～」

遊夜がテニスコートにやってきた時、
そこには５０球を打ち終え、体をコートへと投げ出す十代の姿、
そしてそれを観戦に来ていた翔、ジュンコ、ももえの姿があった。

「よっ、十代　随分疲れてるみたいだな。」
「あっ、遊夜くん。」
「「遊様！」」

遊夜の登場に驚くジュンコとももえだが、
当の遊夜は綾小路との決闘の事で頭がいっぱいであり、全く気づいていなかった。

「どうしたんすか遊夜くん。」

「あぁ、あの綾小路って人と決闘したくて来たんだ。」
「え、あの爽やか部長と？」
「あぁ。」

そう言い綾小路に接近しようとする遊夜だが、ここで先客がいる事に気づく。
明日香である。

「明日香さん？」
「あ、ホントだ。明日香さんだ。」
「「明日香様？」」

遊夜の視線の先に目を向ける翔とジュンコともえ。
そこには確かに明日香が、テニスコートんい向かって歩いている姿があった。

「明日香くん！」

その明日香の姿に、綾小路も気づいた様だ。

「やぁ明日香君！嬉しいなぁ、僕に会いに来てくれたなんて……ってあれぇぇ！！！？？」

だが、明日香は綾小路を無視して真っ直ぐに十代の方へとやって来た。

「十代。」
「ん？あぁ、明日香か。どうかしたのか？」
「大徳寺先生が、これをあなたにって。」

そう言い明日香は十代に1枚のカードを渡した。
そしてそのカードを見た時、十代は驚きの表情となった。

「あっ！これって！」
「あなたの席に落ちてたそうよ。
カードは決闘者の魂なんだからもっと大事にしなさい。
ましてやそれ、ペガサス会長から貰ったものでしょ？」
「あっはははは！いやわりぃ明日香、助かったぜ！」
「もう。」

そう言い呆れながらも微笑む明日香。
その光景を目にした綾小路は燃えていた。

「明日香くんからカードを貰い、そしてお互いに微笑み合うとは……
今僕は猛烈に嫉妬している！！！」

嫉妬の炎に燃えた綾小路には、まさかそのカードが十代が落とした
カードであり
それを見つけた大徳寺のお願いで明日香が届けて来たとは思いもし
なかった。

「離れたまえ明日香くん！！」

いきなりの綾小路の言葉に十代と明日香は『えっ？』となり
そちらに視線を向けると綾小路が捲くし立て始めた。

「あまりこういうことを言いたくないが明日香君、
オベリスクブルーの妖精の様な君にオシリスレッドの十代君は似合
わない！！」
「オベリスクブルーの、」

「妖精？」

綾小路の言葉に遊夜と翔はそれぞれ頭の中でオベリスクブルーの妖精を想像する。

翔はオベリスクの巨神兵に長の様な羽が生えたものを想像し

『うわぁ…』と嫌そうな表情になり、

遊夜はオベリスクブルー女子の制服を着た知り合い達が

背中に半透明の羽を生やして飛んでいる姿を連想し

『ほぉ～』と何となく納得覚える。

「明日香君、君には僕のような男こそが相応しい。

さぁ悪いことは言わない。早く十代くんから離れたまえ。」

目を光らせてそう言い寄る綾小路に、十代と明日香はやや戸惑う。

「ちょ、ちょっと待て！あんた何か勘違いしてないか！？

コイツはただ俺のカードを届けに……」

「今さら言い訳とは見苦しいぞ十代君！！！」

そう言い綾小路はいつの間に十代の眼前に迫る。

「いや、だからさぁ……」

「ふぅん、明日香君をコイツ呼ばわりかぁ。

もぉそこまで深い関係だったとは……」

そう言い綾小路はラケットを握り締めると十代に向かって宣戦布告の言葉を放つ。

「十代君、僕と決闘だ！」

「人の話を聞け。」

全く持ってその通りだが、嫉妬の炎に燃え上がる男にそんな言葉は通用しない。

「君も決闘者なら、ここは潔く決闘で決着をつけようじゃないか！」
「だから決着ってなんのだよ？」

未だに綾小路の言葉の意味を理解できないでいたが、
次の言葉でこの場にいる全員がどよめく事になる。

「ズバリ、勝った方が明日香君のフィアンセになるのだ！！」
「「「な、なんだってぇぇぇぇぇぇぇ！！！！」」」
「ちょ、ちょっと待ちなさいよ、何よそれ！」
「フィアンセってなんだ？食えんのか？？」
「いいなぁ、俺も決闘したかったのに。」

綾小路の言葉に翔、明日香、ジュンコにももえは驚き
十代はフィアンセの意味が分からず首を傾げ、
遊夜は自分が決闘したかったと羨ましそうに見ていた。

「なんだか知らねぇが、いいぜ！その決闘、受けて立つぜ！！」
「「「んで結局　受けるのかよ！！」」」

そしてその十代の言葉に、翔達のツッコミが入るのだった。

テニスの練習後そのままにコートに立ったまま決闘盤をつけた両者が対峙した。

「勝負だ十代君！」
「おう！望むところだ！！」

決闘盤が展開し、ソリッドヴィジョンシステムが起動する。

「「決闘（デュエル）！！！！」」

綾小路：ＬＰ／４０００
十代：ＬＰ／４０００

そんな２人の決闘をミーハー気分丸出しで見ているのが『白鋼遊夜ファンクラブ』の副会長たる２人だった。

「明日香様を巡って２人の殿方が決闘だなんて。」
「素敵すぎますわ！」

そう言い視線を明日香に向ける２人に、明日香はため息をついた。

「バカバカしい、付き合いきれないわ。」

その横で、遊夜は羨ましそうに十代を見ていた。

「いいなぁ十代。カイザーにも匹敵する決闘者と俺もやってみたかったなぁ～。」

どうやら自分がやりたいと思っていた相手を十代に先を越されたのが羨ましいらしい。

「お兄さんと……」

その横で翔は真剣な眼差しで決闘を見ていた。
どうやら兄であるカイザーに匹敵する決闘者の腕前に興味が湧いたようだ。

「僕のターン、ドロー！」

先行を取った綾小路は引いたカードを確認し、即座に手札にある1枚のカードに手を伸ばす。

「先手必勝！魔法（マジック）カード『サービスエース』！！」
「いきなり魔法か！」

綾小路のカードに十代が驚く中、綾小路は手札の1枚に手を伸ばす。

「このカードはね、僕が選んだカードの種類を君が当てるギャンブルカードさ。
魔法か罠か、はたまたモンスターか、見事当てることができればＯＫ。
だがもし間違えたら、」

とここで、決闘的にはあまり意味は無いのだが『キラン』と歯を輝かす綾小路。

「十代君、君は１５００Ｐのダメージをくらう事となる。」

「おもしろいじゃんか！よおぉぉしっ！」

綾小路の言葉に十代は透視できる筈もないのにカードを『じー』と睨みつける。

「うううううぅぅぅぅぅぅぅぬぬぬぬぅぅぅぅぅぅぅぅぅ…」

「おいおい、まさかカードを透視しようていうんじゃないだろうね？」

その十代の視線に呆れ返る綾小路だが、十代は意を決して言い放つ。

「よし決めた！モンスターカードだ！」

そう言い放つ十代に、綾小路はゆっくりと選んだ手札を公開する。

そのカードは――――

「ふふふふん、残念だったね。」

それは魔法カード、ファイヤー・ボールだった。

「くそうっ！」

「そして、このカードをゲームから除外して『サービスエース』の効果により

相手プレイヤーに１５００Ｐのダメージを与える！！」

綾小路の言葉と共に、カードから放たれた光弾が十代に降り注ぐ。

「ぬぐぅ、うわぁぁ！」

十代：ＬＰ／４０００⇒２５００

「さらに僕は手札から『爆撃（ばくげき）ビックサーバー』を召喚！」

爆撃（ばくげき）ビックサーバー　☆３　炎　戦士族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／１０００

綾小路の場に、爆弾とテニスラケットを持ったジャージ姿のテニス選手が現れる。
その髪型と雰囲気は、週刊マーガレットで連載された某有名スポ根テニス漫画に出て来たスパルタコーチに似ている。

「このカードの効果は1ターンに1度デッキの上からカードを1枚めくり、
そのカードがモンスターだった場合、そのカードを墓地に送る事で十代君、君に１５００Ｐのダメージを与える！！」

「何だよ、そんなのばっかじゃん。」

綾小路の使うバーン効果カードに十代は半ば面食うも
『悪いがそれが僕の決闘でね』と綾小路はさらりと言ってのけデッキに手を伸ばす。

「さぁ1番上のカードは……」

そう言い綾小路はデッキからカードを引く。
そして引いたカードは――――

「モンスターカードだ！」

その手に握られていたのは、
炎属性の戦士族モンスター、超熱血球児（ちょうねっけつきゅうじ）だった。

「ひやぁぁ、運がよすぎだぜ！」
「引きの強さも実力のうちさ！
そしてこのカードを墓地に送り『爆撃ビックサーバー』の効果発動！
“ボム・スマッシュ”！！」

綾小路の引き運の良さに頭を抱える中、
爆撃ビックサーバーの放つ爆弾によるスマッシュエースが十代を襲う。

「うわあぁぁぁっ！！！」

十代：ＬＰ／２５００⇒１０００

「僕はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」

「成る程な、魔法及びモンスター効果によるバーンダメージを主体としたバーンデッキか。」

綾小路の戦略を観察していた遊夜はそう判断した。
はっきり言って、バーンデッキは厄介である。
バトルする事無く相手のＬＰを削る術はまるでじわじわと効いて行く毒のようだ。
しかも綾小路のバーンはじわじ効いて行く毒というより一発でＬＰの大半を奪う爆弾のようだ。
事によっては一瞬でＬＰが０になってしまう。

「しっかりしてよアニキ！
このままじゃ明日香さん、アニキとの仲を勘違いされたまま爽やか部長のフィアンセになっちゃうよ！！」
「……と言うか、私ふと思ったんだけど……」

翔の言葉に続くように、不意に明日香が言葉を漏らす。

「十代って、フィアンセの意味、分かってるのかしら？」
「「あっ」」
「……十代なら、確かに意味知らなそうだな。」

明日香の言葉に、遊夜は冷静にそんな言葉を漏らした。
……女に鈍感な自分が言える立場じゃないのに。

そんな雰囲気の中、決闘は続いていく。

「よし！今度は俺の番だ、ドロー！！」

十代は引いたカードを確認しながら、これからどうするかを考えて

いた。

「（いきなり大きなダメージを食らっちまったか、
でもアイツの場には攻撃力の低いモンスターが1体のみ。）
俺は魔法カード『天使の施し』を発動！
デッキからカードを3枚ドローし、その後　手札から2枚を捨てる
！」

「おいおい、いきなり手札事故かい？」

十代の発動したカードに呆れる綾小路。
そして外野の遊夜達も驚いていた。
あの神運のドロー決闘者である十代がいきなり手札入れ替えカード？
それは、十代のドロー運を知っているからこそ驚いてしまっている
のだ。
だが当の十代はそんな事気にせずデッキからカードを3枚引き
手札状況を確認する。

「（よし！）」

そしてカードを決め、2枚のカードを墓地に送る。
そして次の瞬間、十代が天使の施しを使った本当の目的を
ここにいる全員が知る事となる。

「そしてこの瞬間、墓地の『E・HERO　ネクロダークマン』の
効果発動！」
「なに！？」

十代の言葉と共に、十代の背後に薄っすらと赤い悪魔のようなヒー
ローが現れる。

「こいつが墓地にある時、１度だけ『Ｅ・ＨＥＲＯ』を生け贄なしで召喚できる！！
来い！！『Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン』！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン　☆７　地　戦士族　ＡＴＫ／２６００
ＤＥＦ／１８００

十代の場に、金色に輝くヒーローが現れる。

「成る程、『天使の施し』の狙いはこれだった訳だね。」

綾小路の言葉に『そう言う事だ！』と誇らしげに返す十代。

「行っけえぇぇ！『エッジマン』で『爆撃ビックサーバー』を攻撃！
“パワー・エッジ・アタック”！！」

背中から翼とジェットを噴出しながら、エッジマンがビックサーバーへと迫る。
だがそれを簡単に許す綾小路ではなかった。

「そうは行かない！場から永続罠（えいぞくトラップ）『グラビティ・バインド』を発動！」

綾小路の発動したカード、それはロックバーンの代名詞的なカードの１枚。
そのカードの存在により、エッジマンは重力の力に押さえつけられ身動きが取れなくなる。

「このカードが場にある限り、☆4（レベル）以上のモンスターは攻撃ができなくなる！」
「うへぇ、そんなのありかよ！」

綾小路の発動したカードに十代はやや恨めしそうな表情となる。
かと言って、自らの手札を確認してもこの状況を打開できるカードはない。

「（せめて罠の通じない『ワイルドマン』か魔法・罠カードを破壊する『エアーマン』がいてくれれば助かるんだが……）
仕方ねぇ、俺はカードを2枚伏せ、ターンエンドだ！」
「僕のターン、ドロー！」

十代のエンド宣言と共に、綾小路は間髪容れずにカードを引く。

「僕は『爆撃ビックサーバー』の効果発動！
さぁ1番上のカードは……」
「この瞬間、罠発動！」
「なに！？」

綾小路は爆撃ビックサーバーの効果で再び十代にダメージを与えようと考えていた。
だがそれに対し十代は罠で対抗する。

「永続罠『幻想（げんそう）の呪縛（じゅばく）』！
相手モンスター1体の攻撃力を５００Ｐ下げ、モンスター効果を無効にする！！」

十代の発動したカードにより、

爆撃ビックサーバーは瞳の紋章のついた六芒星の呪いを受けた。
爆撃ビックサーバー　ＡＴＫ／１０００⇒ＡＴＫ／５００

「なんだと!?」
「へへっ、目には目を永続罠には永続罠をってな!」

その十代の言葉に綾小路は『ふっ』と歯を輝かせる。

「ふっ、やるな十代君!
それでこそ我がライバル、好敵手と書いてライバルだ!!
はははははははははっ!!!!!」

高笑いを始めた綾小路のいったライバルという言葉に
『はぁあ?』と嫌そうに十代は反応した。

「はぁあ?俺とお前がライバルだって??
面白いこというじゃんか、笑っちゃうね。あっはははははははは!!!!!」
「「わっはははははははははははははははははははっ!!!!!!!!!!!!!」」

テニスのコートに2人の笑い声が木霊する。

「なんだかなぁ……」

その光景を見た翔はため息をつきつつそう言い放った。

「何をやってるのかしらあの2人。」
「不思議な勝負になってきましたわねぇ。」
ジュンコとモモエもそういいながら苦笑し
明日香はこめかみに手をやっていた。
「……くすっ、ホントに面白い奴ら。」
唯1人、遊夜だけは相変わらず面白そうに決闘を眺めていた。
そして高笑いをやめた綾小路は
自分の圧倒的有利を未だに笑い続ける十代に向かって言い放つ。
「残りＬＰ１０００Ｐで笑っている場合じゃないだろう、十代君。
それとも開き直って笑っているのかな？
それもまたオシリスレッドの君らしいけどね。」
その綾小路の言葉にカチンと来た十代は、キッと睨みつける。
「どの道、君はこのターンで終わる！
僕は『キャプテン焔（ほむら）』を召喚！」
キャプテン焔（ほむら）　☆３　炎　戦士族　ＡＴＫ／２００　ＤＥＦ／１００

綾小路の場に、鳳凰のマークの付いたサッカーユニフォームに身を包んだ
サッカー少年が現れる。
その姿は、某有名サッカー漫画の主人公にどこか似ている。

「『キャプテン焔』は相手モンスターを無視して直接攻撃（ダイレクト・アタック）ができ、このカード以外の戦士族モンスター1体につき攻撃力が１０００Ｐアップする！
僕の場には『爆撃ビックサーバー』が1体、よって１０００Ｐアップする！」

キャプテン焔　ＡＴＫ／２００⇒ＡＴＫ／１２００

キャプテン焔の持つサッカーボールに、炎がまとわり付くと同時にキャプテン焔の攻撃力が上昇した。

「行け！『キャプテン焔』でダイレクト・アタック！！
“バーニング・オーバーヘッド”！！」

綾小路の攻撃宣言により、キャプテン焔はボールを高く蹴り上げると自身もそれと同じ位　高く跳び上がり、オーバーヘッドキックを繰り出す。
それにより炎をまとったボールは、真っ直ぐに十代へと飛んでいく。
十代のＬＰは１０００、この攻撃を喰らえば終わりである。

「させるかよ！罠発動！『ドレイン・シールド』！！」

だが、十代の発動したカードにより、十代の前に青白い薄い壁が現れる。
それにより炎のボールは跳ね返され、それと同時に青白い輝きが十

代を包み込む。

「『ドレイン・シールド』は相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分、自分のＬＰを回復する！！」

十代：ＬＰ／１０００⇒２２００

「ほぉ、やるね十代君。どうやらこのターンで君を仕留めるのは無理の様だ。」

そう言い綾小路は素直に自分のミスを認めた。

「だが僕のターンはまだだ！
僕は場から永続罠『リビングデッドの呼び声』を発動！
この効果により僕は墓地から『爆撃ビックサーバー』の効果で墓地に送った
『超熱血球児』を特殊召喚する！！」

超熱血球児　☆３　炎　戦士族　ＡＴＫ／５００　ＤＥＦ／１０００

綾小路の場に、目を燃やすいかにも熱血そうな野球児が現れる。

「『超熱血球児』はこのカード以外の炎属性モンスター1体に付き攻撃力が１０００Ｐアップする！
僕の場には『爆撃ビックサーバー』と『キャプテン焔』の2体！
よって２０００Ｐアップする！！」

超熱血球児　ＡＴＫ／５００⇒ＡＴＫ／２５００

「へっ、だけどその攻撃力じゃ『エッジマン』には届かないぜ？」

十代は最初こそ２０００Ｐアップした事に驚きはしたが
その攻撃力では自分のエッジマンを倒せないと分かり安心する。
だが、綾小路の狙いはエッジマンではなかった。

「確かに今の『超熱血球児』では『エッジマン』は倒せない。」

そこまで言い『だがね』と歯を光らせる綾小路。

「『超熱血球児』にはもう１つの効果がある！
このカード以外の炎属性モンスターを墓地に送る事で
１体に付き５００Ｐのダメージを相手に与える！！
喰れ！“熱血（ねっけつ）バッティング”！！」

綾小路の宣言と共に、爆撃ビックサーバーとキャプテン焔が
それぞれ炎に燃えるボールと化し、それを超熱血球児が十代　目掛けて打ち出す。

「う、うわあぁぁぁっ！！」

十代：ＬＰ／２２００⇒１２００

「さらに僕はカードを１枚伏せ、ターンエンドだ！」

そう言い綾小路はキランと歯を輝かせるのだった。

「完全なロックバーンだな。」

決闘を見ていた遊夜はそう呟き、その呟きに翔は首を傾げる。

「遊夜君、ロックバーンって何すか？」

「ロックバーンはロックデッキ、つまり相手の行動を制限させるデッキの１つで
今回の場合は『グラビティ・バインド』で攻撃を止めつつ
ダイレクト・アタックやバーン効果によって相手にダメージを与える戦略だな。」

遊夜の説明に『へぇ～』と感心する翔。

「カイザーに匹敵する実力ってのも、どうやら噂だけじゃないらしいな。」

そう言い遊夜は視線を再び決闘場へと向ける。

「俺のターン！」

圧倒的に状況が不利ながらも、十代はカードを引く。

「魔法カード『強欲な壺』発動！デッキからカードを2枚ドローする！！」

十代は2枚のカードを補充し、手札状況を確認する。
とここで十代はある事に気づく。

「（この手札……そしてアイツの場にはモンスター1体と永続罠……）そうだ！」
「ん？」

ここで十代は何かを閃いたのか瞬時にカードに手を伸ばす。

「俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を攻撃表示で召喚！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン　☆４　風　戦士族　ＡＴＫ／１８００
ＤＥＦ／３００

十代の場に、プロペラのついた翼を持った風のヒーローが現れる。

「ふふん、そんなモンスターで僕を倒せるとでも思っているのかい？」

この十代の召喚したエアーマンに対し、綾小路は不敵に微笑む。
自分の場にはロックカードの代名詞、グラビティ・バインドがある。
☆４のモンスターなど恐れるに足らないと思っているようだ。

「そいつはこいつの効果を見てからにしな！
『エアーマン』は召喚時、２つの効果から１つを選び発動する！

デッキからヒーローを手札に加えるか、
こいつ以外のヒーローの数だけ場の魔法・罠を破壊するか！
は魔法・罠を破壊する効果を選択！
『グラビティ・バインド』を破壊だ！“エアーソニック・トルネード”！！」

十代の宣言と共に、
エアーマンの起こした竜巻によりグラビティ・バインドは吹き飛ばされていった。

「何！？」
「さらに俺は手札から『融合』を発動！
手札の『オーシャン』と場の『エアーマン』を融合――――
現れろ！極寒のヒーロー！『Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ（ゼロ）』！！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ（ゼロ）　☆８　水　戦士族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００

十代の場のエアーマンが、手札の水のヒーローと融合し、
場に白銀の鎧を身にまとった氷のヒーローが誕生した。

「あれは！」

そのヒーローの登場に、驚きの声を上げたのが明日香だった。

「明日香様？」
「あのモンスターがどうかなされました？」
その明日香の反応に首を傾げるジュンコとももえ。
それと同じくして、遊夜は『もしかして』と視線を明日香に向ける。
「ひょっとして、明日香さんが十代に届けたカードって
『アブソルートＺｅｒｏ』だったんですか。」
「えぇ。まさかこの決闘で見れるとは思ってなかったわ。」
遊夜の問いにそう答える明日香だったが、
この明日香の発言に誰よりも反応した輩がいた。
「なにいいいいいいっ！！！？？？」
綾小路である。
「お、おい、どうしたんだよ？」
「十代君、そのカードは先　明日香くんから渡されたカードなのか
！？」
そう言い十代を睨みつける綾小路。
その怒りの形相の目からは血涙が流れている。
「いや、渡されたっつーか、俺のカード届けてくれただけなんだけ
ど……」

「許さあああああぁぁぁぁぁぁぁぁんっ！！！！！！！！！！」
絶対に倒してみせるううぅぅぅっ！！！！！！！！！」

Ｚｅｒｏの事を説明しようとする十代だったが、
嫉妬の炎に燃え上がる綾小路の耳には届いていなかった。

「…え、えっと、決闘続けるぞ！
俺は手札から魔法カード『エレメント・チェンジ』を発動！
このカードの発動ターン、場のモンスターは全て俺の宣言した属性となる！！
俺は水属性を宣言！！」

十代の宣言と共に、エッジマン及び超熱血球児の属性が水へと変換される。
それと同時に、Ｚｅｒｏの右腕が刃状に変形する。

「そして『Ｚｅｒｏ』のモンスター効果発動！
このカード以外の水属性モンスター１体につき攻撃力を５００Ｐアップする！！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ　ＡＴＫ／２５００⇒ＡＴＫ／３５００

「なに！？」
「こいつでアンタの熱いモンスターを凍らしてやるぜ！
バトルだ！『Ｚｅｒｏ』で『超熱血球児』を攻撃！！
“瞬間氷結（しゅんかんひょうけつ）－Ｆｒｅｅｚｉｎｇ（フリージング）　ａｔ（アット）　ｍｏｍｅｎｔ（モーメント）”！！！」

十代の攻撃宣言と共に、Ｚｅｒｏの放つ凍てつく吹雪が超熱血球児を氷付けにして行く。

「これを受ける訳には行かない！罠発動！『ガード・ブロック』！！
戦闘ダメージを０にし、デッキからカードを１枚ドローする！！」

綾小路はカードを１枚引き、
超熱血球児は氷結され破壊されるもダメージまでは通らなかった。

「くっ！だけどまだ『エッジマン』の攻撃が残ってるぜ！
行けぇ『エッジマン』！ダイレクト・アタックだ！！
“パワー・エッジ・アタック”！！！！」

十代の宣言と共に綾小路に突っ込んでいくエッジマン。
それを阻むものは何もなかった。

「ぬ、ぐわぁぁぁ！」

綾小路：ＬＰ／４０００⇒１４００

「俺はカードを１枚伏せて、ターンエンドだ！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ　ＡＴＫ／３５００⇒ＡＴＫ／２５００

土煙が晴れ、苦虫を噛み潰した綾小路の表情を見た十代は
満足そうにターンエンドを宣言したのだった。

「へへ、形勢逆転だな！」

十代はＬＰでは負けてるものの、場では圧倒的に優勢な事に強気な態度を取る。
だが、綾小路の表情からは余裕が感じられた。

「ふっ、はたしてそうかな?僕のターン、ドロー。」

そして引いたカードを見た時、綾小路は歯を光らせた。

「僕はこれを待っていたんだよ、十代君。
僕は墓地の『爆撃ビックサーバー』と『キャプテン焔』の2体をゲームから除外し
『バーニング・アーチャー』を特殊召喚する!!!」

バーニング・アーチャー　☆7　炎　戦士族　ＡＴＫ／２６００
ＤＥＦ／２０００

綾小路の場に、真っ赤に燃える赤き鎧に身を包んだ炎の弓矢士が現れる。

「なんだぁ!?先までスポーツしてて、
何でいきなり弓矢もった戦士が出てくんだよ!!?」
「生憎だが十代君、僕はテニスやサッカー、野球などに加え
アーチェリーも少々たしなんでいるのさ。」

十代の言葉に対しそう言いながら歯を光らせる綾小路。

「このカードは1ターンに1度、このターン攻撃しない代わりに
相手フィールド上に存在する最も攻撃力の高いモンスター1体を破

壊し
破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える事ができるのさ！」
「なにぃっ！？」

綾小路の説明に十代が驚く中、
バーニング・アーチャーはゆっくりと弓矢を構え、
十代の場で最も攻撃力の高いモンスター、エッジマンを狙う。

「今度こそ終わりだ！射抜け“デストロイ・シュート”！！！」

綾小路の宣言と共に、灼熱の矢が放たれる。

「マズイ！これを喰らったら十代の負けだ！」
「アニキ！！」

遊夜と翔が叫ぶ中、灼熱の矢がエッジマンを貫き、
それと同時に爆発が起こりエッジマンは跡形もなく吹っ飛んだ。
そしてその余波が十代を襲う。

「うわあああぁぁぁぁぁっ！！！！！！」

辺りは爆風により土煙に覆われ、誰も十代の姿を確認できない。

「ははははははは！これで僕の勝ちだ！！！！」

綾小路は自身の勝利を宣言した。
だが、土煙が晴れた時、その宣言は撤回される。

「ははははは……は？」

土煙が晴れた時、綾小路は目を疑った。

なぜなら。

十代：ＬＰ／６００

そこには、僅かながらにＬＰが残っている十代の姿があったからだ。

「ば、バカな！？一体どうして！！！？？」

驚く綾小路に十代はニヤッと不敵に微笑む。

「俺はアンタのカード効果が発動する際、
チェーンしてこのカードを発動させたのさ。」

そう言い自分の場に視線を向ける十代。

そこには、１枚のカードがあった。そのカードは……

「罠カード『エレメンタル・チャージ』！
自分の場の『Ｅ・ＨＥＲＯ』１体に付き１０００Ｐ自分のＬＰを回復する！
俺はこれで２０００Ｐ　ＬＰを回復していたのさ！」

十代の言葉に『くっ』と苦々しそうな表情になる綾小路。

だが、彼の売りははその爽やかな笑顔。

すぐに余裕の表情となる。

「やるなぁ、十代君。」

そう言い綾小路は最後の手札に手を伸ばす。

「最後に僕は装備魔法『同胞の守護霊』を発動！
このカードは墓地のモンスター1体を除外する事で、
そのモンスターと同じ属性及び種族のモンスターに装備できる！
僕は『超熱血球児』を除外し、
同じ炎属性で同じ戦士族の『バーニング・アーチャー』に装備する
！！」

綾小路の言葉と共に、墓地より除外された超熱血球児が赤いオーラ
となった
バーニング・アーチャーにまとわり付く。

「このカードを装備したモンスターはバトルでは破壊されず、ダメ
ージも0となる！
ターンエンドだ！！」

この時、綾小路は自分の絶対的優位を信じて疑わなかった。
装備魔法によりバーニング・アーチャーはバトルでは破壊されず、
ダメージも0。
そして次のターンが来れば、アブソルートZeroを破壊し勝つ事
が出きる。
ましてや十代の手札は0。
よほどのドロー運がなければ逆転などありえない。

「俺のターン！」

だが、綾小路は先程　自分が言った言葉を忘れていた。
『運も実力の内さ』
そしてそれは、他の決闘者にも言えることを、
そして十代の強運のドロー運を知らなかった。

「ドロー！！！！！」

そしてドローしたカードを見た時、十代はガッツポーズをとる。

「来たーっ！！この勝負もらったぜ！！！」
「なに！？」

十代の言葉に勝利を確信していた綾小路は面を喰らう。

「俺は手札から魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動！
俺は場の『アブソルートＺｅｒｏ』と墓地の『ネクロ・ダークマン』
を除外し融合――
現れろ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　エスクリダオ』！！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エスクリダオ　☆８　闇　戦士族　ＡＴＫ／２５０
０　ＤＥＦ／２０００

十代の場からＺｅｒｏが消え、それと同時に現れた黒い沼地から
悪魔の様な黒い闇のヒーローが現れた。

「『エスクリダオ』は墓地のヒーロー１体に付き攻撃力が１００Ｐ
アップする！
俺の墓地にヒーローは３体！よって３００Ｐアップする！！

“ダーク　コンセントレイション”！！」

Ｅ・ＨＥＲＯ　エスクリダオ　ＡＴＫ／２５００⇒ＡＴＫ／２８００

「こいつがお前の息の根を止めるぜ！！」

その十代の宣言に、綾小路は笑いを持って答えた。

「はっはははははは！！これだからオシリスレッドはバカなんだ！
装備魔法『同胞の守護霊』により、
『バーニング・アーチャー』は破壊されずダメージも０だ。
この状況で僕が負ける筈ないじゃないか。」

この綾小路の余裕に対し、十代もまた笑いを持って答える。

「くっくく、これだからオベリスクブルーアホなんだ！
自分の場を良く見てみろよ！」

「？」

十代の言葉に視線を自分の場へと向けた綾小路は我が目を疑った。
なぜならそこには、足元から徐々に凍結し始めている
バーニング・アーチャーの姿があったのだ。

「こ、これは！？」

「へへ。『エスクリダオ』の融合素材として除外した
『アブソルートＺｅｒｏ』のモンスター効果だ！
このカードがフィールドを離れた時、
相手フィールド上　全てのモンスターを破壊する！！」

十代の言葉と共に猛吹雪がバーニング・アーチャーに襲い掛かり、

完全に凍結してしまう。

「なっ！？」

「凍てつけ！“真闘神氷撃（ノーヴァエ・ローグ）”！！」

そして凍てついたバーニング・アーチャーは粉々に砕け散った。

「これでアンタの場はがら空きだ！

行けぇっ！『エスクリダオ』でダイレクト・アタック！！

“Ｄａｒｋ（ダーク）　ｄｉｆｆｕｓｉｏｎ（ディフュージョン）”！！！」

十代の攻撃宣言により、エスクリダオは自身の腕の刃と

腰にある刃を綾小路に向けて飛ばす。

その攻撃を妨げる物は、何もなかった。

「うわあああぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！」

綾小路：ＬＰ／１４００⇒０

「わぁ！」

「逆転勝利ね！」

「やったー！さすがアニキ！！」

この逆転劇を見ていたももえ、ジュンコ、翔は

諸手を挙げて十代の勝利を喜んでいた。

「うん、さすが十代だ。」
「そうね」
遊夜と明日香も顔をほころばせながら頷いていたのだった。

一方、負けた綾小路は両手両膝をつき体を震わせていた。
「ま、負けた……」
「いえぇぇい！ガッチャ！楽しいデュ…」
「この僕が負けたぁぁぁ！？？うわぁぁぁぁぁ！！うおぉぉぉぉぉぉ！！！！」
さながらナイアガラの滝のように涙を流しながら逃げ去って行ったのだった。
十代はそれを呆然と見送るしかなかった。
そんな十代の元に翔や遊夜達が歩み寄ってきた。

「やったねアニキ！やっぱすごいや！！」
「良い決闘だったぜ。」
「お、おう！」

翔達の言葉に、唖然となっていた十代はいつも通りの表情となる。
と、ここで十代は『あっ』と何かを思い出した様に明日香の方へと視線を向け
歩み寄っていく。

「なぁ明日香、俺　勝っちゃたんだけど……」

その十代の言葉に、翔及びジュンコとももえは驚きの表情となる。

「え？アニキまさか…」

「告白ですか！？」

そして明日香に接近した十代の放った言葉は――――

「フィアンセって、何だ？」

であった。

その言葉に翔達はずっこけ、明日香は呆れながら小声で『バカ』と呟き

十代は意味が分からず首を傾げ、遊夜は『やっぱりか』と頷くのだった。

『～第十六章～　青春のスポコンデュエル！？　《終》』

～第十六章～　青春のスポコンデュエル！？（後書き）

どうも、黒鋼です。
いや～、約１年と１ヶ月、ようやく『迷い猫オーバーラン！』が再開いたしました！
クリスマスの話から試験勉強、そして希の変化。
１０巻で何より驚いたのはイラストの変更は前もって知っていましたが
希のイメチェンでした。
まさか１０巻の表紙の子が髪を切ってイメチェンした希だったとは。
最初はマジかよって驚きましたけど、最後のキスシーンとそこを読んだ後　見たキスシーンのイラストにより、
これはこれでいいか、と納得いたしました。
まだ読んでない人は、ぜひ読んでみてください！

さてさて、今回の話は『青春のデュエルテニス』回をお送りしました。
今回この話を選んだ訳は、まず自分、恋愛系が好きです。
故に十代×明日香　的な話はなるべくしておきたかったんです。
また、ここで綾小路を出す事で後にやりたいイベントを発生させたいんです。
どんなイベントかは、今は秘密です。
また、今回の話ではテニス系魔法カードによるバーンデッキだったのを
面白みに欠けるのでスポ根系バーンデッキにしました。
故にこのお話では綾小路はテニス以外のスポーツもしてます。
さて、こんな感じで今後もオリジナルな展開にして行こうと思っておりますので
今後とも、よろしくお願いしま～す。

今回の最強カード『Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ』
☆８　水属性　戦士族　ＡＴＫ／２５００　ＤＥＦ／２０００
「ＨＥＲＯ」と名のついたモンスター＋水属性モンスター
このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードの攻撃力は、フィールド上に表側表示で存在する
「Ｅ・ＨＥＲＯ　アブソルートＺｅｒｏ」以外の
水属性モンスターの数×５００Ｐアップする。
このカードがフィールド上から離れた時、
相手フィールド上に存在するモンスターを全て破壊する。

十代の出した最強ヒーローの一角。
攻撃力アップはもちろん、相手の場のモンスターを一掃する効果は
強力。
自分もヒーローデッキでエースとして活躍しています。
今回　十代はこれを教室に忘れるという失態をしていますが
このカードが後に、十代と明日香の仲を決定的なものにする
……かも？
因みに、全体除去の効果名は『爆転シュートベイブレード』の
『ウルボーグ４』の必殺技名から。

～第十七章～　ＶＳ取巻!!オーパーツデッキの奇跡!!

「なぁ十代、今日はこの後どうするんだ?」
「ん～とくに用事はないぜ。いつもの事だけど。」

ある日のデュエル・アカデミアの廊下にて、
今日の授業を終えた遊夜と十代が会話をしながら歩いていた。
成績トップのオベリスクブルーとドロップアウトのオシリスレッドが
肩を並べて歩くなど普通ならあり得ない事だが、
この決闘バカコンビにはそんな常識なんのそのと言わんばかりに
堂々と廊下を歩いていた。

「ん?」
「どうかしたか遊夜。」

不意に足を止めた遊夜に首を傾げる十代は、遊夜の視線を追って見た。
その先には、１人のレッド生徒が数人のブルー生徒に囲まれている
所が見えた。

「けっ、なんだこのクズカードは。」
「さすがはオシリス・レッド、持ってるカードもクズばかりだぜ!」
「や、やめろ!」

ブルー生徒に取り上げられたカードを奪い返そうとするレッド生徒だが
ブルー生徒の何名かに取り押さえられ、身動きが取れない。

「ふん。」

そしてレッド生徒のカードを持っていたブルー生徒はその内の1枚を足元へまるで捨てる様に投げた。

「使えねぇカードはな、お前ら必要のねぇレッドのクズと同じなんだよ。
だからこんなことされても文句は言えねぇのさ!!」

そう言いながらブルー生徒は、足をあげてそのカードを踏もうとする。

「や、やめて……」
「やめろ!!!」

ブルー生徒の踏み付けにレッド生徒が叫ぶより早く、声を上げた者がいた。
遊夜である。
ブルー生徒の蛮行を見ていた遊夜は、持前の身体能力で駆け寄るとブルー生徒の足を思いっきり蹴り飛ばしバランスを崩したのだ。

「どわあぁぁっ!!??」

そのままブルー生徒が倒れると、
遊夜は素早く踏まれそうになったカードを拾い上げる。

「大丈夫か?」

そして自分の後ろにいるレッド生徒を心配そうに見つめる。
レッド生徒は身長は低く、翔の様にどこか弱気そうな少年だった。

「あ、はい。」
「遊夜！」

そこへ遅れて十代が駆け込んで来た。

「すっげーな！早すぎて俺でも追いつけなかったぜ……あれ？」

とここで十代は、ある事に気付く。
レッド生徒に絡んでいたブルー生徒達の中に見覚えのある顔が2人程いたのだ。
1人は遊夜に蹴飛ばされた青髪にメガネを掛けた男。
もう1人はその近くにいる茶髪のギザギザ頭をした男子生徒だ。
その事に遊夜も気付いた。

「お前ら、確か万丈目の取り巻きの……」
「確か、“取巻（とりまき）”と“慕谷（したいたに）”？」
「あぁ、そうだ！そのまんまの名の！！」
「「誰がそのまんまだ！！！」」

十代の言葉に万丈目の元　取り巻き
“取巻　太陽（たいよう）”と“慕谷　雷蔵（らいぞう）”は怒りを顕わにした。

「お前ら、万丈目が居なくなってから随分　色々やってる様だな。」
「はっ、万丈目？」
「あんな負け犬、知ったこっちゃないね！！」

遊夜の言葉にそう言い放つ取巻と慕谷。
事実、ブルー生徒の中でも強く威張り散らしていた万丈目がアカデミアを去って以来、今まで万丈目によって抑えられていたブルー生徒達が暴走し始め、レッド生徒を中心にイジメが多発して

いるのである。
特に万丈目の取り巻き、その1とその2だった取巻と慕谷の横暴は目に余るものがあった。

「何だと!?万丈目は強いぜ!!少なくともお前らよりは!!!」

取巻達の言葉に怒りを顕わにする十代。
十代にとって、1度　決闘した相手は誰であろうと仲間。
故に2人の万丈目の侮辱する言葉は十代の怒りに火をつけた。

「はっ、万丈目が強い?」
「お前の様なオシリス・レッドに負ける奴がか?」

そんな十代の言葉を笑い飛ばすブルー生徒達。

「ならお前ら、十代と決闘してみろよ。」

そこへ遊夜が怒りを顕わにした表情で言い放った。
その遊夜の放つ威圧感と言葉にブルー生徒達は言葉を失う。
遊夜が怖いのもあるが、万が一　十代と決闘して負けでもしたら他の生徒達にどんな目で見られるか分かったものでは無いからだ。

「……ふん、結局お前ら、弱い者イジメしか出来ない最低のゲス野郎か。」
「よ、弱い者イジメじゃねぇよ。ただの害虫駆除さ!」
「害虫駆除?」

取巻の放った言葉に目を丸くする十代。

「そうさ!そいつのデッキは使えないクズデッキ!」

「これ以上　使えないクズカードが存在しては
デュエルモンスターズの格が下がる。」
「そしてそんなカードを所有している奴もまた同罪、
デュエルモンスターズとデュエルアカデミアの格を下げる害虫という訳さ。」
「俺らはそれを駆除しているだけ……」
「ふざけんなっ！！！！」

取巻と慕谷の言葉に怒鳴り声を上げる十代。

「デュエルモンスターズにクズ何て居ない！
どんなカードにだって使い道があるし存在する意味があるんだ！」
「害虫か。俺から言わせれば、お前らの様な輩が決闘者を名乗る事自体が
デュエルモンスターズとデュエルアカデミアの格を下げてると思うぜ。」

十代の言葉に遊夜も同意する様に言い放つ。

「ぬかせ！現にお前だってシンクロモンスターという
選ばれし最強のカードを使ってるじゃないか！！」

十代と遊夜の言葉に押されそうになった取巻は、
遊夜のシンクロモンスターに話の矛先を向けた。

「シンクロモンスターこそ、選ばれた至高のカード！
そのカードを使うお前が何故そんなクズを庇う！！」

その言葉に遊夜は『なに？』と睨みを利かせる。

「お前らは本気でそう思ってるのか？」

ただそれだけ呟く遊夜の迫力に取巻達は圧倒され、言葉１つ発せれない。

そんな状況の中で、遊夜は不意に後ろに振り替えり、そこにいた先程のレッド生徒に視線を向けた。

「君、名前は？」

「え！？あ、あの、ふ、“古高（ふるたか）　透（とおる）”……」

「古高か……ちょっとデッキ見せてくれるか？」

遊夜の言葉に首を傾げながらも透はデッキを遊夜に差し出す。

そして遊夜はそのデッキを確認する。

「……成程な……」

そう呟くと遊夜は再び視線を透に向けた。

「ちょっとこのデッキ借りるぞ。」

「え？えぇ？？」

遊夜の言葉に訳が分からなかった透を無視し、遊夜は視線を取巻達に向ける。

「おい。」

「な、なんだよ。」

「決闘しろよ。」

その遊夜の言葉に取巻は一瞬、耳を疑った。

自分と決闘しろ？

同じブルー生徒として遊夜の実力を知っている取巻達にとってそんなものは死刑宣告に等しかった。
だがここで引いては、自分達は弱い者イジメしか出来ない輩と公言する事になってしまう。
この事に取巻達は大いに悩んだが、ここで遊夜は思いもよらない事を言い放つ。

「俺はこのデッキを使う。お前らは誰でも良い、好きにしろ。」

そう言い遊夜が掲げたのは、先程　透から借りたデッキだった。
この言葉に取巻は即座にニヤついた。
あのデッキが相手なら勝てると確信したからである。

「良いだろう！俺が相手になってやる！！」

そう言い真っ先に動く取巻。

「（テメェのあの事を俺は忘れた事がないぜ！！）」

この時、取巻の脳裏にある出来事が浮かび上がっていた。
それは入学当時、万丈目の取巻きだった頃。
万丈目に誘われて遊夜と十代をアンティールールの決闘にやって来た時の事だ。
中等部の頃から憧れていた文乃の幼馴染であり思い人が目の前にいる遊夜だと知った時の取巻の怒りは凄まじかった。

「（あの時の怒り、今ここで晴らしてくれるうぅぅっ！！！！）来い！」

怒りと好機に燃えながら、取巻は決闘場へと歩いて行った。

デュエルアカデミア学園、決闘場。
ここに、決闘盤を腕に付け睨み合う遊夜と取巻の姿があった。

「お前も物好きだな。そんなクズカードのデッキで決闘しようとは。」

「デュエルモンスターズにクズや使えないカードなど無い。
それを証明する為の決闘だ！！」

互いに一歩も引かず言い放つ２人。

「行くぞ！」
「来い！！」

「「決闘！！！」」

遊夜：ＬＰ／４０００
取巻：ＬＰ／４０００

「俺の先行だ！ドロー！！」

先行を取ったのは取巻だった。

「俺は『魂を削る死霊』を守備表示で召喚！」

魂を削る死霊　☆３　闇　アンデット族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／２００

取巻の場に、紫色のフードに身を包み鎌を構えた死神の様なアンデットが現れた。

「そしてカードを１枚伏せ、ターンエンドだ！」

「おぉ！始まったぜ！！！」

そんな決闘を、十代は透と共に決闘場の観客席で見ていた。

「大丈夫かな……俺のデッキなんかで……」

十代とは対照的に、透は自分のデッキで勝てるのかと不安そうに見つめていた。

「何言ってんだよ、お前のデッキだろ？お前が信じないでどうすんだよ。」

「でも……」

「太陽ー！やっちまえー！！！」

「決闘者が強くてもデッキはザコだ！一気に決めろー！！！！」

十代は励ますが、透は未だに自身も元気も無い様で
その隣では慕谷　及びブルー生徒の言葉にさらに落ち込んでしまった様だ。
十代や遊夜は、こういった自分に自身の無いレッド生徒を多く見てきた。
翔や隼人もそうだったが、2人は遊夜との協力で自信を取り戻した。

「お前まるで少し前の翔や隼人みたいだな。」
「え？」
「おい、十代。」

透が十代の言葉に首を傾げる中、騒ぎを聞きつけたのか
大吾郎、さらには翔と隼人がやって来た。

「おっ、噂をすればなんとやらだ。」
「アニキ、一体何があったんすか？」
「遊夜が自分のじゃなく他の人のデッキで決闘するって聞いたんだなぁ。」
「ま、色々あったんだよ。」

それだけ言うと十代は視線を決闘する遊夜へと向けた。

「俺のターン、ドロー！」

遊夜は引いたカードと手札の状況を確認する。

「（……成程、これはいわゆる『オーパーツデッキ』か……）」

そう判断した遊夜は、即座に自分が取るべき事を悟り
手札の１枚に手を伸ばした。

「俺は『水晶（すいしょう）ドクロ』を守備表示で召喚！」

水晶（すいしょう）ドクロ　☆１　水　岩石族　ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／０

遊夜の場に、蒼い水晶で作られた頭蓋骨が現れた。
それは、そのほとんどがマヤ文明やアステカ文明、
インカ帝国といった中南米の考古遺物とされているオーパーツの一種だ。
一般にはイギリス人のＦ・Ａ・ミッチェル＝ヘッジスが
１９２７年にベリーズ南部の古典期の遺跡ルバアントゥンで
発見したとされる物を指すことが多く、
ミッチェルの養女アナの１７歳の誕生日に発見され、
彼らが遺跡の調査を中断して水晶ドクロを私蔵したため、様々な憶測を呼んだ。
ただ、スミソニアン研究所で精密な調査が行われ、
電子顕微鏡による精密な検査によって水晶髑髏の表面には
ダイヤモンド研磨剤による切断跡が確認され、
この髑髏が制作されたのは１９世紀末以降であることが判明し、
ベリーズの遺跡で発掘されたものではないと結論付けられた。
それでもオーパーツの一種としてロマンを感じる人は多い。

「成程、オーパーツデッキという訳か。」
「へ？大パンツがどうかしたのか大吾郎？」

その言葉に大吾郎　及びそこにいた十代　以外のレッド生徒、
そしてそれを近くで聞いていたブルー生徒もズッコケた。

「あ、あの、大パンツじゃなくて、オーパーツです。」
「なんだそりゃ？」
「オーパーツってのは、当時の技術を超越した古代遺物の事っすよ！！」
「コイツ、どんだけバカなんだよ……」

十代のバカさに流石にブルー生徒達もあきれ果てた。

「でも、どうして『水晶ドクロ』を……」
「どうしてって？」

透の言葉に首を傾げる翔。

「お前、知らないのか？」

その翔の疑問に答えたのはブルー生徒達だった。

「『水晶ドクロ』はな、召喚時に１０００Ｐのダメージを持ち主に与える
呪いのモンスターなんだぞ。」
「そんな事も知らないとは、さすがはオシリス・レッドだ！」

そう言い笑い飛ばすブルー生徒達の態度に、透は益々　落ち込んでしまう。

「……やっぱり、好きや趣味で作ったデッキなんてダメなのかな……」

「そんな事無いぜ。」

落ち込む透にそう言い励ます十代。

「お前が魂込めて作ったデッキだろ？
それに先も言ったけど自分のデッキをお前が信じないでどうすんだよ。」

「……でも……」

十代の言葉を持ってしても、透は未だに俯いたままだった。

「ふん、貴様がどういうつもりで『水晶ドクロ』を召喚したのかは知らんが
これでお前は１０００Ｐのダメージを受ける事となる。」

決闘場で遊夜と対戦している取巻がそう言い放った瞬間、
水晶ドクロが怪しく輝きだし、その光が遊夜へと襲い掛かる。

「ははははは！これでお前は勝手に自滅だぜ！！」

そう言い遊夜が自滅する事を確信する取巻。
だが、当の遊夜は冷静に口を開いた。

「自滅？誰が。」
「なに？」

その遊夜の言葉に取巻が首を傾げる中、遊夜は手札の１枚に手を伸ばした。

「手札から速攻魔法『呪詛返(のろいがえ)しのヒトガタ』を発動！！！」

遊夜がカードを発動した瞬間、
遊夜の場にどこぞのアニメで陰陽師などが使うような人型の白い札が現れると
札が水晶ドクロの放った光を吸収し、黒く染まったいった。
そして次の瞬間、黒く染まった札から放たれた光が
取巻に向かって放たれた。

「な、何だ……う、うわあぁぁぁぁっ！」

取巻：ＬＰ／４０００⇒３０００

取巻は、いやそこにいた遊夜以外の全員が今何が起こったのか理解できなかった。
本来なら水晶ドクロを召喚した遊夜は、
その効果(呪い)により１０００Ｐのダメージを受ける筈だった。
だが、実際には遊夜は無傷で、代わりに取巻のＬＰが削られていたのだ。

「き、貴様、何をした!?今のカードは何だ!!?」
「『呪詛返しのヒトガタ』は、モンスター効果によって発生した自分への効果ダメージを相手に移し替えるカードだ。」
動揺する取巻に対し、遊夜は当たり前の様に言い放つ。
つまり、水晶ドクロの呪いを文字通り相手に移し替えしたのである。

「くっ、小癪な真似しやがって!!」
「じゃあその小癪な真似によりダメージを受けるお前は何だ?」

その遊夜の言葉に取巻は言葉を封じられる。
どんなに姑息な戦法だろうと、自分がダメージを食らったのは事実だ。
反論しようにも言葉が浮かばない。

「どんなに弱いカードでも、仲間との結束と連携によって勝つ事ができる。
かつて父さんやペガサス会長が俺に言った言葉だ。」
「仲間だと?」

その遊夜の言葉に首を傾げる取巻に対し
遊夜は視線を透に向けながら口を開く。

「透、アイツが集めたカード達、デッキの事だ。」

そう言い遊夜は優しく微笑んだ。

「遊夜さん……」

遊夜の言葉に透は軽い感動を覚えていた。
誰に見せても使えないとしか言われなかった自分のデッキを
遊夜はそれを使い、そして決してクズなどでは無いと言い切ったのである。
透にとってこれほど嬉しい事はなかった。

「な、大丈夫だろ。」

それに同意する様に十代がほほ笑む。
だが、近くに座るブルー生徒達はまだ納得していない。

「太陽！偶然だ！！ただ運が良かっただけだ！！」
「そうだ！そうでなければそんなクズデッキ相手にダメージを受ける筈がねぇ！！」

そう言い取巻を応援し、透のデッキを侮辱するブルー生徒に
十代は怒りの限界を超え掛けた。

「お前ら！」
「ちょっと、騒がしいわよ。」

そこへ、十代のセリフを遮る声が響く。
声のした方へ十代達が視線を向けると、そこには声の主である千世が
文乃や希、さらには叶絵と共にいた。

「よぉ千世。」

「文乃さん、希さんも。」
「叶絵さんもいるんだなぁ。」
「皆どうしたのだ？」
「わぁ……」

麗しき乙女達の登場に十代達がそれぞれ様々な反応を見せる中
真っ先に口を開いたのは叶絵だ。

「いや～、遊夜っちが決闘してるって聞いて
文乃が行きたそうにしてたんで私も一緒に来たんだZE(ゼ)！！」
「ち、違うわよ！私は別に……／／／／／／」
「にゃあ、文乃、顔赤い。」

叶絵の言葉を必死で否定しようとする文乃だが、
希にツッコまれ言葉を失ってしまう。

「さて、狼女はほっといて……」
「誰が狼女よ！！」
「文乃。」

千世の言葉に怒る文乃に、叶絵はさらっと答えた。

「か～な～え～……」
「あ～ん、つれないなぁ。ちょっとしたジョークだZE(ゼ)？」
「にゃあ、文乃が怒った。」

文乃の怒りに対し相変わらずの反応をする2人であった。

そんな騒がしい様子を、遊夜は微笑ましく見ていた。

「あ、梅ノ森さん達だ。おーい！」

遊夜が手を振ると、それに気付いた希が手を振って来る。
それに対し、隣にいた文乃は顔を赤くして眼をそらしてしまった。

「？文乃さんどうしたんだろう。」

文乃の反応に首を傾げる遊夜に対し、取巻は怒りの炎を燃やしていた。

「（おのれぇ、白鋼遊夜！あんなクズデッキで俺にダメージを与えたばかりか
その瞬間を文乃さんに見せるとは～！！！！）」

取巻は遊夜に色々と誤解しながら怒りの炎を燃やしていたが
それと同時に、これをチャンスとして見ていた。

「（だがこれはチャンスだ！
文乃さんの前で奴を倒して、赤っ恥をかかせてやるぜ！！）
決闘続行だ！俺のターン！！」

そう決め込んだ取巻は、自身のターンを宣言しカードを引く。

「あ、もう再開か。」

文乃の事で視線をそらしていた遊夜は驚きつつも

視線を取巻に戻し、決闘を続行させる。

「魔法（マジック）カード『強欲な壺』を発動！！
デッキからカードを2枚ドローする！！」

取巻の発動した如何にも強欲そうな顔の描かれた緑色の壺の力により
カードを2枚ひく取巻。
そして引いたカードを見た瞬間、心の中で『来た』と呟く。

「俺は場から罠（トラップ）カード『魂の繋（たましいつな）がり』を発動！！
このカードは自分の場にモンスターが1体のみの場合　発動できる。
場にいるモンスターと同じ種族で同じ☆（レベル）のモンスター1体を
手札から特殊召喚する！！
俺の場には☆3のアンデット族モンスター『魂を削る死霊』が1体。
よって手札から☆3のアンデット族モンスター1体を特殊召喚する
！！
来い！『バーニング・スカルヘッド』！！！」

バーニング・スカルヘッド　☆3　炎　アンデット族　ＡＴＫ／1
０００　ＤＥＦ／８００

取巻の場に、炎に包まれた頭蓋骨のモンスターが現れた。

「貴様に本当のバーンコンボを見せてやるぜ！
『バーニング・スカルヘッド』の効果発動！！
このカードが手札から特殊召喚に成功した時、相手に１０００Ｐの
ダメージを与える！！
喰らえ！“ヘル・バーニング”！！！」

取巻の言葉と同時に、
バーニング・スカルヘッドの口より放たれた炎が遊夜に襲い掛かる。

「くっ！」

遊夜：ＬＰ／４０００⇒３０００

「まだだ！
俺は『バーニング・スカルヘッド』と『魂を削る死霊』を生贄に捧げ――――――
来い！『スカル・フレイム』！！！」

スカル・フレイム　☆８　炎　アンデット族　ＡＴＫ／２６００
ＤＥＦ／２０００

取巻の場からバーニング・スカルヘッドと魂を削る死霊が消えると同時に
場に骨の仮面を被り、赤いマントと炎を羽織ったアンデットの魔術師が現れた。

「そして、『スカル・フレイム』で『水晶ドクロ』を攻撃……と言いたい所だが
そんなザコを潰したって、貴様にダメージを与える訳ではないからな
攻撃はしないでおくぜ。」

そう言いながら明らかに水晶ドクロを見下す取巻は
『その代わり』と言いながら手札の1枚に手を伸ばす。

「俺は『スカル・フレイム』の効果の発動!!
このターンバトルを行わない代わりに、
手札から『バーニング・スカルヘッド』1体を特殊召喚できる!!
来い!『バーニング・スカルヘッド』!!!」

バーニング・スカルヘッド　☆3　炎　アンデット族　ＡＴＫ／1
０００　ＤＥＦ／８００

取巻の宣言と共に、取巻の場に再びバーニング・スカルヘッドが現れた。

「そして効果発動だぁっ!“ヘル・バーニング”!!!」
取巻の言葉と同時に、
バーニング・スカルヘッドの口より放たれた炎が再び遊夜に襲い掛かる。

「ぐぁっ!」

遊夜：ＬＰ／３０００⇒２０００

「まだだぁっ!手札から速攻魔法『バーニング・ボルト』を発動!
相手にカード効果によってダメージを与えた時、
相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を破壊する

！！」

取巻の言葉と共に、カードから放たれた炎と稲妻が
遊夜の場のモンスター、水晶ドクロを破壊した。

「ははははは！どうだ！！これが本当のバーンコンボだ！
所詮そんなクズカードじゃ、俺達エリートの選び抜いたカードには
勝てないんだよ！！
カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！！！」

取巻は自分の絶対優勢を高慢に言い放ち、エンド宣言をした。

「いいぞぉー太陽！」
「そんなクズデッキ速攻でぶっ潰せー！！！」

取巻の優勢にブルー生徒達は口々に透のデッキへの批判の声を上げる。

「ちょっと！アンタ達うるさいわよ！！」

そんなブルー生徒達に千世が怒鳴り声を上げる。
千世としては、遊夜が決闘している中で
遊夜が使っているデッキを批判する言葉が気に入らなかったのだ。
それに加え元々　千世は遊夜や十代達との関わりで
レッド生徒にも比較的　温厚な為、ブルー生徒達の見下した言葉が
癇に障った様だ。

「次くだらない事　言ったら追い出すわよ。佐藤、鈴木。」
「はいお嬢様。」
「すでに準備は出来ております。」

そう言う佐藤と鈴木の後ろにはブルー生徒達を追い出すためと思われる
数々のゴツイ重装の機械があった。
さらにその近くには、スーツ姿の見慣れない1人の老人がいた。

「？千世、あのジィさん知り合いか？」
「えぇ。執事のセバスチャンよ。」
「私は田中でございます。」

十代の疑問にそう答えた千世に、セバスチャン、もとい田中は緩やかにツッコむ。

「やっぱり、俺のデッキなんかじゃ……」

そんな中、遊夜の不利に気を落とす透。
やっぱり自分のデッキなんかダメなのか、そんな考えが浮かんでくる。

「何言ってんだよ、決闘はまだまだこれからだぜ！」

落ち込む透に十代はそう言いながら視線を決闘場の遊夜へと向けた。

「遊や……」
「遊夜！！」

そして声援を送ろうとしたが、その十代の声援よりも早く声を上げた女がいた。
文乃である。

「アンタそのデッキで勝つって言ったんでしょ！！
男なら約束ぐらい果たしなさいよ！！でなきゃ2回死ね！！！！」
「こらー！！」

その文乃の声援に千世が声を荒げた。

「何でアンタがこのあたしよりも先に声援を送るなんてどういうつもりよ！！」
「べ、別に私はアイツを応援した訳じゃないわよ！
た、ただ、男なら約束ぐらい果たせって、活を入れてやったのよ！」

千世の言葉にムキになって言い返す文乃だが
顔を赤くしていたので全く説得力がない。
翔達も、だいぶ文乃の性格が分かって来たのか微笑ましく見守っていた。

「にゃあ！遊夜がんばれー！！」
「「希ー！！」」

そして、やっぱりと言うか何と言うか、
希もちゃっかり声援を送っていたりするのであった。

「文乃さん……皆……」

そんな騒がしい声援の中、遊夜はほほ笑むと視線を取巻に戻す。

「まだまだ、決闘はこれからだ！！」

そう言い放つ悠や遊夜だったが、

一方の取巻にはその遊夜の声は聞こえていなかった。

なぜなら、この時　取巻の意識は心の中に行っていたのである。

「（ぐぬぬぬぬ～、文乃さぁ～ん！！！！なぜこんなレッド（クズ）生徒を庇う奴なんかを！！！

白鋼　遊夜！絶対に倒してやるうぅぅぅっ！！！）」

「行くぜ、俺のターン！！」

取巻がそんな怒りに燃えているとは知らず、遊夜はカードを引く。

すると、その引いたカードを見た瞬間　遊夜は『これは！？』と目を丸くした。

それと同時に、この状況を打開する策を思いついた。

「俺は『アショカ・ピラー』を守備表示で召喚！！」

アショカ・ピラー　☆３　地　岩石族　ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／２００

遊夜の場に、鉄製の巨大な柱が現れた。

それは、別名をデリーの鉄柱と呼ぶ、

インド・デリー市郊外の世界遺産クトゥブ・ミナール内にある錆び

ない鉄柱の事。
９９．７２％という高純度鉄で作られており、
表面にはサンスクリット語の碑文が刻まれている。
直径は約４４ｃｍ、高さは約７ｍ、地下に埋もれている部分は約２ｍ、重さは約１０トン。
現在はデリー南部郊外メヘラウリー村のイスラム教礼拝所や
その他の種類の歴史的建造物が集まったクトゥブ・コンプレックス内にあり、
インド有数の観光スポットになっている。
紀元４１５年に建てられたといわれる、オーパーツの一種である。

「ふん、何かと思えば、守備力がデカイだけの木偶の坊か。」

アショカ・ピラーの出現に対し、取巻はそう言い笑い飛ばす。
取巻は知っていたのだ、このモンスターの効果を。
アショカ・ピラーは、確かに守備力こそ高いが
その身が朽ちる時、プレイヤーに２０００Ｐのダメージを与えるのである。
まるで、錆びない鉄柱が崩れ、その様を見た者達に悲しみを与えるかの様に。
そんな取巻の言葉など気にせず、遊夜は手札に手を伸ばす。

「さらに手札から装備魔法『ストーンヘンジ』を発動！
自分の墓地から攻撃力０のモンスター１体を特殊召喚し、このカードを装備する！！
俺は墓地から『水晶ドクロ』を特殊召喚し、装備する！！」

遊夜の発動したカードにより、場にストーンサークルが出現した。
それは、のイギリス南部・ソールズベリーから北西に１３ｋｍ程に位置する

環状列石（ストーンサークル）であり、世界で最も有名な先史時代の遺跡である。
その中央には、墓地から蘇った水晶ドクロが怪しく光り
まるでストーンヘンジが、水晶ドクロを祝福している様だった。

水晶ドクロ　☆１　水　岩石族　ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／０

「ははははは！何を出すかと思えば『水晶ドクロ』を復活させるだと？
これで貴様は『水晶ドクロ』の効果（呪い）ダメージを受ける事になるんだぞ！！」

遊夜が水晶ドクロを呼びだした事に大使そう言い笑い飛ばす取巻。
事実、取巻の言葉と同時に水晶ドクロが輝きだし、
その光が遊夜に襲い掛かった。

「くっ！」

遊夜：ＬＰ／２０００⇒１０００

「ははははは！これでお前は次のターンで終わりだな！！」

遊夜のＬＰに勝利を確信する取巻。
自分の場に存在するスカル・フレイムには
自分のドローフェイズ時に通常のドローを行う代わりに、
自分の墓地に存在するバーニング・スカルヘッドを
１体を手札に加える効果があるのだ。

この効果とバーニング・スカルヘッドを特殊召喚する効果を使えば
次のターンで勝負が決まる。
取巻はそう確信した。

「どうかな？」
「なに？」

そんな取巻に対し、遊夜は不敵にほほ笑むと手札の1枚に手を伸ばす。

「俺は手札から速攻魔法『呪いの怨念』を発動！
モンスター効果によってダメージを受けた時、
相手フィールド上モンスター1体を破壊する！！
俺は『スカル・フレイム』を破壊する！！」
「何だと！！？」

遊夜の発動したカードより現れた薄紫色のオーラが遊夜を包み込み
そこからオーラが髑髏の形になると
そのままスカル・フレイムへと襲い掛かり、
オーラの中でスカル・フレイムは消滅していった。

「お、俺の『スカル・フレイム』があぁっ！」
「俺はさらにカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

「いよっしゃ！これでアイツのコンボは崩れたぜ！！！」

遊夜の優勢に声を上げる十代。

「『スカル・フレイム』が場から消えた今、
『バーニング・スカルヘッド』を回収（サルベージ）する事も
特殊召喚する事も出来なくなったんだなぁ。」

「まだ行けるっすよ！遊夜くん！！」

十代に続き、隼人、翔も声を上げる中、その隣で透は目を丸くしていた。

「どうして……」

どうしてあのデッキでここまで戦える？
どうしてそこまでしてくれる？
どうしてあんなに必死で自分のデッキで戦ってくれる？
どうして、そこまで他人のデッキを信じれる？

「どうして……」

「遊夜だからよ。」

そんな透の疑問に答えたのは、いつの間にやらやって来た乙女だった。

「乙女先生！」

「ふふふ、聞いたわよ。遊夜が使ってるデッキ、君の何でしょ？」

乙女の言葉に透はコクリと頷く。
それに対し乙女は笑顔を向け口を開いた。

「なら、君がそんな顔してちゃダメよ。」

「え？」
「遊夜は君のデッキが弱くない事を証明する為に決闘してるのに君がそんな顔してちゃダメよ。」
そう言い透に微笑みかける乙女。
乙女の笑顔は、まるで天使の様に明るく、女神の様に神々しいかった。
だが、それでも透にはたった1つ、分からない事があった。
「……どうして……」
「ん？」
「遊夜くんは、どうしてそこまでしてくれるんですか？
俺の…オシリスレッドなんかの俺の為に！」
透はこの学園のレッド生徒になってからというものブルー生徒にバカにされ、
酷い時にはカードまでも奪われるレッド生徒達を数多く見てきた。
今回の事だって、この学園ではありふれたことだったのだろう。
そうどこかで諦めていた。
だけど、遊夜は違った。
こんな自分の為に決闘をしてくれている。
何故なのか。
今までのブルー生徒達の態度から透はそれを理解する事ができなかった。
「ふふ、そんなのは簡単よ。」
「え？？」
乙女の言葉に首を傾げる透に、乙女は笑顔で言い放った。

「あの子が私の自慢の弟、遊夜だからよ。」

何の根拠もない答えだった。
だけど乙女の笑顔を見た時、透はこれと同じものを感じた事を思い出した。
それはこの決闘の時、水晶ドクロと呪詛返しのヒトガタによるコンボをした際
遊夜が自分に向けてくれた優しい視線。
それと同じものを感じた。
たったそれだけ、それだけの事だけど、透はただそれだけで安心感を感じた。
そして同時に信じる事にした。
遊夜を、自分の作ったデッキを。

「くそぉぉっ！俺のターン！！」

ハッキリ言って、この時　取巻は追い詰められていた。
次の自分のターンで決着がつくと思っていたが、
そのコンボ事態を遊夜の捨て身ともいえるコンボにより破壊されてしまった。
しかも手札にあるのは速攻魔法カード、異次元からの埋葬のみ。
ゲームから除外されているモンスターカードを3枚まで選択し、
そのカードを墓地に戻すカードだが
自分のカードに除外されているカードはない為、このカードは使え

ない
つまり、このドローに全てを掛けるしかない状況なのだ。

「（負けてたまるか、あんなクズデッキに……文乃さんの前で！！）
ドローカード！！！」

そして全ての思いを込めて取巻はカードを引いた。
そのカードは……

「（よし、まだ何とかなる！）魔法（マジック）カード『スペクタードロー』を発動！
自分の場のアンデット族モンスター1体をゲームから除外する事でデッキからカードを2枚ドローできる！！
俺は『バーニング・スカルヘッド』を除外し、デッキからカードを2枚ドロー！！」

取巻の発動したカードにより、バーニング・スカルヘッドはフィールドから姿を消し
取巻はデッキからカードを2枚　引いた。
そして引いた2枚のカードを確認した時、取巻はこれまでに無いくらいほほ笑んだ。

「ふはははははははは！どうやら勝負あったようだな！！
やっぱり最後に勝負を決めるのはカードの良さなんだよ！！
俺は墓地に眠る『スカル・フレイム』をゲームから除外し、
手札からこのモンスターを特殊召喚する！！」

そう言い取巻は、墓地からスカル・フレイムを取り出しポケットに仕舞いこむと
先程　引いたカードの1枚を高々しく掲げる。

「これが俺のエースだぜ！
いざカモーン！！『スピード・キング☆スカル・フレイム』！！！
！」

スピード・キング☆スカル・フレイム
☆１０　風　アンデット族　ＡＴＫ／２６００　ＤＥＦ／２０００

取巻の場に、巨大な炎が現れたかと思うと、
そこからスカル・フレイムの上半身を持ち、下半身が鎧を着込んだ騎馬の
ケンタウロスの様なモンスターが現れた。
これこそ、取巻のエースにしてデュエルモンスターズ史上、
初にして唯一、名前に『☆』のあるモンスターだった。

「やれ！『スピード・キング☆スカル・フレイム』！！
“スピィーティング・フレイム”！！その木偶の坊を蹴散らせ！！」

そしてそのまま取巻は、スピード・キング☆スカル・フレイムに攻撃を指示。
スピード・キング☆スカル・フレイムは口内から炎を吹き出し、
その炎がアショカ・ピラーへと迫る。

「伏せカードオープン！永続罠（リバース　えいぞくトラップ）『トーテムポール』！！」

それに対し遊夜は場に伏せていたカードを発動させた。
そこから出てきたのは、北アメリカ大陸の太平洋に面した
北西沿岸部に住む先住民の多くが、彼らの家の中、家の前、

あるいは墓地などに立ててきた、柱状の木の彫刻だった。
その外見は、羽根の生えた顔を上にいくつも重ねた様なものであり、
一説では、これは部族に伝わる霊鳥、
サンダー・バードを意味しているとも言われている。
その彫刻の中の顔の１つが飛び出ると、
スピード・キング☆スカル・フレイムが放った炎を防ぎ
それと同時にトーテムポールは１段分、低くなった。

「『トーテムポール』は相手モンスターの攻撃を３回まで無効にできる！！」
「ちっ！なら俺は手札から速攻魔法カード『異次元からの埋葬』を発動！
ゲームから除外されたモンスターを３体まで選択し、
選択したモンスターを墓地に戻す！
俺は『スカル・フレイム』と『バーニング・スカルヘッド』を墓地に戻す！！」

取巻は発動した魔法カードにより、
除外されていた２体のモンスターを墓地に戻した。

「そして『スピード・キング☆スカル・フレイム』の効果発動！
墓地に存在する『バーニング・スカルヘッド』１体に付き
４００Ｐのダメージを与える！！
俺の墓地には『異次元からの埋葬』により墓地に戻した奴を含めて２体！
よって８００Ｐのダメージだ！！“スカル・ボンバート”！！」

取巻の宣言と共に、スピード・キング☆スカル・フレイムの周りに
２体のバーニング・スカルヘッドが現れ、そのまま遊夜へと襲い掛かった。

「くうぅぅっ！」

遊夜：ＬＰ／１０００⇒２００

「そして俺はカードを1枚伏せ、ターンエンドだ！！」

「すっげえぇぇっ！アイツあんなすげぇカード持ってたのかよ！」
「アニキ！そんな事言ってる場合っすか！！？」

取巻の出すスカル・フレイム系カードに目を輝かす十代に
翔はツッコミを入れる。

「まずいんだなぁ。
『スピード・キング☆スカル・フレイム』には攻撃を封じられても
墓地の『バーニング・スカルヘッド』の数だけダメージを与える
バーン効果があるんだなぁ。」
「それだけじゃないわ。フィールド上から墓地に送られたら
墓地から『スカル・フレイム』を呼び戻す蘇生効果もある。」

その横で隼人と文乃が
冷静にスピード・キング☆スカル・フレイムの効果を分析していた。

「にゃあ、『スピード・キング☆スカル・フレイム』の攻撃、

バーンダメージ、蘇生効果、どれをとっても危ない。」

希の言葉は正しい。
スピード・キング☆スカル・フレイムの攻撃を受けても負け、
バーン効果によるダメージを受けても負け。
仮にスピード・キング☆スカル・フレイムを撃退しても
墓地から『スカル・フレイム』を復活させられ、
その攻撃、或いは効果によるバーンダメージを食らっても負け。
ハッキリ言って、このターンで何とかしなければ遊夜に勝ちはない。

「だが、そんな状況でも諦めず、最後には勝つ。それが遊夜だ。」

だが大吾郎は、それでも遊夜が勝つと信じて疑わなかった。
それは、中学時代に遊夜と過ごした友情故の信頼だ。
そして、その隣にいる透もまた、先程の乙女の言葉により
遊夜を信じていた。

「……遊夜さん！」

その目は真剣そのものであり、彼は遊夜を、自分のデッキを信じていた。

さてそんな中で、遊夜は目の前にいるスピード・キング☆スカル・フレイムに対し
1つの疑問を浮かべていた。

「（……『スピード・キング☆スカル・フレイム』……このカードまさか……）」

「どうした？今さら自分の愚かさに気付いたのか？」

そんな遊夜に対し、取巻は見下したような表情で言い放つ。

「どんなにがんばろうと所詮クズカードはクズカード。
エリートによって選ばれしカードには勝てねぇんだよ！」

そう言いながら取巻は、自身の場に視線をやる。
場のスピード・キング☆スカル・フレイムは、
攻撃、バーン、蘇生と３つの面において遊夜の場のカードを圧倒している。
さらに場に伏せられた２枚のカード。
１枚は、召喚・反転召喚・特殊召喚された攻撃力１５００以上のモンスターを破壊し
ゲームから除外する、奈落の落とし穴。
もう１枚は、相手が攻撃してきた時、攻撃を無効にし
その攻撃モンスター１体の攻撃力分のダメージを相手に与える、魔法の筒（マジック・シリンダー）だった。

「（俺の場は完璧だ！死角など無い！）さぁどうする？
土下座でもすれば降参（サレンダー）を許してやってもいいぞ？」

「……お前に、１つだけ聞いておきたい事がある。」

見下した態度の取巻に対し、遊夜は静かに言い放った。

「お前、その『スピード・キング☆スカル・フレイム』、どこで手に入れた？」

「は？」

遊夜の言葉に、どこかあんぐりと驚いた表情となる取巻。

「べ、別にどこでも良いだろ！！」

「……そうか。」

慌てる取巻に対し、遊夜はそれだけ言うとデッキに手を伸ばす。

「俺のターン！ドロー！！」

「っ！！？まだ諦めないつもりか！？」

遊夜のドロー宣言に驚く取巻。

それに対し遊夜は、自分の引いたカードを確認し、そっとほほ笑んだ。

「来たか。」

「っ！？？」

「俺は手札から魔法カード『ピリレイスの地図（ちず）』を発動！」

遊夜がカードを発動すると同時に、遊夜の場に巨大な地図が現れた。

それは通称、ピーリー・レイースの地図とも呼ばれ

オスマン帝国の海軍軍人ピーリー・レイースが作成した

現存する２つの世界地図の内、１５１３年に描かれた地図の事だ。

それには当時　知られていた最新の地理知識を使ったと考えられる

航海地図で、

クリストファー・コロンブスがアメリカ大陸を発見し、

アメリゴ・ヴェスプッチが南アメリカを調査してから

間もない時期に描かれているにもかかわらず、

アメリカ大陸を非常に詳細に描いており、

コロンブスやヴェスプッチの原図が失われた現在では、

アメリカ大陸を描いた史上最古の地図と言われているのだ。

「このカードはデッキから攻撃力０のモンスターを１体　手札に加える事ができる！
俺はデッキからこのモンスターを手札に加え、召喚！
来い、『カブレラストーン』！！」

カブレラストーン　☆１　地　岩石族　ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／０

遊夜の場に、恐竜の描かれた黒い石が現れた。
それは、別名、イカ（Ｉｃａ）の石とも呼ばれる
南米ペルーの内科医ハビエル・カブレラが所有する
１万５０００点以上にわたる彫刻石のコレクションのことを示す。
石の中には恐竜と人間が共存するかのような絵も存在する事から
恐竜土偶の１つとされるオーパーツである。
そして、カブレラストーンから振動の様なものが察せられ、遊夜に
襲い掛かった。

遊夜：ＬＰ／２００⇒１００

「ははははは！テメェはバカか！！？
『ピリレイスの地図』の効果で手札に加えたモンスターを召喚した場合
プレイヤーのＬＰは半分となる！
しかも召喚したのは『カブレラストーン』だと？
そいつは守備表示になると破壊される上に

破壊されたら１０００Ｐのダメージを食らう最低のモンスターだぞ！？
そんなカードを出す事に何の意味がある！！？」
そう言い笑い飛ばす取巻に対し、遊夜は静かに口を開いて言い放つ。
「勝つ為だ。」
そう言い遊夜は自身の場に視線を向ける。
ストーンヘンジの中央で輝く水晶ドクロ、場の中央に立つアショカ・ピラー、
後方に立つトーテムポール、場にて黒く輝くカブレラストーン、
中に浮かぶ巨大なピリレイスの地図。
どこの博物館に行っても決して見れない、究極のオーパーツ店になっていた。
「俺の場に、『水晶ドクロ』『アショカ・ピラー』『カブレラ・ストーン』が
存在する時、このカードを発動する事ができる！」
そう言い遊夜は最後の手札を高々に掲げる。
それは、１枚の魔法カードだった。
これこそ、このオーパーツデッキにおける究極のカード。
「発動せよ！『トライアングル－Ｏ（オー）』！！！！！」
遊夜の発動した魔法カードにより、遊夜の場から青白く輝く巨大な
三角形が現れ
フィールド全体を包み込んで行く。

「な、何だ!?俺のフィールドにまで!!??」

その出来事に驚く取巻。
そしてすぐに変化が起こった。
三角形に包み込まれたフィールド上のカード、
その全てにヒビが入り始めたのである。

「な、何だ、何が起こってるんだ!!?」
「これが『トライアングル－O』の力だ!!」

驚く取巻に遊夜は言い放つ。

「『トライアングル－O』は自分の場に
『水晶ドクロ』『アショカ・ピラー』『カブレラ・ストーン』が存在する時
フィールド上に存在するカードを全て破壊する!!!」

遊夜の言葉と同時に、フィールドに存在する全てのカードが崩壊していった。

「ぐうぅっ!バカめ!!『スピード・キング☆スカル・フレイム』の効果を忘れたか!
破壊されようとも、墓地から『スカル・フレイム』を……
いや、それ以前に『アショカ・ピラー』と『カブレラ・ストーン』を破壊するとは!
自滅を選んだか!!」
「いいや。残念だが『トライアングル－O』の効果には続きがある!」

取巻の言葉に対し、遊夜は言い放つ。

「このターン俺が受ける効果ダメージはすべて相手が受ける！！」
「なにいいいぃっ！！！！！？？？」

遊夜の言葉に驚く取巻だが、全てが遅かった。
気付いた時には、粉々に砕かれたカード達の残骸が
取巻の目の前にまで迫っていた。

「それがお前がバカにしたカード達の力だ！！」

「う、うわあああぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！」

取巻：ＬＰ／３０００⇒０

遊夜の言葉と同時に、取巻はカードの残骸達の中へと沈んで行った。

「いよっしゃ！遊夜が勝った！！」
「勝った……俺のデッキが……」

遊夜の勝利に十代と透は声を上げる。
特に透に至っては未だに信じられないと言った表情だが
それと同時に嬉しそうな表情でほほ笑んでいた。

「うむ、さすがだな。」

「すごいっす！本当にあのデッキで勝っちゃった！」
「流石というか何と言うかなんだなぁ。」
「うんうん！さすが遊夜、私の弟～♪」
「にゃあ、遊夜がんばった♪」
「いよっしゃぁ、やったぜ遊っち！！」
「それでこそ私の遊夜よ！」
「ちょっと！いつからアンタの遊夜になったのよ！！！」

それに続き遊夜の勝利にそれぞれが声を上げる。

「う、ウソだろ……」
「あんな…クズカードに……？」

その一方、ブルー生徒達は未だに信じられないと言った表情で唖然としていた。

そしてそれは、取巻も同じことだった。

「ば、バカな……俺が……この俺が……あんな、クズカード共に……」
「クズなんて居ない。」

唖然となる取巻に対し、遊夜は静かにそう言い放つ。

「どんなカードだって集めたカード達（仲間達）によって力を発揮する事ができる。

それが分からない様なら、お前に決闘者を名乗る権利はない。」

そう言い遊夜は取巻の決闘盤にセットされたデッキに手を伸ばすと
無理やり引き抜き、カードを漁り始める。

「て、テメェ何を……」

驚く取巻を無視し、遊夜は探していたカード
スピード・キング☆スカル・フレイムを見つけ出す。

「……これ、コピーカードだな？」
「いっ！！？（ギクッ！）」

遊夜の言葉に、取巻は図星を疲れたようにビクつく。

「な、何を言ってるんだ？」
「『スピード・キング☆スカル・フレイム』は
デュエルモンスターズ史上初の風属性のアンデット族である事に加え
初にして唯一、名前に『☆』のあるモンスターだ。
それ故に手に入れようとするコレクターも多い。」

そう言いながら遊夜はデッキと決闘盤にセットされた
計3枚のスピード・キング☆スカル・フレイムを取り出す。

「それをどうやって3枚も集めたんだ？」
「そ、それは……」

遊夜の言葉に対し何も言えない取巻。

「それに俺はペガサス会長からコピーカードを見極める技法を学ん

でいる。
これがコピーカードって事ぐらい分かる。」
そう言い遊夜はスピード・キング☆スカル・フレイムを手にその場を去ろうとする。
「お、おい、俺のカードをどうするつもりだ!?」
「ペガサス会長に検査してもらうのさ。
それでコピーカードじゃなかったら、いくらでも謝罪をしてやる。」
そう言い遊夜は決闘場から去ろうとする。
だが、不意に立ち止まると、持前の運動神経で跳び上がり観客席にいる透のいる所へと向かう。
「遊夜!やったな!!」
「さすがね!!」
遊夜がやって来ると皆が歓声と共にやって来た。
「うんうん、遊夜さすがだね〜。」
「にゃあ。遊夜バンザ〜イ。」
「ふん、男なら当然よ。」
「あははは、ありがと。」
歓声を送ってくれる中で、遊夜は透の元へと向かった。
「遊夜さん…」
「ほら。」
どこか泣きたそうな透に遊夜はデッキを返却する。

「分かったろ?どんなカードだってデッキ(仲間達)との結束によって強くなれるんだ。
だかれ頑張れよ。」

そう言い透の肩にポンと手をやる遊夜。
その遊夜の言葉に、透はただただ、嬉しさで涙を流すのだった。

その後、ペガサス会長の検査により、
取巻のスピード・キング☆スカル・フレイムがコピーカードであった事が判明。
どうやらスカル・フレイムデッキのエースとして欲しかったのだが手に入らなかった故にコピーしたらしい。
この事実により、取巻は謹慎処分を受ける事となった。

そして、この日を境に、
透はレッド生徒の中でも指折りの実力者へと成長していくのだがそれはまた別のお話である。

『〜第十七章〜　ＶＳ取巻!!オーパーツデッキの奇跡!!　《終》』

～第十七章～　ＶＳ取巻！！オーパーツデッキの奇跡！！（後書き）

どうも、黒鋼です。
今回は原作にはないオリジナル展開のお話です。
今回の話を作った理由は２つ。
まず１つは取巻のような原作での決闘の無いキャラの決闘を書く為。
取巻の名前は慕谷達同様、ＮＤＳ版『スピリットサモナー』において設定されたもので
本名：取巻　太陽。
太陽と言う事で炎系のデッキを思いつき、
そこから自分結構気に入ってるのでスカル・フレイムデッキにしてみました。
そしてもう１つは、オーパーツデッキを使いたかったからです。
遊戯王５Ｄ'ｓで見てからこれも結構気に入ったのでやってみたかったんです。
その結果、今回の様な話が完成いたしました。
今後も、取巻を始めとした準レギュラー的なキャラの
決闘を書いて行くつもりですのでよろしくお願いします。

今回の最強カード『トライアングル一Ｏ（オー）』
通常魔法カード
自分フィールド上に『水晶ドクロ』『アショカ・ピラー』『カブレラ・ストーン』が
表側表示で存在する時のみ発動する事ができる。
フィールド上に存在するカードを全て破壊する。
このターン自分がカードの効果によってダメージを受ける場合、
代わりに相手がその効果ダメージを受ける。

今回の最強カード、初の魔法カード。
サポートが豊富で、相手のみ全部破壊する
『おジャマ・デルタハリケーン!!』に比べるとやや劣る気もするが
破壊だけでなくダメージを与えると言う点では勝っている。
オーパーツの呪いとは恐ろしいものである。

～第十八章～　ＶＳ神楽坂！伝説の遊戯デッキ！！

「へぇ～、その小原って、そんなに強いの？」
「あぁ。今度はちゃんと決闘してぇなぁ。」

１年目前期も後半に入り早数週間たったある日のデュエルアカデミアの廊下。
実家の都合でペガサスの元へ行っていた遊夜は
十代からここ数日の出来事を聞いていた。

まずは先週の出来事だ。
十代は翔、隼人、大吾郎と共に、噂の闇の巨人決闘者を
クロノスの命で探索に出かけていたのだ。
闇の巨人決闘者は、高慢なブルー生徒を中心に狙い、
闇夜でのアンティルール決闘を挑んでくるのである。
ブルー生徒ばかりが狙われ敗北しては面目丸つぶれと考えたクロノスは
以前の立ち入り禁止区域に入ったペナルティ、
決闘戦略についてのレポート３０枚を免除する代わりに十代達に
闇の巨人決闘者　討伐を依頼したのである。
クロノスにとっては、万が一　十代達が敗れても
レッド生徒なのでどうとでもなると思っていたらしい。
そして十代は闇の巨人決闘者、
ラー・イエローの“小原（こはら）　洋司（ようじ）”と“大原（おおはら）　進（すすむ）”と遭遇する。
小原は小柄な外見だが、かなりの実力を持ちながらも、
気が弱い為度々プレッシャーに負け連敗。
その度にバカにするブルー生徒に報復する為に
親友である大原が闇の巨人決闘者を演じて、小原が裏で指示をしていたのだ。

それが闇の巨人決闘者の正体であり、決闘の末に2人を倒した十代は2人を見逃し、
2人は翌朝、ブルー生徒達から奪ったカードを返却したそうな。
……最も、これにより十代達はレポートを提出する羽目になったのだが。

「俺もその小原と決闘してみたいな。」
「今度　誘ってみようぜ。あ、それとさドローパン事件ってのもあったぜ。」

そう言いながら話を続ける十代。

ドローパン。
それはコロッケ、焼きそば、ピザなどが具として挟んであるパンが紙袋に包まれ、
買うまで何が当たるかわからない、デュエルアカデミア購買部の名物パン。
その中には、デュエルアカデミアで飼われている黄金の鶏が1日に1度しか生まないと言う『黄金の卵』を具に使った『黄金の卵パン』が存在する。
そのパン欲しさにドローパンに挑戦する者は後を絶たないのだ。
そんなドローパンの、黄金の卵パンだけが何者かに盗まれる事件が発生したのだ。
犯人は、数年前　行方不明になっていたブルー生徒、“大山（たいざん）　平（たいら）”だった。
大山は筆記においては優秀だったが、
実戦ではいつもここぞという所で引きが悪く連敗。
そこで自然の中でドローの修行を行い、その修業成果の為にドローパンの中から正確に黄金の卵パンを盗み出していたのである。

「それで、どうして十代と決闘する事になったんだ？」
「決まってんじゃん。
俺とアイツ、どっちのドローが凄いか勝負したかったからさ！」

遊夜の質問に対し、当然と言わんばかりに言い放つ十代。
事実、大山が泥棒するまで十代は黄金の卵パンを２０回連続で引き当てていたのだ。
それを阻止された事もあるが、
それ以上に自分並にドローの強い輩と戦ってみたいと思うのは十代らしいと言えばらしい答えではあった。

「それで、その大山はどうなったんだ？」
「それがさぁ～、一緒にドローパン食べようとしたんだけど黄金の卵パン、明日香に先越されちゃってさ。
それでアイツ、また山籠り始めちゃったんだ。」
「あはははは、よっぽど悔しかったんだな……ん？」

互いにほほ笑みながら歩いていた十代と遊夜だったが
不意に遊夜の視線が前方の購買部の人だかりに向けられた時
２人の会話は終了した。

「なんだ？」
「行ってみようぜ！」

その人だかりが気になった２人は、人だかりの中へとはいって行った。

「あ、三沢。」

その時、前方に三沢の姿を捉え声を掛ける遊夜。

「何かあったのか？」
「あれさ。」
そう言い三沢の視線を追う2人。
そこには逆立った髪方に、緑色のスカーフを巻いた1人のイエロー生徒が
決闘盤（デュエル・ディスク）を開いて決闘を行っていた。
「誰だ、アイツ？」
「神楽坂（かぐらざか）、ラー・イエローの生徒だ。」
「見りゃわかるよ、そんな事。」
「問題は、その神楽坂が何をしてるか何だが……って、あれ翔？」
遊夜が神楽坂の対戦相手に視線を向けると、それは十代の弟分たる翔だった。
「どうしたんだ、翔？」
「何かあったの？」
十代と遊夜は翔の前に出て行き事の説明を求める。
「どうもこうもないっすよ、アレアレ。」
翔の指差す方向に2人が視線を向けると、その先には数枚のポスターがあり、
そこにはデュエルキング武藤遊戯の全身写真と共にこう書いてあった。
「デュエルアカデミアにて初代デュエルキング、武藤遊戯のデッキ

特別展示？」
「あぁ、ペガサス会長の言ってたやつか。」
そのポスターの内容に『ポカーン』となる十代と
先日ペガサス会長が言っていた事を思い出す遊夜。
「てことはあの遊戯さんが使ってたデッキがこの島に来るのか……
うわぁぁぁ。」
そう、明日はこのデュエルアカデミアに
武藤遊戯が使っていたデッキが来る日なのだ。
それを今、初めて知った十代は顔をほころばせると
そのまま心ここにあらずといった風になってしまったのだ。
「おおい、アニキ。大丈夫っすか？アニキー？」
翔が十代の目の前で手を振るが全くの反応がない。
「感動のあまり放心したみただね。」
そんな十代の様子に遊夜は苦笑をもらすのであった。
「神のカードは入っていないらしいけど
『ブラック・マジシャン』や『ブラック・マジシャン・ガール』
他にもお宝カード満載の激レアデッキ！絶対見なきゃ損だよ！！」
「それはわかったけど、この事態と何の関係があるんだ？」
翔がそう説明している間に戻って来たのか十代が首を傾げつつ、
この現状を翔に問いただした。

「購買部で朝一番で見られる整理券を配ってたんだけどさぁ、最後の1枚になって決闘で決着つけようってことになったのよ。」

この十代の疑問に答えたのはトメさんだった。

その手には最後の1枚であろう整理券が握られていた。

「ええっ!?無茶すんなって翔。」

弟分のあまりに無謀な行動に十代は翔をたしなめる。

だが次の瞬間、その行為が無駄な事だった事を十代は思い知る事となる。

「何言ってるんすかぁ。あの整理券はアニキの分ですよ。僕の分はホラ。」

そう言いつつ翔はポケットから1枚の整理券を取り出す。

それを見た十代は『なにぃ!?』と驚くと同時にいきなり翔の肩をつかむと『がんばれ翔!』励ましの言葉を翔に贈るのだった。

「決闘続行!」

十代から励ましの言葉を受け取った翔は、再び決闘盤を構え、神楽坂と対戦する。

それぞれの場には、翔の場には伏せカード1枚のみ。

片や神楽坂の場にも伏せカードが2枚あるのみと、互いに場にモンスターは無し。

互いのＬＰは翔が１１００、神楽坂が２０００だった。

「俺のターン！」

神楽坂からのターンで、決闘は再開された。

「魔法（マジック）カード、『大嵐』！場の全ての魔法、罠カードを破壊するのーネ！」

「「ん？」」

その神楽坂の言葉を聞いた十代と遊夜は表情を変えた。

「げっ、なんかデジャヴュが……」

「この口調に……この戦略はまさか……」

「そう、神楽坂のデッキはクロノス教諭のコピーデッキだ。」

2人の呟きに対し、三沢はそう言い放った。

そして、皆の目の前で翔と神楽坂の伏せカードは宙を舞い破壊されそれと同時に神楽坂の場にある2枚のカード、黄金の邪心像が破壊され、

神楽坂の場に邪心像トークン2体が出現した。

「2体のトークンを生け贄に――――――
『古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）』を召喚！」

古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）　☆８　地　機械族　ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／３０００

デッキと言葉遣いどころかポーズまで真似て神楽坂はクロノスの切り札モンスター、古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）を召喚したのだった。

「いけ！『古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）』！！」

神楽坂の古代の機械巨人の腕が翔に迫る。
翔の場にはカードが1枚も存在していない。
このまま攻撃すれば、神楽坂の勝ちになるはずだった。
だが、迷宮兄弟との決闘以来、
着々と決闘の腕を上げる翔の戦略はその上をいった。

「な！？」

トラックロイド　☆４　地　機械族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／２０００

神楽坂は目を疑った。
先程まで翔の場には何もなかった筈なのに、

いつの間にか翔の場にトラック型のモンスターが守備表示で場に出されていたのだ。

「残念だけど、君が『大嵐』で破壊したカードは『ワンダーガレージ』！！
セットされたこのカードが破壊され墓地へ送られた時、
手札からレベル４以下の『ロイド』と名のついた
機械族モンスター１体を特殊召喚する事ができる！！」
「くっ！ならそいつを攻撃だ！」

翔のカード効果に苛立ちながらも、
神楽坂は即座にトラックロイドの撃退にかかった。
そして、神楽坂の指示通り、
古代の機械巨人（アンティーク・ギア・ゴーレム）の拳がトラックロイドを一瞬で潰した。

「くっ！」

翔：ＬＰ／１１００⇒１００

「さらに俺は手札を１枚墓地に送り、
魔法カード『古代の採掘機（アンティーク・ギアドリル）』を発動するのーネ！
デッキから魔法カード１枚を選択し、自分フィールド上にセットするのーネ！」

そう言い神楽坂はデッキから選択した魔法カード、
リミッター解除（かいじょ）を見せそれを場にセットした。

「俺はこれで、ターンエンドなのーネ！」

「すげー、マジでクロノス先生みたいだぜ。」

十代は神楽坂の繰り出す戦略にただただ驚いていた。
まるで本当にクロノス教諭が決闘しているかの様に見えるのだ。

「あぁ。あんな事、そう簡単にできる事じゃない。」
「神楽坂は記憶力が良すぎて、
デッキを作ると必ず誰かと同じデッキに行きつくんだ。」

感心する遊夜にそう言う三沢。

「ただ、それが彼の弱点でもあるんだ。」
「え？どういう事だ？」
「成程な。デッキが似るって事は、そのデッキと同じ弱点があるってことだ。
そこを付かれればもろい。」

遊夜の言葉に、『そうだ』と静かに頷く三沢。

「ボクのターン！」

翔はカードを引き、自身の手札状況を確認する。

「（よし、これなら！）ボクは手札から魔法カード『パワー・ボンド』を発動！！」

それは、かつて翔が兄である亮から貰い、長らく封印していたカード。

迷宮兄弟との試練を乗り越え、今では完全にその力を使いこなしていた。

「手札の２体の『サイクロイド』を融合――――現れよ！『ペアサイクロイド』！！」

ペアサイクロイド　☆６　地　機械族　ＡＴＫ／１６００　ＤＥＦ／２０００

翔の手札の２体の自転車型モンスターが融合され、場に２人乗りの自転車型のモンスターが現れた。

「『パワー・ボンド』の効果によりその攻撃力は倍になる！」

ペアサイクロイド　ＡＴＫ／１６００⇒ＡＴＫ／３２００

「だがこちらには『リミッター解除』があるのーネ！」

それに対しても、神楽坂はクロノスの様な不敵な微笑みを崩さな

い。
だが、翔の顔には自信があふれていた。
「『ペアサイクロイド』の効果発動！
攻撃力を５００Ｐ下げる事で、直接攻撃（ダイレクト・アタック）できる！！
行け！『ペアサイクロイド』！！」
ペアサイクロイド　ＡＴＫ／３２００⇒ＡＴＫ／２７００
翔の攻撃宣言と共に、サイクロイドは攻撃力を下げると
ギア・ゴーレムの足元を通り過ぎ、神楽坂へと突進していった。
「な、何だと！？ぐあぁぁぁぁっ！！！」
神楽坂：ＬＰ／２０００⇒０
「やったー、僕の勝ち！」
「やったぜ翔！」
「ちゃくちゃくと実力を上げてるな。」
勝利に喜ぶ翔に、十代と遊夜が駆け寄る。
「へへ、アニキと遊夜くんとの決闘の事　覚えててさ。
それに決闘はモンスターを倒すんじゃなく、ＬＰを０にすれば勝てるから。」
それは、以前の迷宮兄弟との決闘の際に翔が学んだことであった。

「これは僕が貰うよ。悪く思わないでね。」

そして、翔は最後の整理券を手にすると、十代達と共に購買部を去って行く。

それと同時に、トメさんが『さぁさぁ皆、これでおしまい。帰った帰った』

とお開きの言葉と共に、ギャラリーは去って行った。

その際、レッド生徒に負けた神楽坂を声には出さないが蔑み去っていく生徒達、

そしてその事に悔し涙を流す神楽坂の姿を、遊夜は去り際に見逃さなかった。

その日の夕方が沈み掛けた時刻のラー・イエロー寮の一室。

「くっそう!どうして、どうして勝てない!!」

その部屋の住人である神楽坂は、昼間の一件にイラ付き、

自分が整理した有名決闘者の資料に当り散らしていた。

「武藤遊戯、海馬瀬人、カイザー亮、そしてクロノス。

名立たる決闘者のデッキは全て研究した!対戦記録も全部暗記した!!

なのにどうして勝てないんだ!!一体　何が違うんだ!!!??」

そう悔しそうに拳を握る神楽坂の目の前に1枚のチラシが落ちてきた。

それは武藤遊戯のデッキ特別展示のチラシだった。
それを見た時、神楽坂の眼の色が変わった。

「何が違うのか、この目で確かめてやる！」

そう言い放った神楽坂の、どす黒くも決意に溢れていた瞳を知る者は
当の本人すら気づいていなかった。

一方、こちらオベリスク・ブルー男子寮前。
人の目を避ける様に、窓から外へ飛び降りる1つの影があった。
遊夜である。

「ふぅ、脱出成功♪」

そう言いほほ笑みながら、遊夜は校舎へ向って歩き出す。
目的は、フライングしての武藤遊戯のデッキ見である。

「（武藤遊戯のデッキの特別展示が開くのは、朝の9時。
それならこの時間には既に準備は終わってるはずだ。今から見に行けば……）」
「とか考えてるんでしょ？」
「え？」

不意に背後からそんな言葉が聞こえ、遊夜は後ろを振り向く。
そこには、見知った人影が5つあった。

「アンタの事だから、こんな事だと思ったわよ。」

１つは、先程の言葉を発した張本人にしてツンデレ幼馴染、文乃。

「遊夜！そう言う事なら私も乗るわよ！」

「イエーイ！私も乗るＺＥ！！遊っち！！」

２つは、フランス人形のような愛らしい外見をした千世とハイテンションな女友達、叶絵。

「どうやら、アナタも私達と同じ事を考えていたようね。」

３つ目は、千世と同じ金髪ながら、正反対な体型をした、明日香。

「にゃあ。私も行く。」

そして最後は、青い髪に無表情をたたえた細身の少女、希だった。

「どうしたんだ、皆？」

皆が一同に集まっている事に首を傾げる遊夜。

「いや～、あたし達、ちょろっとフライングして決闘王のデッキを見に行こうと思ってＮＥ！」

その遊夜の問いに答えたのは叶絵だった。

「その途中で、遊夜様が窓から出て来る所を文乃様が発見なさいま

して。」
「気になって皆で見に来たと言う訳です。」
そして叶絵に続く様に、
何処からともなく現われた佐藤と鈴木が説明に補足をつける。
「成程。皆　考える事は一緒って訳か。」
その説明に、皆が自分と同じ事を考えていた事に納得を覚える遊夜。
「ま、そう言う事だＺＥ！」
「本来ならいけない事ではあるんだけど、私も待ちきれなくて……」
「にゃあ、私も行く。」
「ふふん。この私を差し置いて見に行こうなんて許さないんだからね！」
「べ、別に私は興味ないけど、アンタがどうしてもって言うなら……し、仕方なく何だからね！！」
遊夜の言葉にそれぞれの反応を示しながら、
皆は足取りをそろえて、校舎へと向かった。
「おっ。」
校舎への潜入に成功した遊夜達は、展示室へといたる道のりを走るが

展示室前になって自分達とは反対の道からいくつかのつの影を見つけた。

「十代。皆。」

それは、十代、翔、隼人、大吾郎のレッド組と家康、三沢のイエロー組だった。

「よぉ遊夜。それに明日香達も。」
「皆　来たんすね。」
「やっぱり、皆考える事は同じ何だなぁ。」
「うむ。やはり来ると思っていたぞ遊夜。」
「はは、やっぱり君達もフライングして来たか。」
「ま、当然と言えば当然だろ。」

遊夜達の存在に十代達は自分達と目的が同じである事を直感した。

「やっぱ皆、考える事は一緒だな。」
「おう！てな訳でお先ー！！」

そう言い十代は我先にと走り出した。

「おい十代！」
「こらー！私より先に行くなー！！」

その十代の行動に対し、遊夜と千世も後を追う様に走り出した。

「アニキー、走ってもデッキは逃げませんよー！」
「あーあ。ああなっちゃ遊夜も形無しだぜ。」

そんな様子を見てぼやく翔と家康（オタクコンビ）。
確かに、普段から子供っぽい十代や千世はともかく
遊夜までもが子供の様にはしゃいで走り出したのだ。

「にゃあ。でも、そんな所も遊夜らしい。」
「あのバカ。本当に決闘バカ何だから。」

だが、遊夜のデュエルモンスターズへの愛着を知る文乃と希は
希は微笑ましく、文乃は呆れた表情で見つめていた。

「あははは。それじゃ俺達も行こうか。」

三沢の言葉に皆が頷き、共に展示室へ行こうとしたその時。

「マンマミーアァァァッ！！！！」

不意に展示室の方から聞き覚えのある叫び声が聞こえたのだ。

「な、何だ！？」
「今の声って……」
「クロノス教諭だ！」
「行ってみよう！！」

声に反応し文乃達は走り出し、展示室へと入って行く。
そこには、割られた展示ケースとその前で腰を抜かすクロノス、
そして辺りを見渡す遊夜、十代、千世の姿だった。

「これは……！」
「一体、何があったんだ！？」
「いや、それが……」

三沢の言葉に遊夜が答え出す。
遊夜が言うには、十代達共に先程の叫び声に展示室に入ったらそこには腰を抜かしたクロノス教諭がいて事象を尋ねた所、クロノス教諭も一足早くキングのデッキを見ようとやって来たのだがそこにあったのは割られた展示ケースであり、すでにデッキは盗まれていたらしい。

「その間、あやしい人物などは見かけなかったらしいんだ。ですよね、クロノス先生。」
「そそそ、そうなノーネ！！少なくとも怪しい輩は見なかったノーネ！！」

遊夜の言葉に頷くクロノス。

「おい、これじゃねぇか！？」

そんな中、十代が何かを見つけたのか声を上げ、その言葉に反応した遊夜達が視線を向けると、そこにはハズされた通気口があった。

「あそこから入ったのか。」
「だったら、まだ近くにいるかも知れない。皆で探そう！」

その遊夜の言葉に全員が頷く。

「クロノス先生は校舎内をお願いします。」
「わ、分かったノーネ！セニュール達が頼りなノーネ！！」

こうして、決闘王（デュエル・キング）デッキの大捜索が始まるのだった。

校舎よりやや離れた崖の下の海辺。
そこに、1人の影が、戦利品を眺めていた。
ブラック・マジシャンにクリボー、そしてブラック・マジシャン・ガール。
そう、展示室から盗まれたデッキだった。

「すごい！こんな伝説のカードが……俺の手に！！」

そんな興奮する影の声を聞きとったかの様に、
影の後ろの方にここら一帯を捜索していた翔がやって来た。

「ああ！君！君がデッキを盗んだのか！！」

その翔の言葉にデッキを盗んだ影、神楽坂はゆっくりと翔の方を向く。

「お前か、丸藤　翔。ちょうどいい、俺は今このデッキを試したかった所なんだ。」

そう言いながら神楽坂は翔に向かって決闘盤を投げてよこす。

「デッキはもってるな？」
「当たり前だ！！」

翔はその決闘盤を腕にはめるとデッキをセットし決闘盤を起動さ

せる。
神楽坂も盗んだデッキをセットし決闘盤を起動したのだった。

「だめだ！」
「怪しい奴はいなかったぞ。」
「こっちも手がかり全くなしだったぜ！」

その頃、一時集合場所の鉄橋前で三沢、隼人、十代、遊夜がそれぞれ報告をしていた。

「こっちもダメだ。他の皆もまだみたいだし。」
「あれ？そういや翔は？」

とここで十代が、翔の不在に気付いたその時。

「うわぁぁぁぁぁぁっ！！」

不意に、今話題になろうとしていた翔の叫び声が響く。
その声に、４人は視線を向けた。

「あっちだ！」
「翔の担当区域なんだな！」
「急ごう！」
「待ってろよ、翔！」

４人は同時に駆け出し、橋を渡り、森へと入って行く。

「ん？」

その途中　遊夜は、森の中に明かりを見つける。
何かと思ったがその正体はすぐに分かった。

「家康！大吾郎！」

それは、この辺りを探索していた家康と大吾郎だった。

「遊夜！」
「先程、翔の叫び声が聞こえたのだが。まさか……」
「かもしれない！兎も角　行こう！」

遊夜の言葉に同意し、2人は皆と一緒に走りだした。
やがて6人は崖を降り、そこに倒れる翔を発見した。

「翔！」
「大丈夫か！？何があった！！」

倒れる翔に駆け寄る遊夜と十代。
すると翔は案外なんともなかったようで
体を起こすと自分の不甲斐ない姿にしょげ返っていた。

「アニキ、遊夜くん、悔しいよ……あいつが……」

そう言い翔の指さす方向には逃げもせずに未だ堂々と神楽坂が立っていた。

「神楽坂！？」

「お前が犯人か！！」

三沢と十代が声を上げる中、
遊夜が軽い身のこなしで岩場に立つと神楽坂に向かって口を開いた。

「デッキを今すぐに返すんだ。
そうすればクロノス先生も大事にしないと約束してくれてるぞ。」

「断る！」

遊夜の言葉に対し、神楽坂は一笑する。

「これこそ俺が求めていた最強のデッキだ！
俺なら…武藤遊戯の決闘を完全に研究してる俺なら！
彼の決闘を１００％再現できる！！
もう俺は誰にも負けない！クロノスだろうが、カイザーだろうが、
誰にもっ！！！」

そう堂々と言い放つ神楽坂。
その態度に、遊夜は神楽坂の表情を見てある事を感じ取った。

「（これは……強いカードを手に入れて、その力に慢心する典型的
なタイプだな。
こういう奴は一度　倒してやらないと、今後も慢心してしまう。）」
「≪ではやるのか、主よ。≫」

その狼（ウォルフ）の言葉に黙って頷いた遊夜は
そばに落ちていた決闘盤を手に装着する。

「（あぁ。協力してくれ。）」
「≪承知した。≫」

そう言いウォルフはデッキへと戻り、
それを確認した遊夜はデッキを決闘盤へとセットする。

「神楽坂、俺と決闘しないか？」
「お前、本当に俺に勝つ気でいるのか？」

その遊夜の言葉に神楽坂は鼻で笑った。

「何だ、負けるのが怖くて受けないのか？」
「ふん！そういうことは俺に勝ってから言うんだな！！」

そう言い神楽坂は、もはや語ることなしと決闘盤を起動させる。

「いくぞ！」
「見せてやる、キングの決闘を！！」

「「決闘！！！」」

遊夜：ＬＰ／４０００
神楽坂：ＬＰ／４０００

「先行は貰う！ドロー！！」

先行を取った遊夜は、手札の状況を確認し即座に自身の打つべき策を取る。

「俺は『蒼雷郷の鴉』を守備表示で召喚！」

蒼雷郷の鴉　☆４　風　雷族　ＡＴＫ／１１００　ＤＥＦ／１２００

遊夜の場に、全身が蒼白いカラスが現れる。

「さらにカードを1枚伏せ、ターンエンド！」

「俺のターン！ドロー！！」

遊夜のエンド宣言と共にカードを引いた神楽坂は何の迷いもなく手札から3枚のカードを選択する。

「俺は魔法カード『融合』を発動！
手札の『幻獣王ガゼル』と『バフォメット』を手札融合――――
いでよ！『有翼幻獣キマイラ』！！」

有翼幻獣キマイラ　☆６　風　獣族　ＡＴＫ／２１００　ＤＥＦ／１８００

神楽坂の手札にあった月夜に吠える幻獣の王と翼を持つ悪魔の2体が融合され、場に鳥の翼をもった双頭の獣が現れた。

「この手は……武藤　遊戯の序盤の定石……」

この神楽坂の迷いのないプレイングに、遊夜は軽く驚いてしまった。

そう、このプレイングは武藤　遊戯も行った戦法であり、その召喚率はかなり高い事で有名だ。

「いけ『キマイラ」！“幻獣衝撃粉砕（キマイラ・インパクト・ダッシュ）”！！」

そんな驚く遊夜を尻目に、神楽坂の命と共にキマイラが突進を仕掛けてきた。

その突進をまともに受けた鴉は消滅したが、この事は遊夜にとっては計算済みの事だった。

「『蒼雷郷の鴉』の特殊効果発動！このカードがバトルで破壊され墓地に送られた時、デッキから☆（レベル）４以下の『蒼雷郷』と名のつくモンスター１体を特殊召喚できる！来い！『蒼雷郷の狛犬（こまいぬ）』！！」

蒼雷郷の狛犬（こまいぬ）　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１０００　ＤＥＦ／２０００

遊夜の場に蒼白く光る狛犬が現れた。

「そういえば……」

ふと、決闘を見ていた隼人は何を思ったのか視線を翔へと向けた。
「翔、奴と闘ったんだろう？何か遊夜にアドバイスはないのか？」
その隼人の言葉に対し、翔はやや恥ずかしげに口を開いた。
「それが…僕、『キマイラ』だけでやられちゃったんで……」
その言葉に唖然となった隼人だが、その間の空気の重さに何か言おうとする。
「え、えぇと…大丈夫なんだなぁ。翔が1度勝てた相手なら遊夜にだって。
強いデッキには高いレベルのタクティクスが必要……」
「それはどうかな。」
だが、隼人の言葉に対し三沢が異を唱えた。
「神楽坂は記憶力が良すぎて、
自分が組んだデッキは無意識に誰かのデッキに似てしまう。
そこをつかれて、いつもは勝負に負けるが、
デッキを真似るって事は一瞬で他人のデッキの特徴を読み取るという事だ。」
そう言い三沢は額に一滴の汗を流しながら、
視線を決闘する神楽坂に向けた。
「デッキからそれを作った決闘者の人格まで読み取り、
そのタクティクスを再現する。」

「ああ、俺もそう思うぜ。」

三沢の言葉に十代は同意する様に頷く。

「あいつは翔に負けたとは言え
クロノス先生のデッキでクロノス先生の戦術を完璧に再現していたしな。」

十代のこの言葉に三沢は頷きながら言葉を続ける。

「今、あいつの持っているデッキが最強というのなら
今のあいつは無敵の決闘者ということだ。」

その言葉に翔達は神楽坂に武藤　遊戯の姿を見たような気がした。

そんな会話が飛ぶ中、遊夜は自身の手札に視線を向けつつ
神楽坂の戦略を読もうとしていた。

「（昔、ペガサス会長から貰ったＤＶＤによれば、
武藤　遊戯の戦略は確かにこの『有翼幻獣キマイラ』からのパターンが多い。
どうやら記憶力の良さは間違いないな。）」

そう言い遊夜は自身のデッキに手を伸ばす。

「（ならばその実力、どこまで本物か見極める！）俺のターン！ド

ロー！！
俺はチューナーモンスター『蒼雷郷の野猪』を召喚！」

蒼雷郷の野猪　☆２　光　雷族　ＡＴＫ／６００　ＤＥＦ／６００

遊夜の場に、蒼白く光るイノシシが現れる。

「☆４『蒼雷郷の狛犬』に☆２『蒼雷郷の野猪』をチューニング！！」

遊夜の宣言と共に、猪が緑色のリングとなり、狛犬もその身を４つの星に変える。
そして一直線に４つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天へ昇る刃となる。雷鳴と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の人斬り、『蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ』！！」

蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ　☆６　風　雷族　ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１９００

光が弾けその中から、蒼い和服に身を包み刀を二本持ち背にいくつもの武器を持った武者が姿を現す。

「いくぞ！『ライゾウ』で『キマイラ』を攻撃！“蒼雷乱曲斬”

！！」

遊夜の宣言と共に、ライゾウの背の幾つもの武器達がキマイラに襲い掛かり
そこへライゾウが２本の刀でキマイラ斬り裂いた。

「くっ！」

神楽坂：ＬＰ／４０００⇒３８００

「さらに！『ライゾウ』が戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手に６００Ｐのダメージを与える！！“蒼雷（そうらい）　波動（はどう）”！！」

遊夜の宣言と共に、
今度はライゾウの刀から放たれた電撃が神楽坂をめがけて放たれた。

「ぐおぉぉっ！」

神楽坂：ＬＰ／３８００⇒３２００

「そして『ライゾウ』は戦闘で相手モンスターを破壊する度に攻撃力を６００Ｐアップする！！」

蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ　ＡＴＫ／２３００⇒ＡＴＫ／２９００

「くっ！だがこの瞬間『キマイラ』の特殊効果発動！

このカードが破壊された時、墓地にあるバフォメットかガゼルを特殊召喚できる！
蘇れ、『バフォメット』！！！」

バフォメット　☆５　闇　悪魔族　ＡＴＫ／１４００　ＤＥＦ／１８００

キマイラを破壊し戦闘ダメージと効果ダメージを与えさらに攻撃力アップまでした遊夜だったが、神楽坂もただでは転ばず神楽坂の場にバフォメットが守備表示で現れた。
だがそれに対し、遊夜のフッとほほ笑んで見せた。

「そう来ると思っていた！この瞬間、罠（トラップ）発動！
『ライトニング・クラッシュ』！！
場の雷族モンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、相手フィールド上に表側表示で存在するカード１枚を破壊する！
俺は『バフォメット』を破壊！！」

遊夜の発動したカードにより、天より降り注ぐ稲妻がバフォメットに落ちる。
まるで神の裁きの雷が悪魔を裁く様に。

「ターンエンドだ！」
「俺のターン、ドロー！」

だが、自分の場のカードが全滅したと言うのに神楽坂は全くに気にもせずにカードを引く。

「手札から魔法カード『死者転生』を発動！
このカードは手札を1枚捨て、墓地のモンスター1体を手札に加える！
墓地より『幻獣王ガゼル』を手札に加え、召喚！！」

幻獣王ガゼル　☆4　地　獣族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１２００

神楽坂の場に、黒い鬣と白い一角のが特徴の獣が守備表示で現れた。

「さらに魔法カード『光の護封剣』を発動する！」

神楽坂の発動したカードにより、天より光の剣が降り注ぎ遊夜の場を被い囲む様に場に突き刺さった。

「これで貴様のモンスターは3ターンの間、攻撃できない！
俺はカードを1枚伏せてターンエンドだ！！」
「俺のターン、ドロー！」

神楽坂のエンド宣言と共に遊夜はカードを引き、即座に手札の状況を見る。

「『光の護封剣』……3ターンの攻撃を封じるカード。
厄介だが、俺にはそれを除去する手段がある！
俺は『蒼雷郷の弓術士』を召喚！」

蒼雷郷の弓術士（きゅうじゅつし）　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場に、和弓を携えた青い袴をはいた女性が現れた。

「このカードは手札の雷族モンスター１体をコストに魔法・罠カードを１枚破壊する！俺は手札から……」

「ふっ、お前がモンスターを召喚するのを待っていたぜ。」

「なに？」

遊夜の言葉を遮る様に言い放つ神楽坂の言葉に驚く遊夜を尻目に神楽坂は場に伏せていたカードを発動させる。

「罠発動！『黒魔族復活の棺（くろまぞくふっかつのひつぎ）』！！」

神楽坂が発動したカードにより、神楽坂の場に魔法陣の紋章の入った棺桶が現れた。

「このカードは相手がモンスターを召喚した時、そのモンスターの魂と自分のモンスターを引き換えに墓地にある魔法使い族１体を復活させる！！」

「魔法使い族？」

その神楽坂の言葉に首を傾げる遊夜。

何故なら、神楽坂の墓地には獣族のキマイラと悪魔族のバフォメットしか居ない筈なのだ。

魔法使い族などいる筈がない。

「『バフォメット』……『キマイラ』……『ガゼル』……はっ！

まさか、『死者転生』の時に！！」
「そう、『死者転生』の時コストとして墓地に送っていたのさ！
さぁ、『ガゼル』と『弓術士』の魂を生け贄に復活せよ！！」

神楽坂の言葉と共に、ガゼルと弓術士が棺桶に吸い込まれ
棺桶が光り出した瞬間、棺桶の戸がゆっくりと開く。

「いでよ！『ブラック・マジシャン』！！」

ブラック・マジシャン　☆7　闇　魔法使い族　ＡＴＫ／２５００
ＤＥＦ／２１００

神楽坂の言葉と共に、棺の中より紫色の衣服に身を包んだ
最上級の黒魔術師、そして武藤　遊戯のデッキの象徴が現れた。

「『ブラック・マジシャン』……武藤　遊戯の操る代名詞ともいえるカード……」

その威風堂々としたブラック・マジシャンの姿に
さすがの遊夜も戦慄を覚えた。

「（神楽坂……まさか、ここまで武藤　遊戯のデッキを使いこなすとは……
凄い技量と才能だ……）」

遊夜は心の中で神楽坂の才能を確信しつつ、己の手札に視線を向ける。
だが、その手札にブラック・マジシャンを破壊する術

もしくは光の護封剣を破壊する術を持つカードは無かった。

「俺はカードを1枚伏せ、ターンエンド。」

「俺のターン！ドロー！！」

遊夜のエンド宣言と共に、神楽坂はカードを引くと即座に決闘盤にセットした。

「魔法カード『黒魔術師の壺（くろまじゅつしのつぼ）』を発動！

自分の場に『ブラック・マジシャン』が存在する時

このターン、召喚を行わない代わりにデッキからカードを2枚ドローする！」

そして引いた2枚のカードを見た神楽坂は、

その中の1枚を何の躊躇もなく選び決闘盤にセットした。

「魔法カード『千本（サウザンド）ナイフ』発動！

このカードは自分の場に『ブラック・マジシャン』が存在する時、

相手モンスター1体を破壊する！！」

神楽坂の言葉と共に、ブラック・マジシャンの周囲に千本ものナイフが現れ

ブラック・マジシャンの指示の下、ナイフはライゾウへと襲い掛かった。

「『ライゾウ』！！」

「ふっははは、これで貴様の場にモンスターはいなくなった！

『ブラック・マジシャン』、直接攻撃（ダイレクトアタック）！“黒・魔・導（ブラック・マジック）”！！」

神楽坂の命の元、ブラック・マジシャンの杖に魔力が宿り

無防備な遊夜に容赦なく魔法を放つ。

「ぐわあぁぁっ！」

遊夜：ＬＰ／４０００⇒１５００

「くっくくく、貴様程度の決闘者が俺に勝とうなんて１０００年早いぜ。」

そう言い不敵に笑う神楽坂。
だが、遊夜もタダではやられなかった。

「罠発動！『ダメージ・コンデンサー』！」
「なにっ！？」

遊夜の発動したカードに神楽坂が驚く中、
遊夜の場に細長いグラスに幾つものコードの繋がった機械が出現した。

「戦闘ダメージを受けた時、手札１枚をコストに受けたダメージの数値以下の
攻撃力を持つモンスターをデッキから特殊召喚する！！
来い！！『蒼雷郷の山伏（やまぶし）』！！」

蒼雷郷の山伏（やまぶし）　☆４　風　雷族　ＡＴＫ／０　ＤＥＦ／２１００

コンデンサーから発せられるプラズマより、
蒼い衣服をまとった山伏が現れた。

「ふん、小賢しい。カードを1枚伏せ、ターンエンドだ。」
「俺のターン、ドロー！」

遊夜は自信の手札を確認すると、即座に次の一手を思案する。

「（神楽坂の場には『ブラック・マジシャン』、
さらには『光の護封剣』で俺はあと2ターンの攻撃が封じられている。
だが、手段はある！！）俺は『蒼雷郷の山伏』の効果を発動！
このカードを墓地に送る事で、
墓地に存在する☆４以下の『蒼雷郷』と名の付くモンスター1体を
特殊召喚する！
蘇れ！『蒼雷郷の弓術士』！！」

蒼雷郷の弓術士　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場より山伏が消え、代わりに弓術士が現れる。

「そして『弓術士』の効果発動！
手札から『蒼雷郷の剣客』を墓地に送り、『光の護封剣』を破壊する！
“蒼穹の雷展（そうきゅうのらいてん）”！！」

遊夜が手札を捨てると同時に、

弓術士の放った青白く輝く矢が光の護封剣を消し去った。

「そして手札からチューナーモンスター『蒼雷郷の蝮（マムシ）』を召喚！」

蒼雷郷の蝮（マムシ）　☆３　光　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／０

遊夜の場に、青白く輝くマムシが現れる。

「☆４の『蒼雷郷の弓術士』に☆３の『蒼雷郷の蝮』をチューニング！」

遊夜の言葉と同時に、蝮が緑色のリングとなり、
弓術士もその身を４つの星に変える。
そして一直線に４つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天を斬り裂く剣となる。閃光と共に轟け！！シンクロ召喚！！
蒼雷の戦士、『蒼雷郷の荒武者（あらむしゃ）―ジンベエ』！！」

蒼雷郷の荒武者（あらむしゃ）―ジンベエ　☆７　光　雷族　ＡＴＫ／２４００　ＤＥＦ／２２００

光が弾けその中から、蒼い甲冑に身を包み刀を二本持つ武者が姿を現す。

「『蝮』の効果により、カードを1枚ドロー！
さらに『蒼雷郷の荒武者―ジンベエ』の効果発動！！
シンクロ召喚に成功した時、相手の場のモンスターを1体破壊できる！！
“迅雷（じんらい）の太刀（たち）”！！」

遊夜の宣言と共に、ジンベエの刀より放たれた蒼い稲妻がブラック・マジシャンに襲い掛かる。

「やった！これで『ブラック・マジシャン』を倒せる！」

その事に興奮気味に言い放つ翔。

「神のいない今、『ブラック・マジシャン』は遊戯デッキのエースモンスター。
確かに倒せれば遊夜に勝機はある！」
「うむ、いけるぞ！」

翔に続く様に言い放つ隼人と大吾郎だが、
その横で三沢と家康は余裕の表情の神楽坂に疑問を感じていた。

「ふっはははは！それがどうした！？

このデッキはお前たちの想像を遥かに超えている！
神の抜けた穴を十分に埋めるほどになぁ！それを今見せてやる！！」

そう言い神楽坂は、決闘盤のスイッチを入れ伏せカードを発動させる。
そのカードは――――――

「場から速攻魔法『光と闇の洗礼』を発動！
場の『ブラック・マジシャン』を生け贄にする！」

神楽坂の言葉と同時に、ブラック・マジシャンがその場から消えていく。
リリース・エスケープだった。
これによりジンベエの放った稲妻は空を切る。

「そして自分のデッキ、墓地、手札の中から『混沌（こんとん）の黒魔術師（くろまじゅつし）』を特殊召喚する！！」
「『混沌の黒魔術師』！？」

その神楽坂の言葉に、遊夜は驚愕と戦慄を隠せなかった。
その名は、かつてペガサス会長が遊戯の使ったカードをリメイクさせた
ブラック・マジシャンを超える最強の黒魔術師を作り出した。
そのモンスターの名こそ……

「さぁ、貴様らは今から伝説を目にする！出でよ、『混沌の黒魔術師』！！」

混沌の黒魔術師　☆８　闇　魔法使い族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥ

F／２６００

神楽坂の場に、決闘王国でペガサスを倒した伝説の黒魔術師がさらなる力を持ってして、その場に現れた。

「このカードの召喚に成功した時、墓地から魔法カード１枚を手札に加える！」

神楽坂が選択したのは、強欲な壺だった。

「まさか、読んでいたと言うのか。」

この事態に、三沢は大きく動揺していた。

まさか遊夜の蒼雷郷の破壊能力をこんな方法でかわし、最上級モンスターを呼び出すにまでいたるとは思っても見なかったのだ。

「読んでたって、この展開をっすか！？」

「あぁ。神楽坂ならあり得る。」

驚く翔に何とか冷静になった三沢はそう言い放つ。

「先も言ったが、神楽坂は記憶力が良い。

だから、相手のデッキの特徴を把握できている。

『蒼雷郷』の特徴の１つである、モンスター破壊効果をもな。」

三沢の言葉に『そんな…』と言葉を失う翔。

そして、驚いていたのは遊夜も同じだった。

「（まさか、俺の戦略を読んだ上で『光と闇の洗礼』を伏せていたのか。
しかも『混沌の黒魔術師』には、
戦闘で破壊したモンスターを除外する効果がある。
何とかしないとマズイ！）」

そう思いながら、少ない手札に視線を向けるも、今の手札に逆転の手段は無い。

「…ターン、エンドだ。」

「俺のターン！ドロー！『強欲な壺』を発動！デッキからカードを2枚ドロー！！」
そして『クリボー』を攻撃表示で召喚！」

クリボー　☆１　闇　悪魔族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／２００

神楽坂の場に、羽根のない毛玉モンスター、元祖クリボーが現れる。

「いけ、『混沌の黒魔術師』！“滅(ほろ)びの呪文(じゅもん)ーデス・アルテマ”！

！」

神楽坂の指示の下、混沌の黒魔術師の杖に宿った滅びの魔導波が容赦なくジンベエに放たれた。

「ぐうぅっ！」

遊夜：ＬＰ／１５００⇒１１００

「言ったはずだぜ、俺に勝とうなんて１０００年早いって……！！？」

己の優勢に熟れていた神楽坂だったが、
魔導波による爆発の煙が晴れた時その目を疑った。
なぜなら、そこにはジンベエが健在だったのだ。

「ば、バカな！？どういう事だ！！？」
「残念だが、俺は墓地の『蒼雷郷の狛犬』の効果を発動させた。
このカードを除外する事で、
このターン雷族モンスターは戦闘によって破壊されない！」
「ちっ！しぶとい奴め。カードを１枚伏せ、ターンエンドだ！」

「あっぶねぇ～。何とか助かったぜ。」

状況を見ていた十代が息を飲む。

「しかし、さすが流石はキングのデッキといったところか、全くの隙がない。
総合力で言えば遊夜の蒼雷郷デッキも大した物だが、
キングのデッキに1歩……いや半歩追いついていないというところか。」

「だがその半歩がかなりデカそうだぜ。」

三沢の言葉に同意する様に家康も頷く。

「そうか？」

だが、ただ1人　十代だけは否定の言葉を吐いた。

「俺はそうは見えないぜ。それに……」

「それに？」

十代の言葉に首を傾げる三沢に、十代はニカッとほほ笑んで答える。

「遊夜の奴、何か楽しそうだぜ！」

「俺のターン、ドロー！」

その十代の言葉は当たっていた。

「（強い。神楽坂の才能が、うまくあのデッキを動かしている。まるで本当にキングと決闘しているみたいだ。だけど、だからこそ面白い！！）」

そう心で呟きながら、遊夜は引いたカードを確認する。

「よし！俺は魔法カード『シンクロキャンセル』を発動！場のシンクロモンスターを分離させる！戻れ『ジンベエ』！そして蘇れ！『蝮』！『弓術士』！」

蒼雷郷の蝮　☆３　光　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／０

蒼雷郷の弓術士　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０００

遊夜の場からジンベエが消え、それと変わる様に弓術士と蝮が姿を現した。

「これは……まさか！」

「そう言う事だ！

☆４の『蒼雷郷の弓術士』に☆３の『蒼雷郷の蝮』を再びチューニング！」

遊夜の言葉と同時に、蝮が緑色のリングとなり、弓術士もその身を４つの星に変える。

そして一直線に４つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天を斬り裂く剣となる。閃光と共に轟け！！シンクロ召喚！！
今一度来い！『蒼雷郷の荒武者―ジンベエ』！！」

蒼雷郷の荒武者―ジンベエ　☆７　光　雷族　ＡＴＫ／２４００
ＤＥＦ／２２００

光が弾けその中から、ジンベエが再び姿を現す。

「『蝮』の効果により、カードを１枚ドロー！
さらに『ジンベエ』の効果発動！！“迅雷の太刀”！！」

ジンベエの刀より放たれた雷撃が、混沌の魔術師を襲う。

「くっ！」
「そして『混沌の黒魔術師』はフィールドを離れた時、ゲームから除外される！」
「ちっ、知っていたか。」

遊夜の言葉に歯ぎしりしながら神楽坂は混沌の黒魔術師を自身のポケットへと入れた。

「さらに魔法カード『死者転生』を発動！手札１枚をコストに俺は墓地から『蒼雷郷の剣客』を手札に加え、召喚！」

蒼雷郷の剣客　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１８００　ＤＥＦ／１０

００

遊夜の場に蒼い和服に身を包んだ剣士が現れる。

「行け！『ジンベエ』で『クリボー』を攻撃！
“蒼雷刃剣（そうらいじんけん）・一（いち）の太刀（たち）”！！」

遊夜の号令の下、ジンベエの刃がクリボーに迫る。
だが、それを許す神楽坂では無かった。

「速攻魔法発動！『増殖（ぞうしょく）』！！」

クリボートークン　☆１　闇　悪魔族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／２００

クリボートークン　☆１　闇　悪魔族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／２００

クリボートークン　☆１　闇　悪魔族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／２００

クリボートークン　☆１　闇　悪魔族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／２００

クリボートークン　☆１　闇　悪魔族　ＡＴＫ／３００　ＤＥＦ／２００

神楽坂の発動したカードにより、クリボーが消え
場にクリボーが5体　守備表示で文字通り増殖した。

「『増殖』は『クリボー』を生け贄に捧げ、空いているモンスターゾーン全てに
『クリボートークン』を守備表示で特殊召喚する！」
「だが攻撃は続行だ！」

遊夜の言葉通り、ジンベエの一太刀がクリボー1体を容赦なく斬り裂く。

「さらに『ジンベエ』は2回の攻撃が可能だ！行け！“蒼雷刃剣・二(に)の太刀”！！！」

遊夜の指示の下、ジンベエのもう一太刀がクリボーを斬り裂く。

「まだだ！『蒼雷郷の剣客』は攻撃力を２００アップさせて攻撃できる！
行け攻撃だ！“蒼雷(そうらい)　抜刀斬(ばっとうざん)”！！」

蒼雷郷の剣客　ＡＴＫ／１８００⇒ＡＴＫ／２０００

遊夜の命の元、剣客の放つ居合斬りがクリボーを斬り裂く。
これによりクリボーは残り2体とまでなった。

「ターンエンドだ！」

「やったぁ！混沌の黒魔術師を破ったんだなぁ！！」
「大逆転だよ、遊夜君！」
「こうなったら、この決闘は貰ったもんだな！」
「行け！遊夜！！」

遊夜の優勢に隼人、翔、十代、大吾郎がそれぞれ声を上げる中
三沢と家康は冷静に状況を分析していた。

「遊夜……なんて奴だ。
俺の見ている限り神楽坂は1度もプレイングミスをしていない。
なのに武藤遊戯のデッキと互角に渡り合うとは……。
確かに遊夜のデッキは総合力で武藤遊戯のデッキに僅かに及ばないが、
シンクロモンスターの対応力でそれを補っている。」
「だが、さすがは武藤　遊戯のデッキだぜ。守りも強え。
しかもそれを神楽坂の野郎は完璧に使いこなしてやがる。」

それぞれ、三沢は遊夜の力に、家康は神楽坂の才能をそれぞれ評価していたが
2人が共通で思っている事が1つ。
どちらの力も拮抗している事だった。

「俺のターン、ドロー！」

神楽坂はカードを引き、手札の状況を確認すると

1枚のカードを決闘盤にセットする。

「魔法カード『蜘蛛(くも)の糸(いと)』！
このカードを発動する1ターン前の相手の墓地に送られた
魔法カードを1枚手札に加える！」

神楽坂の発動したカードより発せられた1本の細い糸が
遊夜の決闘盤の墓地へと入り込んで行く。
そして、1ターン前に墓地に送られた魔法カード、
死者転生を手札に加えた。

「さらにカードを1枚伏せ、手札から魔法カード『天よりの宝札』
を発動！」
「！そのカードは……！！」

神楽坂の発動したカードに遊夜は戦慄を感じた。
天よりの宝札。
それはペガサスが作りだしながらも、
そのあまりにも凶悪なドロー効果により途中で効果を変更せざるお
えなかった
不遇のカードだ。
現在ではかなりのデメリットのあるドローカードとして世に出て
いるが
初期版のカードも少なからず存在し、そのカードをデッキに入れる
だけで
かなりの勝率を誇るカードだった。

「この効果により、互いのプレイヤーは手札が6枚になる様に
カードをドローする。」

そうして互いにドローした瞬間、神楽坂はニヤリとほほ笑んだ。

「俺は『ワタポン』の効果を発動！
このカードは通常のドロー以外の方法で手札に来た時、場に特殊召喚できる！」

ワタポン　☆１　光　天使族　ＡＴＫ／２００　ＤＥＦ／３００

神楽坂の場に、白い綿のようなかわいらしいモンスターが現れた。

「そして『ワタポン』を生け贄に――――――
出でよ！『ブラック・マジシャン・ガール』！！」

ブラック・マジシャン・ガール　☆６　闇　魔法使い族　ＡＴＫ／２０００　ＤＥＦ／１７００

ワタポンが消え、場に光と共にブラック・マジシャンたった１人の弟子にして
遊戯デッキのアイドルともいえるモンスター、
ブラック・マジシャン・ガールが現れた。

「「うおおおおぉぉぉぉぉぉぉぉっ！！！！！」」

そのブラマジガールの登場に、翔と家康は興奮しまくった。

「か、かわいい……僕、遊夜君には勝ってもらいたいけど、あの娘だけは応援しちゃおうかなぁ。」

「でかしたぞ神楽坂！お前は英雄だあぁっ！！」

翔はフニャフニャの骨抜き状態、家康はアイドルの追っかけの様な状態だった。

「何て事　言ってるんだぁ。」

そんな2人をたしなめ様とする隼人だったが、

今やブラマジガールの信者と化した2人には通用しなかった。

「だって！『ブラマジガール』は遊戯さんのデッキにしか入ってないし、

今夜限りの恋かもしれないんだよ！！」

「貴様らには分からんのか！！？二次元を愛する者の夢ともいえる立体映像（ソリッドビジョン）で愛する者を見ようとするオタクの気持ちが！！！！」

「ふ、2人とも、凄い気迫なんだなぁ……」

「うむ、今の2人ならば敵なしだろう。」

翔と家康（オタクコンビ）の放つ殺気にも似たオーラに、

隼人と大吾郎はただ圧倒されるのだった。

「いいなぁ、俺が決闘したかったぜ！！」

その横で、十代は羨ましそうに遊夜に視線を向けていた。

「『ブラック・マジシャン・ガール』は
墓地に存在する『ブラック・マジシャン』１体につき攻撃力が３０
０Ｐアップする！」

ブラック・マジシャン・ガール　ＡＴＫ／２０００⇒ＡＴＫ／２３
００

　亡き師の力によりさらなる力を手に入れるブラマジガールだが
それでもジンベエには及ばない。

「さらに手札から装備魔法『魔術の呪文書』を発動！
『ブラック・マジシャン・ガール』に装備！
装備モンスターの攻撃力は７００Ｐアップさせる！」

ブラック・マジシャン・ガール　ＡＴＫ／２３００⇒ＡＴＫ／３０
００

　神楽坂の発動させた書の内容を読み切ったブラマジガールは
魔術師としての更なる知恵を身につけ、力を得た。

「行け、『ブラック・マジシャン・ガール』！“黒（ブラック）・魔・導・爆（バー）・烈（ニング）・破”！！」

　神楽坂の指示と共に、ブラマジガールの杖に宿りし魔力が
波動となって剣客に迫る。

「『剣客』のモンスター効果発動！戦闘時、攻撃力がアップする！」
蒼雷郷の剣客　ＡＴＫ／１８００⇒ＡＴＫ／２０００
攻撃力を上げ迎撃しようとする剣客だったが、圧倒的な魔導波の前に散った。
「ぐわあぁぁっ！」
遊夜：ＬＰ／１１００⇒１００
「ふん、モンスター効果により攻撃力が上がって死を免れたか。俺は伏せていた『死者転生』を使い、『クリボー』を手札に加えターンエンドだ。」
「俺のターン、ドロー！」
神楽坂のエンド宣言と共に、遊夜はカードを引き手札の状況を確認する。
「神楽坂、『天よりの宝札』を使ったのは失敗だったようだな。」
「何を戯言を！！」
「お陰でこちらも反撃ができる！
俺はチューナーモンスター『蒼雷郷の銀狼』を召喚！」
蒼雷郷の銀狼（ぎんろう）　☆３　風　雷族　ＡＴＫ／１５００　ＤＥＦ／１００

遊夜の場に青白く輝く銀狼、ウォルフ（相棒）が現れた。

「≪主よ、ようやく呼んでくれたな。≫」

「遅くなった。頼むぜ！

さらに俺は魔法カード『減量（げんりょう）』を発動！

場のモンスター1体の☆を2下げる！俺は『ジンベエ』の☆を7から5に下げる！」

ジンベエ　☆7⇒☆5

「いくぞ！☆5となった『蒼雷郷の荒武者―ジンベエ』に☆3の『蒼雷郷の銀狼』をチューニング！」

銀狼が緑色のリングとなり、ジンベエもその身を5つの星に変える。

そして一直線に5つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天へと昇る翼となる。落雷と共に轟け！！シンクロ召喚！！

蒼雷の守護龍、『蒼雷郷龍（そうらいきょうりゅう）―スカイサンダー・ドラゴン』！！」

蒼雷郷龍（そうらいきょうりゅう）―スカイサンダー・ドラゴン　☆8　光　雷族　ＡＴＫ／２８００　ＤＥＦ／２５００

光が弾けその中から、所々を蒼い甲冑で堅め蒼い翼を生やした蒼白く輝く東洋の龍が姿を現す。

「『スカイサンダー・ドラゴン』の効果発動!!
このカードがシンクロ召喚に成功した時、相手の場のモンスターを全て破壊できる!!唸れ!!“蒼覇落雷撃(そうはらくらいげき)”!!」

スカイサンダー・ドラゴンの身体から放たれた蒼い稲妻が天へと昇り
天より注がれる蒼い落雷となりブラマジガールとクリボー達を破壊する。

その際、翔が涙をためながら
『さよなら、ブラック・マジシャン・ガール……』と呟き、
家康が『ブラマジガアアァァァァルッ!!!!』と絶叫していたのは全くの蛇足である。

「くっ!だが『魔術の呪文書』が墓地に送られた時、
俺はＬＰを１０００Ｐ回復する!!」

神楽坂：ＬＰ／３２００⇒４２００

「ならこちらもモンスター効果発動!『蒼雷郷の銀狼』の効果により
『スカイサンダー・ドラゴン』の攻撃力が１０００Ｐアップする!!!」

蒼雷郷龍―スカイサンダー・ドラゴン　ＡＴＫ／２８００⇒ＡＴＫ／３８００

「バトルだ!!『スカイサンダー・ドラゴン』でダイレクトアタック!!轟け!!“天鳴蒼雷破(てんめいそうらいは)”!!」

遊夜の命と共に、スカイサンダー・ドラゴンの口内より
青白く輝く稲妻が神楽坂に向かって放たれた。

「手札から『クリボー』の効果を発動！」

神楽坂が手札からクリボーを墓地に送った瞬間、
場に現れたクリボーが巨大化して、スカイサンダー・ドラゴンの攻撃を防いだ。

「手札から捨てることで1度だけ戦闘ダメージを0にする効果を持つ『クリボー』か。
うっかりしてたな。カードを1枚伏せ、ターンエンドだ！」

遊夜のターンエンド宣言を尻目に
神楽坂は墓地に目をやると優しげにクリボーへと語りかけだす。

「ありがとう『クリボー』。さすが、俺が数千枚の中から選んだモンスターだぜ。
お前にはこれまで何度も助けてもらったな。」

その神楽坂の言葉に、墓地に眠っていたクリボーは
『そう言われても…』と言わんばかりに、やや困ったような表情をした。

それは、周りにいたギャラリーも同じだった。

「何度もって、それは盗んだデッキじゃん！！」
「本当に武藤遊戯になりきってるんだな……」
「アイツ、将来良いオタクになりそうだな。」

しかし未だに遊戯になりきっている神楽坂には、
そんな外野の声など耳には入ってきていなかった。

「『クリボー』、お前がくれたチャンス無駄にはしないぜ。俺のターン！」

クリボーに話しかけるのを終えた神楽坂は
ドローしたカードを確認した瞬間、これまでに無いくらいほほ笑む。

「行くぜ。お前はこのターン、このデッキの本当の力を思い知ることになるぜ！」

そう宣言した神楽坂は、自らの墓地から2体のモンスター
クリボーとワタポンを選択しだす。

「俺は墓地から光属性と闇属性のモンスターを1体ずつ除外する！」
「！！？これは……まさか！！」

神楽坂の行動に、遊夜はある事を思い出した。
ペガサスが生み出した禁断的な能力を持つ混沌を司る2体のモンスターの事を。
その1体は、終焉の混沌を司り、その強さと凶悪な効果故に

後に禁止カードに指定された、混沌帝龍（カオス・エンペラードラゴン）―終焉の使者（ししゃ）―。
そして、それと対をなす始まりの混沌を司る伝説の戦士。
その名を――――

「そう、このカードこそがこのデッキの真のエース！
出でよ、『カオス・ソルジャー―開闢の使者（かいびゃくのししゃ）―』」

カオス・ソルジャー―開闢の使者（かいびゃくのししゃ）―　☆８　光　戦士族　ＡＴＫ３０００　ＤＥＦ／２５００

クリボーとワタポン、光と闇の歪より、
伝説の戦士が開闢の力を帯びて場に現れた。

「受けてみるがいい、デュエルモンスターズ界最強モンスターの攻撃を！
いけ『カオス・ソルジャー』！“開闢双破斬（かいびゃくそうはざん）”！！」

神楽坂の命と共に、カオス・ソルジャーによる連続突きが
スカイサンダー・ドラゴンを粉砕する。

「くっ！すまない、『スカイサンダー・ドラゴン』。
罠発動！『ガード・ブロック』！
戦闘ダメージを０にし、デッキからカードを１枚ドローする！」

スカイサンダー・ドラゴンは破壊されつつも、
何とかダメージを防いだ遊夜だったが
この程度で終わる様な事は無かった。

「まだまだ！これからがこのカードの真の力だ！！
カオス・ソルジャーは戦闘で相手のモンスターを破壊した時、
２回目の攻撃が行える連続攻撃能力がある！！」

そう言い神楽坂はカオス・ソルジャーに２回目の攻撃命令を下した。

「行け『カオス・ソルジャー』！“時空突刃（じくうとっぱ）・開闢双破斬”！！」

神楽坂の命の下、カオス・ソルジャーの無慈悲な攻撃が
無防備な遊夜に迫る。

「させるか！手札から『蒼雷郷の番兵』の効果発動！
相手が直接攻撃してきた時、このカードを手札から特殊召喚できる！！」

蒼雷郷の番兵（ばんへい）　☆４　光　雷族　ＡＴＫ／１３００　ＤＥＦ／１９００

遊夜の場に、落雷と共に蒼い甲冑に身を包み、槍を装備した兵士が出現し、
カオス・ソルジャーはそのままその番兵を攻撃した。

「チッ。カードを１枚伏せ、ターンエンドだ！」

止めを刺せなかった事に舌打ちをしエンド宣言をした神楽坂だったが
神楽坂は自信に満ち溢れていた。

「（俺が今伏せたカードは『聖なるバリアー ミラーフォース ー』。
万が一奴が攻撃して来てもこれで迎撃できる。
それに手札には『死者蘇生』のカードがある。
これで破壊されても『カオス・ソルジャー』を復活させる事ができる。
このデッキに、俺に死角は無い！）」

「マズイな。まさか『スカイサンダー・ドラゴン』までもが敗れるとは。」

不意にそう呟く三沢。

「確かにまずいんじゃね？『スカイサンダー・ドラゴン』っつー最強の切り札がやられちまったんだぜ。」
「あぁ、このままじゃ遊夜くん……」
「大丈夫さ。」

不安そうな翔に対し、十代は否定の言葉を掛ける。

「大丈夫ってアニキ……」
「だって見ろよ、遊夜の顔を。」

その言葉に全員が遊夜に視線を向ける。
そして、その遊夜の表情は、笑っていた。

「貴様、何がおかしい？」

神楽坂も遊夜がほほ笑んでいる事に気づき尋ねて来る。
それに対し、遊夜はほほ笑みながら答え出す。

「楽しいのさ。」
「なに？」
「俺の切り札である『スカイサンダー・ドラゴン』を破壊したのはお前が初めてだ。
やられて行ったカード達には悪いかもしれないが、
こんなにわくわくするのは久しぶりだ！」

そう言いニカッとほほ笑む遊夜に、神楽坂は驚きを隠せなかった。

「お前、この俺に勝つ気なのか！？楽しいって言えるのか、この状況を！！？」
「楽しいさ、そして……」

そう言いながら、遊夜はデッキに手を伸ばす。

「やるからには勝つ！俺のターン！！」

遊夜は引いたカードと手札の状況を即座に確認し、
その中から勝利への方程式を完成させた。

「いくぞ！俺は魔法カード『死者蘇生』を発動！

墓地よりモンスターを復活させる！蘇れ、『蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ』！！」

蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ　☆６　風　雷族　ＡＴＫ／２３００　ＤＥＦ／１９００

遊夜の場に、ライゾウが蘇った。

「さらに魔法カード『二重魔法（ダブルマジック）』を発動！手札の魔法カードをコストに、相手の魔法カードを使用する！俺はお前の墓地の『死者転生』を使い、『蒼雷郷の野猪』を手札に加え召喚！」

蒼雷郷の野猪　☆２　光　雷族　ＡＴＫ／６００　ＤＥＦ／６００

遊夜の場に、青白い野猪が再び現れる。

「行くぜ！☆６の『蒼雷郷の狂戦士―ライゾウ』に☆２の『蒼雷郷の野猪』をチューニング！」

野猪が緑色のリングとなり、ライゾウもその身を６つの星に変える。

そして一直線に６つに並んだ星は光に包まれる。

「蒼き稲妻が、天へと轟く剣となる。閃光と共に輝け！！

シンクロ召喚！！
蒼雷の達人、『蒼雷郷の剣聖―イツナ」

蒼雷郷の剣聖―イツナ　☆８　光　雷族　ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１８００

光が弾けその中から、肩まである白銀の髪と青い服と白い袴、そして刀身の長い日本刀を携えた、日本の剣客風のモンスターが現れた。

「攻撃力３０００！？『カオス・ソルジャー』と互角だと！？」
「いや、互角じゃない！『イツナ』の効果発動！
１ターンに１度、自分の墓地に存在する
『蒼雷郷』と名のつくモンスターをゲームから除外し
このカードのカード名を除外したカードと同じにし
その攻撃力・守備力、そしてモンスター効果をエンドフェイズまで吸収する！
“蒼雷魂”！！」

そう言い遊夜は墓地よりスカイサンダー・ドラゴンを除外した。
すると、スカイサンダー・ドラゴンの魂がイツナの刀に宿り、刀の波紋となりてその力をイツナへと与えていく。

蒼雷郷の剣聖―イツナ　ＡＴＫ／３０００⇒ＡＴＫ／５８００　ＤＥＦ／１８００⇒ＤＥＦ／４３００

「ば、バカな……」

その圧倒的攻撃力に、神楽坂は唖然となった。

「行くぞ！『蒼雷郷の剣聖―イツナ』で『カオス・ソルジャー』に攻撃！
“蒼雷（そうらい）・秘伝（ひでん）の太刀（たち）”！！！！！」

遊夜の言葉と共にイツナは刀を構え、カオス・ソルジャーに迫る。

「くっ！罠発動！」
「無駄だ！『蒼雷郷の野猪』をシンクロ素材としたモンスターが攻撃する時
相手は魔法・罠カードを発動できない！」
「何っ！！？」

神楽坂のカードは発動せず、イツナの一太刀がカオス・ソルジャーを何の躊躇もなく一刀両断した。

「ぐわあぁっ！」

神楽坂：ＬＰ／４２００⇒１４００

「だが、俺にはまだＬＰが残っている！」

そう言い放つ神楽坂だが、それでは終わらない。

「いや、今の『イツナ』は
『スカイサンダー・ドラゴン』の特殊能力を引き継いでいる！
『スカイサンダー・ドラゴン』の特殊能力！

バトルで相手モンスターを破壊した時、墓地の雷族モンスター1体をゲームから除外することで2度の攻撃が可能だ！」

遊夜がそう言った瞬間、墓地の弓術士が除外されイツナは再び刀を構え神楽坂に向かって駆け出す。

「行け！“蒼雷（そうらい）・秘伝双（ひでんそう）の太刀（たち）”！！！！！」

カオス・ソルジャーをも葬り去った一太刀が、神楽坂のＬＰを容赦なく奪い去った。

「ぐわあああああああぁぁぁぁぁぁぁっ！！！！！！！！」

神楽坂：ＬＰ／１４００⇒０

決闘の決着はついた。

後に残ったのは威風堂々と立つ遊夜と崩れ落ちた神楽坂だった。

「この俺が……負けた！？」

崩れ落ちた神楽坂の元に武藤　遊戯のカードたちがハラハラと落ちてくる。

まるで今の神楽坂自身の心の様に。

「俺はこんな強いデッキを使っても……勝てないのか……！

俺にはやはり才能がまるでないんだ!!」
「いや、そうでもないさ。」
泣き崩れる神楽坂の言葉を否定する声がし、
一同がその方へと視線を向ける。
そこにいたのは――――
「お兄さん。」
「カイザー、それに珠緒先輩。」
「それに文乃達まで……」
そこにいたのは、先程　自分達と共にデッキを探していた
文乃、千世、希、明日香、叶絵に加え、カイザー亮と珠緒だった。
「2人とも、どうしてここに?」
その十代の問いかけに亮は少し恥ずかしそうに話だした。
「俺たちも一足早くデッキを見たくてね。」
「そしてら文乃さん達とあって、事情を聞いたって私達も探していたら
君達を見つけたって訳。」
「止めようと思ったが、止めるには余りにも惜しい決闘だったからな。」
その亮の言葉に『そりゃそうだ』と頷く十代。
そこへ、千世がダッシュでやって来て、遊夜に体当たりを食らわそうとする。
「うわっと!な、どうしたんだ梅ノ森さん?」

「どうしたもこうしたも無いわよ！
何でこんな一大イベントに私を呼ばなかったのよ！！！」

そう言い遊夜に蹴りをかまそうとする千世。
それを紙一重でかわす遊夜。

「にゃあ、千世、落ち着く。」

それを見かねたのか、希が千世の頭を撫で始める。
希のなだめる撫で撫で、通称：ゴールドフィンガーの効果は抜群で
即座に千世はふにゃ～と動けなくなった。

「あぁ、ありがと、希。」
「にゃあ♪」

遊夜にありがとうと言われて嬉しそうな希。

「それで、皆いつ頃から居たんだ？」
「えっとねぇ、文乃が遊っちが決闘してる気がするって言ったのがキッカケで……」
「ちょ！私そんなこと言ってないわよ！」

叶絵のでたらめな言葉に怒りをあらわにする文乃だったが……

「言ってたわね。」
「にゃあ、言ってた。」
「確かに言っていたな。」

他のメンバーの言葉に文乃は完全に逃げ道を防がれた。

「珠緒先輩！希！カイザー、貴方まで……」
「覚悟決めなよ文乃♪愛しい人のやっている事が分かる女は中々いないＺＥ！！」
「か？？な？？え？？」
叶絵の言葉にぶちギレ寸前の文乃。
「はいはい、叶絵もそこまでにしなさい。」
そんな状況を見かねたのか明日香が止めに入りようやく2人の言い争い（と言っても一方的な展開だったが）は終了した。
「そういえば、決闘を見ていたのは俺達だけではない様だ。」
不意にはなった亮の言葉に遊夜達は亮の視線の先、崖の上に視線を向けて見る。
そこには、木々の間からひょっこり顔を出す生徒達がいた。
ブルー、イエロー、レッド、どうやら彼らもキングのデッキが見たくてやって来たらしい。
そして遊夜達の視線に気づいた生徒達は遊夜と神楽坂に万雷の拍手を向けた。
「いやぁ、すごい決闘だったぜ。」
「いいもん見させてもらった。勉強になったよ。」
その中には、昨日　神楽坂を侮蔑の表情で見ていた生徒達の姿もあった。
「皆……。けど俺は負けた、どうして……。」

その皆の反応に神楽坂は顔を上げるが、
どうして最強のデッキを使っても勝てないのかの疑問が尽きなかった。

「簡単さ。」

そんな神楽坂に、遊夜はゆっくり近づくと
膝をつく神楽坂と同じ視線になる様にしゃがんだ。

「それは、お前のそのデッキへの愛が借りものだったからだよ。」
「借り物……？」

遊夜の言葉の意味が分からないのか、神楽坂は首を傾げる。

「お前は確かにこれ以上とないほど武藤　遊戯になりきって、
そのデッキを愛していたさ。
でもそれはお前がデッキを愛していたんじゃない。
武藤　遊戯がデッキを愛してたんだ。お前はそれを借りただけなんだよ。」

そう言いながら、遊夜は立ち上がると視線を遥か向こう側、
Ｉ２社があるであろう方向へと視線を向ける。

「ペガサス会長と父さんがよく言っていたよ。
本当のデッキへの愛は自分自身が時間と労力をかけて悩みに悩んで考えた、
タクティクスやコンボをデッキへ託した時に始めて生まれるものなんだ。
この決闘の相手が本物の武藤　遊戯であったなら、この勝敗はわか

らなかったよ。」

そう言い視線を遊戯のデッキに向ける遊夜。

「じゃあ、俺はどうすれば……」

「でも、お前のその才能は誇っていいものだよ。
一目見ただけでそのデッキの特性を理解する。
その才能に君のオリジナリティが加われば、確実に強くなる。」

その言葉に、視線を地面に向けていた神楽坂が
その視線を遊夜へと向けた。

「俺は、強くなれるのか？」

「なれる。お前と闘った俺が保証する！」

そう言い遊夜はニコッとほほ笑むのだった。

こうして、今回の騒動は幕を閉じた。
デッキは元に戻り、デッキを盗んだ神楽坂は皆が申し合わせたことで、
その罪は問われることはなかった。
そしてその日、展示室にはたくさんの人で賑わった。
全ての決闘者の財産として輝く、武藤　遊戯のデッキを中心として。

『～第十八章～　ＶＳ神楽坂！伝説の遊戯

デッキ！！

《終》』

～第十八章～　ＶＳ神楽坂！伝説の遊戯デッキ！！（後書き）

どうも、黒鋼です。
今回より、少々小説のか書き方を変えてみました。
。を終点に新しく始める行は１スペース開けてから書く事にしてみました。
この方が行などを読みやすいと思ったからです。

さてさて、今回の話は『ＶＳ遊戯デッキ（前編／後編）』です。
『闇夜のキングゴブリン』と『ドロー！ドロー！ドロー！』の２つは
飛ばさせていただきました。
遊戯のデッキが出てきて、それを使いこなす神楽坂は
自分的には嫌いじゃないです。
しかし、まさか『マジシャン・オブ・ブラックカオス』と
『カオス・ソルジャー』がリメイクされた形で出てくるとは思ってみませんでした。
ただ、自分的には攻撃力を考えると最強のカードって
『カオス・ソルジャー』じゃなくて、
『黒の魔法神官（マジック・ハイエロファント・オブ・ブラック）』
だと思うんですがね。
ま、それはさて置き次回は果てはてどうなる事やら、どうぞお楽しみに～。

今回の最強カード『蒼雷郷の剣聖―イツナ』
☆８　光　雷族　ＡＴＫ／３０００　ＤＥＦ／１８００

『蒼雷郷』と名の付くチューナー＋雷族を含むチューナー以外のモンスター1体以上
このカードは戦士族モンスターとしても扱う。
1ターンに1度、自分の墓地に存在する『蒼雷郷』と名のつくモンスターを
ゲームから除外して発動する事ができる。
このカードはこのターンのエンドフェイズ時まで、
この効果を発動する為にゲームから除外した効果モンスターと同名カードとして扱い、
攻撃力・守備力がそれぞれの数値分アップし、同じ効果を得る。

遊夜の新たなる切り札的モンスター。
蒼雷郷の魂を刀に宿し、能力をアップさせれる
攻撃能力の点ではスカイサンダー・ドラゴンをも上回る強力カード。
名前の由来は『上泉信綱（ｋａｍｉｉｚｕｍｉ　ｎｏｂｕｔｓｕｎａ）』の名字の『ｉ』と
名前『ｔｓｕｎａ』より『ｉｔｓｕｎａ』となった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2509l/

遊戯王GX～蒼銀の稲妻～

2011年11月16日16時28分発行